

# 奇譚クラブ

新しい風俗文獻誌

7月号



7-JUNE・1967

奇譚クラブ

昭和四十二年七月号

定価 三五〇円





恍惚境のMの表情 (山原)  
胡坐縛りでもだえる (絹川)  
股間縛り正面で立つ (大塚)  
ムチ打ちを願うポーズ (木村)  
伸びやかな女体の細目 (一宮)  
責めめかれた股間縛り (一宮)  
後手滑車吊りにあう女 (大塚)  
縛られて歩かされる (大塚)  
亀甲縛りと股間縛り (美木)  
正坐で放置する縛体 (木村)  
夫から鼻責めを受ける (増田)  
可愛い小悪魔の表情 (一宮)  
徐々に吊られる片足 (大塚)  
強烈縛りで受ける鼻責 (美木)  
均齊のとれた美麗縛体 (大塚)  
室の隅に逃げた女奴隷 (美木)  
首縄股間縛猿轡の表情 (美木)  
可愛い裸身の鑑賞 (木村)  
セーラー服の後手縛り (大塚)  
後手股間縛りで引回し (一宮)  
海老責めて耐え忍ぶ (木村)  
縄でくびった柔肌地獄 (一宮)  
エビ縛りの苦悶と戦う (大塚)  
台上に晒す緊縛裸身 (山原)  
火あぶりにあう女囚 (大塚)  
アタラ縛りと頑張る女 (大塚)  
がっちりした後手縛りで (東浦)  
柱縛りでもがく清子 (山原)  
石橋の上に放置される (玉田)  
ムチ打ちに悶える女体 (大塚)  
猿轡を三面鏡に映す (大塚)  
庭園を引き回される (山原)  
首縄にあえぐ哀婉表情 (大塚)  
太縄が柔肌をくびる (大塚)  
大の字荒組ハリツケ (山原)



サディズム文学の最高峰 S派必読の書

長篇羞恥責小説の一大傑作

臨時増刊 花と蛇

小説・絵画

特集号

乞う直接お申込みを 定価五〇〇円 略号「花と蛇」

四馬孝画 「花と蛇」 テーマ画集 十六葉

- 1、折り曲げられて弄ばれる女体
- 2、逆エビ縛りで引き回される女体
- 3、水を顔面に浴びせかける男
- 4、汚水と薬品の洗剤を受ける女
- 5、いちじく浣腸を施される女体
- 6、浣腸とオシメカバの羞恥
- 7、ガラス製一〇〇CCの浣腸器
- 8、強烈なイルリガートルの浣腸

- 9、尻打ちの痛さに泣き喚く女体
- 10、片足吊りに狂いまわる女体
- 11、女体滑車吊りの準備万端完了
- 12、お灸責めに汗を流す女体
- 13、トイレで排泄の強要をされる
- 14、後手縛りで宙ぶらりんの女体
- 15、美女の背の中を探る黒い管
- 16、グリセリン浣腸液を注ぐ女体

限定版グラビア印刷M結集アルバム

Mフォト・オンパレード 「女王様に飼育される日々」

頒価一部 一〇五〇円(送50円) 略号「M特」

◎全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラビア写真

待望久しくして初めて刊行されたM派ばかりの限定版M写真集です。今までMモデル募集に応募してきたM男性モデルを網羅し、それらのM男性が色々の女王様に奉仕し飼育される生態のかずかずを豊富な写真資料によってマニアの方

四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

女体緊縛写真のアルバム  
限定版グラビア印刷写真集

豊満と清楚

限定版頒価一部 一〇〇〇円(送共) 略号「限二」

「モデル」 長野良子・大塚啓子・五月亜紀子・新井マリ子

この「緊縛女体アルバム」は、若々しくて豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさを最高度に発掘した縛られポーズの大胆奔放な素晴らしい場面のかずかずを、画面いっぱい狭ましの活躍させました。特に写真に迫力を増すためとグラビア印刷の効果をフルに運用するためにも写真面を一きわ大きくしました。更に清楚にして純情な初々しいフェイスと伸々とした若鹿のような肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子の両嬢の痛々しいばかりに可憐な緊縛裸身を以て豊満美と対照的に清楚美を飾りました。

△華々しき女体緊縛の組写真集▽

限定版 写真集 美しき縛しめ 第四集 一〇〇〇円(送共) 略号「美4」

「登場モデル」 山原清子・木村洋子・玉田美佐子・大塚啓子

◎縛られた美女ばかりのフォト八十態の内容◎

刺青女体の逆エビ責(山原清子)  
鉄扉に緊縛晒し責(玉田美佐子)  
ブロックの石抱き責(木村洋子)  
箆子と浣腸器の鼻責(大塚啓子)  
両足吊にあう刺青女(山原清子)  
古墳に後手吊組写真(木村洋子)  
両手吊に悶える女体(山原清子)  
逆さ吊に揺れる女体(木村洋子)  
狼ぐつわ百態組写真(大塚啓子)

革拘束具アラカルト(大塚啓子)  
柱縛りの庭園晒し(玉田美佐子)  
セーラー服緊縛姿態(大塚啓子)  
野外に於ける晒責(玉田・木村)  
刺青女体の柱縛り責(山原清子)  
捕獲された女の悶え(大塚啓子)  
入墨女の緊縛絵模様(山原清子)  
両足吊りの表と裏(山原清子)  
△以上緊縛フォト八十葉▽





新しい風俗文献誌

KITAN CLUB

昭和四十二年七月号

＜第21巻第7号・通刊第229号＞

# 奇譚クラブ 7月号 目次

## ◇奇クサロン

○轉りのエッセイ……黒井修平(9) ○サロン楽我記(第三十七回)……辻村隆  
 ○SM文学への寸感……滝本虹夫(10) ○わたしはプロット……あいちようこ(11)  
 ○女剣士の最初……六角京之助(12) ○短歌「米い磨」……伊藤和登(12) ○フオ  
 メイジの「煙草賣」……増原美門(13) ○奴隷妻「米い磨」……高村初子(13) ○イ  
 氏からの「煙草賣」のアンケート……辻村隆(16) ○洗腸「米い磨」……草木夢(16)  
 ○佐渡権三……丸木戸佐渡(18) ○私の感想メモ……藤岡江根真(19) ○ム  
 ド・フォート……の試み……中宮栄(19) ○ビナスを求めて……呪詛夢(20) ○六  
 とともに生きる……宇野耕二(21) ○洗腸「米い磨」……山崎新(23) ○黒  
 寿(22) ○洗腸「米い磨」……山崎新(23) ○洗腸「米い磨」……山崎新(23) ○洗  
 イメー……洗腸「米い磨」……山崎新(23) ○洗腸「米い磨」……山崎新(23) ○洗  
 (23) ○洗腸「米い磨」……山崎新(23) ○洗腸「米い磨」……山崎新(23) ○洗

## △本文▽

本誌自肅の徹底……………編集部……………(25)  
 秋山夫妻・辻村隆対談……………辻村 隆……………(26)  
 『シヨウウこそわが命』……………団 鬼六……………(36)  
 鬼六談義 “化物の話”……………団 鬼六……………(36)  
 切腹研究夜話 烈女切腹口……………中康 弘通……………(47)  
 廣作マゾヒスチック・ストーリー……………芳野 眉美……………(50)  
 憂愁の紅かほる夫人……………萩原 正……………(55)  
 独言 〓奇クと私〓……………西条 操……………(56)  
 連載サディズム小説……………津治 良一……………(66)  
 心傷たむ遍歴……………秤 蕨也……………(68)  
 近頃思うこと…………………………(68)  
 懸賞入選作品「妖縛の果て」…………………………(68)

旅先にて〓△海外旅行者の日記▽……………三原 寛……………(86)  
 ピンク映画シナリオ『誘拐』……………団 鬼六……………(92)  
 女処刑吏の話 “酷連処刑大会”……………黒田 寿……………(116)  
 SMカメラ・ハント△河森真理子の巻▽……………辻村 隆……………(118)  
 「陶酔の乳房」……………保藤 久人……………(118)  
 M的ファンタジー 恍惚……………千草 忠夫……………(161)  
 縄のある蜜月△蜜月の終り▽……………町 陽一……………(171)  
 特別架空ルポ「拷問屋敷」……………鬼六……………(178)  
 連載S小説『花と蛇』続第三十二回……………山本 一章……………(188)  
 カメラ・ルポ〓川越美佐子の巻〓……………斎藤 夜居……………(196)  
 この女(ひと)と〓……………黒淵 嬰一……………(197)  
 稿 談 性風俗資料入門(4)……………海野美津男……………(197)  
 晴嵐の譜△日本婦人部隊奮迅録▽……………陸月笛一郎……………(236)  
 娘相撲物語「女相撲同好会」…………………………(236)  
 S小説 ミモザ館(生ける屍)…………………………(236)  
 読者通信……………編集部選……………(236)



# ★新しいコレクト・フォト集★

## 後手吊りにもがく

大手札三枚一組 四〇〇円

川越美佐子 略号「むた」

適度に肉のつた若々しい肢体を、厳しく掛った後手縛りの手首を、鴨居に吊り上げれば、すらりと伸びた全裸の長身を爪先立って黒髪をふり乱しもがく女体の美しさ。

## 股間縛足縄の媚態

大手札四枚一組 五〇〇円

山越美佐子 略号「むと」

今月号のカメラルポで初めて紹介された新人川越美佐子嬢の全裸縛りの媚態を股間縛りの両足首縛りで余すところなくSファンの目を楽しませます。

## 菱縄胸間縛の裸身

大手札四枚一組 五〇〇円

川越美佐子 略号「むて」

首から両の乳房、お臍を割って白い柔肌も喰い込むばかりに菱縄が締めつけ、その縄尻がやがて股間縛りとなって完結している緊縛感の溢れるフレッシュなフォト。

## 後手伸縛に晒す肌

大手札四枚一組 五〇〇円

川越美佐子 略号「むう」

両腕を背後で伸して、両手首から腕のつけ根に至るまで、一本の

棒のように縛られた全裸の川越嬢が白い肌を晒してのけぞり、苦痛の表情を全身にみなぎらせる。

## 緊縛の白肌は蠢く

大手札四枚一組 五〇〇円

川越美佐子 略号「むす」

足の指先をくの字に曲げて縛りの苦痛に耐え、或は白い肌を重ね餅に二つに折ってあえぎ、しなやかな肢体を誇らし気に開股するなど多彩な姿態を見せる美佐子嬢。

## 転々反転する芋虫

大手札四枚一組 五〇〇円

川越美佐子 略号「むせ」

後手に縛られた裸身は只その自由になる脚をばたつかせて、逆エビに或は横臥に床の上を転々としたり、全裸の女体を芋虫のように屈伸させる有様は艶美の極致である。

## 鼻孔の奥を探ぐる

大手札三枚一組 四〇〇円

中河恵子 略号「はむ」

秀麗な整った容貌の恵子嬢の顔を逆さにして、その鼻孔を真上から覗き込まれる態勢で鼻翼を指でめくりあげて、鼻の穴の奥の奥まで探求した鼻責めのフォト。

## 開孔器に開く鼻孔

大手札三枚一組 四〇〇円

中河恵子 略号「はら」

台上に仰向けに縛りつけられ顔を下に向け、恵子嬢の無防備の鼻孔を開き、鼻毛の密生した黒々とした鼻の穴の奥までをさらけだした。

## 剥られる縛体の鼻

大手札三枚一組 四〇〇円

中河恵子 略号「はれ」

後手縛りで坐らされた恵子嬢の鼻に對して、開孔器と女悦棒と指先とでもって美しい鼻をいたぶっているところを鼻の穴を中心にしてカメラに収めた鼻責めフォト。

## 仰臥緊縛鼻なぶり

大手札三枚一組 四〇〇円

中河恵子 略号「はに」

台上に仰向けに縛られた彼女は鼻をツント突き出して、今はもうどんな悪戯の指に對しても逃れるすべのないのを観念して、その鼻孔を晒してなびられるのだった。

## マゾ女のMの生態

大手札三枚一組 四〇〇円

木村洋子 略号「きに」

「どうか私をいじめて下さい」というラベルを全裸で開股縛りにあった前にぶらさげ、或は片足吊りです逆さになった裸身にラベルをはられて全身をふるわすマゾ女。

## (奴隷女)の生態

大手札三枚一組 四〇〇円

木村洋子 略号「きね」

「奴隷」それは、この「奴隷女」の名札を前にぶらさげて縛られた裸身を晒し片足挙げの羞恥縛りにあえぐ木村洋子に對して冠せる名前ではないだろうか。

## 私はあなたの奴隷

大手札三枚一組 四〇〇円

木村洋子 略号「きふ」

縛られて片足挙げで晒された柔肌に「私は貴方の奴隷です」というラベルを貼って世のS男性に自分のマゾを訴えている可憐な彼女に一掬の同情を恵んで下さい。

## 牝犬と奴隷の生態

大手札四枚一組 五〇〇円

大島照代 略号「しむ」

肉づきのよい「牝犬」、そして如何なる苛酷な命令でも易々として涙をのんで従う「奴隷」の生々しい姿を四葉のフォトによって具さに観察して頂くと思う。

## 喰込む電気コード

大手札四枚一組 五〇〇円

大島照代 略号「しく」

ビニール被覆の電気コードが豊かな柔肌に喰い込むばかりにひしひしと締め上げた股間縛りは、まことに目ざましい緊縛感を、映画紙いっばいにふりまいていく。





いくつかの芸術誌、カメラ朝日カメラ何々誌に、ヌードが必ず一つの分野として活躍しているように、SMが写真界に堂々と芸術作品として、展覧会にも入ってくる時代を空想する。着衣でもよい、ヌードでも好い。

文学、絵画の世界では、ギリシヤの時代から、ルネサンスから、アンドロメダを始め、セント・セバスチヤンのものを始め、マイヨールも、ロダンもいましめられた女体の美しさに堂々ととりこんでいる。ゴヤしかり、レンブラントしかり、ドロクロアしかり、サドなどの、いわば過激派を持ち出さなくても、日本でも、浮世絵その他、大衆文学、純文学にいたっては数知れない。

それが写真界にあらわれないのは、写真家の怠慢か、やはり古い

観念にとらわれて、しぼりの写真などだしたら、変質者と思われるのを恐れているのか、生々しすぎるからか、いずれにしても、現代の尖端をゆく写真界にSMがあらわれぬことは不思議なことだし、ヌードがおとろえてゆくのも、当り前だ。残念ながら一度も見たことがない。それでも、一度だけ、土門、木村氏の高第三木氏の撮したシカゴでのスナップは、好かった。ギャング遊びか、後手にくられた少女の、さっと首を横にふっているスナップ一点のみ、印象に残っている。

今までたびたび書いたように、私のSM趣味は、後手にくくられ

## 「縛りのエッセイ」

黒井珍平

たかわいらしい美女にある。しかも同じしぼりでも後手にしか興味の無い完全な後手アブノーマル人種だ。早木夢二氏が菱縄に就て書いていられたが、私は後手以外は菱縄についてさえ興味が無いのだから、妊婦やホモや、生首やら浣腸やらエトセトラに何も感じない。後手にしか興味の無い私、そして私は妻しか女を知らないし妻しか愛しない人間である。

私が「後手」だけで「菱縄」にすら何の感興ももよおさないように、妻が私のささやかなSMに嫌悪感をいだくのは、無理からぬことだと思ふことがある。

菱縄もなにも興味がなく、ただ後手にくくるだけで、すべて満足してしまふ私に対する妻の、一方的な変質者あつかい。サディストの古典的な伝説みたいな責めへの恐怖は、全く一方的な想像で我ながらバカバカしくお笑いである。血が一滴たれてもふるえ上る私がどうして、むごいことなどできようか。かつて、こんなことがあった。テレビをつけると、真田幸村

をやっていた。徳川の隠密服部半蔵が幸村をねらって浅丘ルリ子が入質になる。はつきりと見えないが、ばらばらととり囲まれて両手を後にまわされ多分くられたのだろう。浅丘さんの白い口に一すじの黒いさるぐつわ、美しい。かわい。だが、一緒に見ていた妻の顔に嫌悪感があふれた。

「いやなの、こういうの。あなたはお好き？」ざらりと鋭い短刀を脇腹に当てられたように、びっくりする私。結局テレビのスイッチは妻の白魚のような指で非情にも切られてしまった。

妻が私の後手趣味をほんのすこし（やわらかい紐で結ぶだけで）大らかにみとめてくれていたら、笑ってすましてくれたら、私はきつと、自分の仕事に熱中して、もつとつと出世もしただろうし、奇クに投稿はおろか、求めて読むことにもならなかったらう。いやもしかしたら、私のSM趣味すら消えてしまったかもしれない。

私のSM趣味は、妻の禁止と悪書追放運動で油に火をつけられたかっこうだ。いずれにしても、SMプレー夫婦など、私から見れば天国に住む幸福な人々だ。





辻村 隆

(第三十七回)

世の中には奇特な人もあるものだと思った。四月の下旬の午後、ドサリと大きな小包が届いたが、その送り主には、一向心覚えがない。不審に思ったが、宛名は正に私なので、一応開いてみると、何重にも包装したダンボール箱に、型とりどりの革製の責具が十一一点もつまっている。添書には、これを進呈しますから、カメラ・ハントに是非ご使用下さい。革具使用のハントのフォトご恵送下されば幸甚ですと走り書してある。私のことを東京のK氏からきいた革責具マニアのT氏が、唐突ながら、愛用の一部をハント用の為に送ってこられたという次第であった。

丸い輪の乳房責め革具、嵌口具束縛ベルト、革手錠、革足枷など別段きまった名称もないが、相当に上質の黒い皮革を使用して精巧につくってある。かなり価格も張ったことだろうにと恐縮したが、折角送ってもらったものを、わざわざ送り返すのも失礼に当ることだし、これを使用してプレイを、そのフォトを送ってあげるのが、贈り主に対する最上の、酬ゆる手段だと思い直し、有難く喜んで頂戴しておくことにした。

早速、四月二十三日の月曜日に撮った、美木乃々子さんの紹介の先月一度会っている青柳千紗とのカメラ・ハントにこれを使わせてもらった。過去、大体縄を主体にしたプレイ許りの私のハントに、またひとつ新しいプレイのレパートリーがふえた。

千葉県の寺西様——。早速千紗さんのフォトを編集部を通じてお送り致しますから、お気に召しいただければ幸甚です。この欄を借りまして厚くお礼申し上げます。

× × ×

徳永昭三氏の積極的な協力のお蔭で、念願の秋山美智夫、ローズ秋山の夫妻に始めて会う機会に接した。四月九日京都大宮劇場訪問

の時は、初対面でもあるので、一席設けてインタビューかねての対談をとり、四月十二日、熱のさめぬうちに、大阪のダイコーミュージックに彼等を訪ねて、深夜興の趣くままにかなりの責めフォトをもものした。秋山夫妻の絶大なご協力のたまものである。精しくは七月号の対談、八月号の秋山夫妻のカメラ・ハントに述べてあるが秋山夫妻も全国に跨がるショウのファンには、非常に感激したらしく、今後は事情の許す限り、スケジュールを連絡するといっておられた。

× × ×

六月号のサロン楽我記欄に、それこそ雁字搦目の名にふさわしい超緊縛の女性フォト一枚のせてあるが、実は何を隠そう、彼女は二回目に逢ってプレイした時の笹原八千子さんである。山本章氏の懇請もあって、彼の紹介をも兼ねて、その後もう一度彼女と大阪で出逢った。山本氏のカメラ・ルポの件については快諾を得たし、ある程度プレイの予定で準備して、その件を告げたら、当然のようには了承してくれなかった。三重県津市まで帰る時間もあることだし上六近くの旅館で慌ただしいひと

編集部だより

○秋山夫妻の残酷ショーが京都の大宮劇場、大阪のダイコーミュージック、鶴見劇場などで掛ったのを機会に辻村隆氏の待望の対談を四月九日の日曜、実施して貰った。  
○引き続き四月十二日にはカメラ・ハントの取材で百何十枚かの写真撮影、これは次号八月号の誌上を飾る予定である。尚、数日おいて山本章氏も親しく秋山夫妻のフォトを、舞台とは別の観点で撮影の上、取材もされた由なので何れ八月号あたりで、皆さまのお目を楽しませることを思う。  
○この記事を書いている頃は、秋山夫妻も遠く、東海から関東へかけて巡業の旅に出ていられることと思うが、ファンの方々も地方へ行かれた時は、どうか声援を惜しまないで頂きたいと思う。  
○「花と蛇」の臨時増刊号の続篇の在庫も余りないそうだが、前篇の増刊の方を欲しいという人が多く再刊を強く望まれている。古本の通り相場が二千元というのだがそれでも中々お目にかかれない。  
○久方ぶりでカメラ・ハントに登場



ときを過ぎたが、この時は量より質と許り、持参したありったけの縄を使えるだけ使ったの緊縛。大分ゴテゴテしたが強力なことこの上なし。そしてプレイ用の緊縛はそれだけでやめて、あとの時間は

## わたくしのフォト

あいち・よつこ

わたくし、夫婦S・Mプレイに興味を持って、誌上に発表されるものを楽しく読んでいたのですが、夫婦和合の一助としてのプレイは、大いに意義があると思っています。

わたくし共では、SMプレイなどといえる程のものではないとは思いますが、それなりに結構、楽しく遊びの主役になっており、写真に撮ったり、録音を楽しんだりしております。

同封の一葉は、ごく平凡なものです。わたくし共にとって、思い切ってお送りする「意義」のある写真です。実際にわたくし共の間に採り



入れるかどうかはわかりませんが、これから皆様方にご指導いただいて、種々研究してみたく存じておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

少し……。『甘い鞭』のフォトと一緒に編集部に渡したら、うっかり掲載してしまったそうである。以上一カ月おくれたのフォトの説明よって件の如し。

× × ×

前月号の『甘い鞭』の関谷夫人のハントのフォトの少ないのにはガッカリした。自粛の折柄それもまたやむを得ないだろうが、諸賢に彼女の素晴らしい鞭打ち刹那の陶酔と悦虐の表情を見てもうえなかつたのは残念である。

箕田氏が関谷夫人の諒解を得られて、編集長の撮ったものの、私のとったもの、すべてを含めて分譲の方に廻されたから、是非その方で、関谷富佐子さんの悦虐ポーズのかずかずを偲んでいただきたいと、敢えて私のハントのために、分譲フォトのタイコもちをする次第。

山本一章氏と会った節にも、お互いのカメラ・ハントやカメラ・ルポについて、フォトの少なさを嘆息したものだが、編集長の自粛の線にもそわねばならないので、いずれハントやルポのフォトは、追々分譲の方に廻すより外に仕方ないという結論に達した。書く側に立つ私達も、矢張り自粛せねばならないらしい現状である。河森真理子の三十数枚のフォトも、編集長よりの連絡では精々五、六枚ぐらいになる予定で、幾分ハントの氣勢を削がれることは否めない事実である。

した関谷富佐子夫人の艶姿に対するファンの反響は凄いものだ。嘗てのようにグラビアでないのが残念であるが、いささかの衰えもなく益々磨きのかかった夫人の責めに喘ぐ表情はまさに絶品である。このように素晴らしい夫人を独占出来る御主人に対して、辻村氏ならずとも羨望の念を禁じえない。

○最近懸賞応募の作品が多く寄せられるので嬉しい。つとめて毎月掲載してゆく方針なので遠慮なくどしどし御送り頂きたい。但し応募作品ともなれば、原稿の書き方の形式ぐらひは最低限度守って下さるようお願いしたい。

○読者座談会の件、お申込みの方が予想外に多いため、最初の企画を検討し直さねばならないと考えているのだが、いずれにしても通信を頂いた方には何分の御連絡を差し上げる筈だから、それまでお待ち下さるようお願いする。

○大阪OSミュージックの三月公演で「ノード千一夜」というMショーをやっていたが、同じく四月公演では「メイム」というミュージカルを上演、これはM、特に革長靴、乗馬スタイル愛好家に興味深いものがあると麻生保氏より通信があった。



## S M 文学への寸感

滝本虹夫

いちがいに現今のS M文学はつまらない。極言すれば、エロ小説と異るところを見出だす気もしない。敢て蛇足すればセックス描写がないということだけである。

だいたい、こういう変態文学（文学といえるかどうかは疑問）を書くというほうがムリなのである。

文学というものにはムツカシイ定義は抜きにして、とにかく読後感が純粹に深いものであることである。人間としての存在をほのぼのと教えるものであることである。一言に言って、さわやかであることである。

現今のS M文学にそれが見出だせない。勿論、S Mの要望としてそれは必要ではないのかもしれない。それはいいが、やたらとプロローグやシチュエーションの設定に労を注いでいるのが多いのはどういうことか。御本人としてはやはり文学にしておきたいのであるか。こういう箇所は私の習慣と

していつも素通りにする。私の様な読者はだから低俗なのである。

——がしかし、一度書いてみたい、という欲求にかられる。それも純粹のS M文学を……である。しかしそれを書いてみても、そしてそれが「奇ク」に出て、やはり私のように頁をとばしてなんだつもらん、と読者に舌打ちされるのがおちではなからうか……という結論に達する。

たとえエロにしても、S Mにしても、それを文に表現するなら、もうすこし香料を入れてはいかが？ ほのぼのとさせて貰いたい。まれにそれらしいものはないではない。5月号の八繩は知っている。Vの後尾あたりにそれが出ている。文を殺すも生かすもS Mを茶番劇にするもしないも、要はその人のバイタリティ次第である。

「奇ク」は文献誌であって、文芸誌ではないということをお忘れしているといわれるかもしれないね……

駄言陳謝

## 「自由を望む」

|| 文春5月号より抜萃 ||

伊藤和登

この世の中には、いわゆる「教育ママ」や「オバサマ連」の、情熱溢れる活動に圧倒され、その精神的にして近視的な一面に眉をひそめ、むしろ苦々しく思っている人達（勿論、私も含めて）が、少くないだろうと思う。

私が、K誌ファンだからというような偏狭さからではなく、次の記事に我が意を得た思いがしたので紹介したい。

読まれた人も多数居られるとは思いますが、文芸春秋5月号、筑波常治氏の「婦人団体の暴走を叱る」という一文がそれである。

サブタイトルに曰く、「自由の値うちに気づかない偏狭な道徳運動はむしろ危険だ……」。

少し抜粋させて載く。

「……悪書追放が好例であろう。婦人団体の動きを警察がうまく組織化した。両者が協力してその種の雑誌を集め、焚書の刑を実行したところもある。国家権力はあら

ゆる機会をとらえ、彼女らの味方だと印象づける。婦人団体が青少年の非行防止を叫べば、権力は人づくりでこれに答える。そのうちに主導権は権力の側へ移ってしまふ。……文化の真の発展には、自由こそ不可欠な条件である。……自由にしておけば、性風俗は放縱になろう。ある程度の腐敗や墮落が、各方面に生じましょう。しかしそれをやむなき代償としつつ、人間の文化は進歩する。……婦人団体は自由の値うちに気づかず、副産物にだけ目を光らす。だが副産物を無くするには、自由そのものを破壊するしかない。……」

一度、全文をお読みになることをすすめたい。

重ねていう。私がK誌ファンだから、便乗しようというのではない。ただ、私は、地方でもK誌が容易に手に入るといふ「自由」が欲しいと思うだけなのである。





女剣劇の浅香光代さんが、東京日劇ミュージックホール「ハロー トウキョウ」の劇中劇で、月形半平太を演じられました。この演出を記念したく、私がつくった女性切腹フォトの一部です。小道具の槍が手に入らず、とうとう一日がかりで木を削りペンキを塗って作り上げた苦心も買ってください。上で、ご覧下さい。

## 女剣士の最期 六角京之助



### 短歌『朱い唇』

高村初子

はじらいの朱き唇みせながら喘ぐおみなをうるわしという

たえがたき痛みなれども我が指に視線をうつす君に恋いる

思わずも洩らす吐息を聞かれしか控え目にする彼の手を見る

吐き出せし布を再び押し込まれその冷たさにとり肌ぞ立つ

許してと口の中にて念じつつしびれし舌で布を押しいつ

口中に無理押しされし一片の布なにゆえにかくも身をやく

足指の先になるまで痺れくるこのひとすじの布おどましや

とかれたる布につきいる朱き紅かすれしままでつばきににじむ

責められてルージュの乱れ気にしつつ今は燃えにし身をもてあます



「自刃柱」 桐原紫門



# 「奴 隷 妻」

山 本 武 男

## 奴隷誓約書

- 一、富子は御主人様の奴隷にして頂きます。
- 一、富子を御主人様の「犬」にして下さい。
- 一、御主人様のご命令は、どんなことでも、きつと守ります。もし守れなかった時には、きつくいじめして下さい。
- 一、毎晩でも、きつと縛って下さい。奴隷はうれしいです。出来ることならば一週間でも、一カ月でも縛って置いて下さい。
- 一、逆吊り、その他、堪えられることなら、どんな責め方でもやって下さい。奴隷は、御主人様にいじめられることに生き甲斐を感じ、倅せでいっぱいです。

御主人様

奴隷 富子

奇クを愛読し始めてから、もう十五年にもなると思いますが、初めてお便り致します。

私は四十才、妻は三十六才、結婚後十二年目になります。私は会社員、妻は農業に従事しています。が、働きながら、SMプレーをするのが、夫婦の楽しみであり、生きるための依りどころであり、リクレーションでもあります。若さを保つヒミツとも心得ています。

夫婦プレーは、五年程以前から始めました。最初は縛りの真似ごととみたいなものでしたが、今では本当の緊縛なしでは生きてゆけないような「女奴隷」として飼育することに成功し、夫婦とも、それに無上の楽しみと生き甲斐を感じるようになりました。

「後手高手小手縛り」「股間縛」「えび、逆えび」「後手吊り」「両手吊り」「逆さ吊り」「ムチ打ち」「猿グツワ」「首輪」「箆口具」「足枷、手錠」「足、手鎖」「貞操帯」と、一通りのプレーはやって参りました。そして一昨年から

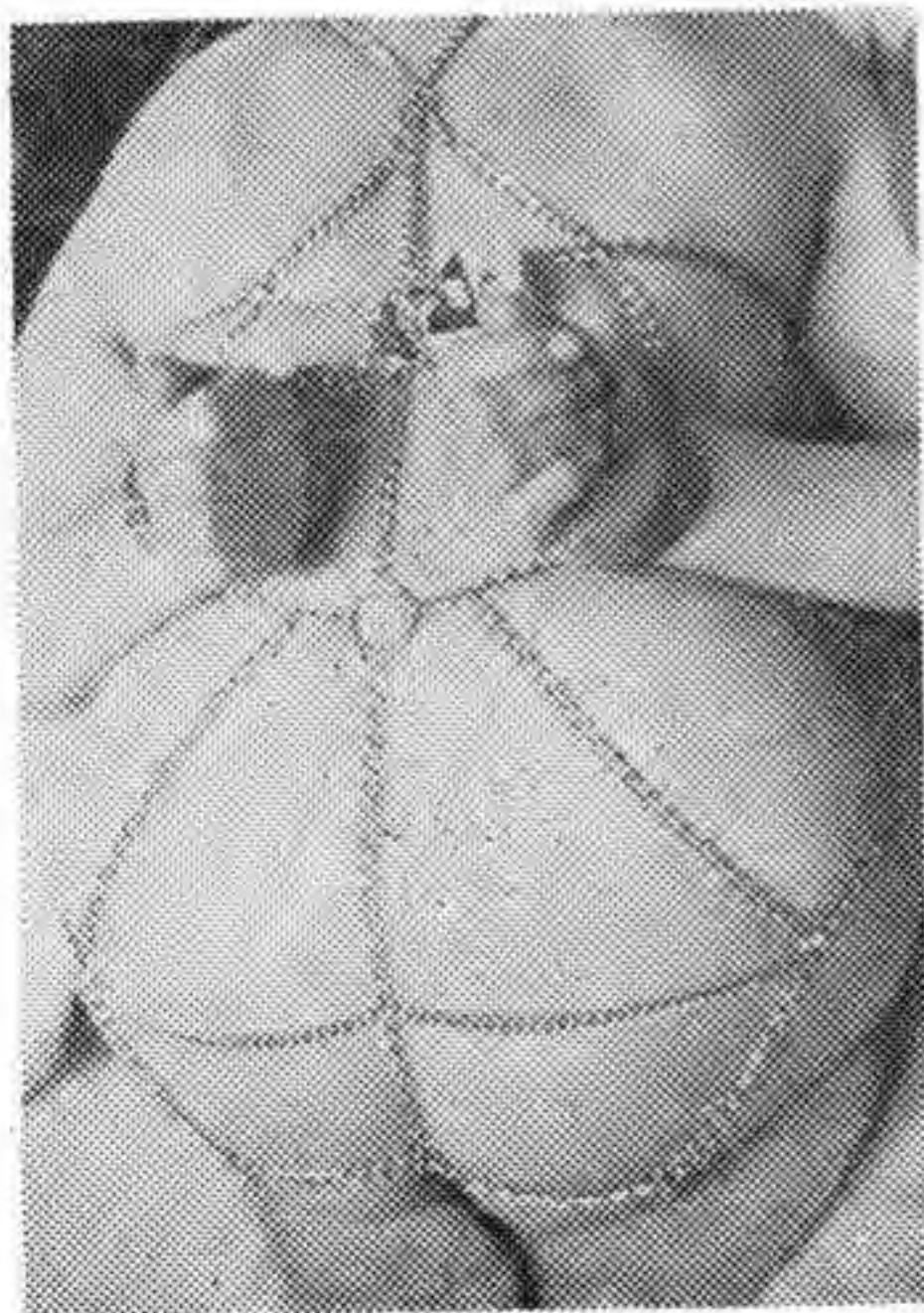
は、いよいよ妻を、女奴隷として飼育することにしたのです。さいわい妻は生れつきのマゾヒストとも思える程、私のいいつけ通りになります。その計画は「奴隷誓約書」によって始められ、この誓約に依って、私は妻富子に対して、いかなる責め、拷問、拘置等どんなことでも出来ることになったのです。

その一つとして、女奴隷の制服を作ることとし、妻がかねてから好きだった「鎖りのフンドシ」を作って、一カ月間使用させて様子を観た上で、それに改良に改良を加え、苦心を重ねて出来上ったの

が、同封の写真「女奴隷のユニフォーム」です。

この制服は、奴隷が独りで着ることも出来ないし、また着たのを脱ぐこともゼツタイに出来ないように縫らえてあります。鎖は犬の首輪に使用する上等のものを、プライヤーとペンチを使って作ったのですが、出来上るまでには、毎晩々々装着の上、改良し、ああでもない、こうでもないといじり廻した結果で、ざっと一週間ぐらいかかりました。

以後、女奴隷は、この「ユニフォーム」を昼も夜も着け通しているわけです。昼は下着として、夜



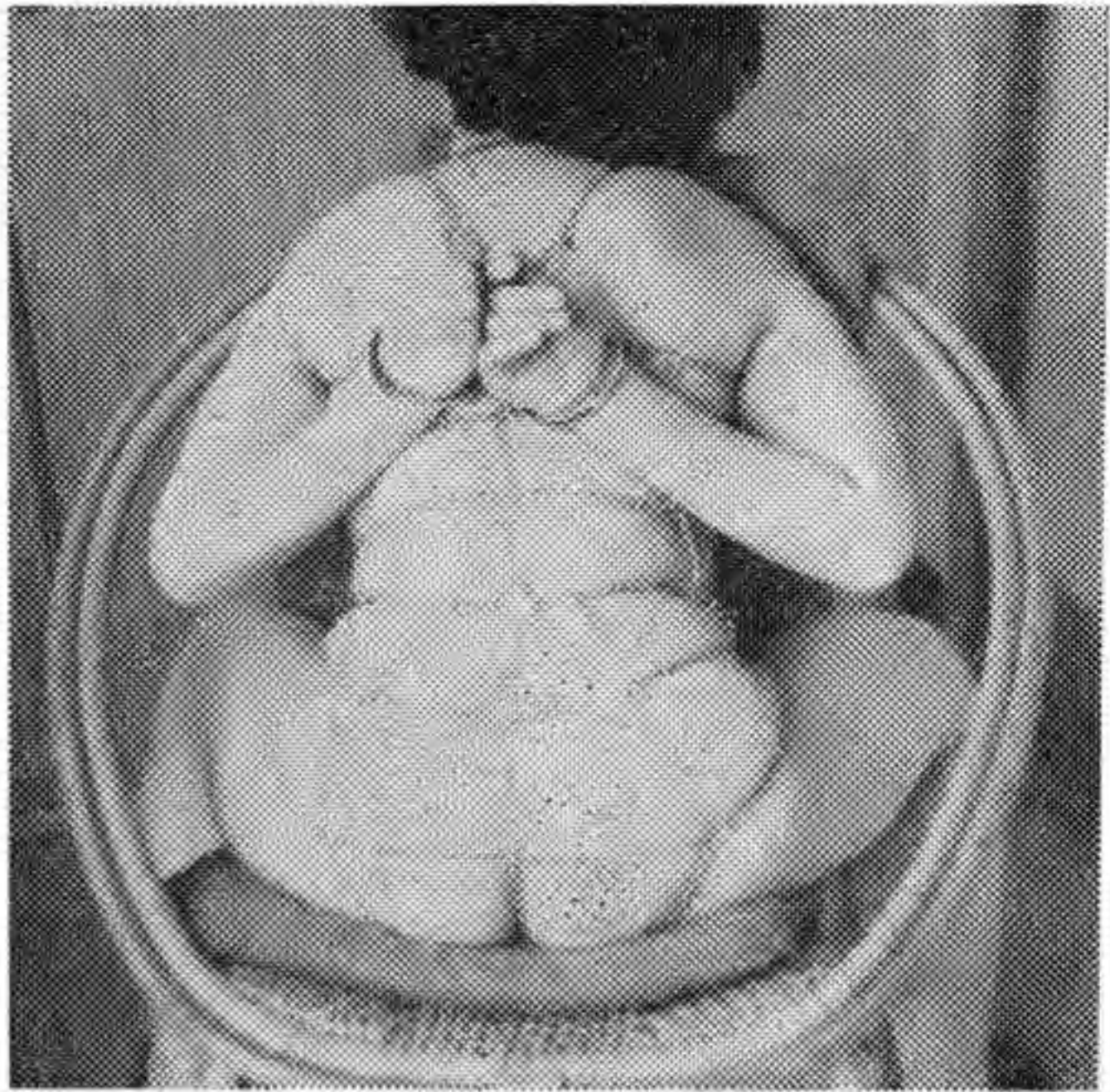
は制服として。そして更に、御主人様の前では、首輪をつけ、足鎖、猿グツワ、皮手袋を装着、最後に後手錠になる訳です。ただし、これらの作業は全部、奴隷が自分で



するのです。

このユニフォームは、十一月から三月頃まで着用させ、夏期は、薄着になる関係上、「股間鎖り」(貞操帯)だけで、ゆるしてやるつもりで居ります。

奴隷も、このユニフォーム着用を意外に喜んで、去年の十一月一日からつい先日まで、ずっと着け通して過してきました。その構造上、日常多少のさしつかえはある



詳しく発表するのを控えますが、奴隷にはもう手離せないものでしょう。でもこれも勿論御主人のゆるしが無い限り、奴隷の自由にはなりません。

つい先日、奴隷妻と熱海温泉まで遠乗りし、二泊の温泉遊びを楽しんで参りましたが、その時には女中さんが部屋に来て、妻は奴隷姿のまま床柱に繋いでおいたり、後手錠のまま食事させた

筈ですが、わが奴隷は少々不自由があった方が良く、居ります。

尚、奴隷には「SEX」の自由はもちろん与えられて居りませんが、御主人のお情けで「マスコット」なる物を与えてやっております。これは

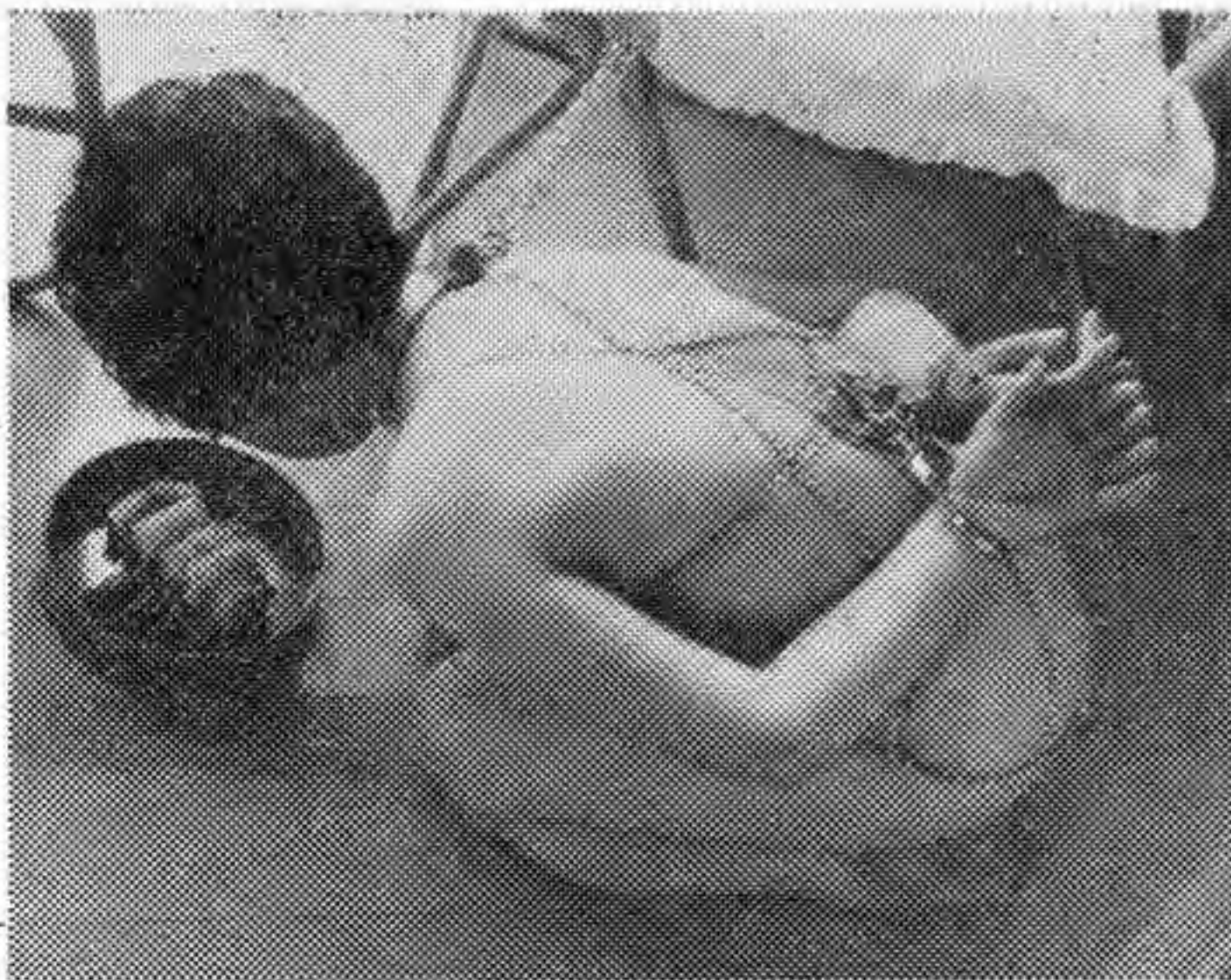
りしました。

いろいろと書きたいことや、ご報告したいことは沢山あります。

また、皆様に教えていただきたいこともありますが、今日のところは、ただ、私達夫婦のようなものも居るということを御知らせするだけに、今後、だんだんと、奴隷のことや、お仕置のよう、責めのことなどをご報告してゆきたいと思っております。熱海の温泉宿のことなどは、面白いレポートになるのではないかと

思います。余り文章にするには自信がありませんが、出来るだけ書こうと思っておりますので、その節には宜敷くお願い致します。

尚、長野県の吉沢頼子様。新年号の読者通信で、貴女の通信を拝見致し、妻も、是非にと申



しておりますが、私達夫婦でお近づきになりたいものと思っております。

もしお宜しければ、誌上ででもご返事下さいますようお願い申し上げます。妻は奴隷の身でありながら私に呼びかけをしてくれと頼みますので、このいじらしさを買ってやりたいのです。





## 城野煙草氏からの

## 「煙草責」のアンケート

辻村 隆

城野氏から次のような便りを頂いた。

——先生には如何お過しでしょうか。奇クサロンには新鮮な写真が

多く出始めの毎月楽しく読ましてもらっております。

さて、私の所蔵いたします写真も長い間、自分だけで楽しんでお

りましたが、先生の御批評を仰ぎたく、今月より数葉ずつお送り申し上げます。出来なれば奇クサロンに先生の解説付でのせていただければ誠に幸いです。と申しますのも私なりの写真解説はマンネリになってしまつて自己嫌悪に落込んでおりますので。

次に述べます点につきましては先生の御意見を拝聴いたしたく存じます。(出来なれば誌上討論など)

1、若い女性(女学生など)を裸にし縛り上げて、キセル、葉巻マドロスパイプをくわえさせて喫煙させた場合、責められている女が葉巻など喫煙具をくわえるという条件が責め味(S強度)を減退させるものか。

私は女性が使用したがらない喫煙具で喫煙の経験のないような女の手足の自由を奪つて喫煙させるいわゆる「縄目+煙草責め」でサディズム強度は増すものと考えます。五月号にあったように縛り上げて口にローソクを立てるよりも太い葉巻をくわえさせて煙をふき上げさせた方が面白いのではないのでしょうか。

縛られて引き据えられ、責めを待つ間の、何となくやるせない、不安と期待、盛り上ってくる昂奮は、今の私にとって、それこそ生き甲斐といった、又とない喜びなのである。

子供の頃からの何十年の夢の実現であるし、又、これからどれ程続けることが出来るか判らないと思うと、この気持を大事にして行きたい一心である。

ところで困ったことには、私達夫婦プレイの場合には、責める方も責められる方も、特定の一人に限られてしまつてるので、段々と責めの「手」に窮してくる。

私達は肌に傷をつけたり、跡が残ったりするような責め拷問は好まない。それで何がサドでございのマゾでございのと偉そうな事をいうのだ、とお叱りを蒙るかも知れないが、サドであろうと、マゾでなろうと、とにかくお互いに縛り合い、それこそ幼稚な手でも責め合っていればいいのである。ただ、その方法に変化がなくなつては困るのである。

## 「拷問願望」

早木夢二



りになる意志がございますか。今の私のモデルは煙草を吸う習慣なく鼻から煙が出せません。しかしこの方がいつまでも新鮮なので喫煙させないようにしております。

3、鼻腔責めの愛好者が非常に多いのに口を責めることについては猿ぐつわが用いられるのみですが、煙草責めも含めて、もっと女性のかわいらしい口を責めるのはどうでしょうか。私の経験ではリソゴやみかんを丸のまま口をいっぱい開かせてかますと、鼻腔は大きく上を向いて開き責め味があります。バナナは「花と蛇」の映画でおなじみですが、写真とすると映画のような動的なものよりも静的な方が一層サディスティック的です。

柱あるいはアグラ縛りに縛り上げてビール瓶や靴を水平に口でくわえさせて責めるなど昔の軍隊のリンチに使った方法を縛り上げた女に試みるのも、また興味あることと考えます。

いろいろ勝手な事ばかり書き申し訳けございません。何かの時、先生の御意見を拝聴出来るものと楽しみにしております。今月は3葉の写真と私の絵画1葉をお送りいたします。現在の段階では誌上



のみで先生と文通いたしたく思います。来月も続いて私の拙い写真あるいは画を見てやろうと思召されるならば誌上のどこかで御連絡下さいませ。――

(1)については、小生は余りその経験は多くないので大きなことは言えないが、煙草というアクセサリが責め味を減退させるとは思えない。この点に関しては他に体験者があれば御意見を寄せて頂

きたいと思う。(2)については女の責めに目のない私のこと、大いに作りたい意志がある。妊婦や鼻責、浣腸、笞打ちETCとミイラとりがミイラになった例もあるのでは是非試みたいものだ。

送られてきた城野氏のフォトはバックを黒くして煙草のけむりをうまく表現しているのは心憎い。まだまだ沢山の写真を手持ちしておられるようだが、引続いて見せて頂きたいものである。

色々な本や映画などで、拷問の仕方を讀んだり観たりするが、実際に夫婦プレイとして行うには難しいものが多い。

あれやこれや、私達は夫婦だから、他人には出来ないようなことも出来る訳で、ないチエをしぼっているのだが、時々、何かすつかりと目先の変わった責め方はないかと考えこんでしまう。

なるべく苦痛のない方法で、というのだから虫がよい。

近頃のピンク映画には凄い責め場がある。例えば「素肌の罌」では、拳銃の弾をかみ砕いて火薬をとり出し、それを女の両乳房の間にぶちまけ、ライターの火を点ける。肌の上で火薬が燃え上る。というような場面があるが、これなどは、どうも性に合わない。

「惨忍」でも、太股を傷つけて血を流したり、乳房を刺したりする場面より、全身をなめ廻したり、しじまで笞打たれる場面の方が、ずっと私には興味がある。

要するに、やり易い方法で、最大の快楽を得ようとしているのかも知れない。こんな卑怯な心はお恥しいのであるが、どなたか、私達夫婦にふさわしい拷問を、ご教示願えないだろうか。



## 「佐 渡 雑 感」

丸 木 戸 佐 渡

今月は思いがけず三日も早く奇クを手にすることができた。例の如く小脇にかかえて家路を急ぐ。食事の間もどかしく、早々に部屋にこもり、さて、ワクワクする心をわざとじらしながら一頁ずつ目を通してゆく。

まず辻村氏のカメラハント。特に後半の三枚の写真のポーズが、新鮮味があつて、一寸構図がおもしろく、縄をこてこてと使っていないのがうれしい。手と足だけに縄をかけて、柔軟な全裸の姿を逆弓形に吊る。柱を抱くようにして、指をいっぱいに拡げて、力をこめている両手の表情がすばらしい。もう少し足をあげて大きく拡げ、背中に何かのせてみたい。続いて鴨居に両ひざをひっかけて逆吊り。縄が一本も使われていないのがいい。これなら縄で縛らなくとも、一人ではどうしようもないし、伸ばされた腕や太もも、腹の筋肉に力が入って、ピンと引きしまったところが強調される。光がきつすぎるのかその点あまり鮮明でないのが惜しい。それでも

伸び切った腹から胸の線は云いようもない程に美しく、そして、苦しそうなけぞっているノドからアゴにかけての伸び切った肌の白さは、この写真からものはっきりと感じられる。腕を垂れ下らせて、両手首だけを縛り合せればこの構図が完成するだろう。

最後は両手吊りのムチ打ち、吊りの中では最も、オーソドックスでありながら、無防備さにおいても、責め易さにおいても、このポーズは充分に効果的であろう。小生毎日の通勤の途中、電車の吊り革を見るたびに、このポーズを想像し、あたりに乗っている若い女性客の中から、チャームिंगな女の子を見つけ出しては、この吊り革に両手を吊ったらどうだろうか、想いをめぐらしているのである。一度ぜひ本物の電車の中で、この夢を実現してみたい。通路のまん中に前向きに立たせ、両側の吊り革に一本ずつ手首をひっかける。そしてムチ打ち、又、そのまま両足を後に引き上げて逆エビ大の字形に拡げて吊して、電車のゆ

れるのにまかせて放置する。テレビでやっていたスカイダイバーのようになるのだろうか。あの吊り革の輪は、どうしてもそんなことを連想させる。さて、右腕にホホをすりよせて、顔をのけぞらせ、苦しきみもだえる関谷夫人の表情は、さすがに長年のプレイに、仕込まれただけあつて、まさにMの真骨頂と思われる。ただただすばらしい。足元の切れているのが何か物足りなさを残す。

さて次は……、いよいよ猛の飼育が実を結び、徐々に完成されてゆく「おんな」の理想像を鋭く描きあげてゆく「縄のある蜜月」。千草氏の力作は次第にみぎのかかった「サディスチック・ホームドラマ」とも云うべき新ジャンルを開拓しつつあるようだ。マンネリをさけようとする作者の並々ならぬ努力がうれしい。夕食の仕度をしている後姿から、一瞬感じる生々しい情感、男なら思わず、おそいかかってみたい欲望にかられる。そして腰のものを引きはがすとあとは一糸まとわぬ新妻のヴィーナス像が現れる。これこそが、「バラ色の蜜月」であろう。電話を使ったのは思い切ったアイデアだ。受話器を通して、かすかに聞

えてくる秘められた肉体のかなでる音楽（と云えようか）。ベッドに全裸の肌をのけぞらせてあえぐ姿が、そこにありありと描き出されている。「水中花」が途絶え、「痴人の糧」も今月からひと休みとなった後「花と蛇」に次ぐ本格的Sとして、今後の発展が大いに期待される。

意外にも、先月の笹原未亡人に再び接する喜び。辻村氏のハントの中でも、特に八千子未亡人の網パンツは出色でした。けがの功名か何か、とにかく小生も山本氏同様あの強烈な姿態がまぶたに焼きついてしまった。その姿態の柔らかさは、まだもっと強烈な、新しい可能性をもっている。行きあたりばったりのホテルでなく、もっと準備をととのえて、例えば四月号の水野夫妻のように脚立を使つてやれば、前記のつり革による大の字逆水平吊りや、駿河責め、又両肢をいっぱい拡げて、竹棒の両端に縛り、背を折って両手首をそれぞれの足首につけて縛る、それに別の縄で首輪をつけ、それを竹棒のまん中を通し、頭を固定する。そのまま竹棒を水平に吊り上げる。完全に無防備のままつき出されたまろやかな双丘を責めるの



## 私の感想メモ

藤岡江根真

- ◎四月号の「狭き門」久々のヒット作として推す。
- ◎光文社発行フックス風俗の歴史第四巻（エネマに関する記事と絵二葉挿入）が、部数的に一番実績を上げた由。（取次販売会社談）
- ◎最近ブルーフィルムを観る機会あり、中に一本、エネマを用いたものあり。
- ◎かなり高級なキャバレー、クラブのホステスに、エネマ使用者が案外多し。近年の性に関する開放感が原因とも思われぬが、エネママニアを公然と肯定するホステスもいた。
- ◎インテリ層（大学生）ホワイト

カラー族（三十代）に、エネマに関する潜在的意識を持てる者多きに驚く。

◎ある駅のトイレで、多き落書きの中に唯一つ、簡単明瞭に書かれたものに出会う。曰く「自分は恋人をついにエネママニアにした」写実的で一寸珍らしい。

◎かなり古いK誌の二月号に、辻村氏の「みだらな虫」という作あり。全然知らぬ人と偶然電話で話すうちに話題となり、改めて一番の好評作であったことを知る。

◎K誌の性格上、出来るだけカット、写真は少くしては如何？あまりうまくないカットでは却ってムードを損うおそれあり。

◎エネママニアとして、今後「狭き門」級のものを毎月三本程度、掲載されんことを切に希望する。

## 「ムード・フォト」の試み 中宮 栄



もいいし、しめつけられた体にグリセリン責めをするのもいいだろう。あくなき幻想をくりひろげさせてくれる、すばらしい未亡人ではある。

さて最後は当然大作「花と蛇」これなくて何の奇譚クラブかな、である。相変らず責めに次ぐ責めで、息もつかせない。二人のシスターボーイの出現は又新しい興味

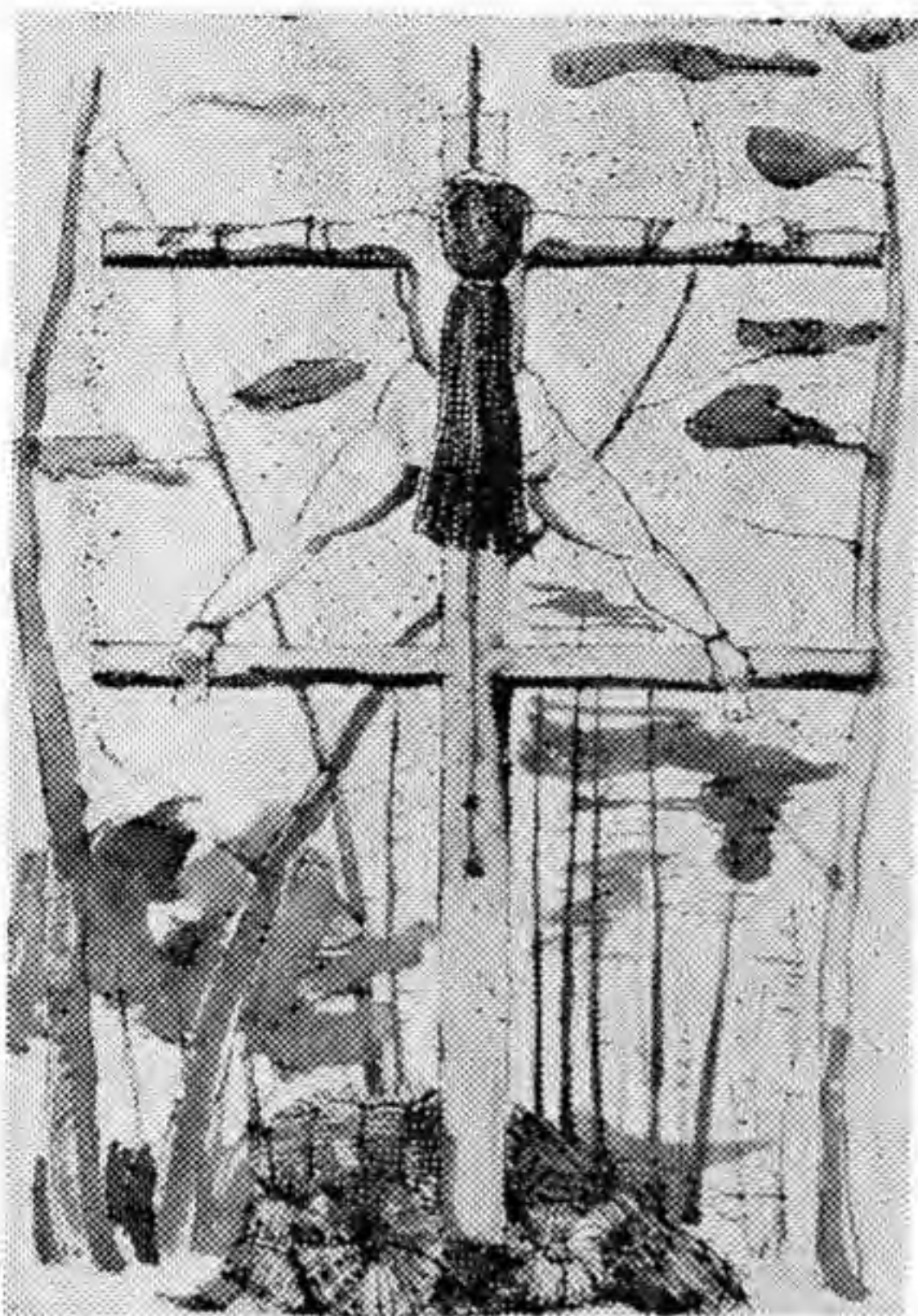
を呼ぶが、次にはもう一步進めて静子を鬼源の助手に使ってみてはどうだろう。遠からず小夜子や京子の調教が始まるが、彼女のやさしい調教が、今まで彼女らに對した男たちやズベ公による責めとは違った、責める静子と責められる京子たちの両方に羞恥と悲しい肉のうずきを与えるレスビアン的Sの世界がひらけよう。相手がズベ

公ではやはり物足りない。自分を散々に悩ませた桐の箱に入った道具を今度は、やさしく教えながら静子が京子や小夜子に使い、彼女らに、自分達の悲しい宿命をさす。静子の、自分がそこまでの女になったことに対するあきらめと新しい生き方へのたどたどしい歩み、そんな静子の変わりようを見せつけられ、その静子の前にさらけ

出す女の生理へ、どうしようもないうずきと、それに耐える京子と小夜子、互いの悲しいおんなの宿命をなぐさめ合い、傷をなめ合う牝犬にも似た秘密スターの美女たち。すばらしいSの世界の展開となろう。

最後に団先生のタフさと、そのあくなき追求の姿勢に敬意を表しつつ、期待をもって……。





つまらぬ独白

ビナスを求めて

東京 呪詛夢

「ほんとに消えちゃうの？」  
「……。だけどあなた、私を使っ  
てこんな絵を描き始めたのは、い  
つ頃なの？」  
「大分以前さ。君は覚えてないん  
か。そうだろうな。君であって君  
でなかった。そんな絵だったもん  
な。その頃の事、俺はまだ覚えて  
るな。白地の裸体に鉛筆で黒い縄  
目を引く、ただそれだけで、体中  
がカッカして来た。縄の作るくび  
れ等、当然気付かずに、ただ夢中  
で描いてた。未知の世界だったも  
んな」

「今と大分違うじゃない。その頃  
のも、こんなへどが出るような絵  
なの？」  
「へどを出すのは君だけどさ……  
でも、あの頃も今も、美への憧れ  
だけは変わりなかったから、君を  
ただ、きれいに描こうと必死だっ  
たんだ。しかし出来るのは、全く  
不自然な絵ばかり。それしか描け  
なかった」  
「今だって、そうじゃない」  
「でもね、それから何年かして、  
『菊』氏にめぐり会って、色々と  
新しい事を教えられてからは、俺  
の絵も徐々に絵らしくなってきた  
んだ。未知の世界には変わりがな  
かったけれど」  
また泣き事か！  
「だけど、本当はそうじゃなかつ  
た。『醜を美と化す絵』を目標に  
描いている事は君も知っているだ  
ろうけど、今描いている、『責場  
(処刑) 百景』なんてやつも、三  
年前に始めた頃は、スラスラ描け  
たけど、その中にモチーフが串刺  
しばかりになったり、イメージは  
渴れて来るので四苦八苦。手当り  
次第、関係のない雑誌等をめくっ  
ては、何か少しでも刺戟されると  
無理矢理絵にしたり、『菊』氏が

譲ってくれた、写真をも参考にし  
た。それで、やっと四十景。もう  
これまでとは俺自身でも思ってい  
る。どれを見ても、やはり不自然  
だからね。もう描けない気がする  
よ……」  
「当然よ。頭で描いたにすぎない  
もん。『真似』のその又『真似』  
ではね」  
単なる空想——頭で描いた絵、絵  
絵……か。  
「想像だけで『醜を美と化す絵』  
を描くなんて、何も知らないあな  
たには無理よ」  
「でも、この俺のビナスは、君し  
かいらないんだし……。嫌いじゃな  
いだろうか？」  
「嫌いじゃないけど、進歩が無い  
もん」  
進歩？  
「でも、私、もうイヤヨ。変な恰  
好ばかりやらしてさ。私、本当に  
消える」  
進歩？  
「じゃあね。バイバイ」  
「あッ！君！チョッ、チョット待  
って。でも、俺、もう少しは描け  
る気も……。真実を……。少しでも  
真実が……」  
真実？  
「消えちゃった」



## 六尺とともに生きる

宇野耕三

九州の田舎に生まれ、伯父の手で育てられた私は、中学を出ると家業の漁業を、手伝うようになった。南国のやけつくような太陽と潮風の中で、一年の半分を六尺禪一本で過すので、赤銅色に陽やけた私の下腹には禪の締めあとがくつきりと残っている。

湾内の魚も減って重労働のわりに金にならない漁師に不満をもっていた私は、伯父の死を機会に職を求めて上京した。

一日の仕事を終えて銭湯に行った私は、東京の男が私と同じ年頃の若者はもちろん、年配の人まで皆サル又をはき、六尺をしめている者はなく、たまに禪をみかけてもせいぜい越中であることを知った。しかもその人達が私の六尺をめずらしそうにジロジロ眺めるのには閉口した。何となくきまりの悪くなった私は、洋品店にとび込んで、サル又を買ってはいてみたが、かんじんの所がしまらず、気がぬけたようで、また、サル又をぬいだあとには禪のあとがやきついていることでもあり、ママヨと

ばかりまた六尺にもどっている。

去年の夏の定休に、他にすることもないままに、めずらしく昼間から風呂に行った私は、脱衣場ででっぷり肥った五十がらみの人が浅黒い下腹にまっ白い六尺をきりと締めこんでいる所にぶつかつた。分厚い胸から、ぐとつき出た下腹にかけて、湯あがりで汗ばんだ肌はくろぐろと剛毛におおわれ、私は理想の男の像をそこに見出した。

私はその人に近づいて話しかけたところ、私の裸とかごにぬぎすてられた六尺に目をやったその人は、自分が駅前のスシ屋の主人であり、ついでの時、あそびに来るよう云ってくれた。私は身体を洗うのもそこそこに、その日の帰りに早速、店にたちよった。

ご主人は豆しぼりのねじり鉢巻をしめ、若い職人と二人で威勢よくスシをにぎっていた。私はビールをたのんだ。真夏のことであり、よく冷えたビールの味は、湯上りのかわいたのどに、しみ渡った。昼間のことで、二組の先客の

かえったあとは、客は私だけになった。私は二階に案内された。その部屋はマトイの模型や浮世絵などで純日本のかざってあった。

部屋に入るなり、ご主人は「暑い暑い」といいながら純白の仕事着をぬいだ。その下は六尺禪一本に毛糸の腹巻だけで、私はその姿を見て体がゾクゾクするのをおぼえた。ご主人は私にも、裸になるようすすめ、うちわをとってくれた。二人はうちわを使いながら、互いに相手をみつめあった。

私は東京に来てはじめて本格的な禪をしめている人に逢ってうれしかったこと、禪のことで何となく恥ずかしい思いをしている事を話した。ご主人は、日本の男子は六尺をしめるべきで、最近の日本人がすじ金に通っていないのはサル又をはくようになったからだと言った。又、男が色物のパンツをはくなど、もってのほかだとも云った。

しばらくして、ご主人は私と禪の交換をしようと言った。私も丁度この人の禪をもらいたいと思っていた矢先だったのですぐ同意した。かっぶくの良いく主人の禪は私には長すぎて、後でしっかきり巻きこんだあと、端が前にまわるほ

どであった。反対に私の禪はご主人には短く、前だれを後へまわしてまき込むには不足であった。ご主人は前のたれを無造作に横ひもにはさみこみ、三角に形よくおさめた。その姿は前袋がきりっとしまっている姿とは又別の、何とも云えぬイキなものであった。私はその動作を見ながら、快感が頭のテッペンまで走りぬけるのを感じた。

その後、私は、ご主人と時折り旅行に出かけ幸福を味っている。脂ぎった中年のたくましさは私をとうすいさせ、私の若さのほとばしりがご主人を喜ばせる。

私にはもう一日も禪なしの生活は考えられない。きりたてのサラシの爽快な締め具合はもとより、洗いさらしてしっとりした禪はよく肌になじみ、またすてがたい味がある。

貴誌を通じて、六尺愛好の士が全国にいるのを知り嬉しく思い、かりそめにも禪党から脱れることなどないよう望むとともに、まだこの喜びを知らない人が一日も早く試みられて、同好の士が一人でもふえる事を切望して、私の体験をのべてみた。



惨酷ショート・ショート

## 山 狩 り

黒 田 寿

彼女は必死で山の中を逃げまわった。数人の追手が手に銃を持ち犬をつれてそのあとを追う。どんなことがあろうと彼女を生かしておくことはできぬとばかり。

無理もない。追手の頭には無残に殺された啓子の死体があった。ミス大塚村として誰もがそこがれていた美女。それが乳房はふたつともそぎおとされ、腹部はズタズタに引き裂かれ、しかも首がちぎれていて、恐るべき彼女はその生首をゴロゴロと脚でころがし、おもちゃにしていたのだ。

遂に犬が彼女を発見し、けたたましく吠えながらとびかかる。彼女はうるさそうにはらいのけ、逆に一撃を加えようとしたが、訓練された犬は軽しかわし、彼女の脚に強くかみついた。

しかし彼女はこれに屈せず、脚

にかみつかせたまま、引きずるようにはしては地面に叩きつけ、尚ものがれんとしたが、そのうちにほかの犬たちも追いついて、背中や脇腹、或は首すじめがけて次々ととびかかる。

さすが、タフをほこっていた彼女もガックリとなるや地上に転がった。その身体は言うまでもなく血まみれだ。犬たちはますます勢を得て攻撃の手をゆるめない。主人達がここにくるまでに自分たちだけで息の根をとめてしまおうというのだ。

遂に追手がこの斗いの場に到着した。彼女は怒りと絶望に満ちた目でみつめるや、最後の力をふりしぼってスックと立ちあがる。「このメスめ、啓子の仇だ。思い知ったか」

銃口を耳の下に押しつけるようにして引金をひく。彼女は四肢をピクンとふるわせたかと思うと、ドッとあおむけに倒れそのまま息絶えた。

追手は彼女の四肢を、ひとつにまとめて縛りつけ、地上をズルズルと引きずって村まではこんでいった。村では村民大勢が手をたたきながら出迎えた。

彼女の死体は四肢をせいっぱ

僕のイメージ画集「バーベキュー」

室井亜砂路



いにひろげた形で、しかも逆さに太い樹の枝から吊るされなぶりものになった。しかも彼女の罪のむくいとしては、これだけですまず短刀で首をゴシゴシとかきおとされ、啓子の墓の前に晒された。おびただしい血潮が地上を流れる。逆吊りのままなので、残る彼女の身体には、殆ど血汐は残らない。

い。更に全身の皮膚もきれいにはがされ、なめして敷物にしてしまうのだ。肉や内臓は追手を主として大勢でわけ、食べられてしまったが、最も珍重されたのは心臓でも肝臓でもなく胆嚢であった。それは当然だろう。熊の胆は万病の薬なのだから。



浣腸ショート・ショート

## セーラー服哀歓

並川新一

高校の医務室のベッドで、B子は痛いおなかをかかえて横たわっていた。午後の静かな陽ざし。遠くで体操の笛の音がリズムカルに響いてくる。

「どうした。腹痛だった？」

と、元気な声がして当直の若い青年校医が入ってくる。B子は毛布を首まで引き上げて、顔を見上げる。

「どれどれ、何か悪いものでも食べたのか。みせてごらん」

と、校医は毛布をはねて診察にかかろうとする。紺のセーラースカートの裾が乱れて、すんなりと伸びた脚が羞かしげにちぢめられる。若い医師の手が伸びてくる。

「先生、嫌！」

羞らうB子にかまわず、触診が入念に繰り返される。

「大分、脹っているネ。一度全部出してしまわにゃいかん」

校医は、若いのにむつかしい顔付になって、戸棚の方に歩み寄って行く。取り出された浣腸器がキラリと光る。

「い、いいんです先生、もうなんともないんですから。お願い！もう、ほんとうにいいんです」

校医は、チラッと彼女に眼をくれたまま、なれた手つきで浣腸の用意をすすめる。一〇〇CCのグリセリンがたちまち浣腸器に吸い上げられてしまった。

「さあ」

と、向き直られて、B子は顔をおおってしまう。明るい日射しのもと、花朧かしい乙女が、いくら治療の為とはいいいながら、若い青年医師の前で、そんな……B子は泣き出した。気持ちだった。

「あまり手数をかけさせるんじゃないよ。ほらほら液がこぼれるじゃないか」

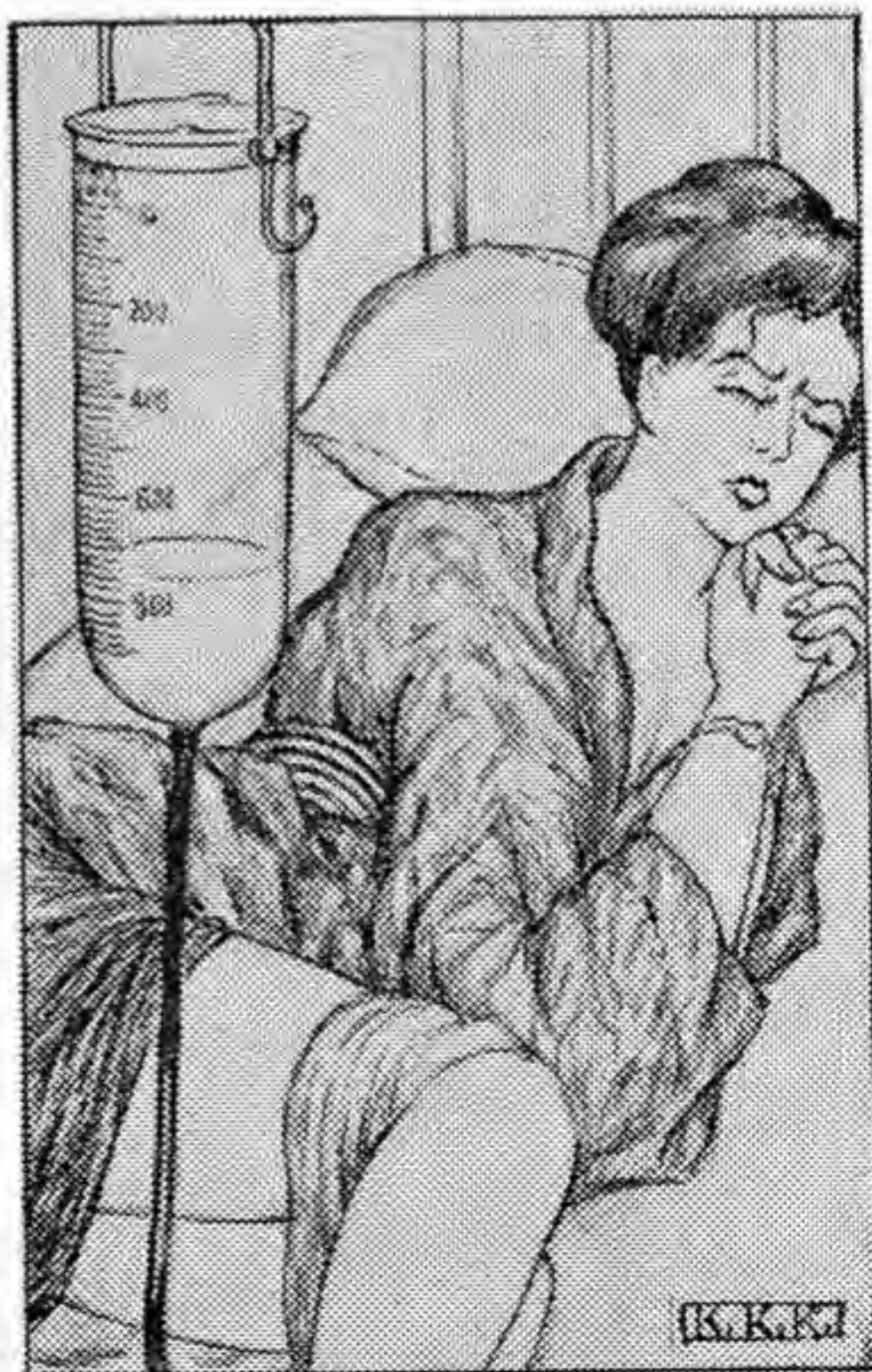
「いや！ ゆるして」

「そんなことをいうと、人を呼んで押さえつけていて貰うがいいかね。看護婦さんは今、使いに出てるから、君の友達のだれかにさ」

この言葉にはB子は一タマリもない。スリッパをたくし上げ、黒いズロースをずらし下げた。下から、今朝から始ったために締めて

私の幻想画「浣腸はイヤ」

K・K・K・生



来た生理バンドが顔を出す。

校医は軽く眼だけで頷いたようだったが、一向に無頓着である。

「サアサア、早く早く」

冗談まがいに云いながらも、さすがに手際よく、親切に、校医の手が働く。

B子はもう諦めて、両手で顔をおおったままベッドにうつぶせになり、粗相のないように紙オシメまでに気を配ってくれる若い校医のなすがままにまかせていた。

五分後、B子の哀願を、医師は冷やかに「まだまだ」と軽く一蹴

して、許可しない。身をよじり、肩をあえがせ、胸を激しくふるわせながらB子は必死でこらえる。

「も、もうだめ！先生、おねがい。行かせて！」

「あと、二分間の辛抱だ」

校医は、冷たく云う。

「そ、そんな！もう駄目！」

B子のもだえは激しくなるばかりだったが、急にベッドに突伏してしまった。

「バカ、バカ！先生のバカ！」

B子は安心して、胸の内であつろに校医を呪いつづけていた。





## 私の作品

新田 英雄

最近の私の作品をご覧下さい。別にこれといって新しいアイデアも有りませんが、私達なりに良いフォトが出来よう努力しています。プレイを、いざフォトにするとなると仲々に難かしく、自分の頭の中に描くようなものにはどうしてもなりません。

まして私達素人では、先ずライティングで苦労します。いつも、これに相当な時間をとられてしまうもの

です。しかし、これだけの吊り？でも少し時間が経つと、妻は相当に苦しいらしいのです。私は、シャッ



ターを切るまでに、アレヤコレヤと頭の中の図と比較して、知らぬ間に時間をかけてしまうので、この写真を撮るだけでも、縛られた妻としては、結果の数倍もの汗をばり出したのだ、ということを強調したく思います。

それにしても、誌上で散見するような、まやかしでない「吊り責め」のフォトが、いかに苦心の作品であるかということが、やってみてしみじみ判るような気がしました。次には思いきって私のモノにしたいものと思っています。



# 奇譚クラブ

昭和42年7月号

(1967年・7月号〈第21巻第7号・通刊第229号〉)



## 本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で  
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象  
 として編集しておりますが、青少年の保護  
 育成に関する条例には抵触しないよう、十  
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ  
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵  
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順  
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減  
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な  
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの  
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲  
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし  
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな  
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部  
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた  
 めの努力はいたしません。



秋山夫妻・辻村 隆

対 談

『シヨウこそわが命』

——秋山美智夫・ローズ秋山夫妻の、サディズム残酷シヨウ

見聞記と、その秘話あれこれについて——

辻

村

隆

京都の徳永昭三（『燃ゆる想いにあけぬるを』参照）は、例によって協力的親切と、果敢なる行動力の持主である。私が誌上でもかねて評判の高い、秋山夫妻のシヨウを、一度見聞して、あわよくば秋山夫妻とも、膝を交えて対談したいという意向を伝えると、忽ちにして行動を起していた。どのようなコネがあるのか、四月一日から十日間、京都大徳寺近くの大宮劇場で、秋山夫妻の残酷シヨウ

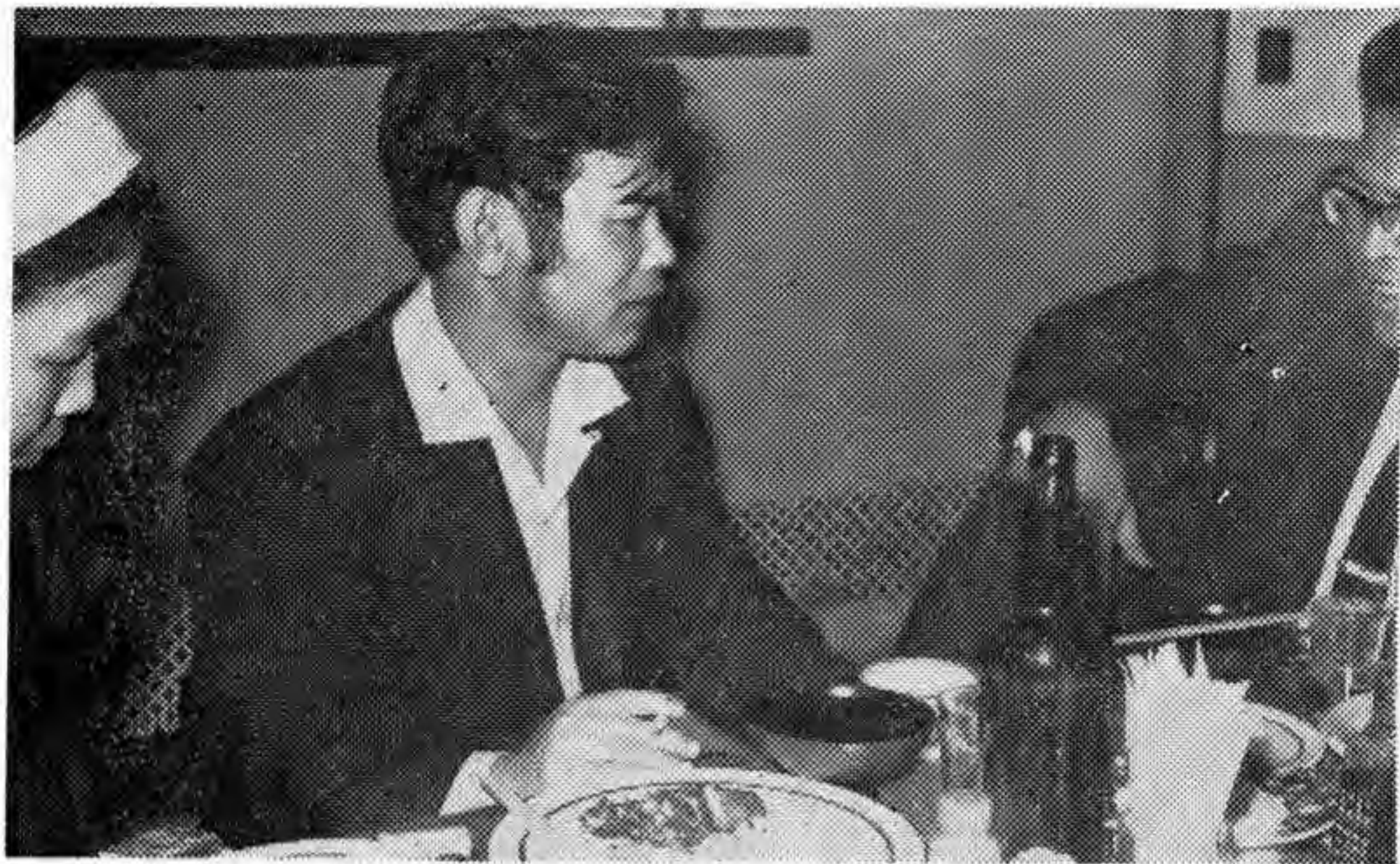
が上演されるからと、逸早く知らせて来てくれたのである。三月二十五日の事であった。

電話での対話——

「ばかにニュースが早いじゃないか？」と私「うん、それがね、いい工合に大宮劇場の経営者が、私と極く親しい仲なんだ。小屋の方は殆んど奥さん任せなんだが、彼女が又素晴らしい美人で物判りのいい人なんだ。こうしたSMのシヨウにも或る程度理解があるのじ

ゃないかと思うのだが、以前から頼んでおいたら、昨日わざわざ電話で秋山夫妻の残酷シヨウがかかることを知らせてくれたんだよ」「へえ、感激だな。是非万難を排してでも出掛けるよ。それで直接会わしてもらえそうなの？」「ウン、そのことも万事よろしく頼んでおいたよ。何しろストリップ劇場だから、冷やかし半分の好き者も多いので、そうそう誰にも





ってわけでないが、あんたのことを、訳を話して頼んでおいたから、多分大丈夫さ。奥さんがウンと引受けてくれた以上、絶対に間違いないよ。何なら、箕田編集長にも話して見たらどうです？」

「そう願えれば有難いが、編集長は今、会議で上京中なんだ。なんでも帰りは名古屋で途中下車して、素晴らしい美人のモデル志願者と会うんだと言っていたから、私一人になるかも知れない。山本一章さんも同行したいなんていってるんだけど、うまく連絡が、つかないかも知れない」

「始めてのことだから、辻村さん一人の方がいいだろう。兎に角一度会って見給え。すごく感じのいい奥さんだから——」

徳永昭三はしきりに経営者夫人のことを褒め上げていた。例によって岡惚れしているのかも知れない。

× × ×

四月九日——。花の盛りの日曜日だというのに、朝から生憎の雨模様であった。

かねて滋賀県の彦根市の夫婦プレイの方が是非会いたいと言ってきたので、その日をダブラせて、これも徳永氏の斡旋で、嵐山のS館という料理旅館で、徳永氏も交えての簡単なプレイのあと、彦根のM夫妻と五時過ぎ嵐山で別れ、私と徳永昭三は、霖雨に煙る嵐山雨情をタクシーの車中から賞でつつ、一路大宮劇場へと車を走らせた。

大宮という名称から推察して、四条大宮近辺かと考えていたら、豈はからんや、大徳寺近くの、閑静な地域である。西陣織の本場近くだそうである。雨で陽も落ちていりし、全然勝手知らずの土地故、すべては徳永氏任せである。六時十分前頃、劇場に到着した。残酷ショウの第二回目は六時二十五分からというから、三十分近くある。軽く夕食をと思っただが、運よく秋山夫妻と対談出来た場合、何れはどこかで食事をし乍らということになるからと、暫らく我慢することにした。

徳永氏はつかつかと入口に入っていた。運よく奥さんが、じきじきモギリに坐っていたので、早速紹介してもらう。



成程、彼の言う通り美人だ。それも所謂京美人タイプではなくて、どこか鉄火肌の江戸前を感じさせるハキハキした物腰だった。

表でボンヤリ待っているでも仕方ないの  
で、兎も角劇場に入  
れていただく。切符

売場を何気なく見ると、観覧料千円。ストーリーップにしては、随分いい値段であるが、獵奇を採求しようとするSM同好者も随分おるものとみえて、劇場内は殆んど一杯つまっている、左右のそでにかなりの立見の客が散見された。最後部にチラホラ空席を残すのみの、この盛況振りは何を意味しているのであろうか。恐らくは、この観客の中の何人、いや何十人かが、奇クを読んでいるのではなからうか。そして或いは、こうして観客と混って、今秋山夫妻ショウを見ようとしている、私のカメラ・ハントを読んだ人も混ってはいるか  
も知れないのだ。私はSMのプレイというこ  
とに対して、隠然たるブームを感じた。単調



なるヌードに飽いた挙句、強烈なるサジスチクの獵奇の世界に耽溺しようとしているのではなからうか。私の直感には狂わなかった。その殆んどは観客が、凄烈極まるSショウの、秋山夫妻の残酷ショウお目当ての客であることは、やがて眼の馴れてきた場内の、観客の雰囲気や服装でそれと察しられたのである。インテリ層が圧倒的に多く、中にチラリと外人の顔すら混っていたのである。

徳永昭三のコネのお蔭で、フリーパスで入  
れてもらったことに対して、私は金銭的な問  
題を除外して奥さんに好意をもち感謝した。

劇場の前に立ち止った時からして、既に感  
じたのであるが、この大宮劇場内外は、実に  
不思議な雰囲気包まれていた。幟、ポスタ  
ー、宣伝文、看板など、すべて秋山夫妻の残  
酷ショウ一辺倒なのである。

ポスターの写真は、緋と緊縛されて打ち伏  
すローズ秋山に、黒衣に半裸の身を包み、黒  
いマスクをした秋山美智夫が、鞭を振りあげ

て、今正に一撃を加えんとするシーンが、激  
しい嗜虐を盛り上げて掲載されていた。

入口正面には、一日三回公演する秋山夫妻  
の残酷ショウの、公演時間のみが貼り出され  
てあり、劇場の広告はすべて、夫妻のもので  
埋まっているといって過言ではなかった。

この公演の場合、特出しをも含めて、一般  
のヌードダンサーは完全に脇役であり、時間  
稼ぎの員数に過ぎないようであった。

人気のすべては秋山夫妻の、このサジスチ  
ックなショウに掛っているといつてよいので  
はなからうか。でないとなれば、単なるヌー  
ドのストリップに、誰が千円も払って入場す  
るものがあるというのであろうか。

経営の全権を任されている奥さんの、秋山  
夫妻に対する、力の入れ方が、こうした面か  
らも歴々と窺われるのであった。

謂わば、そのピカースターに、無名の私が  
面談を申込んでいたのである。これは到底徳  
永昭三の力なくては不可能なインタビューで  
あったかも知れない。

奥さんの、やや着崩れたような着物のこな  
しと、男帯のようにうんと低くしめた帯の、  
色白な肌にこぼれる女盛りの魅力が、強烈な  
印象を私に烙印した。



一人のソロダンサーが、延々数曲のレコード演奏を受持つて、媚を売り、徐々に脱いでゆくテクニクは、ストリップの定石で、正直言つて、三十分近くがむしように長く感じられた。私は三度許り時計を見た。

薄い紗の中幕が降り、ヌードダンサーがやっと消えて、中幕が上る。七色のスポットは真紅の赤一色に交る。

バカでかい声を出して下卑た弥次をとばしていた酔客が連れ出されていった。

「サジスチックの極致！」

愛欲残酷ショウ。愛欲の愛撫！ 歓喜の声をあげる女体——

長い大きい垂幕の字を追いつら、私は息をのんだ。徳永昭三は、大きい眼をさらにギョロリとむいて、怒ったような顔で、舞台をにらみつけていた。

× × ×

豊かな黒髪が腰のあたりまで垂れ下っている。さっと現われて、ラテン調のミュージックにつれて、ローズ秋山は惜しげもなく、思わせぶりもなくサラリと脱いでいった。伸びた肢体、かたちよい臍窩、女豹の如き柔軟なやわ肌——。アラジンのランプの装置に、一帖のマットレス。赤くスポットされたその場

に、みるみる妖しい雰囲気の流れ始めた。

精悍さを秘めて、秋山夫人は激しく踊る。踊り疲れて、マットレスに伏したと見るや、くねくねと腰線が孤を描いて宙に踊り、曲線は媚と悦楽をなまなましく表現する。観客は既にヒソとして声もなく、洩れる溜息と、嘆息がしめやかに場内を圧している。

反転し、宙に曲線は舞い、煽情は荒れるが俚に狂う。女豹の肌は汗ばみ、全裸を纏うものは僅かにツンパ一枚——。恍惚の刹那が過ぎり、女体はマットレスに徐々に打伏し、激情の去ったあとの放心が夫人の眸に浮かぶ。端麗な容貌は、その感情の起伏をあますところなく伝えていく。既に観客は妖しい夢幻の前奏曲に没入して、せきとして声もない。

咄として、黒衣を裸に纏ったサタンが現われる。秋山美智夫であった。曲のテンポは崩れ、男は矢庭に女にのしかかってゆく。

粗々しく両腕を握り上げたと見るや、忽ち



にして、しなやかな革紐ともまがう黒縄が、女の両手を緊縛し、豊かな胸に、かかっている。女はのけぞる。苦悶と驚愕、逃げる女に縄は容赦もなく纏いつきしめ上げてゆく。太腿の左右にかかった縄をひきしめてしめあげた時、ポイントマイムを破って、始めて女は絶叫する。

「あッ、い、いたい……ヒーツ、やめて」

観客は一斉に、どきりと度胆をぬかれる。凄烈極みない、嗜虐はつづく。髪の毛を引き掴み、縄尻の黒縄を足首の一方にぐいと引寄せてきつく縛る。女はのたうち、激しく転々する。羽毛のくすぐり責めが、女の絶叫と悲鳴にも容赦なく続く。女の端麗なひたいに脂汗が浮き上り、黒い瞳は責苦に白く吊り上ってゆく。精悍な男の行動はなおもやまず続いている。責め！ 責め！ 責め！

の連続で、観客は咳するいとまもなく喰い入る様に、女の苦悶と絶叫を凝視する。

スポットに照らされて、銀色のむちが、キラリと赤く、白銀に光る。一曳！ ギャツと女はのけぞる。二曳！ 三曳、更に一撃、又



一撃、悶絶する悲鳴と、被虐の絶叫は館内にこだまし、その壮絶さに、観客は只管息をつめて見守っている。男の舌は女の乳を噛み、ぬめつく唇は、腿から脛へ、足指へと、蛇の舌のように這いなめずってゆく。

悦楽と苦悩の交錯した女の極限の表情。黒い瞳は激情にキラキラと光り濡れてゆく。

男は妖しく照らす燭台のローソクの炎に更に一本の太いローソクを近づけて点火する。

蠟涙が女の胸に、腹に、下腹部に、腿に、容赦なく蠟滴をこぼしてゆく。柔肌に点在する蠟滴はスポットの赤を浴びて仄黒くこびりつき、のけぞり、絶叫し、息も絶えだえの、女の苦悶と被虐の哀歎は頂点に達する。とみるや、男のふりかざした炎ゆらめくローソクが女の臀部の谷間に押し込まれ、一際はげしく女は絶叫し、谷間で消したローソクを手にした男の膝下で、無惨にも女は悶絶する。その女をいとおしみ、男は熱いくちづけを全身に浴せ乍ら、徐々に縄を解いてゆく。

点滴の蠟涙を全身に浴びて女は徐々に男の胸に抱かれ身を起す。

一転、さっと身を翻がえすとみるや、さっと並んだ秋山夫妻は、爽やかな一礼を残して幕に消えた。

ざわめきが観客席から流れ、このショウに酔っていた観客は、始めて人心地にかえり、あちこちで感嘆と恐怖の囁やきが洩れる。ぞろぞろと人々は出口に消え、ショウを終って残る客はまばらになった。

そして、私も徳永昭三も、又、その人々の例外ではなかったのである。真に迫る二十五分。

× × ×

S M プレイの夢幻の境地に遊んだ私と徳永昭三は、快諾を得た秋山美智夫氏と、ローズ秋山夫人の化粧落しを待っていた。

奥さんの協力的なる説得も大いにきいているらしく、唯、私はさしたる説明もいらず、こうして二人の出てくるのを、手を束ねて待ってさえおればよいのであった。

こんなに協力的な奥さんに、手土産ひとつ提げず、手ぶらでノコノコやって来た自分の迂かつさが今更面映ゆく感じられた。

楽屋の入口が開き、舞台上で見覚えのある秋山氏が顔をのぞかせた。奥さんが、この方達よと仰有って下さる。礼儀よく一礼して彼はすぐさま名刺を出した。私もあわてて「辻村隆」と名前と電話のみの名刺を交換する。待つ間もなくローズ秋山さんも出てこられたの

で打揃って早速表に出る。ほんの数分前までの、あの激しい汗みずくの熱演がまるで嘘のように、二人とも平静で息も乱れていない。かつて出会った青木順子の、あの楽屋での、へとへとに草臥れ果てた姿とくらべて、これは又何という相違のあることか――。

舞台化粧のため、眉を小さく落してある秋山夫人は、黒髪の長さを除けば、一見してそこらを歩く女性達の姿と、何ら交らぬ平凡なおとなしい、淑やかな女性に過ぎなかった。これがあの激しい鞭打ちに耐え、私達を惑乱におとし入れた御本人かと疑う許りである。秋山氏も思ったより小柄な、浅黒い肌の美男子であった。もみあげの長さが、芸能人らしい名残りを留めているといった印象を私に与えた。私が余り喋べらなくても、徳永昭三はてきぱきと段取りしてくれる。郷に入れば郷に従えというが、京都におれば彼にすべてを任しておいた方が無難らしい。閑静なこの近くに、対談にふさわしい場所は見当らなかった。急拠車を拾って、夜の街をどう走ったのか、彼の馴染の高級とんかつ料亭に車を横付けにする。奥まった小座敷が私達の会合の場所になった。お互にかなり空腹である。すぐく身の厚い大トンカツとビールで、私達のな



ごやかな対談は始まった。もう一回九時二十五分より第三回目の公演を控えているが、秋山氏は、私の注いだビールを快よく呑み乾していった。秋山夫人が、空になった私のコップに、愛想よくビールをついでくれた。仲居さんを遠ざけて、私達は十年の知己のように話を弾ませた。以下はその夜の対談の一部始終である。

.....

とき 昭和四十二年四月九日（日曜）

午後七時——午後九時

ところ 京都 とんかつ料亭 T

辻「お話の模様によると、秋山さんは九州の方のようですね」

秋「ええ、私は九州の福岡出身、妻は長崎の生れなんです」

辻「この種のショウをなさって、未だ余り日が経っていないんでしょう？」

秋「そうです。私は大体フロアショウの方なんです。最初九州で、ザ・アレキサンダーというダンシングチームを編成しまして、主としてアダジオをやっていたんです」

辻「アダジオというの？」

秋「御存知ありませんかね。つまりですね、パートナーの両足を握ってぐるぐる振り廻し

たり、肩にかつぎ上げたり、パートナーの体をからませたりする。

かなり強烈

な激しい踊

りの一種な

んです。ア

ランビアン

風のコスチ

ュームなど

つけて、幻想的にやるんです」

辻「ああ、あれですか。あれなら時々、テレビのニュースショウなんかでもやっています

が、やはりアクロバチックな要素も必要なん

でしょうね」

秋「そりや当然必要ですね。身のこなしが軽

くないと、とても耐えきれませんからね」

辻「奥さんとは、もう結婚なさってから、随

分古く……」

秋「ええ、足掛け六年になります」

辻「六年も……、それにしちゃ奥さんは随分

お若いじゃありませんか」



秋「そりや未だ若いですよ実際に——。妻が十八才の時一緒になったのですから」

辻「とすると恋愛結婚？」

秋「まあ、そんなところですが、私はもともと若柳流の名取りでした、当時家内が弟子入りして来たのです。まあそこで……」

辻「いやどうも、立入った事をおききして恐縮です。しかし秋山さんは、もともと日舞ですのに、アダジオのような洋舞に手をつけられたのは異色ですね」

秋「日・洋を問わず、踊りの基礎というものはそう変らないんですよ。現在やっているショウにしろ、すべて、踊りの手を使って、それをアレンジしてやっているんです」

辻「ショウの動機というの？」

秋「フロア・ショウでは、或る程度どぎついものを求められますので、英国からきたショウの夫妻が鞭の踊りをやっていたましたが、あれも一種のアダジオなんです。じゃあ我々もやってみようということになって始めたのが、こうしたサジスチックなショウの第一歩なんです」



辻「ムチはやはり、ああした先の細くて長いムチなんですか。よく奥さんが我慢出来ましたネ」

秋「そりゃ最初のうちは随分失敗して、度々妻の体に当てました。あれもなれてくると、一種の受身の構えになるんです。いつムチがとんでくるか分らないから、妻がボンヤリしている、それこそ、ほんとうに体を傷つけてしまいます。私の性分として、まやかしくてや中途半端ないい加減なことは嫌いなタチでして、鞭をふるのも力任せに真剣でしたからね。だからうまくうけないと、それこそ大変です。最初始めた頃は、それこそ妻の体は鞭の傷だらけで、紫色に腫れ上って、一週間ぐらい、夜になるとオイオイ泣いていたものですよ。だからフロア・ショウといっても、私達の場合、命がけなんです」

辻「ショウこそわが命ってわけですね。ところで奥さんの方はM性がありますの？」

秋「なかったですね。ショウとして割切ってやっていただけに、痛さも格別だったと思います。謂わば真剣勝負にも似たもので、二人のアウンの呼吸がピッタリしないとうまくゆかない」

辻「やはりコツといったものがあるんでしょう」



うね」

秋「勿論ありますね。このショウを他の人がやってるのを見ましたが、鞭打つ前に、むちを持つ手をちょっと動かすとか、肩を動かすとかして、合図するんです。そうすると、お客さんは、ハハン、これからムチ打ちをやるなとすぐ見破ってしまいます。だから私達は血のにじむ、そう、本当に名実共に血のにじむけいこを続けて、眼で合図する様にまで、お互いがなったのです。だから私は、たえず妻に私の眼を見ていると注意します。眼の動きでムチが飛ぶ瞬間、妻は身構える。ムチの動きと、体の動きが渾然一体となると、見る人にとってはどの様なすごいプレイでも出来るのです。そして痛くないのです。そこまでが仲々でしたかね」

辻「何しろジカに体に巻きつくのだから、ひとつ受け損じると大変だったでしょうネ。ど

んなことでも、その道で一応完成しようとするには、並々ならぬ努力が必要なんですネ。それで、私達のいう、Sですが、つまりサジズムのイニシャルですが、このSショウの動機は？」

秋「それが面白いんです。三十九年の暮でしたが、大きい小倉のキャバレーからの帰りみち、小倉の駅のガード下で、何気なしに夜店出しの出している奇譚クラブをパラパラとめくったのです」

(秋山夫人が傍らから、それは下関の駅のガード下ですよと訂正する)

秋「そうそう、下関駅近くのガード下でしたよ。古本屋に並んでいたのに三〇〇円とられました、その中に青木順子のSM劇のことが書いてあったのです」

辻「三十九年の十二月号でしょう」

秋「ええ、たしかそうでした」

辻「それなら、私が書いたカメラ・ハントの第一回のもですよ」

秋「えッ、あれを書かれたのは、あなたですか？ たしか辻……何とか」

辻「私ですよ」

(秋山氏、あわてて、もう一度私の差上げた名刺をポケットよりとり出し、マジマジなが



めて、あっといった表情)

秋「ああ、あなたでしたか。今更気がつくなんてボンヤリしていました。あの記事にはたしか青木順子さんのフォトものっていましたよ」

辻「最初の方に、向さんと青木さんと私の三人とで、奈良の奥山巡りした時の写真や、新薬師寺で奇クを眺めているところがあったでしょう」

秋「段々思い出しました。そうです。たしかに辻村さんでしたネ。今も大切にあの本を保管していますから、帰ってもう一度とり出して見てみますよ」

辻「それで……」

秋「その記事を読んだ時、正直いって、青木順子さんの、この種のお芝居で金になるのなら、自分らにも出来ぬことはない。一度やってみようと妻と相談したのです」

辻「ははあ、奇妙な因縁ですな。とすると、秋山夫妻のSシヨウをうんだのは、私のカメラ・ハントの青木順子の記事ということになりそうですね」

秋「正に私達Sシヨウの生みの親ですかネ」  
辻「あれを第一回として、爾来、今日に至るまで、延々二年半、ずっと各人各様のハント

を書いているんですよ。奇遇だなあ」

秋「何しろ巡業の先々で、S傾向のファンの方が沢山見えられ、よくお目にかかるものですから、辻村さんもそのお一人ぐらいに思っていたのですよ。じゃあ、私も大いに勉強になりますよ」

辻「だけど、青木順子さんと、あなた達は随分ゆき方が違いますよ」

秋「そうなんです。あのお二人は、お芝居なんでしょうね。私はシヨウなんです。シヨウに必要なスピードとスリルとスマートの3Sですが、これを出さなくちゃ、ダラけてしまいます。ミュージック系統の、こうした劇場にしろ、フロア・シヨウにしろ、お芝居をやったんじゃ弥次がとんだり、ダラけてしまうんです。やり出した以上、私はこの3Sについて、随分研究してみました。その結果が今夜御覧になった様な形式になったんです」

辻「たしかに秋山さんの場合、シヨウというそうした雰囲気の中にとけこんでおられますね。その点青木順子さんののは向一也さん自作自演のお芝居だから、それだけ見にくる人は満足していても、全体のバランスが、あのお芝居でくずれて、水と油の異和感是否めませんね」

秋「私共のやることを見に来るお客ばかりだとよろしいが、そうじゃない。中にはストリップをみにくる客もいますからね。その中で異和感を感じさせない様、全体のシヨウの中に溶けこまねばウソだと思います。だから私共にとっては、一回、一回が真剣なんです」

辻「青木・向のコンビの場合、お二人は純然たるSとMでしたから、舞台を終るとヘトヘトになっていました。そして舞台でのようなSMのプレイが、二人のプライベートな生活にも続行されていた様です。秋山さんの場合、奥さんも案外ケロッとなさっていらっしやる。何かそこに違いがありますが、どういうことですか」

秋「この種のシヨウをやっている以上、私がS、妻はMといった性格を内蔵しているということは否みません。しかしですね。辻村さんが今夜舞台で御覧になったような、ああしたプレイを、もし真実にやっているとしたら私達の体が保つとお考えになりますか？日に三回、一カ月間、次々巡業して廻って休みなしなんです。もし本当に鞭打ち、私のS性をその尽露呈して舞台でやったとしたら、恐らく三日とはもたないと思います」

辻「当然でしょうね。とはいえ、あの迫真力



のある、何んていうか真に迫ったプレイが、演技であるとは、観客誰一人思わないと思います」

秋「だから、高いお金をとって見せるのだから、尚一生懸命研究して、本当らしく本当らしく振舞うために、私達それなりに努力しているんです。辻村さんはあれをどう思われましたか？ 演技とみたか、本当にやっていると見られましたか？」

辻「私は過去、ハントで実際鞭打ちもし、最近一カ月許り前にも、関谷夫人という、鞭打ちを喜ぶ方に、随分ムチを振いましたから、ある程度わかるつもりですが、正直いって、演技と思いました」

秋「どんな点で？」

辻「最初に、奥さんが出てこられて踊られた時、殆んど全裸で踊っておられたが、鞭の傷痕は見当らなかった。それが第一。次に奥さんがかなり強烈に悲鳴をあげられ、絶叫されたが、あの程度の縛りなら、それ程でもないと私自身沢山の女性を縛ってきて知っていましたから、第三に、ローソク責めの場合、あの高度から蠟涙を落すと、体に落下するまでに、ある程度さめていて、さして熱くないということですよ。でも、ポイントタイムを破っ

て、奥さんが突然、あッ痛い——と叫んだ時あれには吃驚しました正直いって——。しかし何んでしよう、あの鞭、当れば相当こたえるんでしよう？」

秋「三本の銀の麻縄を撚りまして、ゴムのテープを巻き、更に銀色のテープを巻いて、太さは人さし指くらいあるし、すぐく固いんです。真ともに当れば、皮膚がはじけてひどいことになりますね。でも五回に一度、十回に一度は、振り上げて打つ手が少し狂って、妻の体に当ることがあるのです」

（傍らから秋山夫人が胸を抱えて、昨日の第二回目の公演の際、乳首に当って、今もズキズキするのだと仰有った）

秋「ローソクの落滴にしても、やはりあちこち赤くなっていますよ。熱が入ると、ついローソクの位置が下っているんですね」

辻「そりゃそうでしょう。当然熱いですものネ。でも、あのおしりの股の間でローソクを消すのは大胆ですネ。うっかりやると火傷しますよ」

（夫人傍らから、今まで度々火傷して、それこそ歩けなくなった日もあると注釈を入れられる）

秋「軽い程度の火傷ならザラですネ。でも演

技として、あそこまでやらなくちゃ嘘です」

辻「思わず息をのみますものネ。ところで奇クはよく読まれますか？」

秋「連続しては読んでいませんが、以前読んだもので、辻村さんの三十九夜物語ね。それに『花と蛇』だったか、あれはかかさず読みました。最近のものは忙がしくて余り読んでおりませんが——」

辻「最近グラビアもなくなりましたが、以前の本で、よく巻頭を賑わしたグラビアの緊縛モデルについて、あれはどうですか？」

秋「一言したいですネ。緊縛はいろいろ趣好をこらして大いに参考になり、御立派と思うのですが、モデルの表情がいけません。苦悶というか、被虐の感情が殆んど出ていないのですネ。ひどいものになると笑っているのすらありましたが、あれはもっと研究の余地があるのじゃないでしょうか」

辻「それはよく言われることですが、何しろモデルさん達、本職じゃないでしょう。だから何んていうか全然演技が出来ない。唯こちらのなすが倅に、縛られているといったものが多い。その点、前月号にのせたカメラ・ハント『甘い鞭』の、関谷夫人の表情は是非みて戴きたいですネ。これはホンモノですよ」





秋「是非拝見させて下さい。まあ、私共のこんな特殊なショウですから、一般向きしないかも知れませんが、演技を買ってくれる人もかなりあります。東京で公演中、『人類学入門』って映画の、エロ事師になった小沢昭一さんですが、あの方が訊ねてこられて、いろいろと演技の面について話しましたが、とても立派な方でした。それと大阪で、これは大会社の社長さんですが、絹貼りの巻物に書いた昔の責めの絵をみせて頂きましたが、これなどすごい迫真力がありませんか？」

辻「伊藤晴雨じゃないんですか？」

秋「晴雨の絵は私も知っていますが、全然画風の違う人です」

辻「私が緑猛比古のペンネームで、そうした昔の責め絵かきの絵師のハナシを書いたことがあります、昔からかなりあったそうですネ。見たいなあ、そんな実物を」

秋「一度機会があれば、先方の御諒承を得て御紹介しますよ」

辻「ええ是非。ところで秋山さんの舞台で使っている縄ですが、ライトを浴びると、恰度黒いなめし皮の紐のように見えたのですが、一体どんな縄なのですか？」

秋「綿ロープじゃないんです、かたく燃った縄なんです、最初白かったのが、汗にまみれて、よごれてあんなに黒くなっちゃったんですよ。そろそろ使い馴れて柔かくなると思いますが、一向柔かくなりません」

辻「縛りはかなりきつい様ですが、奥さんの手首や腕にカタがつきませんか？」

秋「つきますね、君手を見せてあげて御覧」

(秋山氏にいわれて、夫人は私の前へ両手を差し出したが、手首にかなり縄の緊縛の痕が残っていた)

辻「奥さん、日に三回ずつ縛られて、どうです、それに対して被虐的な欲びを覚えるようになりませんか？」

(夫人「余りありませんのよ、それが……。なんていうのでしょうか。演技として割切っているからなのでしょうね」)

辻「秋山さんのプライベートの生活においてSMのプレイはなさらないんですか？」

秋「やりませんね。その代り舞台で力一杯やりきますから、三回公演となると、それこそ、精力を使い果してしまいます。舞台での一回、一回が絶対気のゆるせない真剣勝負ですからね私達の場合。だから正直いってそれどころじゃないというのが本音です。ストーリーパーのある女性から聞いた話ですが、青木順子さんは、私生活でも相当の、舞台以上のプレイをするといって、同宿したその人が驚いていましたが、それでは本当は体がもたないと思います。精魂使い果して、舞台上で演技したら、もう余力のないのが、私達ショウをする人間の本来の姿じゃないでしょうか」

辻「二人きりで思い切ったプレイをやりたいと思いますか？」

秋「思う時もありますね。しかしそれは、こうしたSショウから足を洗って、もとのアダ

ジオか静かな生活をした日の時でしょうね。なまなましい毎日の、こうしたショウの記憶が懐かしくなって、それこそ力限り、根限り妻が悶絶するまでやるかも知れませんが、まあ今の処は考えられない事です」

辻「縛り方もスピードがありますが、あの緊縛は自分でお考えになったのですか？」

秋「そうです。早く、そして緊縛出来る方法



を、あれこれ工夫してみました」

辻「奥さんをケイコ台にして？」

秋「何百遍となく、あれこれ縛ってみまして結局、今のスタイルに落付いたのです」

辻「あの股縛りの場合、両腿にかけてありますが、あれだと遠くからみてはつきりしないですね。いっそうしろから廻して股縛りにしてみても如何なんですか？」

秋「やってみたこともありますが、何しろ動きが激しいものですから、あれをやって痔になったのです。それからあの方法はやめました。勿論何か新らしい、緊縛方法があれば、ドシドシとり入れて行きたいとは思っているのですが——」

辻「何かその点でアドバイス出来ればいいのですが。ところで秋山さんの場合、こうした劇場出演は、いつが始めてなのですか？」

秋「フロアショウとして、こうしたS的なものは昨年七月にやりました。実際に劇場に進出したのは、昨年十月、大阪のダイコーミュージックが皮切りです。あの時、大阪の新大阪新聞の記者がインタビューに来て、四十一年の、十月二十六日の夕刊に、相当大きく、派手に私達のことが出まして、それから私達のショウがかなり評判になり始めました」

辻「私も同好の人から、あの新聞の切抜きを送ってもらいましたが、随分派手に書き立ててありましたネ」

秋「ええ、まあお蔭様で。その後又時事何とかいう週刊誌の記者も来たのですが、記者根生丸出しで、書いてやるといわん許りの態度なので、断わりましたのに、あとで聞いたらチャンと書いてあったそうです。いい加減な与太ッ八をネ。真剣にアドバイスしてくれるファンの方は有難いですが、妻の素顔みたまや、冷かし半分もありますので困ります」

辻「最近は何の読者からも随分投稿がありまして、今年の二月号の巻頭では、ダイコーミュージックへ三回も通ったという熱烈なファンの人もありましたし、三月号にも出ています。五月号では鳥取県の方が投稿しておられて、お負けに「アラジンの印象」と題してムチの股責め、縄による股責めの二態のスケッチなどのせておられる状態で、通信はなくとも全国でかなり同好者間では評判なんですよ」

秋「それはそれは、私は全然知りませんでしたが、次回にでも、その掲載の文を是非拝見させて下さい」

辻「見る人によって、受取り方も違うのです

が、その五月号の鳥取の方などは、秋山さんが夫婦なるが故に、あれまでのプレイが出来たのだといっておりますが、それは或る程度真実ですネ」

秋「妻ですからやれるのでしょね。これが他人の人と組んだ場合、ここまでやれたかどうかは私も疑問に感じます」

辻「我々同好者の眼からみれば、毎日毎日プレイに耽溺して、しかもそれが生活の糧になっているなんて羨やましき限りのようにいっています……」

秋「とんでもない。毎日毎日が骨身を削る思いです。妻は今年一杯はつづけるが、それでもう止めたいといっております。私も或る程度のまとまったものが出来れば、九州に帰って芸能社を設立する予定でおります。私達まだ未だ若いですから、夢も希望もあります。青木順子さんのように、いつ迄もつづけてゆく気持はありません」

辻「同好者は淋しく思うでしょうが、秋山さんのそうした前進しようとするお考えには賛成です。青木順子さんも、土地によっては牧野ナオ子とかいう変名でやっているそうですよ」

秋「そうですか。私も最初は彼女のこうした



S的なお芝居にヒントは得たのですが、ダイコーでやって以後、忽ちよく似たショウが出来まして、それがほんとのインスタントの、素養も下地もない、唯、目先だけの似せたものでやるものですから、大分迷惑しました。いずれ長続きはしないでしょうが」

辻「大阪でもSショウまがいのものが、よくかかり出しましたが、観客は正直です。一度は欺されても、二度とは欺されません。その点、秋山さんの場合、ダイコーの当初にくらべて、今はすぐ演技が進歩しているとの事です。ダイコーの初演を見にいった、徳永氏の言葉だから間違いないでしょう」

秋「精々可愛がって下さい。よりよいものに仕上げてゆくつもりですから……」

辻「この次には、編集長も引っ張ってきますから、よろしく」

秋「四月十日で一応ここを打上げて、五日間はダイコーに出まして、それから五日間は鶴見第一ミュージック、四月二十一日から月末まで、又この大宮劇場で御厄介になる予定です。五月一日から十日間は千葉県松戸市の明星劇場、十一日から十日間は船橋市の『淀君』が決定しております。奇巧のファンの方々や、辻村さんの仲間の方々にもよろしくお伝

え下さい」

.....

時間は午後九時前に近かった。九時二十五分より始まる第三回目の公演を控え、急拠私達は、秋山夫妻をタクシーで元の大宮劇場へと送った。

別れ際、秋山夫妻は礼儀正しく、私達に低く頭を下げ、それから急ぎ足で楽屋口へと消えていった。

私は雨中をタクシーから降りて、劇場主の奥さんの挨拶にいった。

「どうでした？ うまくゆきましたか——」

奥さんは最後まで協力的で、心配してくれた。

「ええ、お蔭様でいろいろと……」

「そう、本当によかったわね。貴方のお書きになった雑誌、発行されたら是非みせて下さいね」

「いいですとも」

私も勿論その気でいた。この奥さんが秋山夫妻の使用するローソクのことについて、パリンの使用を提唱したり、色々と蔭の援助を与えておられる事は、彼女の人柄からも推測された。

秋山美智夫・ローズ秋山夫妻こそは、『シ

ョウこそわが命』と許り、今日も明日も明後日も、舞台で必死にサディズムショウと取組んで、私達同好者のために、プレイの滋味を満喫させてくれる、数少ない稀有のショウマンの一人であると、私は二時間の対談の間から、泌々と感じとった。

既に九時を過ぎて、西陣の街は暗く、大徳寺の森が黒々と空を蔽っていた。

今日一日世話になった徳永昭三とも別れ、私一人、対談のすき間に撮った、対談風景の数枚のフォトを抱いて、雨中をタクシーをとばして一路京阪三条駅へと急いでいた。

秋山夫妻に幸あれかしと祈るや切である。

.....

秋山夫妻との対談を果したのでトップを空けておいて呉れという電話を貰ったのは十日の朝であった。まだ亢奮のさめやらぬ辻村氏の弾んだ息づかいを電話口に聞いて、私は雨の中の花見と洒落れて昨夜飲みあかした二日酔いの自分を恥かしく思った。まくしたてるような氣勢に押されて四月十二日、秋山夫妻を誘って、お座敷で残酷ショウを再演することを約束させられてしまった。辻村氏の執念というべき秋山ショウの取材が、ここに結実したのだった。

△箕田記▽





## 鬼六談義

## 化物の話

## 団 鬼 六

女性の肉体は話題になるが、男性の肉体はあまり話題にならない。つまり、女体は複雑微妙、全身これ性感帯ともいえるが、これにくらべると男体は簡単明瞭、性感帯もそのものズバリで、いや、何も肉体に限った事ではなく、精神面においても、男は単純、女は複雑だと常識的には考えられるようである。

ところが、この原稿を書いている三時間

ばかり前、私はピンキリ会の例会に出席していたのだが、——ピンキリ会というのは、奇人を通して私の友人が結成した奇妙なグループで、それには、サラリーマン、BG、街娼、トルコ嬢、泥棒、エロ作家、大学教授等、浮世におけるピンからキリまでの人間同志の親睦会みたいなもの——その例会で、たしか、アルコール中毒の、大学教授だと思いが、そういうつまらない話をトルコ嬢のA女

史に向かっていい、

「男性の肉体が如何に単刀直入で、味もしやしらもないって事は、あんたが一番骨身にこたえて知ってるだろう」とつけ加えた所、トルコ女史は、冗談じゃないわよ先生、と鼻に小皺を寄せて笑うのである。

A嬢は、トルコ風呂のスペッシャル歴十年のベテランで、トルコ風呂の草分け時代から活躍し、今では自家用車を持った四十



近い大姐御であるが、彼女にいわせると、大学教授のいうのは、むしろ逆で、女性にくらべて男性の方が更に複雑微妙、いや、複雑怪奇だというのであった。十年もトルコ風呂で働いて来て、得体の知れぬ異次元の世界に踏みこんだように、ますます男の肉体がわからなくなったと彼女はいった。

それから、私達の所望するのに応じて、彼女は、三十分ばかり、男性の肉体講座を開く事になったのだが、女は魔物だと俗にいうが、男の方がよほど魔物だという彼女の説も成程とうなずけるものがあつた。

要するに彼女は、男性の中には、如何に多数の肉体的変人が多いかという事をいつてるのであるが、SとかMとかは、まだまじな方で、顔の上にまたがって小便してくれとか、全身に洗濯ノリをぬりつけてくれとか、その他、一寸常識では考えつかない奇抜な方法を要求し、そこへは全然触れないのに自分の意志だけで発射してしまうのも少くないというのである。それを一つ一つ話しては大変だからここでは触れないけれど、三人に一人は、こうしたおかしいのが来るそうで、それへ触れさせずに思いを遂げる男性を見ても、男性の性感帯が

そのものズバリだという説は成り立たぬと彼女は力説するのであった。

この種の客を他のトルコ娘は嫌がるようだが、自分は金になるなら何でもやる主義で、どいつもこいつも片っ端から相手にした、とA女史はいう。とくに、こうした客は、他の客よりも多額のチップを必ず置くから、腕によりをかけたそうだと。ところが、腕によりをかけるにしても、かけようのない客もいるそうだと。

行儀よくベットに横臥して心もち足を開き彼女に対し、自分のそれだけを眼をそらさずじつと見つめていてくれ、と要求するのがいるという。じつと見つめられる事によって、次第に硬化し、充血し、ドカンと発射してしまふというのだから、何だか曲芸をやりにもトルコ風呂へ来たような客だが、彼女にしてみれば、客の足元の方へじつと坐っているだけでチップが貰えるのだから、これ程、楽な客はなく、見ているとみせかけて、その間、こっそり週刊誌を読んでいるそうだと。だが、それよりもまだ、楽な客がいるというのだから驚く。

その客は、自分に対するサービスは何一つ彼女にさせず、ベットの上へ彼女を寝かせ、

全身マッサージをしてくれるそうで、それもいやらしい事は絶対にせず、彼女の肩のこり腰のこりを汗水流して揉みほぐし、丁寧な言葉を使って、どうです、楽になったでしょう、それでは僕、帰ります、と服を着始めるのである。彼女は、彼が洋服を着てしまふまで、いい気持で、ベットの上に寝ているそうである。それでチップをくれるのだから、全く、彼女にとっては、嬉し涙が出る位、神様のように有難い客であるに違いない。

ただ、A女史にとって残念な事は、この種の変った客達は、いくらサービスしても同じトルコ娘を指名してくるという事は滅多にないらしく、新しい場所を求め、移動していくという事であつたが、それでも、彼女のもとへは次から次とこの種の新手の客が現れるので、その数の多いのにあきれると共に、男という者がますます不可解なものに思われ出してきた、というのであつた。

エロ作家なら女の肉体ばかり研究せず、少しは、こういう男の肉体の神秘を研究してはどうか、と居合わせたエロ作家連、トルコ女史に意見された形になった。女性よ



り男性の方が複雑怪奇に出来ているというトルコ女史の意見も成程とうなずける。いかえれば、女性より男性側に性的変人が多いという事だが、たしかに女性側のアブを探してみても、SとかM、それにせいぜいレスピアン程度なもので、トルコ女史の話してくれたような奇想天外なものはそう見当らないようだ。

このピンキリ会のメンバーで、猛烈なレスピアン・ラブをしている女性コンビがいるが、女の男役は、スペインの闘牛士みたいな頭の刈り方をし、女の女役（変ないい方だが）と片時も離れず、道を通る男と口をきいたといつては、女の女役を女の男役はひっぱたく、というすさまじい関係をつづけている。だが、これだって、男側のレスピアン・ラブにくらべれば生っちよいもので、数においても、スケールにおいても到底、太刀打出来るものではない。如何にうまく女性が男性に化け、立小便などやってのけても、男性が女性に化けるのにくらべれば、下手くそである。たとえ、完全な性の倒錯者であっても、男に化けた女の言動を仔細に観察すれば、忽ち正体を見破る事が出来るが、男が女に化けたとなると

まるきり、女以上に女になってしまふのがある。

或る有名な美しい男娼で、これは実は男だと聞かされても絶対に信じられず、それである男が、彼女、つまり、その男娼をためしに買い、一諸に風呂に入り、一諸に寝たところそれでもやっぱり男とは信じられなかったという話がある。性的化物性は、到底、女性は男性に及ばないという事である。

今、話したトルコ女史も物好きな姐御で、この種の客がやって来る毎に、色々と話しかけ、巧みに相手の職業を聞き出すのを趣味にしているらしいが、一番多いのが教師と医者だといった。トルコ女史のそんな話を聞いているうち、私は、何か、ぞっとするものを覚えた。

一週間ばかり前であったが、私は、田舎高校で教師をやっていた頃の教え子、B子の結婚式に出席した。B子は、クラスで一番の美女であり、その土地で開業している、内科医の息子と、見合結婚をする事になったのである。新郎も父親と同じく内科医で、これは、正しく良縁だとB子の親族達も大喜びであったと聞く。

B子は、私が、三文エロ作家に墮落してい

るなどとは夢にも知らず、招待してくれたのであろうし、出席した私を見て、涙を流さんばかりに喜こんでくれたのであるが、披露宴の間、私は、B子の隣に坐る新郎の顔ばかり気にし、こいつは、何だか知らないが、変なくせがありそうだと、日本酒をガブ飲みしながら感じとったのである。白いのっぺりした顔、眼鏡の中で、神経質そうに眼ばたきをくり返しているねっとりした瞳孔。SかMかそれとももっと風変わりなものかわからないが、一種の性的変人であるという風に見たのだが、今、トルコ女史に医師には変人が多いなど聞かされて、俺のCANは当たったのかも知れぬと何だか嫌な気分になったのである。

クラスで一番美人で聡明な娘が、性的変人と見合結婚してしまう——私も、一種の変人だから、こういう筋立てには興味を覚えるものの、それが自分の身内とか教え子とかがからんでくると大分事情がかわってくる。私のようにおとなしい空想的なマニヤならいいが、実践的なえげつない奴の手にかかったら可哀そうだななどと、おかしい事に、妙に心配になってくるのである。

それで、今、ふと考えるのだが、あの見



合結婚という制度は、どこか一本釘が抜けてるのじゃないだろうか。何も見合結婚に限らずとにかく結婚というものは考えれば危かしいもので、第一、赤の他人と一緒になるのだから（当たり前だが）相手が裏を返せば、どんな魔物だかわからない。温良淑徳に育った女性が、淫靡残忍な男性と一生共に暮さねばなくなるかも知れないのである。とくに見合結婚のゴールイン前には、男は自分の化物性を隠し、何だかんだとうまい事いって女を安心させ、結婚後、どえらい目に合わせてやるぞ、と考えてるのだから、詐欺みたいな話で、花と蛇の中で川田が美津子を誘拐した手口と、五十歩百歩の感がしないでもない。そう考えると何か世の中の女性という女性が可哀そうに思われ出す。

見合の席上で、貴方の御趣味は何ですかと聞かれて、女性を丸裸にして縛り上げ、羞恥責めにかけるのが僕の趣味です。とはよほど勇気のある男でもないえる事ではないが、さりとて、男性をインチキばかりとはいえない。女性だって、随分、インチキがいる。と、これは去年、見合結婚した私の友人の話だが、彼は挿絵画家で、女体美に

ついては一家言を持っている男なのに、彼の新妻は、おっぱいがぺちゃんこで、腹部にはイギリスの国旗みたいな盲腸の傷跡があり、それに、どういうわけかヒップにイボが七つもあるという。おまけに腰骨が突っ張っていて、密着するとこっちの腰が突きまくられて痛くてたまらず、いや参った参った、と我々仲間にこぼすのだが、見合の時、彼女が、ヒップにイボが七つあると正直に言えば、こっちも考えたのに、と歎いている。大体、見合なんてものは、両者丸裸になって一緒に風呂へ飛びこみ、お互にその部分の見合をするのが、本当の見合だ、などと彼は愚痴っていたが、笑い事ではなく、たしかに、それが理想的な見合といえるだろう。

今、私は、新宿の旅館の一室に坐り、机の上にならず高く積まれた白紙の原稿用紙を気にしながら、この談義を書いている。こっそり旅館を抜け出して、ピンキリ会に出席し、い気分酔っぱらって戻って来、明日の昼までに仕上げねばならないピンク映画の台本にかかろうとしたのだが、十日間で脚本三本というどえらい仕事を強制されたため、心身ともに疲労しているのか雑念妄想がわいて来て困る。気分転換、調子を整えるため、鞆の底

にこっそり忍ばせて来たKK誌を拾い読みしているうち、ふと、談義を書く気分になってしまったのだ。

この旅館を抜け出している間に、この部屋へ、ピンク映画の女優や男優が何人か遊びに来たようである。机の上には、彼等が陣中見舞として持ってきてくれたらしいサントリーのウイスキー瓶や缶詰類が置かれている。ウイスキー瓶の上から三分の一ばかりの所に、テープが張りつけてあり、これ以上、飲んでは駄目、とピンク女優P子の字で書かれてある。ウイスキーを飲みながら原稿を書くという悪癖を持つ私のために、サントリーを持参し、飲み過ぎたら前後不覚に寝入ってしまう私のために、テープを張って、思いやりを示したのだろう。これは有難いと、早速、栓をあけ、グラスに注ぐ。深夜の深閑とした旅館の一室で、一人ウイスキーを飲むのはいいものだ。疲れているだけに酔いの廻るのも早い、こうした気分、脳裡に浮かび上るとりとめない事を書きつづるのは私の好む所である。

書き損じの原稿紙の裏に、一つ、よろしくお願い致します、と男優のK君の字が書



いてある。そうだ、K君を次の映画に出す約束だったわけ。

こうしてピンク映画の仕事を始めると、よく女優男優が私の好物を持って、陣中見舞に来てくれる。時には、私と一緒に徹夜し、鉛筆を削ってくれたり、辞書を引っぱってくれたりするのだが、要するに、彼等は、今度の映画の中に自分の役があるのかないか、それが気がかりで、偵察にやってくるようなものだ。それに、この種の映画は女優にくらべて、男優の出演料は馬鹿に安い。主演クラスでも五万円、普通は二、三万円というお話にならない安いギャラであるから、月に二、三本出演しなければ食ってはいけない。

K君も三万円の役者だ。近々に細君がおめでたなので、がんばって稼がなくてはならない。それで、とぼしい小づかいの中からいくらかを捻出し、次の映画主演のP子嬢と一緒にウイスキーや食料品を買いこんで来たものと思われる。それだけに、何かほろ苦いウイスキーの味だ。こういう風にして、頼まれた役者を途中から脚本の中へねじこんで行くので、最初、出演者、八人であったものが、十人、十一人とふくらみ

出し、製作会社の方で、うろたえる場合がある。脚本の方でも、役者のつけ足しが増えて段々、奇妙なものになっていき、私自身、閉口してしまう時があるが、この種の映画は、落ちぶれた監督や食いつめた三文役者の救済事業の役割をも果たしていると私は思っているから、出来る限り、弱った奴は寄って来いと愛すべき三文役者の面倒を見ているつもりなのだ。

先程、KK誌を拾い読みして、ふと見つけたのだが、ピンク映画のルール違反がどうか、エロダク作家のレベルがどうか、対社会性のある主体性を確立せよ、とか、ドラマツルギー云々と、気持良さそうにピンク映画を批判している偉せな人がいる。冗談じゃねえ、二百万そこそこの予算で作る映画の脚本を丸一日で書き、撮影日数はたった一週間だぜ、といった所でわかる筈はないだろうが、お前さんのように、ピンク映画を見に来るレベルの低い人に、こっちが調子を合わせてやっているとえば、案外わかりが早いかも知れない。

夜の徒然草の筆者に、ルール違反を平然と描き出す無神経なレベルの低いエロ作家ときめつけられて、私は腹を立てているのではな

い。事実、その通り、私はレベルの低いエロ作家なのだから。しかし、ピンク映画を見て、そのドラマツルギーがどうか、花と蛇を読んで、その文学性がどうかをいう人の神経を、私は哀れむだけである。制作者自身、文学とか芸術とかは考えていないのだ、というより、そうしたものを持つ事を不道德だとしている。といっても、ピンと来ないであろう。つまり、作者としては、花と蛇を読む人、ピンク映画を見る人の官能をくすぐる事に努力しているのだから、全然、官能的にうづく所がなかったといわれれば、これは、申訳ないと恐縮するものの、文学とかドラマツルギーとかを持ち出されれば、見たり、読んだりするのもは他にいくらでもあるだろうと顔をしかめなくなる。

極端に言えば、ピンク映画は、ベッドシートのさわりだけで、いいのだと思うのだが、それでは映倫や配給会社が受けつけない。それで私の如き、ルール違反を平然と描き出す、無神経で厚顔なエロ作家が必要となってくるのである。

そんな事を気持良さそうに書いている筆者は、一体、KK誌にあって、どのような



文学性を持っているのかと、始めて、夜の徒然草なるものを読んでみたのだが、何々氏と何々嬢宛の通信、いやはや、恐れ入った。KK誌は三百五十円、安くはない値段だ。それなのに読者通信が本文に乗りこんで来る程、寄稿者の数が減って来たとは情ない。SM小説にしろ、SM随筆にせよ、SMシナリオにせよ、三百五十円の面目にかけて、編集子はもっと寄稿者にハッパをかけろ。

かなり、私は酔っぱらって来たようだ。どこから話が脱線し、KK誌批判になってしまったのだろう。そう、ピンク役者、K君の話をしていたっけ。K君の細君は、間もなく、おめでただという。彼女は京都のソバ屋の娘で、上京して、お茶づけ屋をやっている姉の店を手伝っているうち、K君と知り合ったのである。私も何度か、そのお茶づけ屋に出入りしているので、彼女の娘時代からよく知っているのだが、如何にも京都のいとはんといった感じがびったりの眼の細い、人形のように色白の華奢で小作りの美人であった。どういう事がきっかけで、K君と個人的に親しくなっていたのか知らないが、最初、私は、K君が彼女

と一緒にいるという事を心良く思わなかった一人である。というのは、私が彼女に秘かに思いを寄せていたからではなく、どう見てもK君と彼女とは釣合がとれなく思うからであって、人形のように、おしとやかで無口な彼女に対し、K君は、いわゆる精力絶倫型で猥談が得意、昨日は、どここの娼婦と明方まで戦い抜き、ぐの音も出ぬ位にグロッキーにさせてしまったという事を自慢する阿呆な所があり、アルコールが入れば、×××××といういやらしい言葉を、ところかまわず連発するのである。

こういう種の野卑な男と京都市育ちの温良な彼女との性生活は、空想上では私好みのもので、このニューアンスを花と蛇の中に随分と盛りあげたものだが、実際では何か痛ましく彼女と次第に親しくなっていくK君をふと腹立たしい思いで横目で睨んでいたものだが、彼女は遂にK君とゴールイン、その後、何度か彼女とも逢ったが、彼女の可愛い容貌に一点のかげりも見出し得ず、愛くるしい笑顔も失われてはいない。つまり、円滑に夫婦生活が営まれていると見るべきであって、明け方近くまで娼婦をヒイヒイ泣かせたというK君の精力を、あのおしとやかな彼女が夜毎

さばいていると思うと、夫婦だから当然だというものの、何か不思議な気分になってくる。

何時であつたかK君を、酒場へ連れて行き、しこたま酒を飲ませて、彼が例によって、×××××をわめき始めたのを見計らい月夜の晩には尺八というが、君は細君に吹かさせる時もあるかね、などと我ながら浅ましい質問を發したところ、そりゃ先生、夫婦だから当然じゃありませんか、と吐かしやがった。あの可愛いおちよぽ口で、K君のそれを——と思うと、阿呆な話だが、何だか羨ましいような情ないような気分になって来て、こっちもしこたまウィスキーを飲み、K君につづいて×××××を叫んでしまったのである。

今は引退してしまつたが、昔、私達、エロチックグループで後援していた十両のアソコ型の力士がいて、年に何度か、彼を囲んでチャンポン鍋をつつく会合を持っていたが、その力士には、必ず愛人が付添って顔を出していた。まだ肉体の交渉は成立していないそうで、幕内になったら結婚するとかいつてたが、力士の愛人は芸者の置屋の娘で、鶴のように細い女であつた。そう



して、チャンポン鍋を皆んなでつつき合っている間も、岩のようにごつい力士の背中を彼女は何度もたたき、大きな、大きな、と俾せそうに笑っているのである。

それがもし逆に、アンコ型の力士のような体躯の恋人を持った男なら、そんな俾せそうな顔は出来ないだろう。たとえ、横綱級で相当な収入があるといったとて、やはり、御免蒙って、コソコソ逃げ出すに違いない。力士とその恋人が引揚げたあとで、私達は、あの力士の恋人は、自分が彼の愛を受入れる場合、ひょっとして、押し潰されるのではないかという事を全く気にはしていないようだと、感心し合ったものである。

宴会などで、よく、昨夜三回、今朝また二回。と自分の精力絶倫ぶりを自慢して人に聞かせている男がいるが、私は聞いて、そんな事には一つも感心しないけれど、それをだまって受け入れた——いや、色々と声ははりあげる事と思うが——その女房族に感心するのである。

そういう事を考え合わすと、前述のトルコ女史がいった女より男の方が化物だという説も少しはぐらついて来て、女だって、

性的化物という点では、男にひけをとらないじゃないかと考えられるのだ。男が化物だといっても、その化物と五分に対抗、対戦し、中には、この化物を飼ひ馴らしてしまう女房族もいるのだから、その点、男より一枚上の化物であるような感もするのである。

K君の細君にしろ、力士の愛人にしろ、見かけは、吹けば飛ぶような弱々しい体つきであるのに、精力絶倫男や見上げるような巨体を相手どって一歩もひけをとらない。彼女達のなよなよとした肉体のどこにそのようなエネルギーが隠されているのか、これはまさに化物だと思えるのである。

週刊誌の人生相談を担当している先生に酒の席で聞いた事だが、人生相談へ相談を持ちこんでくるので一番多いのは、亭主の浮気を歎く女房達だそうで、それは結局、亭主が自分に対して、あまりにも愛しかたが足りないという事から不満が爆発しているのが多いという事だ。少々、浮気したって、女房に充分性欲の満足を与えてやっていけば、女房のヒステリーが起る事はないという。ところが、随分と長く人生相談をやっているが、亭主が自分の体を抱き過ぎて困る、何とかならないだろうか、という相談は一度も受けた事はな

いと、その先生はいうのであった。牛肉、生野菜を毎日喰らい、朝昼晩、一回ずつ行わねば頭がボヤけて困るという精力絶倫の男と一緒にあった女でも、何年かたつうちに、最近、亭主は回数が減った、どこかに女が出来たのではないか、といらいらし始め、亭主に当り散らし、肉体攻勢をとるのだから、女は魔物ですよ、と先生はいう。

魔物といえば、もう大分前の事だが、新宿二丁目附近を、夕方一杯気嫌でふらふら歩いていたら、顔見知りの××組チンピラ数人が、お下げ髪の少女を連れて歩いて来たのに出喰わした。以前もこの不良グループは、やはり、この娘を連れて歩いてたようであったが、その時、彼女はセーラ服を着ていたようである。彼等は、私の顔を見るや、「よう先生、マワシの仲間に入らねえか」とゲラゲラ笑いながらいうのである。私に輪姦の仲間に加わらないかというのだ。

私は、一寸、来いよ、と彼等を露路裏にある汚ない大衆酒場に連れて行き、安酒を振舞ってやりながら、他に女がないじゃない、十七、八の女子学生をマワシにかけるとはお前ら少し阿呆か、と凄んで見せ、落



ちぶれたりとはいえ、俺は昔、これ位の女学生を教えていたのだぞ、と声をはりあげているうち、急に酔いが全身に廻り出して妙に涙が出て来たりして弱ったが、チンピラ達は、ピーナツをポイポイ口の中へほりこみながら、「だってよ、この女がよ、ありがたがってるんだからよ、仕様がねえじやねかよ」と吐かすのであった。私は、この不良達が、この女学生を集団で犯し、その後も、それをネタにゆすりつつけて、ひっぱり出し、皆んなでマワシを楽しんでるのだと想像していたが、ところが彼等にいわせると、少女の方から要求して来たのでこれから仲間達と一緒に、西大久保にある馴染の旅館にしけこむのだというのだ。そんな阿呆な、と私は眼をパチパチさせたが嘘ではないらしい。彼女は、賑やかにコッブ酒を飲み始めたチンピラ達の命令で、煙草を買いに走ったり、どこかへ電話をかけるに行ったり、そんな仕事を実に楽しそうにやっているのである。彼等がガヤガヤ一杯やり始めた雰囲気にも自分も楽しそうに浸っている。

カラス天狗みたいなやら、マントヒヒみたいな顔つきをした気色の悪いチンピラ

やくざの所へ来て、輪姦してくれと頼む女学生がいるなど、私は呆っ氣にとられてしまったが、この女学生は、最初、この不良共に集団で馴らされた味が忘れられなくなって、病みつきとなり、輪姦マニヤになってしまったらしい。とはいえ、女性の輪姦マニヤなど一寸信じられない思いだったが、チンピラ連に聞くと、何もこの女に限った事ではなく、これを悦ぶ女は随分多いと聞かされて、エロ作家としては自分の不勉強を大いに恥じたわけである。

こうしたチンピラ連中が女性を襲撃し、マワシにかけるというのは、こうした女の性の一面を、かなり計算に入れているところもある。被害者の女性に、はっきりと顔を覚えられ、身元まで感知されるという場合が多いのだから、かっぱらいなどよりはずっとその筋にしゃっぴかれる率は多いのだが、世間態とか羞恥などから、訴えて出にくいという女性心理と、自分の方からその味が忘れられず、接近してくるという女の化物性をチンピラ達は期待しているのだ。暗闇へ女性を引きずりこんで輪姦するというチンピラ達は、たしかに野獣に違いないが、野獣共にかみつかれ、引裂かれ、そのために内部にあるマゾ性を引

っぱり出されて、その感激を二度三度味わうべく、野獣の前へ、姿を現わすこういう女性も、考えれば、一匹の雌の野獣に違いない。

トルコ女史が驚いたという、男の化物達も、そうした化物達を寛容し、受入れる女の化物が存在するのだから、夫があれば妻のある如く、おかしくも何ともないと考えられる。第一、そうした種々雑多の化物達の欲求を満たしているトルコ女史自身、立派な化物じゃないか。

いや、化物とか、けだものとかいってはいけないだろう。男性も女性も、その肉体と心に、それぞれ、どうしようもない化物性を持合わせている悲しい生物なんだ。

× × ×

役者達の間では、誰がいい出したか知らないが、私の所へ、安酒一本持こめば、忽ち、役をつけたしてくれるという評判が立っているようだ。つまらない事いう奴もいるものだが、その方が人間的でいいじゃないか。中には田舎から出て来たタレント志望の女の子を、ピンク映画なのに芸術映画だとごまかして、いい役につけてやる、打合せしよう、と旅館へ引っ張りこみ、ものに



しているえらい先生だっているんだぜ。

ああ、大分、酔って来たようだ。奥に敷かれてある夜具の方へ腰のあたりが泳ぎかけている。さてよ、何かいう事があって、鬼六談義を書き始めた筈だったが——そうだ、Yプロダクションが花と蛇シリーズ第四弾を制作する事になり、一昨日、シナリオを渡した事だっけ。SMマニヤの友人達にケツをたたかれた恰好で、何か月ぶりで縛り映画を作る事にしたのだが、友人達の好みは、美津子だということで、この点、気前のよい私は、OKと承知し、早速、会社へ連絡し、女子高校生タイプの女優を注文した所、スタッフ達は苦心の末、十七才の新人をどこからかスカウトして私の所へ連れて来た。

セーラ服が真によく似合い、可憐な味わいもある美少女で、私は気に入ったのだが、十七才という彼女の年令が気になり、セーラ服を悪い奴に剥ぎとられ、素っ裸に近い恰好で縛られ、その上、木馬に乗せられるんだぜ、いいのかい、と半分、おどかさようにいったところ、仕事だから、私、割り切ります、ときっぱり答えるのであった。最近のティーンエイジャーの度胸の良

さには驚かされるが、あの、原作があるのでしたら、見せて下さいには参った。冗談じゃない、原作など見たら君は卒倒してしまうよ、と私はニヤニヤごまかした。素人だけに何だか可哀そうな気もするが、監督の岸信太郎も、大分、この少女が気に入ったようだし、という事は、この監督仕事に脂が乗り出すと、如何に哀願したとてスタッフ達の取囲む中でパンティまで剥ぎとって、リアルな感じを出そうとするので、気に入られるという事は、女優にとって有難くない場合もあるが、とにかく、美津子の役はこの少女に本決りとなった。

勿論、原作に出て来る美津子ではなく、この少女に合わせて、創作した美津子であり、女子高生三年というのが、原作と同じだけである。今度は、木馬などを作って、誘拐した女子高生をそれに乗せ上げようと思い、スタッフ達も木馬を作る段取りまでつけていたのだが、最初からこの少女に恐怖感を持たせては可哀そうだと思って中止し、木馬はこの次の機会に使用する事とした。岸監督は、乗せようよ、乗せようよ、と木馬責めをシナリオからカットさせてしまった私に愚痴っていたが、いくら、仕事しだから割り切ります、と

いっても股が割り切られては大変だと私はフェミニストぶりを発揮した。

しかし、私には、木馬は別に予定を立てている。美津子の巻がすんだら、京子の巻を作り、つまり、これから漠然とした縛り映画ではなく、美津子型、京子型、小夜子型というように、そのタイプをきめてかかり、責められる女性を登場させようと思うので、鉄火娘の京子型を撮る時、木馬は使用するつもりだ。これには、もうすでに出演女優も内定していて、木馬に乗って責められるのを、楽しみにしているM女優だから、こっちも楽しだし、楽しみだと思っている。

さて、この女子高校生を誘拐し、責め上げる珍脚本は二、三日中に印刷出来るから編集部の方へも送るが、文学がどうかドラマツルギーがどうかをいう偉い人々には、この映画は見て頂きたい。美津子型を責めたい、京子型を責めたいというマニヤのために、酒浸りのエロ作家が一日で書き上げた物語で、その画面が如何に現れるか、勿論、そこは監督の腕だが、私はマニヤの一人として、ニヤニヤしながら傍観しているつもりである。



## —— 切 腹 研 究 夜 話 ——

## 腹 切 女 烈

通 弘 康 中



大名の奥方もさまざまである。浅野吉長夫人節子が、遊蕩の夫を諫めて、主従ともども切腹を遂げた享保年間、大和国柳本藩主は織

田下野守信方であった。信方は享保十一年八月、十五才で家督、二十一年駿府ご加番を仰付かった。信方の奥方は土方河内守信房の妹

で、一男を得たが早世した。

夫人は敬神崇仏の念あつく、諸所に寄進して心がけ甚だ奇篤と見えたと、信方の駿府在番中に思いがけぬことが起った。奥向きへ中条流の女医者を呼び込んだのである。つまり妊娠して流産を計ったというわけで、大名の奥方にあるまじきこと、と家中に噂が流れたのである。

相手と云うのが、奥向きの御用を勤める溝口七郎右衛門、もと中村松円蔵の二男で、家中の溝口七太夫の一人娘よしと養子縁組した者である。生来美男の噂高く、奥方に近い用向きを勤めるうち、いつとなく、情を通じ、奥方で懐胎という、不始末を招いたわけである。

噂はやがてよしの耳にも入る。

「女の浅い嫉妬心から申すようにも思召され恥づかしながら、家中にいろいろ噂いたします由、聞き及んでおります。一とまずご流産にて結構なれど、その後は却って必らずご懐胎の早いもの、どうぞ、思いとまって下されませ」

必死で諫めたが、七郎右衛門は一向に聞き入れる様子がない。よしはつくづく考えた。若しこののちもやまなければ、第一大恩あ



る主家に傷が付き、その上溝口家も末長く悪名を受け、断絶の憂き目は風前であろう。今こうもお諫めしても、女の恠気とのみ思召し後の災厄を憂うお心なし、殿のお為には替えられぬ、もはや覚悟の秋ぞ。

女心に哀しくも思いつめたのである。

たまたま父の七太夫が新堀の碁会所へ行った留守に、書きおきこまごま認めて、妾が刃傷つゆ乱心ならず、ただただ忠義一途なりと結んで七太夫の小袖に縫い付けた。他に、七郎右衛門の悪事を認めて懷中に納め、さて下男を呼び寄せ、

「新堀の碁会所へ、父上をお迎えに行っておくれ、急ぎの用ゆえ、早うお帰り下されませと申して、人に知られぬよう、この文わたしおくれでないか」

申しつけたのである。

やがて夕刻ともなればいつものように、七郎右衛門が戻って来た。よしは、

「ちよっと、内々にお話がござりますれば」

と座敷の方へ七郎右衛門を先立たせた。七郎右衛門は何心なく廊下に行く。背後からよしは、懐剣引き抜き、左の脇腹から柄も透れと刺し透し、一と挟りする。たちまち呻きと共にのけぞって、七郎右衛門は、

「おのれ、女め、不義密通を働いて、だまし討ちにいたしたな」

よしの髪を手に絡んで足を踏んばったが、痛手にたまらずどっと倒れた。よしは先ほど認めた覚え書を取り出し、

「是ごらん下されませ、再三のお諫めもお用いなく、今は家中の口端に上り、末はどうなることやら。お家には替えられませぬ。よって今日の仕儀に及びましたものを……」

もっともな申し分に七郎右衛門も、苦しい息の下から、

「拙者も前々から腹切って、相果てんものと思ひ居りしに、一日一日と延ばして参ったまで、其方の手にかかり死ぬがまだしもの仕合せ、早うとどめを……」

もう声がつれた。さすがによしもこらえ切れず、

「恨みにお思い下さいまするな、妾もお跡より参ります……」

泣き伏すのであった。

折しも、碁会所の七太夫は、仲間からよしの手紙を受取った。夫七郎右衛門をわが手にかけて申します、と娘の筆蹟である。驚きあわてて帰宅したときは、もはや変事のあと。よしは悪びれず父に向い、委細を述べて、

「家のためには替えられず、と申して痴話喧嘩に事寄せお書おき仕りました。今は自害いたす所存でございます」

哀しい言葉に七太夫も、

「ああ、娘、早まったり。夢にも知らなんだが、早う知っておったなら、離縁して実家へ帰そうものを、其の上で自害するならばそのまま自害もさせようぞ。父の帰りを待ち居たるは氣おくれたか。たとえ親子の仲でもはや見逃がしならぬ。お上に訴えお下知を承ねばならぬ。さりながら、娘、立派な心ばえぞ」

且つはたしなめ且つは賞して目付に届け出たから、直ぐさま駿府の信方へ注進された。

駿府では勿論、事の仔細は判らないが、七太夫の忠勤に免じ、父の手かけよとの裁断が下る。

この裁決を承わったよしは

「ありがたきお言葉。さりながら、女と云えど武士の娘、切腹いたしとうございます」

検使を乞い受け、翌日申の刻(午後四時前後)切腹と決まった。聞き伝えて、家中の者が別れの挨拶に来る。事情が事情ゆえ番人も付かず、苺を呑み茶を喫して、つゆ平常と交りないよしである。とても明日の夕刻には切



腹する身とは見えないのであった。

当日は、朝から沐浴して身を清め、薄化粧も尋常に鏡に向うところへ、拔身を後ろ手に隠して七太夫が入って来た。鏡に写る父の姿を見るや、よしはサッととびのき、

「是は父上、何ごとを遊ばしますか？」

「女ながら気丈のそなた、立派に切腹いたさぬでもないが、若しも未練の振舞いもやと、……いっそわが手にかけよう……」

涙ながらの言葉にも、よしは莞爾と笑みを浮かべ、

「母上をば幼くて先立たせ参らせ、父上のご介抱にて成人し、そのご恩も報い参らさぬ間にお先に参りまする」

云いも果てず手函の剃刃とり出して、露わした右の太股サツと一とすじ、引くと見る間に血を噴いた。

「ご覧ませ」

と一と言、顔色も変えないのである。七太夫も、よしの覚悟のほどを見てとった。疵は絹で包み、検使を待つよしであった。

時移り、三宅十兵衛、小島半左衛門、徒目付稲葉惣八が七太夫宅へ来る。

「さてさて是非なき仕儀」

と挨拶する検使の人々に、七太夫も

「いずれもご苦勞千万、さりながら女のことゆえ、切腹ころもとなし、何分、御前よろしく申上げて下されい」

云い終えてよしを呼んだ。

白無垢の二つ重ねに厚板織の帯を折目高く締め、黒ちりめん扇子流しの小袖をかいどりして、よしは淑やかに座に着く。

かねての云いつけどおり、日ごろ召使う女が三方に腹切刀を紙巻きして載せ、よしの前にさしおくなり、泣伏してしまった。七太夫が心を鬼にして叱りつけ、女中の退く姿を見送ったよしは、

「皆々様、ご苦勞に存じまする」

会釈して押し肌ぬぎ、臍下まで白無垢を押し下げると、惜しげもなく清らかな肌を露わした。悠揚と腹なでおろしなであげる姿は、一としお哀れを深める。

いよいよ三方の刀を押し戴き、よしは直ぐさまわれとわが腹に突き立てようとする。そのとき七太夫が、

「あいや暫く」

押しとどめておいて、さて検使に向かい、「侍の法式に切腹するは介錯人があるはず、その儀如何？」

検使の役人も

「なるほど、もつとも至極」

誰ぞ、と云っても急のこととて徒らに時間が経つ。検使たる者、介錯人の役割を忘れたわけではない。女人のことゆえ、よもやまことの切腹はすまい、用意の座で胸か咽喉を突くものと決めてかかっていたのであろう。

するとよし

「介錯人ござなくとも苦しいござりませぬ。その内にお越しなされましようほどに、いざ今生のお暇乞い申しまする」

左の掌で鳩尾から臍下へ撫でおろし、控えていた右手の九寸五分、ズブと左の腹に刺した。あなやと嘆ずるひまもあらず、キリキリとよしは、臍の真下を一文字に、深々とかき切る。それでも心ゆかぬとてか、よしは引抜いた刃を今度は鳩尾に突込み力まかせ、グワツと切り下げた。

見ごとな正十文字の切腹である。その苦痛を七太夫が見かねて

「もはや……」

云いかける声に応じて、徒目付稲葉惣八、「心得申す」

立寄りざま介錯。

よしは壮烈な最期を遂げた。

(おわり)



贗作・マゾヒスチック・ストーリー

## 憂愁の

## 紅かほる夫人

芳野眉美



A

やがて、午後六時になる。紅夫人は緊張した面持でコーヒーを唇にもっていった、が、何かを待っているように、視線はレジーにそそがれている。紅夫人はちらっと腕時計を見た。

六つボタンダブルブレストのコンチネンタルブレザーの若い男がレジーに近づいた。

「紅かほる様、レジーまでおいで下さい。御面会の方がいらしております」

レジーの呼び出しの声がマイクに響いた。紅夫人は眉をひそめた。知らん顔をして、ハライイトに火をつけた。待っている人ではない。

紅夫人はさっきからトイレに行きたくてむずむずしていた。しかし、六時半までは席を立てないのだ。せっかくその人が呼び出しを

かけてくれたのに、席にいらなくて帰られてはまた、いつその人に会えるかわらない。

紅夫人は、でかけに、三〇CCのガラスの浣腸器で、二本ほど注入してきたことを後悔していた。まだ、六時を五分ほど過ぎたばかりである。三十分まで待っている間に粗相をしてしまうかもしれない。コーヒーの中味は半分もへってはいなかった。

コンチネンタルブレザーの青年は、紅夫人



に会えないのにあきらめられないのか、まだボックスに坐っていた。

「だめだわ」

薄く眼を閉じて、紅夫人はつぶやいた。浣腸による排泄をこらえている紅夫人の繊細な頬がかすかに上気していた。堪えているうちに、火のように熱く官能の悦びが湧きあがってくる。

喫茶店Aは、若い二人連れの客が目立って多くなった。この中の何組かのカップルは、土曜日の夜を楽しむために、やがてホテルに吸い込まれていくのだろう。

紙のオシメが少し濡れたようだ。紅夫人はひっそりと嘆息を洩らした。

「もう、だめだわ」

心の中で何度もつぶやいた。紅夫人は、静かに水面に波紋が広がるように、オシメを濡らしていく。

裏にゴムを張った特殊なショーツを、オシメカバーの代りに穿いているから大丈夫だとは思っている、もう一枚重ねて、皮のショーツでも穿いてくればよかったと、心配になった。

「このまま家に帰れるかしら」

紅夫人の身悶えが激しくなった。

夫に死別してから何年になるだろう。長く未亡人生活を続けているせいか、瀟洒しょうしゃであてやかな和服姿の紅夫人はどうしても三十代にしか見えない。本当は、四十を二つほど越してしまった中年の女が、紙のオシメをして喫茶店でコーヒーを飲んでいるなんて、誰も気がつかないだろう。むず痒くなるほどの秘密に酔う一瞬であった。

「紅かほる様、お電話でございます」

その時二度目の呼び出しがあった。六時半である。紅夫人の身体がゆらいだ。が、席を立たない。紙のオシメが濡れそぼって立てないわけではない。紅夫人がレジャーの電話に近づくの待って、また知らない男が紅夫人に声をかけてくるのに違いない。

電話は異だ。みえすいた異にひっかかるような若い娘ではない。そんなことをしたら秘密は保て無い。

紅夫人はホステスを呼び、レモンスカッシュをたのんで、残った冷えたコーヒーをさげさせた。しばらくして、ブレザーの青年が喫茶店を出、続いて五十がらみの肥満した男が一人で席を立った。一人の客はこの二組だけであった。

電話の張本人はあの中年の男だったのかも

しれない。人を使って紅夫人に電話をかけ、自分は喫茶店で受話器を取るであろう紅夫人を待っていたのだろう。

「毎週土曜日午後六時～六時半の間、喫茶店Aに居りますから、紅といって呼び出して下さい」

と紅夫人が奇巧の読者通信に発表したのはそれだけの理由があったのだが、その反響は紅夫人が予測したような結果になっていた。

「私は同性しか興味が無いので、私の希望では、四十五才～五十二才位までの、未亡人の方。できれば住込で」

とはっきり書いておいたはずなのだが、興味本位の男がかならずいるものなのだ。紅夫人は、次の土曜日には、こちらからの喫茶店に電話をしてみようと思った。喫茶店で待っていて無駄だと思った。例え、求める婦人がいたとしても、読者通信を読んだ男たちのじゃまがはいるのに違いない。しつこい男にからまれては、どんな恥をかくかもわからない。秘密を守ることがむずかしい。

紅夫人は伝票を握って静かに立ち上った。濡れたオシメがびったりとまとわりついていて、亡き夫の冷たい手を思い出して、紅夫人は赤くなった。



B

着物を脱いで裸になり、紙のオシメをトイレに捨てて、紅夫人はお湯を浴びた。丁寧に汚れを洗う。湯にひたりながら、一人でいることの淋しさがこみあげて涙が頬に流れた。

お秀さんがいてくれたら、と紅夫人は思った。着物の裾をまくって立っている紅夫人から、お秀さんはゴムで裏うちした特殊なショーツを脱がせ、濡れた紙オシメをはずし、あたたかいタオルでふいてくれただろう。そして、激しく燃えている官能の炎をおさえるために、スポンジのウレタンの付いたショーツをあてがってくれただろう。

お秀さんは誌上で知り合った未亡人だが、最近一身上の事情で田舎に帰郷してしまったのである。三食付、四万円という高給とりのお手伝いさんだが、この中には紅夫人の条件を満たしてくれる感謝料も入っているのはいうまでもない。仕事は、紅夫人が経営するアパート十室ばかりの掃除と、紅夫人の身の回りの世話だけで簡単であった。

朝になると、お秀さんは紅夫人を起こしてきた。夜具の下手に坐り、掛布団の裾をまくる。紅夫人の緋の長襦袢を腰のあたりまでは

だけると、器用に浣腸器を、操作するのである。朝の浣腸は日課の一つであった。

浣腸をしてしまうと、紅夫人の両脚をあげさせて、お秀さんは器用に紙オシメをあてがい、オシメカバーがわりの、総ゴム製のショーツを穿かせると、

「さあ奥様、お起きあそばせ」  
はじめて声をかけるのである。

「今日はすばらしいお天気ですわ。公園に散歩に参りましょうか」

洗顔をすませ、朝食の膳につくと、お秀さんは紅夫人の両手をうしろで組ませて腰紐で縛り、更に正座した膝もロープでぎりぎりに巻いてしまう。紅夫人の自由を奪っておいてお秀さんは、ツンとすました愛らしい紅夫人の鼻を、手の掌で下から上へこすりあげるのである。

「このお鼻でしょう。洗濯籠の中からわたしの汚れた下着をさがしだして臭いをかいでいたのは。いけないお鼻」

鼻の穴に指を突っ込んだり、やわらかな鼻毛を一本二本と引き抜いたり、さんざん紅夫人の鼻をおもちゃにしてから、おもむろに洗濯バサミで紅夫人の鼻にはさんだ。

「痛い」

紅夫人はぼろぼろと涙を流す。鼻をつままれていては声にはならない。

「はい、口をアーンと開けて」

洗濯バサミを鼻にはさんだまま、お秀さんは紅夫人に朝食をたべさせる。

上からあたたかい味噌汁を流し込まれるだけでなく、先程の浣腸液が効き始めてくる。

「かんにんして、お秀さん」

声にならない声で紅夫人は哀願した。

「あら、もうおなか一杯なんですか。だめですわ、もっといただかないと」

紅夫人ががまんできずに紙オシメを濡らしているのに、お秀さんはすまして御飯を口に運んでくる。お茶を飲ます。

「おや、いけませんねえ、御飯が終るまで待てなかったのですか。あとでオキユウをすえますよ」

そう云いながら、お秀さんは紅夫人の鼻の穴にタバコを二本差し込んで火をつけた。

「ひどい」

煙にむせて、紅夫人は悶え苦しんだ。

タバコは、紅夫人の鼻の頭に火がつきそうになるまではっておかれたのである。その間お秀さんはゆっくりと朝食をたべていた。紅夫人が濡らしてしまった紙オシメの始末をす



ると、お秀さんは紅夫人のお尻を丸出しにしたまま、四つ這いにさせて柱を抱かせ、ロープで固定してしまった。

「台所をかたづけってくるまで、そうしているですよ」

お秀さんは穿いていたショーツを脱ぐと、紅夫人の顔にすっぽりとかぶせた。

「奥様の大好きなもの」

くく、と笑うと、お秀さんは、手の掌で紅夫人のお尻をピシャピシャとぶって、台所に立っていった。

それから一時間ばかり、紅夫人はお秀さんが許してくれるまで屈辱的な恰好を続けた。

仕事が終わったお秀さんは、こともあろうに自転車の空気入れを持って、何も云わずに紅夫人のおののいている背後に迫るのだった。

## C

「わたくしのお手伝いをして下さる方がいらしたら、ぜひお願い致したく存じます。でも

次の条件に合った方でないと……お分りと思いますが、奇クの愛読者で、マニアの方です。私の希望は、第一に浣腸の好きな方、第二に鼻責めに興味のある方、第三に下着マニ

アである事なのです」

紅夫人は、奇クの読者通信にそう発表したのが、お秀さんにはじめて会ったとき、おたがい同年輩の未亡人ということで話は合ったが、本当にこれらの条件を満たしてくれるのか疑問だった。

同性愛といっても、激しい責めをされないと燃えないのである。浣腸、鼻責め、下着の交換など、どれもこれもなくてはならない条件であった。

紅夫人はお秀さんと喫茶店で待ち合わせてテスト旅行をした。中年の婦人が二人して一室にとまれるのは、温泉旅館がもっとも適していたからである。連れ込みホテルを利用することなど、恥ずかしくてできるものではない。

喫茶店で紅夫人はハンドバッグから大きなマスクを取り出してお秀さんにわたした。二つ折りしたマスクの中に、透明なビキニのショーツが丁寧にたたまれてあった。汚れたショーツがガーゼのかわりであった。

「三日も穿いていたの」

紅夫人はお秀さんに小声で云った。

「あちらに着くまで、そのショーツで鼻と口をおおって、マスクをしていてちょうだい」

鼻責めと下着マニアであることのテストはこうして始まった。

「わたくしの匂いを好きになっていただきたいの」

市川団十郎の等身大の人形がロビーに飾つてあるホテルを選んだ。歌舞伎十八番のうち花川戸助六の人形である。黒い蝶タイのボーイが十数人並んで頭を下げる中を、紅夫人はマスクをかけたお秀さんを連れて部屋に案内された。

ネオンの海の夜景がすばらしい。

大浴場で、はじめておたがいの裸身を見せ合い、浴衣に着がえて、テストは一時中断してゆっくり夜食を楽しんだ。ビール一本で紅夫人の顔はほんのりと染まった。

「こんなにのんびりしたなんて、久し振りだわ」

ショーツのマスクのテストだけで、紅夫人はお秀さんがすっかり気にいったようであった。気持ちが触れ合わなければ単なるプレイで終わってしまうだろう。

ホテルのバーや遊戯場では、三人、四人と連れだった中年婦人も見られた。団体客の流れもあるだろうし、少人数で一夜を楽しみにきた組もあるだろう。芸者連れの男たちや、



新婚らしいカップルのはなやかな雰囲気とは違ったムードが感じられるのは、未亡人のひがみだろうか。

団体旅行の群にまぎれこんで、チークダンスというより、若い男にしがみついている酔った中年の婦人たちの姿を見て、紅夫人はそこそこにホテルのバーを出た。

部屋に戻ると、すでに二組の夜具が敷かれていた。紅夫人はお秀さんに浴衣を脱ぐように促した。バーで飲んだジンフイズがきいたのだろう。お秀さんは羞じらいながらホテルの浴衣を脱いだ。テストの本番であった。

柔らかな胸のふくらみを、ほっそりしたおなかを、そして、豊かに充実した腰からむっちり引き緊まった太腿を、紅夫人は翳のある眼でじっと見つめた。

「綺麗だわ」

怖れていることは、肌の若さ、艶を失うことだろう。紅夫人は瑞々しいお秀さんの裸身に感嘆した。

「奥様こそ」

お秀さんは大浴場で見た紅夫人のニスを塗ったように艶々した、滑らかな美しい肌を思い出した。

紅夫人はスーツケースからエネマシリンジ

を取り出した。

「これはね、お鼻も洗うことができるのよ」  
ゴムの球をキュッキュッと押した。

「さあ、浣腸をしましょう。グリセリンも用意してあるの」

紅夫人は浴室のタイルの上に、お秀さんを四つ這いにさせた。イチジクみたいな軽便浣腸を予測していたお秀さんは、まさか紅夫人がエネマシリンジまで用意してきたとは思わなかったことだろう。

お秀さんがあわててトイレに入ったとき、紅夫人は楽しそうにお秀さんの姿を見つめていた。浣腸マニアは、注入と同時に排泄のほうにも興味を持ってしまうのだろうか。

浴衣を着せずに、お秀さんにびっちりした皮のショーツをつけさせて寝かせた。両手を胸で組ませて腰紐で縛り、両足首もまとめて固定してしまうと、お秀さんの枕元で紅夫人はネルのショーツを脱いだ。

お秀さんを責めている間、ずっと穿いていたショーツであった。

ぬくもりのさめやらぬネルのショーツを、紅夫人はふわっと、お秀さんの顔にかけた。「そのまま朝まで寝ていらっしゃい」

電気を消したが、寝苦しかった。眼がさえ

て寝られなかった。

紅夫人は夜具の中で浴衣を脱いだ。裸になって自分を力一杯抱きしめた。未亡人であることがつらかった。

一時間ほどして、紅夫人は起き上った。部屋の電気をつけた。

お秀さんもねむれないようであった。紅夫人はガラス戸のカーテンを引いた。

冷たいガラス戸に、一糸もまとっていない全身を押しつけた。そのまま動かない。狂おしいほどせつない呻めき声が紅夫人の唇から洩れた。

紅夫人は戸を開けた。何も着ずそのままテラスに出た。

ひやりとした夜の空気が紅夫人のまっ白な裸身を包んだ。

誰かが見ているかもしれないのに、紅夫人は星空の下に立ちつくした。

(奇ク五月号の紅かほる夫人の読者通信を参考にしました。

紅かほる様、勝手に贋作して申し訳ありません。お許し下さいますように)



言 独

## 奇クと私

萩 原 正

本誌に魅了されてより三年。自身のアブノーマルを強く意識し、それを罪惡視する気持ちからまだ脱けきれぬ私は、いつも、もうこんな雑誌は読むまいと思いつつ、常に発売日を待ち兼ねています。自分のような性癖は、多かれ少なかれ誰でもが持ち合せているのだから、別に恥かしがることはないのだと自分で自分に云い聞かせるのですが、やはり何かしら、うしろめたさを感じられて、他人には自分の性癖を見抜かれたくないと思っています。もし、他人にこのことを指摘されたら、私はもうこの世に生きていられない程の恥ずかしさを感じることでしよう。

しかし半面、自分の欲求の強さ

に驚くことがあります。奇クの読物にしる、フオトにしる、最初に見た時の興奮は、二度、三度と眺める内に泡のように消えうせて、更に強い刺激を求めていることに気付くのです。

限りのない欲求を奇クが満してくれる筈はありません。それはよく分っているのです。自分が自由に空想するのに制約はありませんが、公刊誌に制約のあるのは当然だからです。

それなれば、私を含めて古い読者というものは、少くとも一年もすれば読みあきてしまう筈です。そして、離れていってしまう筈です。だから奇クはとうの昔に売行き不振で廃刊されていなければなら

ない筈です。それが二十年もの間続けられているということはどういうことでしよう。読者層の循環ということかも知れませんが、パチンコの客層のそれとは、似て非なる何かがあるように思えるのです。

奇クにとりつかれる人は、多かれ少なかれ、サディズム、マゾヒズムの傾向を持った人でしょう。そうすると、私のように、自分の性癖を他人には必死になって隠しながら暮している人達が、いかに沢山居るかということが想像できるような気がします。

そうして、もう誌上だけでは物足りず、自由に？ モデル嬢を縛り、責めて満足？ なさっている辻村氏や山本氏に羨望の念を覚えている人は、ずいぶん多いのではないかと思えます。私も辻村氏、山本氏のように生きられたら、どんなに倅せかといつも思っています。

ただ、お二人様と、多くの読者

との相違点は、自分の性癖を他人に隠すか、隠さないかの違いだろうと思えます。私もその一人ですが、アブノーマルな性癖が表面に出れば、現在の地位や名誉にかかわるからとの理由のみで、ひたすらに隠そうと思っている者は、たとえ機会が廻って来ても、羨望し

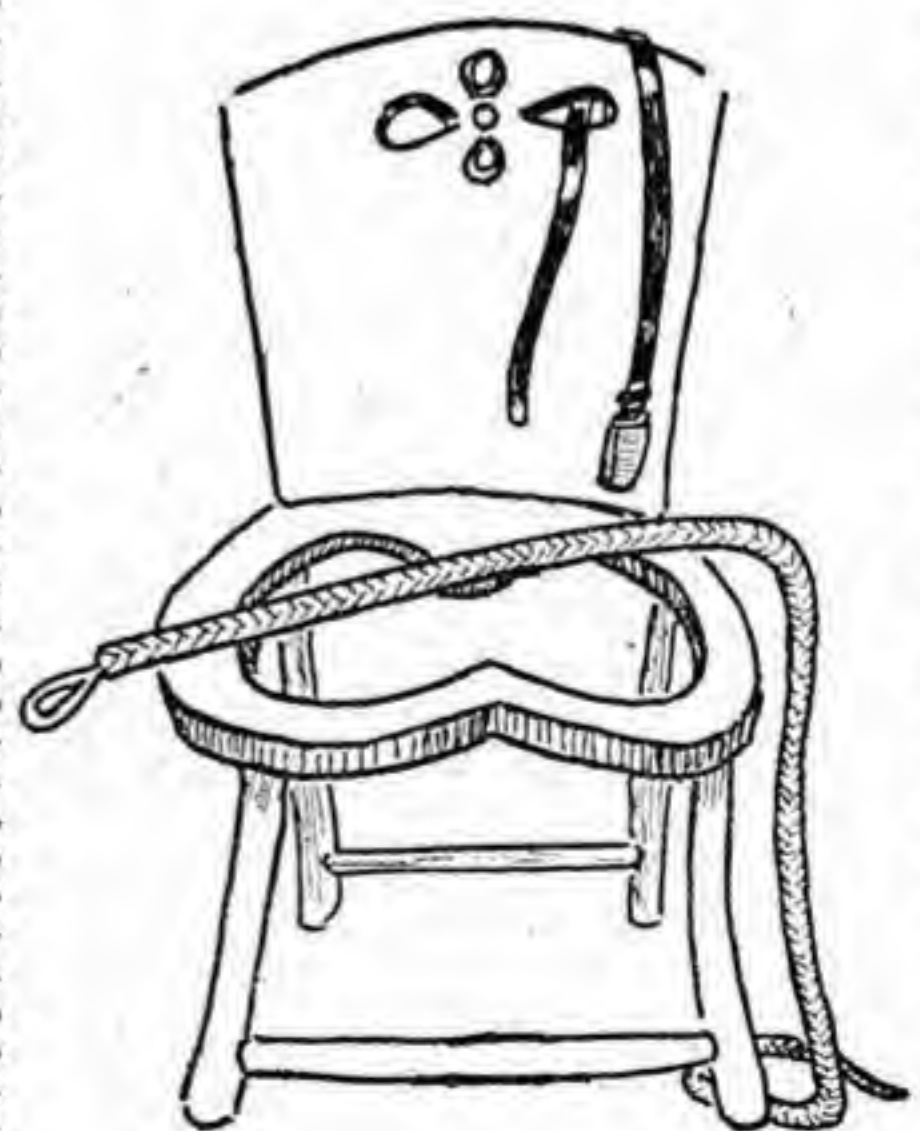
ていながら無条件に飛び込んで行けないように思います。絶対に秘密裡にプレイを行いたいと希望している人が大部分でしょう。またそれで当然ともいえるのでしよう。所詮、SMの世界とは陽よりも陰において初めて存在するものであるかと思えます。人間とは本当に虫のよい動物です。特に我等弱者には、辻村氏や山本氏のような勇気のある生き方は到底考えられません。やはり私は私なりに、アブの血潮はベールで包み、現世以外の世界を我家の一室に創り出して社会人以外の人間の部分で、このやっかいな性癖を慰めてゆきたいと思う次第です。



# 心傷<sup>こころ</sup>たむ<sup>い</sup>遍<sup>へん</sup>歴<sup>れき</sup>

第三十一章 女囚ミシユリーヌ (十一) V

西 条 操



六月一日の朝、三監の女囚たちは悲しかった。今日から獄衣が新デザインになるのだ。

このデザインはコリンヌ課長の発案によるもので、労役に便利だとか、暖かいとか、風紀保持にプラスするとか、いろいろと理屈を並べて本省の承諾を取ってある。コリンヌは嘗て上役に随行して外遊した際、ジャポネの婦人刑務所を見学し、その囚衣に感心したのだった。

あの国じゃMOMPEとかいってたっけ。ともかくスタイルが気に入ったわ。これ以上不恰好でみじめたらしいデザインはないわ

ね。身分の断絶を常に銘記させとくにはうってつけじゃない？――

かくて、コリンヌはコンピエーヌの刑務課長に就任するや、その考えを具体化したのであった。

もちろん、受刑者に要する経費は切り詰めねばならない。だから、新しい生地を使うのは最小限に押え、一監から順次に実施して行ったのだった。そうすれば、いままでの囚衣を次々と回して仕立替えが利く。三監の女囚たちは五月下旬の数日をその仕立替えに費やし、新型獄衣の非人間的デザインに鼻噓った

ものだった。一監の連中は五月半ばから切り替えられていて、それをまとった女の姿は、日曜日の礼拝のときに見て知っている。

三監の女囚たちは、朝の体操半ばにして、いの一番に出動して来たイヴェット婦人看守を打ち眺め、胸締めつけられる想いにむせんだ。意地の悪いことに、婦人看守たちも今日から衣更えなのだ。しかも、今年の夏服からはグツと新デザインになっている。

自分たちの手で仕立替えた新しい労役衣、寸法などはお構いなしの切り継ぎの獄衣は、生地といい柄といい従前のもと同じことで、デ



ザインだけが滅法界にみじめたらしくなっている。そんな労役衣を足許に、女囚たちは素裸で立ち並び、粧い新しい婦人看守たちを、哀しく盗み見るのだった。

「今日からお前たちも新モードよ」

ジョアンヌ女史が見渡して齒を見せる。ネクタイなしの新制服が、首の短かい女史にはよほど気に入ったのだろう。

「嬉しいかい？ こんどの服は働らき易いように考えてあるのよ。冬はあったかいし。そんなにまでして頂けるのを有難く思わなきゃいけないね。一層、まじめに、心から感謝し、悔い改めて、罪に服するんだよ。いいね。さ、着なさい」

女囚たちは青灰色の下着をつけ、そして、両脚を突込んで穿き、鼻を吸って上衣をかぶった。

「どう？ 穿き心地は。こんなモードは世界中でお前たちだけだよ。なんとまあ、個性が溢れてること」

ベルデイーヌが眼を細める。

「そうだね、もちっとキラキラした布なら、アラビアあたりの女奴隷が穿いてたねえ。でも、いまはどうだかしら？」

トレーニングパンツというにはダブダブし

過ぎるし、足先がすばまっているのでストラップスでもない。ストラップスなら折目ぐらいは残っているだろう。すばまった足先はゴムで締められるのだが、長さがこれまた中途半端で、大抵はふくらはぎの半ばまでだ。大中小とある寸法だが、そういう具合のデザインになっている。そんな不恰好さは辛抱するとして、情けないのは革バンドの尾錠だ。前側に短かい革バンドがついていて、その尾錠で腰を締めるのだが、尾錠の穴は桁外れに大きいし、それに差込むピンも驚ろくほど太い。そして、ピンの先には穴があいているのだ。その穴の使い途は、女囚たちにはいわれずとも分かる。小さな南京錠を通して掛けるためのものだ。この革バンドを太い糸で縫いつけながら、女囚たちは歯ざしりしたものだった。

ミシュリーヌは尾錠を締めながら見下ろして、その尾錠にかけられた南京錠を想った。

コリンヌ課長にいわせれば、これも衛生上の見地からなのだ。監房内の女囚たちは、とくに夜間など、定められた用便時刻を守らないことが多いというのだ。監視を盗んでの用便には用便紙などあるわけもないから、どうしても不衛生なことになる。抑制できなければ出来ないでいいから、神妙に許可を願い上

げればいい。とはいっても相手は女囚、こそとずらせることだろうから、鍵がなければ脱げないようにしておこう、という次第。さて、また、かぶって着る上衣が口惜しい仕掛になっている。丸首の襟は最小限の寸法で、どんなに気をつけてかぶっても髪が乱れる窮屈さだ。これは勿論、胸のあたりをまさぐれないように、との有難い配慮だ。

女囚たちは婦人看守の襟元を盗み見る。こっちは旧に倍して窮屈になったというのに、あっちはネクタイも廃めて涼やかに胸許ひろげ、優にやさしき純白の襟を、上着に大きく重ねているのだ。

襟元などは諦めるとしても、胸挟って情けないのは股布だった。ウエスト締め加減に仕立てである道理はなく、さりとして、長い紐の類をまとわせるのは禁制——だから、腰骨あたりまでの上衣の裾はダブダブで、そのままだとまくれ上がって仕舞う。それでは可哀想だというわけで、上衣の裾を押えるのが股布の役目ということになっているのだ。

ごわごわの木綿を二枚合わせ、上衣の後ろ裾内側に縫いつけた股布は幅二十センチ——勿論、仕立直しの裁ち屑寄せ集めで、赤縞が横のもあるし縦のもあるし、斜めにバイヤス



というのもある。とくにミシユリーヌのはみじめだった。後ろが横縞で、前部三分の一が縦縞——継ぎ目がどうしても見えてしまう。

女囚たちはその股布を後ろから前へと潜らせ、前側は上衣の上にかぶせて、ボタンで留めた。みじめったらしさに涙ぐむものもある。

ボタンは大型でボタン穴はきつい。そしてボタンの位置は相当に上方で、強く締めあげると、キャスリーヌが呟き、仕立おろしのスカートは糸屑を弾いた。

「あれは駄目よ、やっぱり」

と、キャスリーヌが呟き、仕立おろしのスカートは糸屑を弾いた。

「なにがってさア、いくら締めあげさせたって、腰を曲げれば隙間が出来ちゃうわよ」

「いやらしい子だねえ、あんたは。あの股布はそんなためのもんじゃないのよ」

と、ベルディーヌがニヤニヤした。

「とはいももの、ああやるときゃ、今までみたいにバツと身繕いして澄まし返るって芸当はむずかしくなるね。ボタン、背中につけときゃなおよかったのに。それも三個なんてシミったれずに十個ばかりさア」

女囚ルーシーがシユクツと嗚咽した。来週あたりは本館個室行きだというのに、ほんの少しのこと、この恥かしさを味あわねばならぬ。

「あたし、もう、面会はイヤよ、こんな恰好じゃ——」

誰かが哀しげに心境を吐露し、まわりの女囚たちも鼻を吸り、忽ちキャスリーヌがピカピカの白靴で飛んで来た。ビンタが鳴り、女囚は恨めしげにキャスリーヌを見た。

キャスリーヌ婦人看守は新モード制服に夢中となり、入念に仮縫いして注文たらたらの御仕立て振りだ。ちょっと気付かないところに凝っていて、そのセンスの数々を早く気付いて欲しくてウズウズしている。なにしろ、彼女にいわせれば、仕立てと着こなしのセンス次第では、エール・フランスのストチュワールデスそのもののエレガンスぶりを発揮できるんだそう。

ミシユリーヌは革サンダルを素足に穿き、立ち上って股布をしごき、微かに頬染めて両手を背に握り、そして、イヴェットの姿を求めた。

まあ、よく似合うこと。ピカ一だわ。そうね、もうすこしスカートが短かい方が、なお似合うんじゃないかしら——

ミシユリーヌの眸がイヴェットとカチ合った。ミシユリーヌの姿にイヴェットの双眸が

うろたえ、見る見る悲しげに伏せられる。

私のことはいいのよ、イヴェット。女囚なんだもの、どんな恰好させられたって当り前のことよ。そりゃ、少しは情けないけど——

ジョアンヌ女史が見渡して注意を与えた。

「みんな着たかい？ 新しいドレスってのはお互いに気持ちいいわね、フフフ。いつもキチンと着てるんだよ。私たちをぞろぞろ。お手本のつもりで毎日プレスして来るし、襟だって真白にしてるからね。いいかい？ まず第一に、両脚の裾口を膝から上にずらせちゃいけないよ。それから——」

袖まくりしてはいけないのは今までどおりだが、股布の留めボタンが外れていると懲罰だと脅かされた。要するに、股布のボタンをいじるときは監視付き、というわけだ。

女囚たちは女性としての想いを双眸にこめて、婦人看守たちの衣裳を見やるのだった。

いままでの制服は威厳第一にデザインされていたのだが、新モードは優雅さを強く打ち出している。凜とした中に女らしさを匂い立たせようと、法務省なけなしの予算をはたいて、デザイナーに依頼された代物だ。

ネーヴィ・ブルーの上下スーツは大きな襟の純白と調和し、袖口に覗くブラウスの手首



には優雅なフリルが見える。いかめしい革バンドは姿を消し、上着の金ボタンも今度はシングル三つボタンで、ウエストも好みのままにキュッと締めていた。

ベルディーヌさえもが数段上の女っぷり、女囚たちは劣等感に打ちひしがれ、床こすりつつ横眼で盗み見るのだった。

「どうだえ、新形お仕着せは働き易いだろう？　こら、仕立おろし早々に汚したりして」

ベルディーヌが九房のあばずれたちをからかう。ベルディーヌがいうとおり、裾の窮屈なワンピース獄衣よりも働らき易い。しかし女性の身としてはスカート風のものが恋しいのだ。いかに九房の骨太たちとはいえ女は女で、ベルディーヌのスカートをちらと見やって眼を伏せ、悲しげに鉄格子をこするのだった。

食卓に就いた女囚たちの風情を眺めて、ジョアンヌ女史はうなずいた。コリンヌ課長の狙いは正しかったらしい。全女囚がいつになく打ちしおれて、いとも神妙なのだった。予想以上に利き目があるわねえ。そりゃまあ、あの恰好じゃ無理ないよ。吹き出しちまいそうなもの——

ジョアンヌ女史は、ゆるみ勝ちの頬引き締

めつつ、満悦したのであった。

食後の僅かな休憩のとき、ミシュリーヌはおずおずと声をかけた。

「——あの、イヴェットさま。靴下にシワが寄ってますことよ」

ミシュリーヌにとっては、イヴェットの容姿が、心ひそかな誇りなのだ。囚われの女として叶わぬ数々を、せめてイヴェットの姿に見出したいと思うのだった。機会あるごとに化粧をすすめるミシュリーヌでもあった。

イヴェットは、女囚の大きな瞳をちらと見やり、黙って屈み込み、涙をこらえて靴下を直す。忽ち、女囚たちの眸がキラキラと集中し、しなやかな脚包むナイロンに穴をあければかり、羨望と悲哀に燃えて哀しく光った。

「ねえ、担当さん」とクリスチーヌがいう。

「お道具、どこに納ってますの？」

イヴェットは苦笑いした。婦人法務事務官必携の道具をば、スタイルを損なわずして如何に身につけるか——それがデザイナー苦心の点だ。

「まじめにさえしてりゃ、そんなもののご厄介にならないで済むでしょう？」

クリスチーヌは肩をすくめ、キャスリーヌがスカートを翻えしてやって来た。香水の匂

いに、女囚たちは鼻ひくつかせて吐息を洩らし、イヴェットは眉を微かに寄せる。

「そんなに気になる？　でも、安心してこれいいのよ、ホラ」

キャスリーヌは上衣のポケット左右から、それぞれ掴み出してカチャつかせた。革ロープは、束ねて上衣の裏に吊ってある。警棒は殆んど無用なので、必要なとき以外は携帯しなくともいいことにされていた。

「ね、ちゃんと持ってたんのよ。重くてイヤなんだけど、でも、お前たちを真人間にしてやるための物だもの」

クリスチーヌは肩をすくめ、そして感心した。手錠を戻し納めたポケットは、全然型崩れがない。

「ねえ、担当さま。そのお化粧の仕方を教えて下さらない？　何をお使いですの？」

と、三七四号の元文部省秘書嬢が眼を光らせた。キャスリーヌの化粧は匂やかで、なんだか透き通るようだ。キャスリーヌは鼻うごめかせて得意そう、しかし、歩み寄ってピシヤリと平手打ちをカマせた。

「お前は、まだ化粧品代は要らないの。年季が明けたら試験問題を教えなげろ。ホホホ」元文部省秘書嬢は肩をふるわせた。彼女は



仮釈放を却下されたばかりなのだ。

キャスリーヌはダイアナをからかった。

「布製、ベルト」の締め心地はどう？」

ダイアナは声もなくうなだれ、起立の号令がつんざいた――。

一週間後、ルーシーは本館個室へ移され、代って三二三号が転房して来た。個室行きのある日は、大抵、新入獄女囚が来る。いや、それは逆であって、新入りが来るから押し出して貰えるのだ。

ルーシーは、一糸まとわぬ姿で獄衣を洗濯し、いそいそとロープに干した。そんなルーシーを、女囚たちは横眼で睨み、いまいましてに朝の掃除に追われる。ミルドレーヌやシモーヌとて、口では祝福しながらも、羨望の色を禁じ得ないのだった。

「もう、こんな服を着ないようにおし」

ジョアンヌ女史が勿体らしくお説教をし、ルーシーは食卓の女囚群に向って立って、別れの挨拶を告げた。礼儀というものを躰けてやらねばな

らないので、紋切型の言葉はいささか長い。

トチると個室行きを延期だと脅かされて、看守長デスクの前で、リハーサル充分のセリフだ。もちろん、ルーシーはすらすらと述べ立て、あばずれたちが舌打ちした。

監舎での最後の身検――全身を染めたルーシーはブルネットを掻きあげ、イヴェットが手をポケットに突込むやいなや、さも嬉しげに両手をそろえた。一刻も早く、この監舎の灰色から連れ出して欲しいのだ。

ハダシを床に足摺らんばかりのルーシーはイヴェットの手錠をいそいそと受け、その白

い背を見送るミルドレーヌは唇を噛む。思えば、二人は同じ日に自宅から下獄したのだった。ミルドレーヌが悲哀を噛みしめるのも無理からぬことであった。

昼食のときにお目見得した新入りは三十四五号――眺めて女囚たちは首を振った。

「ヒャーッ。ポンポン大きいチャン」

「あれだと、そう、かれこれ七カ月かな」

とりわけ、シモーヌはわが身にも覚えあることとて、忽ち同情して涙ぐんだ。あの栗色の髪の毛の三十女も鉄格子の中で赤ん坊を産み、片足を鉄鎖に繋がれたまま乳をふくませ、因果な生まれの吾兒の寝顔に涙

することであろう。どうやら一監の都合がつかなかったらしい。――コリンヌ刑務課長が二階労役場に現われて、婦人看守たちは一斉に踵を鳴らせた。

封筒張りの女囚たちも身を硬張らせ、なおも労役にいそしんだ。何のかのと陰口叩いてはいるものの、女囚の身にはコリンヌは絶対的存在だ。そっと盗み見て、それでも女





囚たちは齒がみした。濃い金髪を高々と結いあげたコリンヌは初夏のモード、灰色の労役場にはまばゆいほどの華やかさだった。

女囚たちは、このみじめな新獄衣が誰のお陰によるものか知っている。女囚たちは胸熱くして涙ぐみ、コリンヌは平然と見回した。

刑務課長が巡視するのは当然のことだし、地位ある女性として、このくらいの粧いは地味過ぎる。七月の夏空もすぐ来るのだ。

「そうそう。ここには元女医がいたわね？  
それも婦人科の——」

「はあ、三八五号です」

「そう。こないだ身重のが来たでしょ？ 同房にしといたらどう？ ジョアンヌ」

「ええ。そうも考えましたけど——。でも、あの女はもう資格がありませんものね。かえってどうかと存じまして——」

「それも一理だわね」

コリンヌはあっさりと引き下がり、ミルドレーヌはホッとした。衆目の見るところ、第十一房の住み心地は三監ピカ一なのだ。それに、初めは同情したものの、三四五号の身重女は案外なあばずれで、お腹の子も父無し子らしいし、犯した罪は放火殺人、科された刑は二十二年、と凄まじい女だ。自分が十一房

を出るにしろ、向うがやって来るにしろ、そんな極悪罪人の女と同房するのは、赤ン坊には済まないとはいえ、ミルドレーヌはご免こうむりたかった。

「その産婆さん、じゃなかった、女医さん、どこにいるの？」

ホッとしたミルドレーヌは忽ちわななく。

しかし、威丈高に番号よばれては致し方なかった。ミルドレーヌは深々と面を伏せ、唇をそっと噛みしめ、コリンヌのドレスの裾近く、革サンダルの固さに悩みつつ正座した。

「ここじゃ、お前が最もインテリだわね？」

コリンヌはそういうが、大学出の女囚は他にも三四〇号がいる。しかし、刑務課長とも相成れば、女囚一人々々の学歴教養のほどなんか、いちいち憶えておれるものか。ジョアンヌ女史も黙っていた。女史は、瞳と態度とで女囚を判別する主義だ。

「三八五号ッ」

コリンヌは凜としていい

「——は、はいッ」

ミルドレーヌは飛びあがって答えた。情けないもヘッタクレもなく、番号呼ばれて返事を怠った懲罰は怖ろしい。ことに、相手は刑務課長コリンヌさまなのだ。

「どうお？ 新しい服の具合は。え？ 生理的に見て機能的でしょ。教養ある服役者としての感想を聞きたいのよ」

床につかえる女囚の両手が口惜しくよじれる。あたりの女囚たちが齒を喰い縛り、ミシユリーヌも腹立ちを押えかねた。

「——あ、あまりといえば——あんまりでございますわ——こ、こんな恰好の服——」

ミルドレーヌが床に両掌を揉んで、突然鳴咽し、涙声で怨嗟の声をあげた。

「あーら、どうして？ 誰か笑った？」

コリンヌは満足げに見下ろし、その背に加えられようとした革ロープを制した。新モード囚衣のみじめさに女囚たちが哭いてくれるほど、コリンヌは満足を感じるのだった。

ミルドレーヌは嚙りあげて身を揉み、女囚どもは心中応援の声をあげる。声援したところで仕方ないが、せめての憂さ晴らしだ。どうせ、痛い目に縫うのはミルドレーヌ一人だけ、という気持だ。

「いいこと？ お前、いったい囚衣というものをどう考えてるの？ 服役者が身にまとう物はね、寒さ暑さを何とか凌げれば、それでオンの字なのよ。教養が聞いて失望したわ」  
「あんちきしょうめ」



と、あばずれが呟く。

「なら、夏になったら脱がせやがれ」

敏捷なキャスリーヌが張り切って駆け寄った。いきなり背に革ロープの一撃、そして髪を掴んでゆすぶり、鮮やかに嵌口具を締めあげた。呟いた文句を聞き取っていたなら、とてもじゃないが、このくらいでは済まない。

「お行きッ」

象牙色のハイヒールが床を踏み、ミルドレーヌはおののいて腰を浮かせ、恐怖に耐えかねたか、再び膝を落として這いつくばった。

「——飛んでもないことを申しあげてしまいました。もうしわけございません。おゆるし下さいまし——おゆるし——」

「うるさいわね。看守長さまに、あとでゆっくりお詫びするのよ。うるさいったら」

ミルドレーヌはよろよろと戻った。

「ところで、MOMP Eの錠前はどうお？」

役に立つかしら」

「そりやもう——。いえね、それがなんですのよ。つまり、ベルトが足りないもんですから、その代用にね、ホホホ」

「どこもそういつてるわ。そんなにひどいのかしらねえ。そりやまあ、初夏の候は悩ましいけどさあ。ホホホ。ねええ、マリー」

コリンヌは、旧富豪令嬢のマリー婦人看守と親しいらしい。ジョアンヌが肩を寄せて

「つまりねえ、新デザインのお蔭で摘発し易くなっちゃったのよ。ねえ、マリー」

マリーは、どうかするとキャスリーヌよりも摘発件数が多い。もちろん、ベルディーヌは別格だし、摘発ゼロのマジョーリには匙を投じているジョアンヌ女史だ。

「そうなのよ。おかしいと思ったら、動くなと命じっていて、毛布脱がせちゃうの。大抵は身仕舞い未完了でアウトですわよ、ホホホ」

マリーはおかしそうに笑った。この娘にして見れば、不埒行為の摘発ごっこは愉快なゲームのつもりかも知れない。

「いっそのこと、全員のMOMP Eに鍵かけちゃう？ どう、ジョアンヌ？」

コリンヌは笑っていい、未施錠の女囚たちは顔をしかめた。所定時刻以外に用便の許可を願ひあげるさえみじめなのに、その都度、鍵で錠を解いて頂かねばならない屈辱は、充分に想像できる女囚たちであった。

そして、コリンヌ課長は新らしい差別処遇の方法を思いついてニンマリしたのだった。女囚たちの怨嗟に満ちた眸——それらを平然と刎ね返して、コリンヌは悠々と見て回っ

た。ジョアンヌ女史がまたもこぼす。

「ねえ、課長さん。『ベルト』の装備数をもう少しふやせないかしら？」

「さあねえ。もっと労役強化しようかしら」

コリンヌは言葉を濁した。『ベルト』は正規の装備品ではないのだ。

ミルドレーヌが作業椅子を滑べり降り、その場にうずくまって床にしがみついた。

「課長さまッ、おねがい。さっきのこと、おゆるしになって下さいまし——」

ドレスの後ろ姿に追いつがって赦しを乞うミルドレーヌだった。入獄してしばらくの間というものは、打ち砕かれた自尊心のかけらにしがみついて、しばしば痛烈な抗議さえ敢行した彼女であったが、いまの彼女には既にもう、ただひたすらな、卑屈とも見える屈辱を示す忍従の姿勢あるのみであった。

「うるさいったら、もう——」

コリンヌは舌打ちして振り切りもせず、ジョアンヌ女史が部下に合図した。キャスリーヌが駆け寄って腕をねじあげ、立たせてビンタ数発が鳴り、ミルドレーヌのMOMP Eには錠前が与えられた。

「お気に召さないのは柄？ それとも仕立？ どっちにしても、勝手に脱がれちゃ困るの」



「——こ、こんな——着せられてる服にまで鍵かけられるなんて——」

ミルドレーヌは双腕を絞り、腹部にぶら下がった小さな錠を悲しく見下ろし、のろのろと股布を股間に潜らせたのだった——。

コリンヌ課長の指示により、新しい差別処遇がつけ加えられることになった。

性的な反則をここ一年間犯していない者を除いて、全女囚は下半身の獄衣に鍵をかけられて仕舞ったのだ。施錠を免がれた女囚は、三監では数名しかいなかった。第十一房ではシモーヌとロレッタだ。そんな清らかな女が二人もいるのは十一房だけだった。ロレッタというのは三二三号で、ルーシーの代りに転房して来た中年女囚——例の再審悲願の夫殺しだ。

夕食前の一刻、女囚たちは一列に並んで尻に股布を垂らし、短かい上衣をかかげて立った。順々に錠がかけられて行き、迫って来る金属音にミシュリーヌも鼻吸る。

「えらくシヨげちゃってること」

入荷したばかりの新品シリンダー錠——それを入れた袋を手にキャスリーヌが笑った。「鉄の首枷を嵌められるわけじゃないのに」「そうともサ」

と、施錠担当のベルディーヌがシリンダー錠を掴み出す。ベルディーヌ向きの仕事だ。

「脱ぎたいときは鍵解いてやるわよ。チャンと規則どおりにお願ひすればね。こら、もつとバンドを締めな。二穴ばかりゆるいよッ」

ついにミシュリーヌの番が来て、尾錠にカチリと錠が鳴った。そのみじめさに、ミシュリーヌの胸は締めつけられる。鋼鉄色に鈍く光る小さな錠前——それを見下ろして彼女は涙をこらえた。これからは、鍵で解いて貰わねばどうすることも出来ない。脱ぐことはおろか、ずらせることも出来ないのだ。

彼女は、そのたびに味あわねばならぬ屈辱を想った。その屈辱を既に満喫している連中が、仲間のふえた喜びも露わに歯を見せた。

女囚たちは食卓に坐って溜息を吐き、股布の上から錠を腹に押えまさぐり、怒りと悲哀をこめて呟き合った。

「ちくしょう。いくらムシヨだといってもさア、おベベにまで鍵かけやがるとはねえ」

「あたしゃもう、泣きたいよ。初めて手錠かけられたときの気持だね、まったく」

ミシュリーヌも同感だ。錠と鍵は当然の身とはいえ、いくらなんでもみじめ過ぎる。

「ああ、苦しい。おマンマ食べるとお腹が張

っちゃって。でも、ゆるめられないんだよねえ。このバンドの奴ったら、もう——」

「三カ月無反則なんて芸当、あんた出来るかい？ クシヤミやらかしても反則なんだよ」

このMOMPEの錠は、無反則で三カ月を勤めれば除いて頂ける。

「とてもとても——。ま、こちとらは満期まで、此奴ブラ下げて暮らすこったね。自分のものを垂れるのに三拝九拝さ。いまいましたら。ちくしょうめ、看守の奴等、乙な服なんか着て澄ましてやがる。スカートに鍵かけてやりたいよ」

「バカ。スカートなら脱げなくたって平チヤラさ。ふん、なにサ。観光バスの車掌みたいじゃないか。とはいっても、口惜しいねえ。勿体つけてさア、あのポケットから面倒臭そうに鍵取り出しやがるこったろね」

「あたしゃねえ。この錠も錠だけど、早く甘い物を食べさせて欲しいよ。泣き言いうわけじゃないけどヒガンじまう」

コリンヌは、土曜日には甘味品を与える慈悲を示しているのだが、それも差別処遇の手段に使っていて、二十名ばかりのあばずれたちが土曜の夕方ごとに指くわえて見せつけられている。



女囚たちは打ちしおれて監房へ叩き込まれた。今夜からは、危険を冒してのスリルに満ちた行為——あのひそかな悦びとも縁切れになっちゃった。革と鋼鉄の「ベルト」を素肌に着されては観念してしまうが、なまじ布地だけで掩われているのだから、かえって悩みも深かろうというものだ。

ミルドレーヌは独り広間に残り、唇噛みしめて手錠を受け、謹慎房へ叩き込まれた。

これもコリンヌが初めた差別処遇の一つであって、受刑者としての反省と自覚を促がす手段だそう。例の特別監房、すなわち暗房六個のうち三個が改造されて、鉄扉が鉄格子になっている。漆黒の懲罰房は残虐だというわけで、そこへブチ込むまでの中間的処遇として、狭い独房で寝具なしに過ごさせ、充分に反省させようという次第だ。革手錠付きの重屏禁より遥かに楽ではあるが、その代りに謹慎は長期間が多い。コリンヌ課長に噛みついた一幕以来これでもう約二週間、ミルドレーヌは独居謹慎の憂き目に逢っている。

ミルドレーヌは独房の前でよろめいて啜り泣き、マリー婦人看守に背を押されて突き入れられた。しかし、ミルドレーヌはまだいい方なのだ。期間こそ一カ月以上の不定期罰だ

が、昼間は通常どおりに労役に出して貰えるのだ。労役禁止の重謹慎ともなると、日がな一日を正座の苦吟に喘がねばならない。

ミルドレーヌにして見れば、孤独の夜は平気だし、この季節では寝具も要らぬ。彼女は、その差別感が悲しいのだった。さらに悲しいのは、文通と面会の禁止なのだった。ジャンヌ婦人看守の事件以来、やっと解かれて涙の面会も唯一度、その夫との鉄網越しの逢瀬がまたも絶ち切られてしまったのだ。女囚ミルドレーヌは固い床に脚を折り、手錠の両手を腿において、閉じる鉄格子扉に哭いたのだった。

新モードみじめな獄衣は両脚をビツタリと包み、女囚たちは七月の暑さに喘いだ。やっと赦されたミルドレーヌが戻って来て八月になり、婦人看守たちは交代でバカンスとやらに姿を消し、女囚たちはそのたびに歯ざしりして鉄格子を見詰めるのだった。

クリスチーヌさえもがロレッタの無実を信じるようになり、シモーヌまでがついに施錠されてしまった。

「なんだって!! 私を明きメクラだと思ってののかい? 痒いから掻いただけだって?」  
夜半、シモーヌは身もだえて赦しを乞い、

ベルディーヌは情容赦なく顎をしゃくった。

「服の上からでも掻けるさ。ボタンが二つもはずれてちゃダメだね。大体さア、子供の三人も産んだ女が我慢し通せるわけがないね。いままでだって怪しいもんだったよ。こら、バンドを出すんだ、バンドを——」

シモーヌは涙こぼしつつ、獄衣に鍵をかけられた。

「ちえっ。いうにことかいてあの言い草ったらどうだろ。え?」

第十房のあばれが呟いた。

「我慢できないってこと、分ってるんじゃないのさア。ちくしょう——」

「そこをグッとこらえるのが修行よ。女囚の道なんだって」

「お前さん、コリンヌの親類かい?」

「ウンニャ。あの女の家庭教師してたのよ」  
こんどは九房のあばれが鉄格子にしがみついた。

「ベルディーヌさまア。用便おねがいしますわ。おねがい——」

しかし、ベルディーヌは赤毛をジロリと見やり、そのまま寝台へ追い戻した。この暑さで、そんなことがある道理もない。東の間ながら下半身に風を入れ、あわよくば一撫で



も、という根性だろうが、ベルディーンにかかっては悲願も空しかった。

——ミシュリーヌはビーズ玉通しの手をとめて、下半身を硬直させて息を詰めた。見かけに似合わず強健な体の彼女だったが、こんどばかりはどうしたとか、予定より三日ばかり繰上がって仕舞ったらしい。

ミシュリーヌは泣きたい心地だった。というのは、今日はイヴェットが非番なのだ。ヴァカンス休暇も返上してミシュリーヌ奥さまを見守るイヴェットだったが、そんな彼女でも月に二、三回の休みは取る。マジョーリは親類に不幸があつて欠勤だし、モレシエンヌは暑気当りでこれも休み——だから、今日の第三監舎は峻厳格の天下だ。

ミシュリーヌは作業椅子からまろび落ち、通りかかるベルディーンに膝で這い寄った。「なんだって？ ハッキリ云いな」

ベルディーンは分っている癖に空トボけ、ミシュリーヌは首すじまで染めた。イヴェットやマジョーリならば、眸を伏せて「あの、おねがいします——」と云うだけで事は足りるのだが、峻厳格の首領にかかつては——。

「私に云えばいいのに——」  
とマジョーリが呟いた。しかし、ミシュリーヌ

にして見れば、イヴェットは別として、若い娘にそんなことを願ひ出るのはうら悲しい。

「どうお？ あの風情。夫に懷妊を告げる新妻ってとこね、楚々と恥じらっちゃって」

そう云ってフィリスが笑い、獄衣の腿つまむ女囚を小突いた。

「すみません。だってねえ、担当さん。ピツタリ包み込んでやってんだもの。風通しが悪くて蒸されるったら、もう——」

「おや？ 口答える気？ 靴下穿きたいって泣いてたじゃないの。ちょっと厚手だけどもかく念願叶ったのよ、嬉しがってくれなきや。柄模様の靴下と、錠前付きガーター。ホホホ。こら、ビーズ玉の順番が違ってる」  
女囚は鼻の汗を押拭い、折角通したビーズ玉を抜き取って溜息を吐いた。

ミシュリーヌは肉体の奥底で必死に押し止めながら、床にうずくまって待ち侘びた。ベルディーンがゆっくりと戻って来て、手にした物を膝に投げ与えた。

「階段の昇り降りには、もう——」  
と、大袈裟に額を拭う。

「——すみません。お手数かけて——」  
「立ちな」

ミシュリーヌは腿潮張らせて立ち、股布を

後ろに垂れ、尾錠の南京錠を指で支えた。この錠を解いて頂くときのお作法なのだ。ゆっくりと鍵が回され、やっと尾錠が解ける。

労役場の隅に二ヶ並ぶ便器は、無論囲い一つなく、むき出しだ。

「ここでおやり。あらま、やっぱりおトイレに入っちゃうのかい？ 仕様のない女」

ベルディーンは意地悪くついて来て、真正面から打ち眺めるのだった。

「しっかりナニしとくんだよ。あとで造作更はダメなんだから。早くするんだ」

ミシュリーヌは全身を染めて装着し、モンペの尾錠バンドを締め、上衣の裾にかけて悲しく施錠を受けた。小さな鋼鉄がカチリと鳴って腹部にぶら下がる。毎度のことながら、その音は腹の底に響いて悲しく、千斤の錘りが吊り下がったような心地だ。

股布をたくし上げて締めあげ、固いボタン三個を懸命にかける。見下ろすので頭が垂れ下がり、その首に、いきなり赤机をかけられた。ゴム紐がパチンと首の回りに音を立て、眼前でベルディーンが両手を払う。

「ありがとうございます。お手数かけまして申しわけございません」

ミシュリーヌは床に両手をつかえた。相手



が相手だから、最大限の礼を尽しておかねばコトだ。マジョーリあたりならば、感謝を形に示そうがすまいが意に介さないし、イヴェットなんかだとかえっておろおろする。生理中は気が昂ぶって悲哀感も一しお強烈——だから、ミシユリーヌもイヴェットの足許に這いつくばって、裏返しの意地悪をやって仕

舞うこともある。そんなときのイヴェットの狼狽ぶりは気の毒なくらいで、ミシユリーヌは後悔するのが常であった。しかし、ベルデイーヌともなれば威風堂々たるもので、女囚の分際で一人前の女並みとは生意気な、という気構えだ。「ふん。ホントに厄介だねえ。さあ、とっと

と仕事しな。娑婆じゃないんだから生理休暇なんてないよ。それどころか、いろいろと余計な物を消耗するんだからねッ、余分に稼いで貰わなくちゃ——」ミシユリーヌは胸詰まらせて作業椅子に戻ったのだった。

(未完)



## 近頃思うこと

津 治 良 一

一年くらい前には、筆欲旺盛で、あれこれ考えては投稿しようと思っていたのだが、仕事が忙がしくなるにつれ、読むだけがやっという有様になり、もうそろそろ奇クともお別れせねばならんかと思っていたところ、四月号に小生の小説が載っ

ていたのに驚き、書きたいという意欲が再び湧いて来たものだ。他人の書いたものを批評するとはすこぶる容易だが、いざ自分が書くとなると、思うようになかなか筆が進むものではない。よくもこんなものを書いたものだ、と自作の活字に冷汗を覚えた。

奇ク誌上に大作、『花と蛇』がある以上、他の小説は不利をまぬがれ得ないだろうと自らを慰さめている。その『花と蛇』だが、五月号で新しい展開を見せ、次にはどうなるのだろうか、またまた読者の気をもませる気配である。これ程、長く続けば、そろそろ種

もつきて良い筈なのに、今度はシスターボーイの登場と相成りジャジャ馬、京子をねちねちと責めあげ、屈伏させようというアイディア。こうなると体力に乏しい小生などは、毎月々々、団鬼六氏にねちねちと責められていくように、一体いつまで続くのか！と悲鳴を挙げたくなってくる。これからまだ秘密シヨの場面があり、静子夫人の妊娠、及び妊婦シヨなどと続きそうなことを思い合せると、実際に、完結するものかと心配になってくるし、団氏の健康状態が気づかわしくもなってくる。切に団氏の



健康をお祈りする次第である。

○ ○

四、五月号の告白に女装のことが掲載されていたが、これが奇妙に小生の注意をひいた。もと

とも小生は、奇クは娯楽誌としてみている。これを読んだから、アブになるというようなことは、先ずない筈だと思っている。だから、この告白のようにミイラ取りがミイラになった恰好のものはチと頷き難いのであるが、ともあれ小生は「女装」という文字に、妙にゾクゾクとし、腹の底からジーンと熱いものがこみ上げてくるのを覚えてしまう。井風呂秋於氏の写真を見ると、すこぶる「美人」で、小生もあのようになれたら、と嘆息することしきりである。

美しい女性を見ると、人並みにああいふ美人と付合いたいと思うと同時に、あのように、人の注目を一身に浴びてみたいも

のだと思う。華々しいSM小説も結構だが、この種の女装の告白ものもどしどし採り上げてほしいものである。

○ ○

どんな偉人にもその本性には醜い面があり、隅から隅まで清潔な人間はいないという、この分りきったことを知りながら、なぜ人々には良い面のみで自らを飾ろうとするのだろうか。一般的には醜悪ときめつけられている面もまた人間的で、恥ずべきことでは決してなく、逆に、人間である以上、そういう面がなければならぬとさえいえるのではないだろうか。こういう分りきったことを、敢えていわなければならぬ点に、小生は現代の人間は解放されたといっても、まだまだ充分ではないという論の根拠があると思う。

先日、ある新聞で、石坂洋次郎が三木清について語ったという記事が眼についた。

「三木清は書齋にはいつでもものを書く前に、妻が便所で用を足す姿を飽かず眺めて、妻の醜悪無残な姿に嫌悪感を催すまでにしたそののである。というのも、そうしないと仕事中にセックスを催すと困るからだそうである。」

あの哲学者、三木清にしてこうなのであるから、我々凡人に至っては論をまたない。今のこの瞬間にも、善なる吾が隣人もまた「いかがわしき想い」に悩んでいるのではないだろうか。

もっとも、この話を知って真似をしたくとも女房に云い出すことが出来なくて、妻にそうことをさせられる三木清の勇気をうらやましがっているハズ族も多いことだろうと思う。こういうことはなかなか出来ることではない。そういう点を考えると、三木清なる人物はやはり強者で「偉人」というにふさわしいかも、知れないのである。

○ ○

人間が生きたために、他の動物でも植物でも、総べてが犠牲になっている。人間の都合だけで、益と害、味方と敵、がハッキリとしかも簡単に定義づけられている例は、枚挙にいとまのない程だ。人間の側から云えば当然といえるだろうが、地球全体、いや宇宙全体からみれば、これは実に横暴で残酷な生物といえる。人間より強いというだけで、兇暴の名を無条件に冠せられ、攻撃を受けている動物は数多い。害意の有無を問わずに追われる側にとっては、これはまことに心外といえるだろう。この現象と似通ったことを、S Mマニアが現代社会の中で受けているとはいえないだろうか。

どうも、うまく云い表せないが、小生は何かそんな気がしてならない。



懸賞募集入選作品

＜ 創 作 ＞

妖<sup>よう</sup>縛<sup>ばく</sup>の果<sup>は</sup>て

秤

蕩

也

遊 の 章

美保は、湯上りの火照った身体を押しつけてきた。

そうして、羞しそうに自分から両手を背中へ廻すと、例の——妖しい恋縄の炎をその瞳いっぱいに見ながら早速プレーの催促をしてきた。

ところが、その夜の私は、考え事に気を奪られていたため、彼女を縛り始めてもついそ

の手に力が入らなかったらしい。

「いやン、もっと、きつく縛って……」

いつもと違うわ、とでもいうように彼女は甘ったるくイヤイヤを繰り返すのだった。

縛って貰う以上は、やはりいつものように厳しく鋭く締め上げて貰いたかったのであるう、真赤になった顔を深く俯向けて、

「ごめんなさいね。今夜のあたし、なんだかおかしいでしょう？——でもあたし、今夜は何故かうんとむごく縛ってほしいの。思いき

り苛めてほしいの……」

内心のうずきを露わにして、熱っぽく身悶えするのだった。

彼女のこんな可愛い不満や訴えを聞かされて、私はあわてて我れを取り戻すしかなかった。そして、あっさりと考えごとを中断すると、急いでこの現在のプレーに身を入れることに決めた。

「いや、そんなことはない。気のない縛り方をしたばかりのほうが余程おかしいや」



とまだ羞しそうに俯向いている彼女の背後へ坐り直すと、手首から、今度こそは強く強く締め縛っていく。

——三日にあげずプレーを繰り返している私たちは、その都度に狂おしく哀しい悦楽の境を分ちあってはいたが、当然これにともなう彼女の被縛意識も華々しく開花を遂げてゆく様であった。すなわち、これが限度だとばかりにいくら強く締め上げても、のけぞり喘ぎ唸りながらもいつしかその顔に——深淵に漂う藻の幽玄さにも似た、美しくおぼろな歓びの色が刷き初めていくことであった。

また普段の何でもない時でもそうである。

ふと見合せる彼女の瞳の中に、きっかけもなく、不意に青白くきらめく被縛への郷愁の炎が、何か私を誘い挑発して止まぬげに燃え立つように感じるのであった。

そうして彼女は、ひとたび肌に縄を受け、思いつくままのあらゆる責めを続行された瞬間には、その『恍惚とした苦悶』のうちに、やがて綺羅びやかな虹の感覚を激しくこなごなに砕き散らしてしまうのだった……

この夜もそうであった。

縛り直した緊縛の身を、刷毛擦りであぶら汗を浮かばせてやった後、今度は私が好んで

責め具とする靱がら袋を利用しての非情な縦ロープを加えてやると、

「いや！ それだけは堪忍してっ」

髪を振り乱して哀願しつつも、肌を染め瞳をうるませていくのだった。

「立てっ。立ち上るんだ。罪人のお前は曳き廻されなければならんだ——」

私は、興奮に浸ってゆくそんな彼女を、情容赦もなく力まかせに引きずり起し、あられもない恰好で足を縫いさせてよろけかけるその臀部を蹴立てる。そうして、

「それ歩け。お曳き廻しだ！」

縄尻とって部屋中を追い立てるのだった。

「ああ、お願い。許して……」

ぎこちないがに股の歩運びで、次第に汗にまみれてきた顔にはほつれ髪をねばりつかせた彼女は、呻くように唄うように、声もか細く私に許しを乞う。

「馬鹿め、今さら堪忍しろとは虫が良過ぎるぞ。泣いたって駄目だ。そんなことよりも念仏のひとつでも唱えていろ！」

「ああ、もう、歩けない……」

「いかん、お仕置の場へ着くまでは立ち止ることなど絶対に許されないぞ。歩け、歩け。」

——ホレ、沿道の見物人達がお前のその姿を

凝っと見つめているぞ。さあ顔を上げる、まっすぐに前を見て歩くんだっ」

冷酷な追い責めに彼女のがに股姿は益々ひどくなっていた。そして、部屋を幾廻りかした時、奥の間に敷いてあった夜具の裾に足を取られて彼女は転倒した。

「あっ！」悲鳴と共に、不様に足が跳ね上った。このとき私の足許へとんできたものがあつた。見ると、彼女が苦しく絞らだした汗でびっしょり濡れた靱がら袋だ。しばらく見つめていた私は、袋をつかむと、残酷な妄想に笑みを走らせて、それを喘ぎつづけている紅唇へグイとねじつけた。声にならない声を上げて烈しく顔を振るのも構わず、たっぷりと残っているロープで袋を押さえて即席の猿轡にする。ロープを後頭部でくくり止めると、

「さあ、もう一廻りするんだ、立て！」

私は仁王立ちになって命令した。

顔を痙攣させつつ彼女は、閉じた瞼の端から涙の露を滴らせて、声もなく、むせび泣くのだった。

だが、私は尚も冷酷にロープを引っ張って急きたてる。すると、それでもまだ体力が残っていたのか、いや諦めたのか、彼女は不由な身体をもみながらのろのろと動きはじめ



た。片足を折り曲げて膝頭で起きようとするため、蒼いまでに白い下肢は割れ、その姿態は絶望に、屈辱にまみれた。幾度か起き上りかけては失敗し、失敗してはまたのろのろと起きる。私は瞬きもやめて凝視した。熱っぽい呼吸は次第に苦しくさえなっていた。

とうとう私は、今さっきの大口にも似ず、その悲惨な繰り返しをつづける彼女から視線を反らしてしまった。夜具の枕元に投げ出してあった煙草を啜えてはみたが、さっぱり火をつける気がしない。反らした筈の視線は私の心をせせら笑って、すぐに彼女のほうへ戻っていく。——吐息が詰まり、鼻孔がひらいたとき、私のほうが、負けてしまった。脳裡にチカチカとしたものを感じながら、握りしめていたロープを放りだしていた。

——柱時計の鈍重な、九つの音が私を平常へと引き戻していった。

手首の色も変ってしまつて長々とくずれ伏した美保に気づくと、あわててロープを解きに掛かった。汗をたっぷりと吸いこんだロープは、未練たらしく、重たげに肌から離れてくる。快樂へのうずきを霧散させたそのまろやかな肌には、古く新しくみみず腫れが十数

条、痛々しく名残りを止どめていた。

「どう？ 苦しかっただろう」

ロープを解き終つて、私は夜具に埋まったままの横顔へ寄せると、そっと囁いた。

だが、何も言わない。長い睫が微かにふるえて、小鼻がびくりと動いたただけだ。

疲れ果てて口唇も開かないのか、それともたった今のめくるめく感覚の余韻を、凝っと噛みしめているのであろうか。

いや、これ以上強いて尋ねても、彼女はきつと、そのどちらものよ、と言うに違いない——。

私は、解いたばかりの、美保の次に可愛いロープを小さく輪にして、専用のしまい場所のある隣部屋へと立った。

ロープを仕舞うと、湯殿へ行って残り湯の加減をみた。火照った身体には丁度好いと思つて下着を脱いでとびこんだ。

(あぁ好い気持だ)

快く疲れた身体を温湯がびちゃびちゃ叩いた。自然に睨が重ってくる……

カタン、と踏板が鳴った。

首をねじまげると、腕を揉みほぐしながら美保が突つたっている。視線が合つて何となく微笑むと、(嫌ー！)と言うように笑いな

がら顔をしかめて、不意に湯槽へとびこんできた。

せまい湯槽で美保はそつと頭を私の肩へもたしかけてきた。まだ寝そべっているようなけだるい快さに二人は黙ったまま凝つとしていた。

しばらくして——

眼をとじたまま指先で湯を小さくはじくと美保が言った。

「あなた先刻は今度の金曜日のことを考えていたのでしょうか……」

私はちょっと黙っていたが、やがて物憂くウンと応えた。

「——何だか、金曜日のくるのが恐いみたいだわ」

「そう言えば、ぼくもだ」

「本当に、やる気？」

「オイオイ、何を言いだすんだよ、言い出しべえは君だよ」

「だって、あなただったら、あたしの知らないうちに凄い計画にしちまうんだもの」

「おなじやるなら——きみ！」

「どうしても家の中じゃ駄目なの？」

「考えても見ろよ。こんな家の構造では、そんなこと出来るところって何処にもありやし



ないさ」

「だけど、何もあんなに遠い処まで行かなくても……」

「ふーん、それじゃ、そのへんの公園か、学校の運動場ででもやるか」

「うーん——」

空っとぼけた私の横面へザバツと湯がかかった。あわてて狭い湯槽で防禦の形をとる。

「それでは文句を言わずにぼくに従いてこいよ。——カメラをさ、持って行ってその歴史的な美保の一瞬をとらえるのさ。ぐうんと引伸ばして額縁にでも入れ、この殺風景な我が家を飾るとするか——こらっ、そんなにあばれるな、叩き出しちゃうぞ」

「いやん、あたしのほうが叩きだしてやるわよ」

こりゃとても一緒におれたものじゃない。

私は、(こいつめ、まだこんなに元気なところを残していやがった)と胸の中で嬉しく驚きながら、湯を蹴たててとびだした。

部屋へかえって身体をタオルで拭きながらも、彼女——いや、その女というものの強靱さは、幾分不安でもあったその金曜日の「試験」に対しても、きっと十分に耐えきつてくれるであろうことを、喜びの味で何度もうな

づきをくり返していた。

## 誘 の 章

私が秤蕩也という変な奴と知り合ったのは昨年夏、兵庫県は清流、千種川の川の中であつた。

川の中が初対面の場所とは少し水臭そうな話に聞こえるが、実はその夏、会社の休暇を利用して二泊予定を計画し、かねがね一度は行ってみたいと思っていたその千種川へ鮎掛けに出向いた時のことなのだ。

真夏の盛りに鮎掛けというのもさることながら、鮎掛けとても何分ともド素人のこと、未だ明けきらぬうちに急流へ種鮎を放ってから延々と五時間、タネ殺し専門になってしまつて、正午前にはその三尾目のタネさえ腹を浮かし始めたから、私はとうとう匙ならぬ竿を投げだしてしまったのである。勿論？ 獲物なんて無い。

そのうち下流では、川向うの農家から隊列組んで立ち現れた鼻ったれ小僧共が、バシバシと、騒々しく、水浴びをやらかし始めるし、上流では地元の村人らしい十数人がヤケに景気よく霞網を使って、派手な鮎の川攻めをしでかすし——

こうなつてはこの広い川面に唯一人、神妙に竿を突きだしているのがアホらしくなってヤケのヤン八、私は川原に寝ころんで煙草をふかしはじめた。だが暑さも暑し、今度はえいとばかりパンツ一枚になるや、水中眼鏡をかけて下流の深みめがけてジャブジャブはいつて行つた。ぬるいのは水面だけで、足許の冷たさが実に気持ちいい。

(余程これの方が好いや)

とご気嫌になつて潜つてみると、五時間かかつて一尾も釣に掛からなかった鮎が、いるわいるわ。こん畜生とばかりに、右往左往する矢のごとき銀鱗を追つて水中にたわむれはじめた。

——どれくらい過つたか、鮎をにらみつけているのに飽きてきて、今度は苔ついた大岩の根へ潜つてみた。

そうして、水中で山肌と岩との間の空洞をひよいとのぞきこんだとき、同時に、向う側からも、でかい水中眼鏡をかけた変な顔がこちらをのぞきこんでニタリと笑つたのにはびっくりさせられて、私はそのまま空へ跳ね上つてしまふような勢いで水面へと川底を蹴りとばした。

(くそ、びっくりさせやがって！)



いったい水の中で笑えるってどんな野郎だと、犬掻きでゆるゆると岩を廻ってみた。

するとタイミングよく、それまで潜っていたやがった野郎が待ってましたとばかりに、バシャ！とその面を水面にあらわし、私の顔みてまたしてもニヤリと笑いやがった。

——いや、これ以上彼との初会の様子を並べるつもりはない。

あとは彼の妙に人なつっこいペースにはめられて、いつしか腹立ちも消え、川原へ上って腰を降ろし時間つぶしにあれやこれやと話合っただけなのだが、ただここでその男——秤蕩也なる人物についてちょっと掻いつまむと、これは偶然、北、南と端的に離れてはいたが、私と同じ大阪府下に在住するナントカ屋商店の主とわかった。この兵庫県山奥に彼の妻の実家が在るとのこと、小柄で小肥り、なんとなく物事に意気盛んげな様子と受けとれた。察するに、三十二から五才までの年令とみた。そのくせ、ちょっとオッチョコチョイみたいなどころがあって、その証拠には、初めて知り合ったばかりの夜だというのに、妻の実家へ遊びに来ていた身の上？にも拘らず、彼はビールの函を担いで私の泊っている宿までのこのことやって来た。——結

果は、その夜は私と枕を並べて高軒で寝ちまったのである。

さて、私はここで屁理屈を並べてみたい。というのは、その夜、秤蕩也って野郎がビールを担いで私の宿までやってさえ来なければ——いや、もっと屁理屈的に考えたら、あの川底の大岩の空洞さえ、私がのぞかなかつたら、わざわざこんな話を貴方にお聞かせする必要がなかったと思うことであつた。

その夜を境にして、私を……いや私たちを一年ばかり後のあの恐しい事件へと導いていったのは、何と言つてもこの秤の奴だと思つている。今となつて考えると、運命を憎むよりも、どうしても、この男を憎み

たい。

彼には彼の反論もあろうが、こちらとしては受けつけられない。極論すれば、この世に秤って野郎さえいなければ、私と美保はいつまでも、あの楽しい二人だけのプレーに浸っていられたかも知れないのだから。

恐ろしく、今だに悲しい、あの『山』へ出向かせたのは、実にこの男だ。この秤が因となつていると信じて止まない。——いや、怒りはなるべく押さえよう……。何も彼奴ごと





きを叩く気持のみでこの話を聞いて貰っているのではないのだから。——要らぬ高ぶりをついお見せして失礼しました。

話を、その夜の宿の彼との話に戻そう。

……呟ったビールの酔に煽られて男二人。

まずは四方山話から知ったかぶりの知識披露、何と言っても同じ大阪の人間が、偶然こんな草深い田舎で知り合えたという嬉しさが先立つ所為か、俄然、男二人の話は遠慮のないお色気談義と交ってしまい、そうして私たちの場合、一時間も過たぬ間にまるで十年來の知己のごとく振舞える仲とは成り果てていたのである。

「——鮎の腹をネ、このように、スーツと撫でるんだ。するとネ、オレは途端に女のおヒップを思い出してしまっただなア」

と彼。

「へへん、次に女の話とおいでなすったか。それじゃア、ぼくのほうはネ、どんな紐でもどんな縄でもいいんだ、そいつを見た瞬間に愛しいカアチャンを思い出してしまっ、と斯うきちゃうんだから」

と私。

「——？ 今なにをぬかした？ もういっぺ

ん言ってみろや」

彼は酔眼をとろりとあげた。

「こん畜生、聞いていなかったのか。よしもう一度だけ言ってみよう。よく聞け。ぼくはどんな縄や紐を見ても瞬間に……」

「わかった。そう威張るな。——すると何かお前のカアチャン、そんなに細いのか？」

言われた私は眼をむいた。ふざけちゃいけない。お前は、ぼくの女房を知らないからそんなに失礼なことが言えるんだぞ！

「てやんでえ。こちらのカアチャンは芳紀まさに二十と二つ。もとテレビ女優の凄い美人なんだぞ」

テレビ女優だったって、靴屋のコマーシャルでハイ・ヒールの片方だけ持って画面の端からこちらを向いて、いともニタリと笑うだけだったのだが、とはさすがに言えなかった。

「フーン、それにしちゃ、亭主のお前さんはちょっと老け過ぎてるじゃねえか」

「何ぬかす。これでも二十と九つだ」

「それじゃ、オレと交わねえ」

「ちえ、いけ好かねえよお前さんは。すると何だな、ただ変っているのはカアチャンどうしてわけか」

「お前こそいけ好かないよ。オレの愛妻だっ

て別嬪だぜ。——いや待て、話が混線しちゃったが、さっきの、その、縄とか、紐とか……」

「あれ、お前さんったら、まだ察しがつくのか」

「——」

「フン、さっきから遊びについては通ぶりやがってるくせに。よく聞け、そもそも女と縄と言ったら……」

「——ハッハッハ！ おいおい、まアそんなにイキがるなってことよ。実は、だ」

「何だ」

「実はオレは空惚けてお前さんに花を持たせてやろうと思っていたんだよ。だがヤケに威張りやがるから話は別だ。よし斯うなりや俄然面白くなってきた。オレの大口通ぶりは嘘か誠か、まんずは証拠を見せてやっから、よく見てみろ」

夏とはいえど谷間の夜は肌寒い。引っ掛けて来た背広の上衣を部屋の隅から足でたぐり寄せると、彼は内ポケットから勿体ぶった手付きで角封筒様のものをとりだし、やがてその中から数枚の写真を抜くとゴソゴソと畳の上へ並べはじめた。

「へん、くだらねえ」



「アホ。よく見ろやい。くだらねえ写真なんかじゃねえ。芸術、それも人間極限の美を構図にした芸術作品だ。まずはこのオレが芸術道に、その広範囲に於いてどれだけ足跡を残してきたか、お前さん如き後輩になめられちゃ權威にかかわるから、今ここにそれを示してやる意味に於いて——」

何だか御大層なことをボヤきながら並べていたが、さすがに少し気になってきた私は、爪楊枝を吐きだすと四つん這いになって膳を廻っていった。

「ホウ、縛りだな」

「そう！　まずはゆっくり御覧あれ」

一枚二枚と手にして見て、これは驚いた。

普通の縛り写真ではない。

「男は——お前さんじゃないか」

「そうさ」

「すると、この女性は」

「ミチルちゃんってんだ。ウチの女房じゃねえぞ。覚えとけ」

「そしたら、こちらの写真の女性は？」

「タッタカちゃん」

「なんだ、そりゃ」

「聞くなよ。女性であることには間違いねえや」

「あれ、全部女性が違ってるな」

「あたりきよ。しかもよく見ろ。この緊縛の工合を。まさしく芸術的であろうがな。お前わかるか」

——私は、完全に参った

これでは彼が大口を叩くのも無理はない。

これに比べたら、私夫婦のあんなプレーなんか物の数には入らない、と思った。

十数葉の写真のうち、半分程は「吊り」であつた。ところが、そのバックが、室内は勿論だが野山や谷に、呆れたことにはビル街や運動場、公園らしきもので背景にしている

段になると、まさかと酔醒の眼をこすって仲々信じられない気持ちだ。私なんか吊りどころか、こんなにきびしい緊縛は妻に強いたことすら無い。いや、この世にこんなにも激しく素晴らしい「縛り」があるなんて思いもしなかつた——と言っても過言ではない。

とたんに、彼の丸顔が、まさしく我等が先達みたいなの、風格ある顔に見えてきたから不思議であつた。

「ハッハッ、驚いたらしいな。うん。それにしてもだ。このお前さんが同好の士とは、こりや益々と氣に入ってきたぞ！」

「いやア」

私は頭を掻いた。縄のことを言いだしたのはこちらだから、主客顛倒とはこのことであろう。客としては尻尾を巻かざるを得なかつた。そんな私に彼の方はいよいよ調子よく、

「それではちよっと尋ねるが、お前さんはいったいどのようにして我が愛妻を飼育しておるかな」

と痛いところを突いてきた。

「察するに、この写真よりは、強烈でなからう？」

私はあわてて頷き、

「その通り、まことにお恥しいが、せいぜい狭い家の中へ閉じこもったままで、まア後手に縛ってあちらへ立たせて見たり、こちらへ転がしてみたり、他にしてみたことと言つたら、針金責めか刷毛搦りぐらいなもの」

「いや、それは結構！　仲々に見上げたものだよ、うん」

——何が結構！　だ。自分のほうが結構人をなぶっている。

「すると、吊つたことは無いンだな」

「もちろん！」

「そんなところに力を入れなくていいよ。ところでどうだ。その、元テレビ女優だった我が女房を、別に逆さまでなくても、吊つてみ

「いやア」

「いやア」



「ようという勇氣は持ち合せているかね」

「うーん」

「今度は唸ったか。まさか、吊らせてくれと頼んだとたんにバーンとぶっとばされてしまふのと違うだろうな」

「あたしゃ、敷かれ亭主じゃないよ」

「それならいい。だがもしもだ。吊ってみたという気があるなら、その折りにはこのベテランが含蓄あるアドバイスを、お前さんに授けてやってもいいんだぜ」

「そりゃまたご親切。それなら吊ると決まったらその節にはよろしく頼む、大先輩」

四方山話から、話はとんでもないところへ固まってしまったが、それからというものフル回転で調子の好い彼の『吊り談義』について釣り込まれて数時間、酔は醒めるし欠伸はでるし、やっと寝られたのが午前二時。

——彼<sup>ち</sup>ン家のTELを聞いておいて、一足お先に大阪へ舞い戻って来たのは翌日、夕方のことであった。

△何故私は、彼との話をかくも長々と言ひ連ねたのだろうか▽

それは彼が、彼の話が、私をして——『吊り』というものを、極彩色の錦絵様に感覚せしめたからであり、また、そのことが、あの

「恐しい現実」へと第一歩を踏み出させた理由として明らかであったから。帰りの車中でも窓外をうつろに眺めながら、この吊りという極彩色を塗り初めることへの欲望を沸々と煮え立たせた私であった。

美保も、また然り。

私の遠慮がちな要求に応じて、幾日か後に言った。

「いいわ。吊るして！」

私は勇氣を得て、慎重に、延々と計画を企てていったのである——

## 縛 の 章

初夏の清澄な山気は、この緑の谷間にも満ち溢れていた。

囀り飛び交う山鳥の声にふと耳をかたむけた私と美保は、目的もさることながら、あの大都市の埃にまみれた騒音、雑音から今はっきりと逃れ得た欲びを際立って感じとりながら、いずれともなく微笑みの視線を合わし、胸をひろげて大きな深呼吸をくり返すのであった。

「あなた、ホレ、彼処にあんなにきれいな水が——」

美保は、行手の岩の割目からチロチロと溢

れ流れる真水を指差すと、一服の紫煙に眼を細めている私に言い放ち、先に走った。

馴れぬ山路には相当へばるだろうと予想していたのだが、彼女は案に相違して意外と元氣だ。私より軽装とはいえ、澆刺としているのはむしろ彼女の方だった。

私は秤蕩也から貰った紙切れの地図をとりだし、谷から右方の尾根を仰ぎ見た。

雑木林の途ぎれた処から山腹をちよつと降りた処に、十五、六畳程の平地が有ると記してある。老松が周囲をとりまいて絶好の場所だという説明付きだったが、見廻したところ見当らない。山水の湧く大岩の手前から見上げればすぐにわかることだったが眼の前の雑木が邪魔している所為か平地らしい処もない。

キョトキョトしている私に気がついて、まだ露を乗せている草の葉をちぎって唇に押しあてたりしていた美保も、腰に手をあて一ぱしの恰好で右手を仰いでにらみつけ始めた。

やや薄暗い緑の谷間を背景にして、純白のブラウスにとき色のスラックス姿で立つ彼女は実に美しかった。この美しい彼女のためにも私たちは是非その平地へたどり着かねばならなかった。



私はちょっと登りつめ過ぎたかなと思案してから試みに十米程降ってみた。——だがやはり見当らない。つい舌打ちが出た。

その時。

「あなたっ——」

岩から五米程向うにいた美保が山腹を見上げながら、私に片手でおいでおいでをしている。

「あったのか？」

「ええ。どうやら、あれらしいわよ」

「何処だ何処だ」

大股で駆けて行った。

「ホレ、あそこ」

頬に頬をくっつけんばかりに、しなやかな指が差す木立の隙間をすかし見て、

「うん、どうやらそうらしい」

私はたてつづけに頷いてみせた。

——あの秤の野郎、岩の手前から見ればよくわかると教えやがったが、これじゃア山を降りてきての岩の手前じゃないか。まさか山のてっぺんから転ってくる途中で発見した平地じゃあるまいに、どうも彼奴の調子には合わせられたものじゃない。

「ね、早く行って一休みしましょうよ」

美保は私を見上げて、子供っぽく両手を胸

に合わせた。

（一休みではなく、早く行って、縛ってと言いたいのだろう？）

例の、挑撓するようなうるみをその瞳の中に見たように思えて、俄然私は楽しくなってきた。

「行こう——」

重たく感じ始めていたリュックサックを揺すり上げ、彼女の手を握ると私は雑草を掻き分けて登って行った。

樹間を縫って、彼方の山頂から正午前の太陽が濡れ濡れとした陽光を注ぎかけていた。

膝から下に露をふくませて其処へたどり着いた私たちは、額の汗を拭いつつ息を乱しながら早速周囲を見廻していった。

彼奴の言った「絶好の場所」これは当たっているだろう。その狭い平地に立って感じることは、下から見て想像したよりも、より鬱蒼とした中に在る感じであった。

ピクニックや登山にやってくるような山でもなし、樵が材を伐る候でもない。けもの道すら感じられない雑木の中のこの位置は確かに人眼を遮断した密閉の内にあった。

同じ密閉の内であっても、あの私たちの家の中と違って、比処には、風がある。山鳥の

声がある。僅かながらも陽がある。そして自然があった。

「静かねえ。谷川の音も聞えないわ」

美保はうっとりとして呟くと、赤土の肌を露呈して雑草もまばらな平地の真中へ、ハンカチを敷いてそつと腰を降ろした。私も真似して彼女の横へかがみこむ。

「この土が、あのゴミゴミとした大阪の地へ続いているなんて、嘘みたい」

彼女はゆったりと、この静寂を噛みしめている風であった。

二人はしばらく凝々と眼をとじていた。

「ね、キスして」

不意に美保は私の肩へもたれかかって言った。甘い声だ。

「ねえ」

私は半開きになって寄ってきた胡桃のような唇を、正面から音たてて吸った。

無味に浸っていた私の心に、唇から鼻から現実的な女の肉感、女の匂いが襲ってきた。

私の内部は動きはじめた。

「さ、始めよう」

唇を離すと、余韻に睨を閉じている彼女へひどく端的に言って私は立ち上った。

「もう、始めるの——」



「そうさ、今のキッスで寝ころんじったりしたら元も子もなくなるからね」

「何の話？」

「ま、なんでもいい。——美保、あの松が好い。用意しろや」

「どうするの、用意って」

「決まっている。脱ぐさ」

「ブラウスとストラックスだけ？」

「全部さ」

「——」

「なんだ、笑ったりして」

「と思っていたのよ。どうせ貴方のことだもの」

「何をブツブツ言っているんだ」

平地を見下して、巨きな老松が武骨な枝を張りめぐらせている。

私はリュックサックを開けて、用意の太ロープと滑車などをとり出した。

そして悪戦苦斗が開始された。

まず木登り用のロープを作るため、これと眼をつけた枝めがけてロープを投げ掛ける。

次に一番長いロープを持ってよたよたと枝まで這い登り、平地へ突き出ている太い枝の根へ頑丈にその端をくくりつけた。それから腰に下げていた滑車のうち一つを通しておい

て、そろそろと枝の上を七十センチ程這い出で、残っている滑車がある程度に切っておいたロープで強く固定した。ぶらんと垂れた滑車にロープ（吊り用）を通して、手落ちのない縛りつけをしたかどうかをよく検べておいて、やがてそろそろと地に降り立った。

下から見ると、枝の根から垂るんだロープの手のとどく中央に鉤の付いた滑車があり、ロープはそのまま枝の根から少し離れた固定滑車を抜けて長々と地に垂れている。

私は木登り用にしたロープを解き放ってから、美保を振り返った。

彼女は、何処にも人の眼なんか無いのに、キョロキョロとあたりを気にしながら近寄ってきた。

その肩にひっかけていた衣類を奪い取ると私は、私自作のヘルスバンドをそのウエストに巻いた。これでも苦心の作である。後へ廻って慎重に、しっかりとバンド止めする。勿論吊り専門用に造ったものだから、鉤を掛ける鉄輪の突きでている部分は特に丈夫にしたつもりだ。

次に私は、緊縛用の柔いロープを手にとった。乳房を弾ませながらバンドの加減をみている彼女の後へ廻ると、手首を背中へねじ上

げる。撮影だけの縛りなら手首のところは誤魔化す気にもなるのだが、私は加減しなかった。いつものような後手縛りに締め上げていった。

この『吊り旅行』のために、二週間ほど、プレーを休んでいたから、いつもなら生々しく這っている白い肌の縄目の痣も、その時は微妙な粒子状になって消えかかっていた。

しかし今日のロープによって生じる痣は、いままでになかったものとして覚悟しておかなければならないだろう。

「きびしいのね。こんなにきつく縛られちゃって大丈夫かしら。あら——ヤアだ、あたしなんだか、うずき始めちゃった……」

彼女は勝手なことを呟きながら、ポツと顔を染めて睨を閉じた。

自然の中で、堂々と縛られてしまった複雑な安心感に、二週間を堪えてきた『禁縛』の囲いは徐々に破られ、天性のマゾヒストは四囲の新緑にも負けぬ匂いを妖々と放ちはじめたのだ。

「まあ、今のうちにしびれておくんだな。ぶら下げられる段になったら、うずくどころではなくなってくるからさ」

私は性悪げに言って、その匂いを放つ妖女



を曳きたてた。

浮動滑車の真下は膝まで程の叢になっていた。撮影の時の構図のためにも、まだ傷まらずに反りかえっているこの草葉は折らずにおきたかった。そっと分けてから美保を導き入れた。位置を決めて立たせると、彼女は足許を注意しながらゆっくりと靴を脱ぎ捨てた。

滑車の鉤を、身体を巻き縛ったロープで隠しているヘルスパンドの鉄輪に掛けて、念のため背中の中央から余っているロープを滑車を通した吊りロープへ強く巻きつけて、しっかりとくり止めすると、私は息を詰めて待機している彼女を一廻りして検分を終った。

緊張の一瞬にも拘らず、私はふと思った。

全裸をぎりぎり縛りあげられて次の責めを期待して紅潮する女と、深刻な表情で胸の動悸を覚えながらも静かに次の責めを行おうとしている男と——もし道すがらに、こんな二人の状景を目撃した人があったとしたら、その人はいったいどのような気持でこれを見るだろうか——と。

あとで思えば、これは予感というより他はない。

やがて頭上の枝の固定滑車から垂れているロープを握って、

「爪先立つまで、まず引いてみるから、その時縄の具合を確かめるんだ、いいな」

と足を踏んぱり身構えた——瞬間、唇を噛んで緊張に身を固くする美保の向うに……ふと、動く気配を察して忽ち私は動転した。

（誰だ?!——）

眼に見えぬ腕力に押されたように、ロープを放すと思わず二、三步進み出てしまった。

私の眼の端で、美保もびくっとして顔を上げる。

「だ、誰だ、其処にいるのは!」

と怒鳴り、勝手かも知れぬが、無性に腹が立った。

見るのなら、覗き見なんかやめて、堂々と此方へ来て見てくれ。人の眼というものを意識し、よく考慮した上ではあったが、残念ながら見られてしまったと決まった以上は仕方がない。せめて、泥棒猫のように陰でそこそと見つめているのだけは止めて貰いたかった。——しかし、口では強く言っても、内心の泡を喰った乱れは相当激しかった。

ここぞと思った時に覗き見されたことに気がついたショックは、まるで、真上の澄み渡った深い青空も立ち処に明かるさを途絶えさせて、何かしら眼に霽のかかってゆくようで

あった。

「さ、出て来たらどうだ、え?」

すばみかける意志で、私は辛じて叫んだ。

——貴方は、『悪魔を見たことがありますか?』

——ない? そうでしょう。

私だってこの世に本当に『悪魔』が存在するなんて頭から信じていなかった。もう一度繰り返えす。頭から信じていなかった。

しかし!……

## 魔 の 章

その時。

やけくそのような気持で肩怒らせて歩み寄ろうとした私に、図太く反動的にとった態度かどうかかわからないが、仲々出て来なかったその相手が、突然草むらを跳び越えて——それもカラスのような身軽さで——私の目の前一メートル程の間近へ音もなく降り立ったのである。その跳躍を見て、私はスロー・モーション映画を見せつけられた思いがした。

そうして、次に上げようとした私の悲鳴は真横にいた美保が先に奪った。

「きえ!——」



怪鳥を踏み殺したような叫びが、鋭く山気を震わせて消えていった。

まず、伸びるに任せていると言った程度ではない、ところどころ逆巻いて跳ねあがり、まるで嵐を肩に乗せているような凄い長髪。

夏だというのに、厚げなトックリセーターによれよれの妙な光沢のある背広。下はチンピラが穿いていそうな極く細身のズボン。怪しいことには山中だというのに革靴穿いて、その先が細長く尖ンがって鋭く反り返っている。すべて身に着けているものは黒一色だ。

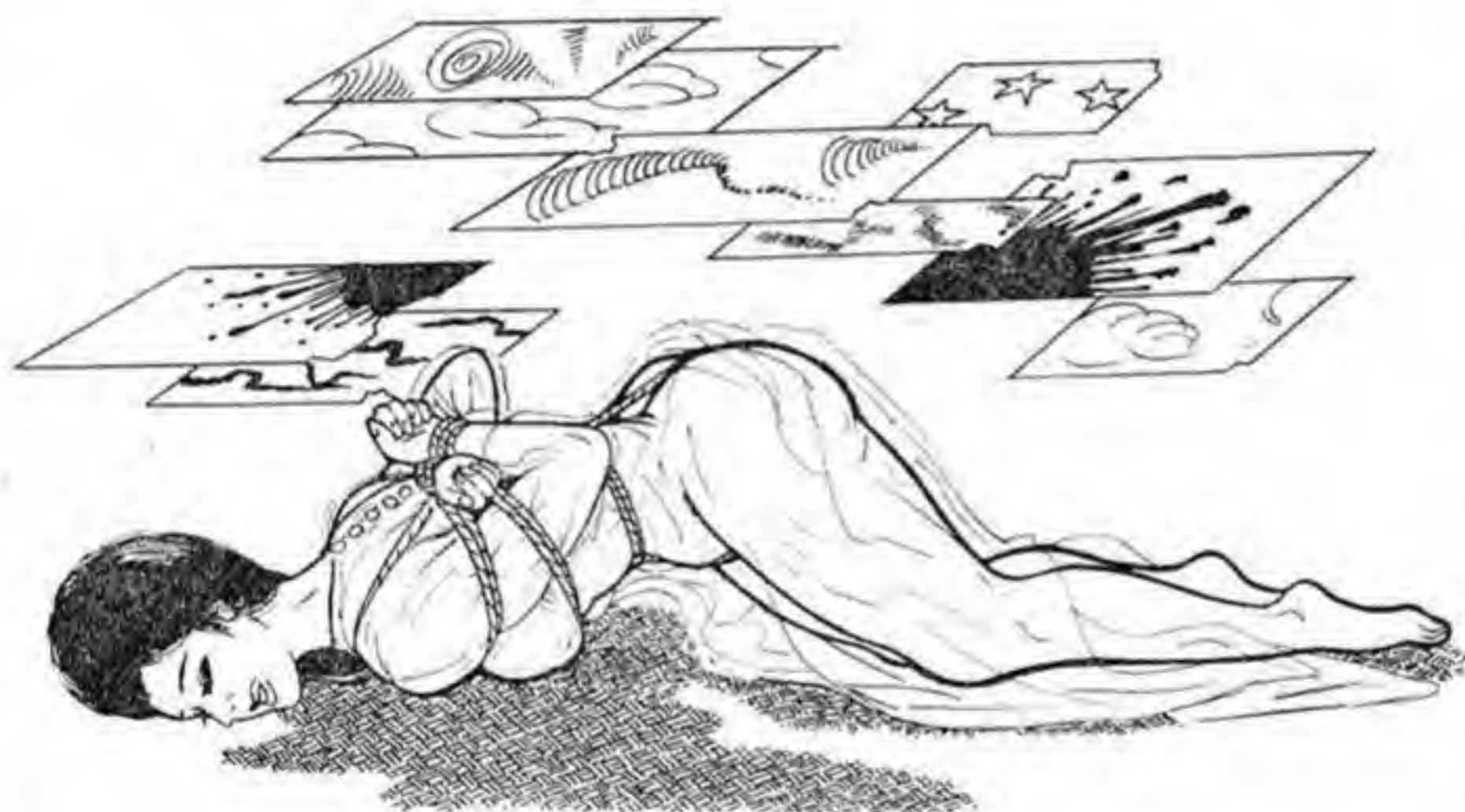
そうして、私が悲鳴を上げかけたというのは、相手のその顔を凝っと見つめた時に他ならなかったのだ。

異様に長ったらしく、灼熱に焼かれたように赤黒い。そこまではよかったのだが、私と視線を合わせた時に、妙にそこだけが紫がかっている唇をびくつかせてニタリと笑った口の物凄さといったら……瞬間に、鼻の下を横へ真一文字に切って顎がガタリと落ちてしまったように錯覚見したくらいであった。こんな口と、眉毛を乗せていない無数に血脈を走らせた切れ長の眼が、声もなく私に笑いかけたのだ。

その上、かなり長身である私より、優に三

十センチは越えると思われる背丈は、今にも押し倒してきそうである。

おかしい話だが、私は全身を金縛りにされ



た悲しい視線を、これはまた現実と厳しく緊縛されて棒立ちになっている美保へ、救いをもとめるような気持で向けた。

だが、当然のことではあるが彼女は肉体すべてを小刻みに震わせて血の気もなかった。

私は口をパクパクさせた末、

「だ、だれです？ あんた」

やっとのことで声らしいものを出した。

何処か暗闇の世界で圧迫されて、地の割れ目からスポンとはみ出して来たような恰好で声もなく笑いつづけていた男は、弱々しく質問した私に対して、不意に腕を斜下へひろげると水掻きのついていそうな掌をひらひらさせて、やにわに美保に近づいて行った。

今になって思うと私はなんと水臭い男であろう。美保に近づく悪魔を見て例え金縛りにされている身とはいえ、叫びの一つぐらい上げるのが普通であろうに、その時近づいて行く彼の足が針を落した程の音もたてなかったことに気づくや、そのまま眼を閉じて唇を閉じて暗黙へと逃げてしまったのだった。

そうして、私の鼻先へ、男の動きが臭わせたきたものを、

「はて、この臭いは何だろう？——あ、そうだ、爬虫だ、これは爬虫の臭いだ」



と半ば昏迷した脳裡で懸命に考えていたのだった。

どれくらい過っただろうか。一分だろうか十分だろうか。いや、一時間か——

右耳の近くでぺちゃぺちゃと鳴る音に我れに返った私は、ぎこちなく首をねじまげて眼を見開いた。

眼の前に、巨大な蠢きがあった。

奴の口だ。獣のような歯の奥で、赤黒い舌がどよどよと動いて、口の中で逃げ惑う空気がぺちゃぺちゃと音をたてているのだ。

私は阿呆みたいに、それをみつめていた。

「……す——」

その口が何か言った。いや、言ったように思えて私はゆっくりと相手を見上げた。

「——わたしが、縛って、あげます」

今度は、はっきりと聞えた。

(何だか、壁越しに言ってるような、ガラスを鉄板でこするような、変な声だなあ)

「あれでは、駄目。わたしには面白くありません——」

なぜ？ と私は口の中で問い返した。

「余りにも、常識過ぎるじゃありませんか——わたしが、面白い、美しい縛り吊りを見せて差し上げます」

「どのようにして？」

「まあ、見ていてください……」

私の金縛りがゆっくりと解けた。軽やかに身体を廻して、地べたへ腰を降ろした。

松の枝から白いロープがぶらんと空しく垂れているだけで、美保の姿が見えないことにも別に不思議とは思わなかった。

これから始まろうとする劇を物静かに待つかのように、ひっそりとかがみこんだ私に、男は満足そうに頷いた。そして振りかえりざま黒い片手を上げて、叢に向って命令した。

「美保さん。立ちなさい！」

やがて微かなざわめきを起こして、真裸の女体がのろのろと立ち上った。

上半身に巻きついてた筈のロープは無かった。美保は、だらりと両手を下げて、うつろな瞳を宙へ向けている。顔は白蟻のように蒼かった。

男は二、三歩行ってから横向きになった。

美保と私の、丁度中間あたりである。

そうして、ひょいと片手を頭へ乗せた。

と——見よ、彼は何の逡巡の色もなくその長髪をひきずりだし始めたのだ？！

五十センチ……すぐに一メートル、やがて二メートル！

たぐり出される髪は、掌の中で『黒紐』と

化し、蛇状に濡れ光りながら地上へと不気味なとぐろを巻いていく。それは彼——いや悪魔の、見事な八理義の神への挑戦舞Vであった。

地獄を覗いたような状景であった。

こうして、彼の足許のとぐろが、既に二十メートル近くにはなっただろうと思われるころ、『黒紐』はプツンと途切れた。

見ると彼の頭部にはもはや一本の髪とてなく、焼け爛れたように赤黒く肉の割け目からはぶくぶくと血膿が噴いて、それはタラタラと額に耳に、顴骨<sup>かん</sup>高い頬へと流れ滴っているのだった。

「……さあ、お紐が出来上りましたよ。フフ、これで縛りますとね、すこしも痛くないのですよ」

彼は、流れる血膿を顔振って散らしながらニタリと笑った。そして美保に向って、

「さあ、いまから肉が干切れるほど、きつくきつく縛って差し上げますよ。さあさあ、早くこちらへ来なさい、お手々を背中へ廻して……」

長い掌を振っておいでおいでをした。うつろな美保の瞳は何を見ても、何を言われても動ずることはなかった。そのくせ彼の



掌の招きには素直に応じ、歩み寄って来ると彼に背中を向けて、そのしなやかな両腕を後へ廻し自ら背高く手首を交叉させるのであった。私以外の眼に全裸を恥ることもなく、むしろ足を開き気味にして堂々とした肢体なのだ。美しかった。異様なほど美しかった。

だが、この『美』に、いま躍りかかろうとする悪魔は、その足許の『黒紐』を輪にして持った。身構えた。次に、紐の端を彼女の手首に巻きつけると、やにわに駆け廻りはじめた――。

彼女の肉体に接触せんばかりの小廻転だ。しかも速い。カラスみたいな足が巨大に宙を跳ね、赤土をねじりこませて躍った。

まぶしいばかりに白い女体に、不気味に黒い旋風のコントラストは、私の感覚を次第に麻痺させていき、またこの悪美な乱舞に全く足音一つしないことが、何かしら深淵のまぼろしを見ているような幽雅の境にさえおとし入れていくのだった。

――そうして。

廻転の軸として突っ立ったままの美保から大きくジャンプして、旋風がちぎれ飛んだとき、そこに――豊かな裸像に『黒紐』をめぐりこませた彼女の、凄じい被縛の姿があった。

「さ、其の場でゆっくりと廻って……」

切れ長の眼を一層細めて、完成品を觀賞していた悪魔は、またも掌をひらひらさせて命じた。美保は縛り上げられたことさえ自覚しているのかどうか、悠々と廻りはじめた。

『黒紐』は複雑な綾をなして、胸部に下腹にいくつも亀甲型をつくり、股間を通して胴を絞り手首を縛り、<sup>やさ</sup>優首にさえ喰いこんでいたのだ。

あの速い廻転のうちに、どうしてこのような緊縛が出来上ったのかということよりも、今完成された縛女そのもののほうがずっと謎めいた美しさであった。

私は血潮をずきずきと高鳴らせ、彼女の放つ妖縛の氣に、おのれを次第に溶かせていった。

この時。

揉み手を繰り返した悪魔は何の予告もなしに、新たな恐怖の跳躍を見せた。

黒鳥の如く、その位置から頭上――滑車を縛りつけてある松の枝へ、直線に跳びついていったことである。

紫色の唇に啞えた『黒紐』が腸のように伸びて、枝へぶら下ったとき、眼下の美保の後手へピーンと張りつめた。

触角みたいな指がそろそろと枝を這って滑車を探りあてたとたん、『黒紐』の先端はそれを通り、間も置かず、無難作に真下へとび降りる。

瞬間、『黒紐』は光沢を波打たせて上下へと交錯し、悪魔は被縛の女体と宙間ですれすれに往き交い音もなく地上に降り立つ。女体はと見ると、枝から僅か下のところでゴムに吊られたかのような弾みをつけてぶら下っている――

私は、それらの激しい動きを、まるで、選り抜かれた名選手が演ずるスポーツ技を觀賞するような、眼で、氣持で見ていた。それは哀しいまでに妖美なスポーツであった。

と、地上の『名選手』が、例の薄笑いを浮かべながら赤むけの――すでに血膿は止まり頭部は微妙な透明な膜で覆われていたが――顔を振り向けて、私に言った。

「あなた、なぜ、いつまでも坐っているのですか。カメラで、撮るのでしょうか？ さあ、モデルさんはポーズを終わっているですよ。早く、撮りなさい……」

そうして、愛想たっぷり、「モデルさんのことは、わたしにお任せください。ご希望の高さ低さまで上手に、コント



ロールして差し上げますからネ。さ！早くカメラの用意をして……」

腕力というか秘力というか、頭上のトランポリンで躍っているような物量に対して彼は『黒紐』の端をいともやさしく握り、空いている片手を、ゆたゆたと振って見せるのだった。私は立ち上り、夢中のうちに三脚を立てカメラを固定した。

偶然にもレンズを覗いたときから、カメラはぴったりと被写体をとらえていた。

縛った『黒紐』も個処によってはすっかり肌へ埋没させている、その強烈なくびれを斜下からねらって、身体がゆらりと真正面を向いた瞬間に息を詰めてシャッターを押す。右へ左へ、ゆるやかに廻るのに構わず、あとは連続に撮る。

そうして一本のフィルムを撮り終って顔を上げたとき。

事故は——その時を待っていたかのように起こった。

## 無の章

私は、はっきりと見た。

しっかりと、この眼に焼きつけた。

——あれほど強靱に見えた『黒紐』が、そ

の時どうしたことやら、美保の後手を縛ったわずかのところでプツリ切れて、彼女はそのままの態勢で真下の叢へ、音もなく落下するのを、一瞬ながらも明確にこの眼へ刻みつけていたのだった。

奴が現れてから、なぜか我が妻としての美保に、一片の哀れみも同情心も湧いてこなかった私に、正常な感情？ が戻ってきたのは正にこの時であつたかも知れぬ。

「あッ！ 美保……っ」

悲鳴のような声を上げて、足にもつれて吹っどぶカメラも見定めず、私は一足跳びに落下地点へと躍り込んだ。脳裡に、血まみれになった悲惨な彼女の姿を思い浮かべながら。

だが。

だが、こんなに信じられないってことが他にあるだろうか？！

「……」

私は、とびこんだ形のままで、動作はおろか息さえも呑みこんだままで、立ちすくんでしまったのだ。

想像を絶したことが、其処に、起っていたのである。

落下した彼女が、何らかの状態で倒れていなければならぬのに、影も形もなく——し

ばらく前にはこの私も歩き廻って、その時には何も異常の認められなかったその叢の、まさしく落下地点と思われる処に、大きな穴がぱっくりと口をあけていたのだった。

彼女が落ちた瞬間に物音一つしなかった不思議さが、遅まきながらも思い出されて、同時にその疑問は解明されていたという恐しい皮肉さに、私は焦点の定まらぬ視線を周囲に廻した。誰も居なかった。何ひとつ動く気配もなかった。頭上を見上げて、やがて、途中で切れた筈の『黒紐』の残りも、これまた完全に消えていることに気づいたとたんに、身も世もあらぬ恐怖に襲われていた。同時に

「美保っ——」

と全身で絞り出した声を、暗黒を湛えた穴に向って吐きだしていたのである。声は、一気に穴へと吸いこまれて返ってこなかった。

「美保っ——」

二度目の絶叫も、返ってこなかった。やがて私は空虚な眼を上げた。

（深い！ この穴は恐しく深い）

（井戸？ 違う。水の音は聞かなかった。ではただの空洞か。だが、どちらにしても、声を限りに叫んで反響ひとつしないというのは如何いうことなのだ……）



(反響もしない洞穴なんて、あるのか)

(まさか、まさか!)

(底がない穴なんて——信じられぬ!)

わからなくなった私は、カサカサの唇をなめて、うっかりすれば自分も吸いこまれて行きそうな暗い穴から視線を反らした。その眼の端に、私たちが持ってきた、ロープが映った。纏れて松の根近く捨てられてあった。

「よし!」

脳裡にへばりついて離れない、血にまみれた無惨な美保の姿態が、辛じて私を奮い起たせてくれた。すべてのロープをかき集めると戦きつつ一本に結び合わせていった。

出来上ると、思ったよりも長くなった。

(いくら深いといっても、このロープの長さより深いなんて信じられない。充分とどく筈だ——)

まず穴の深さを測るために、急いでロープの端に適当な石を探してきてくりつけた。そうして恐る恐る穴へ近づくと、頼りない腰つきでロープを垂らしていった。きつと、その時の私は必死の形相だったに違いない。

ロープは何の抵抗もなく、スルスルと伸びて行く。五メートル、八メートル、そして十メートル……その頃になって私の胸の動悸

は狂ったように早鐘を打ちはじめた。あとがない。もう少しでロープは終る——

だのに、尚もロープの先の石塊は、宙に浮いたままの感覚を、変化もなく手許へつたえてくる——そして。

とうとう手応えもなく、ロープは終った。

私は、茫然と立ちつくした。

いつのまにやら、紺碧だった空に雲が湧き出で陽は翳っていた。

谷間から這い登ってきた冷い風が、恐怖に混迷する私の肌を、慄然と、鳥の毛肌の如くつぶだたせた——

## 道 の 章

貴方は

あたしのことを

なんでも 知っている

だのに だのに

まだまだ知りたい

もっともって教えて

いつも こう言う 貴方

——あたしは

あなたの 愛の縄で

キリキリと縛られた

『とりこ』の 女よ

いまさら 逆らえないじゃないの  
いまさら 逃げられないじゃないの

奪って あたしの すべて

知ってよ あたしの 秘密を——

旅の一夜のつれづれに楽しみを求めて集ってきた男達の前で、もの哀しげに唄う女があるという。

あるときは荒れてガラシとした密室で、あるときは豪華なダブル・ベッドを備えた一室で——二夜と同じ処に現れぬのが特徴で、今日は鄙びた地方の温泉郷かと思えば、次の日は大都会の真中で。

いや、こんなことを特徴などと言ってはいけなからう。

本当の特徴は、客となった男達がいっし誰いうともなく、彼女を名づけて呈した『唄う緊縛美女』なることにあった。

どういふことなのか、それは彼女をつぶさに見、直接にその唄を聴いてきた人が私に、次のように教えてくれた。

「彼女は、スポット・ライトを浴びてステージ(それはどうやら先刻述べた密室内のことであるらしい)へ現れると、長い睫を伏せて静かにオレ達へ向って一礼するんだ。何も着



けていそうにもない——さよう、生身としか思えない身体の見事な曲線を透き通らせたネグリジェ風のドレス。それがまた何とも言えぬほど美しいんだな。いや、もちろんこんなドレスくらいに驚いたりするようなオレ——達じゃない。問題はその生身なんだ。ステージに登場した瞬間にオレは眼を見はったのだが、首から胸へ、斯うキュー！とひと握りにできそうな細いウエストからまだ下へ、なんと黒い縄が幾重にもキツチリと巻きついていくんだ。息を呑むほど美しいくせに、何となく動作がぎこちなく、見えたと思ったら、彼女、その黒い縄で両腕を背中へ高く、くくりつけられているんだな。縄は肌を断ち切らなばかりに喰いこんでいるのだが、オレは痛ましいと感じるより先に、なんとまア不思議に美しい女の姿だなアとすっかり圧倒されちゃまってね。我を忘れて見惚れていたよ。すると彼女はだ。やがて縛られた身体を頼りなげに折り曲げて、オレの鼻の先へ横坐りになるんだな。きつく縛られた上に窮屈な姿勢をとったものだから、その身体のかげれといったら……。まアそのへんは、勝手に想像してくれよ。いやはやともかく、オレはバカみたいに口をあけて、凝っと瞳を魅きつけられていた

よ。そしたら彼女は、ちょっと横顔になって睫を哀しげにふるわせて——唄いはじめるんだ……」

ややぶっくら棒な唄いかたともとれるが、聴いているうちに、哀しげなその感情を奥底にたっぷりと秘めた抑揚は、好奇の眼、驚きの眼だけであつた彼等の心を、次後に打ちふるわせ悶えさせていたつたという。

——あたしは

あなたの 愛の縄で

キリキリと縛られた

『とりこ』の 女よ——

「彼女は唄い終ると、余韻を残してしばらく瞳を閉じたまま俯向いていたが、やがて、唇もとに微かな笑みを浮かべて頭を下げると、よろけつつ、ゆっくりと立ち上って、静かに消えていったよ——、うん。これだけのことなんだが、オレは、いやオレ達はこの苦しくなりそうな彼女の美しさに完全に参ってしまった、彼女の消えてしまった後でも、すぐに咳をうったり嘔き合う奴もいなかったよ。ぼんやりと彼女が坐っていた処を見つめていたら、間もなくオレ達を『招待』してくれた男が揉み手して現れて、いかがでしたか、今夜が最初にして最後であります彼女の当地出演

を、図らずも貴方様方の御幸運にて、ご覧いただけましたことは私といたしましても——なんて白々しく言い始めた。ところがこの男がまた何とも嫌らしい奴でねえ、いや、嫌らしいなんてもんじゃなかったよ。オレは最初奴を見たときに何かしら、斯う、人間放れたものを感じ取ったよ。——だが、残念ながらこの男の言ったことは本当だったね。オレは旅行の予定をこわして、もう一度だけでもいいからと、彼女見たさの一心からその翌晩も懸命に『招待者』を求めてうろつき廻ってはみたけどね。駄目だったよ。フフフ——そりやそうだ。ジャの道は蛇で、日頃オレの親しくしている奴の後日の情報によると、その夜は、彼女は其処から千キロ以上も離れたK市に出演していたよ。——だが、オレは言うておくよ。必ず、もう一度どんなことをしても彼女に逢ってみせるとね……」

近頃はあの妖しく美しい彼女の姿を夢にまで見るんだよ、と何かしら寂しげに彼は呟くのだった。

私は、話を聞いていて活然としたものを身内に感じた。

そうして、それは幾日も経ずして、次第に激しい思索の念へと凝り固っていったのである



った。

どれがどれにと、はっきりとは結びつけ得ないが、彼の話してくれた『彼女』の様子はおぼろながらも、いつのまにやら、『あの彼女』へと重っていくのはどうしたことか。

黒い縄？ 黒い紐？

彼の言う黒い縄が、あの髪『黒い紐』であつたとしたら？

(まさか——とは思ふが！)

日毎夜毎に、終結のない思索は、やがて——長い間忘れ果てていた胸のうずきを、熱情を思い起こしてくれるのだった。

夢であつてもいい。

失望が待ち構えていてもいい。

私は直ちに、出発しなければならぬ！

その『唄う緊縛美女』が美保であつてもなくても。その人間はなれた男が、あの恐しい『悪魔』であつてもなくても。

——思えば、愛しい美保を失つて慟哭しつづけたこの二年間。

人々は、私を、

「馬鹿だ」

「気遣いだよ」

と冷く罵った。

「信じてください。美保は、あの男の妖術の

ために、暗い穴へ落ちていったのです。本当に、深い深い穴に……」

いくら説明しても訴えても、誰一人として真顔で聞こうとしなかった口惜しさ。

あの事件のすぐ後、駆けつけて来てくれた人々に、『穴がかき消えてしまつて存在しなかった』ことが、私をして馬鹿狂人と決定づけてしまったのだ。あげくの果ては、

「勿論あの男の言つてゐることは全部嘘だ。奴の妻は、きつと殺されている。しかも殺したのは、奴さ。いま頃は何処かの土中に埋められて、我が亭主を呪いながら白骨となつてゐることだろうよ」

と極論する者さえ現れた。

私は、もう叫ぶのも訴えるのも諦めた。

(誰も信じてくれなくてもいい。美保を地中に落しこんだ後、あの悪魔が土を盛り上げて穴を隠蔽してしまつたのだと、いくら私が血を吐く思いで叫んでみたとして、あの毒々しい悪魔、あの恐しい現実を見ていない人間にとつては、とても信じられぬことであるかも知れない。だから、もういい。人々は完全に私を見捨てたから、今度は、私が人々を見捨ててやる。見捨てたとて何の未練もない世間ではないか——)

私を妻殺しだと臆測する者はしろ。勝手に笑いたい奴は笑え。

私は確信しているのだ。

美保は、絶対に死んでいない。殺されたりなんかはしていない！ その証拠は、『誰も彼女の死体を見ていない』ことだ。死体のない殺人事件なんて成立する筈がない。美保はきつと生きてゐる。あの底のない穴に転落していった彼女は、この世の何処かへ通じてゐるその穴をたどつて、再びこの地上へ、きつと『生きて』存在している筈だ。

(そうして、残つた半生を、彼女を探しつつ見つけだしてやる執念だけに燃やし尽してやる。彼女への道が、欲びの涙で打ちきられるか、執念の生命が儂く途ぎれて果てるか、どちらが先になるかそれはわからない。しかし、私に残された生甲斐は——この道一本に歩き出すより他はないのだ)

まず、彼が教えてくれたあの『唄う緊縛美女』の話を天帝の啓示として、明日から、私は旅に出る。

いつ果てるともない、旅に——  
だから、私の話も、これ以上に述べようがない……





— 海外旅行者の日記 —

旅

先

に

て

三

原

寛

☆ジャングルのかれとかの女

旅先のホテルで顔見知りになった、日本人旅行者が残してくれた月遅れの週刊誌「平凡パンチ」の一月三十日号で見かけた一頁大の写真。説明が「ジャングルのかれとかの女」撃墜された米機の塔乗員が、捕虜として北ベトナムの女兵に連行される図。後手に縛られ首うなだれた米兵を、銃剣で追いたてる若い女兵。

サア、どう料理してやろうか、と舌舐めずりしてワナにかかった獲物を眺めているような、いかにも残忍そうな彼女の眼差しがM的な興奮を誘う。この米兵は、これから彼女にどんな目に遭わされるのだろうか？ 生殺与奪の権は、今、完全に彼女の手中にあるのだ。戦時下の捕虜こそ、ある意味では純粋なMを味わえる立場にあるといえないだろうか。

☆ハンブルグの職業的女主人

肩の張った、ものすごく大柄の中年女。細く描いた眉尻をはね上げ、眼を黒く隈取って毒々しくルージュの光る厚い唇。M好みのメーキャップである。網目の黒いタイツに、膝まで届く、白い編上紐のついた、黒革製乗馬靴。そして黒革を編んだ鞭を手に仁王立ちになった彼女は、飾り窓の外で私が期待したとうりの職業的女主人だった。

両手足を、ベッドの四隅に革紐のついた留め金具で固定され、既に火のように熱くなっ



た背中をさらして悲鳴をあげかける私に、紅唇を曲げて皮肉な笑みうかべた彼女は、

「意気地なし！ 自分で望んだクセに！ 皆同じなのね。でも、ここへ来た以上、一通りのことはやってやるよ。そうしたら鞭の味が忘れられなくなって、必ずまたやって来るのサ。いざとなると泣きわめくクセにね！」

と、ナマリのあるフランス語でののしりながら更に強烈な、息も止まるような一撃を叩きつけるのだった。

しかし彼女は、M者に対する扱いかたを充分に心得ていた。鞭の乱打で、激痛耐え難き限度に達したとみるや、鞭打ちはびたりと中止され、今度はうつ伏せの私の背中に乗馬靴のままとび乗ってくるのだ。

巨大な彼女の全体量が、固い靴底に集中して私の背骨や尻をグリグリと踏みこむ。女主人の嘲笑を浴びながら、わめき、泣き、もがき廻る私の苦悶の限界が近くなったとみるや、背上の重量はサッと消える。だが、ホッと息つく間もなく、再び無慈悲な鞭が火花を散らさんばかりに打ち降ろされるのだ。

この繰返しは幾度あったことか。

遂に私は息も絶え絶えの状態で完全にノビてしまった。これほど激しい苦悶を味わった

のは私にとって初めて経験だった。

「どうだい、私の責めっぷりは？ 今度来たら又別の責め方をしてやるからね」

と、彼女は煙草のケムリを私の顔に吹きかけながらいった。私は、痛む全身をかううじて、フラツク足許に託してよろめきながら娼家を辞した。体の節々は痛んだが、満ち足りた気持であった。ドイツ語の出来ない私の為に使ってくれた、彼女のナマリのあるフランス語が今でもなつかしく耳に残っている。

### ☆イスタンブールの少女

「高いお金を使って、バーやナイトクラブで無駄な時間を過しても、きっと失望なさいますよ。私には貴方達旅行者の方が、何をお求めになっているかがよく判っています。お金は有効にお使いになることをおすすめ致します。私を信用なさい。貴方は支那、いや日本の方ですね。日本の方達にも随分感謝されたものですよ。貴方もひとつ、是非如何ですか……」

仕立のよい濃紺の背広をリュウと着こなし、鼻下に見事なヒゲをたくわえた年配の紳士が、夜のイスタンブールの街に散歩に出た私に歩調を合せながら、流暢な英語で執拗に

喰い上ってくる。ポン引きである。

ショートタイム百ドルで切り出された代金が一泊の部屋代、手数料、タクシー代も含めて五十ドルにまで下った時、私は軽くOKのサインを出して、その男の後に従っていた。驚いたことに、彼は最新型のポンティアックを街角にパークしていた。人気の絶えた暗い裏通りをぐるぐる廻って、漸く煉瓦造りでアパート風の二階屋の前に停車された時、私はすくなくならぬ不安を覚えはじめていた。

「車のキーをお渡しして行くんですから、ご心配には及びませんよ」

私の心を見透しているように、彼はニヤリと笑った。改めて見た男の前歯が欠けていて先程の印象とは異なり、脂ぎってひどく強欲そうな人相にみえて来た。相手の女を見た上で払うつもりだった五十ドルを、何だかだと理由をつけられて先取りされて、男がその薄暗い建物の中に消えた時、車に一人残された私の不安はなお更に高まっていた。

いらいらした気持で十五分も待たされた揚句、彼の連れて来た女をみてガッカリした。まだ、精々で十六、七か。小柄で貧弱、その上、おとなしそうな、というより陰気そうなコムスメである。私の好みに全く反したタイ



プなのだ。だが、

「お気に召さねば、又、別の場所へご案内しますがネ……」

という彼に、私は大あわてで

「いや、これでいいんだ」

と返事をしてしまっていた。

彼女を積みこんだ車は、又々、暗い迷路をいくつも曲って目的の宿に着いた。汚い石段を登らねばならない安宿だった。私に不安を覚えさせた彼は、ここでもう一度、ニヤリと笑って消えて行った。

車中では、隅の方でひっそりとしていた彼女が、部屋で二人きりになった途端にハシヤギ出して私をとまどわせた。彼女はイタリヤ人だそうで、片言の英語を繰り、私の片言のイタリヤ語と合せて、なんとかお互いの意志を通じさせることが出来た。

明るい灯の下で見た彼女は、これまたポン引きの男と同様に、最初に印象づけられたものとはほど遠い感じで私に眼をみはらせたのだった。以前、私が本誌に書いた、浅草「ヴィナス」のエミ嬢に似ているように思われて来て、内心嬉しかった。

彼女は車中の同乗者とは別人のように私にまつわりつき、着衣を脱がせ始めるのだ。自

分自身の脱衣も小気味のよい素早さである。

貧弱そうに見えた体つきも、着衣の上と下ではこうも違うものかと思われるほど、見事な肉付を起伏させていた。

彼女はいきなり私をベッドに押し倒して胸の上に馬乗りになった。そして私の頭髪をわし掴みにし、青味がかった瞳に動物的なものを浮べて私の顔をつくづく眺めていたが、一言、「可愛い坊や」と呟くように云った。

その積極的な態度に、私はとまどいながらも有頂天になってしまった。私は彼女の足を持ち上げるようにして腹這いになり、彼女を背負った形でベッドを降りた。こんどは彼女の方がとまどったらしいが、私が、四つ這いになって歩き始めると、すぐ馬の真似と悟ったらしく、「キャツキャツ」と声をあげて子供のようにはしゃぎ出した。軽くではあったが、踵で腰骨を蹴られ、平手で尻をピシャピシャ叩かれながら、この馬は部屋中を何度も何度も這い廻った。

やがて汗にまみれた馬の私は床にへばり、騎手の彼女はベッドの端に腰を掛けて、足をブラブラさせながら見降していた。顔を挙げた私の鼻先きに彼女の足の指がかすめていった。私はその足に感謝の意をこめてキスしよ

うとした。だが、果さぬ内に足は遠のいた。

すぐ次の足が近づく。私はサツと首を伸したが、アワヤというところで、その爪先はスツとかわされた。今度こそ、と、その形の良い足の動きに眼を据える私の意表をついて、サツとばかりに伸びた爪先が、かなりの力で私の鼻柱を蹴りつけた。私は思わず、鼻を手で押えてひっくり返った。

「痛かった？」

そんな意味にとれる発声と同時に、ベッドからとび降りた彼女が、私の肩に手をかけ、青い瞳を心配気に見開いて顔をのぞきこんで来た。私は慌てて首を左右に振った。途端にハジけるような笑い声が彼女の唇をついてとび出して来た。先程からの私の恰好が、面白かったというのだ。転げ廻らんばかりに身をよじらせ、私の肩口や背中を、ピシャピシャ叩いては笑いにむせている時間がしばらく続いた。

私は、その笑いの中に、私のズボンからベルトを抜きとって彼女に差し出した。彼女はベルトに眼を落してケゲンそうに首をかしげた。私はその膝前に平伏して、これで自分を叩いて欲しいと哀願した。

「人を叩くなんて、そんなことが出来るワケ



がないじゃないのよ」

と、彼女は承知してくれなかった。私はいくら頼んでもうけつけてくれないのだ。私は仕方なく鞭打ちは諦めた。そして今度は、床の上に仰向けになった。大きく口を開けて合図するが彼女には判らないらしい。その意志を通じさせる適切な言葉を知らないから、ずい分手間がかかる。

ようやく「放尿」といふ意味が通じたらしいのだが、目を丸くして「そんなこと……」というだけで、私の顔をまじまじと見すえているのだった。

だが、私の哀願は、彼女を遂に真顔にさせるまで執拗に続いた。彼女は、私が冗談を云っているのではないことを悟ったらしい。

数分後には、呆れたような顔つきで私を見降す彼女の足許で、私は願望の「神酒」に酔い痴れることが出来たのである。正座して平伏し、「神酒の御礼」を申し上げる私の頭を軽く足の裏で押すように蹴りつけて、彼女はベッドの上に転がり、腹をかかえて高笑いを続けていた。

この一事で、彼女はすっかり大胆になってしまい、夜半過ぎ、私がくたくたに疲れ果てるまで、いろいろの「芸」を面白そうに要求

するのだった。私は、この彼女の急激な変化ぶりに狂喜して、精根を傾けて御機嫌をとりむすんだのである。そのおかげか、すっかり泥睡しきった私は揺り起されて朝を知った訳だが、思いがけなく、コーヒー代りの神酒にありつくことが出来たのだ。昨夜のとまどいとはうって替った態度で、彼女は私に受入準備を命じた。私はハジカれたように彼女の足下に平伏し、その一滴をも惜しむ気持で戴いたものである。

「そんなに有難いのかい？」

昨夜と同様にベッドに腰をかけ、ブラブラさせている足先で、私の頭を軽く蹴りつけながら、彼女は誇らし気に云ったが、やはりまだ、不思議そうな顔付きであった。

一足先に帰るといふ彼女に、そっと十ドル紙幣を握らすと、ニッと目許だけに笑いを浮べて、いきなり私の頭髪を掴んで二、三度、前後に揺ぶった。

「又、呼びに来てね」

と云って背を向け、二、三步扉に近づいたが、クルリと振り向いてつけ加えた。

「飲みにネ……」

その後、仕事の都合でどうしても暇がとれ

ず、愈々明日は発たねばならぬという前夜になってから、私は、例のボン引き紳士を探して廻った。だが、遅くまでネバツてみたが空しかった。探しくたびれてとび込んだバーのとまり木の上で、彼女のアドレスを訊いて置かなかつたことを悔いながら、神酒ならぬグラスを独りわびしく傾けたことであつた。

### ☆ティカニス・アテネ

ティカニスとは「御機嫌よう」私の覚えた唯一のギリシャ語である。アテネでは、仕事が予想外に早く片付き、精神的にゆとりの持てた私は、一夜、ナイトクラブを訪れた。

私のテーブルについたホステスは、そのクラブのゾルバ歌手だった。ゾルバとはギリシャの舞踊曲である。フロア・ショウの合間に彼女は時々席を立て、舞台の上で歌うのである。ヴォリュームのきいたハスキーな声を持つ彼女はアルコールに強かった。アテネではクラブのホステスをアーティストと称していた。客の相手をするこれらアーティスト達はイギリス人、イタリア人、スペイン人と様々だったが、すべてこのクラブのフロア・ショウのダンサーであり、歌手であって、舞台に出る順序も定めてあるらしかった。私の席



のゾルバ歌手は、栗色の髪をした大柄で豊満な肢体を持つ女であった。年にも早三十は越しているだろうと私は胸の内でも思った。

その日は、べつに期待を持っていたわけではなく、ただ、飲んで、シヨウを観てオトナシク帰るつもりだった私だが、グラスを重ねるうちに気が変わった。ラスト迄ネバツて彼女を口説こうという気になったのだ。そうなる理由があったからである。愚にもつかぬことをやりとりしている内に、彼女が、酔客の誰にでもしていることだろうが、軽口まぎれに私の膝をつねったのだ。私は、その時の調子で、自分は女性から痛い目に遇わされることを好む者である、という意味のことをフザケて口走った。彼女は一瞬、私の顔を見直したようであったが、

「それではマゾヒストなのか」

というなり、テーブルの下でイヤという程私の足を踏みつけて来た。靴の上からとはいへ、ハイヒールの踵でグリグリえぐられては相当にこたえる。

「こうされるのを、お好み？」

と、嘲るように、又、楽しむように私の表情を観察している。情けないけれど、こうなると私の血は一度に沸って頭に昇る。彼女に

はそんな時の私の顔が、呆けた動物のようにみえたのではないだろうか。じっと見詰めている目付が変わったように感じられた。

次に彼女は鼻を拭き、そのチリ紙を丸めて私の口に押し込んだ。更に、ワザと床にマットを落とし、拾おうとする私の手を狙ってハイヒールを踏み降ろす。私がそんな行為をする彼女に、「女王」を見出したのは当然だった。だが、貴女はSなのか？ という私の問いには、

「私はそんなんじゃないワ。ただマゾという意味をホンの少し知っているだけよ」

と、冷たく答えるだけだった。

一度、かき立てられた私の血が、この返事だけで納まる訳がないではないか。

私はネバツた。そしてその夜、彼女のアパートに泊めて貰うことを、ようやくにして承知するに成功した。宿泊料は百ドル、彼女には指一本触れないこと、という条件も仕方のないことである。しかも、彼女の部屋にはもう一人の女性が同居していたのだ。金髪の小柄で二十代の女であったが、私を見ると、察したものか早々に出て行こうとするのだった。栗毛の彼女は追いかけるようにして引きとめ、何かぼそぼそと、時々チラチラ私に視

線を走らせながら話し合っていたが、金髪が肯くと二人でツカツカと私の傍に来て、私に下着だけになるように命じた。

脱いだ洋服は、ひったくるように栗毛がとり上げ、クルリと丸めて無造作に隅の床にほうり投げられた。私がシャツも脱ごうとすると、彼女の平手が、いきなり私の頬に飛んできて制せられた。次の瞬間に後から金髪の手が私の両手首を掴んで背中にネジ上げていたのだ。私は下着姿のまま、二人の女性の共同作業に依って、たちまち荷物のように縛り上げられてベッドの下に転がされてしまった。

彼女達は、その作業を終えると、全然私を無視した態度で、就寝準備を始めた。裸で寝るのは美容術の一つだということは私も知っていたが、彼女達も実行しているらしい。

二人共、すばらしくポリウムのある肢体の持ち主であることを私は知らされた。と同時に二人がレスビアンであることも知らされたのであった。客であるべき私は、罪人のように縛られたまま、そこに繰り上げられた壮烈な光景にアゼンとして圧倒されていた。彼女達は完全に私の存在を忘れ去っているもののように、二人だけの世界に溺れていた。だが一刻ののち、ゾルバ歌手の足が、ベッ



ド上から伸びて私の胸元を強く踏みつけた。私は忘れ去られていたのではなかったのだ。縛られたまま、邪怪に引き起され、ベッド上に引き上げられた時、体中を貫いて走るよろこびにゾクゾクと震えるのを覚えた。

「この豚は手荒くして貰ったほうが嬉しいがる

らしいよ」

と、金髪娘に話しかけるゾルバ歌手の声が頭上でした途端、彼女の巨大な尻が降って来て潰れんばかりの重圧が私の顔から咽喉までも一挙におおってしまったのだ。

私は重さと息苦しきで死ぬ思いだった。

## 懸賞△告白、手記、体験▽原稿募集

### ☆ 賞 金 ☆

- 一、第一席 一篇につき 五万円
- 一、第二席 一篇につき 三万円
- 一、第三席 一篇につき 一万円
- 一、第四席 一篇につき 五千元
- 一、第五席 一篇につき 三千元

作品の出来により、各等席若干篇宛誌上掲載の作品に対して、掲載後上記の懸賞金を原作者に贈呈いたします。

### ☆ 規 定 ☆

- 一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く読者の間から懸賞募集いたします。
- 一、従来、「告白、手記、体験記」の分野で文献味豊かな数々の告白特集号を刊行して、輝かしい金字塔をうち樹てた本誌が、更に充実したあらゆる傾向の告白を以て誌面を飾るべく今回の企画をしました。
- 一、真実味溢れる告白、万人の共感を得るに足る手記、数奇な運命に弄弄された体験

記。どうしても誌上に発表し活字として残しておきたいと願う熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮ってご応募下さい。

一、文章の巧みさや、表現や描写のうまさは勿論大切ですが、なんといいっても、実際に体験された事実の裏付けのある告白であるということが肝腎です。従って必ず自筆の未発表のものに限りません。

一、枚数には制限はつきませんが、原稿用紙三十枚位から百枚位までが適当です。用紙は必ず原稿用紙をご使用願います。

一、締切は毎月十日。入選作品は翌月号に掲載いたします。応募原稿は原則として返戻いたしません。応募原稿は送料同封のものに返戻いたします。

一、応募原稿の送り先は、大阪市住吉局私書箱第四十一号出版株式会社懸賞告白原稿係宛。他の原稿と区別するため、「懸賞告白」と第一頁に鉛筆書きして下さい。

一、投稿者の個人的秘密の秘匿は厳守いたします。入選作品誌上発表後、作者の連絡先をご通知下さっても構いません。

夢中で頭をネジ向けて、遠慮のない重圧のわずかな隙間から空気を貪り吸った。ようやく窒息死だけは免かれたと、ほっとする間もなく続いて胸の上に金髪娘の重みがもろに掛つて来たのだ。私は正に悶絶せんばかりに苦しくなった。

しかも彼女達は、私の上に腰かけたまま、戯れを再開したらしいのである。じっとされていてすら音を挙げそうな重さが、グリグリとこじられるのだからたまらない。私は死にものぐるいでもがき廻ったのだった。

翌朝、いましめを解いてくれたのは金髪娘のほうであった。目覚めているには違いないのだが、私の方を振り向きもしないゾルバ歌手の毛布からのぞいている広い、だが白い肩口を見ながら、私は重い頭を抱えて早朝の街路へ出された。扉から見送る金髪娘の眼に明らかに嘲笑が浮んでいた。

アテネではその後暇をモテ余し、随分迷ったのだが、結局はそのナイトクラブに二度と足は向けなかった。だが、今では、やはり惜しい機会を逃がしたものだという気がしてならないのだ。いずれにしても、その時には、「ティカニス」という気分でなかったことだけはたしかである。



ピンク映画のシナリオ (団 鬼六・提供)

誘

(ゆうかい)

拐

製作・ヤマベ・プロダクション

企画 寿御代子  
製作 山辺信雄  
脚本 団 鬼六  
監督 岸信太郎

登場人物

津村 (サラリーマン) 山本 昌平  
塚田 (やくざ) 長岡 丈二  
岡田 (サラリーマン) 伊海田 弘

内藤 (刑事) 里見 孝二  
山川 (刑事) 川路 正夫  
吉川 (社長) 松田 仙三  
美津子 (社長令嬢) 美川 恵子  
桂子 (塚田の情婦) 林 美樹  
里美 (社長二号) 志村 曜子  
友子 (ホステス) 三田 マリ  
とも子 (ホステス) 小柴とも子  
マダム 山吹ゆかり  
煙草屋のオヤジ 岸 信太郎

パーティー  
ホステス  
村人  
ボーイフレンド  
女学生

1 真昼の路上

津村、鞆を抱え、疲れ切った表情で歩いている。ふと立止まり、まぶしげに白い雲を見上げる。ハンケチを出して、首筋の汗を拭う。



津村、ふと前方に目をこらす。

マリリンモンローばりの動きを見せているヒップ。津村、その躍動を凝視しながら、ふらふらついて行く。

急にヒップが止まる。津村も立ち止まり、そっと顔を上げる。

峻しい表情をした女（里美）が、津村を睨んでいる。

里美 何か、御用ですの。

津村 （うろたえて）いや、別に、

里美 失礼な人ね、あとをつけないで頂戴  
里美、ツンとして、再び、ヒップを躍動させ、歩いて行く。

津村、突っ立ったまま、茫然としてそれを見送っている。

## 2 ビルの階段

津村、憂うつな表情で階段を上っていく。

## 3 吉川金融・その事務所

ドアが開き、津村、入ってくる。

五、六坪の小さな事務所。  
社員の岡田、帳簿の上にペンを動かしている。

奥まった所にある大きな机の前に坐り、電話で盛んにがなり立てているのは、社長の吉川だ。

吉川 （電話）冗談じゃないよ、君。三カ

月も利子も入れず、よくそんなのんきなことがいえるじゃないか。何？友人のくせに水くさい？ 馬鹿な事いうな。俺は友情で金なんか貸さんよ。こっちは商売でやってるんだ。いいか、今月一杯でけりをつけてくれないと、こっちとしても、最終手段をとるからな。

たたきつけるように受話器を置き、吉川、不気嫌な表情。

津村 只今、帰りました。

吉川 ああ、御苦労、早速だが入金した分はすぐに銀行の方へ――。

津村 実は社長。

吉川――

津村 入金出来なかったんです。今日はどうしてもまずいと、先方が手を合わすように頼むので――

吉川 何だと。（いらいらした表情）

津村 先月末に、小売店からの不渡りを喰ったそうで、返済日にはどうしても間に合わないというんです。

吉川 馬鹿者――

社長の大声に、事務をとっている岡田、ち

ぢみ上り、小さくなって、せかせかペンを動かし始める。

吉川 それで君は、おめおめと引退って来たのかね、相手が不渡りを喰おうとこっちに何の関係があるんだ。

津村 ハー、それはまあ、そうなんですけれど。

吉川 何をとぼけた事いっとるんだ。相手に同情して、この商売が務まると思ってるのかね。金融業者というものはね、人間的な感情でものを見るんじゃない、物質の原則で動くんだ。俺がいつも言ってる聞かせてる事じゃないか。

津村 ハー、それはよく分ってるのですが――

吉川 今時君のように根生のない男は、こうした金融業だけじゃない、どの社会へころがりこんでも一日でお払い箱だ。もう一度、腰をすえてやって来たまえ。失敗すれば鹹だ。いいな津村、硬化した表情で吉川を見つめている

吉川 何だ、その眼つきは、何か俺に文句があるなら、いってみろ。

岡田、突っ立っている津村の腰を、気分を



なだめるつもりでつつく。

津村 いや、別に——よくわかりました。

津村 苦虫を噛んだ表情で椅子に坐る。

誰かが、ドアをノックする。

岡田 はい、どうぞ。

吉川の一人娘、美津子が入ってくる。セー

ラー服を着た女子高校生である。

吉川、娘を見て、忽ち、破顔一笑。

吉川 なんだ、美津子じゃないか、どうし

たんだよ。

美津子、岡田と津村に軽く会釈しながら、

父親の傍へ行く。

吉川 ハハハ、また小づかいをせびりに来

たんだな。いかんぞ、無駄使いは、

吉川、えびす顔になって、煙草を口にする

美津子 そうじゃないのよ。ねえ、パパ、演

劇発表会の切符が売れなくて困って

るの。少し、助けてくれない？

吉川 今時、女学生の芝居なんて見に行く

閑人はいないだろう。

美津子 ひどいわ、パパ。私、演劇部のマネ

ージャーとして、これは責任問題な

のよ。

吉川 それで、パパにどうしろというんだ

ね。

美津子 切符を買って欲しいのよ、私、個人

の責任額百枚。これだけなんとかお

願いするわ。ね、いいでしょ。

美津子、鞆の中から入場券の束を取り出し

て、吉川の前に置く。

美津子 一枚三百円だから、全部で三万円、

お願いします。パパ。

吉川 仕様がないな。

といいながら、万更でもない顔付で、吉川

財布を出し、三万円を美津子に渡す。

美津子 助かったわ、有難うパパ。じゃ。

吉川 おや、もう帰るのかい。せっかく来

たんだから、パパと食事でもしない

か。

美津子 ええ、でも、今、演劇部の事で、と

ても忙しいのよ。

吉川 そうかい、じゃ、しっかりおやり。

美津子 じゃ、バイバイ——(岡田と津村に)

失礼致しました。

岡田 (立上って) ハッ、どうも。また、

いらっして下さいまし。

(頭を下げる)

美津子、出て行く。

岡田、椅子に坐って、隣で書類に眼を通し

ている津村の耳に口をよせる。

岡田 甘いな、娘にや。あのケチな社長が

よ。どうだい、あのニヤニヤした顔

全く親馬鹿チャンリンさ。

吉川、ニコニコ顔で、入場券を手にとり数

えている。立上って、二人の社員の傍へや

ってくる。

吉川 岡田君。

岡田 ハイ。

吉川 それじゃ、君に五十枚、(岡田の机

の上に入場券をおき、次に、津村の

机の上に入場券を置く) 津村君にも

五十枚だ。

岡田 (奇妙な顔つきで) 何ですか、社長

これは、

吉川 君達に割り当てるんだよ。五十枚ぐ

らいなら、何とかはけるだろう。一

万五千円ずつだ。今度のボーナスか

ら差し引いてもいい。

岡田 そ、そんな無茶な。

吉川 何いっとるか。君達はまだ一人前の

仕事も出来んじゃないか。それでボ

ーナスを受け取ろうというのは虫が

良すぎるよ。差し引かれるのが嫌な

ら、がんばってこの切符をさばき給

え。



岡田と津村、呆れ返ったような顔つきになり、顔を見合わせる。

#### 4 酒場・黒バラ、その内部

笑声、嬌声の渦巻く賑やかな酒場。

津村と岡田、賑やかな一団から、隔離されたようなスタンドに坐り、酸っぱい表情でビールをのんでいる。

岡田 全くふざけてやがるよ、娘の学芸会かバザーか知らねえけど、ピンク色の切符を押しつけて、さばかなきゃボーナスから差し引くたあ、何て云い草だ。え、あきれてものがいえねえよ。あれがわれわれの社長だと思ふと涙が出るじゃないか。

津村 (沈んでいる)

岡田 よ、元気を出せよ。さ、ぐっとあけろ。

岡田、ビールを取って、津村のグラスに注ぐ。

ホステスの友子、ボックスの方からニコニコして近づいてくる。

友子 いらっしやいませ。ごめんなさいね今日は女の子、三人も休んじやってるのよ。

友子、岡田に代って、ビールを津村に注ぐ

友子 (津村に) こちら、始めてなのね。

岡田 そう、俺の同僚だ。津村君といってね、剣道三段、柔道三段。

友子 (津村の横顔を見ながら) へえ、頼もしいわね。

岡田 玉に傷は、どういうわけか女にもてねえんだな。

友子 あら、そんなことないわよ。割とハンスムな方だし――

津村 (前方に眼を向けたまま、陰気に黙りこみ、煙草をくゆらせている)

岡田 な、友子、俺、お前に一寸、頼みがあるんだけどな。

友子 何よ。

岡田、内懷から、入場券を取り出す。

岡田 すまないが、何枚か買ってよ。お願いします。

友子 何よこれ、女学校の演劇発表会じゃない。へえ、岡田さんには、もう女学生になるお嬢ちゃんがいるの。

岡田 冗談いうな。社長に押しつけられたんだよ。こいつをさばかねえと、ボーナスから差っ引かれるんだ。なあ

友子、頼むよ、お前、この店のナンバーワンじゃないか。物好きな客に

売りつけてくれよ。

友子 (声を上げて笑い出す) 笑わせないで。女学校の切符をバーの客に売りつけるなんて、ああ、おかしい。

(笑いこける)

津村、陰湿な眼を友子の腰の曲線あたりに向けていたが、いきなり、友子のスカート裾を持ち、パツと上へ跳ね上げる。友子悲鳴をあげる。

友子 (頭にきて) 何すんのよ、いくらこんな商売しているからって、馬鹿にしないで頂戴!

友子、プンプンしてボックスの方へ戻っていく。

見ていた客達、どっと笑い出す。

津村、平然とした顔つきでビールを飲む。

岡田、小さくなって、ピーナツを口へほうりこみながら、

岡田 お前、少し痴漢のケがあるんじゃないか。

#### 5 里美のアパートの前

タクシー止まり、吉川降りてくる。手に大きな紙袋を抱えている。

#### 6 里美のアパート・その廊下

吉川、歩いてくる。



里美の部屋の前に立ち、ドアをノックする  
ドアが開き、ネグリジェ姿の里美、顔を出  
す。

里美 うん、パパ、随分おそかったのね。

吉川 ああ、なんだかんだと雑用がふえて  
ね、はい、お土産。(紙袋を渡す)

## 7 里美の部屋

豪華な調度品やベッドが配置されている。

吉川、卓の前へ坐る。

里美 はい、おしぼり。今、お茶を入れま  
すわ。

吉川 ああ、有がとう。

里美 ねえ、社長、今夜はゆっくり出来る  
んでしょ。泊って下さいますわね。

吉川 (おしぼりで顔を拭きながら) いや  
そうもいかないんだよ。俺が家に戻  
らんと、美津子が淋しがるからな。

里美 (すねて) 何かいうと、美津子美津  
子って、お嬢さんのことばかり。

吉川 そりゃそうさ、あいつは俺の生甲斐  
みたいなもんだよ。ママが死んだの  
はあいつの七つの時だ。それからず  
っと、男手一つで育てて出たんだか  
らな。

里美 ねえ、社長。

里美、甘えるように、吉川へ寄り添い、  
里美 いつになったら私、籍に入れて頂け  
るの。嫌だわ、いつまでもこんな日  
陰<sup>かげ</sup>の生活。

吉川 まあ、あせるな、里美。娘はいわば  
今が反抗期なんだよ。時期的にまず  
い。そのうち、必らずお前を正式の  
妻にする。な、もう少しの辛抱だ。

里美 ほんとね、社長。

吉川 ああ、嘘はつかんよ。俺がお前に首  
ったけな事は、お前が一番よく知っ  
とるじゃないか——おい、水をくれ  
ないか。

吉川、ポケットから薬瓶を取り出す。

里美 それ、何のお薬。

吉川 これか、ハハハ、精力剤だよ。年の  
故か、近頃はどうも、肝心の方の元  
気がない。

里美 フフフ、それ、私も飲もうかな。

吉川 (ニヤリとして薬瓶を手にし) これ  
はよく効くぞ里美。お前が飲めば、  
鬼に金棒ってところだ。

里美 まあ、いやなパパ。

二人、笑い合う。

## 8 酒場・黒バラ

津村と岡田、相変らずスタンドで飲んでい  
る。岡田、かなり酩酊し、酔っぱらい特有  
のうるさい調子になっている。

岡田 そりゃそうだよ、お前、社長の顔、

見るたんびに俺は吐き気が起るんだ  
からな。一そ、あんな会社、やめち  
まおうと思うんだが、女房、子供を  
抱えて、これからの職探しは辛えよ  
な、そうだろう津村。そこへいくと  
お前はいいな。独<sup>ひとり</sup>者だからよ。女房  
なんて滅多にもらうんじゃないぜ。  
もっとも、お前みたいに陰気くさい  
男にゃお嫁の来手はねえだろうけど  
な。ハハハ。

津村 (静かに煙草をくゆらしながら) 僕  
はね、岡田さん。人生そのものに嫌  
気がさしてきたんですよ。

岡田 はほう、人生にね。

津社 会社じゃ腹が立つ、好きな女は見向  
いてもくれない。現在にも将来にも  
希望は持てそうでない。何から何ま  
で無味乾燥、こんな状態でも人間、  
生きてなきゃならないんですかね。  
岡田 そりゃお前、仕方がないさ。現にこ  
うして俺達は生きてるんじゃないか



津村 (岡田の顔を見て) 一体、貴方は何が

が楽しみで生きてるんです。

岡田、ええ？ な、何が楽しみって、お前

——そうだな、こうして飲んで、う

さを晴らす位なもんかな。——ま、

そうひがんだいい方はよせ。いいか

こういう楽しみだってあるんだぜ。

岡田。ポケットから、電話帳を取り出して

ペラペラめくる。

岡田 これはな、俺がこっそり調べたんだ

が、社長の二号の電話番号さ。(腕

時計を見て) 今頃は——へへへ、恐

らく真最中だと思うぜ。一寸、いた

ずらしてやるんだ。これが俺の趣味

なんだよ。

岡田、スタンドの電話の方へ行き、

岡田 ちよっと電話かりるよ。

とも子 はい、おかけしましょうか。

岡田 いいよ、いいよ、自分でかけるから

とも子 そうですか、どうぞ。

## 9 里美の部屋

豪華なベッドの上で、吉川と里美、濃厚な

抱擁をつづけている。

枕許の電話が鳴る。

里美 いやーね、こんな時に、誰かしら。

里美、手をのばして受話器をとる。

里美 (不気嫌に) もしもし。

## 10 酒場・黒バラ

岡田鼻をつまんで電話をかけている。

岡田 (キンキンした声で) あーもしもし

あーもしもし、こちら連邦警察、こ

ちら連邦警察。正直に答えて下さい

今、あなたは、誰と何をなさってお

られますか。あー、もしもし。

## 11 里美の部屋

受話器を耳にしている里美、びっくりして

里美 は、はい、今、私は——(吉川の方

を見て) パパ、連邦警察から電話な

のよ。

吉川 ええ、連邦警察？ 馬鹿、誰かのい

たずらだ。

吉川、里美から受話器をとって、耳に当て

る。

岡田の声 あー、もしもし、あー、もしもし

こちら連邦警察、夜の調査部——

吉川 馬鹿！ いたずらはよせっ、承知せ

んぞ。

吉川、ガチャリと電話を切る。

吉川 ふざけた奴もいるもんだ。馬鹿にし

よって。

里美 この間も、変な電話がかかって来た

わ。ベッド会社の調査部だというの

ベッドのゆれかたは如何ですか。な

んていうのよ。

吉川 悪質ないくらだよ、全く。

里美 何だか私、気分がさめちゃったわ。

吉川 気にすることは無い。さあ、こっち

へおいで、里美。

吉川と里美、再び、息をはずませ、抱擁し

合う。

電話、再び鳴り出す。吉川と里美、反射的

に上体を起こす。

## 12 夜の街

津村、酩酊し、ふらふら歩いている。

街娼の桂子、近づいてくる。

桂子 ね、あんた、遊ばない。

津村、じっと桂子の顔を見る。

桂子 そんな恐い顔して、睨まないでよ。

何か面白い事があるのね。私が

慰めてあげるわ。ね。

津村 慰めてくれるだど？

桂子 ねえ、行こうよ。安いホテルを知っ

てるわ。

温泉マークのネオンが夜空に美しく明滅し

ている。



## 31 安旅館の一室

桂子 な、なにすんのよ。

桂子、津村に組みしかれて、暴れ廻っている。

津村、寝巻の紐を口に咥え、桂子をキリキリ縛り上げているのだ。

裸身を後手に緊縛された桂子、ほっとして立ち上った津村に、毒づく。

桂子 ちよいと、あんた、変態なの。私しや男とねるのが商売なのよ。どうして、こんなひどい目に会わなきゃならないのよ。解いてよ、この紐。

津村、冷ややかに桂子を見下しながら、ズボンのバンドを引き抜く。

津村 お前、俺を慰めてくれるといったじゃないか。

桂子、津村の手にした皮バンドを見、慄然とする。

桂子 な、何する気なの、あんた。

津村 俺は、女をいじめると胸がスーッとするんだ。女にや随分と小馬鹿にされてるからな。(声を大きくして)

俺は女が憎くて仕様がねえんだよ。

桂子 (鳥肌立つ思いで後退する)

津村 女だけじゃない。世の中だって憎い

んだ。お前の体を借りて、うさを晴らさせてもらうぜ。

津村、バンドをふり上げて、桂子をぶつ、

桂子、悲鳴をあげてのたうつ、

桂子 気狂い！ 人殺し！ 誰か来て！

津村、あわてて、桂子の上体を起し、

津村 黙れっ、パン助のくせに、一人前の口きくな。

津村、カッとなって、桂子の頬に二、三発平手打を喰わす。

桂子、苦しうにあえぎながら、恐怖に歪んだ眼を津村に向けている。

津村、手拭を拾い上げ、桂子の口に猿轡をかませようとする。

津村 泣いたり、わめいたりしてくれた方が気分がいいんだが、近所迷惑だからな。——おい、おとなしくしろよ

津村、狂ったように首を振る桂子を押さえつけ、猿轡をかませると、再び、皮バンドを手にして立上る。何かにとりつかれたような形相で、津村、桂子の体を皮バンドで打ちつづける。

声にならぬ悲鳴を上げて、のたうち廻る桂子。——やがて、悶絶したように桂子畳に頭を押しつけ、ぐったりなってしまう

津村、ようやくバンドを投げ出し、桂子を縛った紐をとくと、失神状態の桂子の上へ乗しかかり、狂ったように激しく抱きくめる。

## 14 同・ホテルの一室、朝

夜具の上、津村、ぼんやりと眠りから覚める。桂子の姿はすでにない。

津村、腹這いになって灰皿をひきよせ、煙草を口にすする。

ふと、何かに気付いて、布団の中に手を差し入れ、ブラジャーを引っ張り出す。

津村 あわてて忘れて行きやがった。間の抜けたパン助だ。

津村、ブラジャーを隅へほうり投げ、布団から出る。洋服に着換えながら、窓の外を見る。

## 15 津村の見た表通り

女子高校生の美津子が、友人と談笑しながら歩いて行く。

## 16 ホテルの一室

津村、獲物を狙う鷹のような眼つきで、窓から通学する美津子を眺めている。

ノックの音。津村、振り返る。

津村 どうぞ。

ドアが開き、サングラスをかけた塚田が入



ってくる。

津村——。

塚田 (うしろを振り返り) よ、桂子、こ

の野郎かい。

ネッカチーフを顔に巻いた桂子、恐る恐る  
ドアから顔をのぞかせてうなづく。

津村、納得したようにネクタイを結びなが  
ら、卓の前に坐る。

津村 やっぱり、ひものお出ましか。ま、  
入れよ。

塚田 (桂子に) おめえ、下へ行って、煙  
葉を買って来てくれ。その間に話は  
つけとくからな。

桂子、うなずいて、そわそわ出て行く。

塚田、部屋へ上りこむ。

塚田 成程、桂子のいう通りだ。

津村——

塚田 蛇みてえな眼つきの男だといってた  
ぜ。おめえが蛇なら、俺はまあさそ  
りってところかな。

津村 用件を早く言えよ。そろそろ出勤の  
時間だ。

塚田 そう思って、寝こみをおそう気でや  
って来たんだ。——ま、俺も、自分  
の女を使って、色々な男とねかせた

が、なぐったり、蹴ったりされたの

は今度が始めてだ。サジストって云  
うんな。手前みたいな人間を。

津村 俺を慰めてやるっていうから、好き  
なようにさせてもらっただけさ。料  
金もちゃんと払ってある。

塚田 (声を大きく) ふざけるな、この野  
郎！

津村 (それよりも大きな声で) なめるな  
馬鹿野郎！

塚田、出鼻をくじかれた感、啞然とする。  
津村 喧嘩を売るなら買ってやるぜ。この  
旅館の裏は空地だ、そこへ行って待  
ってな。

塚田 畜生。

塚田、ポケットから飛び出しナイフを出す  
パシリ、と飛び出す鋭いナイフの刃。

津村、鋭い眼差しを塚田に向ける。

17 旅館の階段

桂子、煙草を持って階段を上って行く。

18 同・二階の廊下

洗面所で、津村齒をみがいている。

桂子、ギョッとして立上る。

津村 お前の亭主は部屋の中だ。早く行っ  
てやれ。

19 同・一室

塚田、下腹を押さえるようにして、畳の上  
にのたうっている。

桂子、飛びこんでくる。

塚田 (うめく) 痛え、痛えよ。

桂子 どうしたのよ、あんた、しっかりし  
て。

桂子、塚田を介抱し始める。

津村、手拭いで顔をこすりながら入ってく  
る。

津村 少し、パンチがききすぎたかな。

津村、塚田の肩をとって上体を起させる。

塚田、顔をしかめ、腹を押さえている。

眼にも一撃を受けたらしく悲が出来ている

津村 おい、大丈夫か、しっかりしろ。

塚田 (苦しげに) どうも、俺は、相手を  
間違えたらしいな。あんたにゃ、と  
ても齒がたたねえや。

桂子 あんた、大丈夫(おろおろしている)

塚田、桂子の肩に手をかけるようにして立  
上る。

津村 待てよ。尻尾を巻くのはまだ早いぜ

塚田 わ、わかったよ、兄貴、そういじめ  
んなよ。

津村 兄貴だと、ハハハ、まあいい。とに



かく、落ちつけよ。

津村、塚田の肩を突く。塚田、ドシンと畳の上に尻もちをつく。

津村 どうだ。一口、儲話に乗らないか

塚田 儲話。

津村 二、三百万にはなる仕事だ。

塚田 何だって。

塚田、眼の色を変え、桂子と顔を見合わす

津村 女の紐になって、ネズミみたいにそこそ稼ぐより、体を張った大仕事をしてみないかといってるんだ。

塚田、唾を呑みこみ、血走った眼つきになる。

塚田 気にいったぜ兄貴。こういっちゃ負け惜みになるが、今の凄えパンチで俺は兄貴に惚れちまった。強えな、兄貴は。

津村 (煙草に火をつけながら) フン、お前が弱すぎるんだよ。

塚田 一体、兄貴はどういう素姓の人なんだよ。まさか、素人じゃねえだろ。

津村 素人も素人、しがないサラリーマンさ。

塚田 へえ——信じられねえな。——ところで、その仕事ってのは。

津村 うん、(桂子に) おい、女中にビールでも頼んでくれないか。

## 20 吉川金融・事務所

ドアが開いて、吉川、むつかしい顔して、入ってくる。

岡田、さっと立上って、

岡田 お早うございます。

吉川 うん、(津村の机を見て) 津村君はまだ出社せんのかね。

岡田 はあ、その、例の葉山印刷へ、直接取り立てに向ったと思いますが——

吉川 そうか——全くあいつはやる気があるのかないのか分らんね。ところで岡田君。

岡田 はあ。

吉川、机の前に坐って、煙草を口にす。

岡田、かけ寄り、素早くライターをつける

吉川、煙を吐きながら。

吉川 昨夜もそうなんだが、近頃、僕の別宅の方へいたずら電話がかかってきて困っとるんだ。

岡田 はあ、全くけしからん奴がいるものでございますね。(震えている)

吉川 そういう不埒な奴を捕える方法はな

いものかね。彼女もいささかノイロ

——ぜ気味なんだよ。

岡田 困ったことでございますね、全く。

一そ、電話番号を変えてみては如何でしょう。

吉川 うん、わしもそう思って、今朝電話

屋へ頼んで取りかえることにした。

(ポケットからメモを出して) これ

が新しい電話番号だ。君にだけ教えておくよ。急用があったら、ここへ電話してくれ。

岡田 は、有難うございます。

岡田、手帳を出して、メモを見ながら記入しはじめる。

岡田 なかなか覚えやすい、いい番号でございますね。(咳払いをする)

21 旅館の一室

津村、塚田、桂子の三人、卓を囲んで、ビールを飲みながら、

塚田 令嬢誘拐か。成程、こいつは大仕事

だな。

桂子 何だかこわいわ。(塚田に) ねえ、

何もあんな、そんな危い橋を渡らな

くたって。

塚田 馬鹿野郎、それ位の事やらなきや、何百万もの銭が握れるものか。それ



津村 によ、この兄貴は俺達と違って頭がいい、ドジを踏むってことはねえよ。今までの例を見ても、誘拐は成功しにくい犯罪だ。だが、やり方次第さ。この場合、俺には充分自信がある。君達二人が、俺の指示通り動いてくれれば、必ず成功するさ。

塚田 やるぜ、兄貴、俺は今、どうしたってまとまった金がいるんだ。博打の負けが五十万ぐらいにもなっちまっ

津村 てよ。友達の所へ顔が出せねえ仕末なんだ。この仕事、喜んで手伝うぜよし、話はきまった。ところでお前前科は三つだといったな。それじゃ身代金をせびる電話は、桂子にしてみらおう。警察に声をキャッチされた場合、まずいからな。

塚田 桂子、三百万の仕事だ。しっかりやるんだぜ。

佳子 (思いつめた表情で、うなづく)

津村、内懷から地図を出して、卓の上に広げる。その上を指で示しつつ、

津村 娘を誘拐すれば、この街道を通過してここへ運ぶ。くわしい地図はあとで書くが、ボタ山の近くに、三年前、

俺が買った百姓家があるんだ。

塚田 じゃ、兄貴は三年前から、この計画をたてていたんだな。

津村 そうさ。

津村、ズボンのポケットから車の鍵を出して、塚田へ投げる。

津村 この計画のために車も買った。商売柄、担保流れの安い家や車が手に入るんだ。そのため、食うものも食わず、長い間貯金したよ。ハハハ。

津村、コップのビールを一息にのんで立ち上り、窓から、外を眺める。

津村 (呟やくように) これは、計画というより、人生に失望した俺の、たった一つの夢なんだ。成功するにせよしないにせよ、俺は、こいつに命を賭けている。

塚田と桂子、窓辺に立つ津村の後姿を、じっと見つめている。

## 22 塀にそった道

道路の端に一台の車、駐車している。運転席に乗っているのは、塚田と桂子。塚田、週刊誌を読み、佳子はいねむりしている。

津村の声「美津子が、改正道路を通過して帰宅

するのは、大体、午後四時から五時迄の間だ。美津子が友達なんかと一緒に緒の時は、絶対に近よるな。一人の時を狙うんだ。十日でも二十日も根気よくな。

塚田、週刊誌から眼をあげる。サングラスをかける。美津子がやって来たのだ。しかし、ボーイフレンドらしいのと談笑し合っている。

塚田、あきらめて、週刊誌を投げ出し、車を動かし引揚げて行く。

## 23 ビルの階段

里美、和服姿で、階段を上って行く。

## 24 吉川金融事務所

社長の吉川、社員の岡田、津村、各々の机で事務をとっている。

ドアが開き、里美、入って来る。

里美 今日。

吉川、ふと顔をあげ、眼鏡を外す。

吉川 なんだ、里美じゃないか。

里美 随分探したわ、わかりにくい所ね、ここ。

吉川 困るね、用があったら電話しなさい。ここは女の来る所じゃないよ。

里美、吉川の傍へ寄り、



里美 だってパパ、すばらしいお店、売りに出てるのよ。電話じゃくわしいお話が出来ないと思って、それがねパパ、たった三百万円。

吉川 (社員の方をちらと見て) こら、会社でそんな話、するんじゃない。

事務をとっている岡田、隣の津村をつつく

岡田 おい、あれが社長の二号さ。どうだい、なかなかのグラマーだろ。

津村、顔を上げる。

ふと、里美と視線が合う。

津村、あわてて視線をそらせる。

里美 あら。

吉川 (里美と津村を見て) どうしたんだお前、津村を知ってるのか。

里美 うん、まあね、フフフ。

里美、吉川の耳に口を寄せる。

津村、チラチラその方へ視線を向けながら小さくなって、ペンを動かしている。

吉川、大口を開けて笑い出す。

吉川 里美、お茶でも飲みに行こう。

里美 (嬉しそうに) うん。

吉川、里美を連れて、津村の机の前に立止る。

吉川 津村君、仕事の途中で女のケツに見

とれているようじゃ困るね、だから仕事にまでケツまじくんだ、ハハハ吉川、里美と一緒に外へ出て行く。

津村、憤怒の色を眼に浮かべ、鉛筆をポキリと折る。

岡田 あんまり気にすんなよ。津村、だがお前、あの女とどこで逢ったんだ。

津村 (それには答えず) くそ、今に見ていろ。

岡田 そう、我々力弱いサラリーマンにやそのファイトが必要だ。何だ、あの女、社長の金だけが目当てでくっついてるだけじゃないか。——だが、

いい体してやがんな。

## 25 塀に添った道

美津子、一人で歩いて来る。

駐車している車の運転席の窓から、塚田と桂子、獲物を狙う眼つきでじっと美津子の動きを眺めている。

車の傍を通りかかる美津子。

塚田、車のドアを開け出て来る。

塚田 あ、吉川美津子さんじゃありませんか。

んか。

美津子 ——はあ。

塚田 ああ間に合ってよかった。お父さん

が急病で、会社で倒れたんです。

美津子 えっ、父が。

塚田 お迎えに来ました。すぐこの車に乗って下さい。

美津子、あわてて車に乗る。

塚田、周囲の気配を見ながら、ボタンとドアを閉め運転台に飛び乗る。

車、走り出す。

## 26 ホテルの一室

吉川と里美、ベッドの上で抱擁し合っている。

里美、吉川の首に両手をからませながら甘えるように。

里美 ねえ、パパ、いいでしょ、あのお店買っても。

吉川 だが三百万は、ちと高いな。

里美 嫌、嫌、だってパパ、なかなか結婚してくれないんだもの。私、何か商

売でもしなきゃ、退屈で気が狂いそうだわ。——ねえ、パパったら。

吉川 わかった、わかった、買ってやるよ

## 27 吉川金融事務所

机の上の電話が鳴る。

岡田、受話器をとる。

岡田 (電話) はい、あ、社長、は、はい



わかりました。では。

電話を切って、隣の津村に。

岡田 社長、今日はもう社へ戻らねえってさ。どっかへしけこんでやがんだよ

(腕時計を見て) もう五時過ぎだ。

そろそろ、俺達も引揚げるか。

津村 (算盤をはじきながら) そうですね

岡田、椅子から立ち上り、ふと奇妙な顔になる。

岡田 どうも腹具合が変だな、おい、すまんが紙貸してくれよ。

津村 はあ(ポケットからチリ紙を出す)

岡田 すまん。あのケチ社長、女にや三

万の店を買ってやる気でも、このトイレの紙は買おうとしねえんだからな、全く。クソ喰らえだよ。ハハハ。

岡田、急に下腹を押さえ、トイレへかけこんで行く。

机上の電話が鳴る。津村受話器をとる。

津村 はい、こちら、吉川金融でございます。はあ、津村ですが——えっ。

津村、血走った表情になる。

トイレに入った岡田の方に気を配りながら津村 よし、わかった。俺が行くまで勝手

な行動はとるなよ。打合わせた通りにやってくれ、いいな。

津村、電話を切って、煙草を口にし、火をつける。

静かに煙を吐く。

悦びとも興奮ともつかぬものが、ジワジワ胸にこみあげて来て、狂ったように笑い出す。机をたたき、両手を上にあげ、わめくように笑いこける。

トイレから出て来た岡田、バンドをしめながら不思議そうに津村を見る。

岡田 どうしたんだよ、津村。

津村 ああ、何だか急に大声で笑ってみたくなったんですよ。

岡田 (小首をかしげて) お前、どこか体の具合が悪いんじゃないか。

## 28 納屋の前

桂子、おろおろした表情で立っている。

ガサガサで音がする。

桂子、硬化した表情。

叢から出て来たのは、食料品を両手に抱えた塚田である。

桂子、ほっとする。

桂子 気味の悪い所ね、嫌だわ私、こんな所で暮すの。

塚田 二、三日の辛抱だよ、だが、近所に

家はねえしよ。こういう仕事にや打ってつけの場所だな。兄貴はいい所を見つけたもんだ。

## 29 納屋の中

網戸が開いて、塚田と桂子、入って来る。

奥の大黒柱の下に、美津子、後手に縛られている。きびしく猿轡をかまされている美津子、憎悪にこもった瞳を塚田と桂子に向ける。

塚田ニヤニヤして美津子に近づき、腰をかめる。

塚田 へへへ、お嬢ちゃん、辛えだろうがしばらくの辛抱だ。下手に騒ぐと、

何をされるかわからねえぜ。とにかく俺達は悪党なんだからな。

塚田、美津子の猿轡を外してやる。

美津子 (キツとした眼で) 一体、私をどう

しようっていうの。

塚田 わかりきったことを聞くなよ。おめえを人質にして、身代金を頂くわけだよ。

桂子 なかなか気性の強い子ね。泣いたりわめいたりしないだけ、こっちは助かるわ。



塚田、ウイスキーのポケット瓶を出し、ラッパ飲みしながら桂子に。

塚田 身代金は身代金として、兄貴の本当のお目当ては、この娘らしいぜ、体つきだって立派に大人だもんな。

美津子（慄然とする）

桂子 とかいて、あんただって怪しいもんだわ。これじゃ猫の前に鯉節をさらしとくようなもんだからね。

塚田 冗談いうねえ。俺は女学生なんて趣味に合ねえよ。金、金、一にも二にも金さ。

誰かが納屋の戸をたたく。

塚田、驚き、呑みこんだウイスキーをぶーっと吐き出す。桂子もうろたえる。

美津子（必死に）助けて！ お願い、助けて下さい！

塚田、あわてて美津子の口を手で押える。

ガラガラと戸が開き、入って来たのはジャンパー姿に黒眼鏡の津村である。

塚田も桂子もほっとする。

塚田 驚かさねえでくれよ、兄貴。寿命がちぢまったぜ。

津村、恐怖に慄える美津子の傍に寄り眼鏡を外す。

美津子（ハッとして）あ、あなたは――。

津村 そう、あんたのパパにこき使われている社員の津村だよ。

美津子 お願い、津村さん、助けて、助けて頂戴。

津村（口元を歪めて笑う）お嬢さんを誘拐した主犯は、この僕だよ。そいつに救いを求めたって無駄じゃないかね。

美津子（慄え上る）

津村 お嬢さんのパパには随分と恨みがあるんだ。俺の兄貴はね。あんたのパパに金を借りたため、自殺しちまった。血も涙もない吉川万造の泣き所は只一つ、娘の美津子だ。ハハハ、僕は奴に死ぬ程苦しい思いをさせてやるため、お嬢さんを誘拐したんだよ。

美津子、顔を横に伏せ、泣きじゃくる。

塚田 よ、兄貴、復讐もいいけどよ、身代金のことを忘れちゃ困るぜ。俺たちはそれが目当てなんだからな。

津村 わかってる。明日からぼちぼち攻撃開始だ。

塚田 じゃ、早速、打合わせにかかろうか

津村 ああ、だが、その前に――。

塚田 ええ？

津村 奴に対し娘がこっちへ誘拐されていってという証拠がある――そうだな津村、蛇のような眼つきで、美津子の全身を見つめる。

美津子、津村の妖怪めいた瞳に射すくめられ、ぞっとして眼をそらせる。

津村 この娘の着ているセーラ服がいい。引き剥がしな。

塚田 よし来た。おい桂子、手を貸せ。

塚田と桂子、緊縛されたままの美津子を引き起こす。

美津子、逆上したように悶え抜く。

美津子 な、なにをするのッ。やめて！

塚田 ちょっと、おべべを脱いでもらうぜ

美津子 嫌っ、嫌ですっ。

塚田 何も素っ裸にするっていつてゐるんじやねえ。証拠品がいるんだよ。

塚田、面白がって桂子と一緒に、美津子のスカートのホックなど外し始める。

津村、狂乱する美津子を楽しそうに見つめながらゆっくりと煙草の煙を吐く。

30 吉川金融事務所

津村、岡田、生真面目な顔で事務をとって



いる。

津村、チラと社長の机に眼をやる。

吉川、物思いに沈んでいる。

岡田、書類をかかえて立上り、吉川の所へ行く。

吉川の机に書類を並べる。

岡田 ええ社長、山村工業の手形および大友商事の手形決済は、今月の二十五日ということに……。

吉川、空虚な眼をぼんやり窓の方へ向けている。

岡田 ——あの、社長。

吉川 (ふと正気に戻り) うん? あ、すまんすまん。

吉川、ホープを口にする。

岡田、すばやくライターをつけ、火を近づけるが、吉川、煙草を逆に啜え、フィルターの方を突き出している。

岡田 社長、お煙草が逆ですが——。

吉川 うん? ああ(煙草をほうり出して)岡田君、弱ったよ。

岡田 はあ?

吉川 娘が昨日、家へ帰って来ないんだ。

岡田 ええ? そりゃまたどういうわけ

吉川 それがわからんから、弱っとるんだ

よ。今まで一度だって家を空けたことのない娘なんだが——学校の方へも行っとらんようだ。

吉川の前の電話が鳴る。

岡田、受話器をとる。

岡田 ああもしもし、吉川金融でございますが——は、社長でございますか。一寸お待ち下さいまし。

岡田、受話器を吉川へ向ける。

吉川 はい、もしもし、はあ(さっと顔色が変わる)な、なんだと貴様は、貴様は一体誰だ。

31 公衆電話ボックス

桂子 (電話) そんなにどならないですよ。

お嬢ちゃんはおこちであずかってることを知らせてあげてるんだから。いっとくけど、警察にとけたりすりゃ、お嬢ちゃんの命は保障しないからね。お嬢ちゃんを預った証拠に今朝方お宅の事務所へ小荷物をとどけておいたわ。

32 吉川金融事務所

吉川、受話器を持つ手がぶるぶる慄えている。

吉川 (電話) もしもし、美津子は、美津

子は、無事なんだろうな、頼む、美津子を電話口に出してくれ。

桂子の声 身代金は三百万円。取引の日は改めて電話するわ。じゃあね。

吉川 待てっ、それ位の金は今、手もとにある。今すぐ取引しようじゃないかえ、おい。

桂子の声 そんなにあわてなくてもいいわよボスの命令なんだから。お嬢ちゃんがいなくて淋しいでしょうけど、しばらく辛抱してね。フフフ。(電話切れる)

吉川 (うろたえて) もしもし、もしもし

吉川、放心したように椅子に腰をおとす。

岡田、硬化した表情で津村と顔を見合わせ

岡田 社長。

吉川 (激しい口調で) 岡田君、津村君、ど、どうすりゃいいんだ。美津子は誘拐されたんだ。

岡田 えっ、じゃ今のは脅迫電話。

吉川 (はっと気づいて) 何か証拠になるものをここへ置いたといったが——

岡田 あ、そういえば。

岡田、事務所の隅へ行き、紙袋を持って戻って来る。



岡田 今朝、僕が出社した時、これがドアの前に置いてありました。

吉川 (わなわな慄えつつ) 開けてくれ給え。

岡田と津村、吉川の眼の前で紙袋の中味を引っぱり出す。

セーラ服の上下を見た吉川、慄然とする。

吉川 ああ、こ、これは――。

津村 お嬢さんのものですね。

岡田 こりゃ大変だ、ひょっとすると相手は変質者かも知れませんよ。

吉川 (戦慄して) ど、どうすりゃいいんだ。岡田君、津村君、何とかしてくれ、頼む。

吉川、机に額を押し当て号泣する。

岡田 とにかく社長、すぐ警察を呼びましょう。

津村 いや、それは、かえって危険だと思いますね。こんなものを送りとどけてくる所をみても、相手はよほど兇悪な連中だと想像出来ますよ。警察なんかに知らせて、お嬢さんの身に万一のことがあっては――。

岡田 しかし、やはり、こうしたことは、専門家に任じた方がいいよ。素人達

が下手にいじり廻すと、犯人の思う壺に嵌るばかりだ。

津村 いや、とにかくお嬢さんの身を守るのが先決ですよ。

吉川、たまらなくなったように立上り、

吉川 やはり警察へ知らそう。じっとしていると気が狂いそうだ。

津村の眼、ニヤリと笑う。

### 33 納屋の中

塚田と桂子、土間の上に敷いた薄い夜具の上で抱擁し合っている。

大黒柱を背にして、スリッパ一枚にされた美津子が麻縄で酷しく縛り上げられている眼の前で演じ合っている二人から、美津子は必死になって眼をそらせている。

ぴったり抱き合って、余韻を楽しんでいる塚田と桂子。塚田、ふと眼を上げ、恐怖と羞恥に身悶えしている美津子を見て、北叟笑み、おいと桂子に眼で示す。

桂子 フフフ、お嬢さんには一寸、刺激がきつすぎたようね。

塚田と桂子、のっそり立上り、ニヤニヤしながら美津子に近づく。

美津子 ち、近寄らないで!

塚田 けがらわしいってわけか、そう力ん

だっておめえ、<sup>まないた</sup>姐板の上の鯉だぜ、煮て食おうと焼いて食おうと、こっちの自由なんだからな。

桂子 あんた、そんなにおどかすもんじゃないわよ、可哀そうじゃない。

塚田 だっておめえ、この娘は、おそかれ早かれ兄貴の手で――。

桂子 ま、いいじゃないの、人のことはほっときなよ。お金さえ貰えば私達、ここからバイバイするんだから。

戸をたたく音。

津村の声 俺だ、開けてくれ。

塚田 お、うわさをすればだ。

塚田、急いで内鍵を外し、戸を開ける。ジャンパー姿の津村、入って来る。

津村 どうだい、お嬢さんのご気嫌は。

桂子、スリッパを身につけながら、美津子の顔を面白そうに見て。

桂子 おとなしくていい子ちゃんだったわ育ちのいい娘は扱い易いわね。

津村 桂子、今日の電話、なかなかよかったぜ。吉川の奴とうとう泣き出しちゃったからな。

桂子 それで、次はどうすんの。

津村 明日は取引きする。いよいよこの作



戦の山場だ。

塚田 うまくいくだろうか、兄貴。

津村 大丈夫さ、だが、吉川の奴、やっぱり警察へ知らせやがった。

塚田 えっ。

津村 心配すんな、そいつは計算ずみのことだ。奴等は自分の娘の首をしめてるようなもんだからな。

津村、せせら笑って美津子の顔を見る。

美津子、ぞっとして、顔をそむける。

津村、美津子のスリッパの紐を指で肩から外す。

津村 親父への見せしめだ。丸裸にしちやいな。

美津子 (恐怖に眼をつりあげる)

塚田 待ってました。へへへ。

桂子 でも、一寸可哀そうね。生娘だけにさ。

などといいながら、二人、美津子の傍に寄る。美津子、狂気して身悶えする。

津村、手にしていた携帯用のテープコードを後に置く。

美津子 嫌、嫌です！ ああ、誰か来てっ。

塚田 恨むなら親父を恨みな。さ、脱いだり、脱いだり。

桂子 おとなしくしな、あきらめるんだよ

塚田と桂子、泣きわめく美津子の頬を平手打ち、スリッパを引き裂いていく。

美津子 パパ、パパ、助けて！

### 34 吉川金融事務所

津村、冷静な表情で帳簿にペンを動かしている。

吉川の机の電話に、刑事の内藤と山川が盗聴器をとりつけている。

放心した表情で、それを見つめている吉川岡田、二人の刑事にお茶を出す。

岡田 相憎、うちじゃ女の子をおいてませんので——どうぞ。

内藤 ああどうも。

内藤、吉川に近づき、手帳を見ながら。

内藤 念のため、も一度お聞きします。犯人からの電話があったのは昨日の朝この事務所へ一回、それから社長の

自宅へ一回、そうですね。

吉川 はあ。

内藤 自宅へ電話があったのは、夜の十一時前後ですね。

吉川 はあ十一時をたしか過ぎていたと思います。やはり女の声で、身代金三

百万円を私の愛人に持たせるようい

って来ました。

内藤 愛人にねえ。

吉川 はあ、社長なら(額の汗をふきつつ)二号の一人や二人は持ってるだろうとけしからんことをいいまして。

内藤 その時は場所を指定しなかったのですね。

吉川 はあ、この事務所へ明日、つまり今日のようですが、改ためて電話を寄こすといいました。

ドアが開いて、和服姿の里美入って来る。里美、張りつめた事務所内の空気にと緊張する。

吉川 ああ、里美。

里美 あなた。

里美、たまらなくなつたようにかけ寄り、吉川の肩に顔を埋めてすすり泣く。

吉川 里美、すまんが、力になってくれ。金はこの中だ。

吉川、風呂敷包を取り出す。

津村、帳簿を伏せ、のっそり立ち上る。津村 社長、三国建設の手形交換に行つて参ります。

吉川 何も君、こんな時に行かなくても。

津村 はあ、しかし、仕事のけじめだけは



つけたく思いますので――。

津村、鞆を取り出て行く。

その後姿をじっと見つめる内藤刑事。

### 35 公衆電話ボックス

津村、周囲に気を配りながらボックスに入る。

電話の前で、テープコードのスイッチを押す。

電話のダイヤルを廻し始める。

### 36 吉川金融事務所

机の上の電話が鳴る。

吉川、硬化した表情で、そっと受話器をとる。

刑事二人、緊張する。

吉川 (電話) もしもし、もしもし。

### 37 公衆電話ボックス

回転しているテープに受話器を当てている津村。

テープより桂子の声が流れ出る。

桂子の声 もしもし、今日の取引は三時、渋谷××町の木村煙草店の前、わかって？ 昨夜いった通り、お金は貴方の二号一人に持ってこさせるのよ。

あれだけ注意したのに、どうして警察へ知らせたの。約束を破るとどう

内藤と山川、顔を見合す。

内藤 お気持はわかりますが、そうすれば逆に――。

吉川 お願いだ。頼む、手を引いて下さい

内藤 (酸っぱい表情で) はあ、じゃ、札の番号だけ控えさして頂きます。

(岡田に) すみません手つだつてください。

岡田 はい。

刑事達、風呂敷包みを開き始める。

39 渋谷の街

里美、顔ざめた顔で、風呂敷包をかかえて歩いている。

刑事二人、別々の方向から、里美のあとをつけている。

40 木村、煙草店の前

里美、立っている。

刑事二人、違った方向から里美を監視している。

煙草店の赤電話が鳴り、店の主人、受話器をとる。

主人 はいはい、え、着物を着て、風呂敷包みを持った女の人ですか。えーと

主人、店頭に立っている里美に気づき。

主人 もしもし、あなた、電話ですよ。

里美 え、私にですか。

里美 受話器を受取る。

里美 はい、もしもし。

電話の声 (津村) すぐにタクシーに乗って



新宿へ出るんだ。いいか、その間に

誰かと一言でも口をききやあ美津子

の命はないぜ、新宿についたらな、

まっすぐに――。

#### 41 近くの電柱

電柱の陰に隠れている内藤、不安な表情で  
里美の方を見つめている。

#### 42 木村煙草店の前（内藤の視点から）

里美、電話を切ると舗道へ出、タクシーを  
止める。

里美を乗せたタクシーが走り出す。

そのあとへ、かけつけてきた内藤と山川、  
いらいらした表情で手を上げて、タクシー  
を止めようとするが、うまくいかない。

#### 43 新宿の駐車場

里美、入ってきて駐車している車の中で、  
キョロキョロしている。

車の中から、じっと里美の様子をうかがっ  
ている塚田、ハンドルを握る。

里美の横に、塚田の車、ぴったりと止る。

塚田 よ、乗りな。

里美 （震えて）あの――

桂子 （ドアを開けて）早くお乗りよ。

桂子、里美の手をとるようにして後のシー  
トへ引き込む。

車、走り出す。

#### 44 納屋の中

柱を背に、パンティ一枚の姿で縛り上げら  
れている美津子、顔を伏せ、肩を震わせて  
泣きじゃくっている。

その前にあぐらをかいている背広姿の津村  
美津子のすすり泣きを心地良さそうに聞き  
ながら煙草の煙を吐いている。

津村 もっと泣くんだ。親父にとどく位、

大きな声でな。ハハハ。

津村、煙草を捨てて立上る。

美津子 （ハッとして）こないで、きちや嫌  
っ。

津村、美津子の口を吸おうとする。

美津子、狂気したように首を振る。

津村 （口元を歪めて）いくらわめいたっ  
て、お嬢ちゃんはどう俺のものさ。

津村、腰をかがめてゴム紐に手をかける。

美津子 （戦慄して）お願いです、それだけ

は嫌っ、お願いっ。

#### 45 百姓屋の近く

塚田の車止る。

塚田と桂子、里美を引きずり出す。

塚田 さ、行くんだ。

風呂敷包みを小脇にかかえた塚田、里美の

背中を邪慳に押す。

#### 46 納屋の中

網戸が開いて、塚田と桂子、里美を押し立  
てて入ってくる。

塚田、前方を見て、ほほうと口笛を吹く。

塚田 こいつは眼の毒だ。

桂子 まあ、きれいな体してるじゃない。

津村の声 おっと、まだ入るんじゃないぞ。

津村、美津子の腰を手拭で包んで立上る。

美津子、涙も枯れ果てたよう、うなだれて  
いる。

里美 （津村を見て）あっ、あんたは。

津村 ハハハ、妙な所で逢ったね。

塚田 兄貴、うまくいったぜ。三百万、オ  
ールキャッシュだ。

塚田、里美を突き入れて戸を閉める。

津村、美津子の頸に手をかけて正面を向か  
せる。

津村 お嬢さん、そら、あそこにいるのは

パパの二号だぜ、あんたにとっちゃ

憎い女だ。

美津子、憎悪のこもった瞳を、里美にキラ  
リと向けるが、悲しげに視線をそらす。

塚田 ハハハ、素っ裸じゃ羞しくて声も出

ねえとさ。兄貴、こりゃ不公平だ。



こうなりや、こっちの奥さんにも着物を脱いで頂こうじゃねえか。

津村 いいだろう。

里美 (ハッとして後退) 馬、馬鹿なことはやめて。あんた達、お金をとればそれでいいでしょ。

塚田 うるせえ。ブツブツいうのは裸になつてからだ。

津村 よし、俺も手伝おう。

津村、塚田、里美に襲いかかり、帯を解き次々と衣類を剥ぎとっていく。悲鳴を上げてのたうつ里美。

桂子、床に落ちる里美の着物を拾い上げ。

桂子 まあ、社長のお妾だけあって、随分といい着物を着てるのね。(塚田達に手伝って) そら、身ぐるみ脱ぐのよ。

里美の長襦袢の襟が暴力者の手で大きくはだける。

(O・L)

柱に並べて縛りつけられている美津子と里美、二人とも腰に手拭を巻いただけのみじめな姿。

塚田と桂子、天井の梁に太いロープを結びつけている。

天井から無気味に垂れ下がった一本のロープを見て美津子と里美、震え出す。

里美 (小さな声で鋭く) 私がこんな目に合わされるのも、みんなあんたのせいだよ。

美津子 (すすり泣く)

里美 この連中にとられた三百万円にしたって、私がお店を買うためのお金だったのよ。

桂子 ちよいと、何をブツブツいつてんのよ。

桂子と塚田、里美に近づく。

桂子 最初はあるただ。さ、おいで。

里美 ど、どうしようっていうのノ

塚田 来りゃいいんだ。

里美の体を柱から離し、ロープの下へ連れて行くと里美の縄尻をロープへつなぐ。戸が開いて、津村、ムチに使う、手頃な木の枝を持って入ってくる。

塚田 さ、兄貴、支度しといたぜ。——と

津村 何だ。

塚田 何だって兄貴、金だよ、そろそろ分

津村 ああ、金か。

津村、隅の筵を開けて、風呂敷包みを持ち上げると無難作に塚田へ投げる。

津村 持って行け。

塚田 持って行けって兄貴、それじゃ兄貴の取り分は。

津村 俺はいらない。

塚田 ええ?

津村 俺はただ、吉川万造と、この女達を泣かせりやそれで満足だ。

塚田 そ、それじゃ、この金全部を俺に? 津村 いったくが、東京で金を使うんじゃないぞ。ほとぼりがさめるまで、その金は使うな。

塚田 兄貴すまねえ、それじゃ。

塚田、桂子をせかし、逃げるように出て行く。

津村、眼に残忍な色を浮かべて、里美に近づき枝のムチを里美の眼前に突きつける。恐怖に歪む里美の顔。

津村 俺を小馬鹿にした報いだ。覚悟は出来てるだろうな。(ムチを振り上げる)

里美 待って、待って。

音を立てて、ムチが里美の腰へ飛ぶ。悲鳴を上げて、顔をのけぞらせる里美。



里美 やめて！ぶたないでっ、貴方のい

うことなら何でも聞くわ。

津村 そうか（里美の髪の毛をつかんで、

ぐいとこじ上げ）じゃ俺の女になる

っていうのだな。

里美 （何度もうなずいて）だからお願い

もうぶたないで。

津村 よし。

津村、ロープにつないだ里美の縄尻を解き始める。

#### 47 同納屋の奥

薄い夜具の上で、津村、里美を抱いている

里美 （妖艶に）ねえ、あんた、もう二人

は他人じゃないのよ。

津村 だから何だ。

里美 私と組んでうまくやらない？私

ね、近く吉川の正式の妻になるの

よ。吉川は少くとも、一億円の資産

を持っている。

津村

里美 それを私一人、いえ、あんたと二人

のものにするには一人邪魔者がいる

の、あの美津子よ。

柱に縛られている美津子、慄然とする。

里美 ねえ、お願い、あの娘を殺して。

津村、さっと上体を起す。

里美 どうしたの。

津村、いきなり里美の頬をひっぱたく。

悲鳴をあげて俯伏す里美。

津村 女って、一皮むきゃ皆んなお前みて

えに悪魔なんだ。

津村、立上ると、ムチを拾い上げ、里美の

背や尻をたたきつける。

里美、七転八倒して悶え苦しみ、遂に失心する。

津村 思い知ったか悪魔め。

津村、ムチを投げ出し、狂ったように笑い

出す。

美津子、恐怖の極に青ざめている。

津村、急に笑いを止め、美津子の方に妖怪

めいた眼を向ける。

津村 美津子、今度は、お前だ。

#### 48 酒場、黒バラ

マダム 岡田さん、今夜はそれ位にしておい

た方がいいわ。

岡田、悪酔してスタンドから落ちそうにな

っている。

岡田 （うめくように）ああ。

マダム （スタンドの上の夕刊をとり）夕刊

にも大きく載っているわ。社長さん

今頃どうしているのかしら。

岡田 どうしてるって、魂の抜け殻さ、会

社も今月一杯で解散するといいい出し

たんだ。

マダム まあ、それじゃ岡田さんも、これか

ら大変じゃない。

岡田 ああ、お先真っ暗だよ。だが、社長

の身にくらべりやな。全く世の中に

や恐しい奴がいるもんだ。

友子、ボックスの方からやってきて。

友子 ママ、おビール五本追加してね。

マダム 随分、派手なお客ね。

ボックスの方で、ホステスのとも子に、い

ちゃつきながら札びらをまいている男、塚

田である。

岡田 友子、ま、一寸ぐらいいいじゃない

か、ここへ坐れよ。

友子 悪いわね、今、忙がしいのよ。

友子、ビールを盆に乗せると、ニコニコし

ながら、ボックスの方へ行く。

岡田 ちえッ、ホステスの質も落ちたね。

金のある客ばかり相手じゃがる。三

百万円せしめた犯人が時々うらやま

しくなるぜ。

マダム ほんとに社長さんはお気の毒ね。せ



めてお嬢さんだけでも無事ならいい  
んだけど、一体何してんのかしら警  
察は――

と、いつてふと前を見たマダム、口をつぐ  
む。

マダム いらっしゃいませ。

内藤刑事である。

岡田の横に坐る。

内藤 随分探しましたよ、岡田さん。

岡田 ああ、こりゃ刑事さん、ま、一杯い  
こ（コップを内藤につきつけビール  
を注ぎ出す）

内藤 津村さんは、昨日今日と会社を休ん  
でるようですね。

岡田 ああ、奴ですか、社に電話がありま  
してね、風邪をひいたとかいってま  
したよ。気の小さい奴ですからね。  
ああいうひどい目に合った社長の顔  
をまともにゃ見られないんですよ、  
ハハハ。

岡田、そんなこといいながら、スタンドの  
上に額を押しつけ居睡りし出す。

どっとボックスの方から拍手が起る。

塚田がホステス達に所望されて、いい気にな  
って都々逸を唄い出す。

内藤 マダム、あの客は？

マダム 今夜、始めてのお客ですの、随分派  
手に遊ぶんですよ。

友子が、かなり酔って、またフラフラやつ  
てくる。

友子 マダム、あのお客が、これ、マダム  
のチップですって（一万円札を出す）

マダム まあ、こんなに。

友子 すごい金持ちよ。金を持ってる男っ  
てやっぱり魅力的だわ。

友子、ボックスへフラフラ戻って行く。

内藤、マダムの手にある札に眼を向け。

内藤 すみませんが、一寸それを――

マダム はあ？

友子の声 ねえ、マダム、早くいらっしゃい  
よ。

マダム（笑顔を作って）はい、今すぐ。

マダム、内藤に一万円札を渡し、カウンタ  
ーから出て行く。

内藤、手帳を出して、札の番号を調べ始め  
る。キラリと眼が光る。

スタンドの電話をかける。

内藤 もしもし、山川刑事をお願いします

――ああ、山川さん、札が出たよ。

渋谷××町の黒バラっていう酒場だ

（ボックスの方を見て）使った客は  
そろそろ帰る。尾行するからな、じ  
やもう一度連絡する。

#### 49 旅館街

塚田、友子と肩を組み合い、ぶらぶら歩い  
て行く。

#### 50 旅館の一室

塚田と友子、抱擁し合っている。

#### 51 旅館の近く

電柱の陰で煙草を吸っている内藤と山川。  
内藤、ふと、旅館の方を見て、山川に眼く  
ばせし、煙草を捨てる。

旅館から、塚田と友子が出て来る。

友子 ねえ、明日もお店へいらっして。

塚田 ああ行くとも（友子の頬をつついて）  
他の男と浮気するんじゃないぞ。

友子 わかってるわ。じゃあね。

塚田と友子、別れて歩き出す。

塚田を追おうとする山川を内藤とどめる。

内藤 山川さん、職務質問より、やはり、  
尾行しましょう。

#### 52 駐車場（夜明け）

塚田、入ってくる。

車の運転席で、桂子、眠っている。

塚田、窓ガラスをたたく。



桂子、眼覚めてドアを開ける。

桂子 (ふくれた顔して) 一体、今まで何

してたのよ、もう夜明けじゃないか

塚田 少し飲み過ぎちゃってな。おめえと

待合わせる時間を忘れたんだ。

桂子 あきれた人だよ、全く。

塚田 (うしろのシートを見て) おっ。

シートには、うず高く洋品箱が積み重ねてある。

塚田 ま、随分と買いこみやがったもんだ

な。どうするんでえ、これ。

桂子 だって、今まで欲しいと思っていた

ものばかりだもの。

塚田 ちえっ、貧乏人はこれだから困るん

だ。

塚田、運転席に乗る。

桂子 ね、これからどこへ行くのよ。

塚田 うん？ 兄貴の所さ。

桂子 えっ、どうしてまた。嫌よ、あんな

化物の所。

塚田 だってよ、俺は何だか気になるんだ

兄貴はきつとあそこで死ぬ気なんだ

ぜ。あの二人を道連れにしてな。そ

うでなきや、せっかく握った三百万

を――

桂子 いいじゃない。好きなようにさせと

きなよ。

塚田 馬鹿野郎。俺はあの男が段々好きに

なってきたんだ。あれだけの度胸し

た男を殺すなんてもったいねえ。

桂子 だって、あの男、少し気がおかしい

んじゃない。

塚田、黙って、車のエンジンをかける。

53 駐車場近く

タクシーに乗って待機している内藤と山川  
駐車場より出て行く塚田の車を見て、

内藤 (運転手に) あの車を追ってくれ。

54 納屋の中

津村の手を逃がれて、美津子、後手に縛ら  
れたまま、狭い納屋の中を逃げ廻っている

津村の陰湿な眼、美津子の必死な眼。

津村 いくら逃げようたってもう駄目だ。

美津子、津村に追いつめられ、突きあたり

の壁に背をあて、右へ左へ逃げまどう。

納屋の隅に、俯伏している里美、正気つき

身動きし始める。

津村、ウイスキー瓶をラッパ飲みし、瓶を

投げ捨て、美津子に突進する。

美津子危く身をかかわす。

津村 すばしこい奴だな。何時まで鬼ごっ

こさせるのだ。

車の音を耳にし、津村ハツとして、網戸を  
薄く開け外を眺める。

55 納屋の近く

車、止る。

塚田と桂子降りる。二人、歩きかけてふと

立止る。

眼の前に、津村がけわしい顔をして立っ  
ている。

塚田 よう兄貴 (奇妙な顔して) 一寸見ね

え間に随分人相が変わったね。

津村 何しにきたんだ。

塚田 何だか兄貴が恋しくなっちゃってよ

な、兄貴、一緒にずらからうよ。命

はあるまで使わなきや損だぜ。

津村

塚田 そうだ。兄貴にいいみやげがあるん

だぜ。そら。

塚田、ポケットよりピストルを出して、津

村の手に握らせる。

塚田 昔の友達から買ったんだよ。どうで

い。気をつけてくれよ実弾が入って

るんだから。

津村 お前、東京で派手に金をまいてきた

な。



塚田 (津村のきつい表情にたじろぎ) あ

あ、持ちつけねえもの持ったからな  
まいたといっても、二十万ぐらいだ  
がよ。

津村 お前にはもう、足がついてるよ。

近くの竹藪に内藤と山川、身を低め様子を  
うかがっている。

津村、眼に残忍なものを浮かべて塚田を見  
る。

塚田と桂子、ぞっとして後退する。

津村 天国へ行くまでの何日かを美津子と

ここで暮すつもりだった。それを、  
お前はぶちこわした。

塚田 あ、兄貴、俺は兄貴の身を思って、

ここへ舞い戻ったんだぜ。

桂子 (津村のピストルを見て) 危いじゃ

ないの。あんた、ほんとに気が狂っ  
たの？

津村 お前達は地獄へ落ちろ。

轟音二発。くずれ落ちる桂子と塚田。

竹藪から内藤と山川飛び出す。

津村、刑事に乱射しながら、林の中へ逃げ  
こむ。内藤、拳銃を抜いて応戦する。

地上には、虫の息の塚田と桂子。

桂子 馬、馬鹿だなあ。あんたって人は。

塚田 馬鹿はお互様じゃねえか。

## 56 納屋の中

美津子、網戸のわずかな隙間から外へ出よ  
うとして緊縛された裸身を押しつけている

美津子 (隙間から外へ向かって) 助けてっ

助けて下さい！

長襦袢を着た里美、うしろから近づき、美  
津子の縄尻を引っばって引戻すと、ピシャ

リと戸を閉める。里美、鬼女のような形相  
で美津子を見る。美津子、息をつめて、後

退する。

里美 あんたの始末は私がつけるわ。

里美、土間に落ちている斧を取上げる。

里美 誰だって津村の仕業に思うわね。あ

の男は気狂いなんだから。

美津子 気狂いは、あんたよ。

里美、斧を振りかざし、振り廻す。

美津子危くそれをかわしながら悲鳴をあげ  
て逃げ廻る。けつまづいて、つんのめる。

横転した美津子にのしかかった里美、すさ

まじい形相で斧を振り上げる。

轟音一発、里美、くずれ落ちる。

津村が飛びこんでくる。

半ば失心している美津子の肩を抱き、

津村 美津子、もう駄目だ。俺と心中して

くれ。な、美津子。(頬ずりして)

俺と一緒に天国へ行こう。な、美津  
子。

ポロポロ涙を流しながら津村、拳銃を美津  
子のこめかみに当てる。

カチリ、拳銃の弾が切れているのだ。

津村を追ってきた内藤と山川、納屋の戸口  
の所に身を隠しながら、

内藤 津村、抵抗しても無駄だぞ。

山川 拳銃を捨てろ。出て来い！

津村、反射的に「何を！」と叫んで立上る  
急に大声で狂ったように笑い出し、

津村 面白くねえな、人生は。

弾の切れた拳銃を刑事に向かって大きくか  
まえながら歩き出す。

内藤ハッとして一発、二発。

津村、がくりと膝をつく。

## 57 納屋の近く

弥次馬がたかっている。

自動車が止り、吉川と岡田が出て来る。

内藤、納屋の中から浴衣を着た美津子の肩  
を抱くようにして出て来る。

美津子、青ざめ、疲れ切っている。

吉川 美津子！

美津子 パパ！



かけ寄り、父と娘、抱き合って号泣し出す  
吉川 美津子、パパが悪かった。パパが悪

かったんだよ。

納屋の中から弥次馬をかきわけるようにし  
て担架が出て来る。津村の死体が乗ってい

る。  
岡田、運ばれていく担架に添って歩き始め

岡田

(虚脱した顔つきで) おい、津村、  
俺はわかんないんだよ。お前が馬鹿  
か利口なのか、臆病者なのか、勇気  
があったのか。——とにかく、お前  
はしたい事をやったんだからな。俺  
は——

岡田、立止る。運ばれて行く担架を見送り  
ながら、

岡田 俺は明日から食うための職探しだ。

俺は、それしか何も出来ない。

56 林の中の小道

美津子の肩を抱くようにして、吉川、歩い  
て行く。

美しい林の中に吸いこまれて行く父娘の後  
姿。

「エンドマーク」

## 天星社刊 △限定版グラビア写真集▽ 在庫案内

特アート紙に対する極鮮明なるグラビア印刷による限定版写真集は、すでに売切れとな  
った若干の集を除き、左記一覧表の通り在庫しておりますので、在庫している間には是非お  
申込み下さい。すべて大好評を博した絢爛たる内容の写真集揃いです。

女体緊縛グラフ集「豊満と清楚」 一部一〇〇〇円(送共) 略号「限二」

緊縛美女八十態「美しき縛しめ」第四集 一部一〇〇〇円(送共) 略号「美4」

山原清子「刺青の魅力を探る」 一部一〇〇〇円(送共) 略号「美7」

二女緊縛「女斗緊縛競艶写真特集」 一部一〇〇〇円(送共) 略号「美8」

「革具に拘束される女」拷問特集西洋篇 一部一〇〇〇円(送共) 略号「美9」

緊縛写真集「責められる美女百態」 一部一〇〇〇円(送共) 略号「美10」

M写真集「女王様に飼育される日々」 一部一〇五〇円(送共) 略号「M特」

緊縛美態代表作品一二〇葉写真集 一部一〇〇〇円(送共) 略号「美11」

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野  
郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

## 山原清子嬢の仕置図

## 入墨女賊拷問刑罰集

キャビネ版印画紙焼付

各組 三枚一組 五〇〇円  
八組 全部にて 三五〇〇円

◎女賊仰向け木馬責 (よひ) 略号

◎全裸の入墨女賊折檻 (よせ) 略号

◎入墨女賊答打ち糾問 (よゆ) 略号

◎女賊ハリツケ拷問 (よき) 略号

◎凄絶海老責め拷問 (よす) 略号

◎全裸四つ這い木馬責 (よも) 略号

◎逆さ吊りのお仕置 (よき) 略号

◎大の字磔女賊処刑 (よさ) 略号



# 酷連処刑大会

——(女処刑吏の話)——

黒田 寿

わたしはクルエルティ星連邦、酷連御用の女処刑吏、この道ではNO1といわれています。J国人の係ですが、いままで何千人あゝ世に送りこんだことか。そのうちでも、特に印象に残った若く美しい女死刑囚の話をしてあげましょう。

絞首刑でまず思いだすのは玲子のことよ。この子はわたしの初めて手がける女死刑囚なので、さすがに気にもなったし、判決をうけたあと独房に行つて、いろいろなぐさめてやったところ、彼女のいうのには  
「私は占いをやるけど、十八才で刑死するこ

とになっており、死刑は始めから覚悟してます。だけど絶対に絞首刑にはなりません。ハリツケか股裂きか、そこまではわかりかねますが、とにかく首吊りでは死なぬとのケがでているのです。」

よほど自信ありげなので、執行方法の変更があるかと思つていたけど、そのまま当日の朝になりました。そこで

「どう、やっぱり絞首刑じゃない？」と聞いたら

「いいえ、私の占いは必ず当るの。決して首を締められはしないわ。それよりあなたのとが心配よ。二十三才の時に絞首台で死ぬケ

がでているわ」

死刑される女が、最後にイヤミを残しているのは珍らしくもないけど、この子は本当にわたしを心配した顔なの。冗談じゃないわ。

十三階段の上まで一緒にのぼる。目かくしは軽く首をふつてことわつたけど、あまりもがくとみつももない、とのわたしの言をいれて、無言のままうしろにまわす手を縛り、首にロープをまいてから、末期のジュースを飲ましてやった。

本当はわたし、玲子が好きになつたし、初めての経験なので、ジュースに青酸カリを入れる予定でした。この、あの世への超特急を



使い、苦しまずに死なせたかったが、すると吊し首で死なぬの予言が当るでしょう。ついでにわたしも当たたら大変なものやめた。

そのかわり脚にさげる重し、女性なら八キロのが二個だけど、特別三十二キロの大型をつけたの。これなら細首はキューとなって、一気にオダブツですものね。

「さよなら、たった数分のしんぼうよ」

と言ってやったら、ニッコリ答えて曰く

「ありがとうございます。だけど吊し首なんて、どうしても信じられない」

なんてガンコでしょう。だけど吊りさがってしまえば、信じまいとしてももうだめ、と思いつながらテコを引く直前、玲子は胸がはちきれんばかり息を吸っていました。

「グ……ッ！」

不気味なひびきと共に、ドタンと何か重いものがころがる音がしたので、ロープが切れたのかと直感しましたが……。

ああ、何という光景……わたしは思わず目を疑いました。おそらく重すぎたのでしょう。玲子の首は無惨にちぎれ、絞首台下の床いちめんに鮮血をちらし、胴体と共にころがっているのです。

夢ではないかと驚ろいてかけおり、首を拾

ってみれば、噴き出す血汐がわたしの手を染めます。これはまさしく現実でした。

「やっぱり私の言った通り、絞首刑にはならなかったでしょう」

とでも言いたそうな死顔は、今でもアリアリと残っています。

首がもげたのでは最も確実な死であると、検屍をはぶき直接解剖台へ送りましたが、その結果首がちぎれたのは、締められる直前、息をいっぱい吸ったためだそうです。

問題はわたしが絞首台で死ぬとの予言、二十三といえはあと四年後ですが、どんな罪をおかすのでしょうか？ わたしはこの仕事が好きなのですが、以後美女を吊るすたびに思いだし、ちよつとノイローゼ気味でしたが……

逆療法が効きますね。半年ほどのち一度に十三人を吊した時、正規の絞首台は三基しかないし、みんな誰がいちばん最後までがんばるか競走するためにも、一緒に死にたいと言うので、木の枝まで使って処刑しました。まさにこの如きは旗竿に吊られたのですが、自分が一番高いとゴキゲンで十九分までねばり、第一位に満足して死にました。これら二十六本の形のよい脚が宙にゆれるのを見た瞬間、わたしは全快したのを知りました。

絞首刑ではもうひとり、愛の話をしてあげましょう。

この子は酷連が成人と認める十七才になったばかり、胸なども痛々しいほどかわいらしく

「あれはそんなに長くは苦しまないのでしょうか？」

となげいていたから

「どんな重い罪でも、三度死刑の執行に失敗すれば、放免させる、不分明があるのよ。まあ、わたしにまかせておいて」

と、おそれおののいている少女をなぐさめました。もちろんそんな気はないけど、死への恐怖はすくなくなるでしょう。

わたしの言葉を信じていても、そこは子供です。十三階段上に立った時は、唇をふるわせ、肌はそそけ立っていました。

踏板を落すと、あらかじめ刃の入っていたロープが切れ、愛は床下にころがりおち、二回目の時はロープが長すぎて、足が床にとどいていました。

これで助命は本当だと、完全に落ちついた愛は、わたしに感謝の目をむけながら、足ども軽くみたび十三階段をのぼり、みたび首にロープをまかれます。呼吸も脈も、平常近



くになっていました。

わたしはこれをまっていたのです。女囚の身長や体重によって、ロープの長さや型を変え、苦しまずに死なせる自信はあっても、精神的な恐怖感だけは、どうしようもないでしょう。助命を信じていれば、これも解決しますものね。

三度目の本番！グッ！と咽喉が鳴り、愛の身体は宙に浮きキリキリとまわります。このまま、すこしもがかず死んでくれれば、何も言うことはないけど、ちょっと結び目がずれ、残念にも余計な苦しみを与えることになりました。

だまされたのかしら？とでも言うように、愛の目がうらめしそうにひらき、苦悶のため身体がはげしくふるえています。ところが、あまりもがきすぎて、結び目がゆるんできたから大変です。

三度も失敗、助命となると、責任はわたしにかかります。かわりにお前を吊す、など言われたらたまりません。例の予言もあるし、気が気でないうち、とうとう結び目がはずれて、愛はまたび落下しました。

わたしは急いで抱きあげ、用意の青酸カリを水と共に飲ませました。愛もさすがに息を

はずませながら一気に飲みほし

「ああ、お……い……し」

ここまで言うや、わたしの腕のなかにグンナリとくずれ、パッチリひらいていたつぶらな目が急に生気を失い、そのままスウーと息をひきとりました。

誰も見てないのを幸い、愛をかつぎあげ、もはやこの世の人でない美少女の頸にロープをまき、四たび台下につき落します。

検屍官は絞首刑にしては肌の色が美しすぎる、など言っていました。前例もあるのか、わたしの責任は追求されずにすみしました。

斬首で迅速、且つ確実なのは、何といてもギロチンですね。せんだって十三人まとめて処刑した時など、十六分しかかからず、しかも全員一パツでした。それも一人一人台の上に立たせて、むきだしの若々しい肢体を見物人にさししめし、チョン斬った生首もひとつひとつつかあげ、しかも始めに用意したバスケットが小さすぎて、第一号秀子、第二号佳子の首がいずれもとびこしたため交換したり、更にあわてものの夏枝が、足をふみはずしたり、ずい分無駄な時間がかかっています。この乙女たち極めて往生際がよく、あの世に遠

足に行くみたい、はしやぎながら首を刎ねられたのですから、スピードアップすれば、おそらく八分を切ったことでしょう。

大刀を使ったのは二十三才、落ちついた人妻の英子で、従容と首の座につくや身うごきもしないのに、どうしても首が半分までしか斬れず、七度目にやむなく心臓を刺して絶命させました。悲鳴はあげませんが、よほど苦しかったのか、組み合わせた両手に爪が固く食い込んでいました。もしこれが未練のあるヤツだったら、どんなにあばれたでしょう。それでも次に、雅子の首を一刀のもとに刎ねた時は、実に良い気持でした。

三段斬の話は知っていますね。後手で吊りあげ、まず下半身をバツサリ斬って落す。これで上半身が重くなり、クルリとひっくりかえるところ、タイミングよろしく首をチョン斬るのです。

エミがこの刑をうけました。問題は何度斬りつけたら下半身がはずれるかです。これは無理だと、同僚は両脚を落すこととし、彼女もかなりの腕ききでしたが、右脚に五回、左脚に三回もかかり、首への最後の一撃と合わせ、実に九回も必要としました。

次はユミでわたしの係です。腰からでは、



すくなくとも十五回かな  
 と思ひながら、気合もろ  
 とも大刀をうちおろしま  
 す。

奇蹟とはこのことでし  
 よう。充分な手ごたえと  
 共に、ユミは見事に腰骨  
 のところから切断され、  
 上半身がクルリと一回転  
 します。これはわたし自  
 身にも意外であって、思  
 わず刀をひいたためタイ  
 ミングがおくれ、首すじ  
 ならぬ肩口に斬りこんで  
 しまいました。

あわてたため二度目も  
 完全に斬れず、三度目で  
 ようやく首を落しましたが、折角の一撃もた  
 ちまちボロがでた次第です。でも即死ですか  
 ら、ユミは喜んだことでしょう。

さて、記憶にのこるギロチン女囚は、十八  
 才の花はずかしき乙女小百合です。

この子の罪は軽く、本来なら刑務所内で処  
 刑すべきなのに、死刑は惨虐であるとの反対



運動に対し、決して苦痛のないことを強調す  
 るため、特に公開するのだから、絶対に苦し  
 ませるなどの厳命です。

ふだん首を斬る時は、大根か人参位にしか  
 考えず、またそれだけ手早くすませるので  
 が、こんなに言われると却って緊張します。  
 えてして、こんな時に失敗してクビになるの  
 でしょう（クビって解雇のことですよ、この

場合は斬首ではありません  
 せん）

巾八〇センチ、重さ六  
 〇キロの断頭刃を、それ  
 こそ指がふれただけで落  
 ちるほど磨ぎ直し、柱  
 のレールもよくすべるよ  
 う油を引き、首をうける  
 バスケットも新調しまし  
 た。

小百合は全くあどけな  
 い子で、  
 「よろしく、お願いしま  
 す。なるべく痛くないよ  
 うにね」

と、ニッコリ笑って頭  
 をさげます。わたしはい

じらしくなったので、  
 「一秒の半分もかからないから安心なさい。  
 わたしは名人なのよ」

と言ひながら、刃をうける頭のまわりの生  
 ぶ毛を剃り、アルコールでふいてやり、台の  
 前に坐って首をのばすように命じました。

普通、罪の軽い時は顔を下に、刃が見えぬ  
 ようにするのですが、それでも大部分の女囚



は首をねじまげ、己れの首におちる刃をみよ  
うとができます。そのくせ、いざ刃が目に入  
ると、あわてて目をそらすのですが、小百合  
はすこしも動かず、静かに死をまっているの  
です。

このいさぎよい姿をみて、わたしは惜しい  
なあ、と思いました。時間がきたので

「固くなるな、いつものつもりでやれ」

と自分に言いかけつつテコを引くと

「グワア……ン！」

ギロチンの鋭い刃は、二メートル二〇の高  
さからうなりをあげて、美少女の首を苦もな  
く切断、小百合は簡単にこの世を去っていき  
ました。見事成功です。案ずるより産むがや  
すいとはこのことでしょう。まるい、まっか  
な斬口が強く目を射ます。あまり早く斬れた  
ので、まだ血がでてこないのです。

一秒ほど間をおいて、ものすごい勢で鮮血  
が噴きだしました。こんなに愛らしい少女の  
どこに入っているのか、信じ難いほど大量の  
血汐が。

「おいしい、早くそのカワイコちゃんの生首を  
見せてくれ」

大向うから声をかけられ、われに還ったわ  
たしは、バスケットのなかから、小百合の生

生しいやつをつかみだし、黒髪をつかんで血  
の滴るのもかまわず、皆に見えるように高く  
さししめします。このとき、まだ眼瞼がピク  
ピクうごいているのが印象的でした。間もな  
く瞳孔がいったいに開き、すべての表情が消  
えていくのです。

愉快、と言っては気の毒ですが、こんなこ  
ともありました。ミエの処刑の時、使役につ  
かっていた鮎美が

「ねえ、ギロチンにかけられる前って、どん  
な気がするの？」

などからかいますと、さすが人のよいミエ  
も、これにはぶっとふくれて

「そうね。自分でためしてみたら」

と言いかえせば、鮎美も負けずにギロチン  
の首穴に首をさしこみ

「とってもいい気分よ。あなたも早くいらっ  
しゃい」

と得意になっていましたが、突然ミエがわ  
たしのすきをみて台の傍にかけより、テコを  
引いたからたまりません。

ズバリ！鮎美は首をもがれて、あっけなく  
オダブツです。首を拾ってみると、口を半分  
ひらきかけただけ、アッと叫ぶ暇もなかった

のでしょう。

「全くだい気分そうね」

ミエはケラケラ笑い声をあげています。ほ  
んにバカな鮎美、自分の首をおもちゃにする  
なんて。もうすぐ仮釈放になれたのに……

このためミエは罪一等を加刑され、できる  
だけ苦しめる」ことになりました。

ギロチンの刃も、あらためて錆だらけのも  
の使用、レールも水でしめし、刃がよく見  
えるよう、おおむけにねかすのです。

たしかに度胸はよく、長い頸をせいっぱ  
いにのばし、自分の首にキスしようとする刃  
をじっとみつめています。

テコを引き、刃がゆれうごくや、さすがに  
目をつぶります。しばらく息をこらしていた  
ようですが、まだ生きてるのに気づいたか、  
おそろおそろ目をひらきました。刃は途中で  
とまっているのです。

二回目、ミエは頸を半分ほど斬られて悲鳴  
をあげました。もちろん死に至るほどではあ  
りません。それでも食道・気管は傷ついたので、  
か、ヒュウヒュウの音と共に血泡がふきでま  
す。けんめいにもがいても、首が板でおさえ  
られていてどうにもならず、苦しめる目的は  
大成功というわけです。



一時間ほど放置したあと、もういいとの合図があり、今度こそ一気に斬り落すため、刃をあげようとしたが、頸骨に食いこんでいるのか、どうしても動きません。

これ以上苦しめるのも気の毒だし、首をグルグルねじりながら、ナイフで頸のまわりの筋肉をすこしずつ斬っているうち、頸動脈があらわれてきました。

ナイフがあるのなら、心臓を刺せばよいのにですって？それは気がつきませんでした。でも時間をかければ、カミソリの刃一枚でも首ぐらい斬れるのです。ナイフはまだよい方ではないのですか。

ちょっと残りの残りの気がしましたが、思いきって太い動脈にプツリと刺せば、いや驚きました。血しぶきが五メートルも高く噴きあがったのです。こうしてミエは十九才を一期として、ようやく御臨終となりました。

ガス死刑には特記するものではありません。ただ真理が最後の希望をきかれて

「ガスマスクをください。それ以外何もいりません」

と叫んで、さめざめと泣いたのをおぼえています。無理からぬ願いですが、これは遂に

かなえられず、四分半でくたばりました。

一メートル四方の小部屋に十三人をおしこんだことがあります。ガラス張りなので中がよく見え、キュウキュウ押しあっていたいへんなこみようです。ガス死刑と言っても、これは炭酸ガスで、十五分後には全員カンヅメのイワシのように、坐れる余地もなく立ったまま窒息死です。

哀れなのは千恵子と美津子の姉妹で、固く抱き合ったまま死んでおり、どうしても引きはなせず、そのまま灰にしたことです。

こんな話を知っていますか？

自殺を決心した女が、電極のひとつを口にくわえ、もうひとつを肛門にさしこみ、一時間後に電流がながれるようにタイムスイッチをつけ、睡眠薬をのんで床についた。

ぐっすりねむりこんでいるところに電流が通じ、何の苦痛もなくこの世を去る……

電気イスの処刑で、佑三子にこれを応用しました。時間は十五分後、これが本人にはつきりわかるのがミソなのです。

大時計の秒針がくるくるまわり、あの世へ旅立つ時間が刻々とせまってきます。気の毒にガタガタふるえていましたが、とうとう針

が0を指したとたん、ウームとうなってノビちゃいました。なんてダラシのない、最初はおどかしで電気は通じていないのに。

「あわてないで、これはリハーサルよ」と肩をたたいても動かない。よくみたら、もうホトケになっていました。完全なショック死です。

あらためて焼き直すこともないと、そのまま標本にしましたが、本来なら電極の当たっている場所は、真黒にこげた無惨な姿になるのです。彼女にしてみれば、とんだもうけものですね。

電気刑にだって集団死刑があります。十三人を一列に並べ、お互に手を握らせ、両端の二人に両極を結びます。スイッチを入れたとたん電光が走って、一瞬後には十三人黒焦げになっての最期です。

真中にいた照美が、必死で手をふりきろうとしてましたが、両端の二人がすっかり握っていたため、同じ運命になりました。手を放せば一度に助かったわけですが。

克子は溺殺の刑で、処刑用のプールにザンブリ放りこまれました。もし、彼女が金槌なら、たちまちブクブクと沈んで万事休するの



ですが、あいにく昨年度の国際水泳大会でのJ国代表女子のチャンピオンでしょう。いつまでも泳ぎ続けるわけよ。

もちろん、壁に近づこうとすれば、棒で撲られたり、槍で突かれたりして、また中央にまで追いかえされます。

女性の長時間水泳記録は八十五時間といいますが、これは途中飲食物のさし入れや、多くの激励があります。克子の場合、絶望以外のなにものもないのに、十八時間とはよくもがんばったものですね。

だんだん動きがにぶくなったなと思うと、四肢が力なくゆっくりとのび切り、クルリと身体がひっくりかえりました。つまり腹部が上をむいたわけです。顔が水面すれすれになり、鼻からも口からも、水がどんどん吸いこまれ、おなかがふくらんでくるのがよくわかります。

とうとう力つき、静かに沈んでいくのをすぐに引っぱりあげ、足首から逆吊りにして水を吐かせ、特別の情けで、一晩だけの休養を与えてから、翌日には早々に再びプールに放りこむのです。

克子はもうあきらめたのか、泳ぐことをやめました。このまま沈んだのではつまらない

し、電気刑係の要望もあったので、このなかで強力な電流を通じました。つまり電気プールで、身体の全表面が接触するわけです。この刑の場合、接触面がひろければひろいほど、身体に傷はつかないというのです。

スイッチを押したとたん、水面がザワザワと波立ち、克子の見事な肢体は、ピンと両極に引っぱられるようにのび、心臓が瞬時に静止したのでしょう。めでたく大往生をとげました。

検屍しましたが、やはり相当の強電圧にもかかわらず、焼け焦げのあとにはすこしもありません。克子はきつと、あの世で感謝していることでしょう。

J王国で女子学生が叛乱を起した時、鎮圧に出動しましたが、この時は専ら銃殺が採用されました。

銃殺と言っても、八人乃至十三人が銃をかまえ、美女の左胸めがけて一斉射、あっけなくバタリと仆れ、止どめとして首をとるものだけではありません。

ごく平凡なものでも十三人を一列に並べ、三十六人がめいめいに狙いをつけて射つのです。三回射っても仆れぬものは放免される約束で、おそらく全員が期待に胸をはずませて

いたのでしょうが……

第一斉射で九人が仆れました。洋子のように一発でくたばったものもおれば、佐知子の如き腹部に七発も当りながら死にきれぬものもあります。彼女はズルズルと引きだされて正式に止どめを刺されました。止どめとは言うまでもないでしょう。首をはずす事です。

第二斉射で三人。志保が八発、久子が十一発、竹子十六発と命中弾をうけ、さきの平均四発より不運と言えます。女性である以上、なるべく身体に傷をつけてもらいたくないでしょうから。

比佐子がひとり残りました。実はおヘソを射ちぬかれています。さすが、仆れぬことが助命の条件なので必死にこらえているのです。しかし、第三斉射は彼女ひとりをめざすのですから、どうあっても、助かる訳はありません。おそらく悲鳴と共にハゼちる場面を想像しましたが、ふるえおののく姿があまりにも哀れなので、心臓にブチこんで、早く任務を完了することにしました。

いかなる美女でも、おなかに穴があってはミリキ半減です。四五口型を左胸にグイと、銃身が半分めりこむ位押しつけ、引金をひこうとした時、突然、



“ひとごろし!”

と叫んだのには驚きました。たしかにそれに違いないありませんけど。

サイレンサーで、いいですねえ。プスッ!と音がただけで、おっぱいはきれいにふっとび、背中の方にはすばらしい大穴があき、たちまち息絶えたのです。

射殺の刑といっても、使用する武器はいろいろあります。晴子は弓矢を使つての処刑でした。

これも強い弓なら、当りどころによってはただの一矢で片づきますが、わが連邦の処刑法の慣習によってわざわざ弓ヅルをゆるめ、一本ずつ射ることにしたのです。

最初の矢はわたしが射たのですが、別に狙ったわけでもないのに、なんとおへソに命中し、どっと皆の喝采をうけました。

肉体にはせいぜい五センチほど食いこむだけですが、五分から十分の間隔をおいて二本



目は右肩、三本目は左太股に突刺さり、四本目はわたしの矢のすこし下に突立ちました。

“お願いよ、早く射ち殺して!”

必死に叫んでも誰も耳をかさず、次々と矢が突刺るうち、十一本目がまさに喉をめがけてとんでいきます。

思わず皆がハッとしましたが、幸い皮膚の表面をかすただけで、ゴリンジュウにはな

らずにすみしました。晴子にとっては心残りの一矢でしたろうが。

十七本目は左胸に当りましたが、これも肋骨にさえぎられて、心臓には遠く達せず、まだまだ楽しむことができます。

二十八本目がまたもおへソ、最初の矢と並ぶように突立ち、二十九本目が偶然にもその間にわりこむように入りました。ただこの時、わたしたちの係長があらわれました。どうもこの人は連邦人に似合わず、妙に情深

いのが欠点なのです。

晴子の惨状をいたましそうにみつめていましたが、案のじよう

“もういいかげんにしなさい!”

と言いながら、手にした槍をピューとほうりました。さすがに処刑慣れた腕はたしかなものですね。槍は見事に晴子のふたつの乳房の間を、背後の柱に突きぬけるほど深く刺し



通し、彼女は四肢をピンとつっぱって絶命しました。

美智代は七五ミリ野砲での砲殺です。

これではいっぺんで粉々だろうですって？ おそらく彼女もそれを望んだでしょうが、それでは処刑吏としての成績に関ります。

信管が鋭敏なら、砲弾の先端が柔かい女体の皮膚にふれただけでも爆発します。しかし使ったのは鉄をもぶちぬく徹甲弾ですから、いかなるグラマーの美女といえども問題になりません。

発射と同時に美智子の身体は、十数メートルもふっとんで、ヘタヘタとくずれおちての最期です。この模様を高速度写真で順を追って観てみましょう。

砲弾の先端が、二十才の美女のふくよかな腹部を、ぐんぐん押しこんでいきます。とうとう皮膚を破って、食いこみましたね。ほらほら、砲弾全部がスッポリと腹腔内にもぐりこみ、背中を破って、突きぬけていくでしょう。あまり早いので、まだ出血はしていませんね。この瞬間に於てはまだ生きてるようです。

ヨロヨロとよろめいて、いまが外れる寸前

です。腹部にポツカリと、直径七五ミリの穴があいて、ここから向うがのぞけるのですからすごいでしょう。この場面をフォトにして売りだしたのですが、たちまち売りきれて、プレミアムがついたそうです。

美智代は目を大きくみひらき、夢ではないのかしら？ って、まだ自分の運命が信じられない顔ですね。瞳孔をみればわかりますが、この五秒後に絶命するのです。まあ、即死の部に入れてもいいでしょう。

ドタリ！ と仆れてから、ようやく血汐が噴きだし、内臓がはみでて穴は見えなくなりまします。あとは例によって首を掻き落し一巻の終りですが、面白かったですか？

かおるもまだ若いのに、銃殺を宣せられても、かねて覚悟の上か顔色も変えず、従容と刑場に姿をみせました。しかし用意されていたのは、七・七ミリながら六十四挺も装備された、いわゆるポンポン砲で、これにはかおるも目を丸くして驚き「わたしをこれで射つの！」とボヤいてました。

そうでしょうね。せいぜい十一の穴があくだけと思っていたのが、一分間に六万発も射たれたら、自分の身体がどうなってしまうの

か、不安なのです。

「せめて顔だけはのこしてね」これが彼女の最期の言葉でした。

射て！ の号令と共に、アッ！ と悲鳴らしいものが聞え、目の前に赤い霧がパツと散ったと思ったら、もう人間の形などありません。すぐに発射ボタンを止めました。が、それでも三千発は発射されました。肉眼ではとうていわかりませんから、これもスロー・ビデオで見ましょう。

ほら、かおるめがけて無数の弾丸がとんでいきます。最初の六十四発は殆ど全弾命中ですね。胸からも腹からも血しぶきがあがり、この瞬間に往生したようです。一発でもまにあったと思うのですが。

次々と食いこむ銃弾により、ズルズル女体がくずれていきます。蜂の巣どころか、まるで雪人形に熱湯をかけたようですね。可哀そうに、顔もめっちゃめっちゃです。

首も胴体も、あのすばらしい脚も、地上におちるまでどこかに消え散ってしまいます。これでは死んでも死にきれませんね。

松枝の場合も面白いですよ。四〇ミリの大型機関砲に散弾、それも子供空気銃用のBB



弾を、黄燐と共にぎっちりつめ、二十三才の成熟した女体のお腹に、弱い火力でぶちこんだのです。

「プス！」とにぶい、不気味な音と共にお腹の皮膚が裂け、約五百発の散弾が腹腔内に食いこみます。これは想像しただけで苦しいでしょう。ダムダム弾で射たれた方がよっぽど有難いものです。

おヘソの下にパツクリ傷口があき、ダラリとひとつかみほどのはらわたがはみでて、それにいっぱい散弾が附着しています。ひとつつまもうとしたら、身体がヒクヒクふるえました。これだけでもこの処刑法立案者が二階級特進した理由がお分りでしょう。

しかも、黄燐が腹腔内いっぱいひろがっています。これが常温で燃えるのは知ってますね。それも高温でなく、低い温度でジリジリ焼かれるのですから、受刑者としてはあまり有難い死刑法ではないでしょうね。

さすがの松枝も両手両脚をバタバタふるわせ、己がはらわたをつかみださんばかりにもがき、地上をのたうちまわります。その間にも内臓が次第に焼けただれていくのです。

二時間で黄燐は燃えつきましたが、焼けたのは身体の内部だけで、表面はまだ生焼けで

した。

わずかに息は残っていましたが、あまりよい臭ではないので、重油をぶっかけ火をつけると、どっとあがる焰のなか、ほんのすこしモゾモゾうごきましたが、たちまち黒焦げとなり、みるみる白骨化し、やがて灰となって消えました。

今度は爆破された真知の話です。

しっかりした足どりで刑場に入る美少女をイスに縛ります。この下には彼女一人をふつとばすに充分な爆薬がしまれ、導火線が長くのび、イスのまわりを三周しています。

合図と共に点火され、シュウシュウ火花を散らしながら燃えていく。あと三分で十七才の生命がひとつ消えてしまうのです。

真知はまばたきもせず、火のあとを追っていました。ようやくふくらみかけた胸乳をはずませながら。

やがて火は二周目へ。文字通り寿命が縮まるのです。いったいどんな気持だったでしょう。三周目は殆どイスの真下で、煙は彼女をとりかこむようにのぼり、それにむせて咳こむ姿が可憐でした。おそらくパチパチと燃える音も聞えるでしょう。これらの恐怖にふ

るえながらも、気絶しないのは感心ですね。

とうとう火花を散らしながらイスの下へ……あと十数秒です。真知は下をのぞこうとしましたが、固くいましめられていて、首がのばせません。もっとも見えない方が幸せでしょう。

火花が見えなくなった時、狂ったように激しく身をふるわせましたが、そのとたんイスの下から火焰がふきあげ、爆音と共に真知の身体は真上にふっとんでいきました。スポッ！と、まるで人工衛星の打上げのように……宇宙ではなくあの世へ……

上昇する途中は、胴体に首も四肢もちゃんといっているのがわかりました。もちろん、とうにコト切れていたでしょうが。

五〇メートル位か、いちばん高くあがったところで、まず両脚が裂けちぎれ、首がふつとび、たちまち女体はバラバラに散ってしまひ、地上にはほんのすこし、肉片のついた皮膚の一部が落ちてきただけでした。

昨日、またひとり十八才の美女を絞首刑にしました。

幸代です。もう新聞にでているから御承知でしょう。三日前の犯行直後に逮捕され、即



日裁判にかけられ死刑判決、そして昨日処刑という、稀にみるスピードで消された女性です。その模様を時間的に話してみます。執行は正午でした。

。十一時三十分（執行三十分前）

わたしは幸代の独房に入り、すべての衣類をとるように命じた。本来は死刑判決の瞬間に、あらゆる生きる権利を失い、その時から全裸にされるわけだが、特別の情として処刑台に立つ寸前まで、衣類着用を許している。

最後まで身につけていたものは、当番刑吏の所得となる。幸代の好みはわたしと一致していて、一刻も早く、自分のものにしたいの、少々はぐのを早めたわけ。パンティなどで、犯行の朝買ったもので、新品同様のものだ。

。十一時四十分（執行二十分前）

わたしは幸代にたっぷり浣腸してやった。若い女だし、この趣味はないとみえ最初はいやがったが、それが如何に本人の為に必要かという説明をきいて納得した。

絞首台の下には、水を流せる溝があり、ちやうど女囚がぶらさがる真下に小さい穴が空いている。このことからわかるように、窒息の苦悶の際、失禁が相当みられるのだ。で、きるだけ恥はすくない方がよい。

シャワーを浴び、残された僅かの時間をベッドに横たえる幸代のしなやかな肢体。これにがもうすこしで、この世の人でなくなるのかと思うと、同性ながら、しかも残酷さでは人に負けないつもりでわたしでさえ実にもったいない気がした。

。十一時五十五分（執行五分前）

「さあ、お時間よ」

わたしにうながされ、幸代は無言のままうなずいた。だが、その眼はずっと前方の、宙の彼方へそがれていた。

絞首台は独房のすぐ近くで、所長、検事、医師はすでに集っていた。幸代はこれらの人々に一礼、処刑される本人であることの確認をうけた。

。十一時五十八分（執行二分前）

幸代はわたしに手をとられ、十三階段を一步一步のぼる。彼女だけはこの階段を、二度とおろることはないのだ。

台上に立ち、天井から吊りさがる太いロープをみた時、幸代の目は思わずつぶられた。無理もない。先の輪になった部分は、すり減ってささくれ立ち、血のしみが黒くついているのだから。おそらく何十人かの若く美しい女性の頸にまきつき、その生命をうばった名

残りであろう。

。十一時五十九分（執行一分前）

秒よみが始まった。幸代の十八年の生涯、それがあと一分でとじられる。さすがに顔は蒼ざめ、脈もずっと早くなっている。

「いい子だから、おちつくのよ」

と言ってやったら

「わたしだって人間よ」

とさびしくほえむ。心臓の鼓動も、傍にいたわたしに聞えるほど高鳴っていた。二度三度と、この世における最後の呼吸を大きく深くくりかえす。

。十一時五十九分五十秒（執行十秒前）

わたしは幸代の頸にさっとロープの輪をかけ、両脚におもりを縛りつける。

「さようなら。いろいろお世話になってありがとう」

これが幸代の、この世に残す最後の言葉であった。三秒前、二秒前、一秒前、ゼロ……午後0時（死刑執行！）

わたしはテコをひいた。幸代の立っている床がボタンと下にひらいて、ロープは蛇のようにおどり、ピーンと一直線になる。とたんに幸代の頸も、グウー！と一寸位長くのびたかに見えた。





挿絵応募作品 倉真砂

拷

(問い糾しの図)

問

。0時二分（執行後二分）

幸代はロープの先に吊りさがり、美しい肢体を弓のようにそらして、もがき苦しんでいる。絞首刑は楽だ、というのは気やすめにすぎない。顔は紫色にふくれあがり、今にも眼球がとびだしそう。その先から涙が一滴、すうっと頬をつたわって流れでる。

。0時五分（執行後五分）

顔は早くも血の気を失って蒼白になっている。鼻汁が、よだれが流れ、舌はダランと長くはみでて、お世辞にも良い恰好とは云えない。美しいだけに余計ゾツとする光景であった。いまが苦悶の絶頂なのだ。まるい、かたいふたつの乳房がふくれあがり、乳首がピンと立った。肉体は尚も波うち、生と死のすさまじい争いがつづいている。

。0時八分（執行後八分）

白く柔かい頸すじにめりこんだロープのふちに、真赤な血汐がにじみだしてきた。

パァク、パァクと唇が、鼻孔がふるえ、必死に息を吸いこもうとしているが、彼女の肺に酸素が供給されることは、もう絶対にならないのだ。その動きも次第に弱くなり、どうやら苦痛の峠は越えたらしい。

。0時十分（執行後十分）

吊りさがっている幸代の全身が、突然はげしくふるえだした。これこそ窒息の瘁れである。下に何の支えもない足の拇指はぎゅっと前に反りかえり、他の四指は内側にまがった。骨が皮膚をつき破る、パリパリと異様な音がする。

。0時十二分（執行後十二分）

医師がイスの上にのり、幸代の左胸を聴診し、右手で脈をとっている。どちらも一分間絶えていれば、死亡宣告がくだるのだ。ライトをつけ、瞳孔に光を入れて散大をたしかめたのち、両脚をひらいて更に念をおす。

“絶命しました”

時に0時十三分十三秒。かよい女性と、巨大な重力との争いは終わった。

。0時十九分



幸代の死体は静かに床におろされた。絶命後も五分間は吊り下げたままでおくのだ。

頸に固く食いこんでいるロープと脚のおもりはずし、タンカにのせて検屍室へ。

。0時二十二分

タイルの上には幸代の死体があおむけにねかされていた。生まれたままの姿で、水がジャジャアとかけられ、その肢体を洗っている。

顔から脚の先までキレイになると、わたしは乾いた布で全身をふいてやった。しかし、頸のまわりの赤黒い締めあとは、どうしても消えなかった。

。0時三十五分

所長以下が入室し正式に検屍する。確実に死亡したこと、幸代本人であること、更に明らかに女性、しかも処女であることが確認された。

処刑された女性は、いかに若く美しくあっても、埋葬は許されない。彼女たちは或は冷凍、或はアルコール漬、又は骨格標本となるのだ。幸代は第三の場合である。

。一時二十分

幸代の屍は骨格標本製造室にうつされた。ここの床下には蟻に似た小さな虫が飼ってあ

り、与えられたものは骨だけ残して、キレイに食いつくしてしまう。哀れ幸代、蟻の餌食として相果てるなど、生前は夢にも思わなかったろうに。

。翌朝午前八時（執行後二十時間）

標本室の床下に、完全な女体の骨格が横たわっていた。一滴の血、一片の肉もなく、毛髪だけが残っているにすぎない。その頸骨は一部が砕けており、明らかに絞首刑に処せられた女性であることを示していた。

わたしの話はこれでおしまい。今日もまた処刑があるのです。え、どうしてそんなにゴキゲンだ、というのですか。実は明日がわたしの二十四回目の誕生日、即ち二十三才は今日が最後です。どんな罪をおかしても即日死刑にはなりませんから、例の玲子予言は当たらないわけです。彼女があんな死に方をした以上、半分は信じていたのですよ。

この日の処刑はお富士とも子であった。ふたりの希望により同時に吊すことになり、絞首台に二本のロープをさげた。すこしせまくなるが、姉妹とか特に仲のよいものには、時々こうしてやるのだ。

女刑吏美智子は、まず一本のロープをお富

士の頸にかけようとした時、どうしたことか刑吏の心得を忘れ、とも子に背をみせた。

とてもかわいい子と思われていた、とも子が、不意に背後からとびかかって美智子の腕をおさえ、間髪を入れずお富士は、自分の頸にまかれようとしていたロープを、美智子の首にひっかけ、とも子がどんとつきとばす。なんと簡単なことか、油断していた美智子は、悲鳴をあげる余裕もなく踏板から落下して、首吊りになってしまった。

ロープがおそろしい力で頸に食いこみ、全身の血が頭の方に逆流し、目鼻耳口から火花が散ったよう。美智子が絞首台で死ぬとの予言は、やはり的中したのだ。

「ああ、これがわたしの運命なのか、それならもう、絶対に助かりっこない。せめて往生際はよくしよう」

おそらくこんなことを考えたのだろう。美智子はすこしもがかず、吊りさがっていたが、やがてすべての意識が消え、あの世へ旅立っていった。

数日後、町の広場は空前の人出であった。女刑吏を殺害したかどで、罪数等を加刑され、非公開絞首刑から公開逆さハリツケを宣





挿絵応募作品 倉 真 砂

仕

(晒し刑の図)

置

告された、お富士の処刑があるのだ。

もうひとりのとも子はどうしたろう。彼女は追いつめられ、遂に崖からとびおりて自殺をはかった。悲鳴が長く尾を引き、最後にギョッ!と一声残して絶えた時が、この世を去った瞬間である。しかも、死の直前まで知らなかったのだが、崖下には無数の槍が穂先を上にして植えられていた。

とも子の死首は、串刺しになった胴体から

もぎとられ、すでに獄門に晒されていた。

今まで処刑された女たちは、花ならつぼみのハイテーンが多かったが、お富士は二十六才。見事に咲きほこった桜であった。いま、それが無惨に散らされようとしている。

刑場には太い柱が突立ち、斜め十字に横木が組んであり、四肢を大きくひらかれたお富士が、一糸まとわぬ姿で、逆さにハリツケられている。

ただ、裸身を白日のもとに晒されただけでも耐えがたいだろうに、この柱はクルクルまわるのだ。あらゆる方向から眺めることができるように。

柱がまわるたびに、美女の裸身も白い花びらのようにまわった。黒髪はたれさがり、肌は苦悶に紅潮し、恥辱に蒼ざめた。

槍がはこばれてきた時、群衆のそこそこからため息がもれた。いかなる美女といってみても、生きておればの話で、息をしなくなれば、ただの物体として、価値は大きくさがってしまうのだ。

逆さハリツケの場合、絶命するまで止どめ即ち首をとることは許されない。現に用意されている槍は五十本はあろう。これが一時間に一本のわりで使用されるのだ。

最初の一本がキラリと光り、右肋骨弓の下から下腹へ刺しこまれた。

お富士の附加刑は獄門梟首であるが、主刑が終って、美しい首が晒されたのは、翌々日の朝であった。

ハリツケられたままの胴体には、四十二本の槍が食いこんでいた。

(おわり)



## 「陶酔の乳房」

辻 村 隆

陶 酔 の 乳 房

「いい加減にミコシ挙げたらどう？ 例の彼女、あんたが一向に動かんものだから、とうとう山本一章に呼掛けだしたよ。ボヤボヤしていたら、行動的な一章氏のことだから、彼にお株を奪われてしまうよ」

「えッ、誰のこと？」

「ホラ、あの子。河森真理子だよ。サロンで『早く縛ってくれないかしら』って、うずうずしているじゃない」

「ああ、あの娘ね。随分御執心だね」

「よくよく熱心なんだよ。迷惑をかけたからと、何かあんたのこと誤解しているようだけど、その手紙、そんなに凄かったの？」

「いやね、余りにもそのものズバリの手紙を寄越したものだから、家内の手前困ってしまっって、今後この種の手紙は余り寄越してくれらるなって返事したんだけど、それを断わられたと早合点したらしいんだよ。いつかの『楽我記』にも一寸触れた通り、本当はうずうずしているんだがね」

「さあそれで、あんたに蹴られたとでも思ったのだね。手記でも書いていけるけれど、通信欄のマニアの人々とも、この調子なら会いかねないよ。それより早く、この際カメラハントしたらどうなの。山本一章から勿々に電話かかって来てネ。辻村氏さえ諒済みなら、

是非紹介してくれってさ。どうする？」

「山本一章さんのことだ。無理もないと思うけど、いざそういわれてみると惜しいな。彼がカメラ・ルポするとなると、早速書くだろうしね。となると、私は二番煎じで、一寸書く気になれない。例の魔子だって、既に三年前にフोटものにしていたのに、魔子との約束の手前書かなかったのだけど、こんなことなら、もっと早くハントに書くべきだったと後悔しているんですよ。山本氏とは肝胆相照らす仲だから別段彼を意識しているわけじゃないが、ハントとルポが同巧異曲のものだけにね、つい……。兎も角、河森真理子の住所





知っているから、今日にでも早速連絡してみますよ。いつでも会える女性だと、タカをくくっていたのがいけなかったのかな」

「うん、そうし給え。ネタが切れると忽ち困るくせに。やいやい言われているうちがハナさ。ある間にせいぜいネタを溜めておくことだよ。私だってその方が安心していられる」

「箕田さん一緒にゆかない？」

「うん、行きたいのはやまやまなんだが、例の中河恵子さんが春休み中に帰郷がてら北陸方面へ行こうと言ってきてるんでね、まあ今

回は君に任かすから、宜敷く頼む」

「残念だが、それじゃ一人で辻村式にやってみるか。」

「せいぜい良い物を作ってみるよ」

三月下旬、箕田氏と私の電話でのヒトコマである。

× ×

縛られてみたい

という、河森真理子の名を知ったの

は、一月号の奇クサロンに目を通したときであった。私や団鬼六氏に呼掛けていたので、編集長に連絡したら、十二月の初旬、彼女から、私宛に速達で直送の手紙が届いた。

同好の士のことや、ハントのモデルのことなど、すべて妻に隠しごととしておらず、堂々とやっている私だから、未知の手紙とはいえ別段内緒で開く必要もなく、その日も私は妻の前で封を切った。

六枚近くあった便箋に、細かく割合綺麗な字でいろいろと書きつらねてある。

彼女自身の希望によるSMのプレイであるが、十三、四箇条許り、番号をうって箇条書きにしてあるのを読んで、これは一寸女房に見せるのを憚られるシロモノだわいと、前に坐る妻の手前ドギマギしてしまった。

本当は正直なのであろうか、又は私を信用して思い切った心のたけを書き並べたのであろうか、プレイの結末はすべてセックスに直結しているのである。

一例を挙げると、後手縛り開股で、パイプレーターをある個所に当てて欲しいとか、乳房をくびれるくらいに強く縛って、その乳房の先を指先で云々——とかで、SMのプレイをセックスへの前戯として希望しているかたちであった。既に覚えのある女房なら、その結末を逸早く察し、そのあとにつづくものにやはり女としてのゼラシーを覚えずにはおかないであろう。

幸い数通の手紙も一緒に入ったが、彼女の便りは速達だっただけに

「誰方からですの？」

と妻にきかれて、咄嗟のうそも出ず

「うん、カメラ・ハントのモデル志望の女性だよ」

とつい本当の事を言ってしまった。



「始めての方らしいわね」

「そう、一月号のサロンに手記をのせていた人だが、さして興味はないね」

心にもなく、妻の手前そういわざるを得ない。本心は疼き始めていたくせに――。

妻は見せてくれとも、又それ以上その事に対しては追求せず、内心ほっとする。ほとぼりのさめた、忘れた頃にでもプレイするのでしょうか。

私のそんな気持が、心ならずも河森真理子との出会いを遅らせてしまったのだった。

彼女はとりわけ、異様なまでに乳房に対するプレイを希んでいた。手紙から察して、バイブレーターは、彼女自身、独り寝の夜、しばしば使用している様子であったし、軽度の鞭打ちや自縄自縛も行っているらしかった。

そういえば、一月号での、『縛られてみたい私』という文中でも、胸のふくらみを責めていただくことだと、婉曲に希んでいる。

バストの大きさはかなり自信あるらしく乳房に関してのみは、他のモデルにもヒケをとらないだけの自信をもった書き振りがだった。

いくら彼女が、あれこれと希望を列挙して見ても、時間の制約もあり、そうそう全部を叶えられもせず、私とてその場の空気でも最後

にはどうなるか分らない、あくまでプレイとしてフエヤで撮りたいつもりであった。

箕田氏から電話のきれたあと、気の変らぬうちに善？ は急げと許り、手帖のあちこちをひっくり返し、彼女の住所を確めて、すぐさま呼応した手紙を書いた。

鞭打ちしてもいいと書かれてあっても、まさか関谷夫人のように真剣でやったなら、恐らく気絶してしまうに違いなからうし、逆吊り宙吊りとても、やりたいのは山々だが、五十二キロの体重をひとりで処理するだけのスタミナは、今の私に大分涸れていることだしと、先ず第一回は、定石通り、緊縛プレイからゆくつもりであった。彼女の執心通り、乳房責めはかなりやるつもりではあったが。

折返し返事がとどいた。月曜日希望という彼女の便宜を計って、四月三日をその日としたが、彼女はその日、既に友達と約束して、車でドライブをかねて、橿原へゆくとかであった。そういえば、この日は戦前の神武天皇祭で、大和の橿原は、今も『神武さん』で賑わって植木市なども盛んらしい。

それで、特別に休暇をとるから、四月六日にしてほしい旨を知らせて来た。文章は比較的かんたんに、日程のみをしるしてあったが

その行間には、未知のプレイに対する感激と欲喜が、いきいきとあふれていた。無理もない、昨年の十二月の初めに始めて便りして以来、実に四カ月振りに、やっとプレイへの実現となったのだから――。

その日のプレイについては、すべて私の一存にお任せするが、お差支えなければ、バイブレーターを持参したいという熱の入れ方であった。よくよくこの人は、それが好きらしい。

× × ×

花曇りのどんよりとした午後であった。空気が既に生暖かく、桜の便りも急激にふえていた。例によって私は、上六トルコ温泉横の喫茶サンライズの前に車を止める。都心で地理のよい分り易い場所で、しかも悠々と駐車しておけるのは、広い大阪市内でも、最近はそうそうザラには見当らない。ここはその点恰好の待合せ場所であった。

サンライズを覗くと、女性の姿は見当らなかった。引返して車に入り込み、カーラジオをひねって待つ。南海電車尾崎での転落大惨事のニュース。運転手がわが子を傍らにしての気をとられての運転、子供の手前エエ恰好した結果の無責任さに他人事乍ら腹が立つ。



むつかしい顔をして聞きいつていたら、車の窓越しに、若い娘が佇ずんで、私の方を見ていた。直感で河森真理子だとさとした。

私はラジオを消し、あたふたと車を降りてその女性に近づいていった。

「河森さんですね？」

私は声をかける。刹那、パッと娘は頬を赤らめ、あわててうなずいた。

私達は喫茶店の前できびすをかえして、車に逆戻りした。狭い喫茶店のなかでは、ろくろく話も出来ないし、むしろ車内の方がくつろいだ雰囲気をもっていたからであった。

短かい黒髪を無理にアップにしたような無雑作なあたまであったが、それが可愛いあどけない顔にマッチして、奇妙なコントラストをつくって愛くるしかった。

私の想像していた女性とは全然違うタイプで、数年前の鰐淵晴子そっくりの、思いもかけぬ美人であった。

このような、あどけない娘が、先にも書いた、あんな手紙を寄越そうとは夢想だにしていなかった。地味なグレーのコートを纏ってはいるが、コートを通して、ふくらんだ彼女の胸の辺りの大きさに、私は改めて唾をのんだ。それに予想以上に若かった。高校を卒

業して、ほんの一年か二年しか経っておらぬのではなからうか。さて何から話しかけようかしら――。

「急に思い出したように呼び出したりして御免なさいね。本当はもっと早くお目にかかりたかったのだけど、折がなくて……。そうそうおひるもう済んだの？」

「ハイ、たべてまいりましたわ」

「そうそれじゃ。ところで私も昔は堺に住んでいたこともあるのだけど、河森さんはどの辺なの？」

「堺の寺地町というところなんです。私の生れない頃は、山の口筋といってとても賑やかだったのですが、戦争が終ってからすっかりさびれてしまったという話です」

「私が堺にいた頃は、市長さんが河盛安之介という人で、あなたと同姓でしたよ」

「今もそうですわ」

「へえー、随分長い人だね。堺にはあなたの姓は多いんじゃない？ たしか大きい醤油屋さんで河又というのもそうだった。私の友達だったが――」

「堺がおくわしいのですね」

「そりゃ若かりし頃、ずっと堺で暮したんだものネ。宿院は当時の盛り場だったよ。卯の

日座、電気館、太陽館、竜神座などという映画館が宿院を中心にして栄えていたよ。宿院のカタヤキなんか有名だったし、くるみ餅とか、大寺餅それに、ちくまのそばもなつかしいものだよ」

「辻村さんは堺のお生れなの？」

「そう堺です。よき時代でしたがね。七月の末になると大鳥神社のお渡御、夜中から朝にかけて大浜の大夜市、ヘルスセンターのはしりの汐湯の温泉があつて、かつてOSKで活躍した花田須磨子とか、現在東宝の脇役の深見泰三等のお芝居が常設にかかっていたものですよ。八月一日になると住吉さんの渡御が大和川を越えて宿院のお旅所までつづいたし八朔になると、菅原神社、開口神社の太鼓台が、堺銀座の山の口筋を暴れ乍ら練り歩いたものです。そんな行事は皆、影が薄れたですがネ。この間その辺りを走ったが見る影もない。私の小学校すらなくなって殿馬場中学校に变身して母校もない私なんですよ」

「あら、殿馬場だったのですか。私の伯父もそうなんです。私は英彰小学校ですけど」

「優秀な小学校でしたよ。堺ときくとどうも懐かしい。急にあなたが身近かな人に感じ出しましたよ」



「私も辻村さんが堺のおうまれときいて、とっても親しい人のように思えて来ましたわ」私の母地、堺への懐古趣味も無駄ではなかった。河森真理子は堺の古き話に耳を傾けていたが、いつしか親密感を私に抱いたようであった。

「箕田編集長様も、もとは堺じゃなかったかしら？」

「よく知っていますね、そうですよ」

「ずっと古い昔の雑誌を、古本屋でそっと立読みした時、発行所の住所がたしか堺になっていたのを憶えていましたから——」

「私が箕田さんと特に親しくなった一つの原因は、彼が堺の人間だったという、いわば同郷のよしみという点からもあったのです。今の堺市はのびにのびて何十万人の人口か私は知らないが、私の学生時代は人口十三万人ぐらいのよく纏った街でしたからね。大和川から御陵前まで、それが堺でした。浜寺も鳳も金岡やあの辺りすべて堺ではなかったのですよ。今の市庁のある辺りを堺東といって、ほんとに新開地だった。堺東宝が昭和館といっ  
てね」

「まあ、私の知らないことばかりですわ」  
「でしようね。クラス仲間の連中で出世した

奴も随分いますよ。あんかけの時次郎と珍念のスポンサーの製菓会社の社長が同窓生なんですものネ。私はこんな調子だから全然うだつあがりませんが、堺では学生時代の仲間が相当幅をきかせていますよ。ああ、すっかり私の身の上話をしてしまった。あなたのことも聞きたいが、こんな処で車を止めた冗話していても仕方がありません。何処へ行きましようか？」

「辻村さんの存じておられるところなら、どこでも構いません。何ならこの辺りでも」

「そうね、この上六界限もすぐ多くなりましたね。時間さえ構わなかったら、一度大阪の高速道路でも走って見ませんか。生憎の花曇りで残念だけど、完成してから未だ一度も走っていないから恰度いい。箕田さんがいつてたけど、十三近辺にもすぐデラックスなホテルが林立してるそうですが、その方にも行って見ましようか」

「私は構いませんわ。高速道路、一度走って見たいと思っていたところですから、本当に嬉しいですよ」

素直で神妙な彼女である。

「そうそうあなたのこと、みんな何て呼んでるの？」

「マリとか、マリちゃんとか呼んでいますけど——」

「うん、マリちゃんがいいね。胸がマリのように弾んでふくらんでいるからね」

「あらッ、いやですわ」

河森真理子は、恥かしそうに身をくねらせた。そのしぐさは、ういういしくいかにも愛らしかった。

上六から日本橋一丁目を通って、交通煩多な千日前、戎橋を、車の洪水の中を泳ぎ乍らやっと大阪高速道路の入口、湊町に至る。

有料道路の通行料百円を払って、踏み入れると、地上のあの車の洪水がまるで嘘のようにシーンとして、通る車はぼつぼつとまばらで、近代的なハイウェイが、最新の粋を凝らして伸びている。雑多な高層建築も、肩ごしに、少し走ると、もう本町近い。時間にして二分たらずだった。

彼女は眼を睜って左右の眼下の街並を俯瞰していた。ビルの谷間の渡辺橋界限をくぐるともう出口が開いていて桜橋に出る。

サンケイ会館の辺りから大阪駅にかけて、再びうんざりする車、車、車の列。

一米刻みにブレーキを踏み乍ら、金魚のうんこの様に、列をつくってのろのろと走る。



いや走るといえない、車を押してゆくようなスピード。でも前方を注視し乍ら、傍らの彼女と話すには都合いい時間の長さである。

「角田喜久雄の小説が好きなのよな娘さんには見えないね、マリちゃんは——」

早速心易くマリちゃんと呼んでいる。

「美しい可憐な娘の縛られるシーンが多いのです。でも若し本当なら、あんな非人や雲助に暴行されるの困りますけど、少し私センス古いのかしら」

「私の推察では、デパート勤めと思うのだけど、違った？」

「月曜日がお休みだからそう思われたのでしょう。でも違いましたわ。私、戎橋筋のあるお店の手伝をしているのです。私の堺の父の商売と同じなのですが、女許り三人の長女なものですから、その仕事を覚えるため、父の半ば命令でそこへ行っているのですが、日曜日は人出が多くて忙がしいので、デパートなんかと歩調を合して、幾分閑散な月曜日に



なっているのです。店の人は十四、五人いますが、休みは皆まちまちで交代制なのです。私は月曜日だけ——」

「するとお嬢さんを貰う方だね」

「いやですけど多分そうなるでしょうね。私のこんな性格を理解してくれる人に来て貰えると嬉しいんですけど。この半年許り前から見合の話が三回もあって、お見合してみな断りましたの。辻村さんなら、私のこんな気持を理解して貰える男の方を御紹介してもらえないかって、そんな希みも本当は持ってい

るんです」

「私の数多い同好の士は、全部奥さん持ちで残念ですね。同好者の中で一番若い増田喜代司だって、今度一ぺんに二女の父になったしね。一寸独身者でプレイする男性はしりませんね」

「御免なさいね、こんなこと申し上げて。別段構いませんのよ、お気になさらなくとも。ただそんな方と将来一緒にずっと暮せたらと思ったものですから。これは私のはかない願いなんですわ。でも読者通信欄を読ませていただくと、

中には独身の方も、いらっしゃるようですが、いきなりそんな方とお目にかかるのも怖いし、といって何だか会って見たい気もしますし、痛し搔ゆしの気持ですわ」

「読者通信の独身は一概に当てにならないしプレイだけの牙を磨く狼だっているからね。余りおすすめ出来ないが、マリちゃんには呼び掛けが多いことは確かだね。一度会って見る気になれば、編集長に頼めばすぐだけど、体の保証は出来ないよ。プレイ同志の二人だけのことからネ。私も結婚以前よりこうし



た性向はあったけど、時代も時代だったが、やはり夢想と幻影上の産物だったネ。結婚したあとの、倦怠時期に夫婦プレイで解消したり、ふときさず、猟奇を探索したくなる有閑のひとときが、SMのプレイに走らせるのであって、独身時代は勿論プレイ心はあって悪くはないが、むしろそんな若い時代は、仕事や研究、学問など、将来の道に進進すべきだと思いますよ。SMプレイはそうした方向が一応安定したあとの、人生の空虚さをみたまのための手段として選ぶべきではなからうかと思うのだが――。概してこれは男性を対象としていったのだよ。女性の場合は又おのずからニュアンスが違うけれど……。男女の体質の違うように、能動と受動との違いから、所詮独身といっても男と女とは違うがネ」

「私、何月号かで呼び掛けられて、フトその気になって大劇と、もう一度はうっかりしていたので日を違えて、堺の方違神社まで行ったことあるんですけど、やはり怖くて、とうとう会いませんでした。今になればその方がよかったという気がしますわ。でもこの間、又奇ク宛に少し書いて送ったのです」

「編集長からききましたよ。早速今度の五月号にのっていましたね。私も読んだけど、

カメラ・ルポの山本一章さんに会いたって書いてありましたね」

「私、辻村さんがもうダメかと思ったものですから――。怒っていらっしやいます」

「ああ、とってもネ。何しろ山本一章とは、ごく最近のつき合いだが、肝胆相照らす友となりましたからね。いや怒っているなんて冗談、山本一章なら、それを知れば万難を排して飛んでくるところでしたよ。しかしハントとよく似たものを彼、書き出しただけに、多少ライバル意識が働いてネ。彼に先を越されちゃ大変だと、慌てて手紙出したというのが私の本心ですよ。その点では、あんたの文は大いに私を刺激したことになりますよ。それにしてもヨクヨク誰かとプレイしたいんですネ。どうしてマリちゃんがそんなに焦るような衝動的な気持ちにかられるのか、知りたいですよ」

「叱らないでネ。私は本当は辻村さんだけでよかったのです。でもあんな御返事いただいた上、ちっとも何も仰有ってこないものだから、口惜しくなって、誰でもいい一度会ってみて、そんなことをしてみても、辻村さんのハナをあかして見たくなったのです。誰も私という人間を知らない。誰かに出会ってマリが

こんな娘だったということを知ってもらいたかったのです。でも読者通信の方は、自分が愉しむだけで、書けないかも知れない。私という人間をどの様に評価してもらえるか知りたかったのですわ。でももういいわ、辻村さんが私を書いて下さるでしょうから。安心してプレイ出来る方を選ぶために、独身者の方を探したい反面、プレイは既婚の人を希望のです。一切の費用を持ってくれということも、ある程度は余裕ある方なら大丈夫と考える事ですの。鞭打ちや、きついことを希望しているくせに、体に傷がつくのも困ると思っ

て書いていました。正直いって、今の私は別段金銭に困っていませんし、家庭も円満で暮しはラクなのです。そんな気持ち分っていただけますかしら――」

「アバンチュールを求めたい娘心で、一種の反抗期なのかな。それで私なら安心とみたわけ。それなら何故私によこした最初の速達にあんなどぎついことを書いたのです。私は反って困惑した」

「辻村さんの気がひけるかも知れないっていわ、私の浅はかな女心でしたわ。お詫びしますわ」

「もし、私がその気になったら、どうするつ



もりだったの、許す気でいたの？ それともはねつける気だった？」

「場合によってはどうなってもいい気でいました。若し辻村さんに、その気がありならば……でも、はしたなかったと思います」

「今日若しそうなっても後悔しない？」

「しないと思います。私いずれ分ることですけど、バージンじゃありませんのよ。昨年の秋、初恋の人にあげてしまいました。たった一度きりだったですけど」

「それで悪い言い方だが、捨てられた？」

「捨てられたのじゃありません。むしろ私が捨てたのです。涙をのんで」

「どうして？」

「結婚する気で、その人も婿になっていいと申していました。すごい乗気でしたが、興信所で戸籍をしらべたら、いけなかったのです」

「ほほう、どういうわけで——」

「私がバカだったのです。その人韓国籍だったのです。日本で生れたそうですけど——」

「両親が反対したんだろうね。私の娘だって若しそんなことがあれば困ると思うが、しかし、男はある程度、言うか言わぬかで妻を征服したがっているから、マリちゃんの将来の人も、やり方一つで、全然SM気のない人で

あっても、いつか先々はそう仕向けられるんじゃないかな。むしろ最初から知っているよ、その方が愉しみなんじゃない？」

「でも女の方からはいい出しにくいことでしょうね。こんな体の私でもいいかしら」

「まあまあ、心配しなさんな。いざとなれば私がマリちゃんにアドバイスしてあげるよ。むしろ何も知らずマリちゃんと結婚した彼はそんなマリちゃんを知ったら狂喜するかも知れませんが。願ったり叶ったりだって」

もまれもまれて、車はいつしか中津を越え淀川を渡って十三に近づいていた。

「縛られてみたい私なんて、あんな一文をよむと、凄く女性だなあと感じていたし、私へ最初来た速達なんかで、益々その意を深めたけど、聞くで見るとは正に大違いとはマリちゃんの事だね。こうしているあんたは、実に新鮮でういういしく、世間知らずのいいお嬢さんだ。そのくせ、マリちゃんの喋っていることは、プレイという前提のもとに語っていて、全然動じることもなく、至極当然のよう

に喋っている。まるで何もかも知っているといった風にね」

「まあ、買被りですわ。私、何にも知りませんし、胸をドキドキさせているのです。カメラ・ハントの辻村さんの仰有っていることをその俚すべて信じていて、お相手しているのですわ。私にもこれから、あの様なことが展開されるのだという、期待と不安だけで一杯なんですよ」

「カメラ・ハントなんて全部フィクションですよ。あんなうまいこと、そうそうあるものじゃない。編集長にやいやい言われて、苦しまぎれに書き飛ばしているんですよ。そんな女の人が、世の中にそうざらにいるものですか」

「でも私はここにおりますわ、現実——。そして辻村さんもこうしていらっしゃる。カメラ・ハントの材料は揃っている筈ですよ。私そんなこと信じられませんわ」

「じゃあ、全部本当だと信じますか？」

「本当を書いて困る場合もあり、困られる女の人だってありますから、そこはうまく逃げたいらっしゃるのでしょうか。そう思いますけど……」

「マリちゃんは賢明ですよ。いつかね、今日の出会いのことを、若しハントとして書いた時、あなた自身の経験とカメラ・ハントの内容を検討されるんですね。それが答になるでしょう」



今迄こんな会話を交した女性はいなかった。確かに河森真理子は、どこかしっかりして、それでいてあどけなく、おぼこ娘のよさをもっていた。この人が、自慰や自縛にふけるとは、どうしても考えられなかったが、所詮女は魔物。やがて始まる密室でのひとときのプレイが、真理子の本性をあらさずにせずにはおかまいであろう。

十三のホテル街をうろろと車で廻り、一際高く聳える、オリオン星座の如きホテルの駐車場に私は車を乗り入れた。駐車場の片隅



の、くぐり戸の様な入口から事務服の若い女性が出て来て、私の車のキーを預かった。うまく人眼を忍ぶにふさわしい入口から、私とマリ子は黒い遮蔽ガラスの戸を押し開いていた。私の車の外にもう一台、コルト一〇〇Fデラックスが、ポツリと奥で潜むように止っているきりだった。

深海魚族の戯れるにふさわしい、仄暗いホテルのフロントから、すぐエレベーターにのりこむ。四階で止る。完成して未だ日も浅いのか、ホテルの調度は真新しかった。事務

服の案内係が立去る。そして、ホテルの一室に初めて真理子と二人っきり、私は相対して坐った。プレイはこの時間から始まっていた。狭い洋室の間に激んだ空気があった。

× ×

透いたカーテンの、幅広い模様硝子の窓の向うに、

河森真理子の湯を使う音が聞える。私にのぞき趣味はさしてない。しかし今、この湯の音に、私の全神経は焦立っていた。この窓硝子は、小さい浴槽を一眼で眺められるように、わざとその様につくってあったからだ。湯浴みする美女をのぞき眺めて、この密室で幾多の男性が、慾情に油をそそいだことであろうか。凡々たる私とその例外ではなかった。何れ早晚、彼女の全裸に縄をかける私であつたにしろ、この誘惑には勝てなかったのである。私は狭い洋室の電気を消すと、静かに浴槽を隔てる硝子窓のカーテンを引いた。仄青い光が浴槽に映えて、その部分だけが、さながらスポットを絞った舞台のようにあざやかに浮き上った。

無心にマリは体を洗っていた。私は思わず息をのんだ。マリの体にはない。その胸を圧する偉大なる、豊満たといふかたなき双つの乳房に対してであった。その何と見事なる発育の成果よ——。双房はゆらゆらとゆらめき、ブルンブルンと絶え間なく震え、そのものみが、まるで生きもののよう、真理子の胸で息づいていてではないか——。

白い肌に似ず、又年令にふさわしくなく、彼女の体毛は濃く、臍窩から下へ、薄っすら



と一線をつけて、それが、豊かなデルタの密生につづいていた。

顔を挙げた拍子に彼女の瞳が窓に走り、そこに顔をよせる私とばかり視線があった。あつという様に、乙女の羞恥が忽ち全身に澆ね返って、真理子は無意識にタオルで体を蔽っていた。軽い批難めいた眼の色だった。

私は困惑して、笑って手を挙げて振る。その素振りを何ととったか、彼女は二、三度うなずいた。私の咄嗟の照れ隠しのゼスチュアを、催促にとったのかも知れなかった。

驚くほど長いまつ毛が、露を宿してキラキラ光ってまたたいていた。美しい睫毛だ。

バスから真赤な肌をほてらせて上ってくる、暑いのか、バスタオルを胸高にまいた俣で、真理子にはにかんで笑った。

「何て仰有いましたの？」

「えッ？」

「さき程、硝子越しに何か仰有ったのでしょ  
う？ 笑って——」

「ああ、あれね……」

まさか、見事なるオッパイにみとれていたとも言えない。

「ゆっくりだねって言ったのさ。待ち草臥れてますよって……」

「お入りになればよかったのに」

「おいおい、本気かい、それ？」

「どうせプレイするんですもの。早いかおそ  
いかの違いですわ」

すっかり度胸の据った、プレイずれたような言葉だった。これが、可憐なういうしい真理子の、赤い唇から平然と飛び出すものだから、眼を瞪らざるを得ない。こんな素晴らしい女性を、どうして四カ月近くも放っておいたのだろう。と、私は今更乍ら、私自身の幸運に酔う想いであった。

声や手紙で想像していたより、会って幾分の幻滅を感じる女性もあれば、こうした全然逆の場合もあることを私は知らされた。

私の心は、既にSめいてときめき出していた。手軽なカメラ装置は既に整えてある。シッターを押せば、いつ何時でも真理子の映像がカメラに納まるようになっていた。

「私、案外毛深いタチでしょう、お驚ろきになった？」

「意外だったね。外見からは全然感じないものね。鰐淵晴子も毛深いかも知れないね」

「あらッ、辻村さんもそう仰有る」

「似てるって言われるの？」

「ええ、時々……」

「中村玉緒も毛深いそうだよ。概して毛深い人は情がこまやかなんだって」

「そうでしょうかしら」

「マリちゃんはきつと情熱的だよ。私のような中年男に惚れられると困るぞ」

「まあ、あんなこと……」

彼女は黒い長い睫毛を上げらせ、うるんだ瞳で私を見つめた。その瞳の底に、激しい情熱のほむらが、めらめらと立上っているかのように見えた。抱きしめたくなくなるような刹那であった。溺れてはいけない。私は気を取直すと、バッグからロープをとり出した。初歩的な第一段階を履行するつもりだったので、さしたるロープも入っておらず、細いロープ二条と、紐のたぐいであった。いつも使用するロープ類は、笹原八千子をとる山本章氏の要望で、先日貸した俣で、未だ返してもらっていないから寄せ集めの様な感があった。モザイクのリノタイルの床は、すべすべとして冷めたかった。狭い密室の雰囲気、既に真理子は酔ったかのように見えた。ガスストープの栓をひねるまでもなく、空気は程々に温まっている。

私は縄を片手に、真理子の腕を、今始めて握った。軽いショックをうけて、彼女の肌が



微かに震える。バスタオルが音もなく、サラリと床に落ち、裸身が私の眼前に白く輝やいていた。彼女は軽く眼を閉じた。

「始めるよ、いいね」

微かなうなずきと共に、閉じた上の睨がピクリとけいれんした。緊張と不安、昂奮と期待が、怒涛のように、真理子の全身を駆け巡っているに違いない。

両腕を後方に捻じ上げて、後手縛りは、縄を二筋巻いて簡単に縛る。縛った縄のはしを胸に廻し、二の腕をしめて、次ぎは乳房の下へかける。豊満としかいいようのない乳房は尚一層に盛り上って、やや心持ち黒味を帯びた乳首が、ぽっかりと乳房の先端にお椀をくっつけたようにのっかっている。小さい胸の女性なら、この乳首だけぐらいの胸のふくらみにも匹敵する、壮大さであった。縛り終えて、私はしばし胸の隆起のあざやかさに見とれていた。立ったポーズを前後左右から数枚とり終えて、私は手を添えると、真理子の体を押えつけるようにしてリノタイルのフロアに転がした。床の冷めたさに、ハッと彼女はこころもち眉をしかめ、愁眉が開くと、観念した陶醉の表情が徐々に浮かんで来た。

カメラを置くと、私は真理子の提袋の底を

探った。約束通り、小型のバイブレーターが手製らしい布袋に入れられて、提袋の底にあった。バイブレーターの先は、用途によって数種取換えられるように出来ているものであったが、肩凝りなどに使用する四本足の器具は袋に入っておらず、五十円硬貨ぐらいの大きさの、円型スポンジで顔面マッサージ用のものと、毛髪内の頭部マッサージ用の円型ゴム櫛様のものと、吸盤のようになった円錐型のゴム器の三種が、袋の底から現われた。製造メーカーは、それぞれの器具に対し、もっともらしい説明はしている筈であるが、恐らくは真理子と同様な用途に使用しているむきも多いのではないかと、当然推察出来るようなアクセサリー群である。

私はそのひとつの、円型のスポンジをバイブレーターに装填し、電源につないだ。スイッチは強弱二種になっていて、ロウの方にスイッチを押すと、忽ちビビビと掌に震動が伝播してくる。私はスポンジを、そっと彼女の肌に近づけ、軽くタッチさせた。と、その瞬間、ビクと彼女の体はまるで電撃のショックを受けたかのように飛び上り、肌が蠕動運動を起して躍動した。間もあらず絶え入るような恍惚の呻きが閉じた唇から洩れて、呻き

は甘い吐息とかわり、徐々に移動させるバイブレーターの位置とともに、女体は、波紋を立てて転々した。ロウからハイにかえる。

喘ぐ真理子の息づかいに、悦楽と恍惚の歓喜が溢れていた。このバイブレーター責めは彼女にとっては、責めというよりもむしろ恍惚の愛技ともいえる、甘美なる陶醉のプレイではなかったであろうか。

私の手に、バイブレーターを通して、彼女の波動が伝わってくる思いであった。尚もすっかりとバイブレーターを握りしめて、私は執拗に真理子の肌に押しつけ、いつしかしらずしらずその位置を移動させつつあった。

歓喜にのたうつ真理子の、それは畢生の願いであったのかも知れない。今彼女は身も世もあらぬ肢態を、まざまざと私の眼前で展開させ、快楽と悦楽の境地にフロアを這いずり廻り、熱い呻きをもらしつづけていた。私の嗜虐の心は激しく弥ましてゆくのを覚えた。とぎれとぎれに彼女は何か呟やいている。

スイッチをきり、とぎれとぎれに喘ぐ真理子の体を起して、紐をとり出すと、両足をあらをかせて縛り、その端を首に廻して、海老責めに縛り上げる。偉大なる乳頭は震えあがきと共に、ブルルン、ブルルンと乳房は



躍動する。

「苦しい？」

「ウウン」

否定が返事だった。

私はバッグから、ベルトをとり出すと、ひとふりした。いつものズボンのバンドではない。尾錠や丸環がついて、拘束帯にもなるシロモノで、増田喜代司が、自分の分と一緒に私の分も一つ余計に作って進呈してくれたものであった。ズボンのバンドにくらべて、革が馴れず固いので、これで打つと、少したえるかも知れない。かたち許りの鞭打ちになるかも知れないが、真理子の鞭に対する反応を見たい気持もあった。

背を打ってくれと言わん許りに彼女は首を垂れ、海老縛りスタイルで凝然としていた。その背に拘束帯革が、ごく軽く、撫でるようにパチンと当たった。ピクリと肩が揺れて、彼女に変化はなかった。二度目は少し強く帯革が、背の同じ個所を擦過した。ウーンと押し殺した吐息に似た声が洩れたが、相変らず真理子は身じろぎしなかった。

「痛い？」

顔に口を近寄せてきくと、

「ええ、少し……でも、もう少しきつくても

辛抱出来ると思いますわ」

と、この乙女は、鞭打ちの強調を望んでいくかに思えた。いつ振り下されるか知れない鞭の下で、緊張と不安と、快感に、真理子は我が身の被虐度を試そうとしているかに見えた。私は膝まづき、ベルトの中央辺りを短かく握って、一振り、背ならぬ見事な乳房に強めの一撃をピシリと与えた。

反応は大きかった。「あーあー」と真理子の朱唇から歓声に似た悲鳴が洩れ、身悶えの余り、ごろりと海老縛りの俛、我れと我が身を横転させてしまった。組んで縛った両足が空に泳ぎ、後手がじかに床に圧迫される痛みを避けようと、真理子は必死に楽なポーズを求めて身をよじっていた。

かなりの時間、おしりが床で押えつけられていたため、接触の部分が赤く丸く染まっていた。白地に赤い日の丸の旗のように、その赤は一入私の眼に灼きついた。

私はかなりの力をこめて、その臀部の赤を目掛けて革ベルトを振った。一撃、二撃、三撃、その都度、真理子の下半身はゆらめいてのたうち、中心を失った女体は、ゴリゴリと関節で床に音をたてながら、右に左に転げ廻った。私はいつしかすっかりフオトをとる事を忘れていた。プレイに耽溺しようとするとき、フオトは無用の長物であった。カメラによって、折角盛り上ってきたこのプレイへの意慾を寸断されることは、今の私にとっては堪え切れなかった。

真理子は鞭のしとねのもとで、時にはヒューと絶叫し、或いはウーッと悶絶し、あーッあーッと断続的な呻きをもらしていたが、やめてくれとは言わなかった。今、この娘は、その鞭打ちの限界を試そうとしているに違いなかった。心に潜む、マソヒズムの陶醉の境地にあって、果して、どれくらいまでたえられるか否かを、我が身でジカに味わっているに違いないのだ。

激しさは、関谷夫人に比して問題にならなかったが、その限度は各人それぞれ相異のあることは勿論である。関谷夫人にとっては、陶醉の極致の強さが、人が変れば、苦痛以外の何ものでもないかも知れないし、やわらかく、ソフトに鞭うつその力を抜いた弱さも、女人のAにとっては歓喜の極みであっても、関谷夫人なら、おそらく物足りぬ鞭打ちであるかも知れない。

鞭打ちの強弱も、それこそ超A級の強いものから、D級、E級の撫でさするようなもの



まで、千差万別であるはずである。

関谷夫人を超A級とすれば、河森真理子への鞭打ちはC級程度にも及ばなかったが、それでいて、この娘は、絶叫し、悲鳴し、叫喚し、歓喜しているのであった。

「痛いのか？」

鞭を打つ手をやめて、覗きこんできくと、かすれた小声で、遠慮勝ちに、

「こんなにぶたれたの、私生れて初めてですから、少しばかり……」

「こたえすぎたようだね。鞭打ちはよそう」  
彼女はゴロンと亀がひっくり返ったように

なった恰好でペソをかいて笑いをつくった。

そのほてったような頬べたに、軽く唇を当ててキスしてやると、私は手早く縄をといてやった。

「床が硬いので少し骨身にこたえましたわ。」

私って案外意気地なしなんですのね」

河森真理子は自問自答して、二の腕や膝頭や、足首をもんでいた。

「少し休むことにしよう。寒くない？」

「大して寒くありませんけど、この俤じゃ何だか羞かしくって……」

「これを着なさいよ」

私はつくりつけの洋服タンスから、ゴワゴワした浴衣を出してきて、のりをもんでやって、真理子の背にきせかけてやった。

狭くらしい椅子に向い合  
うと私は草臥れを覚えて、  
煙草をとり出す。

「私にも、一本くださらない？」

「おや、吸うのか？」

「ええ、そろそろケイコし  
ていますの」

洒々といったのけて、真理子はかなり手馴れた手付で、私の火を受けた。

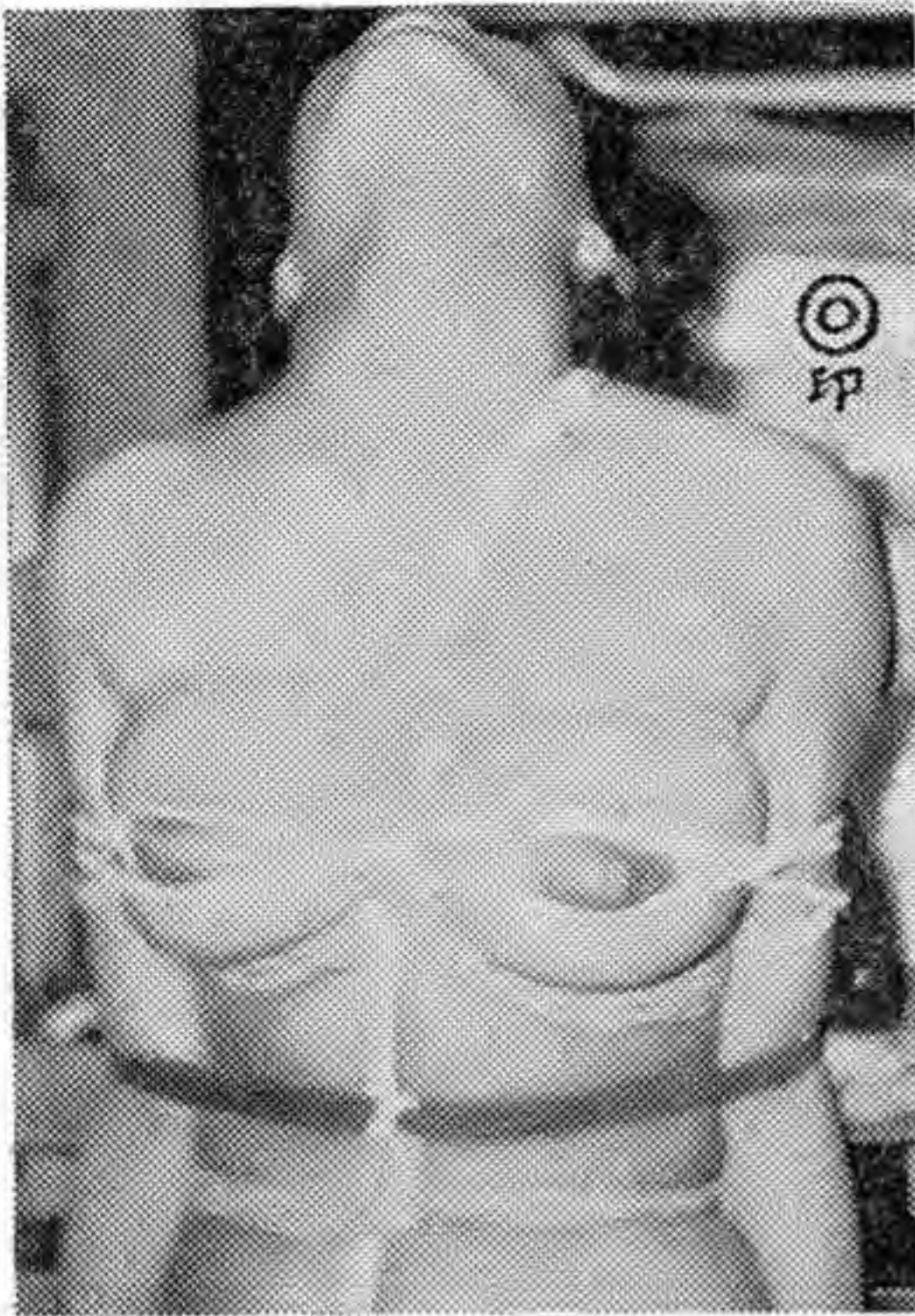
魔女と童女が隣り合せに、仲良く同居しているような奇妙な娘だ。

「素晴らしいおっぱいなんだね。私はすっかりおっぱいに圧倒されたよ。いつ頃からそんなに大きくなって来たの」

「私の体質だと思いますわ。或いは遺伝かも考えたりしますの。母がすごく大きいんです。それに私の下の妹が、今年から高校二年ですけど、とても大きいんです。私も高校時代、クラスで一番大きかった方なんです。ヘンな話ですけど、触ったり、いじったから大きくなったのじゃありませんのよ。いつの間にか段々こんなに大きくなって、つい触れることが多いものですから、いつしか知らず知らず触るようになっていました。何かとてもアツピールするんですの。でもこんなに大きいと、若し結婚して赤ちゃん生んだら、どの位大きくなるのかと、うんざりしますわ」

「いいじゃない」

「それは第三者だから、そんなこといえますのよ。当人の身になってみれば、過ぎたるは及ばざるが如しで、なやみですわ。セーターをきたりしてお店へ出ると、大概の男の方は





私の胸許に眼をやりますわ。きつと……」

「そりやそうだろうね。若し私だって、客として真理ちゃんの店をたずねて行けば、その一人だったかも知れないよ。だけど、ひょっとすると、バイブレーターなどが、尚更発育を助長しているんじゃないのかな」

「あら、そんなこと……」

真理子は羞恥の頬を染めた。あえて否定しないところが微妙だった。私はこの真理子をむしようにいじめたくなって来た。

立上ると、彼女の腰かけのうしろに廻り、くすぐるように胸の辺りに手をやった。敏感な反応が私の手許に手応えを与えた。彼女の耳許に口をよせて囁やくように、

「ローソクがあるんだけど、思い切り縛って使ってもいい？」

「どうなさるの？」

「真理ちゃんの体に立ててやるよ、小さいこのテーブルの上に仰向けになるんだ」

彼女は黙って、のろのろと椅子から立上った。むしるようにして浴衣を脱がし、テーブルの上の灰皿や湯呑みを床に降して、私は白い体をそっと仰向けに机にのせる。胸の辺りに、あり合せの紐を、小机の下を通して二本かけ、左手の手首に縄を巻いて机の下をくぐ

らせて引っぱり合せて動けないようにし、両

足の膝頭を、別々の縄で縛って、腰の辺りから持ち上げて、膝が乳房につくまで彎曲して体にぐいと押しつけ、素早く両方の縄を引って結ぶ。真理子は、この極端なポーズにも、さして嫌がる風もなく私のさすが俚になって目をつむっていた。私の眼前に、真理子の体が、最も望ましいポーズで開いていた。

私は二本のローソクをとり出すと、その五センチ許りの短かい方のローソクを、真理子の肌に立てた。マッチで点火すると、めらめらと炎がするどく伸びてゆらいだ。

そのポーズに私のシャッターは走った。伏せて下からねらい、接写して双つの丘を、フラインダー一杯に拡大した。

ギリギリと火芯は燃え、たまりきった蠟涙が一条スーッと流れておちた。

ウーッという、熱い呻きが洩れ、あふれた流蠟は次々と滴下していった。

身をよじる彼女の悶えに、ユラユラと危うく短蠟は傾むき、ポトポトポトと、大量の蠟涙が矢継早やに、真理子の肌を熱くかためていった。齒を喰いしばって彼女はそれに堪えずーっと眼尻から細いしずくが机にポトリと垂れていった。私はローソクをふき消し、そ

っと除去してやった。

「熱かった？」

「ウーン、熱いわ。生きているんですもの」天井を向いて突起している、乳頭は喘ぎ、大きく波打っていた。両膝の縄をとき、ラクな姿勢に返して、胸や手足を解放する。

「ひどいことをなさるのね、辻村さんは」

「そんなこと誰にでもなさるの？」

「誰にでもはしないよ。真理ちゃんだからやってみたのさ。最初に貰った手紙に、たしかこんなプレイもして欲しいって書いてあったように記憶しているよ。それからそのローソクで……」

「いや、いや、もうそれ以上いわないで」

彼女は、激しくかぶりを振った。それ以上はセックスにつながる行為だからでもあろうか。しかし、現実はそのプレイに対し、彼女は私にすべてを許容しているかに思えたのであった。立上った真理子を私は、矢継早に縛り始めた。細紐が二つの腕に深々と喰い入る許りにきつく締め上げた。胸にエックスに縄をかけ、首にも巻き、雁字搦目に縦横に縄をかけて乳房を圧迫し乍ら引絞った。中肉中背のバランスのとれた真理子の肉体の中で、乳



房だけが、別のいきもののように遊離し、圧倒的なポリウムを誇って、体のバランスを崩して、そのみが均衡を破っていた。

ポツカリとふくれ上った乳量の円みに、私の眼は喰い入っていった。私は刹那、轟々と河森真理子の独占慾にかられた。この造形の見事さ、このほどの悪女ぶり、このけがれを知らぬあどけなさ。こんな素晴らしい娘はそうそうザラにあるものではない。誰にも手渡したくない、およそ私らしからぬ気持が湧然とおこってきたのは、私が河森真理子にイカれた歴然たる証拠である。

縛り終えて、相對する。フォトを撮るよりこの神秘ともいえる造形美を、飽かず眺めていたのだ。

「縛って曝しものにしておくよ」

「……」

真理子は黙した儘、眼を伏せた。本来のハントを想い出して、けだるく立上り、パチパチとお義理に数枚カメラに納め、再びドッカと、彼女の前に、小机を挟んで対峙する。

私は捕えた獲物をなぐさむように、眼前の真理子の肌を眼でなめ廻して、プレイの戯れを始めた。

突起した乳頭の先端にクリップを左右一コ

宛挟んだ。そのクリップを指先で引くと、彼女は啜り泣くようなおえつを洩らした。

小鼠にじやれる牡猫のように、クリップの穴に細紐を通し、左右交互に引張ると、真理子の啜り泣くような、のどの奥底でなる悲鳴は更に激しくなった。強く引張った拍子に右乳頭のクリップがプチンと外れて私の手許にはね返り、叫喚が走った。

「やめようか？」

少々意地悪な問いを發すると、真理子は激しくかぶりを振った。もっと続けてくれというのか――。

昔の私はカメラ撮る手の合間に、偶に生なまのプレイをし、今の私は、プレイを本命にしてその合間合間に、カメラを機械的に撮っている。カメラ・ハントは、SMプレイ・ハントと改名せずばなるまい今日の私である。

さもあらばあれ、私のSは予想以上に活動し、昂揚していた。

真理子の場合、否が応でも、この見事な充実した乳房が、彼女とのプレイの本命であった。私はそれに向って邁進せざるを得ない。再び縄を解き、乳房を中心に持参した縄のすべてを使って、締めつけていった。山本一章流に言えば、それが、写真◎印であり、その

近写が、写真△印である。

この場合、両手縛りはもうどうでもよかった。只単に私の想念は、専ら乳房に集中して飽くことがなかった。どんなに強く縛り、思いつき押しつけ、圧迫しても、縄の隙間から乳頭は、さながら生きもののようになり、ポツンと突端を覗かせていた。

もう一本の、クリスマスに使うラセン状の赤いローソクに火を点じ、至近距離から、乳頭目掛けて、赤い滴を垂らすと、尖端は生きもののようになりピクリとけんれんして、ついだ喜びにも似た呻きが部屋にこだました。

ボト、ボト、ボト、涎は縄を伝って乳頭を赤く染めて、乾いていった。

呻きと唱悦が交錯し、真理子の眼尻に露が浮んでいた。口走る言葉にならぬ声が、

「やめて……もっと……やめて……もっと……」

と、どちらともつかぬ呻きとなって口をついた。

蠟の燃える匂いが狭い密室に充満し、キナ臭い匂いに包まれて、私はローソクを吹き消す。赤い斑点に彩られた、乳頭は、更に色づいて、熟れた柿さながらに、しゃぶり尽したような衝動にかられた。この場合、自制心



が唯一の心のとりでとなって、私の衝動を押えているに過ぎなかったのだ。

「山本一章にも会いたいかね」

「ええ」

「私がいやだといったら」

「どうして？」

「あんたを誰にも渡したくないからさ」

「じゃあ、いいんです」

「もうこれ以上、同好の人を迷わすような手記を書いちゃダメだよ。なまじ書いたりするから、通信欄の人々が期待するんだ」

「もう書きませんわ、きっと。そのかわり、私といつまでもつき合って下さいます？ 私に結婚するまで……」

「ああ、約束するとも。ひよっとすると、もう離さないかも知れない」

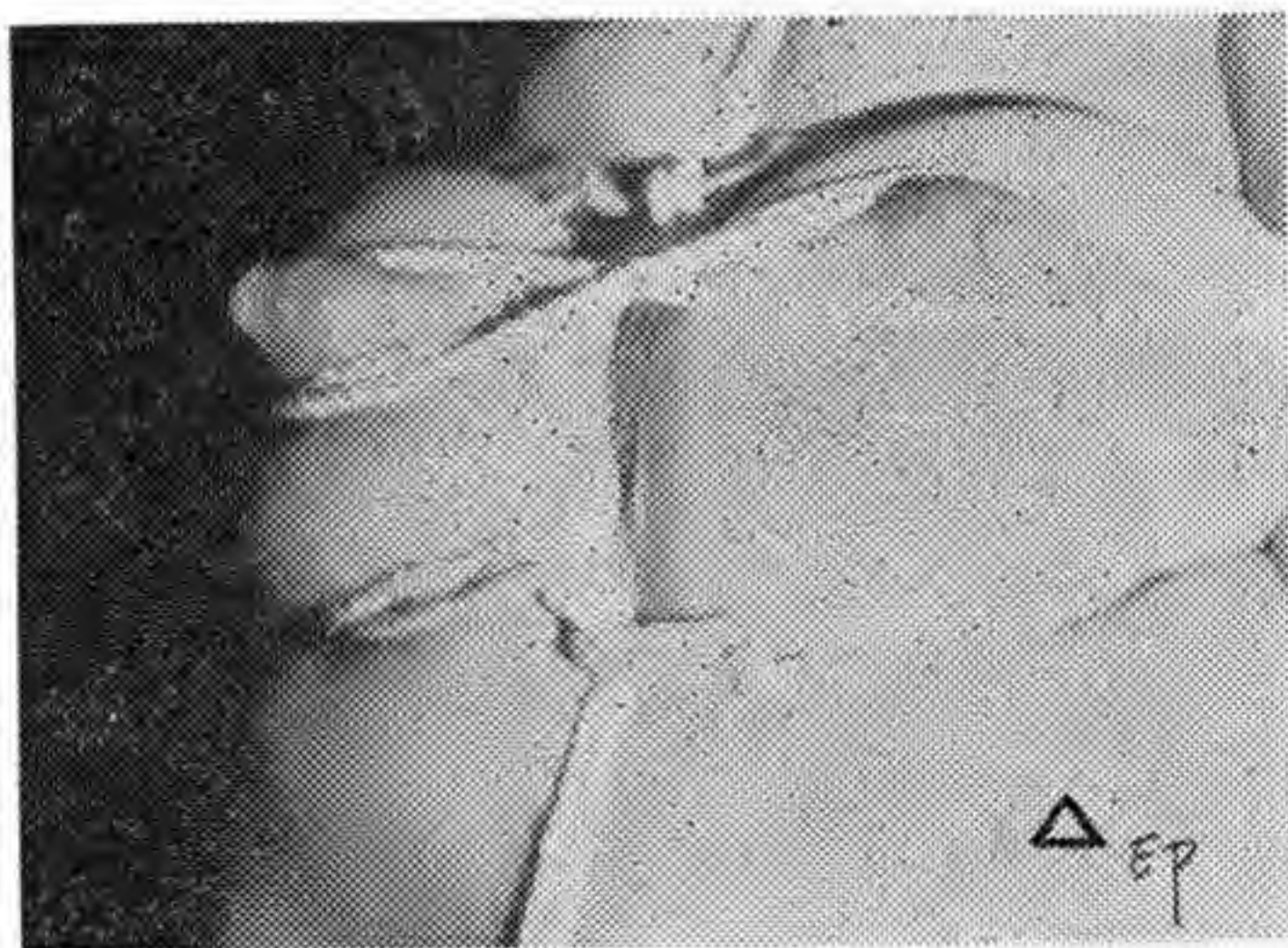
「それなら私、結婚なんかしませんわ」

「後悔しない？」

「本望ですわ」

私は咄嗟に、山本一章の恨めしげな顔が浮んだ。ついで、河森真理子ファンの諸氏の、憤懣やるかたない想念に突き当たった。が、もう放たれた矢は止まらなかった。ヒタヒタと独占慾が身内にたぎり始めていたのだ。

私の常日頃のアイ・ライクは、河森真理子



に限って、年甲斐もなくアイ・ラブに進展しようとしている。ふつふつと沸る恋情が、いっしか見境いもなく、こんな口約束を交わしてしまったのだった。

私は無意識に、縛った真理子の可愛い唇に、我が口を近づけていった。真理子の眸は静かに垂れ、すべてを許容するかの様に、私を待っていた。

合った唇の唇、私は机上のバイブレーターを再びとり上げた。ハイにスイッチを入れ、強い電動を手に覚え乍ら、力強く舐と縛った乳房の、突出した乳頭にそれを押しつけた。私の胸に、じかに真理子の鼓動が伝わり、唇を通じて、私の口腔に呻きが、押しよせてきた。柔かい肌がしっとり汗ばみ、乳頭は硬く膨脹しているかに見えた。

私——は珍らしく抵抗を覚えだした。押しつけていたバイブレーターをとめ、引裂くように唇を離すと、私は次の試みとしてバイブレーターの器具をやや硬いゴム櫛盤に交換した。違った反応を期待して——。

真理子の持参したバイブレーターは、今や百パーセントに効果を発揮しつつあった。

スイッチをハイに入れ、再度彼女の柔肌に押しつけていった。彼女の体は小刻みに震え始め、吐く息は切なげに、切迫していった。快樂の絶頂によじ登っているのであろうか。たしかにこれは責めといえるものではない。言いかえれば、バイブレーターを好む女性に対し、必死に、懸命に奉仕しているに過ぎないかのようであった。私は彼女の悦ぶように喜ぶようにとサービスこれ勤めているのかも知れなかった。



プチンとスイッチを切ると、未だ甘い吐息を洩らしている真理子を、縛った俵俄破と抱き上げて、私はやおら立上った。眼を閉じたまま、彼女の顔は私の胸に埋まってきた。

境のカーテン一枚、桃色の布を片手で引きち切る様に開くと、真紅の洋布団もなまめかしいダブルベッドが、デンと大きく、そこにあった。

ドサリと投げ降す。二度三度、大きくパウンドして、真理子の体は真紅の洋布団のひだに沈んだ。

私は脱いだ。

縛った真理子を再び抱きかかえて、バスに歩を運ぶ。蠟涙の垂れた乳房を洗い、体を湯槽に沈め、縛った俵の真理子を、湯の中で強く抱擁しようとしている、自制心をなくした私が今ここにあった。

× × ×

私は実にみじめだった。逸る意馬心猿の衝動とはうらはらに、私の機能はこのプレイによって完全に昇華し尽していたに違いない。身を投げ出し、すべてを許す気でいた真理子の肌を手をやり乍ら、私の大脳神経は、私の心とは反対に、遠く遠くへと逃げていった。遂に私はあきらめた。いやあきらめざるを

得なかったのだ。

辛うじて乳房への奉仕で、真理子を恍惚の境地に遊ばせていた。ひしと私の首にまといつく白きかいなが、反って重苦しく感じられ始めて、私はそっと外した。

恍惚のあとにくる空白の飽和状態――。

真理子はこのうのと身を起した。その眸はなじる様にきびしかった。裏切りの代償をなじる強いまなざしであった。

私は糖尿病が恨めしかった。しかしそれは既定の事実ではないか。理性をなくした私自身、天に唾して我が身に澆ね返ってくる酬いに過ぎない。

こんなカタストロフを見るのなら、潔く紳士でいるべきであった。先程の口約束が重荷の負担となって、私の心にのしかかってきた。この若い娘は、不可解な、私の行為をどう思っていることであろうか。

「マリちゃんが欲しているのなら、山本一章に紹介してあげるよ」

卑屈な降服の詭弁であった。

「急に又どうなさったの？」

「いやね、どうも自信をなくしちゃって……」

「何の自信？」

私は苦笑。若い娘にこれ以上言えるもので

はないセックスの微妙な機微。知ってか知らずか彼女は不審の眉をひそめた俵、私の思索とは全然別の事を口にした。

「ああ、判った。辻村さん、矢ッ張り奥さんが怖いんでしょう」

おやおや、これはまあ、とんでもない飛躍である。しかしその弁たるや、当らずといえども遠からずである。私を信じて、プレイに對し、すべてを許容している妻に、若い娘に對して、一時的にもせよその気になったことは、妻に對する背信行為ではなかったであろうか。

「そうだよ、その通り。私はどうも女房に頭が上らなくて、いざとなるとやはり怖い」  
「でしよう。そうだと思いますわ。でないと、あの先程の行為の時、急におかしくなった原因が究明出来ないんですもの」

やはりこの娘は、私の異様に感じていたのだった。解釈は違ったが、その方が私も救われるというものだった。

激情は急降下にさめていった。バルドーに比しても、さしてヒケのとらぬ、偉大なるおっぱいの持主たる河森真理子も、そのおっぱいのポリュームを除けば、ごく平凡なプレイを好む一女性に過ぎない。しかし凡俗の人間



は往々にして、その一事に激しい執着を示し人生を狂わしてゆくものなのだ。

「又、逢って下さいますか？」

「さあ、そのつもりだけど——」

「いけず——。さっきは、あれ程仰有ったくせに……」

真理子は恨めしそうな顔になった。

「正直いって、病氣してからスタミナがないのだよ。SMのプレイ仲間には、私なんかより、もっともっと精力的で、素晴らしい人がいるよ。よければ紹介するからさ」

「さっきとは随分違いますのね。変だわ、辻村さん」

「いや御免よ。真理ちゃんのような、若い可愛い子を、女房や子供のある私が、一人で独占するなんて考えが、土台間違っていたんだよ。やはり私はいつもの持論たる、プレイはプレイで割切らねばいけないと思い直したんだ。唯、一時的にもせよ、真理ちゃんの余りの素晴らしいおっぱいのポリウムに、ついふらふらとなったんだけど、それというのも、或いは真理ちゃん自体のせいかも知れないよ」

陶醉のさめた真理子には、私の言葉が不明瞭乍ら理解出来たらしかった。

「でも、又会って下さるわね。私を嫌いになんたんじゃないでしょうね」

その眼は嘆願しているかのようであった。

「勿論だとも、会えば又ぞろ好きになって、さき程の様にフラフラッと何を言い出すかも知れないけど、会って欲しいのは私の方かも知れないよ」

会って、又その気になって、同一の悲哀をくり返す私かも知れない。そんな肉体の私自身、つくづく情なく思い乍らも、そう言わずにはおられない、プレイのあとの雰囲気であった。河森真理子は私の心の底の悲哀をおそらく知るよしもなかったに違いない若さであった。

× × ×

ホテルを出ると日は未だ高かった。灰色に曇った空に青さはなかった。

「この昼、まっすぐ堺へ帰るの？」

「私でしたら、今日一日中いいんです。夜になってもいるつもりでしたのですけど、辻村さんに御用がありでしたら、お別れして、まっすぐ帰りますわ」

「じゃあ、いっそ堺まで送ろうか。夕暮れ迄には堺につくと思うけど、電車の方がむしろ早い、南海電車は怖いよ」

真理子は私の冗談に軽く笑った。

「辻村さんにお願ひがあるのですけど、写真出来ましたら下さいませんか？」

「ああいいとも、送ろうか？」

「送ってもらって、見付かると困りますから出来たとお知らせ下さったら、どこへでもいただきにまいますわ」

私に会いたい一心の、真理子の策略であることはすぐ読めた。さりげなく、

「ああ、そうしよう。又、真理ちゃんに会えるものね。フォトは、どきりとするようなスゴイのを持ってゆくからね。自分自身の眼で恍惚の刹那をたしかめるといいよ」

真理子は私の二の腕を黙って抓った。

「その時は、逆吊りしてやろう、ヒイヒイ喚いて泣き叫んでも許してやらない。逆吊りの真理ちゃんをピンピンぶってやるから——」

真理子は私の露悪的な言葉を聞き流していた。そのくせ、彼女の右手は、ハンドルを握る私の左腕にしっかりとまきついてきた。「そうだ。久し振りに宿院の『ちくま』で、あついソバでも啜るとするかな」

御堂筋の街路樹も可憐な芽を吹き出している。その舗道を車の喧噪の渦に巻き込まれ乍ら、私は一路堺への国道へと辿っていった。





指先でつまんだカードに、ほんの少しの圧力を加えたただけなのに、タイム・レコーダーは、びっくりするほど派手な音を立て、余韻をいつまでも四囲へ響かせた。

二十一時三分——。二時間前までの喧噪がまるで嘘のように、もう、あたりは人気もなく静まりかえっているのだ。

守口順平は疲れ切ったような足どりで、正門脇の夜警詰所をチラと見て、宿直員に軽く手をあげながら工場を出た。とたんに、足の運びに元気がでた。精いっぱい全身を伸ばして、周囲の空気をみな胸の中に吸い込んでしまいたくなってくる。奇妙な心理動向だが、これもまた、しがないサラリーマンの生態の

偽ることのない一面なのかも知れない。ここしばらく順平には不愉快な日が続いている。J産業本社の資材係長である彼は、近づく中間決算を前にして、製作部の資材管理と在庫調整を命じられて毎日工場へ通っているのだ。

本社の事務机に坐っての仕事と異なり、現

恍

(こうこつ)

惚

保 藤 久 人



場での作業は、余剰資材や不当な購入単価の指摘などの監察を兼ねての職務なので、なかなか気骨が折れる。他人のアラ捜しをしているようで嫌なのだ。そのうえ、従業員の帰ったあとで、あらかじめ翌日分の帳簿に目を通しておく必要がある、いや応なく、無意味の残業を強いられた形になる。そんな状態がもう、一週間もつづいている。

それだけでなくいまは八月。盛夏もようやく峠を越したとはいえ、日中はうだるような熱気が地上を覆い尽している。暑気の中での根気のいる仕事は面白からうはずがない。

工場を出るなり、閉塞から解放されたように、涼味のある夜気に向かって大きく胸を張ってみせたのも、なるほどとうなずける。

けれども順平には、そのあとの自由な時間に対して、決められた目的があるわけではない。まっすぐに帰ったとて、独り者の彼を待っているのは、簡易アパートの殺風景な六帖と三帖の畳だけなのだ。今夜のように心の鬱鬱としていたときは、それを癒す良薬は、グイッと一杯やることである。そしてそのあとで、たちまち進むような強烈な刺激が欲しいと、これは、三十一歳の健かな肉体を持つ守口順平の、極く自然な生理的欲求なのだ。

がしかし、佗しいことだが、彼の真実の欲望は少々その質を異にしていたため、このところ三、四年間というものは実現の可能性もなく、索漠とした空転に終始していた。それが、去年の暮から、その成果は別としてなんとなく、少くともムードだけは、無意味な空回りでないような状態が芽生えつつあった。それは、はなはだ頼りなげなものだった。

しかし順平には、自分の心にもかない、同時に、なにかを望み得られるような気がしてならないのだ。

彼の足はためらうことなく勝手に動き、折良く来合わせたバスに飛び乗っていた。

× × ×

K市の夜の歓楽地帯は、電車通りと小さな川とのあいだの細長い区画内に集約されていて、群在するバーやクラブの実数は推量したいほど多く、小さな店もひしめいている。

2DKのアパートさながらに、建物ぐるみの集団もいくつもありBAR「F」もそのひとつなのだ。S会館と呼ばれていた。

三階建の堂々とした建物である。

地階と一階は会館の所有者が経営する喫茶店と遊戯場で、二、三階が貸し店のバー街になっていて全部で九軒ある。

「F」は二階の中央にあった。どの店も同じぐらいの広さで、止り木が四、五本並んでいて、ボックスが三つというささやかさである。

相似的に隣接して並び建っているので、きつと、客の争奪を巡って陰険な暗闘も繰り返されているのであろう。表廊下から見た感じではそれぞれに門灯に多彩な趣向をこらし、ドアの形や飾り窓など目立たぬ部分にまで、マダム連中の細心が行き渡り、内外の装飾に個性味のある変化を盛りあげ、その独特のムードで、客の気を引こうとする苦心のあとが見受けられる。その様相は、非情な現実社会の生存競争の実態を、如実に物語っている。

その中で、BAR「F」だけは異色的な存在だった。型破りの雰囲気（ふんいき）が充満していた。

守口順平が「F」を知ったのは去年の暮のことである。会社の大口の仕入先であるN商事がスポンサーになって催された忘年会が終ってから、N商事の若い社員に「感じのいい店があるから」と言って案内されたのだ。

「あの人がママさんの伊津子ですよ」

と、教えられたとき、不覚にも順平は、思わず胸を高鳴らせて頬を紅潮させていた。

彼の深奥に衝撃を与えつつ響き入るものを



「F」のマダムは、その全姿にみなぎらせていたのである。

その夜から、マダム伊津子の豊満な魅惑の肢体は、順平の網膜に灼きついて離れなくなり、自然に、足繁く通うようになった。

そして馴染んでいくうちに、「F」にはマダムの魅力とは別に、顧客とのあいだに奇妙に暖か味のある交流があり、それが、特有のムードを醸し出しているのを感じ取った。

すっかり親しくなった三月上旬のある日。

「守口さん。あなた大根おろしおきらい？」

ふいに伊津子はそんなことを言った。

「もし、おいやじゃなかったなら——」

彼女は自分で、大根を下し金で搗り、その中へ赤いスケソダラの子をほぐしてまぶし、白く柔かいジャコを混ぜ、酢や酒などを薬味に注いでその上にノリを散らせて、あきれたように見守っている順平の前にそっと出す。

そして、口に入れて意外な味の良さにキョトンとしている彼の表情を、楽しそうに見て「お味はいかが？　まずいかしら」

と、小首をかしげて笑っているのだ。

大根おろしの味覚よりも、順平は伊津子の仕種に圧倒された。鮮烈な艶があり、しかも動作が優美であった。彼は呆然として伊津子

を仰ぎ見たまま、しばらくは言葉を失っていた。胸にかすかな疼きをおぼえた。

この瞬間に彼の心魂は、決定的に伊津子に魅了されたと言ってもいいだろう。

相手の視線を意識し、それにみずからの自意識が加わり、緊張と狼狽とで指先までが震える。彼は、自分の感情の動きを、しゃべることによって隠蔽しようと努力する。

「これはうまい！　独り暮らしのぼくなんかには、こういうのがなによりのご馳走ですよ」

「——でしよう、ね」

伊津子はいかにも楽しそうな様子なのだ。

さらに日が経るにしたがって、親密の度合いが増していくように、順平には思えた。

ひとりよがりかも知れないが、伊津子の挙動のうちには、自分に対して、とくに好意的な暖かさがあるように思えてならないのだ。

「ご飯はいかが？」と品よくしなわせた手の甲に、可愛いエクボを隠見させつつ、器用に小さく握ってノリ巻にして出したりする。

「おミソ汁には、このおミソが一番なのよ」

と湯気立って香り高く匂う朱塗りのお椀をそっと置くこともある。

調理も味付けも巧みであった。

なによりも、眼の前での手料理なので、食

べる側の心理に、彼女の温厚な人柄が、微妙な感情の綾を織り込んで働きかけてくる。

度重なるうちに順平の心は、伊津子の手料理を待つ間を、楽しむようになっていった。

「お客にこんなサービスをして、これじゃ、家庭を思い出させることになるのじゃないのかな。亭主族というものは、奥さんや子供を意識して野放図に飲めなくなってしまう」

このような危惧は順平でなくとも抱くことだろう。家庭的な味覚は男心を、哀歎のうちに誘い込む要素が強いもののように思える。

「それでもよろしいの。でもね、本当はそうでもないらしいわよ。遊びだと、はっきり割り切っていらいわゆるおかたは別だけど、もともと殿方というのは、我儘で贅沢なものなのよね。我が家では味わうことのできぬ色艶のある頹廢的なムードの中に、ちよっぴりと家庭の香りがにじんでいるという、そういう雰囲気の方が落ち着いて愉しく過せるのですって。うちのお馴染みさんは、皆さんそう言って喜んで下さいますのよ。うちが曲りなりにやってゆけるのも、きっと、そのお蔭だと思っています」

「ぼくにはまだ自分の家庭というものが無いのでよくわからないが、そういうものなのか



な。しかしねママさん。ぼくを感じではお客は皆、ママさんが目当だと思う。ママさんは男の理想像のような、昼と夜との、女性のふたつの形態をうまい具合に使いわけているんだもの。そこんところが最大の魅力なんだな」

伊津子の答えは、オッホッホという明快な笑い声だった。だが彼は、自分の言葉が決して的外れではないはずだと心の中で確信していた。そして、日とともにますます激しく燃えさかってくる伊津子への恋情と、偏向し尽している自己の性情との相剋<sup>そうこく</sup>に思い惑<sup>おび</sup>い怯えながらも、「F」の中に満ちみちている、肌に触れてくる暖かい気配に一縷<sup>る</sup>の望みを託して、憩<sup>い</sup>いを求めて通いつづけた。

BAR「F」は、そういう店であった。

× × ×

守口順平が「F」のマダム伊津子に惹かれたのは、彼の内部に潜んでいる性情によってだといえる。一目見て心がふるえた。並び立ったとき、彼女の全身から発散する豊満な充実味を、快い圧迫感だと直感的に皮膚で感知し、その自覚で、たちまち悪感<sup>おかん</sup>じみた戦慄<sup>せんりつ</sup>を意識し、激しい興奮を感じたものだ。

だが、この彼の心機や感覚は、他人に、とくに当の相手の伊津子には、決して知られた

くない秘めやかなもので、彼の、人間としての最大の恥部にも相当するものであった。

きょうの日まで独身でいるのも彼なりに理由があったのである。

生来女性が好きであった。過去の若い日の行状は奔放に明け暮れ、接した女性の数は人並以上の多さだったかも知れない。

それが、ある日を境にして、性的嗜好<sup>しこう</sup>が極端に偏好し、性情もまた激変したのだ。その変質ぶりには彼自身、自分のことなのに納得できず、かなりの期間、我が心に問うて訝<sup>いふか</sup>りつづけたものだが、その根源を探ぐりつづければ、女体への口づけだったようである。

そのとき、彼は、その女の芳醇<sup>ほうじゆん</sup>に酔<sup>よ</sup>い痴<sup>し</sup>れてあえいだ。女は、狂乱したのかと、彼が怯えるほど荒れた。彼の全身は逆さまになり、息苦しさには彼はもたえた。そして、もたえの中で、この女には、蛸<sup>たこ</sup>のように骨がないのかと、彼は思った。

脂肪の塊りの圧迫の底でうめきながら、彼は刹那に生きる、本能動物となり果てて集中し、豊満な肉の重量に溺れた。

女の悦びはきわめて赤裸だった。

それを探知し得たことで彼の情念はたぎりたち、いまにも昇天しそうだった。女体に対

してのま新しい自覚であり、彼は、女の雄壮な威圧に感激し、忘我の中で悦楽を覚えた。

守口順平が、真実に「女」を愛し得たと、実感でもって自己の内面に対向できたのは、この一事からだったといえよう。だがその事

実は、哀感のともなう佻<sup>てい</sup>しく切ない自覚であり、知り覚えた異端の感応は麻薬に似て常に激烈な情意とともに、潤沢<sup>わくたき</sup>への感溺<sup>かんじつ</sup>を求め、その圧伏をも、さらに強大をと希うのだ。

学生時代バスケット部に在籍したぐらいなので、身長もあり腕力もある。その彼を制圧し得る豊身の所有者となると数は稀だった。

しだいに彼は、自分の体格の良さを呪いたいほど、心理的に、せっぱ詰ったところまで追い込まれていった。

だが、健康な彼の肉体は、常に圧伏を欲して躍動し血潮も騒ぐ。が、その闘技のときどきに、灼熱<sup>しやくねつ</sup>と化しての悦びは少なくなり、その不充足感はい知れぬ空虚と焦慮を招き、人間的な悲哀と痛恨を深く心に刻みつけねばならなかった。

自然に、彼の内部には、充足への理想体形が創造され、急速に大きく育っていった。

その形態は彼自身の本能が自得し、真実の感覚で探知したものの集大成ともいえる。



理想への想念は憧憬心理となり、憧れは非現実の空しさに耐えかねて幻覚を生み出す。

強靱な豊肢の重圧下であえぎ乱れて、呼吸を奪われて苦悶しつつも、わずかな隙間からいま、水中よりようやく浮きあがり、希薄な空気を貪<sup>むさ</sup>ぶるかのよう、パクパクと口唇をふるわす自分の姿態を想起すると、その思いだけで、恍惚<sup>こうこつ</sup>として甘美とも陶酔ともつかぬ異様な快感が熱線となり、身内を縦貫するのをおぼえるのだ。その幻想は驚異であり恐怖だった。

異常な、倒錯<sup>とうさく</sup>した性だと知った。

男にあるまじき羞恥の欲求だと思った。

アブな性を知識の上では肯定し、現実、おのれの「異常」さに懊惱<sup>おうのう</sup>する人々の存在することを知りながらも、自分自身の真実としては認めたくないのだ。

自分だけが変異なのだと言情を嫌悪し、できることなら偏向を復元したいと念願したもののだが、あらゆる努力も徒勞にすぎず、異形化した彼の性を慰め得るのは、柔軟な肢体の圧力と、女体へ口づけることだけであった。

BAR「F」のマダム伊津子は、グラマーな肢体をいつも和服の中に秘めていて、順平の知る限りではもっとも好ましい女なのだ。

一体に、夜働く女性たちは、男相手という職業上の体験によるためか、自分の個性的な美点を知ったうえで生かすことが巧みで、だれでもどこかに、男心を魅惑する要素を漂わせている。もちろん、十人並以上の容姿を兼ね備えて、自負し誇示する人も多い。

しかし、順平の見た伊津子は、それらの要点に、さらにアルファが加わるのだ。

大柄なせいか、立居振舞いがゆったりとしてこせこせすることなく、その落着きの中にしっとりとした気品がある。優雅だった。

なかなかのやり手だと言う、仲間うちの妬<sup>ねた</sup>み混じりの風評を他に良客の固定しているのも、彼女の人柄を物語っているといえる。

裸になれば、瞠目<sup>どうもく</sup>して思わず嘆息を漏らすに違いないと想像できる、肉感的な豊かな体だが、着細りするたちなのか、和服を巧みに着こなし、なにを着てもスラリと長身に見えて良く似合う不思議な女性だった。

歳は二十八、九だろうと順平は推測した。

伊津子の容姿の中で、もっとも目につくのは顔である。柄の割りに顔容が小さいのだ。

下<sup>しも</sup>ぶくれで、顎<sup>あご</sup>の先だけが可愛いく丸くわがっている。あまり広くない額<sup>ひたい</sup>には、髪がゆるく掛<sup>か</sup>っていることが多く、なおのこと、小

さな顔に見え、ふと見ると、三角形の大きなおむすびが首の上に据えてある具合だった。

髪の毛はかなり長いらしい。それをカットもせず、無造作に束ねて纏<sup>まと</sup>めている。それだけで髪型が整っているのも奇妙な感じだ。

眼は大きくないが切れ長で威力がある。

筋は通っているが鼻は小さく、鼻翼だけが威<sup>い</sup>ばるように張<sup>は</sup>っていてその下には、それだけが別物のように、セクシーな感じの、腫<sup>は</sup>れているのかと思える唇が、妖<sup>あや</sup>しくヌメヌメと潤<sup>うる</sup>おって、鮮やかな色で重なっていた。

バーのマダムという職業に加えて、美貌であり人気もある。すでに特定の、あるいは不特定多数の「男」が介在しているだろうということは容易に推察できたし、実際に、ホステスたちの口裏から察して、その推測に、ほぼ間違いないと承知してからも、順平は奇蹟<sup>きせき</sup>と僥<sup>きよう</sup>倖<sup>こう</sup>を夢見て、なろうことなら、不特定員数内に加えてもらいたいものだと思っていたのである。マダム伊津子は順平にとって、それほど意義の深い女性であった。

× × ×

ドアを押して中をのぞくと客はだれもない。伊津子と、ホステスの里絵が、カウンタ―を挟んでひそひそとしゃべっている。



「あら、モリさん。いらっしやい！」

ふたり揃って愛想のいい笑顔で迎える。  
無聊ぶりようを持てあましていたのだろう。

「珍らしいね。だれもいないなんて」

順平は、急いで止り木から降りようとする  
里絵を制して隣りに坐った。

「今夜は暇なのよ。宵の口に少したてこんだ  
だけ。早仕舞いにしようと、相談中ですの」

「だって、まだ——」

早いじゃないか、というふうに、順平はチ  
ラと腕時計をのぞいてみせた。

「BAR『F』にもこんな日があるのか。よ  
く覚えておこう。なあサトちゃん。こういう  
時でないと、ゆっくりきみを口説くどけない」

「そのようね。今夜はいい具合だから、腕に  
ヨリをかけて、やってごらんになったらいか  
が？ あたしはモリさんのお腕前のほどを、  
とっくりと、拝見させていただきますわ」

「また、ママさんは、そんな意地悪を言う」

「あら、意地悪とは心外だわ。あたし、モ  
リさんに応援するつもりよ。サトちゃん、彼  
氏にタツプリとサービスしてあげてよね。な  
んだったら、あたしは遠慮しようか。ふ  
たりでしっぽり、なんて、粋粋じゃない」

「いやだあ、ママさん。だって、この彼氏、

エッチなんだもの」

「ぼくがエッチだって？ どうして——？」

「エッチだわ。ほんとよ」

里絵はクスクス笑いながら、これでいいの  
ね、という仕種しぐさでビールとコップを手にして  
自分から先に、ボックスに坐った。

「ママさん。ぼく、本当にエッチなの？」

「そうね。そうかも知れなくてよ」

伊津子もまた意味有りげに含み笑う。

冷静を装まおい、Hエッチの発音を、努めて抵抗な  
く口にするように心掛けている順平だが、今  
夜のふたりの様子には、なにかがあるような  
気がしてならない。できることなら避けたい  
話題なのだ。それでなくともここへくる度に

伊津子の肢体が眼に眩まはしいのだ。

「でもねサトちゃん。少しはエッチな男性の  
ほうが女にとっては素敵なのよ。親切だし、  
大事にして下さるし——。もっとも、エッチ  
にもよりけりで、恐いのもあるけれど。モリ  
さんは大丈夫よ。安全度は高い——」

伊津子は今度は、声に出して明るく笑う。

「ママさんは、そんなことがわかるの？」

「そりゃね。こんな商売しょうばいだもの。ウフフ」

「かなわないな、ママさんには。しかしママ  
さん、ぼくは自称フェミニストなんだよ」

「そうよね。それはひとめて差しあげます」

ふと見ると伊津子の切れ長の眼は、じっと  
彼を見つめている。光線の加減で、瞳孔がキ  
ラリと輝く。順平は身内がすくみ、たちまち  
自分の顔に血が上って行くのがわかる。

相手のうち心を洞察しんさつする靈妙な力が、伊津  
子の瞳には秘められていたのかと狼狽し、そ  
の自意識で、彼の心はキュッと萎縮する。

「サトちゃん、今夜は公認だよ。いいかい」

「どうぞ、どうぞ。だって私、守口さんのこ  
と、きらいじゃないんだもの」

それが本気なのか、それとも商売意識に徹  
しようとするのか、里絵は彼に寄り掛かる。

「ほんとよ、モリさん——」

彼のために、またなにか手料理を作ってい  
るらしい伊津子が、ふと顔をあげて言う。

「サトちゃんは可愛いくて純情でしょ。だか  
ら、お客さんの中には、好きで好きで頭から  
モリモリッとかぶりつきたいって言うかたが  
あるのよ。食べられちゃたまらないけど——  
でも不思議だわ。モリさんみたいな男性がな  
ぜ、いつまでも独ひとりでいるのかしら？。サト

ちゃんは、いつもそう言っているのよ」

「いやッ。ママさん。私、羞はづかしい！」

「どうも妙な具合だ。まあいいや。こうし



でもいいのかな。ぼくは本気になるよ」

順平は里絵の手をとった。小柄な体にふさわしく小さいが、ふっくらとしていて柔かく撫でると感触がいい。肩に手を掛け引き寄せた薄着の下肉体は、押すと反抗するかのようには跳ね、瑞々しい弾力が充滿している。

クスツと里絵の鼻が鳴った。彼女の声はいつも鼻にかかっている。順平は、その声の中に、甘美と哀感が包含されているようで好きだった。加えて彼女は見るからに愛らしい。

それが「F」の、と言うより、伊津子の方針らしいのだが、里絵も、それにもうひとり、きょうは休みなのか顔の見えない初代という娘も、ホステスには似合ね清新な初々しさをみなぎらせていて、客たちは、彼女らの豊かな清純味を愛おしんでいるのだ。

彼女たちは、ほの暗い店内の特有の雰囲気（ふんいき）に合わせて幾分濃い目の化粧をしているが、メーカーアップ的なけばけばしい嫌味はなく、服もワンピースまがいのドレスを着ている。夜の蝶らしい部分といえば、襟元のカットの深さと、剥き出しの丸い肩ぐらいたろう。

順平は里絵がきらいではない。ときには、抱き締めたいと思うこともある。しかし、そのときときには、自然に伊津子を意識して、

どうしても積極的にはなれない。

里絵はいま、抱き寄せられて体を斜めにくずしたまま、淡い笑みを浮かべている。

深沈として、なにかを秘めたたえているような円らな瞳は潤み、その表情はコケティッシュで、男の心を掴み出すほどの妖艶さが、楚々とした容姿の中に溶け入って同居している。額の髪の毛の生え際と、やや上向き気味の愛らしい鼻の頭に、かすかに汗が滲んでいる。

それらはみな、まだあどけなさをとどめている里絵の魅力のすべてであり、効果的に、相手の心理に、微妙に作用し働きかけてくるのだ。順平は、自分の動作にかなりな抵抗をおぼえながらも、自然に力をこめてゆく。

「ママさん失礼。ちょっと後ろを向いてて」

「はいはい。これでよろしいかしら——」

唇が合わさったとき、閉ざされた里絵の瞳（まぶた）はかすかにおののき、睫毛が、可憐にしなしなと揺れた。里絵は、自分から与えるように舌を滑り込ませてくる。順平はとまどった。表面の激しい情欲とは逆に、心は後退しはじめている。戯れるだけで里絵から離れた。

× × ×

冗談だとはかり思っていたのに

「じゃあたし、ちょっと出てきますから」

と言って、伊津子が不必要な照明を消しはじめたのは、しばらくしてからである。

「あらッ。私ひとりではいやだわママさん」  
「なに言っているのよ。モリさんとふたりで仲良くしていればいいのよ」

伊津子は里絵を睨む真似をしてたしなめ「ドアには鍵を掛けておきます。モリさん、あとはよろしくね」

と、意味のある微笑をふたりに投げ掛けて本当に店を出て行った。

「今夜のママは少し変よ。どうかしてるわ」  
「そうだな。どうしたんだろう」

言いながら順平は別のことを考えていた。△気をきかせてくれたつもりなら、見当違いだよママ。さっきのキスがまずかった▽

と、心の中でつぶやいていた。

「サトちゃん、ここへ来てお坐りよ」

順平は自分の前を指差した。テーブルの上である。里絵はクククと含み笑った。

「いやだわ。また悪い癖がはじまったのね」  
「まだ、なにもしていないじゃないか」

「でも、心の中ではエッチなことを考えているのでしょ。いやらしいわ」

「どうして、ぼくがエッチなんだい？」

「言うことがエッチなのよ」



「ぼく、そんなこと言ったかしら？ 一体、エッチで、なんのことだい？」

「アラ、そう言えば、ね。おかしいわ」

「チェッ。わからずに言ってるんだな」

「でも、やっぱりエッチよ」

「どうして——？」

「ママさんがときどき言うわ。ママさんは、エッチのことよく知っているらしいわ」

言ってから里絵は、あわてて口を覆った。

キョロキョロとして、内証よ、と言う。

「ママさんが……本当かい？」

順平の内部に巢喰<sup>すく</sup>っている異質の血潮が急速にふくれあがり、荒々しくなってくる。

いまにも噴流する勢いで奮い立ってくる。

彼は異形へのざわめきを恐れ、感情を紛らわそうとして、前に坐った里絵の膝小僧にそ

っと手を置いた。反射的に里絵は動いた。

里絵は無言だ。だが、緊張しているらしく

脚筋は硬直し、表情にも真剣さがあった。

里絵の緊迫感をやわらげようと、順平は、

彼女を見上げて笑って見せた。

「エッチって、ママさんのこれのこと？」

おや指を示すと、里絵は小さくうなずく。

「どんな人なの？ ここへくるの？」

里絵は首を左右に振って答えない。なにを

訊いても、「知らない」「わからない」の一点張りなのだ。口止めされているらしい。

「じゃ、なにもわかっていないじゃないの」

膝頭の上に置いた手に、女の体の微細な振動が伝わってくる。快い受感覚だ。

そっと手を上のほうに滑らせると、肌はか

すかに汗ばんでひいやりとしていた。が、なめらかな潤いだ。顔を寄せると女が匂う。

その香りに、彼の五官は急激に目覚める。

無我のうちに、首をねじり、ところきらわ

ず唇をすりつけた。里絵の汗の味がした。

彼の舌は甘酸<sup>あまじ</sup>っぱいと堪能<sup>たんのう</sup>して感覚に伝達する。と、心が内応して快美感覚に結びつ

うとし、唇はさらに求めようとする。

きゅうと女の体が縮んだ。そして緩<sup>ゆる</sup>んだ。

「こう……するんでしょ」

かすれた低い声とともに膝がグツと上って来た。ふと見ると、里絵は青ざめた堅い表情

で、瞳だけをキラキラ光らせ見下している。

「よく、知っているじゃないか——」

彼は、上ずったあえぎ声を出した。

せり上った里絵の膝の下は、ドレスの後ろの裾<sup>すそ</sup>が垂れて大きく口をあけた袋のようである。それは、誠に強烈きわまる誘惑だ。彼は

睨みつけた。——瞼を閉じた。

彼の内部では、荒々しい欲求と、静かな理性とが、火花を散らせて相争っているのだ。

だが息する度に女の香りが鼻をこそぐる。

「ぼくのこんなことをどうして知ったの？」

彼は、苦しそうに顔をしわめて言った。

クスツと、里絵の鼻が鳴った。声はなかつ

た。が、いくらか気持に余裕がでたのか、表情は和み美しく上気して映えていた。

「どうして……」

声とともに首が耐えきれぬように伸びた。

柔軟な白柱が、左右から、がっちりと彼をとらえた。ゆるゆると動く。そしてしだいに捕捉<sup>はそく</sup>したものを締め上げてゆく。

「ご自分でおっしゃったじゃないの。真剣だったわ。あんなに熱心だったのに、もうお忘

れなの。あきれたかた。あれは嘘だったの」

彼は里絵の言葉に愕然として、猛然と力をふるい、相手を突きつけて立ち上っていた。

里絵は茫<sup>ぼう</sup>として、彼の苦悶の表情を見た。

「いつの話だ！ きみも聞いたのかい？」

「ええ、拝聴しました。このあいだの晩よ」

△この店で、女たちの前で、おれは、自分で自分の恥を曝<sup>さら</sup>け出してしまったのか！▽

おのれの愚かさへの嫌悪よりも、人間性の恥部として秘めてきたことを知られたという



意識は、もはや、恐怖といってもいい。

「おれの顔色はいま、死人のようだろうな」  
ぼんやりと、そんなことを思った。

「——ぼくは、なにをしゃべったのだろう」  
「いろいろなことを、よ」

里絵は、成り行きとはいいいながら、ママの口止めを破ったことを後悔しはじめている。

あまりにも激しい順平の懊惱おのうまを眼のあたりにして、自分の軽率さに消沈としていた。

「ごめんなさい、守口さん。悪気じゃなかったのです。あなたのお好きなことなら私！」

彼女はその後、どんなことでも、と言いつづけて、いじわるな順平に怒鳴った。が、順平は怒鳴った。

「やめろッ。ああ、もうやめてくれないか」  
語尾は哀願に似ていた。

「とうとう、全部知られてしまった」  
しばらくして彼は、ボソッと云った。

「そうよ。ママさんと私は、守口さんのことをなにからなまでに、みんな知りましたの」

彼は動物のような奇怪な声で唸った。  
里絵は、男の泣き出しそうな歪ゆがんだ顔を、

痛々しそうに眺め、再び彼の前に、腰を下した。

順平は膝頭に顔を埋めていった。里絵は、

ドレスの裾で彼を覆った。

優しい仕種しぐさだ。そして、この人は泣いてい

るわ、と肌で感じ取っていた。  
「絶対に知られてはならない羞恥をしゃべる

なんて、そんなに酔ったのか順平のバカッ」  
彼はみずから罵倒ばとうしつつも、まだ未練らしく、その夜のことを悔んでいた。

もう、どうしようもないと自覚しながら。

× × ×

守口順平が工場へ通い出してから三日目のその日は、一日中不愉快なことがつづいた。

前夜、目を通して不審と気づいた仕入単価について、工場の資材係長に問い糺ただした。

「そのことなら本社で諒承済みですが——」  
担当係長の山口は、困惑した表情で言う。

「しかし山口さん。これの単価は四十二円か三円。材費昂騰の場合だけはとくに四十五円

と決めてあるのをあなたもご存じでしょう。それなのに五十七円とはどういうことです。

こんなペラボウな値段はありませんよ」  
「私に言ってもらっても困ります。大部以前

に、秋本課長の指示があったのですよ」  
気色ばんで激しい口調で言う順平に向かっ

て、山口は、鼻白んだ様子で言い返すのだ。  
山口はもう五十に近く、係長の役職も順平

よりずっと古い。が、同じ役職でも本社と工場では格が違う。それを意識すると相手が若いので、なおのこと面白くないのであろう。

順平の上役である秋本課長の名を押し出し

「見積り書も本社へ回してあるのに守口さんがご存じないとは、これはおかしいですね」

いまいましてに歯がみしながらも、順平は言葉が出ない。見積り書を知らなかったとは

職責上、言うこともできない。  
「秋本の奴めッ」と無性に腹が立ってくる。

秋本課長は「産業の重役の縁続きなのだ。本来なら今度の順平の仕事は、当然秋本が

やる立場だった。それを、とかくの噂のある秋本を避け、硬骨漢と風評高い順平に代理さ

せたのは幹部の賢明な方策ではあったが、結果的には、課長の立場での判断が物を言う。

「秋本の奴め。いまごろは——」  
「本社でゆつたりと坐って、ほくそ笑んでいる男の姿を思

うと、グッと怒りがこみあげてくる。  
材料資材。工程部品と消耗部品。不当単価

の目立つのはN商事が圧倒して多い。その背後には良からぬ収賄しゅうわいもありそうな気がする。

「こいつもきつと、同じ穴のムジナだろう」  
と、彼はうすら笑う山口を睨みつけた。



「原材費の値上りにつれて下請業者も苦しいらしく、皆、値上げを要求していますよ」

「わかっています。ぼくはそのためN商事の安い材料を使用するようにと、各下請業者に取り計ったのです。その安いはずのN商事が、まわしで六円も値上げするとは——」

帳簿を山口に突きつけて順平は、N商事の社長の、煮ても焼いても食えそうもない世故<sup>せこ</sup>たけた図々<sup>ずず</sup>しい面つきと、歳に似合わぬ精力的な体軀を脳裏に浮かべ、ぶん殴ってやりたくなってくるのだ。

「守口さん。私におっしゃってもそれは無理というものです。皆、秋本さんの指示です」山口は冷笑さえ浮かべて、いきり立つ彼を軽くあしらう。無念だが山口の言う通りなのだ。順平がいくら息巻いても無駄であった。

部品の在庫も多い。その余剰資材を指摘して在庫数の削減をやかましく言うぐらいしか順平には施す術<sup>すべ</sup>はないのだ。一応本社に電話して、難詰<sup>なんきつ</sup>口調で秋本に申し立てたが、

「きみが知らないとは、どういうことだい」と、逆に突ッ込まれ、くやしさに、思わず受話機を叩きつけるように置いていた。

終日、気の滅入<sup>めいれい</sup>るような日だった。やり場のない憤りの吐け場所を順平は求め

た。BAR "F" には疵<sup>きず</sup>ついた人の心を癒すことのできる暖かさがあるのだ。

日ごろになくストレートで重ねて飲んだ。

聞いてくれママさん、と、しゃべりはじめた。愚痴<sup>ふち</sup>じみた憤懣<sup>ふんまん</sup>を慨嘆<sup>がいたん</sup>にこめて、相手に伝えようとしたのまでは、たしかな記憶として頭の中に残っている。が、それ以後はプツと糸が切れたようになんの覚えもなく、翌朝、彼は見知らぬ宿でひとり目覚めたのだ。

正体を失うほど泥酔したのは事実らしく、音が響きつづけるように二日酔いの頭が痛んだ。彼の深酒は、不正臭い事実<sup>じじつ</sup>に直面しながらも、どうにもできなかった自分の非力<sup>ひりき</sup>に對しての、煩悶<sup>はんもん</sup>と憤激<sup>ふんげき</sup>ではあったが、部外者<sup>ぶがいしや</sup>、とくに歓楽<sup>かんらく</sup>の巷<sup>ちやうまち</sup>で、女たちを前にして口にするべき事柄<sup>じぎやう</sup>ではなかった。

順平は後悔とともにおのれを嫌悪して恥じその日の夜 "F" を訪れ、伊津子に詫<sup>わづ</sup>びたものだ。伊津子は軽く聞き流すようにして微笑<sup>えいごう</sup>んだだけだった。が、いま思いみると、そのとき里絵の姿は見えなかった——。

彼の口は、彼の意識しないうちに、自分の心の中を洗いざらいしゃべってしまったらしいのだ。思っただけで、恥辱<sup>ちじよく</sup>のきわみだ。

恐怖<sup>こふ</sup>じみた冷たい戦慄<sup>せんりつ</sup>が何度も背筋を貫ぬ

いたあとは、羞恥<sup>しうち</sup>の塊<sup>かたまり</sup>りが、ものすごい勢いで衝<sup>つ</sup>き上げてくる。カッカと血がのぼり、充血<sup>くわくしやう</sup>で頭がグラグラとする。

順平の顔の火照<sup>ほて</sup>りを里絵は肌で感じた。体をもみたててずらそうとするのだが、動作<sup>どうさく</sup>のわりに後退<sup>こうたい</sup>しない。

羞ずかしいわ、と、彼女は思っていた。

羞恥感<sup>しうちかん</sup>は順平のほうが激烈<sup>げきれつ</sup>なのだ。あさましく情ないと自分の性<sup>さが</sup>に反吐<sup>へんど</sup>したい思いだがそれを意識するとかえって、恐れや恥や屈辱<sup>くつじよく</sup>感<sup>かん</sup>以上に、妖<sup>あや</sup>しい情念<sup>じやうねん</sup>が吹き荒<sup>すさ</sup>ぶのだ。

そして、その果てに、彼の念力<sup>ねんりき</sup>ともいえる幻覚<sup>げんかく</sup>は、現実<sup>げんじつ</sup>の里絵の、小柄<sup>せうぺい</sup>で可憐<sup>これん</sup>な肢<sup>あし</sup>体を行為<sup>こうゐ</sup>とは別に拒否<sup>きよひ</sup>しつつづけているのだ。

彼が真に求めているのは伊津子であった。

× × ×

「もう、よししょうよ。ね」

小さくつぶやいて里絵は順平を制した。

八里絵はみな知っている！ 激しい自己嫌悪<sup>じこけんあく</sup>と悲痛感<sup>びつこうかん</sup>だけが、順平の心を操<sup>あやつ</sup>っていた。

羞ずかしさですぐには顔をあげられず、里絵を正視<sup>せいし</sup>するなど到底不可能<sup>とていふげん</sup>なことだった。

「きみは、ぼくを軽蔑<sup>けいべつ</sup>する？」

「ううん。でも、正直<sup>こっけい</sup>に言うとき少し滑稽<sup>こっけい</sup>よ」

「おかしかったら、笑ったっていいよ」



順平は自嘲的に、吐き捨てるように言う。  
ようやく頭を起して里絵を仰いだ。

里絵は、深い瞳で見下している。その目色には哀調があり、なにかを訴え、語りかけようとする気配が感じられたが、憐憫の情もまた隠し切れず、その憐みには、蔑すみの心が隣居しているように、順平は感じた。

「バカ奴ッ」Vと思う。その怒気と悔恨は里絵に対してではない。おのれに向かってツバしたくなってくるのだ。

「どうともなれ！」V諦観ではなかった。限らない、人間的な悲愁がつきまとっている。

「いっそのこと、もっともつとVそう意識すると、かえって不逞な欲望が、ある意図をふくめて頭をもたげてくる。実際に、当面している激しい羞恥感を糊塗するのには、徹することが最善の療法なのかも知れない。

順平は真剣に、そのことを思った。いきなり里絵の膝に手を掛けて、力をこめた。

「なにすんのよ！」

悲鳴に似た声で非難を浴せてあらがう里絵にかまわず、順平は、女の脚を肩になった形になっていた。

「どうしても、そんなことを——」

震えをおびた声はかすれて悲しんでいる。

彼は首を動かして、になった脚に唇を寄せ  
る。

「アッ、いやだア。よしてッ」

里絵はくすぐったさに激しく身をもむ。  
下体がくねり、脚が小刻みに動いた。

その動きにつれて、顔全体に、熱い弾みの圧迫が加わる。強い耳鳴りが頭芯に響き入ってくる。だがそこには、順平の心を揺がす甘美があり、恍惚へといざなう、微妙に作用する要素が確在するのだ。

彼は陶然として、しばしは心もなかった。

クククッと、しのび笑いを漏らしつづけていた里絵は、突如、哄笑を室内に響かせた。

「うっとりとしたそのお顔。ほんとにあなたってエッチなのね。はい！ そのままで大きく深呼吸をして——。アア、ご自分で言うっておきながらもうお忘れなの？ そうそう、そうよ。もっと首を真ッすぐに伸ばして——」

意外に肉付きのよい脚が悪戯者となり、かなり激しくバタバタと交互に動きはじめた。

豹変した相手の態度に、彼は驚愕の瞳を見張って頭上を仰いだ。

里絵は寸前とはうって変わり、まるで、奇態な生きものの、その正体を見きわめようとするかのような、尖った鋭い視線を、彼に向

かって射当てている。

好奇心を露骨にした凝視だ。瞳孔はまん丸く開いている。その表情は容貌が可憐なのでかえって異様で、雌猫の残忍さを思わせる。

順平の五官は肅として縮み、そのあと、にわかには大きくふくれ上ってゆく。

「もうよそう。本当は羞ずかしいのだよ」  
極度に燃え、たぎり立とうとするおのれの異常の血潮に恐怖して、順平は言った。

女の膝から離れ体を起そうとした。

「中途で止めるなんて卑怯よ。ママさんが気をきかしてくれた良い機会だもの、あなたの言葉が真実かどうか、私は自分で、その実態を見とどけてあげます」

里絵は奇妙な優越感に浸りはじめていた。一人前の立派な男が、自分の前に跪いている。女の自分にも征圧できる男がいた。信じられないことだが正しく現実の事象なのだ。

好奇と興味が激しく琴線に触れてくる。

「この人の心身への私の影響と存在価値は、一体、どのくらいのものかしらVと、それは不逞な心ではあるが、一種の女性本来のプライドであり、虚栄心がその心理に油を注ぐ。

里絵は、順平の奇怪な性向に侮蔑と嫌悪を抱き、彼の行為を人倫に悖る破廉恥なものと



## 女性写真モデル募集

○本誌では、更に内容の充実を計るため、広く写真撮影に応ずることの出来る女性のモデルを募集いたします。

○本誌愛読の女性の方でしたら、年令、遠近は問いません。誌上発表の可否については十分御希望を考慮いたします。又、助手介添え或はプレイのみの出演御希望の方も一応御照会して下さい。

○出演又は参加御希望の方は、年令、略歴記載の上、編集部宛お申込み下さい。報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○出演並に参加報酬については、十分期待に添うよう考慮いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

△奇々編集部△

おび  
怯えながらも、相手に対する自分の本当の感情は別種で、愛ともいえるものであることを自覚している。それゆえになおさら佯しい。先ほどから彼女は、突きささってくる熱い感覚を、深奥に意識していた。錯覚である。なのに、奇体にもそれだけで心が震えた。三度四度、ケイレンにも似た身ぶるいが出

た。無意識のうちのおののきだった。その戦慄は、未知に直面しての本能的な恐怖によるものか、それとも、冒険じみた行動への自覚から発した武者ぶるいだったのか――。

突然的に、彼女の心機を制御して襲った矯激な感情の波紋は、衝動に似た動作を誘発し凝然としている男の前に聳えて立った。

たおやかな指が尖刀となつて男の眉間を指差した。紅唇から峻厳な語句が飛んで出た。

「エッチだと自認していたこのあいだの話は嘘だったの？ 出鯛目の、女を誑かすための面白おかしい話術だったの？ そうじゃないでしょ。あなたは本当にエッチよ。それならそれらしくそこへお坐りなさい」

茫然として意志を忘失したように座席に腰を下した順平の体を、里絵は靴を履いたまま飛び乗って跨いだ。

順平の驚愕の表情は、華麗に翻った服の裾によって幽閉された。一瞬、闇となったそのあたりは幻想の魔界だった。異形の囀いうちは甘酸っぱく、汗と脂と、あらゆる生々しい女の香りが充満して、熱く重く蒸れていた。△あの、淳朴で清楚な感じの里絵が、どうして急に、こんなふう――△愛くるしい乙女の突然変異に仰天し、彼の思考は惑乱する。

△やはり、女は魔性か？△そう思った。

結果的には相手の肢体の軽量に失望するだろうと、おのれの特異な感受性を脳裏にひらめかせて、事後の落胆を危惧しながらも、この瞬間に与えられている現象の中で、彼の心身は、異常そのものに欲求しているのだ。

順平はかすかにうめいた。

それが自制の限界だった。彼の五感に屈伏への道程を夢想し、悦服を欲し、支配されることを希って熱狂しはじめていた。

「手を下に置きなさい。掌を上にして――」  
里絵は座席の背凭れの上を掴み体を支えて正面からグリグリ圧しながら言う。

順平は里絵の言葉にしたがい、抱えていた脚から手を離した。彼にはもう、まともな思慮はなかった。魂までも惹きつけられているのだ。彼は真剣に熱意をこめて、命令を至上のものに思いつつあった。

電撃に似た痛覚が彼の身内を貫ぬいたのはそのときだ。思わず奇声でうめいていた。

苦痛に耐えようと上体が硬直した。

首だけがあらがうように無意味に動き、触れたあたりは、一面に彼の汗と唾液でぬめっていた。里絵はヒールの靴底で、彼の掌を踏みにじっているのだ。が、さすがにためらう



気持があるのか、かがとだけは、浮かしていた。

疼痛と闘いながら順平は、渾身の力を双腕にこめて女体を持ち上げようとしていた。

だが、予想外に微動もしない。

小柄な軽量級だと見て、はじめから眼中になかった相手なのに、掌の上に乗っかっている実体は、いつの間にか磐石と化している。

きゅうと、胸の芯が痛んだ。

心がうろたえはじめていた。

彼は坐っている。心理的にも体を起したくない状態だった。奇異な形態からきた錯覚だが、そのことを念慮する余裕のあるはずもなく、剛性の重圧に対して無駄な努力を繰り返して、やがて、汗みどろになって、跳ねのけることが不可能と知った。

と、その自覚で、胸中の塊りが炎となり、音たてて鼓動が高鳴る。里絵への欲求が真情となった。献身的な情熱を傾注していた。

心理作用で脳髓までも麻痺したのか、掌の痛覚すら、半ば以上は忘れていた。

× × ×

「エッチ。このバカッ。いやらしい男！」

里絵は彼の頭を叩きつつける。涙まじりのその声を、順平は遙かな音として聞く。

「バカ。順平のバカ。ママ、ママって、ママさんばかりに夢中になって……なぜなの？」

彼女もまた、しだいに高まりゆく情炎を抑制することができなかったのかも知れない。

常態を逸脱して狂ったように乱れてゆく。

「ママさんにキスしたいだなんて。順平のアホッ。私じゃなぜいけないのよう」

それが口惜しいかのように、彼女は、彼の掌の上で、駄々っ子となりジダンダを踏む。

彼女の足は鋭利な器物となり彼を責めつけ痛撃は一段と熾烈の度合を深めてゆく。

圧伏という被虐感覚を渴望してはいるが、彼の想念にあるのは肉体での制圧であり、重々しい圧迫を欲しても、それは、暖かく柔軟で豊かなものでなければならぬ。痛苦のともなう虐待は、初めての体験なのだ。

両手の骨が砕け肉が裂けるかと思う激痛に呻吟しながらも、彼は里絵に対して、全心身で屈伏しようとしていた。

「私ではどうなのよう。私では……」  
順平の心は虚脱状態で茫洋としていた。

思いもよらぬ、女の心うちを知ったのだ。

里絵の心情には、同性に対する鋭意な妬心も混入している。だが、偽ることのない本心もまた、赤裸に発露しているのだ。

順平は甘い感動のうちに気負い立った。と、まるで彼の心理動向を探知したように突如として、里絵の体が跳躍した。

順平の精神を驚倒させるような、しかも素早い動作だった。胛が肩に乗ったのだ。

いや、肩にあるのは、足首に近い部分である。里絵はボックスの背の上をしっかと掴んで体を支え、やや腰を浮かした形で空間で正坐しているのだ。身軽な彼女でなければ不可能な姿勢であった。

ガクツと首を後ろに折り、順平は息づまる緊圧の中で激しい戦慄を繰り返していた。

凄絶ともいえる強烈な感覚だった。彼の全身はおこりに罹ったようにふるえる。

柔軟な肢体から発する信じられぬ重量感をひしひしと感じ、ただ夢中になっていた。

「この私が気に入らないの？ ママさんに関わるのはやめてッ。あなたのために良くないのよ。ね、ね、私じゃだめなの」

自分でなにを言っているのかもわからぬ様子で、里絵はただ泣き叫んでいるようだ。

自分の言語に激されて発動し、しだいに高潮する情感に酔い、頬をきれいなバラ色に染めあげ、しきりに「ママさんはやめて」と、口走っているのだ。その合間に、体はマリの



ように跳ねはずむ。彼は首振人形となった。  
 へわかった。わかったよ里絵。いまなら、お  
 れは里絵のなんだって嚙下するぞと、その  
 意識と想念と、それだけでじゅう分だった。  
 が、実体は、彼にはもう、里絵の意思を拒  
 む気持ちは皆無であり、血が騒ぎ、燃えてい  
 るように全身を熱気が駆け巡っていた。

「あたしがどうかしたの？ サトちゃん」  
 ふたりにとっては正に晴天の霹靂だった。  
 声の主を伊津子と知り、驚愕した里絵は、  
 転げ落ちなかったのが不思議なぐらいだ。

### 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売！

一月分	1冊	三五〇円 (送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円 (送共)
半年分	6冊	二一〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四二〇〇円 (送共)

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、  
 或は地方のため、入手することが出来ないとか、  
 かいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い  
 目に、手に入れたたいという御希望をよく承り  
 ます。そういった方々は、どうぞ是非月極御  
 予約下さるようお願い致します。毎月製本完  
 成と同時に、お手元までお届け致します。  
 ○直接予約購読のお申込みを下さるのには

平衡感覚を失った体を、やっとの思いで支  
 えながら、動悸を荒々しい呼吸で示し、怯え  
 きた目色で伊津子の表情を探ぐり見た。

驚きは順平のほうが激しく大きい。  
 精神の分裂したような弛緩状態で、傍らに  
 たたずんでいる伊津子を茫と見あげた。

白い伊津子の顔は能面のように無表情だっ  
 た。視線だけがゆっくりと里絵から移行し、  
 順平を捕えたとき、急に光沢を増した。

三人の空間は停止している。白々しい沈黙  
 が流れて空虚だった。空気だけが湿って濁っ

大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会  
 社宛表記予約購読料をお払込みの上、何年何  
 月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装  
 代などは、総べて当社にて負担致します。但  
 し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分  
 二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げ  
 になりましたので、予約購読料は三月分三冊  
 一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分  
 十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間  
 誌代の改訂はしない予定です。今後当分の間

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印  
 刷完成と同時に、外部から見えないように厳  
 重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送  
 料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御  
 送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読  
 者の方の分と一緒に発送致します。

ていた。重苦しい時がいくらかすぎた。  
 それを寸断したのは針のように尖った、け  
 たたましい伊津子の哄笑だった。

順平と里絵はその声に心底まで萎縮した。  
 「ふたりとも夢中だったわね。サトちゃんの  
 あの恰好したら、まるでだけだものみたい」

伊津子の声はふたりの神経にビリビリと食  
 い入り、羞恥より以上の恥辱の自覚を強いる  
 のだ。里絵はがっくりと首を垂れ、全身を小  
 刻みに震わせてすすり泣く。順平もまた、暗  
 然とした面持ちで深々とうなだれていた。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号  
 から何カ月分送れとお書き願います。第一回  
 分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。

何月号からとお書きにならないときは、重複  
 や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に  
 八本号にて前金切の判を捺印致しますから  
 継続お払込み願います。継続のお払込みでも  
 何月号からと御明記願います。

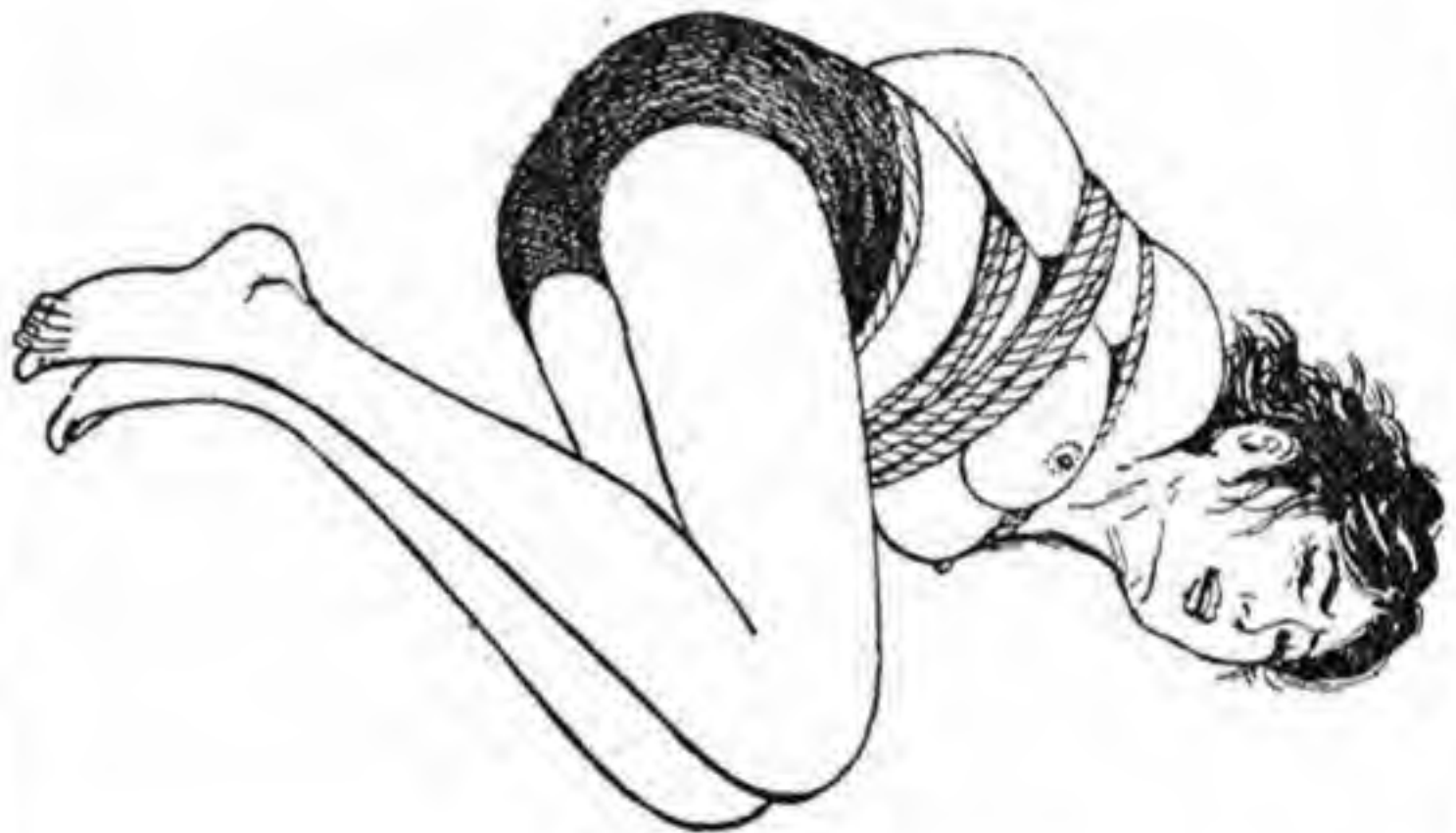
○局留にて雑誌をお受けとりにならない方  
 は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局  
 留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受  
 取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構  
 です)と受取人のお名前とをお知らせ下され  
 ば、当方では御指定の局留としてお送りいた  
 しますから、数日後その局で御受領願います  
 局での留置期間は十日間です。その間に  
 お受取りにならないときは、発送人に返戻さ  
 れます。



# 蜜月のある縄

## <蜜月の終り>

夫 忠 草 千



夫を愛している妻にとって、本当に自分だけの時間というものがあるのだろうか？  
ひとり居る時間はあっても、その時間の中

には絶えず夫の存在が割り込んでくる。夫の存在は、部屋の片隅からも、シーツのしわの陰からも、流しにつけた茶碗の中からも、ほほえみかけてくる。  
淑子は、自分だけがこうなのではないか、

と疑って見ることもある。狭いアパートの部屋のすみずみにまで、夫の存在が充満している、それが自分をあやつっているように思えてならないのだ。

それが不愉快というのではもちろんない。むしろ自分がそんな雰囲気にならないうと包まれて、体が綿のように軽くなり、せせこましい住居の全体が生き生きと息づき始め、眼をつぶってその中に身を任せたくなくなる。

それが愛される妻の幸福だ、ということを知っている。

それにしても、その夜は猛の帰りが遅かった。遅いことは珍らしい事ではないのだが、いくら土曜日とはいえ、こんな寒い夜に遅いというのは気になる。

土曜日の夜というので、淑子は当然ある期待を抱いていた。六畳の寝室にひとつ布団をのべた時も、部屋を暖めておくためにガスストーブをつけた時も、淑子は羞恥の入りまじった期待で胸を熱くしていたのだ。

その胸の熱さが冷えてゆくのをどうしようもない、夫の帰りの遅さだった。

アパートは静かで、時折、コンクリートの階段を昇ってゆく靴音がさむざむと響く。靴音が次第に近づき、ドアの前を通り過ぎ、上



の階へ上がり、やがて消えてゆくと、寒さが再びもどってくるようだった。

電気炬燵で婦人雑誌を読む眼を幾度かあげて、淑子は壁の時計を見た。

時計が十時を過ぎた頃、ようやく入口のブザーが鳴った。

「お帰りなさい。寒かったですよ」

ドアを開けた淑子に、ほろ酔い気嫌の猛は「お客さまだよ」

見ると、夫の背後に階段の明かりを背にして洋装の女の姿があった。

「あら、倫代さん……」

思わず絶句しそうになるのを、ようやくこらえて、

「いらっしゃい、どうぞ」

淑子は笑顔を作って招き入れた。

「おじゃまします」

倫代は、強いて挑戦するような取りすました表情を取りつくろっているように見えた。そして、部屋に入るとあたりを無難なほどジロジロ見まわした。

「ぜひ新居を見たいとおっしゃるからさ、お連れしたんだ」

猛は洋服のまま炬燵ににじり入りながら、挑むような口調で言った。

「こんなに遅くおじゃましてしまって、すみません」

手について挨拶すると、倫代も炬燵に膝を入れた。猛と一緒に飲み歩いていたのか、それとも戸外の寒気のせいかわからない。頬が赤かった。

淑子は寝室からガストロブを移し、紅茶の仕度をした。背後に絶えず倫代の視線を感じていた。

「おい、ウイスキーがあったろう」

「はい……」

「飲み直した。きみも飲むだろう」

倫代に向かって猛が言う。

「でも、こんなにおそく、悪いわ」

「なに、明日は日曜だ。なんなら泊っていくといい。どうせ気楽なアパート暮らしじゃないか」

そんな会話を背中に聞きながら淑子はグラスを用意し、ありあわせのチーズとソーセージを皿に盛った。

どうして猛が倫代をこんな時間に家に連れて来たのか、また倫代がどうしてノコノコとやって来たのか——淑子は考えまいとつとめた。しかし、まるで妻もなげなふたりの会話を背中で聞いていると、野菜を刻む手がふるえてくるのを、どうしようもない。

倫代が帰るまでの間、自分が果して主婦としての役割を満足に果せるか、淑子には自信がなくなった。

「やっぱり、新家庭の雰囲気というのはどこか違うわ。いいわね。ひとり暮らしのアパート住いなんて、そりゃひどいものよ」

倫代がしゃべっている。

「だったら結婚すりゃいいじゃないか。きみくらいの女性だったらワンサと相手はいるだろう」

「わんさと居るからかえっていやなのよ。どれもあたしじゃなくて、あたしのバック目当てのような気がしてきちゃって——」

「それが見分けられない君でもないだろう」淑子はトレイにグラスとつまみものをのせて炬燵に連んだ。

「淑子さん、今夜はね、わたし旦那さまを誘惑しようと思ってたのよ。そしたら逆に誘惑されちゃった」

倫代はやはり酔っているようだった。酔いはさして面に出ていないが、上体がたえずグラグラして、眼が妖しくすわっている。

「淑子、お前も飲みなさい」

つましく拒む淑子に、猛は無理やりグラスを持たせた。そんな夫の様子にも、淑子は



いつもとは違うものを感じないわけにはいかない。

淑子はふっと、今夜はわたしも酔ってやろうか——という気になった。少し多めに口にふくんだウイスキーのかたまりが、のどを焼いた。

「上林くんはね、お前の変貌ぶりをとくと確かめたいと言ってきかないんだ。結婚数カ月後の女の交りかたに興味があるんだそうだ。どう、上林くん、淑子は変ったかね」

猛は酔いの上にグラスを重ねながら言う。「とっても……見違えるほど、お綺麗になったわ」

「あら……」  
「ほんとうよ。なんといったらいいのかしら……女のしあわせってものが、肌の奥から輝いているみたい」

淑子は頬に掌を当てて恥じらった。自分も何か相手をほめる言葉を探さなければ——と思うのだが、それが口から出なかった。

猛は無意味なニヤニヤ笑いを口元に浮かべて、グラスをあおり続けている。

## 二

とりとめのない雑談が続いた。いっこうに

焦点を結ばないダラダラ話の中に、淑子は次第に不吉な予感をおぼえ始めた。倫代がなにか決定的なことを言いだすキッカケを掴みあぐね、猛が倫代の出方を待ち受けているような気がするのだ。

猛は、その決定的な瞬間がおとずれた場合のショックに耐えるためであるかのように、さかんにグラスを口に運んでいる。

倫代はさすがに遠慮してかあまり飲まないが、それでも来た時にくらべると眼のすわりが違ってきた。淑子はそんな倫代の様子を酔いで熱くなった瞳で、それとなく注視していた。

「ね、葉山さん、もう大分遅くなったわ。お約束のものはまだ見せていただけなの？」  
倫代が、酔いにうるんだ流し目を猛にくれて、甘ったれるように言い出した。

「いつでも見せてやるさ」

猛がその瞳をはねかえすように強く言う。

「なんですの？ お約束のものって……」

淑子が口を出すのに、猛は向き直って、

「上林くんが、ぼくたちの愛情に満ちた家庭生活の秘密を、是非見せてくれというんだ」

「それを約束なさいましたの？」

淑子は背すじが寒くなるのを感じた。

「うん、女性の挑戦に応じないのは、男性としてしのびないことだからな」

猛は淑子から視線をそらして、グラスを口に持っていた。

「御無理かしら？」

倫代の眼が、今度は淑子に向かって挑みかかった。

淑子は酔いが一時に醒める思いだった。（これだったのね……これがお目当てだったのね……）

蒼ざめてゆく頬に強いて笑みを作って、  
「なんのことか、よくわかりませんわ」

「夫婦和合の秘訣は、妻が夫にあくまでも従順であり、夫はそんな妻をいたわりをもってあつかう所にある、と言ったんだ。上林くんは、そんな女性が今どき居る筈がないとおっしゃる——」

やけになったような口調だ。

「で、何をお見せすればいいんですの？」

言いながら、淑子の心は予感におののいていた。

「裸になってくれ」

「あなた……まさか……？」

「なんでもいい、裸になるんだ」

「葉山さん、いいのよ、ムリしなくっても」



取りなしているのかケシかけているのかわからない倫代の言い方だった。

淑子は身を固くして、真っ赤に充血した眼を光らしている夫を見つめた。

体がどうしようもなくふるえてくる。

「いや……そんなこと、いやです……」

うなだれて、小さく抗議したのと、夫の手がつかみかかるのと同様だった。

猛は立ち上がっていた。上衣は先程脱いでしまっている。手が帯にかかった。

「いやよ、そんなこと、倫代さんの前で……」

「倫代の前だからやるんだ」

あらがう手が背中中にねじあげられ、淑子は畳に俯伏せに押さえ込まれた。着物の裾がめくれて、白足袋をはいた胫があらわにこぼれた。

しごきが解き放たれ、帯がゆるめられ、襦

袢もろとも着物が肩から引き剥がされた。

和服の時は洋風の下着をつけることを許されない淑子は、それだけで上半身が剥き身になってしまう。

淑子は桜色に色づいた背中を倫代の方に向け、胸をおさえて泣き伏した。

猛はそこに仁王立ちになって、荒々しく胸を弾ませている。血走った眼が、怒ったよう

に、倫代の蒼白んだ顔をねめつけ、それから妻のなめらかな背肌こそがれた。

緋色の腰のものをまとった豊かなボリュームが、異常な雰囲気の中に妖しげな息づきを見せている。

裸の腕を背中にまわされ、しごきで縛りあげられ始めた時、淑子はほとんど抵抗しなかった。抵抗する気力を喪失してしまっていたのだ。心はうつろになり、涙は頬の上に白く乾いた。

両手首を交叉して縛りあげ、胸にまわされて乳房の上下をくびりあげたピンクのしごきは、陶器を思わせる沈んだ輝きを持った淑子の素肌に、あでやかさをそえる。

いつもよりはるかにきつい縄目の圧迫に、淑子は喘ぎ、無意識のうちに身悶えを繰り返していた。

縛り終ると、猛はまるで張子のだるまを置きかえるように、淑子を抱いて倫代に正面を向けさせた。

「どうだい」

猛はうわずった声で言った。

「これが秘訣ってわけ？ でも、お綺麗ね」

淑子は、上下をしごきでくびりあげられて上向きになった赤い乳頭に、あどがくつつく

ほどにうなだれている。乱れきった漆黒の髪がガククリと折れたなめらかなうなじにまつわりついて、凄艶ともいえる美しさをかもし出している。

猛はそんな妻の姿に駆りたてられたのか、淑子の髪を掴んで仰向けにした。うなじがガクリと後に折れた。

淑子はしっかりと眼を閉じていた。長い睫毛が蒼ざめた頬に長い影を落とし、愛らしい小鼻が屈辱の喘ぎをみせている。あらわにさらされた、ムッチリと脂肪の乗った上半身は純のような光をたたえ、双の乳房の頂点で女の羞恥が凝固してふるえている。

「どうだい」

猛は、ふたたび言葉もない倫代に問いかけた。

その口調に誇りの色がまじっているのを敏感になっっている淑子の神経は感じ取った。

不意に夫の指が頂点に触れてきて、淑子はアッと叫んだ。

「もう……ゆるして……」

言いかけた唇を、夫の唇が強くふさいで来た。淑子はしばらく、かたくなに歯を噛みしめて拒んだが、いつしか、力を失なっていた。



感覚が甘くしびれてゆくのに「いけない」と我を取り戻そうとするが、またすぐに蜜のような感覚にとらわれ、ずるずると傾斜をすべり落ちてゆく。そして幾度目かに我に返った時、淑子は腰のものの紐がすっかりゆるめられてしまっているのに気づいた。

(だめ!……)

淑子はふさがれた口をはずそうとして、抱きすくめられた体を悶えさせた。膝が崩れ、赤い裾が割れた。

ようやく夫の抱擁からのがれて、そこに突っ伏したとき、はや淑子は身に一糸もまとってはいなかった。

「すごいわ、見ているだけでカッとなっちゃう」

吐息まじりに倫代が言う。

「本人になりかわれば、もっといいぜ」

「でも、あたしは責められるより、責める方が向いていそうな気がする」

「あんたらしいな、やってみるか」

「どうすればいいの?」

「好きなようにやるさ」

倫代の立ちあがる気配に、淑子は突っ伏した体をハッと硬直させた。

「ベルト貸してちょうだい」

「なんだ鞭打ちか、あまりきつくやって大事な奥さんの肌に傷を残さないでくれよ」

「そんなこと言われると、よけいひどくしたくなってよ」

淑子は唇を噛んだ。それまで身も世もなく恥ずかしかったのが急に遠のいて、冷たく醒めた感情がもどって来た。

はじめて、激しい敵愾心がたぎりたつのを感じた。どんな痛いめにあわされても、悲鳴なんかあげまい。みっともなく身悶えすることもしまい――

「鞭って、案外あつかいにくいものなのね」声とともに第一撃が背中をおそって来た。ためらい勝ちな、あまり痛くない一撃だったが、それでも淑子は歯がみして耐えた。

ピシッ――

深く折った腰に火が走った。膝が崩れた。

ピシッ――

火が二重に燃えひろがる。

ピシッ、ピシッ

呻くまい、見苦しい悶え方はすまいと誓っても、肉体は苦痛に対して正直に反応し、淑子の背肌や豊かな双丘は弾かれるようにうごめいた。

「こんなに綺麗な跡がつくとは思わなかった

わ。これを見ると、芸術家気取りになってくるわね」

鞭は交叉し、平行して打ちおろされる。痛みの走り方で、淑子は自分の肌にどんな紋様が描かれているか想像できる。

「鞭に悶える女ってのはすてきね、美しいと思うわ。ホラ、このお尻の形のいいこと。葉山さんの愛し方が眼に見えるようよ」

倫代は明らかに嫉妬している。

ピシッ――

誇り高い双丘に懲罰の一撃がみまわれる。冷たい輝きを帯びた肌に、うっすらと汗がにじんで、桜色に交りはじめた。

「にくらしいわ、この肌――」

倫代の声は吊りあがっている。

淑子は苦痛の涙の中で、不敵な笑みを人知れずもらしていた。

鞭は更に激しく肌をみまってきた。淑子はのどの奥で喘ぎを噛み殺し、わずかに身をよじるだけで焼けつく痛みに耐えぬいた。

「つまらなくなっちゃった――なんだかバカみたい」

倫代は根負けしたように、ベルトを放り出した。

「葉山さんたら、ひと言もしゃべらないで――



「奥さんの肌に傷がつかないか心配でならないんでしょう。眼つきでわかってよ」

淑子は、夫の表情が見たいという焦げつのような欲求にとらわれた。しかし、それは不可能だった。ただヒリヒリする背肌、夫の暖かい視線を感じる事ができるだけで、満足しなくてはならなかった。

「あたし帰るわ」

不意に倫代が言いだした。バタバタとコートをはおる気配がする。

「帰さないよ」

夫の威圧的な低い声。

「どうするつもり？」

「まだ君が見たいといったものを、全部見せてあげていないからさ」

「もう結構。葉山さんの愛妻家なのは充分わかりました」

「きみは満腹しても、ぼくは満腹していないんでね」

「あ、なにするのよ……」

淑子は思わず顔をあげた。

腕を掴まれて倫代がもがいている。猛の手がスーツのボタンにかかって、手早く上着を剥いでゆく。

「いやッ、いやよ……奥さんの前で恥ずかし

くないの」

倫代はまっ赤になってもがいている。

「淑子に君ほどの口があったら、どこの馬の骨か知れない女の前で、あたしにこんなことして恥ずかしくないの、って言うことだろうな」

淑子は一時に涙ぐんだ。

倫代はたちまちスカートも剥がれて、スリッパ一枚にされた。

夫の手がそのスリッパにかかった時、淑子は、夫が自分の眼の前で倫代を犯すのではないか、という疑惑におそわれた。

しかしそうではなかった。スリッパを剥ぎブラジャーをむしり取った猛は、小麦色に引き締まった倫代を縛りあげはじめたのだ。

「いやッ、縛るのはいや」

倫代は見栄も何もなくあばれまわる。そんな倫代をあやすように、猛の縄は着実に倫代の自由を奪ってゆく。淑子は自分以外の女が夫の手で縛られてゆく光景を、珍らしいものを見るように、我を忘れて眺めている。

まだ十分成熟していない乳房に縄が食い込み、首縄が、あえぎもだえる首にかけまわされ、こぶをこしらえた縄がピンクのパンティの上からぎゅちりと締めあげられると、倫代

は急におとなしくなった。時々思い出したように細腰をうねらせ、肩で喘いでいる。

淑子は体中が熱くなった。

猛は寝室の押入れから、新しい布団を運んで炬燵の所に敷き始めた。

「今夜はこのままで、ここにやすみたまえ」

倫代の縮かまろうとする足を持って炬燵に引きずり込み、上から布団をかけた。

「ゆるして……帰してよ、ね……」

「だめだね」

それから猛は淑子の傍に来た。

「寝ようか」

淑子は、はるかしたで顔をあげられなかったが、そのはずかしさは決して不愉快なものではなかった。

縄尻を持って引き起こされ、前かがみの体を隣の寝室に引きたてられながら、淑子は眼の片隅で、倫代がかぶせられた布団の陰から狂ったような瞳をのぞかせているのを見た。

「おやすみ、上林くん」

晴れやかに言って、猛は部屋の電灯を消した。開かれたふすまの向うから、寝室のピンクのスタンドの明かりが流れ込んで来た。

ふすまを閉めきると、そこはなまめかしい布団の色彩と、スタンドの明りが織りなす夜



の世界だった。

淑子は、後手に縛られた我が身を夫に抱き取られるにまかせながら、このアパートの壁がすごく薄いことを、チラと考えた。

### 三

「あ、いや、いやよ、あなた……あ……」

淑子は、自分の呻き声で眼がさめた。

眼がさめてみると、自分がどんな夢を見て呻き声をあげたのか、もう、覚えていなかった。しかし、どうして聞こえよがしの声をあげたのかということだけは、不思議に記憶に残っていた。

それは隣室の倫代に聞かせたいという気持ちの現れだった。夫の愛を独占していることを倫代の脳裏に刻み込むためだった。

部屋は暖かく、ピンクのスタンドが、寝乱れた夜具を照らし出していた。夫は軽いいびきをたてて眠っている。淑子の肌を締めつけていたいましめは解き放されていた。なつかしいにおいのするぬくもりの中で、ゆったりと体を伸ばし、乳房の陰の汗ばみを自由になった手でぬぐった。肩の付け根のあたりがけだるく、腰から下が綿のように感じられた。

下肢をあぐらに組まれたうえに、体をふたつに折りまげられた恰好で、淑子は呻き続けねばならなかったのだ。のけぞったあごにそり反った自分の足指が、触れんばかりだった。

苦しい姿勢に呼吸がせかれて、淑子は幾度か死ぬかと思うほど気が遠くなるのを経験した。そしてそれをうつつの中に口に出して叫んでいた。

酔った猛はそれだけのことではなかなか許してくれなかった。いましめを解いて、大字なりに敷布団の上に縛り直すと、足の爪先から、まるでおいしいものでもしゃぶるような、舌と唇による彼独得のいたぶりが、しつように行なわれたのだ。

淑子はもう声も出せずに汗に光る肌を白蛇のようにうねくらしているだけだった。

愛の責苦の中にあられもないのたちを続けながら、淑子の頭の片隅から倫代が存在が離れてしまうことがなかった。それだけではない。倫代の脚を猛が縛ってしまったわなかったことを覚えていて、ひょっとするとそのふすまの所まで寄って来て、いま自分がこうして被虐の悦びに浸っている有様を、すきま見しているのではないか、とさえ想像した。想

像するだけで、競い合う女心が一気に絶頂にまで駆け上がったってしまうのだ。

(倫代さん、あたしが勝ったわ……)

口の中でつぶやいて、淑子は傍の夫の背にそっと腕をまわし、体をまるくした。

縦縄の味は淑子は知り過ぎるほど知っている。意地の悪い縄の掛け方である。そんな縛り方をされながら、隣室の気配と物音にいやおうなく耳をすましていなくてはならなかった倫代のことを考えると、淑子は満足感がこみあがってくるのを、どうしようもないのだった。

「おい、起きろよ、もう十時だぜ」

夫にゆり起こされて、淑子はハッと眼をさました。

あれからいつのまにか深い眠りに落ちたらしい。窓の外はすっかり朝の気配だった。

猛は裸の肩を夜具から乗り出すようにしてタバコを吸っている。よどんだ寝室の中に紫色の煙がゆったりと立ち昇っている。

「よっぱど疲れたらしいな、グッスリ眠っていたよ」

夫の眼がまぶしく、淑子は思わず夜具に顔



埋めた。

「コーヒーをいれてくれないか。なんだか頭がポーンとしているんだ」

はい、と返事をして身を起こしかけた淑子は、ふとためらった。

隣室には倫代がいるのだ。さすがに顔を合わすのが恥ずかしい。

「上林くんは帰ったよ」

と、猛が淑子の心中を察して言った。

「さっき眼がさめた時、気がついたので、縄をほどこいて解放してやったんだ。大分参っていたぜ。眠れなかったらしい」

### 臨時増刊号

小説・絵画「花と蛇」特集

絶賛！注文殺到！

売切れぬ中にお早く

目下発売中！ 乞お申込み

定価一部 五〇〇円

(送料三〇円但し当分の間当社負担)

団鬼六作の名著、長篇小説「花と蛇」

千数百枚一挙登載、三三〇頁。四馬孝描

く「花と蛇」テーマ画集『十六葉』口絵

収録。今すぐ天星社へお申込み下さい。

「悪いかた……」

そう言って淑子は床を抜け出した。

隣室に行ってみると、倫代の寝た床はキチンとたたまれていた。

淑子は雨戸を開き、ガラストープに火を入れ、レンジにケトルをかけた。動作がひどくけだるかった。

湯の沸く間に洗面をすまし、手早く化粧をととのえた。体の疲れにもかかわらず、顔の色が冴えざえと輝いているのが嬉しかった。

ふと、夫がまだ素肌だったことに気がついた。一度起きて倫代のいましめを解いてやった時、夫は裸のままだったのだろうか、それとも着たものを、また脱いだのだろうか？

疑問と共に不安が淑子の胸に起った。

いくら夫が若くても、まさか——という気が起こる一方、相手は倫代さんだし、あるいは——という疑惑が高まってくる。

先ほどのまでの充実感に、急激にうそ寒いものが吹き込んできそうになるのを、淑子はうるたえ気味に強いて押し止めた。

猛が起きて来た。ガウンをパジャマの上からはおっている。

「あら、お床の方にお持ちしましたのに……」

「ゴロゴロしていると、かえって頭がハッキリしないからね」

猛は窓を引き開けると、朝の冷気を一杯に吸い込んで大きな伸びをした。

「ゆうべは、びっくりしたろう」

ふたりでコーヒーのテーブルを囲んだ時、猛は言いだした。

「ええ……あまり突然でしたもの……」

「でも、きみはよく我慢してくれたね」

淑子はさっきからの疑惑にとらわれていて素直に微笑することができなかった。

「実を言うとな、いままできみに話してなかったのだが——」

猛はコーヒーをグツと飲んだ。

「結婚前に、上林くんと……そのう、つまり関係があったんだ」

淑子は夫の顔を見ないように、うつむいていた。今ごろ何を言い出そうというのだろうか？ 淑子の心はおののいていた。

「縛ったこともある」

淑子は、何とか言わなければ——と気がせくのでかえって口が重くなっていた。心だけが、おそろしいまでにおののいている。

「おっしゃらないで……」

ようやくそれだけ言った。

「いや、言わしてもらおうよ——といっても、



もう言ってしまったんだが」

猛の両手が、淑子のコーヒークップを持った手首に伸びて、しっかりと掴んだ。

淑子は顔をあげた。夫の視線とまともにぶつかった。

猛の眼は、許しを乞うというような弱々しいものではなかったが、内心の憂悶をあらわに物語っている。

淑子はその瞳の色にじっと見入った。それから心の扉をふともれた言葉が唇を動かしたように、ポツリと言った。

「知っていましたわ」

猛の視線がグラリと揺れた。

「いつから？」

「結婚する前でしたわ」

「誰から聞いた？」

「倫代さんから……」

「倫代自身から——というのか？」

「ええ……」

猛の手が、力なく淑子の腕から落ちた。

「知らなかった——ぼくだけの秘密だと思っていた——」

猛は考えをまとめるためか、ショックから脱け出すためか、コーヒークップをゆっくり飲みくだした。

淑子は、知っていると言った瞬間から後悔していた。夫の秘密は秘密として、そっとしておいてあげようと決心していたのに、つい口からすべり出てしまったのだ。

「あなたとの婚約を発表してからすぐのことでしたわ。倫代さんは、あたしを昼休みに屋上に呼び出して言っただけです。あなたのことをエッチだの、変態だのって言いましたわ。

あんな人と結婚すれば、きっと不幸になる、へたをすれば殺されてしまう、とまで言いました——」

淑子は必死だった。じつとうなだれて、眉根を寄せたままの夫に、できることなら取りすがって、かきくどきたかった。

「でも、あたし、言い返したんです。あなたがどんな変態で、あるいは殺人狂でも、あたしの愛は変らない、って……あなた、あなたは今新婚旅行の列車で、あたしのことを亡くなしたお母さまに似ているとおっしゃって下さいましたわね。あたし、あの時ともうれしかったんです。亡くなったお母さまの万分之一でもあなたの心にそえるのなら、こんなしあわせなことはないと思っただけです。もし……もし、あなたがあのぞみになるなら、あたし……、殺されたってかまいません……」

言いもあえずに、淑子は声をあげて泣き伏した。泣きながら、淑子は夫の手を——それが固い抱擁であれ、首をしめる指先であれ——夫の手が自分の体に触れてきて、この頼りのなさから救い出してくれることを願っていた。

だが、その願いはむなしかった。

「すまなかった……」

猛は沈うつな声でポツリと言った。

（いけない、あなたは言いわけなんかしてはいけない……）

淑子は泣きながら、テーブルをかきむしった。

「ぼくはほんとうに甘ちゃんだ……箸にも棒にもかからないエゴイストだった……ほんとに悪かった」

（いや、いやよ、あなたはエゴイストでいいのよ、いままでのような暴君で、あたし満足なのよ、あなたにあやまられたくない、あやまるのなんかいや……）

椅子がガタリと動いて、夫が席を立つ気配がした。

淑子は更に激しく泣いた。

ふたりの愛はこれで終わったわけではない。だが、蜜月は終わったのだ。



## ——特別架空ルポ——

## 拷問屋敷

町陽

一



五月号のKK誌にこのルポを書いたところ  
 数カ所のグループから、そのグループの内容  
 等を知らせて頂いた。SM、レスビアン、ホ  
 モ、エネマ……等々で、仲々バラエティに富  
 んでいたが、中でも、女性ばかりのグループ  
 で、SMプレイをするからという招待には大  
 いに食指を動かされたが、個人的な都合で指  
 定の日に行けそうになく、涙をのんで次の機  
 会を待つ事にした。

私が招待に応じたのは、矢張りKK読者諸  
 氏の大半を占めると思われる、SM関係にし  
 た。前作の時は、よもや、こんなグループが  
 各所にあるとは思ってもいなかったもので、  
 次の予定等は全く出来ていなかった。しかし  
 この数人のお便りでいささか力を得た。又、  
 そんなグループがあったら御紹介願いたい。  
 勿論秘密は絶対に守るのが、この種のルポ・  
 ライターの使命である以上御安心頂きたい。  
 桜も葉桜に変わり、新緑がぬれて美しい雨の  
 五月上旬であった。私が、阪急は神戸線のN  
 駅に降り立ったのは昼を少しまわった頃であ  
 った。

かねて連絡していた通り、責任者の一人M  
 氏が右手に鞆、左手に傘を持ったレインコー  
 ト姿で改札口に立っていた。約束の時刻五分



前である。私は視線が合うと右手の傘を目につくように左手に持ち変えた。

「町さんですね」

合図を理解するとM氏は近寄って来た。人なつっこい商人風の腰の低さだ。

「そうです。Mさんですね。よろしく」

駅のすぐ横にM氏の車が停めてあった。大衆車として近頃急に多く見掛けるようになりだしたサニーだ。

「大分ありますか」

エンジンが始動した時、私は口を開いた。

「そうですね。山手ですから」

M氏の運転に危なげはなかった。

神戸は山の街だ。少し登ると海が見える。

雨に煙った海には又、一種の風情があった。

神戸は又、異国情緒の街だ。普通の街ではお目にかかりにくい洋館がいとまたやすく見掛けられる。M氏のサニーはその洋館の一つに滑り込んだ。相当山の手に登って来たともえて、眼下に海が随分良く見える。高い木立が家を囲み、家の壁にはつたが一面に茂っている。M氏は私を一室に導いた。

「もうみんな揃っていますか、ご案内する前に打合せと、会の内容をお知らせして置きたいと思っています」

M氏は私と向い合って腰を下ろすと、すぐに口を切った。

「まず、カメラはこの部屋に置いて下さい」

「写真は駄目ですか」

「絵では美術的な物でも、写真ではキワドクなることがあるでしょう」

「判りました。置いて行きましょう。会の内容を説明して頂けますか」

「会員は今十二人です。女七人男五人」

「女が多いとは珍しいですね」

「女性にはチャンスを与えなければいけませんよ、チャンスさえあれば、男より積極的です。殆どが学生ですよ」

「へえー」

「大学生が四人、高校生が一人、BGと主婦が一人」

「奥さんがねえ。御主人は？」

「船員なので、殆ど留守です」

「成程」

「会員は別に定員を作っていませんが、自然に十五人以内になっていますね」

「会員はどうやって」

「矢張り紹介です。信用出来る人ということが第一です」

「費用は？」

「ここは私の家ですから費用は要らないのですが、無料だと、変な人がまぎれ込むこともありますので、一応、年間一万円としていただきます」

「会合は？」

「定例月一回です」

「出席率は？」

「さあ、六〇%位ですか」

「一対一ですか」

「いや、それはしません。そうすると、どうしても変な関係に結びついてしまうし、男女同数が必要なので、多数対多数といえますか二組に分れてのプレイです」

「もう少し具体的に」

「昔の取調べの様子を思い出して頂けば良いのですが、要するに、お奉行様と、罪人の二組ですよ。だから、会員はここを拷問屋敷と呼んでいるのです」

「拷問屋敷ね」

「まあ、兎に角見て頂きました」

M氏は立ち上った。

「と云っても、ただの見物という立場では困りますから、貴方もプレイの中に入って頂きましょう」



「いや、私は……」

「いえいえ、何もして頂こうという訳ではありません。劇に溶け入って、貰うだけです。では服をぬいで、これをつけて下さい。」

これは会員のユニフォームです」

M氏は白い布を出した。日本古来の下着がこの会のユニフォームとは。

M氏は自分も同じ姿になり、なれない姿にたつとまどっている私を導いた。いささか中年肥りの気を見せているM氏だが、細い私と並ぶと、貫録充分に見えた。

M氏は階段を下りると突き当りの部屋の分厚い扉を開けた。明かるく広い部屋に数人の男女が私達の現われるのを待っていた。男は二人で私達と同じ姿。女も工人、真赤な腰巻だけの姿である。

「お待たせしました。町さんです」

「よろしく」

皆はそれぞれに軽く頭を下げた。

「では早速に始めましょう。今日の御奉行様はどなた？」

「私です」

中央に立った青年が云った。

「それでは町さんを見物席へ」

女性二人、軽くえしゃくをして私に近寄

ると壁の前に立たせ、あっけにとられている私の両手を挙げさせて、壁に取り付けてある手錠にはめてしまった。

「あっ、何を……Mさん、これは」

丁度、はりつけの恰好に私はあわてた。

「それが見物席です。いえ、そのまま見て頂だけです」

「でも」

「囚人を」

私は無視された。M氏の声に応じて一人の男が部屋を出て行った。

両手を挙げた姿というものは、真に頼りないものだ。今迄に人が責められた写真や絵は見たことがあり、この前は硝子越しではあるが実際に見たこともある。だが、自分がそのような目に遭わされたのはこれが始めてだった。日頃何とも思わなかった身体を奪われてみると如何にも不安なものだ。私はこのグループを訪れたことを一寸後悔した。あの女性だけのグループを無理してでも訪れば良かったと。

「囚人、ヤマテのオミヨ！」

声がすると一人の少女が先程の男に引き立てられて入ってきた。名前は恐らく山手に住む美代子という意味だろう。

その少女は腰巻一つの姿を後手にしっかりと縛り上げられていた。他の二人の女に比べるとまだ若々しい体は、その少女が高校生位だということを物語っていた。胸のふくらみはまだ小さかったが、それだけに非常に新鮮な感じを与えた。縄目に歪められた胸を見た時、今迄何ともなかった私の体中の血が騒ぎ始めた。

背中にまわして縛しめられた細い手首、二の腕に喰い込む縄目。

私ははからずもこの世界の一端が理解出来るようになった。その姿は美しかった。裸身以上の美しさ、自由を奪われ、曲線を歪められた裸身がどうしてこうも魅力があるのか、今の私には答えられない。まだ入口からのぞき込んだ所なのだ。

「座れ！」

男は縄尻を引いた。少女はよろけるようにして床に正座する。丸い顔は入って来た時からうつ向いたままだ。主人公の男は少女の正面に腰をかけた。二人の女はその左右に腰を下ろす。

「おみよと申したな」

「は、はい」

登場人物は、もうすっかり芝居の世界に没



入っていた。

「家主から申し立てのあったように、お前は家主の金を盗んだそうだが、何処に隠した」  
「知りません。盗んだりしません」

少女は顔を上げた。幼い感じの残る丸顔にショート・カットの髪が可愛い。

「ええ、だまれ、言わねば、その分には済まされぬぞ」

慣れているのか、稽古をつんでいる為か、お奉行様のせりふには淀みがなかった。

「何と言われましても、知らない事にはお答え出来ません」

そのせりふも勝気そうな少女の性質がよく出ていた。

「ええ、強情な小娘め、その可愛い顔が苦痛に歪み、助けを求めても遅いぞ」

「何からしましょうか」  
「まず鞭で打て」

二人の女が近寄ると、胸の縄を一度解き、後手の手首を肩の方に吊り上げるようにして縛り直した。腕の付け根の後が大きく盛り上って、ふくらみを作り出す。

「女、覚悟は良いな」

言うが早いか、男は手にした棒をそのふくらみに打ち下ろした。

「あーっ」

肌を打つにぶい音と共に、少女はのけぞった。このふくらみを打つと痛みは与えても骨を痛めることはないという。少女を打つ棒は竹を荒く割った竹刀の様なものだ。少女の白い肌に赤く太い筋がみるみるうちに浮き上がってきた。

「まだ言わぬか」

「ああ」

部屋の空気は熱してきた。私もいつしか、この雰囲気には巻き込まれて行った。

人間は元々SでありMであるという。目の前の被虐の少女の姿に心の奥底に眠っていたものが叩き起されたようだ。

「ええ、強情な女め」

責め手は呼吸を荒くしていた。少女の体は汗で光り、若々しい肌を余計に美しく輝かせていた。指先はすっかり血の気を失ない弱々しく見せていた。

「今度は私達におまかせ下さい」

女二人は少女を立たせると、私の目の前にある柱に立ち縛りにした。両脚を開き気味にする。

「まずこれを」

言うが早いか、真赤な布を闘牛士の布さば

きのように鮮やかに取り外してしまった。私の目の前に拡げられた少女の全裸身。私は体中を駆け廻る血潮の圧迫に、うめき声を上げた。

「これはどうじゃ」

女の手は少女の乳首を襲う。白いふくらみに美しい薄紅の蕾。

「うむ、いや、止めて」

少女はあえぐように言った。

「こちらも」

もう一人の女の手も伸びる。

少女の白い頬が、紅潮する。女が女を責める。それは残忍で、しかも、美しいものだった。少女の息が段々荒くなってくる。

「手を変えろ」

しばらくその苦悶が続いた後、奉行の声が二人の責手に止めさせた。ここでは白状させるのが目的ではない。それ迄の過程が大切なのだ。いつしか私の腋の下を汗が糸を引いていた。

「次は？」

「木馬にしようか」

「嫌、止めて下さい。あれだけは」

少女は急に叫び出した。木馬の苦しみを前に味わったものらしい。その叫びは演技では



なく、真剣そのものだった。

「だまらせろ」

少女の口に布切れが押し込まれた。

「むむむ」

悲鳴が途中で消える。

「木馬を」

三角柱を横にし、それに足をつけた台が中央に押し出された。

三角柱は一つの頂点を上にしてあった。よく見ると中央部は木ではなくて、何か柔らかいものをはめ込んであるようだ。台の両横に足台が置かれ、柱から解かれた少女は、無理やりその台に追い上げられた。

好んでこのゲームに入ったとは言うものの異性の前に裸身をさらすのは大変な苦痛であるに違いない。しかもこんな拷問を受けるのはどんな気持なのだろうか。

少女の後手の縄は天井から下った縄につながれた。これで少女がいくら暴れても木馬から落ちる心配はない。

「外せ」

踏み台が外された。

「ああむ、ううむ」

全体重が一カ所にかかった瞬間、少女は全身で悲鳴を挙げた。

物の本によると、この責具は耐えられない苦痛を与えるそうだ。少女の美しい眉が歪み少しでも苦痛を柔らげようと身をくねらせている。だが、それは逆に苦痛を増すことにならなかった。

ピシッ！

急に少女の腰が打たれた。

「ぎゅう」

今度は皮鞭だ。むっちりした腰に赤い筋が走る。

「うむ！」

鞭は巧妙に腰を、太ももを責めた。責め手はM氏だった。少女は木馬の上で様々の姿態を見せてもがいていたが、急に縄目にぶら下がるようにして気を失なった。

見ていた私は、はっとしたが、皆は落着いた様子で責めを止めると、いたわるように少女を床に下ろした。

「転がしておけ」

少女は口から布を出されたままで横に転がされた。後手のままで転がされた少女の姿には誰も注意は払わなかった。だが私には非常に刺激的な姿だった。再び私の体に圧迫されたような苦痛が襲った。私の指先はすっかり血の気を失い感覚は失われてしまっていた。

どうも私には、被虐の血は流れていないのか、この自分のハリツケ姿にはなじめなかった。

もっとも後で聞いた話だが、縛りの本当の喜びは後手縛りだそうだ……勿論個人差はあるが、二の腕と胸を縛しめられた時、本当に被虐の気持が湧いてくるという。それから考えると、この時の私の縛られ方では駄目なのかもしれない。

「次の囚人」

「横谷村のユーベイ」

名前は適当に附けるのであろう。今度は青年が私と同じ姿のまま後手にされて入ってきた。たくましくはないが、若々しい体にぜい肉はなかった。

「お前はまだ口を割らぬつもりか。今日で三日目だぞ」

「……」

「吊ーからせよ」

天井に仕掛けてあった滑車が、カラカラと鳴って太縄が一本下りて来た。その端が男の後手の縄に結びつけられる。

「よし、引け！」

縄が一瞬緊張し、肌深く喰い込んだとみると、男の体はくるくるまわりながら宙に浮



いて行った。

「ううむ」

青年の顔が赤くなり二の腕に静脈が筋立った瞬間、彼の体からユニホームがはらりと落ちた。わざとか偶然か、若々しい青年の裸形があらわになった。だが私には、先程の少女程、美を見出すことは出来なかった。若いとは言っても男には責に立ち向う力が見える。それが美しさを邪魔しているようだ。

もっとも私自身も、これから色々の体験をするにつれて、その見方も当然変わってくるだろうが、一寸のぞき見た程度の現在での感じはこうだった。

青年の顔は苦痛で歪んでいた。だがその中に喜びの表情があるように思ったのは錯覚であつたろうか。

この夜の会では、男女一人ずつを責めたに止まった。

だが囚人役の二人は勿論、責め手の人々も皆、汗をかいていた。余程夢中になったものだろう。

私でさえも手錠を外された時、自分の肌が汗まみれであつたのに気付いた程だ。

終わった後、さっそく、インタヴューを試みた。まず少女の方から。

「いくつ」

「もうすぐ十七」

「高校……」

「二年」

「家の人は？」

「勿論知らないわ。この人たちだけよ。知ってるのは」

「いつから」

「何が？ ああ、興味を持ち出したのは小学校のそうね、五年生位かな。ここに入ったのは今年になってから」

「お小遣で会費払うの？」

「そう。モデルもやってるもん」

「あの、あれ、台ね」

「ああ、木馬」

「木馬って云うの」

「そう、木馬責め。苦しいのよ」

「痛くない？」

「痛いわ。真中をスポンジにしてあるけど、とても痛いの、それに動いたら尚更よ」

「それでも良いの？」

「木馬はあんまり好きじゃないのよ。だけど縛られるのと、鞭打たれるのは大好きなの。」

木馬責めでもね、腰や背中を打たれたら嬉しいわ」

少女の瞳は夢見るようだった。

「どんな気持ちなのか」

「そうね……口では説明出来ないわ。おじさん経験ないの」

「ないね」

「じゃ、縛ったげる、裸になって」

「裸じゃないと駄目？」

「駄目よ、じかに縛られないと感じが出ないのよ」

「そうね、又の機会にしよう」

「弱虫ね」

「だけど、裸になるの恥しくなかった？」

「そりゃ、初めは恥しかったわ。だけど、慣れね。皆もそうだからすぐなれたわ」

「この会以外でもこんな遊びをしてるの」

「ううん、駄目。したいけど勇気ないな」

服を着た少女はとても可愛いかった。

私は続いて青年に向き会った。

「仕事は？」

「大学生です」

「生れつきのマゾですか」

「いや、僕はどっちでも良いんです」

「相手によって？」

「そう、相手がSだったらMに、MだったらSになりますね」



「今迄何人位の女性と……」

「そう、人数は少ないですが、のべ人数だと十人位かな」

「という事は一人と何回も？」

「五、六回というのが一人いますね」

「セックスは？」

「めったにそこまでは。まあ、その時の双方の気分ですよ」

「相手は見つかりますか」

「仲々むずかしいですね」

## △美しき縛しめ▽第七集

山原清子 刺青の魅力を探ぐる

一部一〇〇〇円(送共)略号△美7▽

すべて最近撮影の未公開の秘蔵写真  
刺青の女王Ⅱ山原清子の魅力を  
その女体の隅から隅までを抉ぐり出  
し、彼女の美しさを最高度に発揮し  
た強烈な緊縛フォトの結集版です。  
◎思わず息をのむ凄い大胆きわまり  
ないポーズばかり満載の写真集。  
◎残部僅少。すぐお申込みを。

## △美しき縛しめ▽第八集

女斗緊縛競艶写真特集

山原清子 大塚啓子 鈴木晃子

一部一〇〇〇円(送共)略号△美8▽

「女性対女性」の激しい女斗場面  
と女斗美の女体の躍動！ 女性が  
女性を縛る緊縛プレイの素晴らしい  
フォト化。動きのある女性と女性  
の相互縛り場面の美しい展開。  
◎フアンの要望にこたえて特に作成  
した女性対女性の女斗美、女斗場  
面並に女性同志の緊縛場面を若々  
しい三人の女性によって力いっぱい  
に躍動して貰いました。

## △美しき縛しめ▽第九集

「女性刑罰拷問特集」 西洋篇

革具に拘束される女

一部一〇〇〇円(送共)略号△美9▽ 媚態72葉

モデルⅡ美木乃々子Ⅱ大塚啓子

真白で肉づきのよい女体が黒光  
りのする革具或は褐色の牛革具に  
よって嚴重に縛しめられる、さま  
ざまな姿態を七十二葉の華麗なフ  
ォトによってグラビア写真集とし  
て、ここに完成、同好の方に提供  
いたします。

前の場合もそうだったが、この趣味の人は  
仲々相手を見つけれないという。

私はまだこの世界をのぞいただけだ。体験  
もしていない。(一度体験してみても良いと  
は思っている。相手になって下さるお嬢さん  
がいらっしたら御連絡下さい) したがっ  
て、口はばったい事は云えないが、こういう  
会合があっても良いのではないかと思う。関  
係のない他人に迷惑をかけるのであれば、  
うっせきした気分を発散するには、他に場所  
がないだろう。

この会合の有様をもっと刻明に描写すれば  
良いのだが、どうも刺激が強過ぎて、無理に  
書こうとするとルポらしからぬ物になる危険  
性があるので、この程度に止めておくことに  
した。このルポの回数を重ねれば、もっとポ  
イントをつかむことも出来るだろう。

車で送ろうというM氏を断わって私は歩い  
て駅に向った。心なしか足元がおぼつかなか  
った。目の前に白い少女の体がちらつく。何  
となく、あの少女に一度縛られてみるのも悪  
くはないなと思うようになって来た。







のだ、と変質的な荒々しい欲望も湧いてくるのであった。

調教室の前に、ようやく、たどりついた小夜子は、ガクガクと慄え出し、美しい顔をねじ曲げるように伏せて、一きわ激しく、すすりあげ出す。

「日本一の調教師に指導してもらおうと思うと嬉しくて泣けてくるのね。え、お嬢さん」

銀子は小夜子の嗚咽する美しい横顔を楽しそうに見ながら、そんな事をいい、調教室のドアをノックした。

ドアが内から開いて、向う鉢巻をしめた半裸の鬼源が首を出す。

「へへへ、小夜子嬢か。待ってたぜ。さ、入んな」

出歯をむき出した醜惡な鬼源の顔を見た小夜子は戦慄し、はっと顔をそらせたが、

「何してんだよ、さ、お嬢さん、元気を出して」

ズベ公三人は、小夜子の透き通るように白い、艶麗な裸身を押し立て、室内に足を踏み入れて行くのであった。

小夜子は、ズベ公達の手の中で、狂おしく身悶えしながら、ふと、前方を見て、はっとする。

調教室の隅の椅子の上に縛りつけられ、がつくり首を前へ垂れているのは、静子夫人なのだ。後手に縛られた裸身は、きびしく椅子に固定され、両肢も椅子の脚につなぎ止められている。そんな夫人の両側に腰をかがめてさも憎々しげに、夫人の乳房を指ではじいたり、いきなり、かっとして、夫人の頬を平手打ちしているのは、千代と川田の二人であった。

静子夫人は、かたく眼を閉ざし、唇を噛みしめ、二人のそうしたいたぶりを全身で耐えている。

「今、静子夫人は、千代夫人に、一寸、意見されてるんだ。しばらく、こっちで待っていな」

鬼源は、小夜子の肩に手をかけ、カーテンを開けて、その中へ引きこむと、そこは、鬼源のいう検診室で、不気味に光る鉄柱が一本板の間に立っていて、巻尺、体温計、目盛をきざんだガラス棒、その他、婦人科医などが使用するような器具が、乱雑に散らばっている。

鬼源自身、医者を気取って、小机の前に坐り、小夜子に付添って来た形のズベ公達に、小夜子の体を鉄柱に縛りつけるよう命じるの

であった。

さ、こっちへおいで、とズベ公達は、この部屋の中の異様な雰囲気<sup>うつつろ</sup>に気が遠くなりかけている小夜子の体を鉄柱を背にして立たせ、落ちていく皮紐をとりあげて、ひしひしとゆわえつける。

小夜子は、魂までこれらのズベ公にもぎとられてしまった心地で、空虚な眼を天井に向けたまま、ズベ公達に縄がけされている。

「さて」と、鬼源は、まるでカルテでも作成するような調子で、大きな紙とペンを取って小夜子の傍に近寄るのだった。

「いいな、これから、いよいよ、小夜子に対する本格的な調教に入るんだ。今、銀子に聞いたんだが、おめえ、男を有頂天にさせる見事なものを持っているそうじゃないか。それなら、こっちだって、仕込み甲斐があるぜ。今日から、俺はおめえの先生だ。いいか、これから、俺の事を先生というんだぜ。わかったな」

鬼源は、美しい横顔を見せて、悲しげに眼を閉ざしている小夜子に向かい、楽しそうにしゃべりつづけている。

「ちよいと、先生が、ものをいってる時に顔をそらせているなんて失礼じゃないか。これ



からは、そんな態度は許さないよ」

義子が、横から小夜子の薄紅色の可憐な乳首を指ではじく。

「よろしくお願い致します、先生、と礼儀正しく御挨拶するんだよ。いい所のお嬢さんのくせに全くお行儀を知らない娘ね」

ズベ公達に、乳房や臍などを突つかれ、小夜子は、たまらなくなつたように、涙を一杯に浮かべた美しい瞳をあげ、鬼源に視線を向けるのだった。

「——よ、よろしく、お願い致します、先生——」

小夜子が、涙で声をつまらせながら、ようやく口に出すと、ズベ公達は、キャツキャツ手をたたいて喜び合う。

鬼源も満足げにうなずいて、

「よし、そういう風に、これからは素直になつて俺の調教を受けるんだ。いっとくが、もうおめえは、大金持のお嬢さんでも何でもねえ。パン助以下の人間だと、よく自分にいい聞かせるんだ」

そういつて、鬼源は、紙を持ち直し、

「これからの俺の質問に、はっきり答えるんだぜ。おめえを調教する上の資料になるんだからな」

といて、紙の上にペンを動かせ始める。

「村瀬小夜子、二十二才、青葉女学院出身、専攻はフランス文学、特技は、声楽、それにヴァイオリンだったな」

「——ハイ」

小夜子は、伏眼し、消え入るように小さくうなずくのであった。

「へへへ、こんな事は、どうでもいい事だ。えーと、生理日は、二十五日前後だったな」

小夜子は、首筋まで真っ赤にして、再び、小さくうなずく。

「初交は？」

小夜子は、ああ、と首を左右に振りながら耐えられなくなって、嗚咽し始める。

「こいつは聞くだけ野暮かも知れねえな。じゃ、おめえにとって、あの津村さんが最初の男ってわけか」

小夜子は、泣きじゃくりながら、うなずくのである。

「そうかい。それだけ聞きや充分だ。じゃ、も一度、念入りにおめえの体のサイズを計っておこう」

あたい達が手伝ってやるよ、とズベ公達は巻尺を取上げ、小夜子の体にまといつくようにして、縄にくびられた乳房の周りに巻尺を

巻きつかせる。

「バストは八十七糎ってところね」

鬼源は、ズベ公達にうなずきながら、ペンを紙の上へ走らせる。

「さて、次は、おヒップ」

銀子と朱美は、腰をかがめて、巻尺で小夜子のヒップを計り始めた。

「ヒップ、八十八糎。ね、鬼源さん、このところは？」

銀子はクスクス笑いながら、意味深げに指でつつく。

小夜子は、苦しげに眉を八の字に寄せ、嫌々と首を振るのだが、

「馬鹿ね。——一番肝心じゃないの」

と、ズベ公達は、顔を見合わせて、笑い合う。

「そいつは、専門家に任せて頂こうか。縦幅横幅、奥行と、少し、くわしく測っておきてえのだ」

鬼源は、巻尺とガラス棒を持って、小夜子に近づく。

「嫌、嫌、ああ、お願いです！」

鬼源が、腰を落して、巻尺を引き出すと、小夜子は、ひどく狼狽して、ぴったりと両腿を閉じ合わせ、全身を針のように緊張させて



しまう。

「馬鹿野郎！ 今更、こんな事を羞しがってどうするんだ。何時までもお嬢さん気取りでいやがると承知しねえぞ」

鬼源は、突然、大声をはりあげ、カミの毛をつかんで力一杯引張るのだ。

あっと叫んで、小夜子は、大きく首をのけぞらせる。

「吸い上げたり、吐き出したり、切り刻んだり、これから、色々……芸当を仕込まなきゃならねえんだ。無駄な手数をかけさすんじやねえ！」

鬼源にきびしく叱咤された小夜子は、打ちのめされたように首を垂れてしまう。

「さ、少しおとなしくしな」

鬼源は、小夜子の可愛い臍を指で押す。

銀子と朱美が、小夜子の華奢な肩先に手をかけるようにして、

「鬼源さんを怒らせたなら自分が一番損じゃないの、小夜子。さ、……鬼源さんに何もかも見て頂き、しっかりサイズを計ってもらいな」

小夜子は、絹糸のような、か細いすすり泣きをくり返しつつ、小刻みに慄えながら、静かに肢の力を抜いていくのであった。

## 美女と白痴

調教室の隅では、千代が椅子に固定された静子夫人の頬を再び、ピシヤリと平手打ちしている。

「岩崎親分に私の悪口をいって、自分がいい子になろうとしたんだろ。え、静子」

千代は、次に静子夫人の黒髪をつかみ、ぐいぐいとしごくので、川田がたまりかねたように千代の手を押さえた。

「ま、それ位にしときなよ。お前も随分と根に持つ女だな」

千代は、静子夫人の裸踊りを肴にして、岩崎とねんごろに酒を飲もうとしたのに、急に岩崎に部屋から追い出され、その原因は静子夫人にあると気づいて、岩崎と一晚を過ごした夫人を兄の川田に頼んで、この調教室へ連れこみ、ねちねちといたぶり出し、昨夜の恨みを晴らしていたのであった。

千代にとって、もう一つ腹立たしい事は、今夜のショーに静子夫人は出演させるに及ばず、と岩崎が田代に指示した事である。つまり、岩崎は、一晚で完全に静子夫人の魅力に参ってしまったのであり、このような素晴ら

しい美女を衆人環視の中で卑猥なショーに出演させるという事にこだわり出したのだ。

遊廓へ上った客が気に入った遊女の身請けを申し出るという場合と同じで、岩崎にそうした気持が動いている事も事実なので、田代も森田も内心弱っている。とにかく、あれだけの美しい容貌と見事な肉体を持つ女であるから、一晚を共に過ごした男が有頂天になり、のぼせ上ってしまうのは当然と思われるが、思わぬ所に問題が出て来たものだ。と田代も顔をしかめているのであった。たとえ、一千万の現金をつままれても静子夫人だけは手離したくなかったし、また、誘拐した女を他へ売り渡す事など絶体に不可能な事である。静子夫人にせよ、京子や美津子にせよ、一生涯、この屋敷から外へ出す事は出来ないのだ。

「いい事があるわよ」

千代は、ふと何かを思いついたように川田の顔を見た。

「とにかく、この女にや捨太郎という白痴の男が旦那にきまったんだろ。あの薄馬鹿がこの女の亭主だと、はっきり親分にわからせりゃ、いくら物好きな親分でも、二の足を踏むさ。白痴男の女を寝取ったなんて、親分の沽券にかかわるじゃない」



それを聞くと川田も、成程とうなずきながら、

「それに、この奥様が、すでに捨太郎の種を腹に宿しているてな事になると、親分だってどうしようもねえからな」

「そうね、フフフ、たしかにそうだわ」

千代は、大きく金歯を見せて笑いながら、

椅子上の静子夫人を見た。

静子夫人は、流す涙も涸れ果てたように軽く瞑目したまま冷静さを表情に見せている。

「じゃ、奥さん、早速、これから捨太郎と仮祝言をあげ、夫婦の契りを結んで頂くわ。フフ、奥さんの新しい旦那は、薄馬鹿のゴリラ男、でもあの方だけは、オットセイみたいに強いというから楽しいじゃない」

千代は、含み笑いしながら、静子夫人の頬をつついた。

「京子がついさっき、ニヤケた気味の悪いシスターボーイ二人と結婚式をあげたぜ。奥さんはこれから、ゴリラ男と結婚式だ。お互にいい旦那を持って幸せじゃねえか」

川田は、椅子の腰に縛りつけてある夫人の肢から縄を解き放し、縄尻をとって、夫人を立上らせる。

「さ、お歩き、ゴリラ男の部屋へ行くのよ」

千代は、量感のある静子夫人の尻をピシャリとたたく。

川田は、バスト九二、ヒップ九十四という見事な夫人の肉体をしげしげ見つめて、

「こつてりと脂が乗って、随分と色っぽくなつたじゃねえか。え、奥さん、最初から見ると、まるで見違えるようだぜ」

そんな事をいいながら、千代と一緒に引き立てようとした時、ドアが開いて、のっそりと捨太郎が顔を見せた。

「おつ、丁度いい所へ来たぜ。捨太郎、これからおめえに、いよいよこの別嬪さんを抱かせてやろうと思うんだ。おめえは、晴れて、この奥様の亭主になる事が出来るんだぜ。どうだい、嬉しいだろ」

捨太郎は、えへらえへら笑って、涎を流しつづける。

「じゃ、ここで簡単な結婚式をさせてやろうよ。教養高き天下の美女と白痴のゴリラ男、これは最高に面白い組合わせと思うわ」

千代は、手をたたいて笑いこける。

川田は静子夫人の背を押して、太い鎖が天井より垂れ下がっている所へ連れて行く。何時か、衆人環視の中で、脂汗を流しつつ、夫人が果物を切らされた恐しい地点へ夫人を立

たせた川田は、素早く夫人の縄尻を鎖へつなぎ止めるのだ。

「さ、捨太郎、こっちへ来な」

川田が白痴男を手招きする。

捨太郎は、相変らずニタニタ笑いながら、のっそりと夫人に近寄って来て、縄に緊め上げられた豊満な乳房、むっちりとした肉づきのいい大腿、美しいカーブを描く量感のある尻などを眺めながら、夫人の周囲をぐるぐる廻りだした。

「どうでい、捨太郎、こんな天女みてえに美しい奥さんと、これから毎日いちゃいちゃして暮らせるんだ。思っただけで体がウズウズして来たろう」

川田がそういうと、捨太郎は、はいていたよれよれのズボンを引き下したので、川田も千代も面喰った。

「馬、馬鹿野郎」

川田は思わず吹き出して叱ったが、千代はキャーと大袈裟な悲鳴をあげ、川田の背へ顔を隠すようにして、笑いこける。

それはたしかに人間離れした巨大さで、いきなり見せつけられた川田と千代は、度肝を抜かれた思いになったのだ。

「まだ早えよ。何も俺達に、見せなくてもい



い、早くしまいな」

捨太郎は川田にどなられ、真っ赤になった顔をねじ曲げるようにしている静子夫人の方をニタニタして見つめながらズボンをはく。

「じゃ、私は、ここへ田代社長を呼んで来て静子と捨太郎の結婚式に立会って頂く事にするわ。社長もきっと安心する事だと思うわ」

千代は、そういって、そわそわと部屋の外へ出て行った。

「——川田さん」

静子夫人は、千代の姿が消えると、うるんだ美しい瞳を川田に向けた。それは、川田に對し哀願する眼差しではなく、もうこうした自分の運命を拒否する事は不可能だと諦めた悲しい冷静さを瞳の底にたたえた静子夫人である。

「もう私、これでいよいよ二度と世間へ出られない奴隷となってしまうわけなのね。御満足？」

と、いささか皮肉な調子を含めて、夫人は川田にいうのだった。

「そうだね。奥さんは、千代や俺にとっても元はといえば御主人様だ。それをよ、こういう具合に俺達の完全な奴隷にしちまったんだから、笑いが止まらねえよ」

「私、貴方達に對し、何一つ恨みをかうような事はしなかったつもりです。そ、それなのに——」

冷静につくろい、川田に皮肉の一つでも浴びせようとするものの、ふと、感情が高ぶり出し、静子夫人の切長の美しい瞳からは一筋二筋、熱い涙が流れ落ちるのであった。

言語に絶する残忍ないたぶりを受け、身も心も無残に打ちくだかれて、秘密ショーに出演する肉体に作り変えられてしまった夫人であるが、今、白痴男の所有物にしようと企らむ悪魔のような川田や千代に對し、こらえにこらえて来たたまらない屈辱感と彼等に對する憎悪が一つのものとなり、火の玉のように胸元に突き上げて来たのであった。

「奥さんに對して、俺は恨みも何もねえけどよ。とにかく、天下の美女と騒がれた遠山財閥の令夫人を、こういう具合に泥沼へ引きずりこみ、泥水の中でアップアップさせるって事が俺はたまらなく面白いんだ。理由はそれだけの事さ」

川田は、煙草を口にして、ゆっくり煙を吐きながら、せせら笑った。

静子夫人は、眼を閉ざし、川田のいう事を俯向いたまま聞いていたが、急に氣持を取り

直したように美しい顔を挙げた。

「わかったわ。貴方達が静子を今後どのような方法でおもちゃになさろうと、もう静子は決して泣いたり、わめいたり致しません。ですけど川田さん、静子の頼みを一つだけ聞いて下さい。ね、お願い」

静子夫人の眼に必死なものがにじみ出す。

「何だね、いってみな」

「静子は、もう人前には出られないこんな女になってしまいました。もう静子はもうなってもいいんです。ですけど、まだ若い小夜子さんや美津子さん達が、私のような女になっでいくのだと想像すると、怖しくて、それだけは、ど、どうしても、がまんが出来ないのです」

そこまでいうと、静子夫人は遂に肩を震わせて、嗚咽し始めた。

「お、お願いです。あのお嬢さん達だけは、もうこれ以上——」

あとは言葉にならず、顔を横に伏せて泣きじゃくる静子夫人だったが、川田は、今まで能面でもつけたように、暴虐の嵐の中に立ちながら、数々のいたぶりを耐え抜いて来た静子夫人が、急に人間に立戻ったようにそうした哀泣を見せた事に、何ともいえぬ心のうず



きを感じ出したのである。

「よ、奥さん、そう泣くなよ。ま、俺に任しときな。俺だって少しは血の通った人間だ。奥さんがそう頼むなら、小夜子や美津子達を他の男客のおもちゃにさせるような目には会わさねえ。あの社長は血も涙もねえ人間だが俺がいえは何でも聞きとどけてくれる甘い所があるんだ。ま、悪いようにやしねえよ」

と、川田は、小さくすすりあげる静子夫人の柔軟な肩に手をかけ、夫人の顔をのぞきこむようにしていうのだった。

「ただし、俺の方も奥さんに希望があるんだぜ。千代のいう事には絶対服従してもらいたいんだ。千代と俺は遠山財閥相手に大きな博打を打ってるって事は奥さんだってわかってるだろう。千代が遠山隆義の正妻におさまるって事が俺の夢なんだよ。千代が奥さんを眼の敵にするってのも当然のことさ」

「そ、それなら——」

静子夫人は、すすりあげながら川田の顔に涙を一杯浮かべた美しい瞳を向けた。

「どうして、私を一思いに殺してしまわないんです。そんなに静子が邪魔なら、何時までも生かしておく事はないじゃありませんか」  
ハハハ、と川田は、愉快そうに大きく伸び

をして、

「冗談じゃない。お前さんのようにいい女をむざむざ殺らせるもんか。顔といい体といい最高級品、しかも、お目当てきたら正に絶品だ。鬼源もいってたぜ。随分、色々な女を手がけて来たが、あんな見事な女は初めてだつてね。そういえば、この間、拝見した芸当にしたって、まるで正宗のような切れ味の良さだったじゃねえか」

川田は、消え入るように顔を伏せ、屈辱に打ち震えている静子夫人の美しい横顔を見つめながら、そんな言葉のいたぶりを始めるのだったが、

「いいな、奥さん、とにかく千代は、静子夫人が特定の男を持ち、その子供を腹に作るって事になりやすっかり安心して、これからの仕事に調子が出るといってるんだ。つまり、静子夫人の再婚先がきまらねえと落着かねえんだよ」

川田は、静子夫人の悲痛な覚悟と、小夜子や美津子達の事をかばい始めた心の隙間に乗じるようにして、これから始まる静子夫人と捨太郎との結婚式の演出に、とりかかろうとするのである。

「喜んで、捨太郎と夫婦になり、捨太郎の子

供を生むって事を、千代にいつて奴を安心させるんだ。いいな、そうすりゃ、約束通り、小夜子達の事は悪くはしねえからよ。頼んだぜ」

川田は、静子夫人の耳元に口を寄せ、千代にはこう約束しろ、とか、社長には、こういえ、とか指示するのだ。

静子夫人は、川田のいうその一つ一つを、すすり上げながら柔順にうなずいている。川田は、夫人を田代の前で、如何にもショーのスターらしく、艶然とした肢態をとらせようとするのであるが、それは、川田の田代に対するいわば点数稼ぎのようなものであった。

やがて、廊下に田代の高笑い、千代の追従笑いが聞え出す。

「さ、お出ましになったぜ社長が。しっかりやんな」

川田は、夫人の耳から口を離す。

静子夫人は、一切の末練を断ち切った如く気高いばかりに冷厳な表情を作り、静かに瞼を閉ざすのだった。

## 怖ろしい演技

執拗な位に丹念に拭き取った春太郎と夏次



郎は、ようやく立上って、死んだようにぐったり、首を垂れている京子の耳たぶをくすぐる。

「ホホホ、どう。さっぱりしたでしょう。おねえ様」

二人のシスターボーイは、屈辱の極に顔も上げる事の出来ぬ京子を楽しように眺めていたが、やがて、京子の足元に置いてある、ピンクの可愛いおまるをかかえ、京子の眼の前へ持っていくのだ。

「随分、貯っていたものね。ホホホ、まあ、嫌だ。ホカホカ湯気が立ってるわ」

京子は、キリキリ歯を噛み鳴らしながら、眼の前に近づけられたそれより必死に眼をそらしつづける。

「さて、さっぱりした所で、そろそろお床入りと参りましょうか」

春太郎と夏次郎は、ようやく、左右へ大きく開かせ、皮紐でかたく結びつけた京子の足首に手をかける。

皮紐はやっと解かれたが、京子はすぐに肢をすばめる事は出来なかった。足首も腿の付根あたりもしびれ切り、自分の自由にならない。

やがて、徐々に肢と肢とを引き合わせ、よ

うやく、ぴったりと太腿を密着させると、二人のシスターボーイは鼻唄を唄いながら、天井のロープより京子の縄尻を解き始めた。

「ね、お願い、このまま、しばらく休ませて頂戴」

と、京子は、肩や背に手をかけて、夜具の上へ運び込もうとする二人に、哀願の眼差しを向けた。

「あら、駄目よ。そら見て、私達、もうこんなになっちゃってるのよ。どうしようもない位にがつついてるんだから」

と、春太郎は、いやしい素振りを示して笑うのだ。

京子は、はっと反射的に……眼をそらせ、たまらない嫌悪感に小さく首をすくめてしまう。

夏次郎がうしろから京子の首筋に鼻を押しつけるようにしている。

「ずるいわ、おねえ様ったら、御自分だけいい思いをして、私達の悩みは解決してくれないなんて、そんなの卑怯よ」

「そうよ、そうよ、今度は私達だって、充分楽しませてもらうわ」

京子の縄尻をとった春太郎と夏次郎は、京子の肩を左右から抱きすくめるようにして、

二本の吊り皮の垂れている夜具の上へ京子を押し進めて行く。

フラフラと京子はつんのめるようにして歩き出したが、長い間、両肢を拘束されていたため、思うように腰や肢に力が入らず、その場へよろけて、膝頭をついてしまうのだ。

「まあ、情ない。唐手二段の威勢の良さはどうしたの。さ、しっかり歩いて歩いて」

引きずるようにして京子を夜具の上へ乗せあげたシスターボーイは、後手に縛られたままの京子をひっぱ返すようにして、仰向けに倒し、右と左から京子の肉づきのいい肢を強引に上へ持ち上げるのだ。

京子にますます屈辱的な肢態をとらせ、時間をかけて、いたぶり抜き、それぞれの……を充分満足させようという胆なのだ。

いよいよこの化物達に——そう思うと、京子は、一旦は悲痛な覚悟をしたものの、あまりにもみじめ過ぎる自分が口惜しくなり、夜具に頬を狂おしくすりつけて泣きじゃくる。

「まあ、おむつを取り替えられる赤ちゃんがむずかって泣き出したみたい」

京子の肢を皮紐にしっかりと結びつけた春太郎、夏次郎は顔を見合せて、笑い出した。

京子は、涙を振り切るように一、二度首を



振って、のぞきこんでいる二人の男に視線を向け、

「さ、どうでも好きなようにして頂戴。か、

覚悟は出来ているわ」

そういうや、さつと横へ顔を伏せ、観念の眼を閉ざすのだった。

「そんないい方はないでしょ。貴女は、私達のお嫁さんになったのよ。初夜の時に、どうでも好きなようにしろという花嫁がいるかしら。駄目ねえ、少し、教育してあげるわ」

むっちり引き緊った野性味と官能美を備えた京子の太腿は大きく開いて天井へ吊り上げられている。見ても息苦しいばかりに艶めかしい。そうした腿からヒップにかけての美しい曲線を、二人のシスターボーイは陶然とした面持でしばらく眺めていたが、やがて、京子の左右に肘枕をするようにしてはら這い、見事に成熟し、豊かな盛り上りを見せしている二つの乳房の上へ、そつと片手を乗せ合うのだ。

「私達はね、貴女を自分達の妻にするのと同じ時に、誰からも愛される可愛い女に教育する任務があるのよ。さつき、吉沢さんは私を呼んで何といったか知っている。お前達、京子を散々おもちゃにして、あとで京子は何一

つこつちの欲求を満たそうとせず、暴れつづけたと報告しろ、というのよ。何故だかわかる？ そうすりゃ吉沢さん、貴女の妹さんに手を出す事が出来るからよ。社長とそういう約束が出来ているのよ」

春太郎が京子の耳に口を当て、そういうと京子のはつとしたよう眼を開き、口惜しげに唇を噛むのだった。

「勿論、私達、そんな卑怯な真似はしないわよ。私達は、おねえ様の味方よ。あら、自分の妻に、おねえ様なんて呼び方はおかしいわね。これから京子と呼ぶわね。とにかく、私達は、京子が、悦んで私達二人の愛を受入れたと社長に報告するつもりよ。私達の気持、わかってくれるわね」

男の官能をかき立て、自分自身も大いに燃えて、二人の愛を受入れねば、自分達の出よう如何では、妹の美津子を吉沢のキバにかけさせる事も出来るのだぞ、という事を春太郎はいいたいのだ。が、京子は、春太郎の仕掛けた網に見事にひっかかった形となった。

「御生です。美津子を、あの人達の手から守ってやって。そのかわり、京子は——」  
貴方達の要求する事なら何でも聞く、と京子は小さく、唇を震わせながらいったのだ。

「いいわよ。それじゃ、私好みの寢室のエチケツトについてお教えするわ。うんと聞く人に楽しい思いをさせてあげればいいのよ」

「聞く人ですって？」

「フフフ、つまりね、テープをとるわけよ。

如何に京子嬢が悦び、燃え立ち、私達二人と楽しいプレイを演じたかって事を、社長に報告するためには、テープが一番効果があるんじゃない」

それから、約二十分ばかり、春太郎と夏次郎は、京子にびったり左右から添い寝して、どのように京子が受け、また、積極的に挑めばよいかという事を、代る代る京子の耳元に吹きこむのであった。

それは、京子にとっては、この屋敷へ捕われて受けたどの拷問よりも辛い苦しいものである。

「そ、そんな事、ああ、私、いえない、いえないわ」

思わず、京子が全身を燃えるように熱くして、首を振りつづける程、女として口に出せないおぞましい言葉をも春太郎は要求する。

「愛しい妹さんを吉沢の手から守ると思えばそんな事、なんでもないじゃないの」  
春太郎は、京子のそうした悦びと感激の声



を適確に録音するには、自分達は冷静な傍観者にならねばならぬ故、も一度、道具を使って京子をのたうたせ、その状態にまで持って行こうと夏次郎に提案した。

「仕方がないわ。私達、調教師として月給を貰うんですからね」

夏次郎も納得する。

「じゃいいわね、京子。とくに最後、スパークする時は、さっき教えてあげたような事がありったけの声をはり上げて叫ばなきゃ駄目よ。ここはクライマックスで一番テープを聞く男が悦ぶ所なんだから」

さ、支度にかかろうよ、お夏、と春太郎は上体を起し、二人がかりで京子の尻を持ち上げ、その下へ枕を押しこんだ。

生臭いばかりに官能的な弾力のある見事なヒップがデンと枕の上に据えつけられ、その二つを二人のシスターボーイの好奇心な眼に、堂々とばかりに、さらけ出してしまった京子は、もうはつきりと心のふんぎりをつけたのか、力のない、ねっとりした瞳を天井の方に向けている。

「じゃ、お夏、私、甲側を受持つからね。あんたは、この二つを、お道具で責めてあげてよ。小さい方はガラス棒、大きい方は桐箱の

中身で、いいわね。同時責めにかけるのよ」

「了解、了解」

夏次郎は、その二つの道具を、京子の……へ置き、手にしていた……を春太郎に示す。

「ね、今度はこれも使ってみない。おねえ様に美しい声を出させるためには大変効果があると思うわ」

「そうね。じゃ、たっぷり、その両方に………んであげて」

あいよ、と夏次郎は、指先にたっぷり掬いあげると、その……こみ始める。

「あっ、ああー」

京子は、その瞬間、激しく吊り上げられている両肢を動かして、大きく身を跳かせ始めた。

春太郎は、いいのよ、いいのよ、と悶えだす京子をなだめるようにしながら、京子に添い寝し、柔かい耳たぶや頸筋、咽喉首に軽く口吻を始め出す。

時には、しつこく、時には優しく、……そんな所を選んで口吻したり、軽く噛んだりしながら、春太郎の巧妙な……何時しか京子の縄をからませた胸の豊かなふくらみに移向していく。

そして、春太郎は、熱い息を吐きかけるようにして、京子の耳元に口を寄せながら、

「そろそろテープレコーダのスイッチを押すからね。いいわね、京子。美津子を救いたければ、自分に抗わず、燃えて、燃えて、燃え抜くのよ」

春太郎は、両手を使って、京子の豊かな隆起をゆっくりと……しながら、ふと、夏次郎の方へ眼を向けた。

「お夏、京子がおねだりしてから、始めるのよ。それまで手を出しちゃ駄目」

乳房を……、咽喉のあたりに羽毛のように柔かい口吻を受ける京子は、吊り上げられている両肢と枕の上の尻を、さももどかしげにゆらゆら動かしながら、熱くなった頬を春太郎の肩あたりにすりつけ始めるのだった。

「お願い」○本誌発行所宛通信をお出しになるときは、大阪市住吉郵便局私書函第四十一号暁出版株式会社宛として下されば確実迅速に到着いたします。阿倍野郵便局私書函第十四号天星社又は箕田京二宛にても郵便物は受領しておりますから、こちらへお出し下さっても構いません。尚、勝手ながら直接の御訪問は固くお断りいたします。



# カメラ・ルポ

／＼川越美佐子の巻

## この女ひとと

### 山本一章

「あんた宛のラブレターが来ていますよ」

話の途中で箕田氏が突然私の前に一通の封書を差出す。私にとっては社を通じて受取る初めての手紙である。裏返した私はそこに書かれてある女名前に胸をときめかした。――

川越美佐子――勿論、全然知らない名前である。箕田氏はニヤニヤ笑いながらソファに凭れたまま窓の外へ視線をやっている。早く読めと云わんばかりの態度である。彼は大人である。私は急いで封を切る。

（突然のお便りでごめんなさい。先生のカメラルポや痴人の糧を愛読しています。一度お目にかかれたらと何度か思い悩んだ揚句、思

い切って書くことにしました。お忙しい先生のこと故とても会っていただけないのではないだろうかと案じています。もし御都合がつかまりましたら来る九日（日）の午後一時頃、大阪港みなと遊園正面入口まで来て下さい。当日私は右手に黄色のハンカチを持っておりますから、もし御覧になって失望なさるようでしたら声を掛けずにそのままお帰り下さって結構です。私二十二才の独身です。詳しいことはお会いして。お待ちしております）

どうも先生などという聞き慣れない言葉でピンと来ないが、私の拙文の愛読者なのは嬉しい。彼女がSなのかMなのか、私と会って

話だけをしようというのか、それともプレイまで望んでいるのか全く見当がつかない。しかし私が受けた初めての、デートの誘いであり、また彼女の方から先ず見てくれという態度は好もしかった。一読した私は直ぐ彼女と会うことを決めていた。

「どうです、会えそうですか？」

箕田氏が私に視線を戻す。

「そうですね。会いたいと書いてありますから騙されるつもりで行ってみますよ。二十二才の自称ですが、どうですかねえ」

「ほほう、若いね。もし撮らせる娘ならルポにして下さいよ」



この編集長は仕事熱心である。この熱意が奇クを今日まで育てることができたのである。私は黙って肯ずく。暖い春の日ざしが一ぱいに射し込む午後のことである。

○ 約束の日曜日、生憎と朝からの雨である。

果して彼女はこの雨の中をやってくるだろうか。恐らく雨の遊園地は人も少く、彼女の指定した場所は却って目立つのではないだろうか。しかし私は行ってみることにした。今まで何回となく待ち呆けの前歴を持つ私のことであるから、一回位どうということもない。

境川から市岡を越え、高架の地下鉄(?)

に沿って大阪港へ。どこが正面入口なのか分からないので煙草屋で聞く。人通りは少なくとも心細くなってくる。元の天堡山棧橋の手前をくると廻って右折する。その右手に想像していたよりは小さい切符売場と改札があったが、案の定人影は殆んどない。私は車を素通りさせ消防署の前を右へ曲る。時計を見ると一時十分前なので一旦車を停めて煙草を一ぷくする。雨は細かく降り続いて止みそうにもない。気分の重くなる天候である。再びUターンして徐行しながら車を正面改札に向けて走らせる。いた。黄色のハンカチを手に

した若い女性が、ピンクの傘をさしてゆっくりと歩いている。一瞬私の顔へ血が上る。スタイルも悪くないし、顔もなかなかの美人である。彼女は私の自動車に気がつかないのか下を向いたまま歩き続ける。行き過ぎた私は車をまたもやUターンである。しかしそのままでは彼女の歩いている歩道は反対側になるので、もう一回消防署の前でUターンして彼女と出会うようにする。彼女の側まで来て車を停める。彼女はハッとした表情で顔を上げる。みるみるその白い顔が赤くなって行くのを私は美しくしいと思った。車を降りた私は傘をささずに雨の中を走って彼女の側へ行く。彼女は立止まったままである。

「川越さんですか? 山本ですが——」

彼女が真赤になった顔を肯ずかせるのを見た私は、直ぐ助手席のドアを開けて手で合図をする。川越さんは逆わずに乗込んだ。白いブラウスの良く似合った清楚な感じの若い娘である。私は車を大阪港の突堤に向けて走らせた。先ず話さなければならぬ。

「このお近くなんですか?」

「いいえ、地下鉄で来ましたの」

「それじゃどうして、ここの場所を選んだんですか?」

「知った人に見られたら恥かしいから」

なかなか用心深いことである。しかし反ってその返事が私に親しみを感じさせた。普通の何でもない若い娘が見知らない私にデートの申し込みをするのさえ相当な勇気がいるのに、ましてや素姓の知れないその男と会おうというのだから、人目をはばかりるのは当然の人情である。

「雑誌はいつも御覧になるの?」

「ええ」

川越さんは、俯向いたまま小さな声で答えた。白い顔が私の目に新鮮な感動を呼ぶ。どうやら二十二才というのは、本当のようである。

「経験は?」

「ええ?」

「括られたことはありませんの?」

「……………」

彼女は僅かに顔を横に振った。

「今日撮らして貰えるの?」

「……………」

川越さんは再びその白い顔を朱に染めたが拒否するようにも見えない。これ以上縛りのことや責めの話を彼女にしてみても返事を得られそうにないので、その話は一旦打切る



ことにした。彼女が拒絶しない以上、私はその若い体に縄を掛けるつもりである。

車は真新しい倉庫の建った突堤の先端まで進んだ。雨に煙った海のここかしこに大小の船が行き来して慌しい感じである。車を停めた私は、煙草に火を付けた。

川越さんは伏目にハンドバッグの口金を開けたり閉じたりしている。

再び誘惑を開始する。  
「今日はどんな予定？」

「別に考えてませんわ」

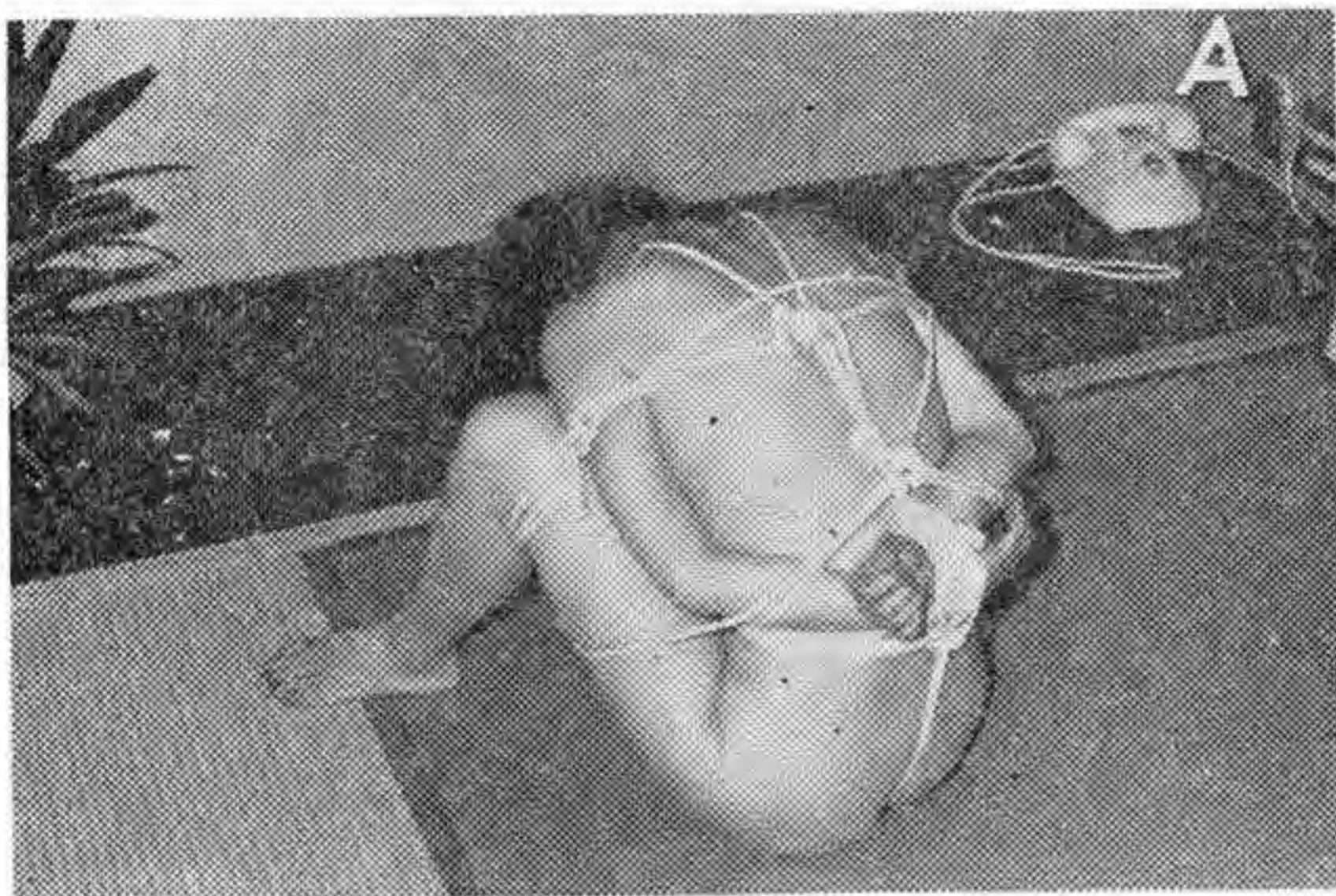
「モデルになって、くれる？」

「……………」

どうも話しの進行がスムーズに行かない。私は内心いらいらしてきた。ドライになれと、いう方が無理なのかもしれないが。

「いつ頃から雑誌を読めるの？」

「もう二年位になりますわ」



「縛られてみたいと思う？ それとも縛ってみたい？」

「わたし女ですわ。だから……」

分ったような分らないような返事である。

「こんな所ではなんだから、どこかで落着きましようか？」

いいでしょう？  
いやなら縛らないから」

暫らく彼女は

黙っているの

私も煙草をふか

しながらラジオ

のスイッチをひ

ねった。お笑

いの時間である。

どうも二人のデ

ートに似つかわ

しくないが、息

づまるような沈

黙を救うのには

反って良かった

かもしれない。

「道具は持って

きていらっしや

るの？」

「ああ、カメラもロープも積んできていますよ。やってみますか？ それとも今度にしま

すか？」

心にもない探りである。

「お委せするわ」

蚊の鳴くような小さな声であつたが、私は

その一言を聞き逃さなかつた。もうためらう

ことはない。私はエンジンを掛けて車を東へ

走らせた。

○

「先にお風呂へ入っていらっしやい」

一室に落着いた私は、黙って坐っている川

越さんに声を掛けた。そして早速カメラバッ

グを開けてカメラを取り出す。彼女を無視し

て準備を進めて行く方が彼女の気分もほぐれ

ると考えたからである。カメラにフィルムを

装填しコードを引く。彼女はしばらく私の準

備を見ていたが思い切つたように立ち上つて

そのまま部屋を出て行った。彼女、備えつけ

のタオルやバスタオルも持たずにどうする気

だろうと私は独りでおかしくなった。浴室の

湯の音が消える。案の定、部屋の襖が開いて

彼女が顔だけを覗かせる。

「あのう、タオルは……」



「その洋服簞笥の中に入っている筈だよ」

「済みませんけど取って下さらない」

「もう裸になったの？ そのまま入っておいでよ。僕は構わないから」

私はそう云いながらも笑ってしまった。川越さんも顔だけ出したまま笑った。

「意地悪！」

どうやらこれで二人の間の気詰りな空気が一掃されたようであった。私は綺麗に畳まれたタオルを手にして彼女に近づいた。彼女が裸の腕を伸ばしてタオルを受取る一瞬を見計って、私は一気に襦袢を開けた。

「キャッ！」

白い裸身が一目散に浴室へ走って行った。

私はその川越さんの態度に若さを感じて愉快になった。若い女は生来陽気なのを好む筈なのだから、今までの固苦しさは彼女にとっても耐え難いものに違いなかった。湯の流れる音に交って彼女のハミングさえ聞えて来るようである。私も一ぺんに緊張がほぐれた。ラジオのスイッチを押すと軽い音楽が流れてくる。いよいよ良いムードである。

湯から上った川越さんは、シュミーズ姿のまま洋服を抱えて部屋に入ってきた。上気した顔はバラ色の素顔である。彼女どうやら顔を

を洗って化粧を落してしまっただようである。

素人らしくていい。慣れたモデルは入浴しても化粧は落さない。

「化粧した方がいい？」

「そのままでもいいよ。それから僕の記事を読んでもるんなら分っていると思うけど全部脱いで貰うよ」

「最初から？ 怖いみたい」

「物凄く怖いから、覚悟をして置た方がいいね」

川越さんは胸を抱えるようにして笑った。私は彼女の側に近寄って、その額にそっと口を寄せる。彼女は一瞬真面目な顔になると言った。

「いたずらはしないでね。山本さん信用してるけど——」

「それは光栄だな。真面目な話し、君がいやだということはないから。もし痛かったり苦しかったら云ってくれたらいいよ」

私が脱ぐ恰好をして合図をすると、川越さんはためらわずに裸になった。私は坐ってその裸身を眺める。彼女はそれを意識したのか目を閉じて立っていた。少し痩せ型ではあるが綺麗な肌だし、適当に肉も附いている。乳房の形も悪くない。若さの美である。

「わたしの体、駄目かしら？」

川越さんがつぶやく。

「いいね、凄くいいよ。じゃ縄を掛けるよ」

私は彼女を立たせたまま後手にして縄を巻いた。心なしか彼女の裸身は震えているようである。手首を縛ってから私はそっと顔を覗いてみる。

「どう、きつ過ぎる？」

川越さんは目を閉じたまま顔を横に振る。私はその立姿を二三枚撮りながら、彼女の体は二つ折れにした方が量感が出ていいのではないかと判断した。傍に寄って私は彼女の耳許で囁いた。

「滅茶苦茶に縛るけど、いいだろう？」

彼女は黙ったままである。この際沈黙は肯定と解釈すべきである。自分から望んで来た娘だし、私の文章を読んでいるというのだから、なまじな仏心はこの際無用にした方がいいようである。手首を縛った縄尻を二本に振り分けて上に伸ばし、首の両側を渡して首の前で交叉させ胸に巻く。それから細手の縄を二条にして首縄に通し、体の前面を下に降ろす。縦縄を掛けるつもりである。縄をくぐらすため足首を掴んで左右に少し開かそうとすると、川越さんは、自分で半歩位に足を開い



た。縄をくぐらせて後手へ繋ぐ。

「うーん」

彼女はちょっと駄々をこねるように腰を折ったが、私は容赦しないで、縦縄を押えるように脛の上あたりに何重にも横縄を巻きつけ



る。これで縦縄はしっかりと彼女の肌に食い込んでしまった。肩を掴んでそのまま尻をついて坐らせる。腰を落す時、縦縄が背後でピンと張って坐りにくそうだったので縄を少したぐってやった。前に揃えて伸ばした片足の太腿に縄を巻いてから腕の所まで引き寄せ、その縄尻を背中に廻わして、残った足の腿を同じように引き寄せて縛る。足を縛っている間、川越さんは別段抵抗する態度を見せなかったが一言呟いた。

「恥かしいわ」

両腿を縛った縄が余ったのでそれを手首の上に引掛け、両腿の上方に巻きつけた。彼女は頭をうなだれた。そこを背後から一発。それが写真(A)である。そのまま太腿に手を掛け子供に用足しをさせる時のように持ち上げて体を九十度回転させる。前方から撮るつもりである。すると彼女は大きく溜息をついてから口を開いた。

「顔をかくして」

浴衣の帯で目かくしをし、口にも噛ませる。いわば私の好みでもあるが、最初は素顔を撮るつもりだっただけに聊か残念である。その前面から写したのが写真(B)である。プライバシーを守るため彼女の可愛い顔を披露で

きないのを容赦いただきたい。折り曲げた体が少し苦しそうなので猿ぐつわと目かくしを外して尋ねてみる。

「苦しい？」

「大丈夫よ。ちょっと足が痺れてるけど」

私はそのまま彼女の体を横に押し倒してみた。縄が食い込むのか彼女はちょっと悲鳴を挙げた。しかし私は構わずストロボをそのみじめな裸身に向けて発火させた。その写真が到底発表できるようなものでないことを承知の上で。それから腿の縄だけを解いて立たせる。手首に巻いた縄が多過ぎて掌がうっ血しているようなので握ってみる。

「もう解いてあげようか？」

「大丈夫よ」

川越さんはうっとりしているようである。想像していたことが現実となって体に縄を纏った時、その現実には彼女にとって甘美なものであったのかもしれない。解かれることを怖れてさえいるような彼女の言葉に、私の心はサジスチックに燃えた。別室の寝具をめぐり上げ、その下のマットレスの上に俯伏せに押し倒す。乳房が圧迫されるのか、彼女はちょっと叫びたが私はそれを無視する。いい図である。女体の魅力的な部分の一つである臀部



に縄が食い込んでその量感を強調している。しかもしみ一つないその白い肌はち切れんばかりの若さである。日本人のバックは白人や黒人のそれに比して著しく劣るというのが定評のようであるが、彼女の場合、その形といい滑らかさといい私の好み合っているようである。大きからず小さからず、適度の円みと張りを持ったそれは、私にはたまらない程女を感じさせるのである。彼女の揃えている両足首を掴んで無慈悲に引く。少し抵抗があったが構わず、一ぱいに引いて放す。しかし彼女は足を投げ出したまま引き返えそうとはしなかった。

「うーん、とてもいいよ」

私は彼女に聞えるように呟く。女の自尊心を上手に利用すべきだし、実際見事であったからである。私は思わず何回かシャッターを押していた。その姿勢の露骨さを避けるため左足を曲げさせて撮った。印刷されてどの程度のデテールが出るか疑問だが、その量感と滑らかさは想像いただけるのではないかと思う。

余談になるが、私のカメラ・ルポではその写真の選択と仕上げに神経質な程力を入れているのだが、その原画を見ていただくことも

できず、またグラビアにさえならない現状を残念に思っている。従って掲載されたものは甚だ物足りないのだが、今暫らくは諦めるしかないようである。もし機会があれば写真集にでもして貰えればと考えているが……。

次いで川越さんを私は仰向けにする。手首に体重がかかって痛いらしく、彼女は少し呻いた。

「痛い？ もう解こうか？」

「いいわ。まだ辛抱できる」

彼女なかなかのマゾである。私は仰向けに胸をそらせた裸身の横に腰を降ろす。私の体重でマットレスが弾み、川越さんの体が揺れる。縛った女体をそのままにして煙草を一ぷくする。いつの場合でもそうだが、その一刻は千金の価である。私は煙草の灰を白い腹部の真中で、ポイントを作っている臍窩に落とす。少し離して落したので熱さは感じなかったようであった。胸が喘ぎ乳房がゆっくり上下している。私の目の前にあるものは正しく自由を奪われた女体そのものである。なだらかな二つの丘陵の上に置かれた淡紅色の乳首が羞しげにしかも挑発的に私の視界に入る。私は思わず、その小さな一つに口を寄せた。

「うーん、止して！ くすぐったい」

川越さんはちょっと上体を振った。私は酔ったようにその白い乳房に顔を埋めた。するとしやくるように彼女の体が震え、息づかいの変化するのが感じられた。私は慌てて顔を放す。罪なことだが、これ以上はオフリミットにしなければいけない。

「山本さん、わたし好き？」

突然彼女が呟く。女のよく口にする言葉である。私は答えず、彼女の腕と肩を押してごろりと俯伏せにしてしまう。

「さあほどくよ」

川越さんは黙ったままである。私は手早く縄を解いた。彼女の顔にちょっと拍子抜けしたような様子が見えた。

「縛られてどうだった？」

「……………」

「もう懲りた？」

私が彼女の手首に刻み込まれた縄の跡を撫でながら尋ねると、彼女は僅かに顔を横に振った。

「今度は少し変った縛り方をしてみようか？ いいだろう？」

川越さんはちょっと思案すると、決心したようにいった。

「私を縛って楽しい？」



「勿論だよ」

「じゃ、どんなにしてもいい」

私は、マットレスの上に俯伏せになったままの彼女の体の下から縄を引き抜くと、左手首と左足首を寄せつけて、滅茶苦茶に縛り合わせた。次いで右手を左の肩先に覗かせて右足首に連結する。そのままでは縄が浮いて緊縛感が少いので、左肘とウエストとを一つにして横に縄を掛けた。この縛り方では彼女の足の形が面白い。それが写真(C)である。味のある写真だと思うがどうであろうか。顔を帯で隠したため表情が見られないが、相当彼女は表情を歪めていた。このまま仰向けに引繰り返す時には、殆んど彼女を持ち上げなければならなかったが、背面程迫力がなかったことを附記して置こう。そしてその姿が全く羞恥に充ちたものであったことも。彼女はこの縛りのまま転がした時、感極まったように呟いた。

「もっと虐めて！」

川越さんがマゾの女であることは否定できない。そうなら、私が最後に試みなければならぬことは吊りである。

アンバランスの縛りを解いた私は、休まず吊りにかかる。もう彼女には尋ねない。襖を

外して棧の下に立たせる。逆吊りには少し低いようである。手首を前にしてまずタオルを巻きつけ、その上から縄を強く掛ける。この場合、弛いのは反って危険なのである。両足首も揃えてそこにはじかに縄を巻く。そして手首を上へ上げさせて縄尻を棧にしっかりと巻きつけた。吊りをやる場合、少しの弛みも命とりになる怖れがあるので、慎重にやらなければならない。目かくしをしてから棧の下に化粧椅子を置き、私は片足をその上に載せてみる。膝の上に彼女の体を載せて支えるのに恰度いい高さである。立ったままの川越さんの腿のあたりを横抱きにして体を持ち上げ、化粧椅子に左足を載せて、その膝の上に彼女の腰を置く。そして素早く足首の縄尻を手首の方に寄せて棧に結ぶ。猪吊りである。それを何枚かフィルムに刻んだが、その姿勢ではどうも誌上に出せるのができそうにない。頭の方から撮ったのでは面白味が少いからでもある。

再び膝の上で彼女の腰を支え、足首の縄を手首から一メートル程離れた。最初棧に附くようにして結んだ手首の縄が体重で伸びているのと、掌がどす黒く変っているのが見ていただけだと思う。この吊りは前回笹

原八千子さんに試みたものとよく似ているが(六月号のカメラ・ルポ参照)、また違った趣きが出ていると自負している。こうなれば次は鞭打ちではないか。私は川越さんの顔の





ところで尋ねてみる。

「まだ辛抱できる？」

「手が痛いけど少し位なら」

「おしりを叩くよ」

「……………」

私は平手でその円い尻を叩いてみた。パーンとちょっと気がひける程大きな音がしたので、慌ててラジオのスイッチを廻わして音を大きくする。左右十回ずつ平手打ちをすると私の手の方が痛くなった。

川越さんは声を出さない。

私は縄の束ねたのを手にして、それで軽く叩いてみる。

「それ痛いわ」

初めて彼女が抗議した。縄の先が当るのは平手で相当強く叩くよりもこたえることを私は知った。しかし直ぐに止めることもない。私は二度三度と段々と強く縄で白い臀部を打った。

「やめて！ 痛い、痛い！」

とうとう彼女が悲鳴を挙げた。演出でない実際の責めの雰囲気、私の口の中はねばっこくなった。もっと鞭打ってみたい。

私はふと辻村氏がハントしたという関谷夫人のことを想像してみた。

彼女は強烈な鞭打ちに耐えるばかりか、それを望みさえするというのだから私にとって正に幻の女性なのである。

しかし初めて縛られた川越さんに、それを期待することは酷であろう。悲鳴を挙げている川越さんの足の縄を解いて立たせる。

「わたし叩かれるのは好きじゃないわ。痛いから」

もっともである。痛さを痛さと感じるのは神経のある人間なら当然である。ただ痛さの中に陶酔を感じるか感じないかが、その人のマゾ性のバロメーターなのだ。私はマゾの真髓は鞭打ちにあると信じている。

兎に角、この吊りと鞭打ちで、さしもの川越さんも参ったようである。しかし気嫌を損じたようにも見えないので、私は彼女の手首に附いた縄の跡を強く撫でてやる。

「よく辛抱したね。最初にしては相当なものだよ」

「そうかしら。わたし縛られるだけなら大抵のことは辛抱できると思うわ。でも叩かれるのはねえ」

○

外はもう暗くなりかけている。雨はまだ降り続いてうすら寒い。

私は車を梅田に向けて走らせていた。

最初の出逢いから縄を掛け鞭打ちまでした川越さんは、助手席に深く腰を降ろして外を眺めている。私はその彼女をいじらしく思った。

「後悔した？」

「ううん、大丈夫よ。でも一度経験すると、また縛ってもらいたくなりそうだわ。逢って下さる？」

「それは僕の方から頼むことだね。それとも一度、箕田さんか辻村さんに縛って貰うかい？」

「そうね」

川越さんはちょっと気の抜けたような返事をした。彼女が何を考えているのか私には分らなかった。しかし彼女の顔にちょっと疲れのかけがあったのを私は見逃さなかった。

梅田の雑踏の中へ川越美佐子さんは消えて行った。この別れの一瞬はいつも、私の心を痛ませる。殊に川越さんの場合、彼女から私に呼び掛けてきただけに、私は何か人間の行きずりの果敢なさを感じて、胸を詰まらせていた。

彼女の倅せを祈ろう。

(この項おわり)



## 稿談 性風俗資料入門

(4)

「カーマシャストラ」創刊号 上海版  
「性友艶史」訳本の紹介

斎藤夜居

「カーマシャストラ」創刊号。この雑誌は扉に気取って Societe De Kama-Shastra. としてドイツ書体亀ノ子文字で No.1 と大きく印刷してある。和紙袋綴で本文二度刷一七二頁。四六樹型本。表紙は赤い紙の右の肩に黄色い紙が貼付けてあって、誌名とちよっとユーモラスな感じがする仏像が描いてある。発行は一九二七年(昭和二年)十一月である。

この雑誌は軟派文献中の珍誌として知られているが、今迄に詳しい現品の紹介がな

いので先ず始めに目次の全部を次に写す。

上海移転改題号(第三卷第十号)

支那性的書物解題と

張競生氏一派の仕事に就て

蚤十夜物語

上海摩鏡見物記

愛の魔術

陰陽語難叢

哈哈大笑語

宰相夫人と道化役者

酒井 潔

紅霓娘訳

梅原北明

酒井 潔

佐藤紅霞

清道士

酒井 潔

明治性的珍聞史(下巻)

梅原 北明

これが有名な、と云っても知る人ぞ知る一種の神がかり的伝説まで生んだ梅原北明が上海から発行したという日因縁つきの雑誌の内容である。北明は軟派文献出版のために家宅搜索を受けること数十回、刑法適用を受けた件数二十五件、出版法違反十二回、罰金額を合計すると当時の金で一万一百円、体刑五年以下、それでも死刑や無期にならないのは昭和聖代の有難さだと、の



ちに雑誌『グロテスク』創刊の際の案内状に自記しているが、官憲に追われて日本内地では保身の余地がなくなり、満州、支那上海を転々として放浪した——結果的にはこの時代の無理が、敗戦後、折角彼が期待した時代になったのに四十七歳で若死をもたらしただけの原因となってしまうようだ。よほど放胆な人物の如く、思われて来ているが、その生涯は前半生において全エネルギーを消耗しつくした点でも、敗戦病シラミのチブスに犯され急死だったと伝えられている点でも、末路の哀れさは悲惨である。

このカーマシヤストラ時代に江戸期艶本の挿画図譜を製版したパンフレット程度の画集に「日本張形考挿絵篇」があり、当時の上海消印の封筒のままで保存された資料を見たことがあるが、消息通の裏面談によれば、実際の印刷製本は日本内地の田舎の印刷屋であり上海から発送だけやったという説がある。

カーマシヤストラ創刊号の目次に、第三巻第十号とあるのは、雑誌『文芸市場』が昭和二年九月に第三巻第九号特集「世界デカメロン号」で終わっているもので、その継続を意味するものであった。このデカメロ

ン号の後記の中で「日本にいるのが全くだやになった。やれ警視庁でござい、やれ内務省でござい等々……」。尻の穴の小さい小役人の横行する国。まったく、日本は成っちゃいない。世間の噂ほど当てにならないものはない。

現にこの僕などは、素晴らしい商売人だと噂されているが、その当人が始終損ばかりしている、云々。一九二七年八月三十日、満支に旅立つに際して」と書いてあるから満・支・上海への旅行、というより日本内地をある期間逃げ出した事実と、そうした短期間旅行者が雑誌それも風俗秘密出版物を製作発行するという事柄は、いくら当時上海は八魔都Vとよばれ、今日のハトウキョーVの如き都市であったにしてもうなずけない。然し、それは兎に角いかにも梅原北明らしいエピソードであり、当時のインテリ読者層の一部が本格的な軟派文庫を如何に渴望していたかと云うことが分る。そしてこの『カーマシヤストラ』上海発行版というのは後々までも語り草ともされ近代伝説化され、北明の人を食ったような官憲への挑戦が、勇気のない幾分飽食気味の軟派本愛好家たちにとって、密かに時の政府への溜飲を下げさせる素材を提供したものであった。然し、イデオロギーという点に

おいては誠に平和なもので、読んでみて微笑のほかに危険なこととは何も生れてくるものではなかった。

### ◇ ◇ ◇

次にこの創刊号の内容を説明すると、巻頭の酒井潔は北京大学の張競生教授一派の研究グループの特殊刊行書『性史』や西洋翻訳性欲学書多数を紹介している。それらは総て官憲の忌諱に触れ、当時日本に於けると同様に、発売禁止の連続だった。『性史』が最も有名で、中国の男女の性生活の淫文的な告白集を編輯したもので、赤裸々で猛烈で中には随分いかげんしい告白もあるが、其の各々の文章について張博士が批評している——『性史』という名の書物で実際に張競生がタッチしたのは第一集だけで、この本が実によく売れたので、偽版、珍版、猥版が続々刊行され、遂に張先生は居たたまれず北京から逃げ出したというところが、海外の新聞にまで報道されるに至った。性史まがいの偽書には『性芸』『新性史』『性友』などがあり、読物という点では面白いものだと言っている。

『蚤十夜物語』は西洋艶本直接訳の連載第一回で、ベラーという少女と破戒の悪僧た



ちとの淫蕩譚で、この回では懺悔聴聞の師父アムブローズが密室でうまうまと少女を犯し「オオ、天にましますキリスト様！

私はもうあなたの御許に行きます」と云わせる艶本愛好家によく知られた作品で、昭和四年一月に文芸市場社より紙装三〇〇頁四六版の単行本にもなった。勿論すぐに発禁だが、その後も偽版が次々と発行され、戦後になってからもこの佐藤紅霞訳本からの和文和訳の珍訳本が出たりして、話題に富んだ内容的にもおもしろい作品。僧と少女の秘戯を一匹の蚤が観察するというストーリーで、原書はアメリカ版一九一〇年に拠ったとの由。

梅原北明の『上海魔鏡見物記』はこんにち云うところのシロシロ（女子同性愛）の実見記である。

吾々が着席するや愈々問題のモデルが姿を見せた。一人はまだ十六、七の少女だが、今一人の先生は既に人生の荒波を乗り切って来た中年増だ。共に絶世の美人とは云い難いが支那流に云へば、皮色潔白、身子痴肥、有貴妃之風、花信年華、柳絲云々と云った程度の美人で、マア十人並だ。でも多くの見物経験者が往々に

して見せられたといふ瘦せ衰え切ったモデルでなかっただけ、儲けものだ。二人はベッドの上に向き合って安座した。

処がこのご婦人たち仲々のちゃっかり屋でテクニシャンで、運動競技が益々白熱化するたびに、突然に運動をストップして「非常に苦しいから、内密にもう一ドルお呉れよ」などとねだる。北明は二度も余分に銀貨を与えろのだが、それはシンコツと称する偽銀貨だった、という茶目ツ気たっぷりのいたずらをしている。この女たちが使用する偽陽をコシイサンと称し「角先生」である。男女実演の場合はワシンコンで「活春宮」と称する。

酒井潔の「愛の魔術」はのちに伊藤竹酔の国際文献刊行会より単行本として発刊されたものの素稿である。「宰相夫人と道化役者」はアラビア性典秘籍「匂へる園」よりの抄訳であった。

### ◇ ◇ ◇

『カーマシヤストラ』二号以下を解説するに先立ち、上述の如く創刊号の支那臭が強烈なのでついでに記すと、文芸市場社の上海版と称する『株林奇縁』があった。和綴小型本百二十頁。これは中国の歴史に伝わる永遠の淫姫の物語で、王后となり諸侯夫人となり、

五十を過ぎても処女のままの容色と魅惑に満ちた変化自在のかぐわしい肉体を保つ、素娥のちに芸香という女怪の話で、この書は発禁本中で残存部数が少ないので著名である。

また先きに記した『性史』偽出版物に関する一書の記録が私のノートにあったので、次に手控えのまゝを写す。

## 『性友艶史』

### 訳本の紹介

これは珍本に価する本だが、どういう訳か今迄に紹介されたことが無い。書名を知る人も少い。もっともガリ版刷本だから製作部数も多くて百数部だったと思うし、発行年代は不明だが、昭和三年頃のようにである。菊判型・和綴、一一〇頁。昭和四、五年頃が我国の艶笑出版ルネサンスの前期のピークだったから、これはその花盛りに便乗して密かに刊行されたものらしく、いわゆる梅原北明一派の息のかかっている様子もなく、ある人学識のある趣味的研究家の個人的な刊行物という匂いが強い。製本も自製本で、恐らく稿本作者が謄写印



刷も自ら行った感じがする。原作は中国の通俗的な当時の現代艶本の翻訳であるが、華文をこれだけ訳せることと、原書の入手ルートがある訳者ということになれば、人材は限られているし単なる趣味家ではなく学者と呼んでおかしくなかった人物という推理が成立する。

加えて、この書を自家刊行した点で、しかも、少数数であることはハッキリしているから、珍書屋の手に、成ったものでも無いようだ。不思議な八謎の本Vの一種である。私は、数年前にこれを一読したが、あまりにもこの種の本であるにしても、高価で入手はできなかった。当時のノートによりこの書の大体を紹介してみたい。先ず話が逆になるが奥附から、

中華民國十八年十月出版 性友艶史

定價 大洋三元六角

著作者

季定夷 季函秋

翻譯者

永福 村農

印刷者

國華新記書局

分售者

國華新記書局

各省世界書房

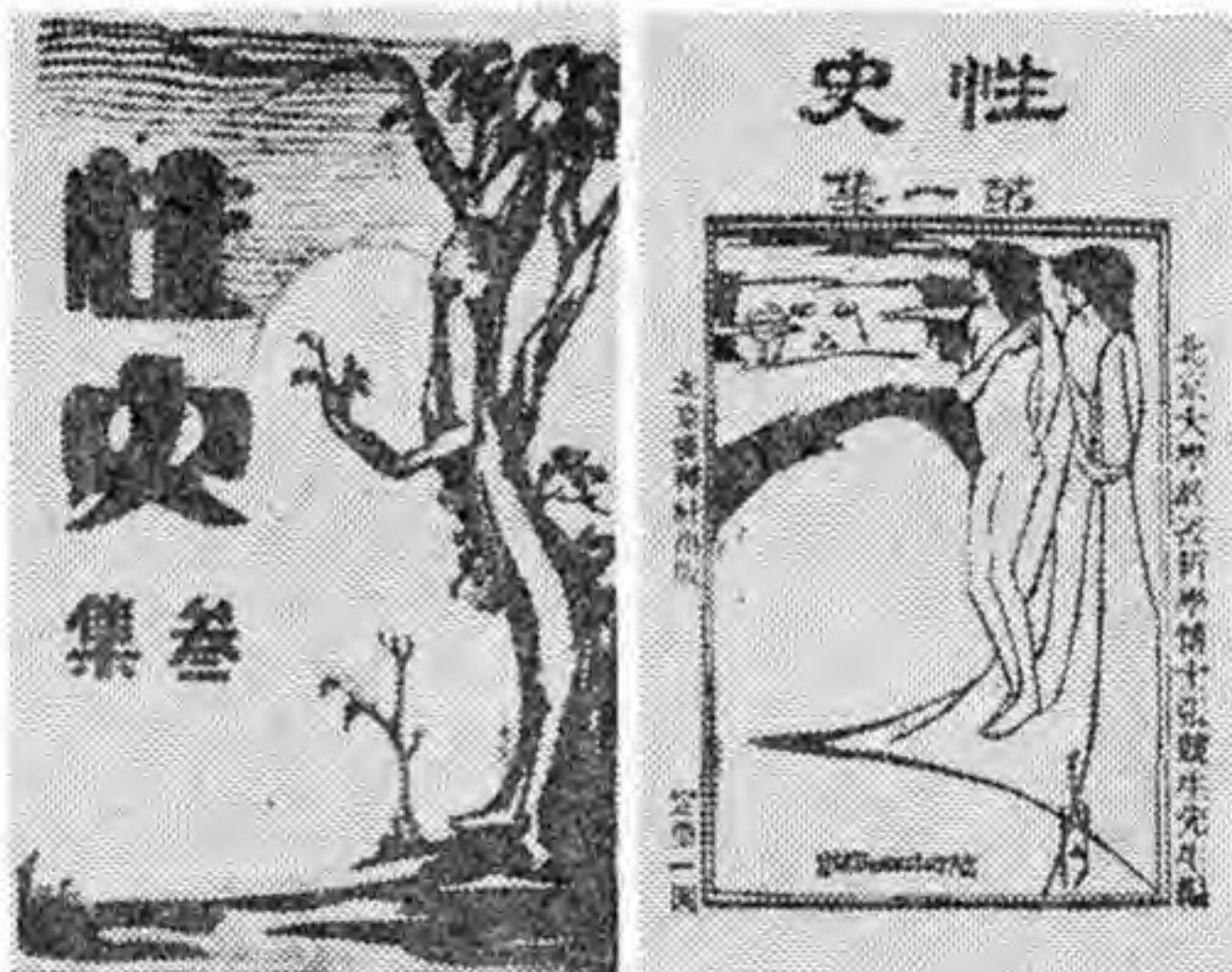
版權  
所有  
翻印  
必究

總發行者

上海棋盤街九十五號

國華新記書局

「性史」表紙



仲々人を喰ったものであるが、翻訳者は當時杉並永福寺に住んでいたことが分る。「翻印必究」というのは、無断転載を禁ずそのような者は必ず探し出すぞ、という意味であるか。

性交と羞恥とは勢而立しない。羞恥なるも

のは往々性交の鉄条網となって、性交の発生を障害する。人類の最初には羞恥心は尚未だ発生しなかった。人は皆赤裸々であって、性交は只握手する位のことだった。随って女陰は何等の大事なものにも当らなかったが、自然に凡てが此の怪物に羞恥心を持つやうになってからは、衣服を発明して身体を遮蔽した。性交の仕事の上には一種偉大なる阻碍を与へたのである。

この故に、徹底した性交を行ふべく欲するならば、第一に先ず羞恥を打破すべきである。無恥の人と成りてこそ、始めて能く芸術の性友があり、始めて、能く真実の性交がある。然らざれば、これこそ快楽の求むるものではなくて、一種の義務を尽すものである。

本書は芸術の上から、性交を談じたもので、書中の人物は都て羞恥の何物たるかを知らぬまでに、徹底した人々を写したものである。望むらくは読者諸君、地球上には、必定此種の妖人なしと思ひ給ふな。只二人の男女が空家に在って行ふ性的仕事の、その一切の挙動が、断じて我等第三者の能く想像し得るものでないこ



とを合点せられよ。作者。一六・六・三

○

私はモウこれ初老の年を越しまして、両鬢は黒白の斑になりました。平日好んで幾通りとなく、性学の書を研究しましたが、いづれも私の興味を唆るには足りません。ただ性芸の一書のみは、真によく芸術上の価値を具へて居ります。さうして大いに私の興味を煽ります。此の書を読らるる諸君、必ずしも淫を誨ふるものとは思ひ給ふな。

「文に監みて諷まず」とは、古からの定文句です。芸術上の研究に対しては、尤も忌諱する理由はありません。性芸は、直に認めて生理学精神の一種参考書となすべきものです。

性史はただ空言に托するものですが、性芸は実験を基礎として居ります。これが両書優劣の分る点であります。

性芸は社会反面の指南です。此書を読らるる諸君は当に社会的眼光を徹して之を批判せらるべきものです。どうか簡略になさるようにと存じまして。怒帆。

これが、序・跋の全文である。この書の性質をも明解に説いてある――。

内容は、珍妙な求人広告／博士性器を知らず／肉体試験／先頭の受験者／活動腰架／図書館の参考書／男女平等の難関／暴動漢を打倒す、などとなっている。

張博士というのは、性欲大学の性交科を卒業して「性交博士」の栄冠を得た人で、その学に深く、著作は身長に余る程、出版している。当時洛陽の青年男女は新著の発行のたびに、下着を質に置いてもらってこれを読み、若し青年男女にして張先生の著作を読んだ冊数の少ない者は、あわれな時代遅れの者よと恥しめられたという人気学者。その張博士がその妻を離別して、新たに「性友を募る」と題して新聞広告を出したのである、というのが本書の発端で「私は一個の性友を求めて居ます。年令にかかわらずありません。凡そ女性であつて、私と性交を研究しようとの志しをもたるる方は、拙宅宛に御住所御姓名をご通知下さい。試験期日は直接ご通知いたします。路、里、号、博士、張生」というのが広告の全文である。

ところでこれを聞伝へた離別された毛夫人

というのが、新しい情夫に「先夫の張生が性交を談じますって！噫、彼が性交博士を称するなんて、本当にお臍でお茶ですよ。彼はわたしとの離婚の理由に、わたしの小姫に難癖をつけていますが、そんなことみんな駄ばらですね。それより彼の代物ときたらまるで小狗の肉具の稍大きいというのが真相で、あんなのじゃ初心のお姫様だつて張合いも何もありません……」と嗤つて云った。とにかく張なるものが性交博士の虚名を得ているのはおかしい。只彼は絢爛な文章で、まだ経験の少ない青年子女を胡魔化しているに過ぎないのである。だから彼の等身量の著作だって経験・閱歴ある人々が読んだら、只一笑に価せずと喝破されてしまう――。だが、当時張博士のその秘密を知る者は毛夫人とその身辺の情夫たちだけだった。

さて、張博士の方では広告を出して新聞に新に性友を募っては見たものの、反面には自己の道具の充実を期すべく百方補益の道を講じていたのである。離別したというより逃げられてしまった妻の毛夫人からうけた恥辱を雪がねばならず、又自他共に許していると信じている、性交博士としての



名誉も維持しなければならぬ。何とかして  
 小犬に等しい小博士の改造法はないものか  
 と悩んでいる所へ、黄という老友がたずね  
 て来て、一ツの処方方を伝授されたが、容易  
 に信じないで屁理屈ばかり云うのだ「僕は  
 実地を見ないうちは信用しないぜ、此処で  
 その証拠を見せてもらいたいね」とすると、  
 黄老友は処方方を自ら実験した結果だ、と云  
 って慌てず急がず悠揚と帯を解き、下着ま  
 で脱いだ——その逸物たるや曾て博士もお  
 眼にかかったことがないという怪物で、イ  
 ヤその長大なことは論のほかで、然うして  
 硬からず軟からず、弾力もあり全体が真赤  
 でとても人間の物とは思われない。博士の  
 顔色は怪訝と慚愧と疑惑に蔽われ、もはや  
 失神の体であった。「貴公得心がいったか」  
 「ハア、今こそ確信申した。是非共処方方  
 お知らせ下さい」という次第で、即時に現  
 銀の耳を揃えて老友に薬法を託した。老友  
 は去って霊薬を調らべて、そこそこに辞し  
 て駆出して去った。

ところが、その薬はいかものだったか、  
 張博士は無類のお人好しだから、深く薬法  
 を過信し、幾日か使用しているうちに、何

となく器官が発達したような気持になり、更  
 に連服すればますます増長するであろうこと  
 を確信したのである。——この時、性友募集  
 に応ずる志願女性はすでに百名以上に達して  
 いたから、実験を開始しなければならぬ。  
 応募者に対して試験日割の通知を送った。

まことに天下太平なお話で、応募婦女子と  
 の交歓が以下綿々と続く訳だが、特別に艶本  
 としての珍奇な描写もなく、奇矯な用語とて  
 もなく、やはり一篇の風流之書としてのおも  
 しろ味だけ一通り備えたものだが、以上に大  
 要を述べた物語の導入部門の描写にいくらか  
 変わった味がある。そうして今日いう所の性科  
 学的な語法や理論が、必ずその前後に、登場  
 し、男女が性論を戦わすという実戯描写以外  
 のおどけた生嚙りの性学議論があつて、それ  
 がミソになっている。——例えば、

阿媚女はどういう訳か、「隔山取宝」俗に  
 いう後どりばかりを好み、そうした位置では  
 勿論接吻ができないし、又ひどく接吻をきら  
 う。彼女はいう「性欲の一方面に衝動のない  
 時にですね、ある者は接吻をして補いをつけ  
 ますが、彼はすでに準備ができ、わたしもす  
 でにきもちが浮々しているという場合に、何

も更に唇と唇を接する改ったキスまでしな  
 くていいじゃないの」然し、これの真  
 相は彼女には慢性の口臭があり、後ろを好  
 むのはその亭主が醜男で面を合(あ)わしては、  
 とても気分がのらないので、背位がいつし  
 か習慣性を帯びてしまった、という話であ  
 る。

珍とすべきは中華製たがい式張型を説明  
 した所があつて、女子同性愛常習者が、  
 「この中に包んでありますのは、これは植  
 物の木耳です。木耳をぐんぐん圧付けて、  
 外は絹で包み込んで、こんな恰好にしてあ  
 ります。これを熱い湯の中に浸けますと、  
 木耳はふやけて一杯にハチ切れそうになり  
 ますわ。相当に暖か味もあつて弾力があり  
 ますから、使い慣れさへすれば、本当の殿  
 方の物と少しも変わりありません。お蔭でわ  
 たくした仲間では、あんまり男の方に迷  
 うような不覚はとりません」  
 と云い、頃合いを計って湯から品物を揚  
 げたという場面があつた。

〔註〕 惜しむらくは読んだのは上巻のみ  
 であつて、下巻の刊行の有無を私は  
 知らない。  
 (この章未完)



# 日本婦人部隊奮迅録

晴

せい

嵐

らん

の

譜

ふ

黒

淵

嬰

一

昭和十六年十一月二十三日。日曜日。

バルカン半島を征伐したドイツ軍は六月に入ってソ連攻撃を開始し、雪を蹴ってモスクワ・レニングラードの玄関前に迫っていた。一方、太平洋両岸では冷戦が進行中だった。日米会談は八箇月に亘り難航を続けている。この頃、稔田大尉は近衛師団附を命ぜられ負傷療養を兼ねて内地に帰還していた。既に近衛師団本隊は出征して南部仏印に進駐し、留守部隊を以て新師団を編成する計画は予算

化されていた。そして稔田大尉は次回の定例移動で少佐に進級し、新師団の歩兵大隊長を拝命することに内定していた。

昭和十二年の出征当時に較べて内地は大きく変貌していた。民需は縮減され、繊維、主食、液体燃料等に代用品が進出し、マッチ・煙草・肥料等は統制されていた。併し長期戦の疲弊は見えない。街路には国民服と称する制服が溢れ、ダンスホールやパーマネントは禁止され、全国が兵営化された観があった。

首相は十月に近衛文麿から東条英機に替っていた。国内には主戦論が渦巻き、経済断交に対する憤激が沸騰していた。殊に米、英、蘭の石油輸出禁止は死活的重大事であり、三宅坂も霞ヶ関も坐して自滅を待つよりは一戦解決を求める空気が濃厚だった。

陸軍省を出た稔田大尉は房総西線の汽車に乗った。千葉県平群郡多田良村。多忙な日時を割いてでも訪問したい所がそこにあった。富浦駅から千五百米。東京の真南に当り、



東京湾口を扼す要衝、大房岬<sup>たいぶ</sup>は太平洋に二千  
米突出している。嘉永安政の頃には三箇の台  
場が置かれ、現在も要塞地帯に包含されてい  
る。岬の基部は鉄条網で遮断され、奥の存在  
は世人に余り知られていないが、女官養成所  
の名で呼ばれる学校と、婦人部隊の本部はこ  
の岬に置かれていた。

× × ×

「玉陽鎮の隊長は君だったのか。娘達が世話  
になったな。卓越した指揮と勇氣にすっかり  
惚れ込んだ者が何人もおるぞ」

校長の蘭島少将は稔田大尉を気安く迎え入  
れた。騎兵科出身で今年六十三才と聞いてい  
るが、容姿も音声も年令を感じさせない。

若い娘達に囲まれているためだろうか。

蘭島少将は大正時代の偉材といわれ、宇垣  
陸相の下で軍務局長を務め、陸軍の近代化と  
所謂「宇垣軍縮」を達成した。その結果多数  
の将官が現役を退いたが、蘭島少将自身も四  
箇師団廃止の残務整理が終ると同時に有為な  
前途を惜しまれつつ陸軍を去った。

「私は婦人部隊の熟練と勇氣に救われたよう  
なものです。今日はお礼とご挨拶に……」

「固くなるな。併しここから無事に帰れると  
思うなよ。今年結婚年令に達した娘達三百人

が先刻から君の帰りを狙っているぞ」

「婦人部隊の兵士も結婚するのですか」

「君イ。あの娘達でも女だよ。最も女らしい  
女。自慢ではないが日本婦人の精華だ。君は  
片面しか知らない。あの娘達を社会に還元し  
て立派な子供を生ませなければ大日本帝国の  
重大損失となるだろう」

「何のようにして配偶を決定するのですか」

「二十四才で退役したら一年以上教官を務め  
て軍隊氣質を洗滌する。自分で配偶を見つけ  
る事もあるが形式的には年一回宮中に召され  
天皇陛下のご媒酌で有功将校に下賜される。  
その家庭から子孫代々忠誠無比な文武官が生  
れ出ることは間違いない」

× × ×

「対抗競技の時間だ。見せてあげよう」

蘭島少将が先に立って案内した。

「時に閣下。士官学校は何期のご出身で？」

「士官候補生第十三期。入学は北清事変が起  
きた明治三十三年。どうも数字が不吉だな。

そのためか大將は中村孝太郎只一人。しかし  
中將には駐ソ大使をやった建川美次がいる」

「敵中横断三百里の建川挺身隊長でしょう」

「少將には新聞班長を務めた桜井忠温」

「肉弾の著者？」

「そう。あの本でも解るように十三期生七百  
二十二名は日露戦争当時、中尉か少尉だった  
から随分死んだ。その中に乃木勝典がいた」  
「乃木希典將軍の御曹子ですね」

× × ×

大房岬は東西に長い短形の山塊から成り、  
北麓に帯の如く狭長な平地を抱いている。そ  
の一面に二百米四方の練兵場があった。

「海軍兵学校の棒倒し。予科練の闘球。これ  
に必敵する競技がここにあるとしたら今から  
見せるものだ。併し女だけの競技だから近寄  
らない方が良いでしょう。ここから眺めよう」

蘭島少将は丘の中腹に腰を下した。

引率する教官は婦人部隊の退役兵らしい。

練兵場の両端に集結しつつある生徒は十二才  
から十六才迄の発刺とした少女群。婦人部隊  
の雛達である。全員が際立った容姿と優れた  
体格を持っていた。

「五学年で千七百五十人。あれが全生徒だ。  
最も五十人程は出場不能がいるね。確率から  
いって二十八人に一人は障害がある筈だ。不  
経済だがこれは宿命だ。武官適任者は成可く  
生理の軽い者ということになっている」

練兵場は三面を松林に囲まれ、一方だけは  
低い灌木林を隔てて海に面している。北の潮



風に吹き晒されているのだが少女達は寒くないのか帆布製の半袖半ズボンから腕も脚も露し、靴も穿かずに裸足だった。小麦色の膚に白い服。赤と青の帽子。色彩が美しい。この帽子が東西両軍の目安になっていた。

「縄跳びでもやるのですか」

「各自一本宛、輪にした縄を下げています。」

「遊戯とは違う。縛るのだよ」

「え」

「東西に分れて対抗し、強い者が弱い者を縛る。手段は問わない。規則は何もない」

号砲が鳴った。千七百の若い肉体が一斉に駆け出し、百米を疾駆して激突した。

「女の長所は持久力だ。それを極限迄鍛錬するのがこの競技だ」

肉弾が渦を巻いた。無制限の発散を許容された高い叫喚が稔田大尉の聴覚を奪った。相撲か、柔道か、拳法か。少女達は凡ゆる闘技に熟達しているようだ。その技術と若い体力と闘志の悉くを一挙に爆発させて激しく揉み合った。撲り、蹴り、首を締め、投げ合い、倒し合い、組み合せて地を転り、互に相手を縛ろうとして腕を戻し合い、上になり、下になり……。

「これが女か。」

稔田大尉は先ず物凄さに度胆を抜かれた。併し間もなく職業軍人の意識が蘇った。

突撃体形も接触展開の方法も理法に叶っている。無秩序な一騎討の集積ではない。

「我が全力ヲ以テ彼ノ分力ヲ撃ツ」

一人対一人の場合、余程の体力差か技術差がなければ一方が他方を縛る事は出来ないだろう。組み敷く迄は出来ても縛るとなれば倍の体力が必要になる。勝つ為にはある時点、ある地点で敵の一人に味方の二人を当てる必要がある。併し両軍の人数と個々の体力は均等。茲に集団運用の巧拙が問題となる。そして、これは戦術の基本原則に通じる。

中央突破。翼端延伸。各個撃破。多正面攻撃。予備軍の控置と、その効果的な投入。

「この野蛮な競技は将来の婦人兵士に戦術の要諦を自得させる為のものではないか。——時間の経過と共に戦勢は流動した。幾人かの少女は既に後ろ手に縛られ、或は曳き立てられ、又は前後から担がれて運ばれて行く。併しそれは奇功を狙って戦列後方に深入りした者に限られた。両軍の主体は二箇の巨大な有機体の如く全力衝突を続けている。

窮極の目的は相手を縛る事である。併し焦慮は禁物。所謂「二段決戦」に同じ。過早に

縄を繰出すと自分の動作を制限し、敵に縄を奪われる事もある。先ず圧倒する事。完全に抑えつけ、しかる後、迅速に縛りあげる。

「婦人部隊の勇敢且つ巧妙な戦術動作はこの競技から生れたものに違いない」。

両軍中に号笛を持った連絡員、或は指揮官がいて行動を統制した。敵戦列に薄弱部を発見すると直ちに密集縦隊を突入させて切断した。突破孔には横隊の人垣が作られ、固く腕を組んで遮断線を作った。撲られても蹴られても崩さなかった。その間に線の背後で相対的多数の味方が相手方一人に二人以上掛って急速に縛ろうとしている。

両軍中に漸く疲労の色が見えて来た。低学年生が先ず縛られて脱落し始めた。勝者は敗者の縄を奪って次の敵を縛りに向って行く。

この競技は後ろ手に縛られて了った者にも抵抗を止める義務を課していないようだ。

両手の自由を失っても足で戦い続ける。足を縛られて転がされると頭で突き掛る。

敵の一人を警戒の為に引き留める事が出来れば主戦場におよぼす影響は対等である。

縛られながら隙を見て味方の戦列に逃げ込み、戦闘力を回復して復讐に駆け向う。

戦果を確保する為には捕虜を百米後方に曳



いて行き、松の幹に縛りつけて了わなければならぬ。それでも未だ完全ではない。自力で縄目を解き、同僚を救出したり、戦列を背後から襲ったりする事もあり得る。捕虜を奪回する目的で突破して来る敵も警戒しなくてはならない。監視の任務は前以て分担され、捕虜の縄目を巡回点検し、緩みかけていれば緊しく締め直し、続々到着する新しい捕虜は手早く松の幹に固定された。

「一定時間経過後に縛られていない人数を比較して勝敗を判定する事もある。併し日曜日の競技は無制限方式だ。一方の全滅迄続けなければならぬ」

蘭島少将は厳肅な表情でいった。

戦勢は一旦傾き始めると急調子だった。一人の差は直ちに二人の差となり、忽ち四人差へと発展する。稔田大尉は「勝敗分岐点」の兵理とN自乗法則の実例を眼前に認めた。

後ろ手に縛られ、両足も揃えて縛られた少女達が至る所に転がされた。練兵場の一端から他端へ凱歌の歓声が渦巻いて駆け抜けた。その一方では大地に伏した他の一群が砂と共に無念の唇を噛んでいる。

約一時間の熱戦が終った。

「人数は全く同じ。体力も智力も平等となる

ように分けておいた。それなのに一方は勝ち他方は敗れる。そして勝利と敗北の差は常に絶対的だ。戦争とはこのようなものなのだ。この競技は何事かを感得させずにはおかないだろう」

蘭島少将の説明は不要だった。

勝った側と雖も勝利の瞬間には健全な戦闘員を幾らも残していなかった。一半は敵の陣営に縛られ、他は疲労していた。併し勝ち残った者が自軍の捕虜を全部解放した。最っ先に縛られた者でさえ、今は相手方の一人に対し堂々と縄尻を把って得意の立場にある。

敗れた方は憐れだった。強者も弱者も悉く二重の縄目に喘いでいる。敵の縄を受けた上に自分の持っていた縄も奪われて我が身に加えられた。背に廻った両手は首に高く吊られ肩から胸に菱形の縄目が緊しく掛けられている。八百余人の容姿、体格共に優れた少女達と同じ服装で同型式に縛りあげられ、一人宛同年輩の娘達に曳かれて行く光景は異様でもあり壯観でもあった。

「勝者が敗者を曳いて営舎迄凱旋するのも行事の一部だ。勝者には得意を、敗者には屈辱を、極限迄嘗めさせるのだ。これで終りではない。勝った側は今日一杯の自由行動。敗れ

た方は清掃、洗濯、炊事其他、汚物汲取を含む各種雑多な宮役が課せられる。もう一つ。今夜の食事は勝者が尾頭附の一汁三菜。敗者は芋粥だ。あの年頃の娘にとっては食物の差別が一番辛いものだ。戦うからには勝たなければならぬという事を骨の髄迄思い知っただろう」

× × ×

松林に掩われた山塊の鞍部に教室や倉庫や居住施設等の建築が点綴している。

「大房岬の根元に当る西半分が学校の敷地。東半分が婦人部隊の兵営だ。全部生徒達が自力で建てた。大正十四年にこの岬を買った時は松林の他は何もなかったのだが今は現役兵千八百。生徒千七百五十。教官、事務員等を合せて四千に近い、人員が居住出来る」

蘭島少将は歩きながら婦人部隊の歴史を説明した。

第一回生の採用が大正十四年。

何しろ世界的軍縮時代である。一流女学校の卒業生は誰も軍人の嫁にならない。武官教育を表面に出す事は出来なかった。施設も教官も充実せず、予算は殆んどなかった。教育が半分、建設が半分だった。

戦歿軍人や官吏の娘が応募して漸く人的に



も揃い始めたのが昭和三年。玉陽鎮で奮戦した伍長達はこの頃の入所者である。

「最初は理解者が少なかったな。宮内省が学習院の予算を廻してくれたが食費に消えて了った。不況時代で浜口雄幸も高橋是清も全然金を出さない。上流家庭出身の娘達が仕立て直した古軍服を着て、木銃で訓練していた。宇垣閣下だけが良き理解者で、廃止師団の銃器を貸与したり教官を廻して下さった。華北で君が見た装備は大部分大正十四年の物だ」「それで三八式や十一年式だったのですね」「確に三八式歩兵銃は女には重過ぎる。騎兵銃を持たせてやりたいが予算がない。出来れば百式機関短銃が一番いいのだが。併し我々の予算は全部宮内省から出ている。即ち皇室が内廷の費用を節約して下賜されたものだ。欲を出してはいけないよ」

「併し華北出征部隊は充実していました」「それが可能になったのは昭和十四年だ。一つは十五年間の蓄積。もう一つは東京オリンピック予算の流用だ。予定通りオリンピックが行われたら婦人部隊は赤と白のオペラみたいな軍服を着て、会場整理や軍楽隊になったり、鳩を飛ばせたり風船を撃ったりしていただろう。兎に角、三箇中隊の一つだけでも出

征が可能になった。流会に終った東京オリンピックに感謝しなければならんな」

× × ×

兵營の敷地内では日曜日だというのに婦人部隊の兵士が射撃、突貫、短剣の訓練に余念もない。

「男と対等になる為には二倍の訓練を施さなければならぬ。娘達は若い年代の十三年をすべて訓練に捧げているのだ」

「何故、女性に対する武官教育を思いつかれたのですか」

「女性には徴兵法の適用外だからだよ」

「併し日本に不足するものがあるとすれば、武器であって人口ではない筈です。未召集の壮丁は未だ数百万はいるでしょう」

「そう思うだろうが総力戦時代に人は幾らいても足りない。戦場で一人戦わせるには後方に九人要る。戦争があと三年続いたら日本も人口不足に悩むようになるだろう。熟練工、炭鉱夫、鉄道員、船員等、徴集したら総力戦に支障を起す壮丁も沢山いる。現代の短期兵役制は服務期間を満了した兵士を社会に還元しなければならぬ。壮丁は社会の凡ゆる場所が必要だ。一方で近代兵器の複雑化は一人前の特技兵養成に数年を要するようになって

来た。最優秀の壮丁を長年軍隊に固定したら国家は生産や流通に大損失を被るだろう。志願して長期兵役に服する者は概して二流以下の家庭の次男三男だ。女性なればこそ一国の精華を十三年間服務させ得る。本来女性は農業者を除き戦時の遊休要素であり、上流家庭ほどこの傾向が強い。而して十三年間の教育は一人一人を万能の後方勤務員に仕上げる。これは後方要員を節約し、間接に前線を強化する。婦人部隊は陸海軍の力を借らずして国家の軍勢力を強化し、平時には式典を飾る最も優雅な集団であり、全国の女性に目標を与え、尚武の気風を興すだろう。戦時には有能な後方勤務員となり、且つ女性本能の保守性は防禦戦に適するものと期待している」

「併し長駆進攻や挺身奇襲には不適當だと思いますが」

「女は不経済だ。塵紙や脱脂綿を大量に消費する。兵站を離れて十日間行動したら補給品が続かない。それに二十八日毎に能率が悪くなる。攻撃的ではないな。その代り進駐や宣撫には最適だ。女は女としての用法がある」「女は予備役召集が困難だと思いますが」「これは最大の欠点だ。二十五才を過ぎたら結婚させる必要がある。女が家庭に入ったら



終りだな。だから婦人部隊は良き兵士は作るが将校は得られない。将校は十年かかる。部隊編成も中隊六百人が限度だ。戦略集団の指揮官は養成出来ない。だが、結婚した女性は母親として小国民に軍事知識を普及させる。万一本土が戦場化したら国民的抵抗の中核となるだろう」

稔田大尉は蘭島少将の着想と遠大な計画に驚嘆した。併し婦人部隊建設を決意させた根本原因は未だ理解出来なかった。何かもう一つ、隠された目的があるのではなからうか。

× × ×

大房岬の北方に防波堤が突出し、白塗りの美しい船が碇泊していた。横須賀に固定してある記念艦三笠と似ているが、もう一廻り大きく構造にも重量感がある。

「婦人部隊唯一の練習艦鹿島だ。明治三十九年完成。日露戦争には一年違いで間に合わずワシントン軍縮会議の結果廃棄と決ったが、加藤友三郎に頼んで払い下げて貰った。姉妹艦香取と何方を取ってもよいといわれたが、名前が気に入ったから鹿島の方を選んだ」

「何故ですか」

「ガンルームに入ってみるとよく解る。実にカシマしい。女性向きの艦だ」

前甲板の四十五口径十二吋主砲二門は建造当時の俵、練習用に保存され、後部主砲、十吋中間砲、六吋舷側砲郭は全部撤去してあった。舷側装甲の一部も外してある。軍縮条約に対する措置でもあるが、重武装を除いた両舷中甲板以上には練習生居住区が並び、後部砲塔と弾薬庫の位置には艦底から甲板上に及ぶ五階建の教室と講堂が設けてあった。

「元海軍大將を社長にしている日鉄が無料で改装してくれた。前部主砲は撃てる。最も重量配分が前後不均衡だから弾薬は半量しか積んでいない。石炭専焼だが艦体が軽くなったから十七節は出せる。戦時には封鎖、哨戒、護衛程度に使えるだろう」

「婦人部隊は海軍としても戦えるのですか」  
「三箇中隊の一つが常に練習生として鹿島に乗っている。操艦幹部の教官五十人と合わせて六百五十人だ。毎年一小隊、つまり三分の一が他の中隊と交替する。他に八分の一が定年で退役し初年兵が入って来る。鹿島の乗員は常に更新されているが内容は何時も熟練した水兵で満たされているわけだ」

× × ×

大房岬の最高地点は海拔八十二、二米の山頂で西北の剣崎に対し、監視哨があって八人

の一伍が常駐していた。その直前に四十五口径二聯装十二吋砲塔が据えてあった。下方に十吋単装砲が四門。六吋露天砲十二門。

「重砲が全部で十八門。自家発電で動く。鹿島から外して揚陸したのだ。コンクリート工事は生徒達がやった。東京湾を守る案山子の役目は果すだろう」

隣にある安政年間鑄造の滑膛式百听砲が対照的だった。二百人程の婦人兵がいる。

「三箇中隊の一つが華北出征、一つが鹿島乗組、他の一つが本土残留で、留守中隊の三箇小隊は宮城警備、砲台配置、兵営と基地に各一つ宛置いてある」

監視哨からは大房岬の全景が見下せた。

「婦人部隊は敵地に進駐しても婦女暴行等の風紀問題を起さないからいいですね。その代り外部の男と恋愛したりはしませんか」

「君はプルタルコスの対比列伝を読んだか」

蘭島少将は突然妙なことを尋ねた。

「子供の頃に読みました」

「ペロピダス篇に暗示してある。テーベの神聖兵団は男性の同性愛者で編成したそうなの。

愛人同志は危険に際して互に助け合う。ケーロネアの戦いでテーベが敗れた時、神聖兵団は二人宛、抱き合って戦死していたという」



「すると婦人部隊は……」

「一伍八人は二人宛の愛人四組からなる。これは組織を強力にし、二十五才迄は異性との情事を忘れさせる効果がある。古代ギリシャでは同性愛は神聖なものだったそうぞ」

× × ×

「婦人兵は酒や煙草を欲しがりませんか」

「禁酒禁煙だ。併し却って都合が悪い。無闇に甘い物を食べたがる。何処の娘も同じだ。米や煙草葉は国産品だが砂糖は輸入資源だ。併し砂糖が欠乏する事は予想していた。準備は出来ている。あれを見給え」

南斜面はすべて栗と渋柿。低地には無花果が植えてあった。

「林子平の海国兵談からヒントを得た。この土地を買うとすぐ柿苗を植えたが漸く実った感じだ。柿は吊柿。栗は勝栗に加工し、娘達の間食に与える。これと蒸芋があれば満足しているようだ。乾燥無花果も貯蔵してある」

「戦時の非常食糧ですか」

「海軍は二十五年間に数百万屯の石油を貯蔵したそうぞ。これには及ばないが婦人部隊も千八百人三年分の食糧は貯蔵した。残飯は糲に加工し、魚が獲れたら燻製し、塩は防湿容器に入れ、木の実を乾燥し、味噌は三年味噌

にしてある。だから華北出征も出来たのだ」

× × ×

大房岬の北方低地に長さ千米の滑走路があった。飛行機が五機程見える。

「婦人部隊には航空隊もあるのですか」

「あれが航空隊といえるならばだ。練習機はドイツ製ユングマンと九〇式初歩水上練習機が各一機で中島知久平が贈ってくれた。実用機は八九式艦上攻撃機と九二式艦上攻撃機が二機宛。尤もその一機は練習中に壊して飛べなくなった。他に九一式飛行艇が一機。全部海軍の山本五十六が払い下げてくれた」

「聯合艦隊司令長官の山本提督ですか」

「そう。あの男は七才下だが偉くなったな。航空本部技術部長の時には度々訪ねて来た。小男だが女に好かれる良い所があって、うちの娘達が皆惚れていたぞ。今に必ず元帥になる方だと噂していたものだ」

格納庫の裏に航空科員宿舎があった。

「航空兵は家族持ちですか。乳幼児がいるようですが……」

「君イ。あれは大人用だよ」

穂田大尉は不思議そうな顔で襦袢の満艦飾を見上げた。

「最新式飛行機でも扱わなければならなくな

る。近頃は戦闘機でも八時間以上飛ぶ。君なら生理現象の処理をどうするかね」

「ビール瓶一本持って行きます。女なら……」

「解っただろう。併し笑ってはいかん。訓練が終れば洗濯。娘達は真剣なのだ」

主翼は羽布張り。見るからに旧式な複葉機が間延びした爆音を響かせながら飛翔した。  
「八九艦攻は上海でカーチスホーク戦闘機に惨敗した戦歴を持ち、九二艦攻はシリンドーヘッドガセットの冷却水漏洩で航空母艦から下された曰くつきの機体だ。九一式六百馬力発動機を整備させたら嫌でも修理が上達すると言うから海軍には特に感謝しなければならぬ。併し機体はボロだがガソリンの消費が少くて助かる。海軍随一のケチン坊柳原博光が淡い顔でトラック一台分だけドラム缶に詰めてくれたが訓練にはそれで足りている」  
「水平爆撃や雷撃が出来るのですか」  
「航空科は昭和十四年に新設したばかりだ。戦闘動作は無理だな。洋上航法を覚えて操縦士の有資格者になったのが二人。これを教官にして来年は六人。昭和十八年には十八人」  
「その程度で役に立つのでしょうか」  
「若しも太平洋が戦場になったら必ず航空消耗戦の形を採る。それ迄に航空科を十二人に



して置きたいな。三人が飛行艇に乗る。操縦士と航空士と通信士だ。交替で操縦出来る。

あとの九人が戦闘機九機に乗り、飛行艇の誘導で前線基地に送り届ける。補給任務が終わったら十二人全部が飛行艇に乗って帰る。途中で会敵したら空中戦もしなければならぬが主目的は飛行機の輸送だ。他にも対潜警戒や哨戒飛行や輸送機の操縦等、女性向きの地味な空中勤務が沢山有る。戦時に飛行士は幾ら居ても足りないから女性航空兵は必ず有力な予備兵力になるぞ。此の点は女水兵も同じで戦時には哨戒艇、掃海艇、病院船、工作船等無数の補助小艦艇が必要になる。日本海軍は決戦兵力偏重で補助部隊が無い。予算難の為だろうが鹿島の乗員が役に立つようになるかもしれない」

「そのような戦争が起ると思われませんか」

「起してはいけない。日本は尋常では米國に勝てる筈がない。山本五十六も、そう言っていた。併し東条英機は凡物だ。青年将校共に担がれて太平洋で戦争を始めるかもしれない。あの男は陸士十七期で四年後輩だが良く知っている。器用な事務屋だが首相の器でない。永田鉄山が首相になったら、その下で陸相をさせても良かっただろう。永田が殺された為

に統制派の後継頭目となり、首相の椅子が廻って来て了ったが不適任な事は当人が一番良く承知している筈だ。早く辞退しないと日本を不幸な目に遭わすかもしれんぞ」

蘭島少将の批判は放言に近かった。元軍務局長と雖も憲兵に知れたら只では済むまい。それとも宮廷の壁と婦人部隊の戦力を擁して軍閥政治に正面から対決しようとの真意か。

× × ×

大房岬の山地に外側を向いて十箇の特火点<sup>トーチカ</sup>が有った。人員は配置されていないが本格的構造である。

「築城学の実習で生徒達に作らせた。毎年一基宛増えて行く。今に一杯になるだろう」

穂田大尉は奇妙な想像を起した。海正面の砲台は東京湾口を制扼している。陸の特火点<sup>トーチカ</sup>は岬を基部で遮断している。内部には兵營。三年分の食糧。そして精鋭な婦人部隊。

「これは一大要塞だ。今すぐにでも籠城出来る。」

併し誰に対して籠城するのか。

外国の進攻を予想してか。それとも……

国内の敵を仮定しているのか。

東京港から船で数時間の距離。小さいけれど空軍も有るのだ。

× × ×

日曜日なので校舎は空虚だった。太平洋の大地図を掲げた広い講堂で数人の生徒が独習している。

「此処で教える学科は一般学。二箇以上の外国語。衛生学。法制経済から政治。それに兵学。女性としての教養を高める為の諸技芸。華道、茶道から琴。武官の任に耐えるよう、剣馬弓槍の諸武術や射撃。柔軟体操に迄及んでいる。兵学と言っても殺人学や破壊学ではない。交通、通信、築城、馬学等、要するに何でも学だ。卒業すると適性に従って武官と文官に分れる。文官の方が階級は高いのだが武官志願の方が多いな。婦人部隊に欠員を生じたら文官から補充している」

「退役結婚した婦人兵は頭も良いし腕も強いから亭主を圧倒するでしょう」

「そんな事はない。典型的日本婦人だよ。今その疑問に答えてあげよう」

× × ×

一巡が終ると穂田大尉は校長室に案内された。質素な室である。併し清潔な感じで、花が綺麗に飾ってあった。

壁には黒枠の写真が四十枚程並んでいる。

「訓練中の殉職者。在籍中の病死者。華北出



征中の戦歿者達だ。毎朝拝んでいるよ」

二十才前後の美しい顔が笑いかけている。

蒲田胤子の顔も、その中に在った。

扉が開いた。宮廷女官の衣裳を着た女性が二人現れた。茶碗と菓子皿を持っている。盆を眼の上に捧げて優雅に一礼した。

「右側は航空科教官の神酒慶子。先刻、君の眼前で飛んだ九二艦攻の操縦士だ。婦人部隊に二人しか居ない貴重な飛行士だが飛行服を脱いだら此の通り優しい娘だよ。左側は歩兵科教官の衣笠芙美代。去年迄華北に出征していた。実戦の経験も有る。確か君とは顔見知だったな」

稔田大尉は驚いた。玉陽鎮で見た婦人伍長に違いない。女とは斯くも変わるものか。

「稔田君。先刻の太平洋問題を、もう一度考えてみよう。日本が生き残る方法はないか」  
蘭島少将は乾燥無花果と抹茶を奨めながら言った。二人の女性も傍で聞いている。

「重慶と媾和して支那派遣軍を撤兵する事。ソ聯との事端を避け、満鮮の守備兵力を可能な限り減少し、陸海軍を東正面に集中する。出来れば石炭液化を完成して石油の自給を達成する。此処から先は外交次第です」  
「それでも米国が譲歩しなかったら」

「開戦でしょう。比島・マレー・蘭印を迅速に攻略して南方資源を確保します。海軍は内南洋に展開して米艦隊の渡洋進攻を阻止し、短期決戦を求めます」

「理想論だな。併し米国は準備完了迄出て来ない。工業力を動員して日本に三倍する艦隊を作ったら始めて攻めて来る。どうするか」

蘭島少将は神酒慶子を指して答を求めた。彼女は驚いたのか眼を丸くしたが、すぐ答案を纏めた。斯かる設問に慣れているらしい。

「航空母艦の全力で真珠湾を空襲します」

「爆撃で戦艦が沈むかな」

「一箇月だけ行動不能にすればよいのです。

正規の飛行士は大切だから私達婦人兵が旧式機に爆弾を抱いて飛行機ごと衝突させます。

十五機で戦艦十五隻が動けなくなります」

「そしてどうする」

「支那派遣軍は予め帰国と称して優秀船に乗せ、海軍主力が護衛し、北方航路を急行してシヤトル附近に上陸します。使用兵力は十箇師団内外。米国の陸軍軍備は未だ出来ていません。西部地方一帯を奇襲占領します」

「十箇師団なら支那派遣軍から出せよう。併し船が六十万屯要る。船団百隻の無灯航行。行動の秘匿。上陸後の補給。十箇師団は奇襲

には過大、本格的攻略には過少だ。米本土は一箇の大陸であり、この征服に数百師団を使用するのが常識だ。十箇師団で果して何が出るか。それと陸海軍主力を太平洋の彼方に派遣して日本本土は大丈夫か」

「誰もが不可能と思わなければ奇襲は成立しません。米本土に上陸後の補給は不要です。海軍主力は直ちに帰還します。四国・九州を一時取られても海軍が健在なら奪回出来るでしょう。米本土に上陸した十箇師団は広域占領が目的ではありません。工業地帯、油田、大都市と鉄道だけを攻略します」

「だが補給の無い遠征軍は結局全滅するぞ」  
「始めから承知です。二十万人の決死隊が大規模な後方攪乱を行うのです。米国の飛行機工場は大部分西部にあります。造船所や油田を破壊し、日系米人を徴発して軍に編入し、鉄道と自動車と燃料を奪って機動的に東進し東部の米軍が反撃して来たら既占領の大都市に抛り、現地の食糧で自活しながら市街戦に誘導します。多数の米国市民が人質になったようなものだから必ず持久戦になります。遠征軍が全滅する迄に西部の工場、油田、大都市、鉱山、港湾は全部破壊します。生き残った者はロッキーマウンティン山に入って講和迄ゲリラ戦



を行います。太平洋反攻は五年遅れるでしょう。その間に太平洋と印度洋の軍艦と島を全部始末し、陸軍を再建して進攻に備えます。米国と戦うならこの位の冒険は必要です」

蘭島少将は微笑した。

「乱暴な戦略だな。意気だけ認めて四十点。若し黒人を煽動する謀略と、メキシコ政府に対する裏面外交と、パナマ運河への挺身奇襲を考慮していれば六十点出す処だったな」

次は衣笠美美代の番である。

「日米戦争は絶対に起してなりません。満洲国を育て、朝鮮に自治を、更に独立を与え、戦争は欧米諸国に委せて日本は内南洋を要塞化し、無傷の陸海軍を保存して時機を待ちます。英・仏・蘭の本国は大戦に疲弊して植民地の独立運動を抑えきれなくなるでしょう」

「これも理想論だな。米国が輸出禁止を続けても我慢出来る強力政府は今の日本に期待出来ない。三国干渉当時の明治政府は臥薪嘗胆を実行したが昭和の軍閥内閣は挑発に乗って開戦するだろう。阻止しようにも議会や政党は無力化している。財界は軍需のみに頼って資本を維持している。開戦は避けられまい」

「併し天皇陛下は開戦に反対であらせられると伺っています。宮内省だけが軍部を阻止出

来ます。それでも政府が強行するなら私達婦人部隊が蹶起します」

「クーデターは陸軍の専門だ。それを逆用するのは愉快だが襲撃目標を何に置くか」

「閣僚所在地と参謀本部を二隊で襲撃し、一隊は宮城を警備し、永田町を占領します」

「二・二六事件の真似では落第だな。東条は首相で陸軍統制派の巨頭だが決して陸軍を統制していない。陸軍の総意に担がれているに過ぎん。東条を倒しても武藤が、武藤を倒しても他の誰かが、必要なら佐官級が代って立つだろう。軍閥政治を終らせるには陸軍そのものを解体するしかない。外敵を前にして軍隊にその力が有るか。誰が味方するか」

「警告を発して反省を促せば満足です。挙兵威嚇の後には深く自刃する覚悟です」

「馬鹿。安易な英雄気取りで日本は救えないぞ。クーデターを起して失敗したら軍閥政府は戒厳令を利用して無限の権力を行使し、平和主義の重臣、民間人を全部抹殺しよう。累を皇室に及ぼせば天皇陛下の譲位となるかもしれん。承久の変の再現だ。陸軍と海軍が対立したら源平合戦か南北朝時代よりも激しい内戦となる。米・英・ソ・支を前にしてだ。

私情としても十五年かけて此処迄育て上げた婦人部隊を日本人の手で滅ぼせるものか」

× × ×

蘭島少将は二頭立の馬車を用意させた。

「自動車は公用以外使わない事にしている。富浦駅迄これで送って行こう。ところで先刻の応用問題は勿論作文だが娘達は如何なる時でも真剣に考えるよう教えられているのだ。憲兵隊に通告するかね」

「閣下を信じます。併し私も陸軍軍人です。東条閣下の悪口は決して良い気持ではありません。首相が国策を誤るとは思いません」

「東条が陛下の御意志に反して開戦を決意したら、と仮定してクーデターを論じたのだ。あの男の野戦指揮能力や政治力は贗物だが、忠義だけは本物だ。陛下が開戦不裁可と仰せられたら部下に殺されても陛下に従う男だ。利用価値は有る」

「婦人部隊を宮内省直轄として建設した理由が判りかけて来ました」

「北面武者の再現と言えるだろう。昭和維新を号した陸軍は遂に政権を握ったが明治維新とは根本的に異なる。明治の志士は軍市政権を倒した。昭和の青年将校は新しい幕府を作った。皇室の藩屏は婦人部隊が有るだけだ。勿



論軍国主義が必ず悪いとは限らない。大正末から昭和初期の政治の腐敗。官吏の汚職。道徳の頹廢。財閥の独占。それを一応肅清したのは武断政治の功績だ。併し軍国主義は両刀の剣。緊張に依つてのみ維持される。優れた軍人指導者が居たら国も軍も栄える。誤れば戦争を起して国を亡ぼす。兵ハ国ノ大事、死生ノ地、存亡ノ道ナリ。察セザル可カラズ」

× × ×

十一月二十五日。月曜日。

南方軍総司令官大將寺内寿一は幕僚と共にサイゴンへ向け出発した。

この日、聯合艦隊司令長官大將山本五十六<sup>ヒトカツ</sup>は単冠湾で待機中の第一航空艦隊に対しハワイ攻撃へ出動を命じた。

日本軍は太平洋全域に亘って動き始めた。

× × ×

十一月二十六日。火曜日。

ハル・ノートが発せられた。内容は十箇条から成り、「支那、仏印からの全面撤兵」「汪政権の否認」「日独伊三国同盟の事実上廃棄」を含んでいた。この受諾は降伏である。日米会談は完全に暗礁に乗り上げた。

同日、中將南雲忠一は旗艦赤城に將旗を繖えし、六隻の航空母艦を含む三十三隻の機

動部隊を率いて真珠湾に向った。

× × ×

十一月二十七日。水曜日。

米国國務長官ハルは陸軍長官スチムソンに「私は日米交渉の手を洗った。君達の番だ」と連絡している。これが米国の本心だった。戦争の避け難い事は知っていたが、両洋作戦の準備未了の為、極力遷延を計っていた。

同日、米国海軍作戦部長スターク大將は太平洋、アジア両艦隊司令部宛「戦争警告」の訓令を発し「レインボー第五号作戦」の配備を命じた。これは太平洋進攻の準備を意味する。それにも拘らず太平洋艦隊司令長官キムメル大將は真珠湾の対空警戒を怠った。

× × ×

十一月二十八日。木曜日。

東条首相は閣議を招集した。石油の輸出禁止を受けて日本は焦っていた。海軍は六百万屯の石油を貯蔵していたが、それは毎日一万吨の割合で減少していた。無為に待つ事は自滅に等しい。屈伏して石油を貰うか。開戦して石油を奪うか。全国が沸騰していた。閣議は打開策を発見し得ず、三日後に予定された御前会議で開戦の御裁下を見る事は殆んど確実となった。

× × ×

十一月二十九日。金曜日。

天皇陛下は未だ平和への希望を棄て給わず元首相の重臣達を宮中に招いて意見を徴された。若槻、岡田、平沼、米内、広田、近衛等は開戦の早計を奏上し、林と阿部は政府の態度を支持した。御心痛の陛下は極度の御憔悴に見え給うたが開戦の御決心はつかない。

この日早朝。蘭島少將は婦人部隊第二中隊を直率し、練習艦鹿島に乗って出航した。瀬戸内海から上海へ赴き、サイゴン、シンガポール、バタビヤ、マニラを親善訪問する計画は宮内省を通じて関係先に通知済だった。緊張した日米関係を少しでも緩和する効果が期待された。併し若しも訪問中に開戦となれば何うするか。蘭島少將が密に狙っていたのは開戦と同時に婦人部隊六百余人を犠牲にする戦意昂揚効果だったかもしれない。

同日の夕方。大房岬の婦人部隊基地では幹部八人が第三中隊本部に集っていた。

「天皇陛下は開戦に反対であらせられますが政府の決定を御裁下になる模様です」

女官として宮中に居た警城朋子が情報を伝えた。婦人部隊の為すべき事は何か。

「私達は兵士です。天皇陛下が斬れと命じ給



うた敵に向って刀を抜くのが使命です」

今年十六才。千七百余の生徒の意見を纏めた杜鵑花秋子が言った。

「陸下が君臨非統治の形式を守られて対米戦を御裁下になるのは誰も陸軍に対抗しないからです。無為であってはなりません」

第三中隊長の鱒田総子だった。

「日米戦争は宿命です。石油遮断以前なら兎も角、今は全国が米国の挑発に沸き返っています。開戦しなければ必ず内乱になります。東条の命令であろうとも、清忠の言を陸下の御声として湊川に赴いた楠公に見習わなければなりません」

航空科を代表した神酒慶子。

「開戦は延期させるだけで充分です。十二月さえ越えれば西太平洋は信風期に入り、上陸作戦は三月迄出来なくなります。三箇月あれば熱狂している両国民も鎮まるでしょう」

去年迄練習艦鹿島に乗って南方を航海していた第二小隊長五十鈴川麗子が提案した。

「日本を内乱に巻き込まない事。陛下と校長閣下に累を及ぼさない配慮が必要です。決行するなら婦人部隊の独断専行でなければなりません」

これは歩兵科教官の衣笠美美代。

「海軍と重臣の真意は開戦に反対の如くですが私達に味方は不要です。陸軍と海軍が戦うようになつては重大事です」

鮎川絵津子も同意見。結局婦人部隊第三中隊、教官、宮内省女官が蹶起に賛成。航空科と女官養成所生徒が反対だった。

「蹶起は賛成者に限定します。この挙に参加した者は悉く生命を失うでしょう。犠牲は七百人で充分です。航空科は将来の為に必要。生徒も残つて貰いましょう。不参加者が蹶起に反対だった証拠を留めなければならぬ。これは私情ではありません」

議長格の霞ヶ岡瑠璃美が決裁した。決議は直ちに実行に移された。

クーデター失敗の際、不参加者を連累にしない措置。それは監禁を意味する。

霞ヶ岡瑠璃美が神酒慶子の両手を後ろに廻して縛った。杜鵑花秋子は衣笠美美代に縛られた。二人共、最高決議を尊重し、抵抗せず身を委ねた。続いて固い猿轡が与えられ、前後を監視されて曳き立てられた。

縛られるより縛る方が辛い仕事だった。併し婦人部隊は感情を殺して迅速に動いた。

中隊長鱒田総子の命令で第一第二小隊四百人が静粛に武装を整え、航空科宿舎を包囲し

た。猿轡を暫時許された神酒慶子が航空科の義務を説いて就縛を奨めた。

今回の蹶起に生存は期し難い事。航空科は大切な資源であり、萌芽の内に失われるのは日本の損失である事。恥辱を忍んで生き残る事は挙兵より大きな勇気を必要とする事。

練習生、整備員等五十名は服装を整え、自ら手を背に廻した。数日に亘る監禁を予期して衣服の下に襪襦も当てた。

婦人部隊の営倉は山地の地下に有る。十五年間に少し宛、掘り掘られた大地洞で、戦時防空壕を兼ね、弾薬庫も附近に在った。無数の支洞は二十人の収容に耐え、十一月も冷気を感じない。薄暗くはあるが電灯も有った。五十人の航空科員は地下洞の支柱に入念に縛りつけられ、全員に猿轡が噛まされた。

千七百余人の生徒は既に就寝していたが、一学級宛呼び出され、教官の指示に従って縛られた。二時間以内に全員が監禁された。

婦人部隊は暴力制裁を厳禁されていた。処罰はすべて緊縛拘禁である。私闘は八時間。遅刻五分毎に一時間。上官反抗二十四時間。軽科は地下の営倉で、重科は営庭の広場で、後ろ手に縛られて曝される。制服剥奪を加えられる事も有る。連帯責任の場合、一学級、



或は一学年全部が罰される例が有り、今夜の非常監禁も何等かの処罰と解釈された。生徒全員は無抵抗で自由を奪われた。

航空科の他の一人の教官棉津見洋子と練習生五名だけが監禁を免れた。この六名は九一式飛行艇に乗り、部品受領を兼ねた練習飛行の為、同じ日の午後、呉へ出発していた。

外部の誰も異変を知らない。千八百人の少女達は両手両足を縛られ、猿轡を噛まされて地下洞の中に呻吟していた。クーデター準備は急速に進められている。

婦人兵や生徒は或る程度縛られる事に慣れている。一種の諦観を以て自ら解く努力を放棄した。

「政府、大本營の連絡会議では外交打ち切り戦争発動を十二月一日零時に定めたとの情報が入っています。開戦を決定する御前会議は一日開催の予定です。これを阻止すれば外交継続となり、戦争準備は中断されます。一度中断すれば容易に再開出来ないでしょう。驟起は十一月三十日深夜。唯一の機会です」

霞ヶ岡瑠璃美が大方針を定めた。

「第二小隊の二箇分隊で砲台と陣地を固め、一分隊と教官の一部で生徒達を監視します。第一小隊の全力と第二、第三小隊の一部で奇襲を行い、第三小隊の二箇分隊が宮城を守備します。目標は首相官邸と陸軍省」

鯉田総子が作戦を樹てた。

「海軍が私達に味方してはいけません。不本意だけど海軍省も襲撃目標に加えましょう」衣笠美美代が補足した。

「憲兵隊司令部と警視庁。近衛師団本部」

鮎川絵津子が取捨選択した。クーデターに直接参加する人員は僅か五百人。無制限な拡散は許されない。

「二・二六事件のような無差別暗殺は絶対になりません。血を流さない事。目的は御前会議を流会に終らせる事だけです」

五十鈴川麗子が揮下小隊員に訓示した。

× × ×

十一月三十日。土曜日。

皇弟海軍大佐高松宮は天皇陛下を御訪問になり、海軍の真意が戦争回避である旨言上し給うた。海軍の非戦論に最後の希望を繋かれた陛下は直ちに海軍大臣と軍令部長を招かれ意見を徴された。併し嶋田繁太郎も永野修身も討米論の大勢を前にして責任を回避した。陛下の御胸中は察するに余ある。平和の御祈念を輔弼する実力者は遂に一人も無かった。茲に陛下は木戸内府を召され、御前会議の招

集を命じ給うた。この会議には何等の御発言も無き事。開戦の決定が御裁下になる事が予定されていた。

同日昼頃。婦人部隊第三中隊第一小隊全部と第二小隊八十人を乗せたトラック十二台が東京に到着した。宮城警備の第三小隊と交替する為、というのが口実だった。婦人兵の全員が東京の地理に精通していた。

同じ頃、大房岬の地下洞では、手足を縛られ、口に鞭を詰められ、革帯で猿轡を噛まされた千八百人の少女達が身体を寄せ合って体温の保存を計っていた。百人宛が交替で縛を解かれ、食事と用便が許された。

深夜十一時四十五分。宮城西の丸、吹上門内に有る婦人部隊詰所から完全武装の五百人が進み出た。半蔵門を出ると三隊に分れた。後に一二・一事件と呼ばれるようになるクーデターは凍る冷気を衝いて開始された。

中隊長鯉田総子の指揮する第一小隊二百名は三宅坂に向った。実戦の経験を持つ鮎川絵津子が顧問として同行した。

第二小隊長五十鈴川麗子は二箇分隊を率いて永田町へ。霞ヶ岡瑠璃美が後見した。

第三小隊長鮎本恭子は三箇分隊と共に霞ヶ岡へ進んだ。



磐城朋子は宮中女官の衣裳の下に婦人部隊の制服を着ていた。行動開始と同時に衣裳を脱いで第三小隊の二箇分隊を掌握し、吹上門内から半蔵門に到る一帯を警備した。

この頃、大房岬の基地では衣笠美美代が三箇分隊を以て砲台、特火点、<sup>トーチカ</sup>、営倉を守っていた。十二吋砲には実弾が装填されている。

日米開戦は既に決定したも同然だった。陸海軍の一部は行動を開始していた。併し日本の制度は御前会議で天皇陛下の御裁下を得る事が必要だった。形式的な行事で、大臣の発言も陛下の御裁下も前以て決定され、時間表通り演出されるのだが、これを欠けば何事も発効しない。当時の日本には千鈞の重量を持つ神聖な会議だった。

小さな東条英機は御前会議で発言すべき事項の暗誦を深夜迄続けていた。傍に軍務局長の武藤章が居た。

婦人部隊八十余人が音も無く忍び寄った。

五十鈴川麗子が裏表の門を抑えた。

「靴を脱いで」

霞ヶ岡瑠璃美が土足侵入を禁じた。

首相官邸の門扉が外された。雨戸が静かに取り除けられた。衛兵は気絶している。

「誰かっ」

神経鋭敏な首相が気配を感じて軍刀を把ろうとした。併し一瞬早く白刃が遮った。霞ヶ岡瑠璃美が立っていた。

軍務局長は拳銃を至近距離から発射した。一弾が霞ヶ岡瑠璃美の腹に命中した。それでも倒れながら刀を振った。峯打の一撃が武藤章の手から拳銃を叩き落した。

鱒田総子の一隊は陸軍省、参謀本部、総長官舎を占領した。鮎本恭子の一隊は海軍省、軍令部を接收した。クーデターは迅速、静粛に行われた。この夜、東京に響いた銃声は武藤章の一発だけだった。大東京は何も知らずに眠っていた。

二・二六事件の無秩序とは比較にならなかった。千四百の暴徒が暴れ廻り、八十二才の大臣に銃弾十数発を撃ち込んだ如き暴虐は何処にも見られなかった。牧野伸顕を狙って旅館に放火し、老紳士を見れば片端から狙撃を浴びせ、警官と看護婦を倒して逃走したような無軌道叛乱とは同日の談でなかった。

婦人部隊はトラックや乗用車を連ねて整然と半蔵門に入った。東条、武藤、杉山、永野嶋田以下四十余人の政府、軍首脳が二時間以内に拉致され、吹上門内の婦人部隊詰所に軟禁された。政府と大本営の機密文書は厳重に

封印され、武装解除した下級職員に保管を依頼して手も触れなかった。電話は交換器を分解し、無線は真空管を抜き去ったが何れも時間さえあれば修理可能の程度だった。

東条英機は首相、陸相、内相を兼ねていたから政府と警察の機能は一時に停止した。本営も亦、活動を中断した。

事が突然だった為、警察も憲兵も事態を認識し得なかった。鱒田総子が電話で宮内省、警視庁、憲兵隊本部、近衛師団留守部隊に通知した。驚愕と狼狽が拉り始めた。

× × ×

十二月一日。日曜日。

東京は何事も無かったように平静だった。併しそれは表面だけの事で、裏では非常通信が織るように交錯した。併し警視庁も憲兵隊も為す処を知らない。敵は宮城内にあって、政府と陸海軍の首脳を楯にしているのだ。

穂田大尉は近衛師団本部で事態を知った。

——遂にやったか。真逆と思ったが。——

斯くなっては叛乱軍に違いない。婦人部隊と雖も討伐しなければならぬ。併し幸か不幸か穂田大尉は直接の部下を持たなかった。

彼は天正十年の史実を思い出していた。

柴田勝家は北陸で上杉と対峙中。



羽柴秀吉は中国で毛利と交戦中。

信孝、恒興等は水軍の全力と共に南海道遠征に出動せんとして大阪に待機中だった。

即ち織田の全兵力は辺疆に展開し、近畿残留は近衛師団に相当する光秀の兵のみ。而してこの軍は実戦の経験の有せず、クーデターにのみ適していた。

昭和十六年の形勢は如何。

梅津美治郎は関東軍の精鋭十三箇師団を以てソ連に対していた。

畑俊六は支那派遣軍二十一箇師団を挙げて中国軍と交戦中だった。

寺内寿一は南方軍十一箇師団を率いて正に南洋作戦を開始せんとし、海軍の大部分も、これと共に在った。航空兵力も同様である。

以上の他に朝鮮軍が二箇師団。

第一航空艦隊は日付変更線上に在った。

即ち大陸軍五十一箇師団中、本土に在るもの僅か四箇師団。その内、常設師団は北海道の第七師団のみ。他は今年編成したばかりの特設師団だった。百万頓聯合艦隊亦然り。

本土は空虚に等しかった。引還して秀吉となる者は誰か。

最大の兵力を持つ畑は中国軍と離隔出来なかった。

梅津は東条の後継者と見られる人物で、彼の軍は交戦していなかったが船が無かった。寺内は決断を下し得る人物ではなかった。

第二十五軍の山下奉文だけが例外だった。

彼は二箇師団と、海軍の協力と、有力な航空隊と、石油と現金と多数の船舶を保有していた。山下は異変を察知すると同時に行動を開始し、十二月三日に海南島で乗船、八日には東京湾に現れた。本来なら此の日こそ彼の軍がマレー半島に上陸すべき日だった。併し山下は日本の支配者になれなかった。彼より一歩早く行動した者が居た。それは高須四郎であり、広島湾に居た第一艦隊だった。その上に聯合艦隊司令長官の山本五十六が居た。

× × ×

山本は東京との連絡杜絶に不審を感じていた。横須賀からの断片的情報は異変発生を思わせるものがある。「予定通り前進攻撃」を意味する「ニイタカヤマノボレ」の隠語電報は発信を差し止められた。

十二月一日朝。婦人部隊の練習艦鹿島は広島湾の沖を通過し、第一艦隊を認めて礼砲を発射した。これを守っていたように駆逐艦初春が急行し来り、停船を命じた。

「柱島錨地へ回航されたい」

指定された泊地は第一、第二戦隊の中間だった。長門、陸奥以下が巨砲を差し向けた。鹿島艦上は騒然となった。犯罪者扱いだ。

「遂に蹴起したか。勇敢だが無謀。崇高だが拙劣。生き残る機会はあるまい。併し無駄に死なせてはならん。如何にして骨を拾うか」

蘭島少将は驚かなかった。予期していた事が起った如くに落ち着いていた。幹部に艦内整理を命じ、長門から来た短艇に移乗した。「蘭島閣下。申し難い事です。鹿島と乗員を抑留しなければなりません。御諒承下さい」瘦身小軀の大提督は自ら舷門に出迎えた。十年来、旧知の間柄である。併し軍律が間を遮っていた。叛乱の連累容疑は重大である。長官は鄭重な態度で宣告した。

「私の娘達に不逞の行為が有ったと見えますが、そうならずして私の責任です。鹿島の乗員は一切関係ありませんが一応謹慎を命じて来ました。事が落着する迄お預け致します」

相手は女性。山本は特に精選した士官と水兵を派遣して接收を命じた。そして驚いた。鹿島は整然と接收を待っていた。砲は尾栓を外し、汽缶は蒸気を放出し、石炭庫と弾薬庫は封印し、陸戦火器、整備品、帳簿類、薬品に至る迄、目録を添えて分類してあった。



「まるで赤穂城だな」

報告を受けた山本五十六が言った。

一層驚く可き事が有った。兵科、機関科の少女水兵六百人は仲間同志で後ろ手に縛られ後部下甲板の講義室に端然と正坐して処置を待っていた。保安要員と主計科のみが部署に居たが何れも自分用の縄を腰に帯び、就縛の用意が出来ていた。

「これ程迄にしくなくても」

接收を命じた長官が蘭島少将に言った。

「本来は従順で有能な水兵です。私の命令があれば如何なる苦痛も屈辱も忍ぶのです。生かしておけば太平洋の埋草ぐらいには使えるでしょう」

「その婦人部隊が何故閣下の意志に反して叛乱を起したのですか。然も手段は拙劣。海軍省さえ襲撃しなかったら海軍は婦人部隊の味方はしなくても中立は保ったでしょうに」

「その通りです。目的の如何を問わず手段に叛乱を撰べば国賊です。全国が主戦論に沸いている最中に反戦のクーデターを起せば憎悪のみを浴びて非業の最期を遂げる事は明瞭です。然も勝つ見込皆無の蹶起です。併し娘達はそれを承知で実行しました。だからこそ海軍を敵に廻したのです。陸軍と海軍を争わせ

てはならない。そして娘達はもう一つ密かに期待していたと思います」

「本職に何をせよと仰言るのですか」

「叛乱の婦人部隊を海軍の手で討伐して戴きたいのです」

「何と。閣下が手塩にかけた婦人部隊の討伐を本職に依頼なさるのですか」

「主戦派の陸軍軍閥は女に捕えられて面目を失っています。救出されても昔日の勢威は無いでしょう。光秀を討つ者こそ次の天下人。私の娘達は政治の実権を陸軍軍閥から奪って誰かに譲りたかったのでしょうか」

「そうでしたか。何と崇高な自己犠牲」

「蹶起した娘達は一人も生き残ろうと思っていない筈です。女が死を覚悟したら男より恐しい。此の上は早く綺麗に死なせてやるのが慈悲です。お願いします」

× × ×

天才賭博師山本は一度決心すると迅速に行動した。第一艦隊には出動が命ぜられた。目標は東京湾。併し湾口の大房岬には婦人部隊の十二吋砲が出入を制扼している。

山本五十六自身は空路横須賀に直行しようとした。併し手近に適当な大型機が無い。呉に抑留されている婦人部隊の九一式飛行艇だ

けが利用可能だった。だが此の旧式機を操縦する飛行士は謹慎中の棉津見洋子しか居なかった。山本は従兵を連れたのみで九一艇に乗った。蘭島少将がこれに同行した。十二月一日の夜には山本は早くも空虚な海軍省に入り濠を隔てて宮城内の婦人部隊に対していた。同じ頃、第一艦隊は二十四節の速力で東京湾に向っていた。

× × ×

十二月二日。月曜日。

朝早く棉津見洋子の操縦する九一式飛行艇が横須賀を発って大房岬に着水した。衣笠美代等に帰順を奨める為だった。此の説得は成功しなかった。棉津見洋子等六人の婦人飛行士は縛りあげられた。

六時間後、第一艦隊が大房岬の沖を通過した。岬の砲台は沈黙した儘だった。棉津見洋子の一言が発砲を阻止した。

「第一艦隊の中に校長閣下が居られます」彼女と同僚千八百人が三日前から監禁されている地下洞に連行されて幽閉された。

× × ×

長門、陸奥、伊勢、日向、山城、扶桑。六大戦艦に加えて瑞鳳、鳳翔の二空母。北上、大井及び駆逐艦十隻。



時ならぬ大艦隊の出現に東京市民は瞠目した。併し未だ何事が起ったかを知らない。

海軍陸戦隊は永田町に、陸軍は番町に、警官と憲兵は大手方面に集結した。併し兵士は呼集の目的を教えられていない。婦人部隊も静粛に構えて動かない。

× × ×

蘭島少将は単身説得に乗り込んだ。

開戦を決定すべき御前会議は流会した。

山本五十六は全艦隊に作戦中止を命じた。

陸軍の乗船も中止された。

宮内省では内閣更迭が考えられていた。

「君達は一人も殺さずに此処迄来た。御前会議阻止の目的は果した。大本營の機能を回復させて出師の中止を発令しなければならん。

内乱を起すに足る軍隊が東京に集結する前に武器を収めよ」

叛乱の終了は早過ぎても無効。遅過ぎても危険。婦人部隊幹部は宮内省女官から内密の情報を採りつつ形勢を観望していた。

腹部に銃創を負った霞ヶ岡瑠璃美は既に立てなかった。併し頭脳は未だ働いている。

「海軍陸戦隊は宮城南方に展開を終ったように見えます。陸軍は遅れています。山本提督に武器を渡しましょう」

午後五時、婦人部隊の叛乱は終わった。

「国賊の汚名は覚悟しています。生命も名も惜しみません。陸軍は怒っているでしょう。

私達は自刃する事無く、生きた身を復讐の座に捧げます。只、重傷の霞ヶ岡瑠璃美にだけは、これ以上の苦痛を免除してやりたいと思います」

次席指揮官格の鮎川絵津子が言った。

「御配慮に感謝します。一人だけ安易な死を撰んで済みません。ではお先に参ります」

あと幾時間も保つまいと思われる残り灯が端然と挨拶し、姿勢を正した。腹部の銃創は最も苦しく、然も助る見込の無い性質のものである。それでも最後の力で短剣を把った。

磐城朋子に支えられながら左下腹を刺した。右へ引き廻す余力は無かった。返す切尖で頸動脈を断とうとした。併しこれも十分に切れ

ない。磐城朋子が手を添えようとしたが僅かに首を振って謝絶の意を表した。三度目には剣を左胸部の肋骨間に当てた。突くのではなく体の方を剣の上に乗せかけた。心臓を貫かれながら前に伏した。

鮎川絵津子と磐城朋子が血を拭い、手を胸の上に組ませた。美しい死顔が微笑し、眼はどうしても閉じなかった。

霞ヶ岡瑠璃美の死屍が日章旗で掩われている間に、鮎田総子の号令で全部の武器が積み重ねられた。五百数十人の婦人部隊は二列に分れた。次の号令で一群は自ら手を背中に廻し、他の者が同僚を縄で後ろ手に縛った。縛り終ると残る三百人近い人数が又二隊に分れ

一方が他方を縛った。十五分以内に婦人部隊は外部の手を借らず、自ら縛りに就いていた。

幹部五人だけが残った。鮎川絵津子、磐城朋子、鮎田総子、五十鈴川麗子、鮎本恭子。此の五人は蘭島少将が自分で縛ってやった。

近衛師団兵營に居た穂田大尉は留守部隊の主計兵等を集めて臨時小隊を編成し、吹上門に急行した。婦人部隊帰順の気配を察し、武器を棄てた娘達を保護する為だった。六百近い婦人兵は既に残らず後ろ手に縛られ、地に正坐して処置を待っていた。

海軍陸戦隊が半蔵門から宮城西の丸に入り婦人部隊の詰所と武器を接收した。東京市民は叛乱の発生も鎮圧も知らず、日米戦争が寸前で回避された事実も知らなかった。

政府と軍の要人が救出された。二日間に亘る軟禁中には如何なる暴行も加えられなかった。温食が給され、入浴も認められた。着替えは婦人兵が洗濯した。海軍省職員の一人在



負け惜しみに言った。

「時々には婦人部隊の叛乱に遭って見たいな」

山本五十六は多忙だった。秩序の回復、大本営の再整備、艦隊の掌握等々。

降伏した婦人兵の收容、監視は稔田大尉に任された。五百八十八人の縛られた娘達が彼の管轄に入った。これを如何にすべきか。

この多人数を收容出来る監獄は附近に無かった。時刻は薄暮。近距離なら人影が見分けられる。縛った数百人の娘達を宮城外に連れ出して衆目に曝し恥辱を与えるのは残酷に過ぎる。知られずして終った叛乱を市民や外国人に察知させる不利益もある。

近衛師団兵営に臨時收容する方法しか考えられなかった。師団出征後の兵舎は大部分が空家になっている。外部から施錠する設備は無いが武装兵で監視すればよいだろう。

後ろ手に縛られた婦人兵が西の丸を歩かされていった。繋ぎ合わされてはいない。縄尻を把る者もない。監視の人数は三十人。宵闇が迫っている。西の丸は樹林深く、武蔵野の姿を留め、娘達の姿は見えず隠れつ。

「心配するな。此の者達は絶対に逃げたりしない。近衛師団兵営に行けと命じたら殺されると解っていても行くだろう」

稔田大尉は駆け廻る兵士を制止した。

「西の丸を通過させたら外から見えない。此の配慮を理解してくれるだろう。」

近衛師団の営庭に婦人兵が並んだ。縛られた俣で四列横隊に整列し、点呼を受けた。一人も欠けていなかった。

「この秩序と絶対服従があるからこそ叛乱を起したのだ。これは逆説ではない。」

婦人兵は黙々と歩き、指定兵舎に入り、整然と並び、後ろ手の姿勢で床に正坐した。

「一晩中監視する事になるだろう。縄は解いてやろう。明朝又縛ればよい」

此の好意を罇田総子が拒絶した。

「私達は叛乱軍です。処分決定が下る迄、此の俣で待機させて戴きたいと思ひます」

併し混乱は外部から起った。監禁されて憤慨していた参謀本部職員の一部将校が解放と同時に手近の兵を掻き集め、酒を振舞って煽動し、夜闇と無秩序に乗じて近衛師団兵営を襲撃した。稔田大尉の手兵は少く、実戦経験の無い臨時の部下ばかりで命令即応の動作が出来なかった。そして後ろ手に縛られている婦人兵には身を守る手段が無かった。磐城朋子、五十鈴川麗子等百余人が拉致された。荷物の如く縛られてトラックに抛り込まれた。

乗せきれなかった幾人かは手足を縛られて濠へ突き落された。

第一聯隊の営庭には巨大な篝火が燃えていた。机、椅子、木棚等、可燃材が手当り次第投げ入れられた。興奮と狂乱が一晩中渦を巻いた。白昼の如き照明の下で婦人兵は鉄条網の有刺鉄線を以て縛りあげられた。寒風の中に制服は裂き捨てられた。

「叛逆者」「国賊」「売国奴」「非国民」

凡ゆる悪罵と共に、馬鞭、銃の台尻、剣帯木刀の雨が浴びせられた。軍靴が蹴り上げ、又は踏みつけた。磐城朋子は足首を馬に繋がれて営庭を曳き廻された。高鉄棒や樹枝に逆吊りされ、下で火を焚かれている者も幾人か居た。火焰は髪を焼き、皮膚を焦がした。怒号と叫喚が営庭一杯に反響した。

五十鈴川麗子等は樹の幹に縛りつけられ、無数の銃剣を全身に突き刺された。生きながら寸断されて行くのだった。

「最後に何か一つだけ言わせてやるぞ」

逆上した将校が軍刀を咽喉に擬した。皮膚を裂かれ、骨も砕かれた五十鈴川麗子が頭を上げて微かに口を動かした。

悪鬼の形相をした将校は一瞬にして興奮も酒の酔も醒めた如く、軍刀を落して凝然と立



ち竦んだ。血に塗れた五十鈴川麗子の顔が落ち込んで動かなくなった。最後の一言は確かに「天皇陛下万歳」と聞えた。

× × ×

十二月三日。火曜日。

狂乱の一夜が明けた。

血の臭いと肉の焦げる異臭が漂っている。

五十鈴川麗子等七十余人の、或は焼け爛れ又は引き裂かれた死屍が散乱し、未だ息の有る磐城朋子等四十余人は出血と全身の創傷と鋼鉄の縄目に喘ぎながら、死屍の堆積に埋没していた。

山本五十六が横須賀鎮守府第七特別陸戦隊を指揮下に掌握して治安回復の端緒を掴んだのは午前六時だった。

× × ×

蘭島少将は東京の騒乱を知らなかった。此の朝は大房岬の婦人部隊基地に入っていた。

衣笠美美代の一隊は籠城態勢を持続した。

僅かな人数で砲台を操作し、特火点の機関銃に配員し、蹶起不参加の同僚を監視した。縛って監禁した人数は十五倍である。四日間是不眠不休、緊張の連続だった。そして能く策源地保持の任務を果たした。東京の本隊が帰順した現在、為すべき事は既に終わった。衣笠美

美代は揮下一同を説いて武器を差し出した。

棉津見洋子、神酒慶子、杜鵑花秋子等、地下洞に監禁されていた千八百余人の娘達が縄を解かれ、代って衣笠美美代等百二十六人が両手両足を縛られ、同じ場所に繋がれた。

× × ×

十二月四日、水曜日。

天皇陛下は「日米会談を継続せよ」との御詔を下し給うた。これに添う能力を欠いた東条内閣は同日午後、辞表を奉呈した。

十二月五日、木曜日。

組閣の本命は東久邇宮稔彦王に降下した。

十二月六日、金曜日。

米大統領ルーズベルトは天皇陛下宛親展電報を發し南部仏印増兵中止を懇請した。

同日、新内閣成立。

総理大臣 東久邇大將宮稔彦王

内務大臣 岡田啓介

外務大臣 幣原喜重郎 次官 吉田 茂

陸軍大臣 梅津美治郎 次官 阿南惟幾

海軍大臣 米内光政 次官 井上成美

大蔵大臣 池田成彬 次官 石橋湛山

拓務大臣 広田弘毅

文部大臣 林銑十郎

商工大臣 岸 信介

司法大臣 平沼き一郎

厚生大臣 鳩山一郎

興亜院総裁 宇垣一成 以下略

元首相五名。首相級の人物二名、政界の要人一名を含む強力内閣が出現した。皇族首班は空前の事であり、その下に大將六名、官僚、財界、政党の一流人物が揃っていた。大臣級の次官四名も国家非常時に際し一身の利害を越えて一段下の職務を欣然と引き受けた。

× × ×

十二月七日、土曜日。

米大統領の親展電報が到着した。

天皇陛下は木戸内府、松平宮相、幣原外相を召され、回答電文の作成を命じ給うた。

十二月八日、日曜日。

本来なら太平洋全域に亘って日本が奇襲的開戦を行う日だった。併し大本營の作戦中止命令はよく行き届き、戦火は上らなかった。

此の日、マックアーサー大將への増援二万を乗せた船団が出航した。併し形勢変化を察した米政府は目的地をハワイに変更させた。天津から引揚げようとしていた米海兵隊は乗船を中止した。

同日正午頃。山下奉文の第二十五軍を乗せた船団は東京湾に入ってきた。併し事態は既



に落着いていた。二箇師団を持つ山下は陸軍の代表者たる資格が有ったが敢て主張せず、山本五十六の優越せる地位を承認した。

同じ日、叛乱婦人部隊の裁判が軍法会議の形式で開廷された。叛乱参加者七百十五名。

その内、自刃一名、虐殺七十二名、獄死六名は既に亡く、六百三十六名が告発された。但し二十九名は重傷入院中で欠席していた。

鹿島乗員、航空科、女官養成所生徒は叛乱と無関係である事が証明された。蘭島少将の立場は最も微妙だったが、叛乱教唆の容疑と

## 挿絵画家募集

○本誌発表の作品にふさわしい幻想的で優雅な異色画を求めます。

○用紙は必ず白い画用紙に墨汁又は黒インクにてお書き下さい。鉛筆や青インクはお避け下さい。大きさは御自由ですがなるべく二倍乃至三倍位が適当です。

○優秀作品は本誌の最近号に発表の上、読者の反響の如何によつては、本誌専属挿絵画家として毎月執筆願います。

○従来、S画（主として女体緊縛）或はM画、女体切腹などについて多くの方々から御応募頂きましたが、残念ながら特に傑出した作品には接しませんでした。どうか奮て力作をお寄せ下さるよう、お待ちしております。御送稿は第一種便にてお願いいたします。

一人で鎮圧した功績を共に不問とされ、賞罰併せ行わずと決った。陸軍の一部には婦人部隊を解散させようとする動きも見えたが、海軍と宮内省の努力で沙汰止みとなった。

× × ×

十二月九日、月曜日。

新内閣も成り、第二十五軍が協力を誓ったので山本五十六は陸上での任務を終った。第一艦隊は広島湾に向つて抜錨した。大房岬の沖を過ぎる際、提督は旗艦長門を停め、短艇に移乗して婦人部隊基地の蘭島少将を訪問した。艦隊は長官を残して西に去った。

「日米戦争を回避し得た婦人部隊の功績は十年後の国民が理解するでしょう。併し余にも大きな犠牲でした。七百余人を救えなかった無力をお詫びします」

蘭島少将は十二月三日以来謹慎していた。

「娘達が最も残酷な方法で処刑されてこそ、日本の内乱は防止され、対米戦争の危険が除去されるのです。その上に未だ三つ問題が残ります。帰還した南方軍が開戦を強要して、二・二六事件の如き暴動を起す事は無いか。米国が日本と同程度の誠意を以て平和維持の努力をするか。重慶政権が日本の不統一と解釈して傲慢になりはしないか。これを防ぐ方

法は只一つ。南方軍と関東軍を挙げて重慶を攻撃し来春三月迄に講和を強制する事です。陸軍の憤怒を大陸で爆発させ、日米会談から難問を除き得ましょう」

× × ×

十二月二十五日、水曜日。

吹雪が荒れていた。叛乱婦人部隊に対する判決が下った。非公開、無弁護、一審終結。開廷以来十八日間の超特急裁判だった。

衣笠美美代。鮎川絵津子。罇田総子。鮎本恭子の四名は死刑。

磐城朋子等六百三十二名が懲役。

首謀者の一人磐城朋子が死刑を免れたのは、蹶起当時宮内省女官だった為に謀議不参加と見做されたからである。懲役は伍長以上が無期。他は五年から十年に至る有期刑だった。

× × ×

十二月二十七日、金曜日。

稔田大尉は館山行き連絡船を待つ為に月島に居た。夜の港に灯を消した大船が一隻、芒と霞んで見える。婦人部隊の鹿島だった。

トラックが停った。幌の中から人影が現れた。後ろ手に縛られた娘達だった。

トラックは続々到着し、縄を掛けられた娘を次々に吐き出した。憲兵が監視していた。



最早婦人兵ではない。標識も階級章も剝奪された只の女囚だった。制服の上から縛られ人眼を避けながら雪の棧橋を歩いて行った。

× × ×

十二月二十八日、土曜日。

稔田大尉は大房岬に蘭島少将を訪問した。

「娘達が最後迄、君に迷惑を掛けるね。銃殺の執行指揮官は君だそうじゃないか」

校長室の写真は百十枚を越えていた。霞ヶ岡瑠璃美や五十鈴川麗子の顔も見える。

「辛い任務です。併し閣下の大切な娘達が見知らぬ他人に殺されるよりはよかろうと思っています。銃殺が四名だけなのは幸でした。でも全員有罪は酷いです。二・二六事件でも下士官、兵は無罪でした」

「二・二六当時とは較べられん。今は戦時中だ。敵前の叛乱は重罪だよ」

「昨夜、懲役刑の娘達が東京港から何処かへ送られて行くのを見ましたが」

「山本提督の配慮で鹿島が送る事になった。感謝しているよ。行方は硫黄島だ」

「無茶です。不健康極まる火山島。流罪の島ではありませんか。誰が決めたのです」

「此方から願ひ出たのだ」

「何故」

「あの人数を集団服役させ得る施設は無い。一般女囚と混ぜるのは余りに可哀想だ。憲兵から虐められないようにするには島流しが良い。硫黄島迄は追って来ないだろう」

「南の島で何をさせるのですか」

「南洋群島は無防禦だ。併し日米交渉が漸く軌道に乗ろうとしている今、急に築城すれば開戦準備と疑われる。女囚の懲役なら怪しまれない。あの娘達は立派な工兵だ。懲役と思わず、勤労と考えながら飛行場や兵舎や陣地を作るだろう。軍は飛行機と火器を持って行くだけでよし」

「婦人部隊そのものと蘭島閣下が健在な限り懲役囚が許されて戻る日も近いでしょう」

「いや、法に問われなくても道義的責任は免れない。婦人部隊指揮官と女官養成所校長は辞める心算だ」

「いけません。閣下に去られては婦人部隊の中核が無くなります。代り得る人物は誰も居ません」

「一人だけ居る」

「誰でしょう」

「稔田君。君だよ」

「私は無能です。それに現役将校です」

「日米戦争は少くとも延期にはなった。重慶

との媾和が成れば陸軍は縮少になる。予備役編入が沢山出るよ。君が無能とは思わないが無能でも構わん。婦人部隊は中心に一人の男が必要だ。女とはそのようなものなのだよ」

× × ×

十二月二十九日、日曜日の朝。

稔田大尉は考え込んでいる。

「僅か七百人の婦人部隊が日米戦争を阻止するという大事業を成し遂げた。危懼された内乱も発生しなかった。何故だ。」

「天皇陛下を頂点とする平和派が婦人部隊の蹶起で団結し、軍部との力の差を埋めた。併し、それだけではない。」

「無慾の勝利だ。生命も名も要らぬ者は強い。女だから名誉慾も棄て得たのだ。」

「このような婦人部隊の世話が俺に出来るだろうか。」

稔田大尉の手中には杜鵑花秋子から託された櫛、白粉、紅、香水が有った。

× × ×

午後遅く。

四本の新しい柱が誰かを待っている。

稔田大尉は四十八人の兵を指揮していた。

衣笠美美代、鮎川絵津子、鱈田総子、鮎本

恭子。四人の美女が後ろ手に縛られて曳かれ



流れて行った。





—娘相撲物語—

## 女相撲同好会

〔その前奏曲〕

海野美津男

さわやかな朝の潮風が、紅潮した頬を快よくなで、磯の香がかすかに鼻をついた。

きりっと締め上げたまわしを見つめていた長田和子は、こみあげてくるものを、ぐっとかみしめていた。

和子が、相撲に惹かれ、どうしても相撲の同好会を作るんだと心に決めたのは、一年前の夏休みのことだった。

なぜ、そんなことを決心したのか、今でも十分に説明することはできなかったが、そん

なことはもうどうでも良かった。

今、こうして、例えばわずか五人の仲間とだけでも、そしてそれが秘密の同好会だったとしても、自分の願いが実現したということと彼女の胸はいっぱいであった。

美代子が、その和子の肩をポンと叩いて言った。

「とうとうここまで漕ぎつけたわね。とにかく良かった！」

和子は、美代子の手を、思わずきつく握りしめていた。

きっかけ

それは、一年の夏休み、柔道部で、合宿の稽古をしていた時のことであった。

和子の入学した女子高校の柔道部は、その県の高校女子柔道部の中では最も歴史が古く毎年県大会でも負けたことがなく、県対抗でも常に上位にあった。

小学校三年の時から兄に柔道を習い、中学時代には、道場通いを一日も欠かさなかった



和子は、迷うことなくその女子高校を選んだのだった。

合宿に使われる道場は、三年前に、学校や部の先輩たちの努力で建てられた立派なもので、道場のほかに、四十人は楽に寝られる寝室や、炊事場もあった。

それは、水泳部の合宿や、先生や生徒の海の家としても利用できるようにと、学校から三キロほど離れた、美しい海浜に建てられていた。

彼女たち柔道部の合宿は、水泳部が、夏休みの始めの十日間使ったあとに続いて、十日間の予定で行なわれた。

指導は、二十五才の独身で、女ながら三段の黒帯を持つ体育の鈴木妙子先生と、二人の子供を持つ三十四才の橋口則男先生によって行なわれた。橋口先生の専門は国語、柔道は四段であった。

部員は、午前五時の起床から正午まで、朝食の一時間を除いて、二人の先生から徹底的に鍛えられた。しかし、誰一人、悲鳴をあげるものはいなかった。

午後の時間は楽しかった。

昼食後、午後三時までは午睡で、そのあと五時までの二時間は水泳であった。

部員は、きびしい午前中の稽古から解放されて、思いきりはしやぎまわった。泳げない者にとっても、とにかく水に浮く程度にまで指導してくれるその時間が楽しかった。二人の先生もいっしょにはしやぎ、時にはゲームなども教えてくれたりした。

三日目の午後のことだった。

二人の先生は、泳いでいる生徒たちを浜に呼び集め、身長順に二列に並べた。

和子は、『また、新しいゲームでもするのかな?』と思った。

橋口先生が、『前列、回れ右!』と、号令をかけた。みんなは元氣よくそれに従って、後列の者と向き合った。

すると今度は、鈴木先生が

「さあ! 今からみんなの身体に力をつけるために、押し相撲をとってもらいます」

と言いだした。

二十八人の部員たちはざわめいたが、鈴木先生は構わず続けた。

「いいですか。お互いの右手を、相手の左の腋に当てます。……当てましたか? そしたら次に、相手の右腕を、左手でつかんで下さい。うまくできますか?」

橋口先生が、うまくできない者のところを廻って、直してやった。

和子は最初、向き合っていた二年生の古川文子の顔を恥かしそうに見ながら、遠慮がちに、その腋に手をやった。

しかし、古川は、押し相撲を取れと言われても、どうもないようであった。彼女は、グイと和子の腕をつかんだ。

「私が、はじめ!」と言ったら、お互いに思い切り押しすんだ。前列が勝つか、後列が勝つか、がんばるんだぞ!」

今度は、橋口先生が言った。

「けげんな顔をして先生の方を見る者もいたが、中には、『よし、負けるものか』と、勢いこむ者もいた。」

和子は、けげんな顔でいた方であったが、古川の、肉付きのよい腋や腕に手を当てているうちに、だんだんと、斗志が湧いてくるのに気づいていた。

「いいか……はじめっ!」

号令がかかった。

和子は、相手にピッタリ頭をつけると、渾身の力をこめて押して出た。

だが、古川は一步もひかずに押し返してきた。柔道では、ほとんど負けたことのない相



手であったが、技の通用しない押し合いではそうはいかなかった。逆に、ジリジリと押し返されていた。

笛が鳴り、

「どうだ？ どっちが勝った？ 負けた方は手を上げろ」と、橋口先生の声がした。前列の勝ちだった。

「ようし、あと二回やる。手は当てやすい方に当ててみる」

今度も、和子は古川に押しまくられてしまった。

和子は、古川には入部当時から好感を持っていた。彼女は、古川のあたたくてシンの強い性格が好きだった。いつか親しく話してみようと思っていた。だが、その時の和子には、そんなことはどうでもいいことだった。彼女の負けん気は頂点に達していた。

三回目、和子は、号令を聞くが早いか、ぐいぐいと押して出た。一歩先んじられた古川は、思わずタタッと後退したが、「エイ！」と小さく叫ぶと、猛烈に押し返してきた。

一歩も退るまいとがんばる二人の身体は、少しずつ起きて、おたがいの腹がピッタリとついて、体全身での激しい押し合いとなっていた。



和子の念頭には、押し負けまいとする負けん気以外、もう、何もなかった。

相手の腕をつかんでいた手を放すと、水着の裾をつかんでぐっと引いた。古川も、和子の水着をつかんでいた。

二人は、両手でそれを、まわしのようにぐいぐいと引き合った。

和子が、古川に吊られて身体が宙に浮いたと思う瞬間、古川の身体がぐらっと揺れ、二

人は折り重なってどっと倒れた。和子が上になっていた。

笛の音が聞こえ、橋口先生の豪快な笑い声が耳に入った。

「押し相撲だと言うのに、柔道の腰車でぶん投げたり、本当の相撲を取って、外掛けを掛けたりした奴がいるぞ」

みんなは、どっと笑った。

腰車で相手を投げたのは、三年生の山本久美子で、投げられた一年の鳥井幸子が、痛そうに腰をさすっていたが、外掛けを掛けたと言われたのは和子のことであった。

「まあ、いいだろう。柔道部の生徒はそのくらい元気が無くちゃあね」

橋口先生が、もう一度豪快に笑った。生徒たちもそれにつられて一斉に笑いこけて、互いにふざけ合いたいような、和やかさが流れた。

和子も、古川と顔を見合わせて、頭をかきながら笑った。

その夜、和子は夢を見た。

誰も居ない砂浜に、彼女は古川と相対していた。二人とも水着の上から柔道着の帯を締めていた。



古川が、猛然とぶつかってきた。和子も、負けずにぶち当たった。

相手の腕を払いのけて、和子の右手が、古川の帯をしっかりとつかんだ。古川は、その腕を左腕で抱えこみ、右手で和子の左腕をつかんだ。二人は、しばらくそうして揉み合っていたが、古川は隙を見て右手を離し、和子の帯をぐっとつかんだ。

二人は、がっぷり四つに組んでいた。

ずいぶん長いことそうしていたようだったが、一瞬、古川の両腕に力が入ったと思うと和子は一気に吊り上げられていた。思わず足を掛けたが、古川はそれを外すと、大きく投げを打ってきた。

「痛いっ！」と思った瞬間、和子は目を覚ましていた。

彼女の腕は、隣に寝ていた柳井美知子の寝巻の帯をしっかりとつかんでいた。

彼女は、あわててその帯を放し、仰向けに姿勢を変えた。

和子は、なぜそんな夢を見たのかを考えようとした。

それが、昼間の押し相撲のせいであることにはまちがいがなかったが、昼間のその経験はそれだけで終わっていたはずで、別に、相撲が

取りたいなどという気は起っていなかったから、彼女はそんな夢を見たことが不思議でなかった。

稽古の疲れのせいか、その夜は、そんなことを考えているうちに、いつの間にか再びグッスリと寝入ってしまった。

あくる日の午後の時間にも、押し相撲が行なわれた。

和子は、相手になった一年の長谷川幸子を三度とも一方的に押し勝った。

だが彼女は、その日は、昨夜の夢のことをすっかり忘れていた。それは、午前中の稽古の時、それまで一度も負けたことのない一年の山元美代子に、二度まで投げ倒されていたくやしきからであった。それは決して相手に対する憎しみではなく、負けたことのない相手に倒された自分の不甲斐なさに対してのくやしきであった。

その日一日、なぜ山元の大外刈と、足払いで簡単に倒れたのか、彼女は考え続けた。

次の日、彼女は山元とだけ組んで稽古をした。

その結果、山元が立技で急速に伸びていることがわかった。それは、力の問題ではなく

相手の隙を見る目というか、気合というか、そんなものが身についたためであることがわかった。力が、それに更にプラスしていた。

和子は、それはおそらく、たゆみない精進の結果だろうと思い、自分の稽古ぶりを反省した。

しかし、寝技になると、和子が圧倒的に強かった。

二人は汗びっしょりになって稽古した。

その日の午後は、押し相撲はなかった。

だが、海の中での山元の押し相撲が、和子に、相撲同好会を作る決心をさせるきっかけになったのだった。

午前中の柔道の稽古で、急速に親しくなっていた和子と山元は、仲良く海へとびこみ、沖へ向って泳いだ。

百米ほど沖で、立泳ぎをしながら話を聞いて、和子は、山元が漁師の娘であり、その父は彼女が中学二年の時、遠洋漁船に乗組んでいてその船が沈み、亡くなっていることを初めて知った。

彼女の母は、一人娘を高校に出すために、魚の行商をしていることも知った。

和子には、山元が、つとめて明るくしよう



と努力しながらそれができず、黙っていることの多いわけがわかった。

両親も居り、兄も、妹もいる和子は、山元の境遇に胸をつまらせていた。勝気のくせに涙もろい自分の性格を持て余すことが良くあったが、その場合もそうであった。

しかし、山元は明るい顔に戻っていた。

「私が柔道部に入っただのは、何というのかな？ 思い切りあばれていると、苦しいことなんか忘れるんじゃないかと思ったからなのよ」

「それで、どうだった？ 入って」

和子は聞いた。

「やっぱり、良かったわ。忘れられるし、それに、何だか、自分に自信みたいなのが生まれてきたみたい」

「うん。私も、そうなの。もともとあばれるのが好きだったけど」

「あんた、本当に負けん気が強いわね。それに技もあるし」

和子は、ほめられて悪い気はしなかった。

確かに、異常なほど負けん気が強いと、自分でも思っていた。しかし、和子は、山元も結構負けん気が強いと思っていた。

「あんただって勝気じゃない。それに力もあるし……」

「うん。力はあるみたいね。相撲だったらあんたに負けんかも知れないな」

和子は、山元のその言葉に、急に斗志が湧いてくるのを覚えた。

「ようし、そんならやってみようよ！」

和子は山元に挑戦した。

「うん。どっちが強いかな、押し相撲よ！」

山元もそれにこたえた。

二人は浜に向って拔手を切った。山元の方が、漁師の娘のせいかな、早かった。

浅瀬に立った二人は、どちらからともなくぶつかっていた。

和子は、夢中で山元の胸を押しまくった。

山元はその腕をつかんで外そうとしたが、体勢は和子に有利だった。胸を押し上げられた山元は、二、三步退き、何かにつまづいたのか、どっと海中へ倒れてしまった。

和子は、その身体を引き起してやった。

二度目は、どちらも有利な体勢になろうとして、その両手が、はげしく争った。

山元は、和子の右手をふりほどくと、その左手で和子のアゴをぐいぐいと押しあげてきた。和子は、それを外そうとしたが、山元は許さなかった。かえってその隙に、頭を和子の胸に当てて、全身で押ししてきた。

和子の目に、山元の、陽に灼けた肩の筋肉がピリピリとふるえるのが見えた。

山元の両腕をつかみ、抱えるようにしてその身体を浮かそうとしたがおそかった。彼女の身体は大きくのけぞって、押し倒されていた。

三度目は、おたがい平等の体勢だった。

和子の右手は山元の左腕に、山元の右手も和子の左腕にしかと当てられていた。

そうになると、力と体格が物を言った。

和子の方が、体格の点でややすぐれていたが、山元の力は、思ったより強かった。

押されては押し戻し、二人は渾身の力をふりしぼって押し合った。浅瀬の底の砂は固く足をふんばるのに都合が良かった。

一歩もひかずに押し合っているうち、おたがいにピタッと押し当てていた額が離れ、逆に、離れていた腹が着いていた。

和子はジリジリとしてきた。

フト、柔道を思い出し、押してくる相手の力を利用して、何とか倒す方法はないものかと考えた。

それがまずかった。和子に隙が見えた瞬間山元は猛然と押ししてきた。

和子の、完全な負けであった。



バシヤツと水の音を立てて倒れた和子の身体に、どっと山元の身体がのしかかっていた。

「ようし！ もう一度やろうよ！」

と和子が立ち上ったとき、ピーッと笛が遠くで鳴った。午後の時間は終わっていた。二人は、集合場所に向けて走った。

## 決意

和子は、完全に相撲のとりこになってしまっていた。

柔道にはない、正面からぶつかり正面から押し合う、力と力の対決の魅力が、彼女をすっかり捉えてしまっていた。

和子は、その夜、寢床に入ってから、相撲のことばかり考えていた。

二日前の夢のことも、何だか説明がついたような気持になった。「やっぱり、相撲が好きになったから、あんな夢、見たんだわ」

彼女はそう思った。考えているうちに、誰とでもいい、ぶつ



かって、ぐいぐい押し合ってみたいという衝動で身体がむずむずしてくるのだった。

「柔道部をやめて、相撲部でも作るかな」

そう考えた時、女の相撲など、聞いたこともないことを思い出した。

しかし、その時の和子には、なぜ、女の相撲がないのか、その理由がわからなかった。

「柔道だって、昔は男のスポーツとされていたじゃないか。相撲取ってどこが悪いんだろう」

と、彼女は思った。

フト、彼女は、中学三年の時見た、高校の男子の相撲を思い出した。

すると、自分たち女が、素裸になって相撲を取ることは、何だか恥かしいことのように思えてきた。

彼女は、身体が火照ってくるのを覚えた。

しかし、和子は、相撲がどうしても取りたくなっていた。昼間、山元との押し合いで味

わったあの魅力が、彼女をすっかり捉えてしまっていた。

「裸が恥かしければ、水着でも何でも着てやればいいじゃないか」

彼女は、そう心に決めた。

いつの間にか、和子は深い眠りに落ちていた。

和子は、その決心を、山元に打明けることにした。

あくる日の夜、自習時間のあとの自由時間に、彼女は山元を浜に誘った。

和子は、自分の気持をそのまま打明けた。そして、秘密でもいいから相撲の同好会でも作ってみたい。そのためには柔道を捨てても良いとまで言った。

山元は、黙って、それでも熱心な眼の色で和子の話を聞いていた。

和子が、すべて話し終った時、山元はポツンと言った。

「相撲って、面白いね」

和子は、前の日の二人の押し相撲の感想を山元は言っているのかと思った。

「ね、そうでしょう。私、あんなとの相撲から、そう思うようになったのよ」



しかし、山元の答えは意外だった。

「昨日のこともだけど、私、小さい頃、良くお相撲取ったのよ。三、四人の友だちとちゃんと土俵を地面に画いてね」

和子は驚いた。

「へえ！ あんたたちのところでは女の子が相撲取ってたの？」

「うん。大人も別に、何とも言わなかった。

昔、うちあたりの村では、女の相撲があったんだって。母ちゃんも娘の頃やったことあるって言ってたわ」

和子は、女の相撲が現実にあったことを知って驚きもし、また勢いを得ていた。山元は続けた。

「母ちゃんたちが三十の年ぐらいいまではあったんだってよ。白いじゅばんの上から赤い褌を締めて、村祭りの時なんか部落対抗もあったという話よ」

和子は、その町から三十キロも離れていないところに、そんな風習があったことを初めて知った。

「一度、あんたのお母さんの話聞いてみたいな。どうしても見てみたいなあ、もう復活できないのかしら」

「そうね。全然そんな話出ないようね。母ち

ゃんも、その頃のことを少しなつかしいらしくて、二度ぐらい話してくれただけど、時代が時代だから、もう今の若い娘は相撲なんか取らないだろうね、なんて言ってたわ」

和子は、それなら、自分たちが復活させればいいんだと思った。和子にとっては、何よりも、女の相撲が現にあったということが嬉しかった。しかも、それを行ったことのある人間が、近いところにいるということが更に彼女を元気づけた。

「あんたのお母さんに話して、最初は二人だけでもぜひやろうよ」

「うん。悪いことじゃないと思うんだけどね……。それに、うちの庭かなんか使えば部落の外れの丘の上だから人に見られないと思うけど」

和子は、そんな良い場所まであることがわかって、いよいよ嬉しかった。場所が問題だということは、昨夜から考えていたことだった。

しかし、山元の、何となく気乗りのしない返事が気になった。

「悪いことじゃないけど……って、どういう意味？ 悪くなければ、ぜひやろうよ」

しかし、山元に、黙って答えなかった。

「ねえ！ どうして？ 相撲はやっぱり女がやるべきじゃないと思ってるの？ そんなら柔道はどう？ 昔は男だけのものだったじゃない」

和子は、山元を促した。

「にうね。……あんたの言うとおりだと思うんだけど……」

「それならいいじゃない。秘密でやれば誰も何とも言わないし。あんたのお母さんさえ許してくれば、場所はあるし……。それに、さっき、面白いねって言ったじゃない」

山元がもたつく理由が和子にはわからなかった。

フト気づくと、就寝時間に一分前だった。

「アツ、いけない！ 点呼に間に合わなくちゃ」

和子はそう言って立ち上ったが、どうしても山元に決心させたかった。

「私、どうしてもやるわよ！ あんたが決心するまで待つからね」

そう言いながら、彼女は山元と並んで走った。

寝ながら、和子はどうしても山元がもたつくのか、その理由を考えようとした。自分とあれほどはげしく押し合い、それに、相撲は面



白いと言いながら、うんと言わない理由がどうしても和子にはわからなかった。

しかし、彼女は、人の気持は想像してもわかりはしない。結局聞き出すほかはないと思った。何日かかっても聞き出して、説得しようと思心に決めた。

和子は、こうと思ったら絶対やりとおさずには気のすまない自分の性格をあらためて認証して、『しかたない性質だな。自分でもあきれてしまう』と思った。でも、『いいんだわ、これで、何も悔むことはないんだ』と、自分に言い聞かせていた。

『昔の女相撲ってどんなにしたんだろうな。いつごろからあったんだろうか。白いじゅばんに赤い褌か……』

それを想像しているうちに、いつか寝入っていた。

山元は、意外と早くそれを承知した。

あくる朝、洗面をしている和子のところへ寄ってきて、彼女は小さな声で、『いいわ、やってみる』と言った。

和子は、とび上るほど嬉しかった。

その夜、二人で浜へ出た時、山元はもたついた理由を話した。

「誤解しないで聞いてね」

と前置きして話したその理由は、和子にとっては意外なものであった。

「私、昨日あんたに言われたとき、最初はどうもなかったのよ。でも、話しているうちに或る男の人のことを思い出しちゃって……何か、変な気分になったの。和子は男の人のこと好きになったことない？」

「いや、全然ないんだ」

和子には、本当にそんな経験はなかった。もちろん、女性特有の現象はとうに経験していたが、男性には不思議と関心を持たなかったし、持とうともしなかった。

「恋なんて、私にもまだ全然わからないんだけど……」

山元は口ごもった。

「それで」

和子は、次が、早く聞きたかった。

「うん……。今年の春だから、中学の卒業前だった。うちの部落に沖山政一さんと言う青年がいるの。二十五才なんだけど、もちろん独身よ。うちで漁業やってるんだけど……その人が県の相撲大会に町の代表五人の中にはいて出たのよ。私も、みんなといっしょに応援に行ったんだ。その時までは、私だって

全然男の人に興味なかったの。でも、その人がまわしをきりつと締めて土俵に立った時……私、何だか、身体があつくなくてきちゃったんだ。美男子ってあんな人のことを言うのかなって、以前から、そうは思ってきたんだけど。恋だとも思えないし、何だか良くわからないけど……だから……」

和子は、眠っているものをよびさまされたような気がしていた。急に彼女の心に、男性への関心というか、今までに考えてもみななかったものが渦まいていた。

自分の身体までが熱くなってくるように思えた。もう一度、中学三年の時見た高校男子の相撲を思い出していた。山元のように、特定の者への感情ではなかったが、それを見た時の自分の一種独特の感じが、山元のその時の気持に似ているような気もしてきた。

山元は、和子の気持には関係なく話を続けた。

「だから……相撲って言うとき、その時のこと思い出して、妙な気持になってしまうのよ。昼間、あんたとやった時には全然忘れていたんだけど。話してるうちにまた思い出しちゃったんだ」

「うん。何だかわかったような気がする」



「でもね。やっぱり私、相撲やることに決めた。やってる時には思い出さないで、考えてる時に思い出したんだから、何でもないと思うんだ。それに、沖山さん、近く結婚するんだって。私、まだ十六にもならないんだから大体、早いしね。だから、いいんだ、もう。ゆうべ一晩考えたけど……だから決心した。あんたの決心が強かったしね。負けたわ！」

今度は、和子の方が妙な気持になってしまっていたが、彼女は、自分の決心を変えるようなことは考えなかった。

二人は、とりあえず二人だけで、その夏休みからはじめることに決めた。

## △実 行▽

合宿が終ると、もう、八月も半ば近くなっていた。

和子は、両親に、山元の境遇のことを話さびしそうだから、夏休みの残りの期間を、山元の家で過ごしたいと言った。

両親は、三日おきぐらいに家に帰ってくることを条件に、それを許した。

美代子は……二人の間は、名前を呼び合うまでに親しくなっていた……その母に、思い

切って自分たちの希望を打明けて、許しをもらっていた。

美代子は言った。

「私、母ちゃんに話したらね、母ちゃんたら今どきの男が、相撲取るような娘と、結婚してくれるじやろうかって、最初は反対したのよ。でも、母ちゃんの胸にだけしまっておいてくれたらいいじゃないのって言ったら、それはそうだけど……と言って、何とか賛成してくれたわ。許してくれたあくる日だった。何してるのかと思ったら、私たちの締めるまわしを作ってくれてるの。なつかしいな、なんて言いながらね」

和子は、美代子の母を拝みたいような気持ちだった。

その家は、すぐわかった。

入江の中ほどのバスの停留所で訊くと、ホラ、あの丘の上に見えるだろ、と、その店の主人が教えてくれた。

美代子は、今か今かと待っていた。

その母は、五十才を越しているとは思えないほど、色つやも良く、身体も大きな人だった。

「このたびは、どうも、いろいろお願いして

……」

と、和子が慣れぬ三指をついて挨拶すると「いいえ、どうして……」

と、それだけ言って、そそくさと立ち上って行った。

和子は、何となく恥かしくて、その顔をまともに見られなかった。自分のことをどう思っているのかしら、と思うと、何か、たまらない気持がした。相撲なんか取りたいなんて思わなければ良かったとも思った。

しかし、美代子は、小さな声で言った。

「あれで、母ちゃんなかなかの元気ものなんだから。ゆうべはじめて聞いたんだけどね、母ちゃん、昔、女相撲の横綱を張っていたんだって。ボヤボヤしてると、私たち鍛えられるかも知れないわよ」

和子は、それを聞いてホッとした。と言うより、心がワクワクしてくるのを覚えた。

やがて、その母の、精いっぱい御馳走が運ばれてきた。

和子は、すっかり心を許し、自分の家に居るような気になって、遠慮なくそれを口にしていた。美代子の母は、ただニコニコと笑って、二人の娘の健啖ぶりを眺めていた。

夕食が終ると、美代子は、和子を丘のつづ





きの岬の上に誘った。

夏の、おそい夕日が、はるか西の水平線に美しい残照をのこして沈んでいった。和子には、そんなに美しい夕映えを見たのははじめてであった。

日がすっかり沈んであたりが暗くなった時美代子は、和子を促した。

美代子の家は、昔、網元をしていたせいか庭も広く、家の造りも頑丈であった。その家と庭の周囲を、風を防ぐ石の塀がぐるりと囲んでいた。

美代子は、その石塀に、一カ所だけある木の門を押し開いて、庭に案内した。表の門は

裏側にあつたが、そこからは庭には入れなかった。

その庭は、夕食を喰べながら眺めた時わかつていたが、相当荒れていた。美代子は、それを、沿岸漁業の不振で父が遠洋漁船に乗らなければならなくなつてからのことだと説明した。和子は、そんなこと、どうでもいいじゃないかと言つた。今は今だ、昔のことなんかどうでもいいのだと言ふ和子の言葉に、美代子はホツとしていたようだった。

二人は、その庭の一隅に、その場所を作ることを決めた。

土俵は、美代子とその母が、古い帆布に、丸く布を当てて既に作つてくれていたので、それを敷くところに、砂を持ってくれば良かった。二人は、その作業を直ぐはじめた。

岬の坂道を下りて下の砂浜までの道を、二人は何度も往復した。二時間ほどかかつて砂を運ぶと、砂の厚さはちょうど良い加減になつていた。

「疲れたらう。今夜はお休み」と、美代子の母は言つた。十時少し前であつた。

しかし、二人は、せっかく土俵まで作つた

のにと不満顔をした。

美代子の母は、

「仕方ないね。よっぽど相撲が取りたいんだねえ」と言ふと、ホレ、と言つて、白いじゅばんと、赤いまわしを持ってきた。

和子は、感動していた。

「すみません」と言ふと、それを手にとりじつと見つめた。

赤い色は、あまり好きではなかったが、それはその場合、どうでも良かった。

美代子の母は、娘を促して白いじゅばんを着せさせ、その上から、まわしを締めてやつた。

「次は、和子さんの番だよ」

和子は、なぜか、急に緊張感を覚えた。少しの間、彼女はためらっていたが、思い切つて洋服を脱ぐと、さつと、白いじゅばんを着た。

美代子の母は手際良くまわしを締めていった。そのまわしの締めまり工合が快よかった。

「じゃあ、せいぜい三回ぐらいにしておこうね」

美代子の母は言つた。そして、

「とにかく、好きなようにやってみよう」



と、続けた。

二人は、帆布の土俵の上に向き合った。向き合って睨み合うと、二人には忽ち斗志が湧いてきた。それは、柔道によって養われていたひとつの習慣であった。格枝をしたことのない女性には、そうした斗志はなかなか起らないだろう。

二人は、しゃがみ、テレビの相撲の見よう見真似で仕切った。だが、なかなか呼吸が合わなかった。

美代子の母が見兼ねて庭に下り、行司役を買って出してくれた。

最初の取組みは、柔道のようになってしまうていた。おたがいじゅばんの襟と袖をつかみ、引き合っていることに気づいた和子は右手を相手の襟から離し、それを腋に当ててぐいと押して出た。

柔道のつもりで、和子の襟をつかみ引いていた美代子は、体勢を立て直す暇もなくタッタと退いて土俵を割ってしまった。

それにこりた美代子は、次は、勢よくぶつかってきた。それを予期していた和子もどんとぶつかっていったから、両方の額が音を立てて当たった。

同時に、「アイタッ／＼」と声を挙げてしま

った。おたがい、手が前へ出てぶつかる力を緩めていなかったら、アイタ／＼どころではすまなかったかも知れなかった。

しかし、痛かった。だが二人とも、そんなことでひるまなかった。

美代子はぐっと腰を落とすと、和子の胸に両手を当て、そのアゴの下に頭を押し当てて押してきた。不利な体勢を何とかしようと和子は工夫したが、彼女の足は土俵にかかってしまっていた。

しかし和子は良くこらえた。その手は無意識に相手のじゅばんをつかみ、引いていた。

だが、和子の負けであった。アツと思った時、彼女の身体はどうと後ろに倒れ、美代子の身体がどっとおおいかがぶさっていた。

夜もおそく、風もだいたい涼しかったが、二人のじゅばんは汗でぐっしり濡れ、肌にピタタツとついていた。

「二人とも、もう一人前だねえ」

美代子の母が感心した。和子は、何か晴れがましい思いがした。

二人は、汗も拭わず、最後の仕切りに入った。

今度は、立ち上りざまがっぷりと組んできた。美代子の右手が、左から和子の首を巻き

その左手は和子の右腕を外から抱えこんでいた。和子の左手は美代子の背を、右手はその左腕をつかんでいた。

二人は組み合ったままではしばらくは相手の出方をうかがいながら揉み合った。

突然、美代子が、ぐっと引き落しにかかった。和子は、前にのめりかかったが、美代子の背に廻っていた左手が、そのじゅばんをつかみ、こらえることができた。

再び、腰を引いてのはげしい揉み合いとなった。

和子は、何とかしてまわしをつかもうとした。二度、三度相手を揺さぶると、左手が、ようやく相手のまわしにとどいた。彼女はそれをぎゅっとつかんだ。美代子は、あわてて首に巻いた手を放し、和子のまわしを探ってきた。しかし和子は腰を引いてそれを許さなかった。

おたがい、力いっぱい攻防である。息使いがはげしくなり、肩が大きく波打っていた。

汗が、頬をタラタラと流れ落ちた。

そのままではどうにもならないと思ったのだろう。美代子は、和子のまわしに手がかけられないまま、右手で和子の左腕を抱え上げる



ようにして投げてきた。

だが、もちろんそれはあまり効力のある攻め方ではなかった。

和子は逆に、美代子の身体を引きつけるようにしてまわしをつかんだ左腕を大きく右へ振った。それはみごとに上手投げに決まっていた。

二人は、急に疲れを感じてきた。

「柔道の練習より、相撲の方がずっと疲れるものね」

美代子が言った。

「そうね。勝負のつくまでは、力を抜くひまがないもんね」

和子は、そう答えながら、波打っている胸の内で「そこが好きなんだ」と、あらためて思っていた。

生れて初めての、まわしを締めての相撲は和子に心からの満足感を与えていた。

「さあ、今日はこれで終り。明日からは、朝早いうちにやったらいい。お相撲さんみたいだね。それに、朝早ければ、漁師のみんなは夜の漁の片付けで忙しいから、ウチにやってくることもないしね」

美代子の母が言った。

寝床に這入ると、二人とも直ぐ寝入ってしまった。

(未完)

## 四馬孝異色画集

### 女体浣腸責め図絵

大中判印画紙極鮮明焼付  
八枚一組 略号二〇〇〇円

- 一、美しい見習看護婦が実験台
- 二、捕まわりの乙女に強制浣腸
- 三、逆さ吊りの女体に強制浣腸
- 四、大の字吊りの女体に強制浣腸
- 五、イルリガートルで強制浣腸
- 六、片足吊りで強制浣腸
- 七、
- 八、

### 女体浣腸羞恥場面

大中判印画紙極鮮明焼付  
四枚一組 略号一〇〇〇円

- 一、保健室で女学生に行う浣腸
- 二、便桶後カバに着用のお嬢さん
- 三、便秘の新妻に浣腸される乙女
- 四、セーラー服で浣腸される乙女

### 女体浣腸羞恥場面

大中判印画紙極鮮明焼付  
四枚一組 略号一〇〇〇円

- 一、お友達にされるB.G.の浣腸
- 二、エネマの嘴管を膣子に挿入
- 三、看護婦にされる五〇C.C.浣腸
- 四、エネマシリンジの若妻の浣腸

### 美処女羞恥責悦虐絵巻

大中判印画紙極鮮明焼付  
四枚一組 略号一〇〇〇円

大中判印画紙極鮮明焼付  
五枚一組 略号二〇〇〇円

- 一、豊麗な秘窓の令嬢雪絵
- 二、絶世の美女雪絵は塩水を飲む
- 三、拷問椅子に開股縛りになる
- 四、犬となつて仕えることを誓う
- 五、雪絵は箱の中へ排尿させられる
- 六、秘窓の奥へ排尿させられる
- 七、股を左右に開いて受ける浣腸液
- 八、

### 妊婦の媚態

大中判印画紙極鮮明焼付  
三枚一組 略号八〇〇〇円

- 一、医師の診察を受ける妊婦
- 二、シャワーを浴びる妊婦
- 三、浴後の裸身を大鏡に写す

### 女学生の浣腸一態

大中判印画紙極鮮明焼付  
二枚一組 略号六〇〇〇円

- 一、花恥しきセーラー服の乙女
- 二、高々と挙げて浣腸される光景
- 三、学校帰りの女高生がスカート
- 四、浣腸される羞恥にたえぬ風情

### 凄絶、妊婦の切腹

大中判印画紙極鮮明焼付  
四枚一組 略号一〇〇〇円

- 一、横なぐりの雨の降りしきる祠

の前で、うら若き女、ぶつくりと膨らんだ腹に脇差を突き刺す。二、妊婦は美顔の腰元、上半身肌ぬきとなり雪よりも白い妊娠腹を短刀で切った。切りに切りさばく。三、身を籠った側女が急死の殿のあつとを追って今にも産気づきそう。四、腹部を刀で切りきり切ると。五、肉体の産み月の若妻が大刀の柄を地面に支えて膝下へ一突き。

### 女体浣腸嗜虐場面

大中判印画紙極鮮明焼付  
六枚一組 略号一五〇〇円

- 一、姐上のいけにえ
- 二、高圧空気浣腸
- 三、蛙腹の注水実験
- 四、浣腸責めの最高頂
- 五、排泄に耐える
- 六、奇妙な便器

### サド侯爵悦虐絵巻

大中判印画紙極鮮明焼付  
九枚一組 略号二〇〇〇円

- 一、女体食卓
- 二、逆さ吊り女体
- 三、針のトイレ
- 四、女体燭台
- 五、拷問室のベット
- 六、浴室の女神
- 七、蛙腹の実験
- 八、アクリルの舞
- 九、排泄の図





# ミ　モ　ザ　館

生ける屍しかばね

睦　月　笛　一　郎

夏の間は、鬱積する程茂っていた邸内の樹木も、十一月の声を耳にすると、朽葉を舞わして、ミモザ館も静寂なたたずまいに、冬の足音が幽かに聴えて来た。部屋の片隅まで、斜めに差込む凋落した光に吸われて、喜久はひさし振りに窓外の景色を眺めた。

「眩しくって、眸が痛いくらい……」

澄明な光の波に蒼い静脈を浮かせて、喜久は呟いた。

ミモザ館の人になって三月、ともすれば、あの、夏の日の悪夢にも似た想い出が脳裏か

ら薄れて、マダムの手厚い庇護の下に、満ちたりた日々を送って来た。蜘蛛の巣に絡まれた蝶が、跳けば跳く程、深みに陥るように、悶え苦しむ意志とは別に、官能が疼いたが、一夜明けると、必ず、白々しい悔恨に責め噴なまれて、幾度、ミモザ館から抜け出そうとした事か。しかし、最近では夕闇が迫ると物狂おしく、何かを待つ我が身の業ごうがいとおしく感じられるようになった。

冷気が、部屋を回り廻り、陽なたが無性に恋しくなった。いつもは木立に遮ぎられてい

た聲が今朝は見え隠れに散見される。北の小徑を辿る事は、マダムが固く禁じていた。喜久は、母に隠れて秘密の迷路を探る悪戯っ子の様に、心を弾ませて聲の上を歩いた。

喜久は、ミモザ館の小妖精として、妖しい一刻ときを過す時以外は、驕慢な程、気品を保つように仕向けられていた。館中の女達は腫れ物に触るように喜久にかしづいた。喜久は、マダムの申し渡しを、今日は無視して自由に振舞う事を心に決めた。それにマダムフランソワは、二日前から麻美を連れて、突然のヨ



ーロッパ旅行の為、留守だった。

麻美の肉体を——より女性的に改造する為で有る。

麻美は、白い脂の乗った女の皮膚を保つ為には、三日置きに、ホルモン注射が必要で有った。もっとも女性の最も女性らしい機能、隠微な秘密の花園は、外見こそ似て居たが、女である証しの紅い生命の泉は、溢れなかった。男との交渉も可能だったが、造化の神は此の人工女性に、神の尊厳を冒瀆するものとして、性の欲びを与える事を許さなかった。麻美は、ブルーボーイ特有のヒステリーを周期的に起した。閉鎖された性への劣等感が昂ぶると、誰彼の区別なしに白い下肢を露出した。困惑したマダムは、時期を早めてスウェーデンの専門医に麻美の躰を診せる為、羽田を飛び立った。

スウェーデンで、クリスチャンヨーゲンセンの女性化の手術が成功して、全世界の話題になって以来、性転換希望者が蝟集した。女性に男に成る場合、腹筋で男性を整形し、乳房を切除した。其の男性は、尿道だけで男の機能を果す事は不能で有ったが、男性の女性化は、最も敏感な部分が、女性として移植さ

れ、性感を得る事にスウェーデンでは成功して居た。——

喜久は、途切れた小径を探す為に、芒を掻き分けると、水が鈍い色を足元に反射した。沼は、藻と折れた木の枝で水面が埋められて居た。此処だけが、時計の針が停ったように風の音も聞えず、静寂の世界を保っていた。喜久の鼓動が周囲の調和を破るように高く響いた。可愛らしい胸を押えて踵を返すと、思いがけず沼から一寸離れて、合歓の木に囲われた廢屋が眼に映じた。魔女の棲家を覗いた強迫観念が足早やに立去らせようとしたが、喜久の眼が、或る一つのものを捉えて釘づけにされた。

ペランダの手摺に、遠慮勝ちに干された洗濯物の中に、使い古されてはいたが、喜久も時々当てがわれる無恰好な病人用のオシメカパーが有った。眼を細めてゴムの黄色い光を見詰めて居ると、ぬめぬめと、肌に甘痒ゆく纏り着くゴムの感触が甦ってきた。

——最初に喜久が麻美から、恥かしい姿勢でオムツカバーを無理に当てられた時は、冷えたゴムの感触に齒の根も合わず、震えて居た。暫くすると、体温でむちむちと蒸れた感

触と、ぴっちり太腿を緊める圧迫感が、揺籃を押す母の乳房を想い出させ、更に幼児への郷愁が蘇って来た。

酔い痴れたようにオムツカバーに吸い着けられた喜久の瞳に、突然老婆の姿が写った。ドアを開けた老婆は藍色の旗袍チーパオを着て居た。覚束ない足取りで手摺を伝わると、ゴムの感触を確かめた後、陽光に透かした。土気色の骸骨を思わせる貌立に加えて、どんよりと痴呆的に開いた口中に齒は一本も無く、暗紫色の齒茎が無気味だった。喜久は全身の血が一時に下り、吐気を催して蹲いた。

枯草が音をたてて折れた。老婆は白濁した眼を見開いて喜久の方を探った。

全身から妖気が立昇って、今にも飛び掛つて来る気配がした。恐怖で喉がかわき、足が縫れた。前のめりに、裏口から夢中で料理部屋に駆け込んだ。

「お嬢様、どうなすったので御座居ますか」顔を蒼白にした喜久は、只肩で喘ぐだけだった。料理女は、膝に突伏した喜久の背中を優しく擦って言った。

「お嬢様、あの小屋に近づく事は誰にも許されて居りません。私だけが一週間に一度、辺りに人影が無いのを見届けて、マダムがお申



付けの食糧をベランダに置いて来るだけで御座居ます。今日の事は忘れなさいまし。さもないと、私がマダムに強く叱られます」

しかし、喜久は諾かなかつた。

「貴女様の仰言る老婆は、実は、貴女様とそれ程、年が違って居ませんのですよ」

## (一)

工藤悦子は、津軽の嫁いびりの民謡「弥三郎節」で有名な木造町で育った。貌立は整って居たが、痩せ気味の身体は、美人の多い裏日本の、此の地方では目立たぬ存在だった。高校を卒業すると弘前の洋裁学院に入った。

地方の風習で、洋裁学院の卒業証書が嫁入りの資格に数えられていた。悦子も短期の洋裁課程を終え、いづれ親の見立てて呉れた男と結婚する事を淡い夢に描いて居た。

卒業前の総仕上げに、課題のドレスを縫製して居ると、院長が欲びで身体を宙に浮かせて、室に入ってきた。

「皆様、いいニュースですよ。デパートと学校がタイアップしてファッションショウを催す事に成りました。東京のFSGのモデルさんに交って皆さんにも出演して戴きます」

一瞬、教室内にどよめきが起きた。

「私、髪をどんな風にセットしようか知ら。貴女、どうなさるの」

「私、どっちでも良いわ。関心ないもの」

悦子は冷淡に横を向いた。静かな濠割りとポプラの街、木造から城下街とは言え、都会的な弘前で一時期を過せた事が、悦子が物心がついて以来、一番の幸福だった。

モードのドレスを着て、観衆の目の前を普通に歩く事だけでも難しかった。その上、自分の着て居るモードを観客に印象づけ、高雅な雰囲気盛り上げる事はプロでも容易な事ではない。出番になって舞台の裾で足が竦み、へなへなと、屈み込む生徒も居た。

又、真剣に成れば成る程、木に竹を継いだような歩き方をして観客の失笑を買った。プロモデルが優雅な身のこなしで舞台を引き締め、華麗な夢を、会場に醸し出した。静かな溜息の洩れる中を悦子が登場した。エプロン迄歩いて正面で停ると、どよめいて居た観客が水を打ったようになった。細過ぎる肢体がモードに似合い、小さ過ぎると思われた貌がモデルとして最高の洗練された美を造り出した。

夢中で勤め終った悦子が楽屋に帰ると、度の無い伊達眼鏡を掛けた、FSGのマネエジ

ャー木崎が、軽薄な拍手をして出迎えた。

「悦子さん、とっても素敵ヨ。大成功ヨ。モデルに成るおつもりは無い？ 一年で貴女を売り出して見せますよ」

「私、何んとも御返事出来ませんワ。両親とも相談しなくちゃ」

「是非、お願いしてヨ。貴女だったら、超一流のモデルに直ぐ成れますヨ」

木崎の追従に、心に巣くう虚栄の片隣を見せたのが、悦子の一生を暗い淵に突き落す運命になった。両親は、当然反対した。喧嘩をする様に、父母と別れて上京した悦子は、FSGに籍を入れたが、ファッションモデルの起伏は激しく、一流のモデルでも三年で消えた。収入も、最高は月収五十万にもなったがそれは混血児の入谷三樹達、頂上のほんの一握りだけだった。三流ともなれば、繊維会社や化粧品会社の宣伝に、地方をキャラバンした。誰もが一流を目指すが、大半は将来に見切りをつけ、パトロン探しに血眼になって居た。収入も、アクセサリーや靴に消えて、後はパトロンに補助を受けるか、郷里からの仕送りを待った。悦子も歯を喰いしばって地方廻りをやった。田舎育ちの身が、困窮をそれ程苦痛に感じなかった。誘惑も常に纏り付



いた。一年たった時、同輩は十分の一に減っていた。ファッション雑誌に毎月顔が載るようになって、今度は繊維会社の方で放って置かなかった。悦子も或る会社と年間契約し、ショウでも重要な出番を割いて貰えるようになった。

しかし、出る抗は打たれるの諺どおり、流<sup>う</sup>行<sup>れ</sup>っ子になるに従って、同輩の妬みや中傷が集中した。ステージに立って仕度部屋に戻る<sup>れ</sup>と次の出番に着けるアクセサリや靴の片方が紛失して居た。大抵の女は、其処で泣いたが悦子は素知らぬ顔をして居た。もっと手酷い悪戯がされた。パニティケースの中に経血に汚れた生理帯が丸めて抛り込まれていた。犯人が判った時、悦子は満座の中で、其のモデルに力一杯平手打を喰わせた。片頬を腫れあがらせて泣くモデルを尻目に、髪を掻き上げながら席に戻った。それ以後、悪戯は悦子に限り後を絶った。

一人だけ、別の意味で敵意を持って見詰める眼が有った。FSGのトップモデルで、かつてミスユニバースの日本代表に選ばれた事も有る原田由貴だった。悦子が新人としてFSG所属になった時、原田由貴は悦子に取って雲の上の存在だった。

「モデルになった以上、私も、早く原田さんみたいになりたい」

悦子は、何時か、由貴が雑誌記者に囲まれて得意気に応えている光景を、遠くから眺めていた事が有る。

「私ってね、皆さんが噂する程冷淡では無い事よ。案外、家庭的で純情なの」

「モデル界の女王、原田さんにしては本格的な美談だな」

「本当よ。四つの時だったかしら、母が余り妹を可愛がるので、私も母に甘えたい一心で妹のオムツを自分がしてみたり、赤チャン言葉を使って笑われた事も有ったわ」

由貴は幼時を追想してか、うっとりとした眼になった。

「所が、段々赤ちゃんのようになって、身体の原因が利かず歩行が出来なくなりましたね。一年近く病院通いをして、結局、母の愛を独占した訳よ。小児願望症と言うそうよ。今でもオムツカーバーを見ると、ドキリと、するわよ」

由貴は、年令的にはモデルとして限界に来ていたが、ミスユニバース日本代表の虚名とターミナルデパート東京百貨店の社長西の後援を受けて、此の世界に君臨して来た。或る

日、東京百貨店主催のショウが開かれ、FSGも参加した。

モデル達が仕度部屋に這入った時、皆、声を挙げた。悦子の名札が一番良い席を撰んで置かれ、オーキッドの花束が小山の様に飾られてあった。由貴の席にも、菊が置かれていたが申訳程度だった。由貴は平静を装っていたが、眼には怒りの炎が燃えていた。更に出番の時、予定が交えられて、マネージャーの木崎が一番大事な場所を悦子に割ふった。由貴は、流石に我慢が出来かねて、盛んに木崎に毒づいた。

「こればかりは——実は、社長の御意向でして、私の一存では」

由貴は、低頭する木崎を無視して社長室に電話を入れた。社長への電話で自身の優越を誇示しようとした由貴の気持が薄れて行くのが段々小さくなって行く声で判った。ショウが終わると、木崎は悦子を食事誘った。

「社長は貴女に強い御執心でしてね。一晩だけで良いから交際<sup>つきあ</sup>てやって下さいな」

「嫌ですわ。由貴さんがお有りのくせに」

「貴女さえ良ければ由貴は放り出しても良いと仰言っていますよ。社長の御気嫌を損ねるとFSGは大打撃です。私と貴女と組みまし



ようヨ」

「なおさら嫌やよ。由貴さんは、木崎さんが社長に差上げたそうね。それに、社長さんはアブノーマルで御高名ね。木崎さん。案外、御相手していらっしゃるんじゃない」

木崎は、痛い所を突かれ奮然として席を立った。社長の奇癖は、モデル仲間にも有名だった。その年の夏には、悦子は完全に由貴を蹴落してNO・1の地位に着いた。由貴はFSGからも自然に消えてしまった。悦子が高名になればなる程、得体の知れない男達が群った。中でも自称、香港財閥の御曹子馮は露骨に言い寄った。

年の暮に、東京百貨店と華商財閥の合併による百貨会社が香港に落成した。クリスマスを前に、大々的に売り出す事に成った。FSGも東京百貨店の派遣員として、香港行きが決まった。メンバーが発表されると、意外にも由貴が選に入っていた。

「私、香港行きを最後に引退して、西さんの後援で洋裁店を開きますのよ。宜しくね」

由貴は、日頃の傲慢さを捨てて、新入りモデルに迄足まめにふれ廻った。

羽田空港を飛び立ったキャセイ航空のジェット旅客機は、一時間もすると九州の南端を

かすめて海上に出た。機内で無税の売店が開かれ、フランスの香水などにモデル達が驕声を挙げて集まった。

「馬鹿ねエ。今から買えば荷物になるのに。悦子さん、召し上らない」

由貴が馴れ馴れしくチョコレートを差し出した。例の馮も、ぬけめ無く同乗していた。二時間後に、雲の切れ間からエメラルド色の水道と林立した白いビルが見え始めた。

「あれが九龍半島で一番高い大幅山、この下が香港島のビクトリアピーク」

馮は仔細らしく囁やいた。ジェット機はあつてなく啓徳飛行場に着いた。香港へのフリーボートが悦子達の乗った自動車ごと、香港島の埠頭に向うのも珍しかった。大群ホテルに落着くと、馮がしつこく夜の散策に悦子を誘った。大晦日の打上げの晩に、主催者がホテルの広間で、慰労のパーティーを開いて呉れた。片隅でカクテルを手に行っていると馮が由貴と連れ立って悦子の前に立った。

「悦子さん、お別れの晩です。ショッピングに行きませんか。お伴させて下さい」

「行きましようよ。私、馮さんの案内で、宝石を一つ買いたい」

浮き立たせ、由貴と一緒に行くと言ったのに

心を許したのが油断だった。九龍の繁華街ネイザンロードに出ると、二階建のバスが往復し、日本商社の華字名のネオンが、明滅していた。装身具屋に案内された。八百香港ドル（五万六千円）の札の付いたハンドバッグが気に入って、悦子が六百ドルに値切ると、即座に負けて呉れた。財布を取り出そうとした悦子を馮が笑って軽く制した。

「悦子さんは正直過ぎますよ。君、四百にしかえ。さもないと隣の泰山玉に行くよ」

結局、四百五十ドルで商談が成立した。由貴にせがまれて、一行は宝石店に廻った。

「これ、パパに似合うかしら」

由貴は、今は西社長の事をあけすけにネクタイピンを撰んだ。馮は、七千香港ドル（五十万円）もするオパール指環を無難作に取り上げて、悦子に差し出した。

「まあ、馮さんたら。私の身にもなってよ。まるで悦子さんに夢中ね。でも、もう後、暫くの辛抱ね」

「ああ、もう後暫くの辛抱だ」

二人は、顔を見合せてにんまり笑った。悦子は意味も分からぬまま調子を合せた。

「馮さん、御結婚でもなさるの、それじゃ、



こんなにして戴くの悪いわ」

「結婚で、そう結婚ネ。しかし、此れは収めて置いて下さい。私の好意ですから、ではお別れは海上レストランで打上げましょう」

悦子は、疲労で気が進まなかったが高価な贈り物を貰った手前、嫌と言えなかった。薄暗い海岸線を見ると、イルミネーションに輝く、極彩色の画船が見えた。一階はレストラン、二階は遊戯場になっていた。馮は海老料理を注文して杯を挙げた。

「さあ、お別れに乾杯」

「乾杯」

グラスを挙げて一口含むと、心地良い疲労が全身に廻った。二口目に、悦子の身体が万華鏡の様に回転し、悦子の身体と一緒に船も宙に舞った。グラスが床に落ちて毀れ悦子はテーブルに俯伏した。遠い所で声が聞えた。

「お客様はお気分が悪いらしいわ。車の用意をお願いしてよ」

真夜中の闇の中で、悦子は意識を取り戻した。頭が割れるように疼き、喉がカラカラだった。水差しを探して上半身を持上げたが、均衡を失って引くり返った。倒れた弾みに他人の太く堅い腕に肩が触れた。酔がフツ飛んで正気付くと、自分の部屋では無かった。慌

てて、スタンドをつけようと伸した腕を男の手が握った。

「悦子、大人しくしろよ」

男は空いた方の手で、煙草に火をつけた。一瞬の炎で馮の顔が闇に浮かんだ。

「ああ、誰かア、来てエー」

大声で喚めいた積りが声にならなかった。夢中で寝台から駆け下りると、ドアに突進した。

「無駄だよ。鍵は此处に有る」

悦子は踵を返して窓際に走った。

「逃げられんさ。八階だよ此の部屋は」

馮は、寝そべりながら檻の鼠を弄ぶ猫のように、憎々し気に煙の輪を吹きつけた。

「人で無し。死んでやる」

悦子が窓枠に手を掛けると、馮は、猿のような敏捷さで跳ね起き、悦子の髪を掴んで貌に火花の出る程、平手打ちを加えた。男の力に顔が痺れ、抵抗力が萎えて、床に崩れた。

「死なれてたまるもんか。大事な玉だ。你的は木崎や由貴から二百万で買ったんだぜ」

「嘘、うそ、うそうそ」

「嘘なもんか、東京を発つ時から周到に仕組んだ罠に你的が陥ったんだ」

馮は、呑み残しの壺を取り上げて、ラッパ

呑みにした。酔うと何をするか分からぬ残忍性を、その皮膚と眼に感じて身を縮めた。

「許して、馮さん、お願い。どうか許して」

「駄目だよ。たんまりと楽しませて貰った後は、元を稼いでもらうぜ。お前とは、先刻他人じゃ無くなったんだ」

悦子が腰に手をやると、無残にも無防備の姿だった。

「お前の処女は有難く頂戴したよ。俺の郷里では、紅事と言ってナ、結婚の翌朝、処女で有った徴しに血のついた紙や帛を、里方の親が見せびらかす習慣が有る。お前の証拠は、ここにある」

馮は、寝台の上から血に染んだパンティを悦子の顔に投げつけた。

「死に度い」

悦子は、ヒューツと笛に似た音を咽喉から絞り出し、床に倒れた。

「逃げられん様にして置いてやる」

馮はナイフの刃先を、悦子の頬に突き付けた。ドレスの裾に刃を当てると惜気も無く一気に引き裂いた。水色のスリッパ一枚になった悦子の艶めかしい、露わな肢体を舐めるように楽しんだ。馮の手が、又乱暴にスリッパに懸り、ブラジャー諸共ひき裂くと、軽々と



抱えて寝台の上に投げ下した。

ベッドのスプリングは、均勢のとれた、牝鹿のような白い脚を宙に跳ね上げて、悦子は恥しい姿勢になった。馮は、片膝で胸を押し敷き、悦子の手首を、革紐で寝台の端に縛りつけた。別の紐をシャンデリアに通し、足を手荒く抜いて両端に結びつけた。腰が浮いて抵抗しようも無い不安定な悦子を見て、馮は獸欲を沸ぎらせた。

馮は、翌日からもう、外人客を引張って来て売春を強要した。金色の剛毛に包まれた白い野獸共に思うさま責められて、招待所（売春宿）に帰ると、馮が裸にして、寝台に片足を鎖で縛った。

余りの苦痛に、外人客をホテルのロビーでまいて裏口から逃げた。香港の日本領事館に駆け込む積りだったのだが、道路を出た途端正体の分らぬ中国人に肩を掴まれた。

其の夜、馮は震えている悦子を全裸にする。と薄い皮囊の中に押込んだ。頭を無理に、膝の間に埋めて、海老の様に屈んだ悦子を、更に締め上げて袋の口を結んだ。窮屈な囊の中に閉込める事さえ、手荒い拷問であったが、馮は、手下と二人で蹴転し、革バンドで撲った。皮の上から、力一杯ひっぱたいても純痛

だけで、身体に傷が付かなかった。これも、商売物を損わずに目的を達しようとする馮一流の狡猾な仕業だった。転がされて息の出来ない俵、暴行を受け、痛みが重く体中に拡がり、感覚が無くなった。囊から出された悦子は、はなを垂らし、汚物まみれになって失神して居た。

しかし、悦子は正氣の内は馮に抵抗した。何度も、逃亡し損って私刑を受け、左耳の鼓膜が破れたと言う事をきかなかった。

流石の馮も、悦子の強情には根負けした形だった。

「畜生め、手前なんか下層民相手の売春婦に売り飛ばしてやるぞ」

馮は、本気になって怒った。悦子の両手を背後で合掌縛りにして梁に縄を通して引張った。両手と胴が伸び切って、爪先が浮いた。顔に苦痛が走って、全身が見ている内に蛆の様に白く変って来た。馮が腰を蹴ると、縄の振れで身体がくるくると廻った。馮は、燐寸をつけると、悦子の腹に燃えさしを押しつけた。

「熱つう、くうっ」

次々にマツチの炎が、胸や尻に押付けられた。皮膚が焦げて黒い斑点が無数に白い膚に

散った。苦痛にのたうつ悦子を見て、不気味な笑いを浮かべた馮は、新聞紙を丸めて火を点火けた。紙が青い炎を出すと、それを丸く小さな乳房に押しつけた。

「ギャアッ、助けて」

伸び切った身体が、電流に撃たれた様に折れ曲った。

「なんとでも吼えろ、此の阿魔め。徹底的に痛めつけてやるぜ」

苦痛に自分の身体を振じり、振じられた縄が元に戻って、悦子の正面が馮の眼の前で停った。馮は、改めて新聞紙に火をつけると、その炎を悦子の前に押しつけた。悦子は瞳孔を最大限に開き、口をパクパクさせたが、急にがっくりと首を落した。

馮は当然の様に、悦子を書館（売春宿）に売った。樓主は、悦子に李芳春の中国名を与えた。もう地上には、工藤悦子は存在しなくなったのだ。此所でも李芳春は良い商売女では無かった。客が付いても、無感動に反応を示さなかった。些細な事で、同輩と喧嘩をした。樓主が懲しめの意味で房の前に芳春を引摺り出した。抱えの女達を並べせると、芳春の手を縛って転がした。

顔に、野球の捕手のかぶるマスクのような



革具を当てると金具が舌を押えて自然に口が開いた。水差しの水を徐々にマスクの中に垂すと、息が詰まった芳春は水を嚥下した。次々に、水が際限無く注がれ、水を吞むまいとする息が詰まり、息をする為には水を吞むより他は無かった。芳春の青白い垢の溜った腹が、蛙の様に脹れ、まるで臨月の妊婦のようになつた。口から水が溢れ、限度になると片足を腹に載せて揺すった。俯伏せにして胃を押えて水を吐かせ、又水を吞ませたが芳春は屈しなかった。気を失った芳春は、二日間放って置かれたが、見切をつけた樓主が、悪名高いアバデインの蛋民部落の魔窟の手に芳春を委ねた。

白かった芳春の肌は、荒淫のため黄色く涸れ、髪に白いものが交り、誰が見ても初老の趣きだった。アバデインでは、好色な外人客相手に黒白や白々の実演に持ち出された。時には犬を相手の演技を強制された。

夏場で閑な時は、香具師に買われてマカオ迄出掛けた。衛生展覧会と称し、怪しげな天幕内に、際物を陳列し、特別料金を払うと、ペンキの剥げた婦人科の検診台に両脚を拡げて載せられた芳春の小部屋に這入れる仕掛けだった。

幾多の肌に接した芳春の身体は悪質な病魔に蝕まれて、見る影も無く衰弱して歩行も容易でないようになった。魔窟の主人は、芳春に僅かな金を握らせて乞食部落に棄てた。物に腐りが無い様に、乞食部落でも女は使い物に成った。芳春を拾った老婆が、芳春の骨だけの身体を板に縛りつけ、頭を膝で締めつけながら、万力で歯を一本、一本引き抜いた。口辺から血泡を吹いて悲鳴を上げる芳春の歯を全部抜き取ると、今度は芳春の眼を無理にこじ開け、焼けた太い針で瞳を突いた。

「ギャアッ……」

それは、灼熱の地獄絵図だった。縛られた身体を揺すって、泣き喚めく芳春を三日間、ボロ布で猿轡をかまし、不潔な水に漬した布で目隠しをして、穴蔵に転がして置いた。意識が回復した時、フットボールの様に腫れ上った顔を冷して呉れる者がいた。

「馮は悪い男ネ。金持の振りをして、中国やインドネシア、ベトナムの女、皆誘拐して来る。此処では、生きてゐる内、働かされて、死ぬと麻袋に包んで海峡に捨てただけヨ」

海に捨てられるなら、亡骸だけでも潮に乗って故国に漂い着かぬものかと、對手の手を握りしめると幼く柔かった。

「貴女は何故、逃げないの」

「私、未だ小さい。逃げてても餓えて死んでしまふヨ。私は小姐おねえさんに逢えて嬉しい」

「生地獄だわ。貴女は片言でも日本語が出来るのね」

「ええ、私の母親、シンガポールの日本人商社員の家で阿媽アマをして働いていた。我的も可愛がられて日本語覚えた」

此の少女も馮に誘拐されて、此処に物乞いをする為、売られたと言う。悦子は死に度いと思つた。死ぬ前に、せめて憎い馮を罵り殺しにしたい。それ迄は、石に噛りついても、少女と一緒に、生き抜こうと語り合つた。

眼の傷が癒ると、李芳春は盲妹として少女に手を曳かれ、胡弓を弾きながら街の辻に立った。胡弓は持っても、芸で身の生計を立てるのでは無く、乞食売春の一種で、暗い辻で最下層民を相手に春を売り、時には燐寸の炎が燃え切る迄、身を焼いて見せたり、齒の無い口を使つては小銭を貰うのだった。

未だ二十四でしかない芳春の髪は、銀のように白くなり、いよいよ幽鬼の姿だった。しかし、最近になって左の眼が、障子に写る影のように物の判別が出来るようになったが、



小女にも秘めて置いた。

或日、ビクトリヤピークの外人貿易商の別荘に行くように言われた。少女に手を曳かれ別荘に案内されると、いきなり裸にされ、両手を縛られて、床に突き転ばされた。

仰のけになった両脚を開いて杭にくくり付けられた。酒を呑んで卑猥な高笑いをしている中に、夢にも忘れぬ馮の声が交っていた。

おぼろ気に写る馮の輪郭が、網膜に焼きついて、芳春の顔色が変わった。馮は、此の女が、四年前に自分が修羅の地獄に追いやった悦子だとは露知らず、お追従を言っていた。

見る者にとって狼奇の極みであり、凌辱される者にとっては生地獄だった。

「おい一寸待ちナ、良い話があるんだ」

小女に手を曳かれて露路を廻った途端、待ち構えて居た馮が声を掛けた。

「先刻、あそこに来ていた日本のお金持が、お前のような女が入用だってさ。一カ月だが日本に行つて見る気はないかね」

芳春は、呆然として立竦んだ。小女は不安気に手を引張った。

藁に縋つても帰りたい故国、しかし、乞食売春と謂われる我が身を顧ると、地面を叩いて泣き叫びたかった。日本へ行けなくても、

自分や可愛い麗花を地獄に突落した馮だけは殺してやりたい。馮は、李芳春を悦子だとは夢にも思つて居ない。悦子の李芳春の手に力が入つて、胡弓の絃が折れた。

馮がどの様に手を廻したのか、李芳春は旅行者として旅券が下附され、小ざっぱりとした身成りにさせられて、ホテルに連れてこられた。

「今日は此処で、日本のお金持と渡航の打合せだ。今晚は、貿易商、李東春氏の母堂としてこのホテルでは振舞つて呉れ。明朝早く、啓徳飛行場から日本へ出発だ」

少女が、芳春をソファに坐らせた。柔らかなクッションの感触は、四年前のホテルでの出来事が想い出されて、顔が涙で歪んだ。

「馮さん、貴男も随分変わったネ。昔の粹なところがさっぱり無いネ」

「最近はやる事、為す事へマ続きでネ。香港政庁からは麻薬の件で狙われ、不義理から仲間からも追われている仕末で、何とかシンガポール迄の旅費が欲しいんでネ」

馮は、柄に無く弱音を吐いた。

「旦那は発財だそうで」

「金は出来たが、皮肉なもので或る人のお仕込みも有つて、普通のお遊びでは、その気が

全然湧かなくてね。中国人なら私の夜の秘密も洩れない訳けだ。礼金はたっぷり差上げるヨ」

相手の言葉は、柔かく艶があった。芳春は遠い忘却の淵にあった日本語に聞き惚れた。

芳春の失われた瞳に涙が溢れた。しかし、仰揚に、何か記憶の底に引掛るものが有った。

「心配はないよ。大切にしていあげるから、いや、日本語が分らなかつたんだネ。失礼」

紳士は、分厚い札束を渡すと出ていった。「王八蛋め、こんな婆アに、こんな大金を使

いやがつて」

馮は、酒を煽りながら札束を数えた。昔ながら、取り澄した馮はこんな不作法な真似はしなかつた。札束を丸めてポケットに押し込むと、ドアの把手に触りながら振向いた。

無心に、床に坐つて居る小女に眼をつける

と、馮の眼が獣の様に血走った。小女は本能的に体を縮め、芳春の膝に駆け寄った。小女の怯えた表情に刺戟された馮が引返して、無言で小女を突倒し、首筋を押えて、襷子ズボンを剥

いだ。馮がズボンを下して躍り掛ろうとした時、芳春が猛烈に躰ごと、馮にぶつかった。

「あっ」馮は不意を打たれて、仰け様に引っくり返った。慌てて立とうとしたが、下した



ズボンに足を取られて自由を失った。芳春が再びぶつかった。馮は

「この婆ア、何をしやアがる」

と白髪を掴んだが、女の力に押されて、バルコニーに芳春と諸共に倒れ込んだ。小女が髪を掴んだ馮の手に力一杯噛みついた。

「嗚呀」

馮がのけぞると、女二人の力で馮をバルコニーの外側に突き出した。十階の高さに眼の眩らんだ馮は

「助けて呉れ、芳春さん。何んでもする。金も渡す。助けて……」

「馮、私を誰だと思っている。四年前に、お前の為に乞食に落された悦子だよ。地獄に追い落したお前にも、私の顔が判らぬ程の苦勞をよくもさせたわ」

「許して呉れ、俺は由貴や木崎に頼まれただけだ。由貴は香港でお前を消す事を頼んだんだ。今度の日本人客は木崎だア」

恐怖の余り、眼を見開いて、コンクリートを爪で搔むしった。

「お前を一思いに殺す事は惜しい。廻り殺しにしてやりたい」

脂汗を流して、顔を引つらせる馮の足を二人が放した。馮の躰は十階のバルコニーから

途中の電線に引掛って一廻転すると、音もなくホテルのテラスに落下した。翌朝の新聞には——指令手配の麻薬犯、覚悟の自殺——と簡単に報道されていた。

## (二)

木崎が、東京百貨店の社長、西の信任を得たのは二つの理由がある。木崎が西に、原田由貴を愛人として差出したのは、競争の激しいファッション界にあって顧客確保の為、止むを得ない措置で有った。当然、FSGは東京百貨店の専属の觀を呈した。

モデル達の噂に発したように、西には性の奇癖が有った。生れながらの財閥の跡取りとして、十六の年から道楽を覚え、花柳界に入り浸り、仕事の方では無難で有ったが、所謂「遊び」については、東都の三業地で蕩兒の浮名を擲にして来た。酒が過ぎて糖尿病に罹り、不能に近く成って来ると、由貴と木崎を玩弄物視した。

最初、西は木崎に命じて、由貴を裸にして緊縛すると鞭で打った。鋭く、空を切る鞭の響と俱に、由貴の白い肌に、赤い蚯蚓脹れが重り、蛇の様にのたうち廻るのを觀て、息遣いを荒くした。内密に、大金を投じて革製の

拘束具を工夫して作らせ由貴の躰を責めた。しかし、由貴にはマゾ的素養が無く、本能的に西の所業を嫌った。

木崎が、由貴の代りに緊縛され、革製の猿轡や、全身の拘束具で緊め上げられ、西に強制されて由貴が鞭を執った。木崎は、西への追従の為、内心の馬鹿らしさを隠して演技をしたが、女の鋭い鞭の下で、刃物にも似た打撃を受ける内に、のけぞらんばかりの苦痛と綿のような疲労が、アクメにも似た陶醉感に全身が浸って行くのを止めようが無かった。今は只、脂汗を垂らして転げ廻った。

西は、木崎が息も絶えだえに悶えるのを見て、興奮し、果は責め革具の上からストッキングやガードル、ブラジャー迄着させた。時には、由貴の折檻が生温いと怒り、由貴を逆に柄の折れる迄、打擲した事も有る。

更に、木崎には重要な役目が有った。西が快感を追う余り、モルヒネに手を染めたのが病付きで、横浜や関西に迄、木崎に買漁らした。西には、麻薬の禁断症状が恐ろしく、警察が麻薬の取締りをする毎に、薬が街から姿を消した。又、暴力団に付絡われるのを警戒して、木崎を半年に一度、香港に飛ばせて麻薬の購入に当らせた。



通例阿片六年、モヒ二年と謂われて居る。

過度の麻薬の使用と荒淫の為、西は死期を早めた。四十台の働盛りであつて、死んだ。

由貴は、現在の邸宅と、東京百貨店の系列下の小さな服飾会社を遺産として受取った。

頼る者が無くなった由貴は、以前からの腐れ縁で木崎を結婚という型で引摺り込んだ。

奇妙なもので、服飾会社の経営を、<sup>きざ</sup>気障を

売り物の若者向きに方向を変えた途端、爆発的な人気を呼んだ。夜も昼も無い忙しさの中で、由貴だけが別世界に引籠り、美食と運動不足で肥満して動作が鈍った。

木崎は一度、自分の被虐趣味を満す為に、得体の知れ無い女を連込み、暴力組織から莫大な金を巻き上げられた苦い経験がある。そこで、商談と称して香港に飛び、買った中国女に我が身を傷つけさせた。得意先の外人貿易商に招待されて、加虐の極致と謂われる秘密のショウを見物した。矢も楯もたまず、四年振りに逢った馮に、女の世話を頼んだ所簡単に日本に送り出す準備をして呉れた。出発の前夜、馮が原因不明の墜死事故を起したが、木崎には無関心事だった。

入国管理官に、芳春を怪しまれたが

「取引先の貿易商の奥様を、黒内障<sup>くろないり</sup>の手術の

為、聖路加病院に世話する」

と、打合せてあった通り言い抜けた。

由貴は、貴方も物好きね、と、軽蔑したがそれ以上追求しなかった。旅行者の旅券<sup>ビザ</sup>は、一カ月で切れる。芳春は香港に送り返される事態になったら命を絶つ決心をした。木崎や由貴は、此の身すばらしい中国老婆が悦子だとは露知らず、奇妙な敵同志の共同生活が始まった。

夜に入ると、芳春は二人の寝室で、木崎の裸体に拘束具を締めつけ、女の力を振って鞭で打ちつけた。木崎は、鞭が皮膚に条痕を印すたびに悲鳴を上げてのたうった。時には、由貴の生理帯を頭に被せて、背中に馬乗りになつて、部屋中を這い廻わせた。

由貴は、同じ部屋で木崎が怪奇な遊戯を繰返している間も、冷静に煙草をふかして眺めていた。しかし、芳春が木崎の背中に跨って部屋中を責め歩かせると、由貴の表情に奇妙な変化が現われた。

「お馬ハイドウ、お馬ハイドウ」

最初、芳春は不自由な我が耳を疑った。三十過ぎの肥った女の口から、幼稚な囁言が呟やかれた。芳春の顔が硬直し、二人に対する復讐の好機が近づいた事を知った。

次の夜、木崎との遊戯が終った後、芳春は臥っている由貴の布団を剥いだ。危惧の表情で上半身を拾げる相手を見無視して、芳春はパンティを、素早くゴムのままのオムツカバーに取換えた。由貴は、自分の腰に纏り付いたものがゴムカバーだと分かると、宙を見詰めて芳春の為すがままにされていた。由貴が寝息を立て始めた頃、芳春は由貴の耳元に唇を近づけた。

「貴女は、四つのそれは可愛らしい女の児です。時々、おネショ<sup>おねしょ</sup>します。お母さんが仕末をして上げますヨ」

寝ている由貴が、こっくりと頷いた。

復讐の一步が成功した事を知って、芳春は苦渋に満ちた顔を始めて綻ばせた。由貴の小児願望を、悦子がモデルの世界に入つた頃、雑誌記者に話しているのを、小耳に挟んで以来、脳裏に刻<sup>き</sup>めていた芳春の勝利だった。

由貴が外泊した夜、木崎は例に無く熱気を帯びて、芳春に加虐を命じた。新しく調製させた全身を包む革製の拘束具を取り出した。

芳春は、此の拘束具を火に当てて焙り、表皮を伸ばせるだけ伸ばした。

「今に見ておいで、一寸刻みに、おまえの命を縮めてやるから」



革具を念入りに締めつけ、当り構わず無茶苦茶に打擲した。芋虫の様に転げ廻る木崎が芳春の気狂じみた動作に、恐怖の表情を浮かべた。顔を引攀らせて

「おい、革が緊り過ぎて苦しいヨ」

芳春は暗紫色の齒茎を剥き出して咄った。無言で、穿いていたパンティを脱ぐと、木崎の口中に押込んだ。

「あつ、くるっ……」

夢中で首を振る木崎の頭を蹴飛ばし、棒でパンティの残りをこじ入れた。齒の折れる音がして、唇が切れた。

「木崎、私の顔を良く見てご覧。工藤悦子というモデルが居た事を、よもや忘れはしまいかね。今にじりじりと緊め殺してやるから」

緊具を、もう一度、強く緊め直すと、木崎の眼の縁が紫色に変った。悦子は、霧吹きを取り上げて、拘束具に水を吹きつけ始めた。水を吸った革は、じわじわと縮んだ。

「もっと苦しめ、私の香港での四年間に較べたら、もっともっと苦しんでもいい」

また、強く水を吹きかけた。

木崎はもがきもがいて、遂に首を落した。悦子は、木崎が絶息したのを見届けた上で、猿轡を脱し、死体を床の上に放って置いた。

悦子は、香港で最初に馮の拷問を受けた時、

馮が悦子を袋に押込みながら

「騎馬民族の風習で、貴人を殺す時は皮囊に入れて血を見せずに圧し殺すのさ」

皮の伸縮を利用する拷問が有るのを、手下に語っていたのを覚えていたのだ。

葬式の際、由貴の立居が不自由で、会葬の御礼の言葉もしどろもどろだった。会葬者は由貴の悲しみの深い事を話題にした。しかし由貴の小児願望症が段々、進行して其の影響である事を知る者は、悦子一人しか居なかった。木崎の棺が邸内から出ると、もう由貴は悦子を片時も放さなかった。

「ママ、ママ」と、由貴は甘え声を出して幼稚な仕草をした。悦子は大きく、肥った由貴の体をもて余しながら、オシメを取替えた。由貴は、美しい顔をした幼児となり果てた。

毎夜、悦子は由貴に暗示を与えた。

「貴女はネ、這イ這イしか出来ない赤ちゃんよ。ママの手を借りなければ立てないのよ」時計の針が、由貴にとって、徐々ではあるが逆に廻り始めた。食物は、涎掛けを首につけて悦子から喰べさせて貰った。

由貴は、もう悦子が居なければ生きてゆけぬ牀に成って居た。悦子の復讐は見事に成功

したのだ。

「私が生ける廃人なら、由貴は生ける屍なんだわ」

悦子は、床に崩れ落ると、見えない眼から涙を流し、初めて声を挙げて泣いた。

不審に思った使用人の訴えで、警官が踏込んだ時、其処には、遂に肉塊に過ぎなくなった由貴が、無心に哺乳用の乳首を吸っていたのである。

警察では、二人を精神病院に収容するかどうかが困惑して、喜久が診断を受けた事のある老医師に相談した。医師は、ミモザ館のママを紹介し、この廃屋に落着いたと言う。

「由貴さんは、未だ生きていらつしやる？」

「はい、あの廃屋で悦子さんに養われて居りますよ」

女料理人は、口籠りながら答えた。

「由貴さんの小児願望症は、今でも進行しているのか知ら？」

「マダムのお話ですと、小児願望の行き着く先は、母の子宮の中の胎児に成る事だそうですが、どんなものでしょうか」

喜久は、其の晩から熱を出して三日ばかり臥った。



## 「うごめく妖しい虫」の幻想譜

## 浴後の剥玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円

中河恵子 略号△はゆ

湯上りのぬくぬくと湯気の立ちのぼる剥玉子のような裸身に、きつちりと掛けられた菱縄は柔肌をひしひしと締め上げて、うごめく妖しい虫の序曲奏である。

## 投げだす緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円

中河恵子 略号△はよ

肌に縄がかかるのと俄かに燃えあがる炎が全身をたぎらせて、伸ばした足の指をくの字に曲げて、舞台上に投げだした忘我の境地。

## 待望の脚挙げ姿態

大手札四枚一組 五〇〇円

中河恵子 略号△はて

小説「花と蛇」を熱読してやまない恵子嬢の希求する片脚挙げのポーズを正面から狙いをつけて、彼女の反応を刻明に描写した素晴らしい迫力を持つ力作フォト。

## 二つ折女体エビ責

大手札三枚一組 四〇〇円

中河恵子 略号△はお

柔軟な女体は縄を掛けることによって二つ折りに曲げられて曲屈

した肌に喰い込んだ縄は、恐いほどの緊縛感を手にとるような身近かに眺めることが出来る。

## 柱の前に緊縛全裸

大手札四枚一組 五〇〇円

中河恵子 略号△はの

若々しい裸身は厳しい縄目によって、その美しさを一層引き出している。一本の柱があるが、その前に生々しく描き出している。

## 神妙なプレイ寸前

大手札三枚一組 四〇〇円

中河恵子 略号△はひ

柱の前に置いたスツールの上に、腰をおろした全裸のいけにえは、今これから行われようとするプレイを前にして縛られたまま神妙に責めの手を待っている。

## 開股縛りは望む所

大手札四枚一組 五〇〇円

中河恵子 略号△はわ

花と蛇式の羞恥責めを願望する恵子嬢に對して両脚が一直線になる程思いきり開かせて縛りあげ、そのまま放置したところを狙った空想の余地多大な幻想的フォト。

## 全裸女体立ち縛り

大手札三枚一組 四〇〇円

中河恵子 略号△はふ

後手縛りの縄尻りを柱に連結されて、まるで繋がれた犬のようにぐるぐる柱の回りを徘徊する立ち縛りの裸女は、その境遇を楽しむむかのように生き生きしていた。

## 黒縄は白肌を彩る

大手札三枚一組 四〇〇円

中河恵子 略号△はほ

上気しない真白い肌に黒い縄が情容なくまといつき、美しい恵子嬢の表情と相俟って極めてスマートな緊縛フォトを形作っている。

## 悦虐に身もだえる

大手札四枚一組 五〇〇円

中河恵子 略号△はあ

若鹿のような肢体は縄によって足びれ、悦虐に身もだえる全身はでグイグイ顔面の表情に至るまでむき出しにしている。

## 菱縄は肌をくびる

大手札三枚一組 四〇〇円

中河恵子 略号△はう

二つの乳房を中心に柔肌をくびる菱縄は恵子嬢の裸身に鋭いアクセントを醸し出し、首縄股間縛りと相俟って伸びやかな肢体を美の権化のように脚光を浴びている。

## 柱立ち縛りざらし

大手札四枚一組 五〇〇円

中河恵子 略号△はさ

部屋の中央の柱に立ち縛りにな

った花と蛇の主人公の如き恵子嬢は、その念願通り前後左右から肌の毛穴の一つ一つに至るまで、じろじろと眺められるのである。

## 卓上開股羞恥責め

大手札四枚一組 五〇〇円

中河恵子 略号△はめ

テーブルの上に捧げられた女体は、それ自体きわめてセクシーなものであるが、それが縄という小道具によって開股縛りになると、きらめく星の如く輝いてくる。

## 無防備の女体開陳

大手札四枚一組 五〇〇円

中河恵子 略号△はし

無防備にさらけ出された女体、それは縄を用いることによって、あからさまなS人士的期待をより一層あらわにしてSの琴線をゆさぶりつつけるものである。

## 遠山静子立ち縛り

大手札四枚一組 五〇〇円

中河恵子 略号△はも

「遠山静子」という名札を前にぶらさげて立ち縛りにあっている美貌の女性の片脚を無理無体引き上げ、一層の羞恥を加えようという川田達の悪らつな手段。

お申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号、箕田京二へ。



# △甘い鞭▽にもだえる関谷夫人の艶姿

## 両手吊りで悶える

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もえ▽  
両手を八の字に鴨居に吊り上げられ更に片足を高々と一直線に吊られた夫人の臀部に激しく炸烈するムチに悶え悶える感極まつた表情は全く絶妙といつてよい。

## 強烈なる甘いムチ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もゆ▽  
柱に前向きに縛られて前面に炸烈するムチにのけぞり、或は柱に前手縛りで尻に強烈な一打を受け、全身をビクビクふるわせて感動にむせび泣くマニア垂涎の表情。

## 狂い哭く美貌夫人

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もよ▽  
後手に縛られて床の上にとろろとた夫人の裸身に雨あられと降る鞭にエビのようにびんぴん跳ねて全身をふるわせ、感泣の表情はマゾ女性のマゾの極致を表す。

## 半吊りでムチ打ち

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もす▽  
全体重を細いロープにかけて吊り下げればズルズルと細は伸びて僅かに足の爪先が床に着くところ

を革ムチをふるって背尻脚と乱打すれば揺れながら泣声を挙げる。

## 逆エビの味に感泣

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もせ▽  
うつ伏になつた後手縛りの女体の両足を持ち上げた逆エビに折り曲げ盛りあがった豊満な臀部に折れチをくれれば、その痛さに美しい夫人の顔面はツツツとゆがむ。

## ムチの一打に反る

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もれ▽  
高小手縛りの後手首を滑車で吊り上げ爪先立たせた女体の臀部を強く打つれば、全身を弓のよう反り返えらせ、尻を突き出してエビのように前かがみになる。

## 関谷富佐子の陳列

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もる▽  
「関谷富佐子」という名札を前にぶらさげて後手縛りに立たされた女体は愛用のムチを胸にして、その時の表情を顔面にみながら、美しい全裸の女体を陳列する。

## 尻立ての鞭撻姿態

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もて▽  
後手に縛られてころがった夫人

## 片足吊上げで喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もな▽  
口、咽喉、胸、腰と柱にぎりぎり縛りつけられ、片足を前に差し出して水平にまで引き上げられた女体に加えられる鞭の痛撃は彼女の全身を悦虐の極致へ誘った。

## 私をムチ打ってネ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もね▽  
「私をムチ打って下さい」というタイトルのをぶら下げた全裸の女体を八の字の両手吊りに晒して爪先を立つた夫人のお尻に悪魔のようなムチの快打が続けられる。

## 脂ぎった女体縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もむ▽  
益々脂肪がのって豊かさの増した女体にきりきりとロープを掛け、夫人熱望のムチをふるえば、痛さに耐え、痛さに甘え、魅力的な姿態が脂ぎった肌をさらけ出す。

## 鞭は柔肌に炸烈す

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もろ▽  
さあ、もろどのようにもして

と豊満な臀部を突き出してムチを待望する女体に対して、手もしびれるばかりに皮鞭をぶち当てれば最高の被虐の境地が展開する。

## 滑車吊りで甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もき▽  
滑車の後手吊りの女体に対してあくなき暴虐のムチは、その限りなき豊かな反応を楽しみつつ、一打一打、狙い定めて適確に効果を求めて女体の各所に炸烈する。

## 両手万才に鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もこ▽  
両手を万歳に吊られて爪先立つた女体は、ここを先途とムチ打ってくれとばかり、無防備の尻をさし反らしている。一打又一打、激しい反応は全身を戦慄させる。

## 狂う鞭に哀切表情

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もみ▽  
ムチ打たれた時の夫人の緊迫感のある表情をこれほど新鮮にキャッチした写真はないでしょう。マゾ女性の真髓を、この豊かな表情から受けとって下さい。

お申込みは大阪阿倍野局私書箱第十四号——箕田京二へ——





五月号、大変楽しく拝見致しました。特に「男中」はとても興味深く読ませていただきました。でも文章がもっと長ければ、と思います。文中のおばさんが、なんだか私のようなさっかくを起すくらいでした。出来れば相手も男性ではなく女性で、女中さんかなにかで、女同志の方が色々なことが考えられていいのではないかと、勝手なことを思っています。鼻責めの小説、写真をぜひ、増して下さい。それに浣腸責め、オシメ遊び

等もぜひお願いします。最近苦勞なく生ゴムの下着類が手に入るようになりましたが、実際に使われたもので、臭いのしみ込んだ物となると仲々入手出来ないと思います。私の使用済ショーツ（タオル地）が七枚程あります。勿論汚れて臭いも抜けきれないものですが、よろしければお望みの方に差し上げたく思います。先月号のこの欄に出して戴いたゴムショーツは、青井悦子さんという方から連絡を戴き、その方と交換しました。青井さんとはその後二度程お会いしました。今度、自分でもこの欄に投書すると云っておられました。仲間が増え嬉しく思っています。全部ビニール袋に保存していますからにおいも消えないだろうと思いますが、同性からのお便りをお待ちして居ります。連絡方法をお知らせ下されば私はいつでもお逢い出来ます。午後六時以後でしたら都内で。でも同性の四十才以上の方ですよ。それにお互いに約束と秘密は固く守りましょう。そして私に浣腸をお願いします、貴女の汚れたパンティを口につめて。私って本当にアブだなあと思つづく思いますが、同じような気持をお持ちの貴女がキット

いらっしやることを信じて待つて居ります。（紅かほる）

○ 私、ここ一年前程から愛読させて戴いている一男性です。当年二十一才になりますが、実はずっと以前たしか中学生の頃、姉が何処からか持って来た本誌を母に見せていたところを背後から盗み見をした憶えがあります。地方公務員であるからという訳ではありませんが、自分のS性を自覚して一人で悩んで居ります。だが御誌の通信欄で同じ悩みを持つ人が多いのを知り、驚きと安心を同時に得た次第です。私はいつもM女性を夢みて居りますが、この様な状態から出来ることなら一刻も早く抜け出して健康的な生活をしたいたいと思つて居る次第です。いかがでしょうM女性の方、見ず知らずの男と最初からプレーをする事は不安でしょうが、交際（文通から）して戴き、そして理解できた上で、私の願いを聞いていただけないでしょうか。私、川崎市に住んでおりますが、出来るだけ近くの方でお待ちしております。お待ちして居ります。（川崎市・T生）

○ K誌愛読のM女性の方、私はS

男性です。年は三十才のサラリーマンです。K誌愛読五年、プレイの経験なし。何時も、花と蛇、痴人の糧、辻村隆カメラ・ハント、山本一章カメラルポ等を好んで読んでおります。責めであればなんでも好みます。どなたか私とSMプレイを一緒に致しませんか。もちろん、両方が、文通などでよく話し合ってからのことと始めからプレイというようなことは、M女性にとって仲々勇気が要ると思います。私の方は、M女性であればどんな方でも結構、年令も問いません。お手紙下さい。大阪中央局留で、毎月十七日頃に着くようにお願い致します。お互いにSMプレイを、楽しもうではありませんか。又、笹原八千子様、木村洋子様、中河恵子様、河森真理子様、大島照代様、沖村れい子様、どなたか私と一度、お逢い出来ませんか。お手紙お待ちしております（大阪・磯川光男）

○ 私は二十二才の女子大生です。約一年前、ふとしたことから奇クを知り、以来愛読させていたいただいております。私は特に花と蛇や、痴人の糧が大好きです。私はアパートの一人住いなので、カギを



掛けしもうと一人天国になりま  
す。奇クを読むときには、いつも  
生まれたままの姿で、時には麻紐  
で足や、胸をしぼることもありま  
す。頁を繰る関係上、手だけはし  
ばれませんが、そんな姿で一氣に  
読んでしまいます。足などしびれ  
て感覚がなくなるようなことはし  
よっちゅうです。こうして読む  
と「花と蛇」の静子さんなどの気  
持がよくわかり、自分も、同じ事  
をされているような気分になり、  
私の楽しみの一つなのです。私は  
M性ということをし、誌上で読んで  
はじめて知ったのですが、本当に  
M性に生れついて良かったと思っ  
ています。でも、まだ本当にM性  
が満足するまでに被虐を味ったこ  
とがありません。心の内では、思  
いきり責められ、なぶられてみた  
いというも思っておりま。私の  
大学は女子大なので男性はいませ  
ん。女子ばかりですと、いろいろ  
と男性の前では話せないようなこ  
とが話題になりますが、やはり、  
M性というものは特殊なのか、こ  
ういうことは話題にはならないの  
です。私は内気ですので自分から  
こんな話をするとは出来ません  
し、まして男性にはとても打ちあ  
ける勇気はありません。しかたな

く独り本を漁ったり、自分で自分  
をしぼってみたり、浣腸したりし  
て我慢しております。自分でしぼ  
るといっても、結局、手はしぼる  
ことが出来ず、そういう気持で紐  
の端をにぎっているより方法があ  
りません。だれか良いお友達があ  
しいのです。それでペンを取りま  
した。私の好みは、さかさ吊り、  
乳房しぼり、浣腸等です。どなた  
かお友達になって下さい。ただし  
絶対に秘密を守って下さる方に限  
ります。私の希望は、やはりまだ  
男性の方は怖いように思います。  
女性の方で、私の気持をわかって  
下さる方はいらっしゃらないでし  
ょうか。私の悩みを理解して下さい  
る女性の方、もし、いらっしゃい  
ましたら、六月四日、一時頃に、  
札幌大通りのテレビ塔南側（航空  
会社側）の石だたみの所へお越し  
下さいませんか。目印と  
して白いハンカチを左手に持って  
下さい。お会い出来れば、これ程  
の幸せはないと思うのです。どう  
かよろしくお願い致します。（北  
海道・山下洋子）

ふとした機会から訪問先で貴誌  
を拝見して大変興味を持ちまし  
た。私はある化粧品会社のセールスを

して毎日外出ばかりしております  
が、こんな世界のあることを知っ  
たのは始めてです。結婚してまだ  
五年になったばかりですが、最初  
から共稼ぎでこの頃は夫がタクシ  
ーの運転手で夜勤が多く、たまに  
家にいるときも疲れた疲れたとい  
って、寝てばかりいます。そんな  
わけで、始めて見た貴誌のショッ  
クは私にとって相当強烈でし  
た。出来たら私も一度あのように  
して縛られてみたらと思ってみた  
りました。でも、まだ子供はな  
いとは言っても結婚して五年にも  
なる人妻ですし、とてもモデルに  
なるなど無理だと思ひますので、  
せめて、プレイの相手になって下  
さる方でもあればと思ひて、お便  
り差し上げた次第です。日中は外  
出勝ちですので、時間さえ事前に  
わかればお寄りすることは出来ま  
すし、夜分は殆ど主人が仕事に出  
ますので、いつでも時間をさくこ  
とが出来ます。なお私がお得意先  
で見せていただいたのは、たしか  
昨年の十月号かでしたので、それ  
以外の雑誌を見せていただけの方  
がございましたら、是非お伺いさ  
せていただきたいと存じます。私  
は各地をセールスに回っておりま  
すから、京阪神でしたら大概のと

ころはよくわかっております。よ  
ろしく、お願い致します。（豊中  
市・村中豊子）

「奇ク」ファンの皆様、初めまし  
て。小生、ふとしたことから「奇  
ク」をしり、毎月とまではゆきま  
せんが、三カ月に一度ぐらいのわ  
りで買っています。だが、この頃  
は読むだけではもの足りません。  
小生も皆様のようにな一度でもい  
から、すばらしいSMプレイが、  
いや、出来ることなら二度、三度  
と。そんなことを考えるようにな  
り、どうしてもM女性との交通  
が、できればSMプレイがした  
く、ペンをとった次第です。私は  
当年二十一才、S六分、M四分ぐ  
らいのサディストと思ひていま  
す。サディストといっても、そん  
なに強烈なものやムチうちなどは  
好みません、女性に精神的羞恥を  
加えることなどが好みです。又、  
Mを自覚していますので女性から  
責められたく思っています。こん  
な私ですが、興味をおもちの女性  
の方、お便り下されば幸いです。  
（京都市左京区・T生）

○ 五月号楽しく、素晴らしかった  
と思います。稿談性風俗資料入門



戦後篇は非常にためになり、あらためて素晴らしいことを知りました。それから「花と蛇」は勿論、カメラルポの大塚啓子・中河恵子の緊縛フォト「縄は知っている」などは一気に読みました。小生、KKを読み始めてもう二年も経ちますが、通信は初めてですので、どうぞ宜敷く。小生、女性をいじめてやることに人生最大の楽しみにしているものであり、いろいろな雑誌も、あさり読みました。実は私の女性に対しての緊縛プレイは一度しか経験していません。それはバーにいた女性でしたが、始めての感激でした。しかも女性からリードされてしまい、以後その女性とはよく逢い、いろいろと工夫して道具を作ったり、心ゆくまでプレイを楽しんだのですが、その女性、一年程前に、交通事故でお母さんをなくしてから、どこかへ引越してしまい、ゆくえが皆目知れません。もし、どこかでこの通信でも読まれたら、ぜひ御一報下さるようお願い申し上げます。

最近では、浣腸責めによる女の苦痛の表情が、なんともいえない魅力に思われます。浣腸責めについてどなたかお知らせ下さい。お札に私なりに考案した責めをお知らせ致します。どうぞ全国のM女性、S男性諸氏、よろしく交際、または文通を、お願い致します。(東京都江東区・高橋)

初めてお便り致します。小生は神戸市で孤独な生活を送っている24才の男性です。私は小説「花と蛇」の大ファンです。私の好みは「花と蛇」の中に出てくる浣腸責め、羞恥責め、オムツカバー、全裸緊縛、股間縛り、操り責めなどで、身体に傷をつけるような責めは余り好みません。どなたか「花と蛇」の京子のようにプレイの相手になって下さいませんか。私は実際にプレイをしフォトをとる機会にめぐまれず、今日に至ってしまい、ぜひこの機会にフォトをとってみたいと思っています。このことが、こればかりは相手のないことには、どうにもなりません。神崎文子様、中河恵子様、河森真理子様、一度お逢いしプレイしてみたいと存じますが、お逢い下さいませんかでしょうか。私は今アパートで一人で生活していますので、いつでも自由行動がとれますし、貴女さえよければ私のアパートでプレイも出来ますので、おさしつかえなければご連絡下さい。また他

のM女性の方のお便りもお待ちしています。プライバシーの守れる方を希望します。勿論貴女の個人的秘密は固く守ります。(神戸市東灘区・新田和夫)

東北にも春が訪れてまいりました。それにもかかわらず例の嵐がまた吹きだしたそうです。惨虐なる殺人、処刑もいけないことですが、私の作品もこの対象になるのでしょうか。これを考慮してできるだけコミカルにしているつもりですが。殺人の喜劇など、ナントカ夢譚みたいに、いったいの作家を氣どるわけでもない、ズブの素人のおあそびなので、すから、許してもらいたいものです。なに、お前のツヅリカタなど幼稚すぎて槍玉にあげる価値もないし、今後はどうせボツだろうって？おそれいりました。(福島・黒田寿)

僕は湯の町別府に住む一青年ですが、奇クを愛読するようになっ

て丸九年になる熱心を通りこした熱狂的なファンです。その中でも僕が一番楽しみにしていたのはグラビヤ及び口絵でしたが、そのグラビヤ及び口絵が廃止になり、ほんとうにさびしい気持ちでいっぱい。せめてグラビヤをとじこみ特集の様な型で出して下さると雑誌の料金が少々高くなっても嬉しいのですが。これは僕だけの願いではなく全国の奇クファンの最大の夢であると思います。しかし最近の本誌を読み雑誌としては充実し紙の質も良くなり大きく発展していると思います。特に山本一章氏のカメラ・ルポ。団鬼六先生の「花と蛇」辻村隆先生のSMカメラ・ハントを拝見するのが毎月の大きな楽しみとなっております。またモデルの方では中河恵子さん、大島照代さん、東浦ひかるさんの大ファンで特に中河恵子さんは毎月の告白手記が大いに楽しみです。今後共に大活躍を願ってやみません。(別府市鉄輪町・細川英治)

### ◎分譲品総目録◎

分譲品満載の豪華な目録を只今作成中ですので、切手五十円同封

の上、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号箕田京二宛御予約下さいば完成次第第一号を直ちにお送りいたします。



○ 御誌と共に暮してすでに数年に近い歳月が過ぎてしまいました。M度のパーセントが私の身体の中にこれほど高い比重を占めていることを、近頃になってひしひしと感じます。影のごとく御誌が私の身边にあります間、なんとなく充実した日々を送らせていただいております。過去のなかなかめぐる求めることが少いプレイのチャンス求めて、いかほど苦心をしてまいったことでしょうか。また、ときには千載一遇のチャンスにめぐまれて、それに没入した日々のことなど、今更のようになつかしく思い出されます。記録としてのこのフォトなど拙き文でおよろしければ、お目にかけると、恥かしながら考えております。お許しあればお送りしたく存じます。またモデルにご使用いただける機会もありますれば、とんで参りたいとも思っております。ただ、社会的な目を気にしなければならぬ現在の機構に抵抗はありますが、ささやかながらも築いた仕事の域の生活が破かいされないならば、どのような仕事でもいたします。一度思いきり縛られてフォトをとられてみたいなどという大それた願

いを抱いてみたりすることもございます。私の一番に愛読してありますのは、やはり中河恵子さまと同じように団先生の「花と蛇」です。誌上にのらないフォトならば思いきったことも出来るような気がします。体験などお許しさえあれば、拙き筆であります。集長さまはじめ皆様のご健康のほどを心からお祈り申し上げます。

(兵庫県・杉津初江)

○ キクも最近読みごたえあり大変楽しくなりましたが以前のようになく淋しく感じます。愛知T〇生様の文、大変参考になり今後通信をお願いします。又、子宮帯の図が見たく一度サロン楽我記にでも色々出して下さい。お待ち致します。又、神戸の大西様の文、最近一度ありませんが元気ですか。僕も神戸にて淋しく思っています。以前は僕もゴム製品が大好きで今でも総ゴム、オムツカパー、サップーター、パンティ、タイツ全体用帯バンド等アメゴム製を持っていますが、近頃は革製品が大好きになりました。それも薄くやわらかな品です。又着て見

て一段とゴム以上に良いと思っております。少し高いのが難ですがやはり、品物は動物製が合う様です。先日注文致していましたヤンピー製黒色オールインワン型、コルセット前チャックが股下まで開いてありますが出来上り早々に表皮の方を裏にして着て二日過ぎました。感想は最高です。ゴムですと一日中は無理です。ゴムは着た時は良いですが春は体に密着し過ぎかゆくなり、冬は汗で冷えて困ります。革は絶対にそんなことはありません。少し体がしまり体を動かす度に肌にすれ大変気持ちよくふいっとして居り一度ゴム皮愛好者以外の人も着て見ては如何ですか。困るのは自分以外は合わず人に着せて見る事が出来ない事です。家内の分も真赤で注文しています。約八千円程です。僕の友達が皮専門店にて心安く、聞く所によると一年で革コルセット十着、パンティ八着注文で作ったそうです。全部女性が注文に来て奥さんが寸法取るそうです。入用でしたら御紹介致します。キクの方へ処を書いて置きます。また革愛好者の方の通信どしどしお願い致します。(神戸・田中一夫)

○ 奇クを読み始めてまだ日は浅いのですが、すっかり愛読者になってしまいました。さて六月号を拝読してみても、一番素晴らしいと思ったのは大木淳さんの手記「かなわぬ夢」でした。短い文章でしたが、とても印象的です。僕の「かなわぬ夢」と言えば、丁度大木さんの逆の夢になるでしょう。僕は、これからも奇クを愛読するつもりです。それから大木さんに、ぜひお会いしたいです。この投稿がお目にとまりましたら、この欄を使ってお返事下さい。待っています。(東京都・芳野秋彦)

○ 山本和子さん。貴女の体験談面白く拝読しました。私も女性のこのような下着は好きで既に十年前程当時のガールフレンドであった彼女に応用しました。彼女とは二年前に交際を断っておりますが現在一児の良きママさんになって居ります。十年前既に長唄、小唄、日本舞踊の名取であり、和服を着る機会も多く又着こなしも非常に上手でした。背は一五六糎位ですが、日本的な顔の美人であり、細くも長いくびとなで肩、しなやかな身体線のすばらしい美人でした。彼女はこれらの芸事は趣味で



# ☆新人新趣向悶悦夫人の美態競艶場面

## 若妻の魅力を発揮

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号「へむ」

## 後手縛全裸の魅力

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号「へめ」

## 猿轡の裸身を悶ゆ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号「へも」

## ムチ打ちの陶醉境

大手号三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号「へさ」

## 両手吊りで痛める

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号「へし」

## 後手縛り竹棒責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号「へす」

## 強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
大島 照代 略号「へせ」

## 両手吊りであえぐ

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号「へゆ」

## 竹棒強制開股責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
大島 照代 略号「へた」

## 厳しき緊縛の正坐

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号「へち」

## 責めの魔手に屈伏

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号「へつ」

## 竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号「へて」

## 竹棒開股胴絞め縛

大手札五枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号「へと」

## 八カ月妊婦革具責

大手札四枚一組 五〇〇円  
増田みゆき 略号「へね」

## 九カ月妊婦首枷責

大手札四枚一組 五〇〇円  
増田みゆき 略号「への」

しておったのですが、着物の着付はうるさく洋風的なスリッパ、パンティ、ブラジャー等は一切身につけませんでした。私にはそれ文では不服で下着に一々注文をつけておりました。初めは長じばんは半分にして、えりと袖以外すきとおったナイロン製で作り、腰巻もすね迄はナイロン製で作りました。すぐにこれにあいた私は、山本さんに似たものを造らせました。えりを着物に縫いつけじばんは着せないのです。腰巻は下へずらしてそれもひざ迄はナイロン製です。冬でもこの下着で（実際は下着はない事になります）す。只脇のあきを少し大きくとっておるのでもここにもじばんの布地をぬいつけておく様にしましたが、会社へはさすがにこの下着では行かない様でした。日頃人に会う時はつきえりをさせるので、脇のあきの大きさと関連して手をねじあげるには非常に便利でした、一度貴女も実験して見ませんか。もし出来れば見せてもらえませんか、又は写真でも見たいですね。では実験結果の成功を祈ります。尚参考に彼女には腰紐の替りに縄を非常に多く使用しました。（神戸・前田俊男）

初めてお便り致します。私は或る商事会社につとめる二十六才のマゾ青年です。私は肉体的に痛めつけられる責めは好みませんが、精神的に苦しめられる、責め、男として最低の恥辱が与えられることを最大の喜びとするところで。特に女性から人前でビンタされたり、土下座させられたり、あるいは、顔に唾液を吐きかけられたりの責めは念願とするところですが。しかし今のところチャンスもなく、毎夜おそく地下鉄の駅まで出かけていって夜のとめから帰ってくる、バーやクラブのホステス達が時々道路に吐き捨てていく唾液を手でぬぐいとは臭いをかいだりして楽しんでおります。どなたかSの女性でこんな私をタンツボ代りに御使用していただけないでしょうか？私に唾液をひっかけてやりたい勇気のある女性の方、御一人でなくとも結構です。から毎月十日午後四時から四時半の間中央線中野駅南口改札口までお出で下さい。お待ち致しております、その際貴女は右手に白いハンケチを見えるように持っていて下さい。私が何気なく時間をお聞き致します。一度は念願をかなえてみたいものです。（東京・H







を考えていこうではありませんか  
貴女と好みが合うかわかりません  
が、若し文通が出来たならば、イ  
メージの上でいくだけでも私の思い  
通りに貴女を責めてやれると思ひ  
ます。私は正直いつて貴女のおう  
な女性が誌上やフィクションの世  
界だけでなしに現実に存在してお  
られると云うことがまだ信じられ  
ない気持です。若しこの通信が没  
にならずに編集者方の助力により  
貴女の日ふれたならばぜひ自分  
の方迄お便り下さることをお願い  
致します。最後に貴誌のますます  
の発展を心よりお祈り致し通信の  
ペンをおきます。なお同好のM女  
性S男性の便りもおまち致しま  
す。(東京都江東区亀戸町二の一  
の二・高橋邦彦)

最近毎号、浣腸記事、長編物  
が発表され、楽しいことです。そ  
れに反してオシメに関しての記事  
は、全然なく淋しい限りです。読  
者サロンの端に、宇部氏の「私は  
オムツマニア」なる数行位いの記  
事が発表されている程度で、全く  
残念でなりません。オシメ愛好者  
の投稿は少なくないだろうと思ひ  
のですが、今後に於いての発表企  
画は如何でしょうか。分譲フォト

に於ても然りです。昨年の今頃、  
大塚嬢モデルに依る「オシメのポ  
ーズフォト」が五ポーズ程発表さ  
れたが、結果的には、なかつ飛ば  
ずの不評とかで、その後、発表さ  
れませんでした。淋しく思います。いつ  
か私が通信でおたずねしたとこ  
ろ、案外オシメフォトの希望者が  
少ないという回答を頂きましたた  
が、今までのような方法では当然  
のことと存じます。全くムードも  
なく、リアル性はおろか、ただ、  
オシメカバーをモデルにくっつけ  
たという表現のフォトだからで  
す。今少しリアルに描写された  
ら、キット好評を得ると思うので  
す。オシメ愛好者の心理として、  
リアルな描写だったら、赤ん坊の  
オムツのとりかえポーズでさえ耐  
らない程の楽しさがあるのです。  
今年は空前のベビーブームだとか  
で、オムツがヘンボンとひるがえ  
っている家がメッキリ増えて、微  
笑ましい風景が日立ちます。然し  
フェチ好みの面には淋しい様です  
が、派手さをカメラにて表現され  
て、啓子嬢ひかる嬢等の良きモデ  
ル嬢を駆使されて、リアルなる描  
写をされたら、楽しいフォトにな  
ると思ひますので、是非共オシメ  
マニヤのために、一層の便宜を計

☆「花と蛇」の幻想中河恵子嬢強烈緊縛

花と蛇静子立縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号「とむ」

足挙げ開股羞恥責

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号「とろ」

片脚挙で晒す裸身

大手札一枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号「とは」

強烈エビ縛の苦悶

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号「とに」

膝頭縛開股竹棒責

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号「とは」

竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号「とへ」

股間縛の裸身表情

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号「とち」

菱縄縛猿轡の表情

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号「とり」

乱痴戯騒ぎの結末

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号「とぬ」

菱縄縛で床に喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号「とる」

浣腸責の甘い恐怖

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号「とか」

浣腸液の注入直後

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号「とま」

強制浣腸の各姿態

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号「とみ」

浣腸責の美態開陳

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号「とめ」

浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号「とも」



って下さるように、ご一考下さいませ。出来ましたら目録の端にでも企画の一端を披歴して下さい。

(岐阜・赤木茂)

○ 五月号の日出氏、有難とうございました。桃源社で入手致しました。「アサヒ芸能」四月九日号の檉原一郎の「いれずみ奇談」に、女賊文身お新の、彫りこまれていないのは局部と肛門だけ：云々という一文が掲載されていました。肥満女性のファンには、以下にニュース(テレビ映画)にも出ていた米国の肥満女性TVタレント募集スナップグラビアが、「週刊文春」四月二十四日号に載っているが、そのモノスゴイこと、近來の大傑作です。ファンの方は古本屋にでも。先日愛知県三谷(ミヤ)温泉へ行きました。名物の水車風呂は、入口は男女別だが、中は完全なる混浴で、アナ時間は夜の十時半頃。小生、中年の特権(心臓)で中年肥満女性と口を利き、豊満なる背中を流させてもらい、下手なストリップ見物より、目(手?)の保養をしました。(滋賀・赤畑修造)

○ 中原久美子様へ。貴女の十二月

号のお呼びかけを読ませて戴き、文中「ゴム球の浣腸器を買って下さる方」とありましたので、私最近買ったのが有りますから、それで宜しかったらお譲り致したく思っておりますが、お入用でしたら連絡先を、お知らせ下さい。送って差上げます。申し遅れましたが、私は二十二才の男性です。東京を知りませんので、東京の人と文通交際をしたく思います。中原様、私と文通交際をして下さいませんか。貴女様はMでしょうかSでございましょうか？よろしかったらお知らせ下さいませんかお願い致します。ゴム球の浣腸器のほかに小道具はいりませんか。使いたい物がありましたら買って差し上げますから、必要な品物を私にお伝え下さればなんでも揃えて差し上げます。一度遊びに来ませんか？片道の料金ぐらいでしたら都合致します。(和歌山・小島生)

○ 三月号の表紙は思いきった鼻責めを使って、マニヤは喜んでることと思います。鼻責め特集号を作れとの要望が沢山あるようですが私も大賛成です。さて、いつか読者通信によって増田さんに鼻責め競争の挑戦をした私ですが、そ

の後機会もなく打ち過ぎてしまいました。増田さんも、ぜひその機会を作ってくれと、昨年の何月号かに載せていましたが、私もぜひそういうチャンスが来ればよいと思っております。とりあえず文通だけでもして機会を待ち、その節にプレーを楽しみたいと思います。それからそれぞれ、個人の秘密は当然守って、プレー実現の際のフोटなども、一般には公開しないで配布するにしても、好事家の方々の中でも秘密の守れるような方のみ限って貰いたいものと思います。でも、プレーの記録などは、まだまだのことで、機会があった時にゆっくり相談出来ることと思います。どうぞ宜敷くお願い致します(橋本常男)

○ 私はK誌を愛読する以前から、今日までずっと読み続けて来た書がある。その名は「世界秘密文学選書」である。皆様の中にも読破された方もあらうと思うが、この書を読んで感じた事を記してみたと思う。まず鞭打ちであるが、これには二つの種類というか、内容がある。一つは愛の鞭、もう一つは責めの鞭である。これは、マゾ、サド、又は普通の人間に關係

なく共通しているもので、前者の愛の鞭とは、言葉や心、情愛等で愛を確め合う以上に、相手に愛されていと思う為に、女性が男性の前に自分のすべてを投げ出して打ってもらおうというもので、女性の体は自由であり、打たれるのは臀部が主であり、鞭自体も大したこととはなく、長く、強く打たれ、その痛みが激しければ激しい程、相手の男に自分が愛されているのを知るのである。後者の責めの鞭とは、悪事を働いたとか、氣にくなかったとか、シヨ一の為に行うとかいった場合のもので、責められる方は自由を奪われ、打たれる場所は、臀部や背中をはじめ、体全体が対象となり、鞭自体も一本から先端が四、五本に分れてい



「最近作緊縛傑作フオト」

開股竹棒羞恥責め	大手札三枚一組 略号「ねろ」 四〇〇円
逆エビ責め手足縛り	大手札三枚一組 略号「ねき」 四〇〇円
竹棒開股強烈繋り	大手札三枚一組 略号「ねく」 四〇〇円
鼻責めと鼻孔大寫し	大手札三枚一組 略号「ねけ」 四〇〇円
首縄後手強烈縛り	大手札三枚一組 略号「ねこ」 四〇〇円
全裸開股膝頭縛り	大手札三枚一組 略号「ねさ」 四〇〇円
菱縄縛り竹棒責め	大手札三枚一組 略号「ねし」 四〇〇円
柔肌に喰込む縄目	大手札三枚一組 略号「ねす」 四〇〇円
豊満な全裸を弄る	大手札三枚一組 略号「ねせ」 四〇〇円
逆エビに痛める魔手	大手札三枚一組 略号「ねそ」 四〇〇円
黒髪をいたぶる手	大手札四枚一組 略号「そや」 五〇〇円
菱縄縛りにあえぐ	大手札四枚一組 略号「そゆ」 五〇〇円
強烈後手縛りの狂態	大手札四枚一組 略号「そき」 五〇〇円
牝犬奴隷の醜態	大手札四枚一組 略号「そよ」 五〇〇円
全裸二つ折り縛り	大手札四枚一組 略号「そむ」 五〇〇円
菱縄しばりの表情	大手札四枚一組 略号「その」 五〇〇円
八の字開股羞恥責め	大手札四枚一組 略号「そか」 五〇〇円
菱縄縛りの全裸を晒す	大手札四枚一組 略号「そえ」 五〇〇円
奴隷捨札開股縛り	大手札三枚一組 略号「さま」 四〇〇円
菱縄強烈開股縛り	大手札三枚一組 略号「さみ」 四〇〇円
竹柱立縛り晒し者	大手札三枚一組 略号「きめ」 四〇〇円
柱宙縛り苦痛表情	大手札三枚一組 略号「きも」 四〇〇円
猿轡股間縛り歩き	大手札三枚一組 略号「きも」 四〇〇円

の鞭打ちはどちらだろうか、両者が加味されているようにも思われるが、いかがかな。(前川充三)

○  
まあよくもにくにくい品物が考案され、生れたものだ、私はつくづく脳裏に浮べてみる。それはパンティのことだ。外来品ではあるが、日本人にもマッチするのだ。日本人の愛用はウェット的である。これは民族的なものである。だが聞いても、発音してみても明るい、健康的な品物である。その点、ズロースは、秘事のようなジメジメとした感があるし、色も白か黒で、他の色ではナセンスだ。パンティなら七色で、もうなずけるし、満かんに干しても、あえてこぼむこともない。だが、これも店屋で売っている時にはさして魅力的でもない。だがパントリー専門のウインドを設けたとは。多種多様のサイズ、デザインがあるのを、売るのは、女性専門用語、使用説明等をのみ込んで客に買わそうと熱心になる。一日何枚売った、こんな客があった、返品があった、等々でこれも仕事となると大変なこと。とても魅力がどうのといっているところのさわぎではない。はたして、これを売

る女性はいかようなパンティマニヤだろうか。案外、取替は少ないかも知れない。まあそれはそれとして(以下パンティをPと書く)Pそのものをみて魅力はないともいえまい。人それぞれで考えることは違ふだろうが、本当の魅力となると、女がそれを着用してはじめて生れるのだろうか。着用している状態、脱ぐ場合のポーズ、新品と中古品の違い。最近、干し場などから、このPを盗む者が多くなつたそうだが、こういうことは悪いに決まっているのだから弁護のしようがない。だがマニヤとして気持は分らなくもない。悪いことに違いはないのだが、どうしても欲しいのはならフェアーに、推定額をきめて、使用賃を加えたお金をP代として理由をしたためた上で交換してもらうというのはどうだろか。P盗にも、その位の良心はマニヤの一人として持つてほしいものだ。だが、これもあくまでも話としてのことで、あくまでも慎しむべき行為で、もつと道に適つたやり方を考えるべきだ。私はそこで一考した訳。許されるならば、美人で好む女性にPを与え、種々色々な型と、これはA子さんが一週間着用したもの、これはB



子さんが一カ月着たものと明示して販売すればどうだろう。P屋さんはよく売れ、Pマニヤは喜び、P盗はぐんと減り、美人達はPを買う必要はなくなり、オールOKということになりはすまいか。女性自身が生地からミシン加工、デザインまでしたのもよからうと思うのだ。一握りの、ごく小さな型、穿けば、横が広がって、ピツタリとくいい様なナイロンの素敵な魅力ある生地で……。和服用なれば、はいていて横にすくく伸びるものから、前ボタン付でバックの中へ入れられる薄物。最近P自動販売機なるもので、一〇〇円入れれば、お好みの色ものが出るものも発明されたが、もっともっと小さな包みとして薄物を考えるっている。私は今、女四人男一人のグループを組んでおります。但し男は、今後も増員しません。理由もあり、現在の一人はテスト用です。脱毛、足や腕等不用をきれいに取ります。勿論痛みはありません。何千円出して抜いて貰わなくとも一時間横にさえなっているれば美しくなれる方法があるのです。Pの魅力的な着用、又は脱ぎ方、ナイロン胂下の着脱実演、足先の美容、指の爪等々なん

でもござれの研究グループですが、女性の方はもう五名程増員予定です。会費など一切不要です。で、希望される方は連絡して下さい。(大阪、P・T生)

写真部の方へお願いします。分譲写真も相当購入しましたが私の好みとして、女性同志のもので四つん這いの女馬の背中に、もう一人の女性が馬乗りにまたがり、女馬を這いまわらせて、存分に責め弄ぶ、といったポーズのものを是非製作して欲しいのです。一日千秋の思いで待っていますから、早くこの望みをかなえて下さるようお願い致します。(女馬を愛好する男)

神崎文子様へ。貴女は本当にいじめられるのが好きなのですか。友達とケンカしたり、主人に罪を被せられて辞めることと、一寸矛盾するように思えますが。本当に責められるのが好きなら素晴らしい。どうか僕の前に姿を現して下さい。僕は女性を縛ったことはありませんが、本当に協力的で、それに悦びを感じる女性とプレイをしたことはありません。それが念願でもあり、生きがいでもあり、そ

の為には何物をも惜しまない決心は早くからついています。僕は阿倍野のある金融機関に勤める者ですが、天王寺動物園の入口付近で待ち合そうではありませんか。都合のよい日を互いに選びましょう何分の返事を待ちます。(大阪・大木淳)

読者の皆様、お変わりございませんか。誌上で御活躍の増田御夫妻新宮御夫妻、長田御夫妻始め、諸先生方、如何お過しでございましたようか。私、現在二十九才になる家庭の主婦でございますが、結婚後、主人に奇クを見せられて以来すっかり耽美の世界のとりこになっております。現在迄約八年間、べつに二人の間に波風もたたず、平和に過ぎて頂いたのも、こうした平凡な生活の中にも、ある程度バラエティに富んだ生活があったからだと思っております。しかし主人も私も、恥しいこと乍ら、最近はどうしてもお互いだけでは満足感が充たれず、もっと大きく輪を拡げて、同好の御夫妻の方々と、この素晴らしい世界を語り合いたい、楽しみ合う機会を持ちたくありません。私もこの際思いきって人生体験を拡めてみようと思いま

す。お打明けしますと、チョッピリ私にはレスポスの傾向もございました。随分、迷ったり考えた上のことですが、勇気を出して、次のようなご友人を求めさせて頂きます。どうか私や主人の真意をおくみとり下さいまして、真面目な、絶対に生涯秘密を守り抜けるような、いい方々のご連絡をお待ち致します。誌上でございますので、取敢えず、局廻送便でご連絡下さいませ。第二回からは直接便でご連絡、ご親交を必らずさせて頂きます。一、関西、中国、四国など、あまり遠くでなく、お逢い出来る距離に居住され、社会的にもご信用出来る方。二、女性の方で未、既婚を問わず、文通したり悩みを語り合える方。特に、アヌス、レスポス、軽いSMムードなど、私関心がございますので、御承知の上、親しくして頂ける方。三、ご夫婦、又は同伴パートナーのある方で、ご信頼が出来、将来プレーも楽しめるペアの方々。こんなことを書きますと大変な人間だと思いでしよう、が本当は精一杯の勇気を出しているのです。主人も私も、いささか社会的、経済的に信用して頂けると存じますし、御相手の方々に決してご迷惑



をかけることは決してございませ  
んの、宜しくお願い申し上げま  
す。(大阪・小山公子)

○ 小生、耳と鼻の穿孔が何よりの  
魅力とします。二月号の葛山英  
二氏の「事実小説より奇なり」  
の中で、何度かの鼻責めプレイで  
既に孔は穿かれていたのだろう  
：云々のくだりに、非常な興奮を  
覚えました。K誌には発表されな  
いが、鼻隔壁に穿孔している人は  
相当数居られるのではないでしょ  
うか。もっとどしどし発表して下  
さると嬉しいのですが……。奈良  
の三輪氏、東京の関代ご夫妻は、  
その後、如何しておられるのでし  
ょうか。仙台の秋田一郎氏の、鼻  
腔に環をさしこみ、胸部、腹部に  
針を穿って快楽にふけている。  
という記事も羨しく、小生も、耳  
と鼻の穿孔道楽が昂じて、今では  
左右十五ヶの孔を持っております  
が、現在は、耳介の中央に穿孔中  
でして、ほぼ九分通りまで進み、  
完成に近づいています。だが予定  
としては、現在の各孔の間に一ヶ  
ずつ増やし、二十ヶ位いまでを目  
標にしています。何分、生身の  
こと、木や竹に穿孔するような  
訳には行かず、疼痛を味いながら

孔を殖やしてゆくのですが、それ  
が又私にはとても楽しいのです。  
鼻の方は、鼻隔壁に十七ミリの  
の、鼻翼に左右三ヶ宛で、これ以  
上殖やすのは、して、やれぬこと  
はないでしょうが。一寸無理を伴  
うように思います。名古屋のM七  
○生氏は、十一月号で、現在四ミ  
リに縮小して居る、と発表されて  
おられました。小生は、三十才  
より穿孔して十年、少しも縮小し  
ません。もっと耳輪、鼻輪の記事  
フォトがあると嬉しいのですが、  
耳輪は刑部典子一人、鼻輪は八、  
九名で、甚だ淋しいことです。最  
近、近所に住む印度婦人が耳環は  
無論、鼻翼に穿孔して鼻飾りをつ  
けて居られますので訪問して見せ  
て貰っています。近く、京都会館  
で印度舞踊を、公演されるそうで  
す。(京都市、耳鼻環生)

○ ご無沙汰して居りましたが、奇  
クは毎号かかさず読んでおりまし  
た。SMの世界とはキツパリ別れ  
てしまおうと、何度決心したこと  
でしよ。しかしSMの世界を  
除いて私に何の楽しみが残ること  
でしょう。これあってこそ私の  
人生でござい。今までに何回  
となくお手紙の交換などを希みな

### 最新撮影総天然色 カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てき

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てか

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てく

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てこ

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てま

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てみ

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てむ

猿くつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てめ

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八ても

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てん

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てる

真紅の腰巻着用姿態

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
大塚 啓子 略号八うお

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
東浦・大塚 略号八うて

真紅の腰巻着用縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八うこ

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るむ

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るの

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るお

真紅の腰巻姿で緊縛

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るま

羞らしい真正面縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るけ

若肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るふ

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るや



がら思うように実現出来ずにおりましたところ、偶然、ある真面目な青年と巡り合え、理解と献身的な努力で、現在は、充実した生き甲斐を、ヒシヒシと感じております。昨年十月号で「お灸に憑かれた私」を告白された白浜律子様、一度おみせしたい位です。私は幼い頃から、お仕置のお灸の味はよく知りつくしております。最近はお仕置ではないお灸を据えて頂いておりますが、冷え症、便秘には良く効いて、一石二鳥でございます。白浜様はじめ、関心をお持ちのM同姓の方々からのお便りをお待ち致しております。(東京・藤村美香)

初めての投稿です。貴誌を知って十余年、夫婦共に愛読しています。一児を得て結婚後五年を経た現在、妻とのプレイにも熱が入ります。最近、特に多くなった夫婦プレイ同好者の手記を拝見し、私達も心強く思います。私達の「愛の縛り」の記録写真も、アルバム三冊になりました。公表出来るものもありますが、辻村氏や山本氏の作品を拝見しますと、とても技術的に差があり過ぎるようです。先達って「裏切りの季節」

を観る機会があり、大半が縛りと鞭打ち場面で、ヒロイン役の谷口朱里の迫真的演技に感心したので、全裸の吊り、羞恥責め、水責め、後手縛り等、盛り沢山の画面の様子を、帰宅して妻に話してやると目を輝やかして聞き入って居ました。社会が異常に発達し、メカニク的な構造の中の人間性は失われてしまい、社会構造の中で人間性を追求すれば、必然的に刺激の強さを求める傾向になります。激の強さを求める原因で現在社会のひずみで種々の事件が起きています。でも私達は、そのような社会的圧迫から逃げることなく楽しい日々を送れています。現在、妻と一緒に体験記を執筆中ですが、何しろ拙文ですので、遅々として進まず、我ながら困っています。妻が私と同じ愛好者と知ったのは交際後間もなくでしたが、互いの第六感と申しますか、急速に親密感、深まりました。新婚旅行は熱海でしたが、第一夜からプレイで明かしました。それまでのデートの度にも行っていました。妻の好みは台に縛りつけられて責められることです。巾五、六十センチ長さ一米足らずの台上で、首をガックリと下げ、両手足を四方の台

脚に縛りつけられ、肌も露わに豊かな肉付が緋の襦袢に映えて、責めを待ち望んでうねっている様、私は五年後の今も、晴れてプレイに没入できた新婚第一夜の、あの妻の姿が、そしてその一部始終をハッキリと覚えています。後日、執筆中の拙文を提供したいと思っております。今、妻も二十六才になり、円満で張りのある生活に満足しているようです。今までに行ってきた責めの方法は数多くありますが、逆吊りだけはまだ経験しておりません。列記しますと、台縛りが基本になり、それにクリップ責め、バイブレーターでのくすぐり責め、ローソク責めなどを加味するのです。生物を使ったものでは、小さなタコを十匹程で肌に這わせる責め、ミミズを使つての責めなどがあります。他にも、椅子縛り、両手を挙げての吊り、などですが、妻も、自分で自分を責めるアイデアを色々と考え出して私に実行させるのです。只今執筆中の手記のペンネームを二人で考えて、孤室真佐子が妻、私は佐登留と決めました。関谷富佐子夫人の大ファンなので「佐」の一字を戴きました。どうぞよろしくお願ひ致します。(東京・孤室佐登留)

# 天然色写真最近作

## 双胎臨月蛙腹写真

大手札六枚一組 略号「れや」  
増田みゆき

## 双胎臨月腹強烈縛

大手札六枚一組 略号「れゆ」  
増田みゆき

## 臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 略号「れえ」  
増田みゆき

## 股間縛り開股姿態

大手札三枚一組 略号「れよ」  
中河恵子

## 羞らいの股間縛り

大手札三枚一組 略号「れに」  
中河恵子

## 黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 略号「れぬ」  
中河恵子

## 立縛りにあう裸女

大手札三枚一組 略号「れね」  
木村洋子

## 開股された股間縛

大手札三枚一組 略号「れの」  
木村洋子

## 豆絞りの猿ぐつわ

大手札三枚一組 略号「れむ」  
木村洋子



次号(八月号)は、六月二十五日に発売します。

○ 奇ク愛読者の皆様、今日は。私はずっと以前から、バンドやゴムそれにエネマ、加えてダイアパの虜にされた三十代の男です。しかし、これらを語り合う友もなく、プレイを楽しむ相手などをみつけることも出来ず、只、僅かに奇クを発見してから、その記事によって慰めを求めているのみです。どなたかとお知合いになれたら、どんなに幸せかと思ひながらペンを走らせています。私が、前記のものにこれほど執着し、虜となったソモソモの始まりは、私が中学一年の春の頃でした。当時、近所に住む若いナースに可愛がれていた私は、お姉さん、お姉さんと呼んで親しんでおりました。ある日の夕食に招かれて、そのお姉さんの家へ行った時、まとも放屁してしまったのです。恥かしがる私をみてお姉さんは「坊や、便秘しているらしいわね、身体に毒だからお姉さんが出てあげろ」といい出したのです。私は恥かしくてたまらなかつたのですが、相手がナースなので別に抵抗は感じませんで

したが、これが、悩みの始まる第一歩でした。それから数日後、親類に不幸が出来て、母が家を空けなければならなくなりました。私は学校の関係で一緒に行くわけにゆかず、お姉さんの家で、母の帰るまで世話になることになったのです。なんだかお姉さんも嬉しそうに、何かと気を配ってくれましたが、あくる日、洗ってあげるからと、下着を脱ぐように云われました。私が、着替えを出そうとすると「お姉さんのこれをはきなさい」といって差し出されたのが、裏側が総ゴム張りの黒メリヤスで出来た生理帯でした。私は当時、まだそんなものを知りもしなかったもので、女って変なものをはくなあと思ひながらも、せっかくなのではいてみました。はだにゴムが吸いつくような感じと、冷やりとするハダざわりで、なんとも云えない気持ちになったことを、今でもハッキリ覚えています。お姉さんには、エネマの時、すっかり私の体を見られてしまったのは言うまでもありません。初めての生理帯にとまどっている私に、お姉さん

がいました。「坊やは、年の割に発育が悪いわ。この治療には女の体液が良く効くのよ。世間の人には知らないらしくて高いお薬などを飲んでるそうだけど、あれでは治らないわ。坊やはまだうんと若いから今のうちに治しなさい」私は何のことだか訳がわからなかったけれど、コックリとうなずきました。「他人にこんな話をしては折角飲んでも効かなくなるわよ、お母さんのは無効だから絶対に秘密よ。効くのは結婚前の人のだけなの、毎月のものなら尚良いの」私はお姉さんのことだから信用しました。最初は、さすがに気持が悪かったのですが、次第に慣れ、遂に恋しくなつて来ました。あれから二十年余。お姉さんと別れ別れになってから十数年。二人だけの秘密として来たことですが、今になって尚更に恋しく、私はもだえる程に、やるせない気持ちに責められる日々を送っているのです。

(東京・神下信昌)

○ 大木淳様、貴方が六月号で書かれた手記『かなわぬ夢』大変楽しく拝見致しました。奇クを愛読しだしてから五年になりますが、貴方がお書きになった様な記事が余

りなく手記を読んで大変興味を感じました。「恥かしがる少年にズロースを穿かせ、黒いストッキングに赤いガーター、そしてピンクのシュミーズ、口にはメンスバンドで猿ぐつわ。そしてグリセリン浣腸」全く息もつかせず読んでしまいました。小生二十五才になるスポーツマンですが、最近貴方の愛されるような少年とプレーを致しましたが、この様なプレーまで行う事が出来ないまま彼とのプレーは彼の進学問題やその他で中止しました。今後とも貴方の手記を本誌にどんどん載せて下さい。出来ましたら貴方と文通交際したいのですが、いかがですか。M傾向の強い僕ですので、よろしくお願ひします。(名古屋・藤井次夫)

○ 今日この頃は初夏を思わせる良気候で心も浮々と致します。私は毎月貴誌が出るのを待ち遠しく二十五日は私の給料日で何をおいても一番に買って読みます。六月号では春川ナミオ様の画は特に私の気持ちにぴったりです。気がふわつとなります。「甘い鞭」の写真がもう少しアップではっきりしていたら尚一層よかったと思います。私は血を見るのが嫌いです。ただ



女の人になぶられて苦しむ大女が  
たまらなく好きです。たとえば20  
Wの裸電球一つについている四帖半  
ぐらいの地下室で三人の女に縛ら  
れいじめられている私を空想して  
います。三名の若い女の逞ましい  
尻の下敷きに押しひしがれている  
哀れな自分を思っただけでも胸が  
あつくになります。私の顔の上に跨  
がりでんと大きなお尻を据えられ  
たら最高です。春川様の描く女性  
のポリウムに特に魅力を感じるM  
男です。(大阪・吉井生)

○ 小生十年余の貴誌の愛読者です  
が最近の御社の編集方針にあきた

りなく思っていた処、桐原紫門氏  
画く処の図や室井亜砂路氏の画な  
ど女性切腹の画が久方ぶりに掲載  
され漸く貴誌本来の姿に戻りつつ  
あると感ぜられました。このよう  
な事を申して大変失礼ですが、実  
は御誌に魅力がなくなり購読の対  
象を類似誌に切換えてみようかと  
も思った位です。今後は何卒この  
ような傾向を益々助長され読者の  
期待を裏切られないよう御願ひす  
る次第です。更にお願ひを一つ。  
桐原氏に女白虎隊をテーマに是非  
少くとも六・七名以上の集団切腹  
図を書いて貰って下さい。(東京  
都新宿区・北方靖朗)

○ 夫婦プレイの記事や同好夫婦の  
投稿が毎号発表され何より楽しく  
拝見しています。私は妻の性向を  
分析し又肉体的な特徴からして必  
ずや彼女はマゾの性格ありと断定  
してプレイへの誘導を続けました  
結果、最近では軽度のMSを理解  
させられるに至りました。女性へ  
の縛りは、アブノーマルと解釈さ  
れ勝ちなその言葉とは反対にむし  
ろ夫婦生活には有意義な秘技と妻  
も理解しております。同好の御夫  
婦との文通や御指導を賜りたく存  
じます。(東京都・森中充)

6月号13頁の男を尻に敷いてソ  
バを食べている画は今年に入って  
一番私の好きな絵であり又今まで  
希望していた画であります。私も  
あの画のようにされてみたいと思  
う一人であります。一度でもよい  
から豊満な女性から、あのような  
目にあわされてみたいと思うので  
す。薄給の身では中々かなえられ  
ない事でしょうが、身近かに本誌  
愛読のS女性の方がおられました  
ら是非お願いしたいと思ひます。  
今はせめて見果てぬ夢を本誌を見  
て慰めていますが一生に一度はそ  
んな機会を持ちたいと念願してい  
る次第です。(新潟・中本優)

## 本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通  
り在庫しておりますが、39年に発  
行のものについては在庫の僅少な  
ものもありますから、お早い目に  
御注文願ひます。

○従来、雑誌の送料は当社にて負  
担しておりますが、今後は三カ  
月以上予約注文以外(既刊号は  
含まず)は一部につき送料二〇円  
の御負担を願ひます。多数一括し  
てお求めの際は八小包Vにて発送

申し上げます。

既刊雑誌在庫案内

昭和39年6月号	(送共二七〇円)
昭和39年7月号	(送共三二〇円)
昭和39年8月号	(送共三二〇円)
昭和39年9月号	(送共三二〇円)
昭和39年10月号	(送共三二〇円)
昭和39年11月号	(送共三二〇円)
昭和39年12月号	(送共三二〇円)
昭和40年1月号	(送共三二〇円)

昭和40年2月号	(送共三二〇円)
昭和40年3月号	(送共三二〇円)
昭和40年4月号	(送共三二〇円)
昭和40年5月号	(送共三二〇円)
昭和40年6月号	(送共三二〇円)
昭和40年7月号	(送共三二〇円)
昭和40年8月号	(送共三二〇円)
昭和40年9月号	(送共三二〇円)
昭和40年10月号	(送共三二〇円)
昭和40年11月号	(送共三二〇円)
昭和40年12月号	(送共三二〇円)
昭和41年1月号	(送共三二〇円)
昭和41年2月号	(送共三二〇円)
昭和41年3月号	(送共三二〇円)
昭和41年4月号	(送共三二〇円)

昭和41年5月号	(送共三二〇円)
昭和41年6月号	(送共三二〇円)
昭和41年7月号	(送共三二〇円)
昭和41年8月号	(送共三二〇円)
昭和41年9月号	(送共三二〇円)
昭和41年10月号	(送共三二〇円)
昭和41年11月号	(送共三二〇円)
昭和41年12月号	(送共三二〇円)
昭和42年1月号	(送共三二〇円)
昭和42年2月号	(送共三二〇円)
昭和42年3月号	(送共三二〇円)
昭和42年4月号	(送共三二〇円)
昭和42年5月号	(送共三二〇円)
昭和42年6月号	(送共三二〇円)
昭和42年7月号	(送共三二〇円)



# ☆編集後記☆

○先月号の△三文SM人生論▽で読者の肺腑を抉った鬼六談義は『化物の話』で今月再びファンに対するSMサービスをぶった恰好である。団氏の体力と筆力に期待するや切。

○今月の特報としては秋山夫妻と辻村隆の対談を挙げる事が出来よう。文字通りショールに我が命をかける夫妻の心情を、この一文によって掘みとって頂ければ幸いである。

○毎月、美しい新顔を紹介してやまないSMカメラハントでは、顔もよし乳房もまた好しの河森真理子嬢を迎えて辻村隆の筆が益々冴えれば、片やカメラロボを引っ提げての山本章が、川越美佐子を紹介して「この女と」を

飾っている。只、筆者並に読者の方々にお詫びしなければならぬのは、提供された多数のフォトも、極く一部しか誌上に掲載できなかったことである。時節柄自粛徹底の現われとして御諒解を願いたい。

○団鬼六提供のシナリオ「誘拐」をはじめとして「酷連処刑大会」「恍惚」「拷問屋敷」「晴嵐の譜」「ミモザ館」と長枚数のものを揃えてみた。懸賞入選の「妖縛の果て」も軽妙で面白く八編のある蜜月▽は益々快調で、芳野眉美の贋作シリーズも往年の名調子を取り戻した感じである。三原寛の「旅先にて」はM人士的琴線に触れる名作。かくれたファンの多い八心傷たむ遍歴▽の大作は今後の展開が楽しみである。「花と蛇」は変性男子の登場で一段と興味が増してきたといえる。

## ◎懸賞原稿募集

### △体験、告白、手記▽

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には賞金三千円以上贈呈いたします。

### △創作、小説、物語▽

も結構です。皆さまの平常抱かれていた夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のもの、自作に限りません。若し引用する部分があります。必らず出処の明記をお願いします。採用原稿に対しては賞金十万円迄贈呈します。

△感想、論評、批判▽

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンのままとめて下さい。採用篇

### △(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊誌、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されれば幸いです。採用篇には本誌三ヶ月贈呈致します。◎尚、以上の採用篇に対する本誌贈呈の代りに、写真や御希望の方には、代理部分譲品の中から御指定下されれば、贈呈いたします。

## ☆本誌御購読の栞☆

一月分(1冊)三五〇円△送20円▽  
三月分(3冊)一〇五〇円△送共▽  
半年分(6冊)二一〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

## 奇譚クラブ 定価 三五〇円

七月号 〔第二十一巻第七号〕  
昭和四十二年六月二十日 印刷  
昭和四十二年七月一日 発行

編集人 箕田 京二  
発行人 北村 俊夫  
印刷人 大阪住吉郵便局私書函第四十一号  
大阪住吉区大領町四丁目六八番地

## 発行所 暁出版株式会社

(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)  
(昭和四十二年四月二一日)  
国鉄大局特別取扱承認雑誌第二一〇号

## ☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されないうち、本誌は充分に注意して編集いたしております。未成年の方には絶対販売して上げません。特にくれぐれもお願ひ申し上げます。